

幻想創星録（凍結）

青銅鏡（銀鏡）

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

死んだ主人公 矢川鏡一（やがわきよういち）は神様により神界に生き返る

彼は何を望み、この先どうするのだろうか。

唯、言えることは・・・

もう、普通には戻れないだろう。

2018年四月、凍結。真・幻想創星録がスタート

クソ作品のご愛読(?)、ありがとうございました。マイナスから出直します。

目次

第一章 死亡 神界へ

第一話 現世とサヨナラ | 1

第二話 は？神様？ | 4

第三話 神界の生活 二人の気持ち | 8

第四話 また会おうぜ | 13

第二章 我、地球創設ス

第五話 修業？ | 18

第六話 一人の男として | 23

番外編1 キャラ紹介(1) | 34

第三章 古代都市編く神の作った国く

第七話 我、下界へ降臨ス | 38

第八話 就職 | 48

第九話 鏡一の戦闘講座 | 59

第十話 月移住計画 始動 | 67

第十一話 鏡一帰らず | 76

第四章 ユーラシア大陸く化け物との遭遇

第十二話 第一回海外旅行 | 89

第十三話 影の実力 | 97

第十四話 不滅の存在 | 104

番外編2 キャラ紹介(2) | 113

第五章 諏訪大戦く龍神の暴走

第十五話 諏訪の国の神 | 119

第十六話 大惨事大戦 | 130

第十七話 決着・宴会 | 145

第六章 日本大旅行

第十八話 欲望って何だっけ

158

第十九話 神様ってすげー(種族言ってみろ)

165

第二十話 人と妖怪の共存

175

第二十一話 ナヤミゴト

183

第二十二話 神速と剛力

196

第二十三話 剛力無双

205

第二十四話 護るべき者

213

第二十五話 英雄の名

224

第二十六話 その頃の幻夜①

232

第二十七話 その頃の幻夜②

243

第二十八話 花言葉

253

第二十九話 子と親

262

第三十話 五つの難題(鏡一編集)

272

第三十一話 嘘だらけの五つの難題(鏡一主犯)

283

第三十二話 裏切り者

292

第三十三話 饕餮、潜入

307

第三十四話 真の妖怪

321

第三十五話 破門

330

第三十六話 捨てきれない思い

339

第三十七話 弟子の成長

348

第七章 一人気ままに海外旅行

第三十八話 第二回海外旅行

358

第三十九話 狂気なんざ怖くねえ!

374

第四十話 帰還

386

第八章 西行妖く残された時間

第四十一話 惨劇

398

第四十二話 気分に生き……

405

第四十三話 気分に斃れる

416

第四十四話 七年後……

427

第九章 紅霧異変くやって来た吸血鬼

第四十五話 紅い霧

436

第四十六話 説教

446

第四十七話 決着

454

第四十八話 宴会は賑やかに

463

第十章 春雪異変く舞い降りる一つの矢

第四十九話 終わらぬ冬

474

第五十話 落ちた矢

480

第五十一話 されど気分は不滅なり

485

第五十二話 主上のいる風景

500

第五十三話 建設

513

第五十四話 組み手(他人から見たら殺し合い)

522

第五十五話 弾幕ごっこ

539

第五十六話 前科持ち

545

第五十七話 友人万歳

556

第五十八話 世界は広く見えて狭い

566

第五十九話 人格

576

第十一章 萃夢想く兄の気質

第六十話 営業

584

第六十一話 戦場と言う名の宴会

592

第六十二話 孤独を救う者

第六十三話 遊び

第十二章 小休止く化け物達の日常

第六十四話 誤情報

番外編3 幻想郷縁起に記された四凶、及び龍一、龍華

第六十五話 休暇宴会

第六十六話 大喧嘩

第六十七話 久々の紅魔館

第六十八話 魔道

番外章 く我、二つの世界にて暴走す

第六十九話 突撃

第七十話 侵食

第七十一話 和解

第七十二話 後片付け

第七十三話 俺達の冒険はこれから (ry

第七十四話 温度差

第七十五話 どんでん返し

第七十六話 軸ずらし

第七十七話 真の敵はリミッター

第七十八話 冗談とフラグ

第七十九話 回収

第八十話 空気

第八十一話 野郎共 別世界でも暴走す①

第八十二話 野郎共、別世界でも暴走す②

第八十三話 野郎共、別世界でも暴走す③

第八十四話	野郎共、別世界でも暴走す④	765
第八十五話	明けぬならく	771
第八十六話	明けるまで待とう	779
第八十七話	待てるか！by龍一	790
第八十八話	広がる波紋	802
四凶story	狂の章 とある奇術師の物語	
第八十九話	裏か表かそのまた別か	813
第九十話	僕、オレ、俺、誰？	821
第九十一話	誰であろうが・・・	828
第九十二話	行つてきます	838
第九十三話	奇術師の本気	846
第九十四話	話を聞かない野郎共	857
第九十五話	花咲き乱れる地で・・・	865
第九十六話	ただいま	873
第十三章	ふと増えた野郎共の日常	
第九十七話	夏の風物詩	882
第九十八話	ようこそ地獄へ 表	892
第九十九話	ようこそ地獄へ 裏	903
第一百話	買い物	917
第一百一話	日常・・・？	928
第一百二話	華の学園生活	942
第一百三話	HAYスクール生活	953
第一百四話	Daiskoolsチューデント	962
第一百五話	人外とは（哲学）	973
第一百六話	激昂	983

第百七話	結果・予定	993
第百八話	逆戻り	999
第百九話	前座	1009
第百十話	圧倒的成長	1020
第百十一話	名前決め	1030
第百十二話	残心	1042
第百十三話	操作人形？	1050
第百十四話	操作人形？	1059
凍結話	これにて閉幕・・・？	1068

第一章 死亡 神界へ

第一話 現世とサヨナラ

これは、とある事件から、多くの人々を救い自らの命を失った青年が、神様に気に入られ、

何とかやっていく物語である。

どうも皆さん、普通の高校生矢川鏡一です。

買い物に来ております。好きなものは東方・ガンダム・マジ・ヘルシングかな、友達も結構多い。

彼女？いるわけないだろうがコノヤロウ

話がそれちまった、まあ買い物に来ているわけですが、

どうも嫌な予感がするんでs「ジリリリリ!!」・・・ほらな。

「火事だ!」「ええ?」 店はパニックだ、俺は落ち着いて逃げるが。

「上に娘が!」「俺の妻も!」・・・計画変更。階段が燃えているが何とかなるだろう。

俺は階段を高速で駆け上がり、上の人たちに指示を通す。

「とりあえず下へ行つて下さい!ここが燃えています!」(人々移動中) 全員行つたか・・・ん?

「お母さん!」「貴女は逃げて!」 母親が閉じ込められていやがる

「どきな嬢ちゃん!お母さんは助けてやる!」「お願いします・・・」俺は瓦礫を持ち上げる

「早く出ろ!」「ありがとうございます!」「ありがとうお兄ちゃん!」「気にすんな!そこから出てくれ!」

(親子移動中) よし、俺も出るか「ガラガラガラ!!」・・・塞がっち

まった

チイツ！どうする！煙が来やがった……クソツここで終わりか……
視界がぼやけてきた……「酸化中毒か……」意識も……どん
どん……薄れ……

そこで俺は意識がブラックアウトした。

side change

「奥さん！娘さん！無事でしたか！」私は安堵した。ある人から彼の妻と娘がいないと聞いていたのだから。

「ええ」「ある青年のおかげです。」そうだったのか、私個人からも消防署からも感謝しなければ。

「ところでその青年は？」「私たちの後にすぐ……」「いません！階段も完全に塞がっています！」

「まさかまだ！」大変だ！すぐに助けに行かなければ！「助けに行くぞ！」「ドカーーン!!」爆発が！

これでは助けに行けないではないか!!「クソツ!!」「ああ……」「ねえ、さっきのお兄ちゃんは？」

ビルは残酷にも赤々と燃え続けていた。

side out

side change

「さて、今日の整理も終わりじゃな」儂は今日の死者と生者を確認していた。

「ん？こやつは……」儂は、ある人間を転生させることにした。

こやつはどんな願いをするのかのう。楽しみじゃな。

儂はまた、一人でその男を待ち続ける。

side out

後日・・・

新聞記事から抜粋

○月?日○○○デパートから火災発生。

負傷者2824名 死者1名 矢川鏡一

負傷者談

「命の恩人です。」「最後まで私達に指示を与えてくれました。」

次回へ続く

第二話 は？・神様？

鏡一「うーん。」

??? 「目が覚めたか？」

鏡一（次から鏡）「誰だ！」

??? 「儂か？儂は神様じゃ。」

鏡「は？」

神様「いやだから神様じゃ。」

鏡「（信じるしかないな）そうか、で、神様ここはどこだ？」

神様「信じてくれたか、ここは神界じゃ。」

鏡「てことは俺は・・・」

神様「左様、死んだな。」

鏡「考えていること分かるんだな」

神様「神様じゃからの。」

鏡「それより！あの親子は？」

神様「無事じゃ。おぬしのおかげでの。」

鏡「良かった・・・」

神様「おぬしはいいのか？」

鏡「ああ、で、俺はどうなるんだ？」

神様「そうそう、おぬし、転生したk「やなことった」ゑゑゑ!？」

神様「そんなこと言わずにさあ。」

鏡「今は嫌かな、整理出来てないし。」

神様「よかろう、いつでも構わん。で、おぬしは今はどうしたいのじゃ?。」

鏡「何でもいいのか？」

神様「叶えられる範囲ならな。」

鏡「なら・・・ここで働かせてくれ！」

神様「ん?それが望みか？」

鏡「ああ!あんたにも教えてくれた礼があるしな。」

神様「クツハハハハハ!!おもしろい奴じゃな。」

鏡「それに、アンタ独りだろう?。」

神様「むう、それは・・・」

鏡「だからさ、これから頼むぜ、先輩?。」

神様「先輩か・・・悪くないのう。よかろう！こちらこそ頼むぞ！」

鏡「ああ！頼まれた！ところで、神様の名前は？」

神様「ないの。」

鏡「なら、つけていいか？」

神様「神に名前をつけるか、かつこいいのを頼むぞ？」

鏡「おう！ そうだな・・・龍源（りゅうげん）とかどうだ？」

神様「いいな！ 気に入ったぞ！ これより儂は龍源と名乗る！ おぬしにも新たな名前をやろう！ そうじゃ！ 神矢龍一（かみやりゅういち）などどうじゃ？」

鏡「いいねえ！ ありがとうよ！ 龍源！」

龍源「こちらこそじゃ！ して、こちらからも頼みがあるのじゃが・・・」

龍一「なんだ？ 言ってくれよ。」

龍源「友達とやらになってくれ！」

龍一「そんなことか・・・」

龍源「駄目か？」

龍一「その必要はねえ！ もうすでに、友達だろ！」

龍源「やはり面白い奴じゃ！気に入ったぞ！」

龍一「じゃあ仕事に取り掛かろうぜ！仕事教えてくれよ？」

龍源「任せろ！これも友達のためじゃ！」

こうして、人間の矢川鏡一改め神矢龍一と神様改め龍源の不思議な関係が生まれた。

のちに龍一が種族で差別を嫌ったのはここからだろう。そしてこれが幻想郷最強の神が生まれた瞬間である！

龍源「あ、おぬし神になっているからの。」

龍一「言うの遅えよ!!」

龍源「テヘペロ☆」

龍一「しばくぞてめえ！」

・・・たぶん・・・

次回へ続く

第三話 神界の生活 二人の気持ち

side 龍一

はい、皆さんごきげんよう。みんな大好き矢川鏡一もとい神矢龍一だ。

先日、神様・・・龍源の所で働くことになったんだが・・・

俺、神様になってました☆・・・ふぎけんなよ！なんでだよ！意味わかんないよ！

「俺も知らん。」

嘘つけ！前回「神様になっているからの。」って言ってたじゃねえか！

「神界に来たからじゃろ。」それだけ!?そんだけで神になれんの？

「おぬしがなっているからの。多分そうじゃろ。」

ああ・・・もういい。

そんなことがありますて、神になりました。

しかし神の体は凄いい、体力が格段に向上している。頭脳も左手で空中計算しながら、右手で書類が書けるようになった。・・・神様つてすげー。

「いや、おぬしだけじゃからの。そんなことできるのは。」

マジですか。他の神様はできないと。俺って特異個体かな？

「たぶんな、人間が条件無しに神になるなんて聞いたことないからの。」

俺の種族ってなんだろう、龍源、調べてくれる？

「よいぞ、丁度暇じゃったからの。」

サンキュー、って仕事しろよ！俺に丸投げすんじゃねえ！

「仕方ないじゃろ！おぬしがやった方が早いんじやから。」

まあ、そうだが。

「いや、否定しろ！儂のいる意味がないじゃろうが！」

ねえだろ、元々から。

「なんじゃと！許さん！絶対に許さん！そこを動くな！一発入れてやる！」

動くなと言われて動かないバカがいるかよ！

「待ちやがれえええ！」

ハイハイハイ！こちらへどうぞ！

「このやろおおお！」

ハハハハハハ！

・・・と、まあ騒がしくも楽しい毎日が続いていた。
他にも、

「おぬしの種族が分かったぞ！龍神じゃ！」

what？

とか、

「おぬしは西洋料理をしつとるか？」

知つとるよ。

「作ってくれんか？」

しゃーねーな、ダチの頼みだ、聞いてやるよ。

「おお！ありがとう、わが友よ！」

その代わり、働けよ？

「仕方がない、少しならな。」

いや、元々お前の仕事だろ・・・
とか。

騒がしくも楽しい。俺の選択は間違えていなかった。

(これからよろしくな、龍源。)

「ん？何か言ったか？」

いや、何も？

「そうか、ならいいんじや。」

side out

儂は神として生まれて二百年、ずっと一人、いや、独りじやった。食事も一人仕事も一人、ずっと一人、そんな生活じやった。

今までに何度も下界の人間になりたいと思ったことか。

それぐらい、寂しかった。

だから、初めて鏡一……いや、龍一を見たときは不思議じやった。なぜそこまでして他人を助けたのか、なぜ後悔していないのか、聞きたかった。

じやが、龍一がここに来て、気がついた。

こいつは、人のためなら命を捨てる。そんな男だと。

そして、誰であろうとも。

だからこそ、あの時親子を助けたのだと。

もちろん、儂にも、あの時は、とても嬉しかった。

だから、つい早まって言ってしまった。

友達になつてくれ！と、

断られると思った、なのに、あやつは一言「いいぜ！」と言つてくれた。

前にも増して嬉しかった。だから、つい甘えてしまう。なのにあやつはいつも構ってくれる。

だが、神の決まりで必ず転生させなければならぬ。

そう考えると、悲しく思う。じやが、今は楽しまなければ！そう思
い、龍一の所へ行く。

「ボソッ」

ん？何か言ったか？

「いや、何も？」

そうか、ならいいんじや。

(これからもよろしく頼むぞ、龍一、いや、友よ。)

そこから三年が過ぎた・・・

次回へ続く

第四話 また会おうぜ

side 龍一

龍源と共に働いてからもう三年が過ぎた。
楽しい三年間だった。

だが、最近龍源の様子がおかしい。もう三年も一緒にいるのだ、大
体の様子は分かる。

・・・おおよそ、転生のことだろう。あの時は、整理したかったか
ら断った。それに、あいつ・・・龍源が寂しそうに見えたからだ。こ
のことは言っていない。

とりあえず、龍源に呼ばれたのであいつの部屋へ行く。

・・・元人間（龍神）移動中・・・

ついた。ここが龍源の部屋だ。

・・・「龍源の部屋☆」はないだろ、☆は。

とりあえずそんな話は投げ捨てておいて、ノックする。

『龍源、入るぞー』

「お、おう、入ってくれ・・・」

反応が薄い、いつもなら おお！来てくれたか！ ぐらい言うの
に・・・

そこまでして悩むことか？ まあ気がついていないふりをして・・・

『どうした？ 何の話だ？』

「うむ・・・実は・・・おぬしを転生させなければならぬんじゃないや！
すまぬ！」

はい、予想通りのことだ。

『知ってた。』

「そうじゃよな・・・驚くよな・・・って知っておったのか!？」

『うん、誰であろうとも分かるぐらい顔とか態度に出たぞ。』

「そうか・・・まあいい、で、転生させなければならぬんじや。」

『ほう、それで?』

「嫌ではないのか?その・・・転生など。」

『嫌ではないぞ、さてはお前、俺が嫌がると面倒だから、重い空気作ったな?』

「違う!そうではないんじや!」

『なら本心を言ってみろ。』

「つつ・・・!わかった、言おう。」

そうして龍源は明かした、俺がいなくなると寂しいのと、忘れられてしまうのではないかとの恐怖と不安を。

・・・馬鹿かこいつは・・・俺がそんな奴だと思われていたとはな。少しシヨックだ。

『・・・つまり、俺がいなくなつて、お前のことを忘れてしまうのではないかと思つたわけだな?』

「・・・そうじゃ」

『このド阿保が！んな簡単に忘れてしまうかよ！逆に俺がそんな薄情者だと思っていたのかよ！しばくぞてめえ！忘れねえよ！お前が楽しかった三年間はな！俺も楽しかったんだよ！だからそうやすやすと忘れねえよ！忘れたくもないわ！アホやって、騒いで、一緒に飯食ってしただろうが！俺とお前は《友達》いや、《親友》だと思ってるわ！お前が思っただけでもな！俺はここでの初めてのダチが出来て嬉しかったんだよ！今度俺がこのことを忘れてしまうかもしれないなんて言ってみろ！どつき回すぞ！・・・つまりだな、お前が俺といて楽しい気持ちは、俺も同じなんだよ！だから、そんなこと言うんじゃないやねえよ！』

「おぬしは、儂を親友だと思っただけか？こんな儂でも・・・？」

『同じことを言わせんな、親友だと言ったらそうなんだよ、神も化け物も関係ねえ、ダチはダチだ』

「・・・ありがとう・・・本当にありがとう・・・」

『何、気にすんな。』

・・・・・・・・・・・・・・・・

『さて、転生の話なんだが・・・俺は何処へ行くんだ？』

「言い忘れておったな、【東方Project】の世界に、龍神として転生してもらおう！」

『え？・・・と、とりあえず能力は？』

「【全を司る能力】じゃ。」

『は？』

「いやだから、z『やめろもういい』

『……で、俺はどうすればいいんだよ？』

「地球創作から始めてもらう。」

『~~~~~!』

「驚きすぎて昔のえになつとるぞ。」

『誰であろうとも驚くわ!!』

「ちなみに時代は地球創作一億年前にしておくぞ。」

『もうなにも怖くねえ。』

「では、送るぞ！」

『ちよつとタンマ！二つ聞いていいか？』

「なんじゃ？」

『一つ目は、龍神で転生するが、何やってもいいか？』

「一向に構わん、歴史も変えてもらつて大丈夫じゃ。」

『サンキュー、次、神界には、また来れるのか？』

「……!! い、いつでも大丈夫じゃ!!」

『オツケイ！なら頼むぜ！』

「任せろ！さらばだ！」

『阿保か、違うだろ、』

「！ああ、そうじゃな、」

『『また会おうぜ！（ぞ！）』』

そして、まばゆい光に包まれた。

side out

side 龍源

「行ってしまったか・・・」

しかし、寂しくない、龍一が、また会おうぜ！と、言ってくれたからだろうか。

「待っているぞ、龍一。」

自然に言葉が漏れた。

ああ、そうか、儂はもう・・・一人ではないのだ。

side out

次回へ続く

第二章 我、地球創設ス 第五話 修業？

side 龍一

視界が晴れた。新しい生活だ、しかし・・・

『なんもねえなおい、真っ白じゃねえか。』

そう、何もないのである。

『とりあえず、能力確認といくか』

まずは何か出してみる。そうだな・・・うどんにするか。
瞬間、うどんが出現する。って早っ！もう出たのかよ！
試しに食う、うん、美味しい。

・・・和んでいる場合ではないのだ、でも、美味しい。

・・・落ち着いた。次にどんぶりを消してみる。

よし、消えた。創造、破壊は出来そうだ。

次、種族を変えてみる。・・・よし、変わるな。

どうやら、種族を変えても、神力がそのまま、霊力やら妖力になる
ようだ。

次、リミッター、これが大事だ。俺の神力はばかっている量らしい
(龍源談)ので、抑えるようにしないと・・・こんな感じかな？少しだ
け力が抜けた気がする。これだけはわからん、できていることを願
う。

ここまですべてを整理する。

一つ、大体のものは創造、破壊できるようだ、今の所できなかつたものはなかつた。能力もできた。

二つ、種族も変更可能、力はそのままだ。これで下界へ降りても大丈夫だ。

三つ、リミッターは設置、解除可能、勿論、種族を変えても可能だった。

うん、こいつはひでえや。全を司るとか、チートくさかつたけれどひどすぎる。

これは強すぎるわ。

ならば！最強になってやるわ！誰にも負けない男になる！

それ以来、魔法や、能力について研究し始めた。

その日記・・・

一年目

能力、神力やらを込めた武器ができた、

日本刀に高周波を流して、切断力、分子の結合力を高めて、そこに神力やらを込めて耐久力、破壊力を、格段に高めた。・・・いや、どこのmg○の雷○の武器だよ！・・・しかも、調子に乗って、ジンも入れちまった。おかげで魔法が使える・・・

ちなみに、込めたジンは、

- ・アモン
- ・ザガン
- ・ベリアル
- ・バル
- ・ブアレフオール
- ・フォカロル
- ・アシユタロス

・フェニクス
・レラージュ
・ダンダリオン
だ、調子に乗りすぎた・・・
結論、チート武器出来た。

十年後

明らかに神力やらが増えた。極大魔法三百発ぐらい打てたのが、今は千発ぐらい打てた。

試しに全身魔装したままで生活しようと思う。せめて一日ぐらい持つかな？

結論、神力やらが増えすぎた。

百年後

全身魔装の結果、今も続いています。まだまだ神力やは残ってそう、でも、全然疲れていない。龍源の所に行ったら全身魔装見て驚いた。龍源曰くまだ一週間しかたっていないようだ。俺も驚いた。変わったことはこれぐらい、あ、龍源曰く神力やらがまた増えているらしい・・・百倍ぐらい。

結論、神力怖い。

千年後

神力が・・・もう何も言うまい。

することがないので、料理とか、掃除の技術とか、礼儀作法とか、勉強とか、格闘術覚えたり、ゲーム創造したりして遊んだ。

ちなみに、掃除は三分あれば大阪城ぐらいなら楽勝でピカピカにできる。

格闘術は、神力なしで創造した山が砕け散った。

結論、暇すぎる。龍源の所に行こう。

一万年後

ただいま龍源と共に神界にいます、やっぱり神界のほうがいいな、今は。

神力？まあ、スゴカツタヨ

まあ、今も修業はしてるがな。

料理がうまくなったので、龍源も喜んでいる。

もう少しいるかな。

一億年後

やべえ、やらかした。もう一億年たったた。

とりあえず、この日記モドキはおしまい。

と、いうわけで俺の世界に戻ってきました。さつさと地球創ろう。

こんな感じかな。へpon<・・・変な音出たな、まあ、出来たからいいk「お兄ちゃん！」

んん？誰だ今の？「お兄ちゃん！こつち！」声のしたほうを向いてみると、まあ、なんということでしょう。可愛い女の子がいるではないですか。また、あれだけシンプルだった場所が、なんときれいな和室に変わっているではありませんか。つて誰？攫ってないからね！とりあえず、話そう。

『嬢ちゃん、誰だ？』

「えっと、龍一お兄ちゃんの妹です！」

what?妹?

『どびどびやっしてハイハイだっ?』

「お兄ちゃんが地球を創った時に一緒に・・・」

あ、俺が誰かに地球の管理を丸投げゲブンゲブン任せようと思ったが、それでか！

『オツケイ、名前は？』

「ま、まだないんです。」

『なら付けてやる。そうだな・・・俺の一字と可愛いし・・・龍華（りゅうか）でどうだ？』

「ありがとう！大事にするね！」

『おうよ！』

てことで妹が出来ました。試しに仕事を丸投げおっと任せると、流石我が妹、仕事が早い。多分俺がするより早い。さらに、伊弉諾（いざなぎ）と伊弉那美（いざなみ）まで生み出しやがった。もうすぐ大和できるんじゃないかと、思いつつ地球の管理権を龍華に渡す。

龍源と、龍華に好きにしていって言われたし。自由に生きるさ。

「「お兄ちゃん！（兄上！）」」

・・・騒がしくなりそうだ。

まあ、嫌いじゃ無いぜ！

次回へ続く

第六話 一人の男として

龍華「はあ……」

龍華にしては珍しく、ため息をついている。あ、前回から100年ぐらい経っています。

『どうした？お前らしくないぞ。元気出せよ。』

龍華「あ、龍一兄ちゃん……実は悩みがあつて……」

『なんだ？言ってみろ。』

「うん、あのね……」

龍華曰く、伊弉諾と伊邪那美が大和（日本）を大體創り、その途中に伊邪那美がカグツチを出産、しかし、火の神だったカグツチを産んだせいで伊邪那美が他界、シヨックで伊弉諾がカグツチを殺害、で、落ち着いた伊弉諾が黄泉の国へ伊邪那美を迎えに行き、そこで死体の伊邪那美と遭遇、逃げて帰ってきたと。

バカだろ……そりゃあ死体になつてるわ。

『で？それで悩んでいたのか？』

龍華「ううん、まだ続きがあつてね……」

……なんか展開読めてきた。絶対にあれだ。

それで帰ってきた伊弉諾（バカたれ）が、体を清めるために禊をし

ていたら、神が生まれたらしい。天照（あまてらす）、月読命（つくよみ）、須佐之男（すさのお）の、三人が生まれたが、例の高天原の事件が発生、須佐之男はいろいろあり、八岐大蛇を退治しに言ったが、不安なのだ。

『で、どうしろと？好きにさせてやれよ。』

龍華「うん、そうなんだけれどね、心配なんだよ、須佐之男が。」

『はあ・・・わーった、見てきてやる。だが、俺に頼んだ以上、好きにさせてもらうからな？』

龍華「うん、お願い！」

と、いうわけで、須佐之男のいる、出雲の国へ・・・

・・・最高神移動中・・・

にしても、龍華も人のこと心配しだったのか・・・成長したもんだ。兄としても嬉しいな・・・おっと、ついた。

そーいや種族をどうしようか、まあ、そのままでもいいや。

??? 「止まれ！」

ん？門番か・・・

『すまない、ここに須佐之男と言う神様はいるか？』

門番「・・・！須佐之男様を知っておられるのか？」

『ああ、一応神様だからな。』

門番「そうでしたか！失礼しました！」

『ああ、気にしなくていいから。それよりも、入っていいか？』

門番「どうぞ！須佐之男様の所に案内させていただきますい！」

『ありがとう、頼むよ。』

・・・最高神&人間移動中・・・

門番「こちらです。」

『ありがとう、仕事、頑張れよ。』

門番「はい！失礼します。」

さて、ここからは威厳をださんといかな。

『失礼します。』

??? 「入れ。」

『初めましてだな、須佐之男よ。』

須佐之男「誰だ貴様！な、なんだこの神力は・・・」

『俺は神矢龍一、龍華から聞いてるか？』

須佐之男「!!まさか、龍神様の兄上で!!」

『正解、そいつだな、』

須佐之男「すみませんでした！存じていなかったとはいえ、無礼な態度、すみませんでした！」

『いいっていいって。呼び方も兄上でいいし、敬語も使わなくていいぞ？』

須佐之男「流石に敬語抜きは無理ですが、兄上と呼ばせていただきますね。」

『構わんよ。で、話は変わるが、お前、八岐大蛇を退治しにくそうじゃねえか。』

須佐之男「はい、しかし、いい案がありません。お願いします！無礼を承知でお願い申し上げます！俺に力を貸してください！」

『『ならば問う。貴様はなぜ戦う？』』

須佐之男「この国に、惚れた女性があります。しかし、彼女は次の八岐大蛇の生贄になるのです。だから！俺の都合ですが、惚れた女性です！守りたいのです！それが、俺の戦う理由です！」

『それは、神としての願いか？』

須佐之男「いいえ、これは、俺の、

男としての願いです！」

『よかろう！ならば知恵と力を貸そう！だが・・・』

須佐之男「だが・・・？」

『貴様はその後、惚れた女性に告白せよ！』

須佐之男「・・・！はい！！」

こうして、八岐大蛇退治計画がスタートした。須佐之男・・・見事だ。

『では、計画を伝える。まず・・・』

そして、俺のいた世界の須佐之男の作戦を教える。

『・・・いいな？』

「はい！！では、村の衆にも伝えてきます！」

『お前が考えたことにしろよ？』

須佐之男「・・・ありがとうございます！」

そして、退治当日

須佐之男「ほんとうに上手く行きますかね？」

『行くき、多分な。』

須佐之男「そうですよね！」

『しっ！・・・来やがったな・・・』

須佐之男「で、デカイ・・・」

『落ち着け、酒を飲んだら首だぞ、首を全部切れよ。』

須佐之男「はい、頑張ります。」

八岐大蛇が酒を飲みだす、・・・よし、今だ！

『行け！須佐之男！』

須佐之男「はい!!」

須佐之男は見事に首を切って行く。残り一本！

須佐之男「せいやあああ!!」

ポトツ

須佐之男「やった・・・のか？」

『見事だ須佐之男！やるじゃねえか!』

須佐之男「ありがとうございますー!」

『須佐之男、尻尾切ってみろ。』

須佐之男「え?はい、」

須佐之男が尻尾を切る。すると・・・

須佐之男「か、刀!？」

やはりな、出たか・・・

『その刀をお前にやる、名は、草薙の剣（くさなぎのつるぎ）だ。』

須佐之男「草薙の剣・・・ありがとうございます。」

『先に戻ってろ。こいつを供養してから行く。』

須佐之男「なら俺も・・・」

『告白すんだろ?準備してろ!』

須佐之男「は、はい!行ってきました!」

行っただか・・・さて、

『いつまで死んだふりしてる?バレバレだぜ!』

八岐大蛇「グオオオオオオ!!」

そう、こいつは死んでいなかった。須佐之男は気がついていなかったが。

まあ、そうでなければつまらない!

掛かって来い!八岐大蛇!!

挑発に乗って食らいついてくる、が、遅い！俺はチート刀・・・凶刀【新月】（きょうとう、しんげつ）で切りつける。首が落ちた。が・・・すぐに生えてくる。

『厄介だな・・・！ならば！』

俺は魔装、アシユタロスを纏う。そしてそのまま首を切つて八本共に爆散させる。そのままアモンに切り替え、切り口を焼いて塞ぐ。

八岐大蛇「」

??????????

顔がないのでうごめくだけ、残酷だがアモンからベリアルに変えて、体をすべてこの世から【断絶】する。

八岐大蛇「」

!!!!!!!

八岐大蛇が奇声を上げて倒れる。

・・・沈黙。黙祷。

すまんな・・・今、墓を建ててやるよ・・・恨んでくれるなよ？

朝日が登り、小鳥が鳴く。

ん？何か聞こえる。

??? 「アリ、ガト、ウ、・・・」

『ああ、ゆっくり眠れよ・・・』

・・・最高神帰還中・・・

須佐之男 「兄上！遅いですよ！」

『すまん、墓を作るのに時間かかったからな。』

須佐之男 「じゃ、じゃあ告白します。」

『安心しろ、俺も見ていてやるから。』

須佐之男 「はい！！じゃあ、宴会に呼んできます！」

『はいよ、俺は村人たち呼んでくるわ。』

十分後・・・

須佐之男 「皆さん！八岐大蛇の退治に成功しました！」

村人一同 「うおおおおおお！！！」

須佐之男 「そして、クシナダヒメ！俺と、結婚してください！」

クシナダヒメ 「はい！！」

村人一同 「いいぞおおお！」

須佐之男 「そして龍一兄さん！ありがとうございました！」

村人一同 「お前さんもありがとう！」

全く、須佐之男も粋なことするじゃねえか。

『おうよ！俺から一言言わせてもらう！須佐之男!!誰にでも優しい神になれよ!!』

須佐之男 「はい!!」

『後お！いつでも高天原に戻っても大丈夫だぞー!』

須佐之男 「最後までありがとうございます!!」

『またな！次は敵かもしれんがな!』

須佐之男 「なら、負けませんよ?」

『その度胸よし！さらばだ民よ！須佐之男、またな!』

須佐之男 「はい!!」

クシナダヒメ 「亭主は任せて下さい!」

『頼んだ！じゃあな!』

そう言っつて、俺は出雲の村を出た。

さて、神界に行くかね。

・・・最高神移動中・・・

『と、いうことがあったんだよ。』

龍華 「そうですか・・・須佐之男は?」

『出雲の国にいるぞ？・もうすぐ帰って来るかもな。』

龍華 「ありがとう！お兄ちゃん！」

『ごっちも楽しかったし、いいぜ！』

龍華 「あ、あと月読命が国作ったって！行くの？」

・・・もうそんな時期か、つつい口が緩む。

『そりや勿論、

行くに決まってるだろ！』

次回へ続く

番外編1 キャラ紹介 (1)

キャラ紹介

神矢龍一（かみやりゆういち）

能力「全を司る能力」

年齢 測定不能（誰よりも年上）

詳細

転生前、矢川鏡一（やがわきよういち）と言う名で生活。しかし、買い物中、デパートから火災発生。すぐさま現場へ行き、避難の指示を行う。だが、とある少女の母親が瓦礫に挟まれているのを確認。すぐさま救助。そのまま、親子を避難させるが、その後、階段が瓦礫で崩壊、閉じ込められてしまう。そのまま一酸化中毒で死亡。しかし、神様に気に入られ、神界へ送られる。そこで転生するか？と、聞かれるが、断って神界に勤務。その時に神矢龍一の名を与えられる。龍一も、神様に対し、龍源（りゅうげん）と名前をつける。たちまち親友に、しかし、転生の義務があるため、龍源に時々帰って来ることを伝えて、転生。

転生後

【東方プロジェクト】の世界で、龍神として転生。その後、地球を創造、その時生まれた龍一の妹、龍華（りゅうか）にすべてを任せて隠居、自由気ままに生きている。

ステータス

創造した能力

- ・ 金属を創造、司る程度の能力
 - ・ 万物を創造、破壊する程度の能力
 - ・ 間を司る程度の能力
- など、数え切れない

武器

凶刀【新月】

- ・ 万物を切断する程度の能力が付属
- ・ 柄が40センチメートル程刀身が60センチメートル程の打刀
- ・ 神力、霊力、妖力、魔力など、ごちゃ混ぜになっている。
- ・ 「ジン」と呼ばれる精霊が数体宿っている。
- ・ それぞれ、

アモン

ザガン

ベリアル

バアル

ブアレフオール

フオカロール

アシユタロス

フェニクス

レラージユ

ダンダリオン

が、宿っている。

- ・ ジンそれぞれが能力を持ち、纏うと使用可能。それぞれ、
- アモン・・・炎を司る程度の能力
- ザガン・・・植物、微生物を司る程度の能力
- ベリアル・・・物体を亜空間に封じ込める程度の能力
- バアル・・・雷を司る程度の能力
- ブアレフオール・・・停滞を司る程度の能力
- フオカロール・・・風を司る程度の能力
- アシユタロス・・・爆発を司る程度の能力
- フェニクス・・・ありとあらゆる傷を治す程度の能力

レラージュ・・・重力を司る程度の能力
ダンダリオン・・・物体を転送、保存する程度の能力
に、なっている。

転変について

龍一は尊敬、恐縮され過ぎるのが嫌いなので、龍華たちには、兄上などと呼ばせているが、流石に他人は困るので、普段は転変している人間時

矢川鏡一を名乗っている。能力は「金属を創造、司る程度の能力」
このスタイルは、よく使う。

妖怪時

絶影（ぜつえい）を名乗っている。能力は「影を司る程度の能力」
このスタイルも、多い。

魔法使い時

シユナイダーを名乗っている。能力は「架空の物、伝説の生物を召喚する程度の能力」
あまり、使わないスタイル。

他にも、老人や、子供、色々な者に転変している。

彼は式神を4体所持、現在は不明（後々出します）

好きなこと

- ・家事全般
- ・戦闘
- ・宴会
- ・物事に割り込む
- 嫌いなこと
- ・偉そうにすること

- ・よそよそしくすること
- ・遠慮されること

次回へ続く

第三章 古代都市編く神の作った国く

第七話 我、下界へ降臨ス

side龍一

『さて、じゃあ月読命のここに行ってきます。』

龍華 「いつてらっしやい！お兄ちゃん！」

『じゃあなー！』

そう言い残して某フラグ建築の墮天使のように飛び降りる。
地面が見えない。

俺はすぐさま「金属を創造、司る程度の能力」を使用、脚に磁石の
鎧を形成する。

そのまま、電流を流し、磁石の反発を利用、地上すれすれで浮く。そ
のまま着地、1000点満点だ、

遂に下界へ到達、次からは地上と呼ぼう。

『取り敢えず状況確認だ。センサー起動。』

このセンサーは、半径10キロメートル程なら、形、大きさ、種族
が分かる。

『ふむ・・・妖怪は今の所反応なし、歩くか。』

・・・最高神移動中・・・

途中、種族が神のままだと、月読命の反応が想像できるので、人間
に変えた以外は特になし、

だったのだが、

『ん？センサーに反応有りと、人間二人と妖怪か・・・道案内を人間に頼むか。』

第一生物発見、しかも、人間と妖怪、さらに言うと、襲われていらっしやる。

元が人間なので、今回は人間を助けようと思う。

先ほどの磁石の鎧・・・「黒磁装甲（アルカウス・カウーザ）」を使用、時速100キロ程で走る。風圧？何でもできるので、無理矢理消しましたが何か？

妖怪「待ちやがれ！」

人間（男）「お逃げください！永琳様!!」

永琳（？）「駄目よ！置いて逃げる何て出来ないわ！」

人間の一人は怪我してるのか。ん？永琳？なら、なおさら助けんと。

『そおいつ！』

妖怪「ゴハツ！」

おい、あんたら大丈夫か？

人間（男）「何者!？」

永琳（？）「よしなさい！・・・ありがとう、助かったわ。」

妖怪「てめえ！何しやがる！」

気絶しないくらいに蹴飛ばしたが、復帰が早いな、

さて、平和的解決と行きますかね。

side out

side 永琳

私は焦っていた、大丈夫だからと言い、側近を一人のみ連れて、薬草採取に行ったのが間違いだった。

妖怪が出現し、襲われた。側近は傷を負った、私も足をくじいてしまった。側近は私一人でも逃げろと言った、でも、これは私の責任、自己満足だけでも、ここで覚悟を決めた、そんな時だった。

『そおいつー!』謎の掛け声と共に、目の前にいた妖怪が吹き飛んだ。

大丈夫か?そんな声が聞こえてきた。恐る恐る目を開けると、見知らぬ男性がいた。

ああ、助かったのだと私は思った。

side out

side 龍一

さて、平和的解決と言ったものの、どうしようかね。

妖怪「てめえ!聞いてんのか!?返事をしやが『るっせえなあ!』う、な、なんなんだてめえ・・・」

怯えてらっしやる、まあ、これでも本気には程遠いが、霊力だし、

『すまん、ちよつと出しすぎた。で、何で襲った?』

妖怪「そ、それは・・・」

妖怪・・・恐魔（きょうま）曰く、食料が減ったらしく、人間でも食べないと集落・・・鬼子母神の村が、壊滅するらしい・・・

『分かった、これをやる。』

恐魔「これは?」

『無限食だ。食っても未来永劫無くなることはない。だから、人間を襲うのを止めてくれんか?』

恐魔「ここまでされちゃあ、断る必要がないな!ありがとう!」

『いいってことよ。』

恐魔「そういや、あんたの名前は?」

『ああ、言い忘れたな、』

やべえ、どうしよう。龍一なんて名乗れないな。

昔の名前を使うか。

『矢川鏡一だ。種族は、人間を辞めかけた人間だ。』

恐魔「そうか、鏡一!ありがとう!」

『はいよ、じゃあの。』

恐魔は去っていった。また会えるかね？

さて、次は永琳だな、

『すまん、話に置いていって。』

永琳「ありがとう。それより、なぜ妖怪を殺さなかったの？」

『殺してもなんも始まんからな、話の分かる奴だったし。それよりもアンタ、名前は？』

永琳「八意永琳（やごころえいりん）よ、貴方は？」

『矢川鏡一だ、人間を辞めかけてるがな、』

人間（男）「永琳様、無事ですね？」

永琳「ええ、って三郎！貴方こそ大丈夫なの!？」

三郎「ちよつとまずいですかね。右腕が動きません。鏡一殿でしたな、感謝します。」

『何、たまたまだ、それよりも右腕を見てやる。・・・骨折しているだけだな、これで固定しろ。』

形成した金属棒を渡す。

三郎「！感謝します！」

『永琳も怪我ないか？』

永琳「ええ、つつ・・・！」

『嘘つけ、痛めてるじゃねえか、足首。あんたらの国に案内してくれ。送ってやるよ。』

永琳「ありがとう。三郎、あなたもいいわね？」

三郎「勿論です、案内させていただきます。」

・・・最高神一同移動中・・・

三郎「つきました。ここです。」

『ほう、でかいな・・・』

軽く驚いているように見えるが、かなり驚いている。何？百階建てぐらいのビルとかあるんですが。

永琳「こっちよ。」

??? 「待て！」

なんかデジャヴ。

永琳「待ちなさい、この人は私と三郎を妖怪から守ってくれたのよ。」

門番「そうですか！あなた様の名は？」

『矢川鏡一だ。宜しく。』

門番「鏡一殿ですか！感謝します！」

永琳「鏡一、こつちよ。」

『じゃあな、なんだ？永琳？』

永琳「月読命様に紹介するわ。ここに住ませて頂けるかも知れないわよ?。」

『そうか、なら、案内してくれ。』

途中で三郎は病院へ行つた。

・・・最高神&永琳移動中・・・

永琳「ここよ。失礼の無いようにね。」

『かしこまりました。こんな感じか?』

永琳「ええ、バツチりよ。』

須佐之男に続いて三貴神に会うのか・・・前世じゃ叶わんかったな。

永琳+俺「『失礼します。』」

???「どうぞ、入りなさい。」

永琳「鏡一、この方が月読命様よ。」

『初めまして、矢川鏡一と申します。』

月読命「知っています。ありがとうございます。鏡一。」

『気にすることはありませんよ。．．．少し二人だけでご時間頂けますか?』

月読命「構いませんよ? 永琳、少し席を．．．」

永琳「分かりました。鏡一、後でね?」

『了解。』

永琳が退出した。

『では．．．』

神力に切り替える。

『初めましてだな、月読命。』

月読命「!．．．龍一兄様ですか?」

『Yes, 龍華から話は聞いているか?』

月読命「はい!! ようこそ、私の国へ!」

『しばらく世話になるぜ。』

月読命「ええ、．．．所で、申し訳ありませんが、その刀は．．．」

『ああ、この刀な、．．．やっぱり危険か?』

月読命「ええ、．．．この国では妖力は忌み嫌われる存在ですから。」

『なら、預ける。管理しといてくれ。』

月読命「よろしいのですか？」

『いいさ、武器はそれだけじゃないしな。』

そう言い、ガンダムデュナメスの、スナイパーライフルと、人斬り
鋏を出す。

月読命「なら、責任を持って管理します。」

『おう、しばらくは世話になるぜ。』

こうして、俺の月読命の国生活がスタートした。

『そーいや、俺の住む場所は？』

月読命「永琳の家です。」

『は？もう一度言ってくれ。』

月読命「ですから、永琳の家ですって。」

・・・不安しかない

次回へ続く

第八話 就職

side 龍一

どうも皆さん、早速ですが、今までの人生の中で一番ピンチです。え？何故かって？・・・前回、月読命に会い、刀を預けた。ここまではいいのだが、その後、住むのは何処か？と、聞いた。そこからだ。永琳の家ですって？あらヤダ御冗談を・・・と、いうわけで、永琳に会いに行く途中です。

・・・最高神移動中・・・

永琳は・・・いた。しょうがない、言うしかないか。

『なあ、永琳。』

永琳「！な、何？鏡一。」

『実はな・・・』

・・・最高神説明中・・・

『と、いうわけです。』

永琳「何で敬語？それに、私は構わないわ。(かっこいいし・・・)」

『ん？何か言ったか？』

永琳「う、ううん！何も・・・」

『ならいいや、ありがとうな、永琳。んで、よろしくな。』

永琳「こちらこそよろしくね。さ、鏡一、家に案内するわ。」

かくして、生活の場を手に入れた。(下宿)

・・・鏡一&永琳移動中・・・

永琳「ついたわ。ここよ。」

『・・・デカくね?』

永琳「・・・ええ、私もそう思うけれど、そこそこの位だから、家も大きくしないといけなかったのよ・・・」

『・・・ちなみに、仕事は?』

永琳「この都市全体のデスクワークよ。」

うん、かなりやばい仕事してたよ。

『マジカヨー。しんどいだろ?』

永琳「まあ、かなり・・・」

これで家の家事もか、大変だな。よし、

『なら、家事全般は俺がしよう。下宿させてもらうからな。』

永琳「いいの?確かにここ最近ましな物食べて無いけど・・・」

『・・・尚更やる。いや、させろ。』

永琳「わ、わかったわ。お願いね。」

『ったく、美人なんだから気にしろよ?』

永琳「ふえっ、び、美人って・・・」

『あ、すまん、ついつい口が滑った。』

永琳「べ、別に構わないわ。」

うん、顔赤いな。熱かね?

『そうか、なら、早速台所借りるぞ。』

永琳「ええ、お願いね。」

さて、とはいえ何を作ろうかね。そうだな・・・時間ないし、あれにするか。

・・・最高神料理中・・・

『ほいよ、できたぞ。』

永琳「ありがとう。」

鏡一&永琳『頂きます。』

永琳「・・・!!美味しい!」

喜んでもらえて何よりだ。俺が作ったのはご飯、味噌汁、焼き魚の

定番メニューだ。

永琳「私のより美味しいわ・・・悔しいけど凄い・・・」

『そこまで喜んでくれるとは、嬉しいな。』

永琳「ご馳走様でした。」

『お粗末様でした。』

永琳「じゃあお風呂に入ってくるから・・・覗かないですよ?」

『んな事するかい。』

永琳「なら、いいんだけど。」

永琳が風呂に入っている最中、仕事の広告を見る。

ん? 軍人ねえ、話してみるか。

え? 除き? 馬鹿かてめえら、やらなかったよ。

永琳「ただいま、何してるの?」

『仕事やろうかなーって』

永琳「もう!?!・・・それで、何の仕事?」

『軍』

永琳「ああ、軍人を見たとき、表情変わってたわね。いいんじゃないな

い?」

『やった!・ありがとな!』

その日は特に何もなく終わった。

翌日

『じゃあ、行ってくる、』

永琳「行ってらっしゃい。」

さて、軍人受付施設に行くかね。

・・・最高神移動中・・・

ついた、ここか。ドアを開けて入る。

三郎「鏡一殿!」

『おう、三郎、怪我は?』

三郎「おかげさまで、治りました。本日は?」

『ああ、軍に勤務しようと思ってな。受け付けてもらえるか?』

三郎「喜んで!・まず、テストを受けてもらいます。」

『了解。』

三郎「最初は勉強からです。」

「そう言われ、紙を数枚渡される。」

三郎「制限時間は一時間です。では・・・初め！」
楽勝過ぎる、ん？最後の問題か。

「貴方、貴方の家族、貴方の友達がいるとします。助けられるのは、このうち二人までです。貴方は、どうしますか？」

へえ。なんて書いても正解な問題か。なら・・・

「自分を捨て、友達と家族を助ける。」と、これでいいのかね。

『終わったぞ。』

三郎「早いですね！では、確認します。」

「そう言い、部屋を出る。」

三分後、帰ってくる、

三郎「結果ですが・・・満点です。最後の問題も・・・他の試験官も関心していました。」

『ほう、光栄だね。』

三郎「では、実技に移ります。」

・・・最高神試験中・・・

色々やった。結果はこうだ。

- ・体力 S
 - ・剣術 S
 - ・射撃 判定不可
 - ・判断力 S
- などなど、全部Sだった。
- ・総合評価 文句なしのS

・・・やり過ぎた。流石に後ろ向いて三キロメートル先の撃ち抜いたのはあかんかった。三郎以外引きつってた。

三郎は「もう驚きませんからね。」とか言ってた。

で、今。どうやら、成績の良いものは、軍の隊長と試合をすることが許可されるらしい。受ける、受けないは自由らしいが、受けて負けただけの場合、軍に入れないのだからか。

面白い。受けさせてもらおうと言い、相手を待つ。

??? 「私が相手です。」

声のした方を見ると、顔の整った女性がいた。

兵士1 「おい、あれって・・・」

兵士2 「間違いねえ、綿月 依姫（わたつき よりひめ）隊長だ。」

兵士3 「まさか！綿月の双壁の妹様か！」

ほう、どうやら、相当の実力者らしい。（原作知ってるなんて言えない）

『初めまして。矢川鏡一と申します。本日はよろしくお願いしま

す。』

依姫「こちらこそ、綿月依姫です。よろしくお願いしますね。」

三郎「鏡一殿、本当にされるので?」

『当然!いつでもどうぞ!』

三郎「では……ルールは簡単!どちらかが参りました、と、言うまで!それでは……試合開始!!」

bgm TRANS—AM (ガンダムOO)

まず、依姫が切りかかってくる、それを最小限の動きで回避し、王宮剣術の構えで「片手で」迎え討つ。そのまま、体制をずらし、わざと隙を出して、切りかからせる。……引つかかった!もう片方に隠していた刀で横に薙ぐ。……手ごたえがあった。手ごたえ通り、依姫の顔に薄く切り傷が入る。……罪悪感やべえ。

依姫「つ……!お見事です、貴方を見誤っていました。」

『そのまま、降参してくれないか?』

依姫「無理な相談ですね。ここからは、能力を含めて、本気で行かせてもらいます!!」

『ヤレヤレ、じゃあ、こっちも能力使わせてもらおうぞ!』

依姫「行きます!」

また、切りかかってくる。……型に当てはまりすぎて、逆に騙しやすい。また、同じように最小限の動きで回避。まずい!そう感じる

と、液体金属を創造、前面に出す。瞬間、依姫の剣先から炎が出る。危ない・・・液体金属は蒸発したが、炎も消えた。が、間髪入れずに切りかかってくる。・・・次で決めるか。そのまま、片手で受け止め、蒸発した金属を刀の形に変えて、落としたかのように見せる。

『チツ！』

依姫「これで刀も一本ずつです。行きます！」

ここまで引つかかると、面白い。

『ああ！行くぞー！』

刀を左手に持ち、突撃する。対する依姫は真正面から縦切りをしようとしている。が、俺が落とした刀はダメー。そのまま、跳躍し、その内に隠していたもう片方の刀を組み合わせる。人斬り鋏の完成。そのまま、刃を開き、首元に突き付ける。

『ふう・・・どうだ？』

依姫「・・・参りました。」

『ありがとうございます。』

依姫「ありがとうございます。」

兵士1・2・3「す、すげえ。」

依姫「鏡一さん、少し質問いいですか？」

『なんだ？あ、敬語外すぞ。』

依姫「はい、では、一つ目は私の出した炎を消した時です。」

『ああ、あれね、液体金属を創造して、炎から酸素を消しただけだ。』

依姫「成程・・・！では、二つ目です。最後、刀が二本あったのは？」

『あれは、さっきの続き、蒸発した金属を刀に変えて、落としたように見せただけだ。この刀は、人斬り鋏と言つてな、もともとは鋏で、二本に分離できるのさ。要するにあれだ、両方ともうまく騙したようなもんだな。』

依姫「お見事です、では、三つ目です。貴方に私と、私の姉の戦術の師匠になってください！」

『はい？いや、軍に入りたいのだが・・・』

依姫「なら、私の部隊の副隊長になってください！」

『三郎、これってルー尔的にいいのか？』

三郎「一応スカウトに入るので大丈夫ですよ。」

『なら、この矢川鏡一、喜んでなりませう。しかし、条件があります。』

依姫「条件とは？」

『俺に対して敬語を外すこと、これだけだ。』

依姫「分かりました！よろしくお願いしますね、鏡一！」

『おうよ！依姫！』

矢川鏡一、月読命の国に入って二日目、副隊長と言うとんでもない職につきました。

永琳にこのこと言ったら凄く驚いてた。

後日・・・明日、依姫の姉に会う予定だ。

依姫と性格は似ていなかったはず・・・

まあ、楽しみにしておくか。

次回へ続く

第九話 鏡一の戦闘講座

前回あらすじ（箇条）

- ・住むところないぜ⇒永琳の家へ
- ・そうだ。軍に入ろう⇒いきなり副隊長兼綿月姉妹の師匠

side 鏡一

と、いうわけで。今回初仕事で、綿月姉妹の戦闘を教えることに。ふざけんな、荷が重すぎるわ、と、言いたいところだが、俺にしか責任がないし、戦闘が嫌いじゃ無いので、嫌かと聞かれると、そうではない。

で、待ち合わせの場所にいます。二十分前に到着が、俺の基本。

依姫「鏡一！待ちましたか？」

いや、早くね？

『いや、全然。てか早くないか？』

??? 「ほら、早いつて言ったじゃない。依姫。」

依姫「姉さんは遅すぎるんです！」

『失礼だが、そちらの方は？』

知ってるが一応聞く。

依姫「失礼しました！私の姉の豊姫姉さんです！」

豊姫「初めまして。私は、綿月豊姫（わたつきとよひめ）と、言います。以後、よろしくお願いいたしますね。」

『初めまして、矢川鏡一と、申します。非才ながら、貴女がたの師匠としてやらせていただきます。こちらこそよろしくお願いします。』

依姫「自己紹介は終わりましたか？では、鏡一、道場に案内します。」

豊姫「あら、依姫、鏡一さんのこと呼び捨てなのね。まさか・・・」

『ちよつと豊姫さん、依姫に失礼でしょうか？私には眩しすぎますよ。』

依姫「ね、姉さん！止めて下さい！鏡一も、失礼じゃないですよ！は、早く行きますよ！」

あら、ほんとのことを言っただけなんだが・・・

まあ、いいか。

・・・鏡一&綿月姉妹移動中・・・

依姫「ここです。失礼します！」

うん、やっぱりでけえ。何？なんでもかんでもかくしてるの？

兵士達「隊長！その者は？」

依姫「本日から、私の隊の副隊長に就任する矢川鏡一殿です！」

兵士 a 「どこの馬の骨かもわからない奴にですか!？」

依姫 「この方は、先日私と組み手をし、私に勝ちました！異論はありませんか？」

兵士達 「まさか！ いや、でも、依姫様が言っておられるし・・・」

そりゃ困るわな、よし、

『依姫、なら、豊姫さんと戦ってもいいか？証明にもなるし。』

豊姫 「あら、面白いわね、私はいいわよ。」

依姫 「姉さんがいいのなら・・・分かりました。これより、豊姫殿と、鏡一殿の組み手を行います！武器、能力は使用可能。参りましたとどちらかが言うまでです。」

『オーケー、準備できたぜ。』

豊姫 「私も大丈夫よ。」

依姫 「では・・・初め!!」

b g m M H F | G ハルドメルグ戦 b g m

豊姫が扇子から風を出してくる。・・・遠距離型か、面倒な・・・

『悪いが、最初から能力使うぜ!』

豊姫 「どうぞ、それでも勝てるかしら?」

『勝てるかじゃない。勝つんだ。』

俺の身体の周りに金属の玉を出す。

豊姫「あら？何かしら、それは？」

俺は向かってくる風を金属で包む。そのまま圧縮、打ち返す、が、前から来た風に消される。

『おい！なんだ？その風？』

豊姫「この扇子から出した風は微粒子まで浄化するのよ。当たると大変よ？」

『んな物騒なブツ誰が作ったんだよ？』

豊姫「私と依姫の先生の永琳様よ？」

なんてもん作ったんだよ、永琳。

『そうかい！そらやべえわ！』

そう言いつつ、金属を粉末レベルにし、豊姫の周りにとどめる。幸いばれていない。

豊姫「悪いけれど、これで終わりよ！」

豊姫が扇子から風を出そうとする。今だ！

『金属展開！包み込め！』

豊姫「なっ・・・！くっ！」

豊姫が風の照準を金属の膜に変える。俺はすぐさま、デユナメスのライフルを創造、構える。そして、豊姫の出した風が金属を崩して出てくる。豊姫も出てくる。

・・・ここで一言。

『狙い撃つぜ!!』

豊姫「しまった！」

そのまま銃弾は、扇子に直撃した。

豊姫「くっ！まだまだ『チェックメイト』なんですって？」

『おっと、動く撃つかもよっ。』

豊姫「はあ・・・参ったわ、私の負けよ。」

『了解。ありがとうございます。』

豊姫「ありがとうございます。」

依姫「お二人とも、お見事です。」

兵士達「すげえぞ！今回の副隊長！」

兵士達から歓声がくる。信用してくれたようだ。

豊姫「凄いわ、鏡一さん。私の完敗よ。」

『いえいえ、私もまだまだですよ。』

豊姫「誇っていいのよ。私と依姫は、軍でトップの強さを持っているのだから。』

依姫「そうですね。鏡一。私も姉さんにしか負けたことがなかったのに。」

『ほほう。では、一ついいですか？豊姫さん。』

豊姫「何かしら？鏡一さん？」

『敬語、外していいか？さん付けも止めていいか？』

豊姫「構わないわ。私も鏡一と呼ぶわね。』

『構わんさ。じゃあ、早速、お前らの戦法の反省会でもするか？』

豊姫「そうしましょうか。」

依姫「全員、今日は終了です！自由時間に移って下さい。」

兵士達「やったああああ！」

依姫「では、場所を変えましょうか。」

・・・鏡一&綿月姉妹移動中・・・

『じゃあ、反省会を始めます。まず、依姫から。』

依姫「はっ、はい」

『一言で表すと・・・型に入りすぎだ。』

依姫「と、言うのは？」

『俺が体制を崩したとき、何をした？』

依姫「えっと、隙が出来たので、切りかかりました。」

『そう、そうするのが基本だが、俺が崩したのはわざとだ。それにより、攻撃を誘った。で、攻撃、カウンターを自分からしたようなものだ。』

依姫「成程・・・！」

『他にも、俺が宙に飛んだとき、一瞬戸惑っていたな。あれも駄目だ。もっと臨機応変に動くんだな。・・・どれだけ型に入ろうが、結局は勝てりゃいいんだから。』

依姫「ありがとうございます。」

『次、豊姫。』

豊姫「私は？」

『同じく臨機応変に動け、あと、話に気をとられすぎだな、今日の最後がいい例だ。』

豊姫「そうね・・・後は？」

『近接にも対応した方がいいな、切り込んで下がるときに風を出す

とか。』

豊姫「成程・・・参考になるわね。」

『あくまでも例だ。鵜呑みにすんなよ?』

豊姫「ええ、」

依姫「なら、早速練習です!付き合って頂けますか?」

『はいよ、いくらでもどうぞ。あ、俺の戦法があれだけと思うなよ?』

依姫「・・・いくらぐらいあるのですか?」

『ざっと千通りぐらい?』

依姫「」

豊姫「もう人間辞めてるじゃない・・・」

まあ、人間じゃないし、とは言えない。

『自分でも薄々感じてる。』

依姫「き、気を取り直して行きましょう!」

さて、この二人、どこまで強くなるかね。

次回へ続く

第十話 月移住計画 始動

side 鏡一

前回から早くも数か月。

今朝、いきなり永琳と共に月読命に呼ばれた。大事な話があるらしい。

『永琳、なんか知ってる?』

永琳「いいえ、わからないわ。」

あれかな? 月移住計画かな? え? 何で知っているか?
実は刀に盗聴器仕込んでます。なので、月読命は俺に隠し事出来ません。

・・・つけてたの忘れたなんて言えない。

まあ、何でもいいんだけどね。

・・・鏡一&永琳移動中・・・

『おや? あそこにいるのは・・・』

依姫「鏡一! それに師匠!」

永琳「あら、依姫に豊姫。久しぶりね。」

豊姫「鏡一と師匠も月読命様に?」

『お前らもか?』

依姫「ええ、何でしょうね?」

『まあ、行くか。』

・・・鏡一&綿月姉妹&永琳移動中・・・

『失礼します。』

月読命「どうぞ。集まってもらって感謝します。」

『いえいえ、こちらももう仕えた身なので、言わなくてもいいですよ。』

月読命（無理ですって）

鏡一（いや、お前さんならできる。）

月読命「では、本題に移ります。・・・最近、強力な妖怪は減ったものの、数は増えています。穢れも著しく増えています。」

依姫「では、どうするのですか?」

月読命「穢れもなく、妖怪もない場所、月に移住しようと思いません。」

依姫「成程・・・!」

豊姫「確かに、穢れもないですね。」

永琳「ロケットも最近開発出来ましたしね。」

確かに、いい案だ。だが……

『妖怪は見過ごすでしょうか……』

月読命「……！それは……」

依姫「大丈夫ですよ。全部撃退できますよ。」

『これをお見せします。』

鏡一以外「これは？」

『私の能力で、索敵しましたが、十億程度はいるでしょうね。』

月読命「いつこのようなことを……」

『二週間ほど前ですかね。』

豊姫「流石にこの量は不可能ですね……」

『まあ、こちらにも案はあるのですが、』

月読命「聞いてもいいですか？」

『ええ、永琳。昔三郎と襲われたときの妖怪、覚えてるか？』

永琳「確か、鬼子母神が、リーダーだったかしら？」

月読命「まさか、鏡一、貴方は……」

『そうです。そのグループと同盟関係を結びます。』

豊姫「でも、鬼子母神らには利益がないのでは?」

『いや、俺は前回、鬼子母神のグループの一人：・恐魔に無限食を渡しました。なので、人間を襲う理由がありません。これが理由です。』

月読命「そこまで見抜いていたのですか。」

『そこそこ長く生きてますからね。』

永琳「え?鏡一って何歳なの?」

『二百からは数えていない。』

永琳、依姫、豊姫「ええええええ!!」

月読命「話がそれましたね。では、鏡一。鬼子母神のグループと同盟を結びに行ってもらえますか?」

『了解です。では、本日、一人で行かせていただきます。』

月読命「一人で大丈夫ですか?」

『俺のみのほうが、相手も安心するでしょうしね。』

月読命「分かりました。では、頼みます。」

『御意』

月読命「話は以上です。解散。」

永琳「鏡一！大丈夫なの？」

『おいおい、俺を誰だと思ってるんだ？そう簡単にくたばらねえよ。』

依姫「そうですよ、師匠。鏡一さんなら帰ってきますって。」

豊姫「私たち二人がかりでも勝てないしね。」

『まあ、そんなわけだ。行ってくる。』

・・・鏡一移動中・・・

『よっと、確かこの辺だったっけ？』

恐魔「あ、鏡一じゃねえか！」

『おお恐魔！久しぶりだな！』

???「恐魔、こ奴が？」

恐魔「へい、こいつが無限食をくれた人間です。」

『初めまして、だな。あんたは？』

???「私かい？私は茜（あかね）鬼子母神って呼ばれてるよ。」

『あんたがかい、実はな、あんたに話があってきたんだ。』

茜「私にかい？」

『ああ、実はな……』

俺は月に移住する計画が進んでいる事、同盟を組んでほしいことを伝えた。

茜「成程ね……あんたには恩もあるし別に構わないね、ただ、一つ条件がある。」

『条件とは？』

茜「簡単さ、私と勝負してくれたらいいよ。」

『簡単だな。いいぜ！相手になってやる！』

茜「珍しいねえ、妖怪に真正面から立ち向かうなんて。」

『勝負に種族もキャベツも関係ねえだろ？楽しけりゃいいんだよ、楽しけりゃ！』

茜「面白い！じゃあ、行かせてもらうよ！」

『おう！ いぎ、参る！』

bgm 煉獄庭園 酔狂HEAVEN！

茜「はっ！」

早速茜が殴りかかってくる。が、回避し、茜の腕を掴んで蹴りこむ。しかし、躲される。

『ちっ、惜しい!』

茜「やるねえアンタ、私に反撃してきた奴は久しぶりだよ。」

『へっ、左様ですか。まだまだ行くぜ!』

俺から仕掛ける。殴りに行くと思せかけて滑り込んで、後ろから蹴り飛ばす。

茜「っ! 凄いよアンタ! これは耐えられるかな?」

そう言い、茜は何か力を込め始める。

あれは、三步必殺か? ならば!

『俺も行くぜ! 【三步牙突】(さんぽがとつ)!』

足を振り上げ、構える。

茜「行くよ! 鏡一!」

『来い! 茜!』

そして、拳と足が交差する。

茜「外したっ!」

俺も外した。が、この技は牙突だ、そのまま、横腹を蹴りこむ!

茜「ぐっ……!」

茜が膝をつく、

『まだやるかい?』

茜「やめとくよ。勝てる気がしないよ。」

『楽しかったぜ!』

茜「私もさ!ところで、あんた本当に人間かい?」

『いいや、人間じゃない、龍神だ。』

恐魔「」

茜「まさか、神矢龍一かい?」

『あれ?俺のこと知ってるんだ。』

茜「もう何も怖くないね・・・」

『お前らの一族以外にばらすなよ?』

茜「わかったよ。バラさない。同盟の件も認めよう。・・・恐魔!」

恐魔「へ、へい!伝えてきます!」

茜「頼んだよ。」

『じゃあ、俺は失礼するよ。知り合いが心配しているからな。』

茜「そうかい、また会えるといいね。鏡一。」

『おうーあばよー!』

・・・鏡一帰投中・・・

『ただいまー』

永琳「鏡一!大丈夫だった?」

『ああ、なんかあったか?』

依姫「ええ、膨大な妖力と霊力がぶつかっていたのが分かりましたから。」

絶対に牙突のせいだ。

『ああ、ちよつと勝負したからな。』

豊姫「同盟の方は?どうだったの?」

『万事オツケイ。結べたぜ。』

豊姫「本当に凄い人ね・・・」

永琳「よかったよお、鏡一い」

『おいおい、泣きそうになるなよ。さあ、帰るぞ。』

こうして、交渉は成立、月移住計画まで問題無しだ。

次回へ続く

第十一話 鏡一帰らず

side 鏡一

『遂に月移住か・・・』

永琳 「ええ、あれから数か月経つのね・・・」

『ああ、依姫と豊姫もようやくいい勝負になってきたしな。・・・かなり時間かかったな。』

永琳 「貴方が強すぎるのよ・・・」

依姫 「そうですね。何で姉さんと二人がかりの本気で傷一つ負わないんですか。謎すぎますよ。」

『まだまだ本気出してないぞ?』

豊姫 「もう化け物じゃない・・・」

『そりゃあ心外だな。そういや、お前らは何番ロケットだ?』

永琳 「私は月読命様と一緒にロケットよ。」

依姫 「私たちは最後ですね。」

『俺も最後だな。』

永琳 「豊姫たちだけずるいわ。私もそっちにしようかしら。」

『いや、どうせ月で会えるだろう。』

永琳「冗談よ。じゃあ、準備してくるわね。」

『へいへい。』

依姫「鏡一、私達も巡回に行きましょう。」

『そうだな、行くか。つとちよつと先に行ってくれ。用があるんでな。』

豊姫「あら、行ってらっしゃい。」

『じゃあ、後でな!』

・・・鏡一移動中・・・

『月読命様、入りますよ。』

月読命「鏡一ですか。何の用ですか?それに、今は敬語いらないですよ。」

『あつそう、じゃあこの調子で話すぞ。』

月読命「ええ、鏡一、いや、龍一兄様、ありがとうございます。」

『気にすんな、気分で作ったんだ。そういや、須佐之男は?』

月読命「あいつなら、兄様との一件で、変わりました。」

『そうか、楽しそうか?』

月読命「ええ、とても、最近は龍華様の手伝いをしているそうです。」

『へえ・・・あ、本題なんだが、新月、返してくれるか?』

月読命「ああ、お返しします。今ごろ何故?」

『いや、何となくな、もう妖力は関係ないのか?』

月読命「ええ、私達に害がないのが分かりましたから。」

『ならいい、じゃあ、依姫達の所に行ってくるわ。じゃあな。』

・・・鏡一移動中・・・

『ただいまー。』

依姫「用は済んだんですか?」

『ああ、この刀のな。』

豊姫「依姫の剣ぐらいの力が込められているんだけど・・・」

『ああ、そりやあずつと霊力込めてたからな（大嘘）』

依姫「いや、でもその力は・・・」

『大丈夫、リミッターかけてるから。』

依姫&豊姫「リミッターかけてそれ（ですか）!?!」

『まあ、気にすんな。』

依姫「鏡一ですからね……」

豊姫「ええ、そうね……」

何だ、そのこいつだからあり得るみたいな目は。

『お前らな……』

文句を言おうとした瞬間だった。

『!!依姫!・豊姫!・来たぞ!』

そう、遂に来たのだ。妖怪共が。

依姫「来ましたね……」

豊姫「全軍、撃退するわよ!」

兵士達「おう!!」

さて、一丁やりますか。

……数十分後……

おかしい、手ごたえがない。センサーを起動させるが、何もいない。……まさか。

『コンプリートセンサー起動。』

いた、どうやら能力持ちがいたようだ。

『おい！豊姫！依姫！凶られた。向こうに大群が居る！』

依姫「なんですつて!?!」

『俺が時間を稼ぐ！月読命様に伝えろ！』

豊姫「大丈夫なの？」

『なあに、大丈夫だろ。頼んだぞ！』

依姫「気を付けて下さいね！」

『おう!!後は頼んだ!』

・・・鏡一疾走中・・・

『いた！てめえら!!こっから先は一方通行だ。死にたくなけりや帰りな!』

妖怪 a 「ああ？何だてめえ？邪魔すんな！」

『口で言っても分からんか。よろしい、ならば【皆殺し】だ。』

さて、殺戮のスタートだ。

b g m メタルギアライジング I T H A S T O T H I S
W A Y

「しねええ！」

襲いかかる妖怪を真正面から切る。容赦は無しだ。

「くっくっくっ！」

妖怪たちはひるむ。．．．つもらん。数が多いだけか。

『うるせえよ。【鉛の海】』

俺は、半径百メートルの地面を鉛に変える。そのまま、槍を形成し、串刺しにする。

「な、何なんだよ！こいつは！」

『遅い！』

走りながら新月で片っ端から切り刻む。

『おいおい！どうしたんだよ？さっきの口は!?!』

情け容赦なく切っていく。が、ある妖怪にはじかれる。

『あんたが相手か?』

???' 「ええ、私はルーミアよ。早速だけど死んでもらうわ！」

『そいつは御免だ！ぶっ倒す！』

ルーミア 「食らいなさい！」

闇から剣を出して切ってくる。

避けるが、刀身が追いかけてきて、当たる。

『ちっ！野郎！』

油断した。右腕が切られる。

ルーミア「その程度かしら？」

『ご冗談を。まだ一割も出してねえよ！』

霊力、二割解放。

ルーミア「なっ！・・・化け物じゃないのよ！」

『よく言われるよ。で、あなたの剣は？』

ルーミア「はあ？ここにがあるじゃ・・・無い！まさか！」

『ご名答、ついでにチェックメイト。動くなよ？』

ルーミア「降参よ。で？殺すのかしら？」

『いいや、殺すのは勿体ない。ちよつと来い。』

ルーミア「何？」

『茜!!いるか!!』

茜「呼んだかい？鏡一、いや、龍一。」

ルーミア「はあ？龍一ってまさか！」

『めんどくさいから説明はなし、茜に聞け。で、茜、こいつをグループの一員にしてやってくれ。』

茜「構わないさ、ルーミアってことは常闇妖怪かい。よろしくね。私は茜、鬼子母神さ。」

ルーミア「とんでもない妖怪が近くにいたもんね・・・いいわ。宜しく。」

『話は済んだか？済んだなら急いでここを出ろ。めんどくさいから奥義使う。』

茜「聞いたかアンタら！急いで逃げるよ！龍一、またね！」

『また会えたらな！ルーミアも元気だな！』

さて、首都に行くか！

・・・鏡一激走中・・・

『豊姫！依姫！無事か!?!』

依姫「鏡一!?!向こうは?。」

『全部処理してきた。こっちは?。』

豊姫「全部突破されたわ。このままだと・・・」

『ああもう、お前らロケットに乗ってろ！全部片付ける！先に行つ

てろ!』

依姫「それでは!鏡一はどうするのですか!？」

『何、早く迎えに来いよ?』

豊姫「・・・分かったわ。全軍、撤収!」

依姫「必ず迎えに来ますからね!」

『ああ!これ持ってる!お守りだ。後で返せよ?』

依姫「了解です!では!」

・・・行つたか、あれでいい。最後が暗いといやだしな。

さて、大掃除と行きますかね。

『我、ここに命ずる。この大地に鋼鉄の雨を降らせよ!』

『【弾丸雨】(バレットレイン)!!』

刹那、空が金属で覆われて、銃弾の雨が降る。

「グアア!」 「ギャツ!」

妖怪たちの断末魔が聞こえる。・・・警告したからな。恨むなら自分を恨め。

さて、少しだけ休みますか。

side out

side 月読命

凄い、この一言に尽きる。空を埋めつくす攻撃など、神力のできるのがやっつとだと言うのに、兄様は霊力でやすやすと放った。本気を出す、どれくらいのかだというのだろうか。

三郎「永琳様！月読命様！大変です！化学班のロケットに付けられていた核ミサイルが故障しました！」

馬鹿者が、だから持つてくるなど言ったのだ。そう言うわけにも行かず。唸る。

「ミサイルは直せそうか？」

化学班「無理です！連結部分が故障しました！このままだと後一時間で爆発します！」

くそっ！一体どうすれば・・・

『おい、聞こえるか？月読命様？』

「鏡一？何ですか？」

『ああ、依姫らに伝言を頼みたい。』

「分かりました。急いで伝えて下さい。」

『……………だ。頼みますよ？』

「まさか！鏡一！」

『今までありがとうございました。永琳、約束守れなさそうだからすまん。』

永琳「ちよつと鏡一？何言ってるの？冗談は止めてよ。」

『悪いな。じゃあな。さよなら。』

鏡一、いや、龍一兄様・・・馬鹿ですよ、貴方は・・・

side out

side 鏡一

さて、じゃあ、約束を破った最低の人間になりますか。

・・・ライフル異常なし、目標、核ミサイルの連結部分。

『何やってんだろうな、俺は。他人のことなのに、まあ、それも俺の気分か。さて、いきますか。』

・・・照準オツケイ、角度、風向共に問題なし、行くぞ！

『狙い撃つぜ！！』

よし、命中！！・・・さらばだ。

数秒後、視界が真っ白になる。

side out

side 依姫

「!!今の爆発は?」

豊姫「・・・地上からよ。」

「そんな・・・じゃあ、鏡一は!」

月読命「豊姫に依姫、いますか?」

「月読命様!鏡一は?」

月読命様は首を横に降る。

月読命「彼から伝言を聞いています。聞きますか?」

豊姫「お願いします。依姫、貴女は?」

「・・・私も聞きます。」

月読命「では・・・『悪いな、約束を守れなくて。悪いが、一つだけ願いがある。聞いてくれ。俺が死んでも、泣かないでくれ。お前は笑ったほうが可愛いからさ。じゃあな。さようなら。あと、依姫、お守り開けてみる。』・・・だ、そうです。」

お守りの中?何かしら?開けてみる。すると・・・

「・・・写真?」

私と姉さんと師匠と月読命様、そして鏡一の写った写真があった。

「ずっと……これを……つつ……！」

豊姫「……依姫……」

「いいえ、泣きません。彼のおかげですから。」

豊姫「強くなったわね。依姫」

鏡一、見ていて下さい。私、もつと強くなりますから！

side out

side ???

『さて、矢川鏡一は死んだ。だが……俺は生きている。さて、これからは妖怪にでもなりますかね。名前は……【絶影】（ぜつえい）にしましょうか。』

さあ、新しい世界へ行きますか。

side out

この日、矢川鏡一は死んだ。代わりに絶影が生まれた。一体、どうなるのだろうか。

次回へ続く

第四章 ユーラシア大陸く化け物との遭遇 第十二話 第一回海外旅行

side 絶影

やあ、皆さん、絶影です。え？性格が違うと？

・・・やっぱそうだよな、可笑しいよな。

そんなことは置いといて。只今ユーラシア大陸に移動中です。

・・・前回からしばらくたち、人類が再び生まれました。

船長「アンタ、何でこの大陸に？」

『ああ、ちよつと旅に出かけようと思ってな。』

船長「そりやまた何でだ？」

『強い奴に会いたくてな、こつちまで来たんだ。まあ、武者修行だ。』

船長「アンタ、妖怪かい？そうだとっても面白いな、アンタ。」

『確かに妖怪だよ、まあ、特殊だが。』

船長「妖怪かい！でも、いやじゃ無いねえ。何でだろうな。」

『食事をする必要がないからじゃないか？人間も食ったことないし、』

船長「アンタ、相当の妖怪様かい？」

『まあ、向こうで俺より強い奴はいなかったな。』

船長「俺がやすやすと話せる奴じゃないな……」

『いや、元は人間だったから、問題ないぜ?』

船長「本当に変わり者だねえ……」

『まあな、それよりも、あの大陸に強い奴がいるか?』

突如、船長の顔が曇る。

船長「……いるよ。化け物が四体。」

『ほう?どんな奴だ?』

船長「……一人はすべてを欺く化け物、一人はすべてを貫く化け物、一人は災厄を操る化け物、一人は全部喰らう化け物、こいつらは、何もしないが、向こうの王が退治しようとしてな、だが……今まで一万人以上が退治に行ったものの、全滅。妖怪もいたが無傷で済んでいるらしい。」

『へえ……退治したほうがいいのか?』

船長「当たり前だ!そのせいで俺たちが兵にされるんだ!」

『なら、殺さなくても、退治すりゃいいんだな?』

船長「……できるのか?アンタ。」

『やるだけやってみる。任せろ。』

船長「なら、王城まで案内する。あんたの名前は？」

『絶影、ただの影妖怪さ。』

・・・妖怪&人間移動中・・・

船長「こっちだ。俺は行けない、じゃあな。」

『ありがとう、じゃあな。』

『失礼します。』

王「入れ。要件を話せ。」

『はっ。例の化け物の件です。』

王「貴様は？」

『絶影、影妖怪です。』

王「・・・奴らは向こうの山に居る。頼んだぞ。」

『退治すればいいんですよね。』

王「うむ、手段は問わない。」

『了解です。仰せのままに。』

・・・絶影移動中・・・

『ここか・・・』

??? 1 「止まりなさい、何用ですか？」

??? 2 「また妖怪か？王もこりないゼヨねえ。」

??? 3 「全くだ、懲りない奴らだ。」

??? 4 「まあ、いいんじゃない？」

『あんたらが四体の化け物か？』

??? 1 「そうですね。私は饕餮（とうてつ）です。」

??? 2 「俺は橈杓（とうこつ）ぜよ。」

??? 3 「私は窮奇（きゆうき）だ。」

??? 4 「僕は混沌（こんとん）だよ。」

『紹介どうも。俺は絶影だ。』

饕餮 「何の用ですか？」

『退治しに来たんだが・・・止めだ。勝負してくれ。』

橈杓 「面白い奴じゃのお！俺はいいぜよ！」

窮奇 「私も構わんが・・・相手になるか？」

混沌 「僕はどっちでもいいよ」

饕餮 「はあ・・・全く、分かりました。受けましょう。一対一でやります。いいですか？」

『問題なし、誰からだ？』

混沌 「僕からでいいかな？」

饕餮 「いいですよ。」

橈杙 「じゃあ、その次は俺ぜよ。」

窮奇 「なら、その次は私だ。」

饕餮 「最後は私ですね。絶影殿、問題ないですか？」

『いつでもどうぞ。』

饕餮 「では、始め！」

混沌 「よろしくね。」

I R i m a i n M e t a l G e a r R i s i n g A S u t o r a n n e r

混沌 「じゃあ、いくよ。」

そう言い、妖力弾を飛ばして来るが、途中で分裂する。

『なっ！』

とっさにかわすが追いかけて来る。・・・おかしい、影がない。

『試すか。』

俺はわざと当たる。が、当たらない。

『やっぱりなー！これで騙すのか！』

混沌「あらら、ばれちゃった。早いね、気づくの。だから。」

混沌？「本気でやってもいいよなあ！」

混沌の雰囲気が変わる。

『来いよー！』

混沌？「オラア！」

大量の妖力弾を乱射してくる。

混沌？「さらにこうだ！」

突如、目が見えなくなり、耳も聞こえなくなる。

『何！』

混沌？「止めだ！」

大量の妖力弾が飛んでくる。

『……【影移し】……』

side out

side 饕餮

残念ながら倒れたか。

橈骨「残念ぜよねえ。」

窮奇「流石に混沌の本気は無理だったか……」

「久しぶりにやるかと思っただのですが……」

『おいおい、俺はここにいるぜ?』

「なっ!まさか、混沌は!」

混沌「あいたたたく。やられちゃったよ。」

窮奇「……どうやって勝った?」

『影移し、俺の影の位置と混沌の影の位置を変えた。つまり、俺と混沌の位置を取り替えた。』

まさか、そんなことができるとは……

「貴方を嘗めていたようですね。かなりやるようだ。」

橈骨「まあ、次は俺ぜよ!」

『よし、来い。』

side out

side 絶影

危なかった・・・まさか、脳内を直接干渉してくるとは。

若干とはいえ、混乱した。・・・流石中国四凶というわけか。本気で行かねばな。

橈杓「次は俺ぜよ！」

『ああ！行くぜ！』

橈杓「ぜりやあ！」

踵落としを繰り返してくる。かわすが、地面に半径百メートルに巨大なクレーターができる。

『おいおい、冗談きついで！』

橈杓「まだまだ行くぜよ！」

さて、どうしたもんか。

次回へ続く

第十三話 影の実力

side 絶影

さて、何とか混沌は倒したが・・・無理だろこれ。

何で踵落として地面に巨大なクレーターできるの？バカなの？死ぬの？あ、死なねえわ。

そんなことは置いといてだ。どうしたもんかね・・・

side out

ここからは三人称です。

bgm ガンダムG 我が心 明鏡止水くされどこの掌は烈火の如く

橈杓 「次は外さんぜよ！」

『勘弁しろよ、っと！』

橈杓の蹴りを絶影は寸でのところで避ける。

『ええい！』

そのまま、絶影はシャイニングウイザードを繰り出す。

橈杓 「ガッ！・・・やるぜよね、アンタ、」

しかし、橈骨は吹き飛ばされたのみ。

『ええ……全然効いてねえし……』

橈杣「あれぐらいじゃあ倒れんぜよ！」

そう言い、橈杣は今度は殴りかかってくる。

それを絶影は躲し、腕を掴み、背負い投げる。

橈杣「なんぜよ？その技？」

『ケロツとしながら聞くな！ちつとは効け！』

橈杣「不思議なやつぜよ。これは、どうするぜよ？」

『あれ〜どつかで見たことがあるような……』

橈杣「はあああああ！」

『やっぱかめ〇め波じゃねえか！』

橈杣はかめ〇め波……もとい気で作ったエネルギー砲を撃つ。

『ああ、もうやけくそだ！【影潜り】！』

そう言い、絶影は影に隠れる。

橈杣「避けられたぜよか……だが、見つけたぜよ！貫け！」

絶影『なっ！くそっ！』

妖力の弾が当たり、絶影の左腕が消し飛ぶ。

橈杓「まだやるぜよか？」

『そりや勿論。』

橈杓「なら、これで止めぜよ！」

そう言い、前の数倍のスピードで妖力弾が飛んでくる。

『カハッ！・・・』

そして、絶影の心臓を貫いた。

橈杓「俺の勝ちぜよ。『んなわけねえだろうが。』何！」

『心臓を貫いただけで死ぬわけねえだろうが。』

しかも、絶影には消し飛ばしたはずの左腕がついている。

橈杓「とんでもない化け物ぜよね・・・」

『影妖怪だからな。左腕の生成ぐらい簡単だ。』

橈杓「・・・降参ぜよ。勝てそうにないぜよ。」

『楽しかったぜ。昔を思い出したよ。』

橈杓「他にも同じような奴がいたんぜよか？」

『ああ、鬼子母神って奴がいたな。いい勝負になると思うぜ？・・・』

橈杓「へえ・・・手合わせしてみたいぜよ。」

『まあ、後でゆっくりな。』

橈杓「おう!!次は窮奇ぜよな。」

窮奇「次は私が相手だ。よろしく頼む。」

『こちらこそよろしく。』

窮奇「して、絶影殿。・・・貴殿、かなりの剣術の使い手だな？」

『・・・何故分かった?』

窮奇「雰囲気で分かる。して、一つ頼みがある。」

『何だ?』

窮奇「私とは剣で勝負してもらいたい。その代わり、私は風以外の能力は使わない。」

『・・・いいだろう、俺も自分の能力は使わない。剣にしている能力のみで戦おう。』

窮奇「ありがたい。今までの剣士はどれも駄目だったからな。・・・期待するぞ?」

そう言い、窮奇は、風から刀を生み出す。

『どどどど自由だ。』

『『では、・・・』』

『『行くぞ!』』

r
|
b g m F a t e / Z e r o E m i y a | t i m e a l t e

窮奇「せいっ!」

『よっど!』

窮奇「やはりやるな。大体の者は今ので真つ二つだと言うのに。」

『そりや弱いわ。これぐらい受けないと、よっど!』

窮奇「おっと!やるな!」

『燕返し!』

絶影は剣を振り下ろす。窮奇はかわして反撃する。

窮奇「もらった!」

『こっちがな!』

一発目をわざと外して攻撃させ、そのまま切り上げる。これが燕返し。

窮奇「な!くっ!」

しかし、窮奇はバク転で躲す。

『マジか！あれを避けるのかよ！』

窮奇「・・・どうやら、本気を出さねばかなわない相手のようだな。」

『しかもまだ本気じゃないと来た。』

窮奇「・・・行くぞ。」

そう言い、カマイタチで絶影の動きを止めて、切り下ろす。

『マジでか！ちっ！アモン！』

絶影はカマイタチを燃やして迎えうつ。

窮奇「何だその剣は!?!」

『これがこの剣の能力だよ！』

窮奇「随分と形が変わったな！」

そう、打刀から反り返ったナイフに変わったのだ。

『別にいいだろう？来い！』

窮奇「勿論だ！こんなに楽しいのは俺たちの勝負以外なかったぞ
！」

『俺もだ！お前らとの勝負は楽しいよ！』

窮奇「行くぞ！ぜりやあ！」

窮奇が剣を振り下ろす。が、絶影は受け流す。

窮奇「何！」

『もらった！』

絶影は窮奇の剣をはじく。

窮奇「ハハハハハ！降参だ！こんなに強い剣士がいたとはな！」

『俺もだ。こんなに強かった剣士は何時振りかね・・・』

窮奇「次は饜飩だな！気を付けろ？あいつは俺たちの中でも一番強く、能力も恐ろしいぞ！まあ、お前なら心配は無用だろうがな！」

『はっ！言ってくれるねえ。その通りさ！』

饜飩「成程、貴方も私達と同じようだ。この饜飩、全身全霊で相手しましょう！」

『おうよ！来な！』

今、最後の戦いが始まる・・・！

次回へ続く

第十四話 不滅の存在

side 三人称

饕餮 「さて、最後は私が相手です。・・・殺す気で行きますよ。」

『何を今更・・・殺しに來い、いや、殺せるかな？この俺を。』

饕餮 「まあ、やってみますよ。」

bgm 煉獄庭園 Dance in the sky

『今回はこっちから行くぜ!』

饕餮 「來なさい。」

饕餮の背中からどす黒い八枚の翼が生える。

『オラア!』

絶影は妖力の槍を飛ばす、が

饕餮 「喰らえ。」

その一言と共に、妖力の槍が翼によって消される。否、喰われる。

饕餮 「お返しします。」

妖力の槍がそのまま帰ってくる。

『何だその翼! 反則だろ!』

饕餮 「心臓貫かれても復活した貴方に言われたら終わりですね！」

『それとこれは話が別だ！』

饕餮 「もういいです。【捕食】対象、妖力五割。」

『なっ！・・・何をした・・・。』

饕餮 「ただ貴方の妖力を喰らっただけですよ。」

『もはや、別次元の能力だな。』

饕餮 「言ってる暇、ありますかね？」

『おっと、ねえな！』

絶影は翼を躲していく、一方、饕餮は動かずに翼のみを動かす。

『（あいつは翼のみを動かしている・・・本体をやれば！）』

饕餮 「（？ 突っ込んできた？） 無駄ですよ。」

『くっ！まだまだあ！』

絶影は右腕を喰われたものの、左腕に刀を持って突っ込む。

『オラア！』

饕餮 「くっ！しかし、貰いました！」

饕餮は右脇腹を貫かれる。が、翼で絶影の左腕、両足を喰う。

『ガアツ!!』

饕餮「はあ、はあ、．．．私の勝ちです。」

『なら、首を切れ。』

饕餮「見事でしたよ!」

そうして、対決は終わった。

．．．かのように見えた。

『ハハハハハ!』

饕餮「何故だ!確かに首を切ったはず!!」

『それだけか?』

饕餮「な、何を言って．．．」

『もう一度聞く。それだけか?』

饕餮「成程．．．どうやら私たち以上の化け物のようですね。．．．まさか首を切っても復活するとは．．．」

そう、絶影は吸血鬼、アーカードのように、復活したのだ。

『影を殺せるとでも?．．．影は不滅、光あるところに必ず影有り。』

故に俺は不死身だ。』

饕餮 「なら、負けを認めさせるだけです！」

そう言い、再び翼で攻撃を行う。

『見せてやろう。俺の奥義を。』

『光あるところに影有り、されど影輝かず。ならば、光を喰らい、すべてを覆うのみ!!』

『BLACK HOLE (ブラックホール)』

絶影は半径四メートル程のブラックホールを作り出す。

饕餮 「なっ！能力が・・・吸われる！」

『ブラックホールはすべてを吸い込み、破壊する！光さえも逃れるのは不可能!!』

饕餮 「まさか、こんな強力なものがあるとは！」

『どうするっ？このままだとここら一帯更地になるぜ？』

饕餮 「冗談じゃない！降参します。」

『いよっしやあああー！』

饕餮 「化け物ですね。ほんとに。」

槌机 「全くぜよ。俺たち全員に勝つ奴初めて見たぜよ。」

窮奇 「まあ、文句はないな。」

混沌 「僕も早く終わったけれど、久しぶりに本気出せたしね。」

『そりやよかったぜ。で、本来の目的だが……』

饕餮 「知ってますよ。王の命令ですよね。」

窮奇 「彼は心配性だからな……」

橈杙 「どうするぜよ?」

混沌 「僕は何でも良いよ。」

『行く当てがないなら、俺と来ないか?条件付きだが。』

饕餮 「条件とは?」

『一つだ。俺の式神になることだ。』

饕餮 「なぜです?」

『そうすることにより、俺から妖力を送ることができる。神力も……あ。』

窮奇 「今、神力と言わなかったか?」

『……まあいいや、驚くなよ?……俺は龍神だ。』

混沌 「へえ。」

窮奇 「そんな気がしてたよ。」

槁杙 「別に驚かんぜよ。」

饕餮 「呆れて何も言えないですね。・・・わかりますよ。あんなに阿保みたいに妖力を出せる奴がどこにいるんですか。」

『あ、驚かないんだ。』

窮奇 「さっきの件だが、私は構わないぞ?。」

槁杙 「俺もぜよ。アンタについていくと面白そうぜよ。」

混沌 「僕も良いよ。楽しそうだしね。」

饕餮 「・・・決まりですね。私も喜んで受けます。」

『よし、なら手続きをする。これを持ってくれ。』

饕餮 「何です?これは?。」

『源刀だ。これを持つと持ち主にあった武器になる。丁度四本ある。』

混沌 「じゃあ、僕から行くよ。あれゝなんかできたよ。」

『槍か。振ってみてくれ。』

混沌 「うん。そい。おお。」

辺り一面が、凍り付いた。

『うわあ、……武器の名前を決めてくれ。』

混沌「うーん、あ、【凍結槍】（とうけつそう）で。」

『よし、次は?』

焼杭「俺ぜよ。こうぜよか? おお、出来たぜよ!

『籠手か、殴ってみてくれ。』

焼杭「おう!!ふんっ!」

地面が盛り上がり、溶岩が流れる。

『これはひどい。同じく名前を決めてくれ。』

焼杭「そうぜよなあ……よし、【山穿ち】（やまうがち）ぜよ。」

窮奇「次は私か、……出来た。」

『双刃刀かい。また凄いものを……振ってくれ。』

窮奇「はっ!」

竜巻が巻き起こる。

『なにこれ。名前はとうする?』

窮奇「……疾風刀（しつぷうとう）だ。」

『次で最後だな。』

饕餮 「行きますよ。．．．出来ました。」

『薙刀か。．．．振ってくれ。』

饕餮 「はっ！」

黒い雷が落ちる。

『あかん奴や、これ。．．．名前は？』

饕餮 「雷斬刀（らいざんとう）で。」

『よし、最後にお前らに名前をつける。敢えて名字は付けないから考えるもよし、嫁を作って付けるもよし、好きにしろ。』

そして、混沌は【幻夜】（げんや）、橈杓は【壊夢】（かいむ）、窮奇は【風魔】（ふうま）、饕餮は【侵二】（しんじ）と、名付けた。

侵二 「体が軽いですね．．．」

壊夢 「確かに、力がみなぎってくる感じぜよ。」

風魔 「これが式神か。」

幻夜 「面白いね。」

『さて、じゃあ、日本に帰りますか。と、その前に．．．』

絶影は王に面会、退治報告をし、この国にいつ来てもいい許可証を貰った。

そして、

『おーい、船長。』

船長「アンタ、ほんとにやって来たのかい！」

『ああ、帰りは五人になるが、送ってもらえるか？』

船長「もちろんさ！」

こうして、見事四凶を式神にし、日本に帰ってきた絶影、もとい龍一。

この先に、さらなる波乱を求めて、彼らは暴れだす。

次回へ続く

番外編2 キャラ紹介(2)

キャラ紹介

四凶のマジシャン

混沌(こんとん) こと、幻夜(げんや)

能力「万物を欺く程度の能力」

年齢

約、一億歳

詳細

中国の固有妖怪の一体。マイペースで、口癖は「〜」をよくつける。基本的におっとりしているが、戦闘時、特定の条件を満たすことで、人格が変わり、極度の戦闘好きで、サディステイクになるなど、性格が変化。口調も「・・・ぜ」口調になる。自由気ままにふらつくことも多く、行方不明になることも多い。二重人格。

能力詳細

万物を欺く程度の能力は、生物の五感を狂わせ、脳本体をあやつり、脳死を起こすことも可能。しかし、本人曰く、それじゃあつまらない。とのこと、多少惑わすぐらいに普段はしている。が、性格が変わると、構わず使うので危険。

武器

「凍結槍」(とうけつそう)

龍一(絶影)に、貫い、使用している武器。形は槍、長さ三メートル程で、やや短め。振ると辺り一面凍りつく。氷柱を放つことも可能。色は青色で刃の部分は透き通っている。

趣味

- ・ 植物を育てること、
- ・ マジック
- ・ 昼寝

龍一に対して、「マスター」と呼ぶことが多い。一応言うことは聞か、時々自分の意志でいなくなる。龍一も気にしない様子。龍一からマジックを教えられ、気に入る。

彼女(婚約予定)は風見幽香

四凶最速の剣士

窮奇(きゆうき) こと風魔(ふうま)

能力「災害を操る程度の能力」

年齢

約、一億歳

詳細

中国四凶妖怪の一体。

真面目で、落ち着いた性格、剣士としての礼節を守る一面もある。また、冷静に物事に対応する。剣を持った相手とは、必要時以外、同じ土俵で戦う。

能力詳細

災害を操る程度の能力は、地震、津波、竜巻、雹などの自然災害を操る。特に風系統が得意で、カマイタチなどを出すことも可能。剣士相手には、あまり使用しない。が、卑怯な事を行い、怒らせた場合、本気で能力で潰しにかかってくる。

武器

「疾風刀」(しつぷうとう)

同じく龍一から貰った武器、形は双刃刀で、振ると竜巻が起こる。また、風を衝撃波にして、撃つことも可能。全体的に薄い緑色で、刃の部分は白と黒。

趣味

- ・ 読書
- ・ 剣術
- ・ 刀の手入れ

龍一を主上と呼び、従う。剣の相手も行う。龍一から新しい型を教わる代わりに、自分の型を教えている。

彼女(結婚予定)は天魔こと風切伊織(かざきりいおり)

四凶界最大の剛力

焼骨（とうこつ） こと壊夢（かいむ）

能力「万物を貫く程度の能力」

年齢

約、一億歳

詳細

性格は明るく、豪快。戦闘好きで、嘘が嫌い。鬼のような性格の妖怪。しかし、その力は鬼の数百倍で、片手で地面が割れる程。口癖は「ぜよ」昔、日本人が話しているのを見て、気に入ったらしい。

能力詳細

万物を貫く程度の能力は、そのままの意味で、どれだけ守ろうが、実体を消そうが、確実に当たり、貫く、この能力で、絶影の心臓を貫いたこともある。この能力は、神にも効果がある。

武器

「山穿ち」（やまうがち）

龍一から貰った籠手。腕まであり、振ると、地面が盛り上がり、溶岩が流れ出る。色は溶岩のような色をしている。溶岩や岩の塊を飛ばすことも可能。

趣味

・ 筋トレ

・ 酒造り

・ 建築

龍一を主と呼ぶ。龍一の格闘術や、筋トレを教えて貰っている。

彼女（籍入れ済み、結婚予定）は神鬼茜（かみきあかね）、鬼子母神。

四凶のリーダー

饕餮（とうてつ） こと侵二（しんじ）

能力「有象無象を喰らう程度の能力」

年齢

約、一億歳

詳細

しっかり者で、苦勞性。癖のありすぎるメンバーをまとめる腕と実力を持つ。が、混沌にはいつも悩まされる。窮奇と共に抑えるものの、一向に歯止めが効かないため、苦勞している。冷静で、物事を落ち着いて見る。戦闘好きだが、いつも落ち着いて戦う。本人は楽しんでるらしい。

能力詳細

有象無象を喰らう程度の能力は、攻撃から生物、非生物、霊力、能力などの形のないものも喰らう。背中から生える八枚の翼が生物のようにそれぞれが饕餮の意思によつて動く。喰われたものは、保存、消化、捕食に分かれる。保存は、そのまま残す。消化は、本当に喰う。捕食は、己の一部として取り込む。凶悪な能力。

武器

「雷斬刀」(らいざんとう)

龍一から貰った薙刀、長さは三メートル程。振ると、黒い雷が落ちる。当たると消し炭になる。色は黒色で、刃は銀色をしている。

趣味

- ・料理
- ・片付け
- ・食品作り

龍一を主上と呼ぶ。かなり慕い、料理を教えて貰っている。

彼女は不明。本人曰く「できますかね？」との事。

龍一を含めて、全員規格外な程酒が強く酒が好き。
また、騒動に入り込むのが好き。

次回へ続く

第五章 諏訪大戦く龍神の暴走 第十五話 諏訪の国の神

side 絶影

侵二「最近行く村は、大和とやらの国に制圧されているようですね。」

『ああ、あそこは八百万人の神がいるからな。』

壊夢「へえ……、勝負したいぜよね。」

『まあ、俺の知り合いもいるし、あんまりな?』

あれから数か月、俺達は日本を放浪している。

風魔「まあ、今までの国には神がいなかったからだろうが……神のいる国は?」

『あると思うが、大和からしたら邪魔な存在だな。だから……』

幻夜「……消されるってことかい?」

『……多分、そうだろうな。』

侵二「あ、新しい国が見えましたよ!」

『この話は止めだ。行くぞ。』

・・・化け物一団移動中・・・

門番 a 「止まれ！」

門番 b 「何の用でここに来た？」

『俺らは旅の一団でな、今日過ぐすための国を探していたんだ。』

門番 a 「そうか、なら、入って構わないぞ。」

『おや？調べないのか？』

門番 b 「ああ、この国には洩矢諏訪子（もりやすわこ）様がいるからな。」

侵二 「ここには神がいるんですか？」

門番 a 「そうだ、失礼のないようにな。」

『ああ、ありがとう、努力するよ。』

中に入ると、賑やかな街並みがあった。

幻夜 「凄いね〜」

風魔 「向こうでも、こんなに賑やかな町はなかったな。」

『じゃあ、まずは参拝しますか。』

『賽銭入れて、二礼二泊と。』

??? 「関心だが・・・妖怪、何しにここに来た？」

侵二 「貴女は誰ですか？」

??? 「質問に答えろ！」

侵二 「失礼、唯の旅の一団です。何をしに来たわけでもないですよ。」

??? 「嘘をつけ！さては国を荒らしに来たな！そうはいかんど！」

そう言い、姿を現す。まあ、かわいらs・・・凛々しい。

『いや、違いますよ？荒らすわけが「黙れ！」ああ、そうかい。聞く気なしか。』

俺は妖力を三割開放する。

諏訪子 「え？・・・ば、化け物・・・」

『俺は影妖怪の絶影。その気なら全力で相手するぞ！』

諏訪子 「あ、あの絶影・・・」

『およ？知ってんのか？』

諏訪子 「うん、後ごめんよ。話聞かなくて。」

『あれ？俺有名なの？』

諏訪子 「うん、滅多に暴れない良い妖怪としてね。暫くいなかった

らしいけど。」

『ああ、ちよつと別の所にいたからな。こいつらはその時の式神だ。』

諏訪子「あんた達もごめんよ。」

侵二「いえいえ、気にすることはないですよ。まあ、攻撃して来たら、」

壊夢「俺たちが、」

風魔「全力で、」

幻夜「相手するよ〜」

諏訪子「勝てそうにないよ。」

『まあ、俺達からは手出ししないから。安心しろ。』

諏訪子「た、助かった〜」

『さて、泊まるどこはどうするか？お前ら。』

諏訪子「なら、家に来るといいよ。」

『あ、いいのか？「いいよ。」じゃあ、自己紹介も兼ねてお邪魔するか。』

・・・神様＋化け物一団移動中・・・

『じゃあ、改めて自己紹介を、俺は絶影、影妖怪だ。有名ないな。』

侵二「私は侵二、種族は秘密です。」

壊夢「俺は壊夢、同じく種族は秘密ぜよ。」

風魔「私は風魔、種族は同じく秘密だ。」

幻夜「僕は幻夜、種族は秘密〜」

諏訪子「何だい秘密って。まあ、いいや、私は洩矢諏訪子。この国の支配者で、祟り神さ。」

『終わりだな、さて、暫く世話になるぜ?』

諏訪子「あ、ちよつと待って、縁?居る?」

???「何です?諏訪子様?お客様ですか?」

諏訪子「紹介するよ。うちの巫女の東風谷縁(こちやえにし)さ。」

縁「初めまして、東風谷縁です。」

『初めまして、絶影だ。』

紹介省略

『と、いうわけで暫くここに居させて貰うよ。』

諏訪子「いいよ。ところで、料理できるのかい?」

『俺と侵二ができる。．．．もしかして自分で作れんのか?』

諏訪子「．．．．．」

『ごつちを見ろ。』

縁「料理は出来るんですが味が．．．」

辞めろ縁、そんな目をするな。

『なら、料理教えてやるよ。』

諏訪子「よろしく頼むよ。」

そうして、そんな生活が一月続いた。

『随分と料理うまくなったじゃねえか、諏訪子。』

諏訪子「本当かい? やったあ!」

縁「諏訪子様、手紙が来ています。」

諏訪子「手紙? 誰からだろう? ．．．大和からだ。」

読んでいるうちに、諏訪子の顔が青ざめてくる。

『おい、どうした? ．．．見せろ。』

諏訪子「う、うん。」

手紙には、こう書いてあった。

「今から一か月後、そちらの国を攻撃する。その時に降伏するもよし、戦うもよし。一か月後、良い返事を待っている。他と手を組むのもよしだ。」

大和

『へえ……』

侵二「何と？」

『読んでみろ。面白いぞ。』

四凶「これは！」

『そう、侵略戦争だとよ。でもな、最後の一文を見てみろ。』

侵二「ん？ハハハハハ！そういうことですか！」

壊夢「これは傑作ぜよ！」

風魔「大和も馬鹿だな。」

幻夜「へえ〜。面白いなああ！」

そう、最後の一文、他と手を組むもよしだ。つまり、俺達も参加できる。

『慢心しすぎだ！大和の阿呆共が！……こりやあ罰を与えんな。』

諏訪子「あんた達、まさか……」

『降伏なんぞしないでいい！』

侵二「ええ、私達も参加できますからね。」

風魔「最低でも百万以上か・・・」

壊夢「楽しみませよ！」

幻夜「久しぶりだねえ、殲滅戦は。」

『ほれみろ、全員戦う気だぜ？もちろん俺もな。』

諏訪子「でも、妖怪じゃあ上位の神には・・・」

『なら、これでいいのか？』

諏訪子「!!神力!まさか、貴方は・・・」

『俺がこの世界の自由神神矢龍一だ!俺が手を貸してやる!』

諏訪子「お願いします!」

『敬語はいらん。さて、どう料理してやるかねえ、そうだ。』

『式神、リミッター解除。』

侵二「本気でいきますよ。良いですね?あなた達?」

壊夢、風魔、幻夜「おう!!」

次は武器、

『ツインバスターライフル、装填。』

諏訪子「その武器は？」

『地球破壊兵器の人間用サイズ。これで結界を壊す。』

諏訪子「まさか、大和の国も？」

『そりやあ o s h i o k i しないな。それより諏訪子、お前も強くなれ。最終的に決闘まで持ち込むつもりだ。』

諏訪子「分かった。お願いするよ。」

『よし、侵二！』

侵二「呼びました？」

『諏訪子を鍛えてやってくれ。』

侵二「主上がやればいいのか？」

『いや、お前の能力がちょうどいい。頼んだ。』

侵二「了解です。行きますよ。諏訪子殿。」

諏訪子「行くよ！」

b g m ネイティブフェイス

諏訪子「せいっ！」

諏訪子は、鉄の輪を投げる。

侵二「甘い。」

まあ、そうなるか。全部素手ではじかれる。

諏訪子「くっ！なら！」

諏訪子は地面を捲り、飛ばす。

侵二「ほう・・・でも、まだまだです。」

侵二が翼で地面ごと喰う。・・・勝負ありだな。

侵二「予測できる攻撃はダメです。勝負なんてきれいごとと言って
も、どうせ倒せば勝ちなんですから。そんな意思がないと、勝てませ
んよ?。」

諏訪子「もう一度！」

そうして、時間が過ぎた。

諏訪子「はあ、はあ、」

侵二「初めよりましにはなりましたね。これなら一か月後には傷付
けられるんじゃないですかね。」

『お疲れさま。侵二もありがとな。』

それから二週間後、諏訪子は侵二に一度だけ傷を与えた。

諏訪子「やった?」

侵二「お見事ですネ。」

『やるじゃねえか、諏訪子。侵二に傷を付ける奴は滅多にいねえぞ。これで二週間後は大丈夫だな。』

そして、手紙から一か月後、

『さて、ついにこの日か。お前ら、準備はいいな?』

四凶「おう!!」

さあ、戦争の始まりだ。

次回へ続く

第十六話 大惨事大戦

side 絶影

現在場所は諏訪の国の一キロメートル先。

さあ、おいでなすった。

『諏訪子、大丈夫か?』

諏訪子「うん、もう覚悟は出来てる。」

使者「貴様らが諏訪の者か?」

何だあの態度、ぶっ飛ばすの確定だな。

諏訪子「ああそうさ。」

使者「で?降伏するのだろうか?」

諏訪子「いいや、しない。私は戦う!」

使者「なら、戦争ですね。無駄なあがきを・・・ そう伝えてきますよ。」

『その必要はない。』

使者「何故です?妖怪。」

『それはな、俺らが突っ込むからだ!』

俺は使者を吹き飛ばす。

『行くぞてめえら！神は死んでも復活する！大和にな！』

四凶「おう!!」

『これよりは地獄だ！覚悟はいいな？』

侵二「当然です。」

壊夢「待ちわびたぜよ！」

風魔「勿論だ！」

幻夜「本気出すぜ！」

『よろしい。ならば戦争だ。』

b g m 凜として咲く花の如く

『見つけたぞ！大和の神共！』

神1「何だ貴様ら！」

『我々は諏訪の代理人、我らの仕事は諏訪に攻めてくる愚者を、形残らず絶滅させる事！と、言うわけで消えろ！』

俺は近くにいた神を縦に真つ二つにする。

『さあ、やれ！てめえら！』

side out

side 幻夜

「さうて。殺していいんだよね。」

僕的能力は地味に見えるけど、こうやって。

神2 「死ね！」

「危ないなあ〜パチンつと。」

指を鳴らすだけで脳内を殺せる。

神3 「何をしやがった！」

答える義理はないので爪で切り裂く、え？物理攻撃出来たのかって？できるよ。

「僕、最近つまらなかつたんだ。だから・・・」

「楽しませてくれよお？」

side out

side 風魔

幻夜が暴れだした。ああなると手がつけられない。・・・おっと、今は楽しまない。

神4 「囲め！一斉にやるぞ！」

馬鹿め、私の能力は広範囲用だというのに。

私は津波を出し、周りを呑み込ませる。

悲鳴が聞こえるが知らない。どうせ生き返るのだ。ついでに頭も冷やしておけ。

「さあ、もっと来いよ、その程度か？阿呆共。」

さて、次はどうしようか。

side out

side 壊夢

「誰か力自慢はおらんぜよか？」

全く、さつきから来る奴は一発で地面にめり込むぜよ。

神5 「俺が相手だ！」

「しっかり耐えるんぜよよ？」

相手は拳を振りかぶる。遅すぎぜよ。

「ふんっ」

一撃で吹き飛ばす。全く、とんだ雑魚ぜよ。

「他にはおらんぜよか?」

周りがどよめいている。あれだけでぜよか?

「来ないなら、全員吹き飛ばすだけぜよ。」

拳を地面に叩きつける。地面が隆起し、立っていた神々が飛んでいく。

さて、他の皆はどうなってるぜよかね。

side out

side 侵二

おや?ここが一番神が多いようですね。まあ、どちらにしる皆殺しですが。

大体五百万程度でしょうか。敵全体は。こちらは諏訪子殿を国に戻らせたので五人。百万分の一の勢力。・・・大和も名前ばかりですかね。それとも、私たちが強すぎるか。・・・多分後者のほうでしょうね。とりあえず、翼で近くにいた神々を喰らう。龍一日く、神喰らいと言う行為らしいのですが、関係ないですね。喰うと終わりなので。

「しっかりしてくださいよ?唯の国の妖怪でしょう?」

神6 「お前らは妖怪じゃねえ!化け物だ!」

一人が切りかかってくる。無謀でしたっけ?このような行為は、勿

論、頭から頂きました。

さあ、主上はどうしていますかね？

side out

side 絶影

『ほらほら！もつと大人数で！本気で来いよ！』

俺は走りながら目の前の奴らを切り伏せる。数が多い。

『めんどくさい！魔装、アモン！』

辺り一面を焼き、

『切り替え！魔装、バアル！』

雷を落とし、

『更に切り替え！魔装、フォカロール！』

竜巻を巻き起こす。

『あらかた片付いたかな？』

侵二「主上！」

壊夢「主！」

風魔「主上！」

幻夜「マスター！」

『お前らー！そっちはどうだ？』

侵二「片付きました。」

壊夢「こっちもぜよ。」

風魔「後は本陣のみだ。」

幻夜「最後はどうするの〜？」

『全員、武器を出せ。構えろ。』

四凶「了解！」

幻夜「どうするの〜？」

『見てろ。魔装、ダンダリオン。』

『七星・転送方陣（ダンテ・アルタイス）』

『全員、適当な方向に攻撃しろ。』

四方から、氷、風、溶岩、雷が飛んでくる。

『転送！』

それらを転送し、束ねて本陣に照射。一人だけ此方に連れてくる。

『属性複合光線（カオス・ライフル）』

辺り一面が更地になる。生物の気配はない。

使者「あわわわわ。」

『おい、』

使者「ひいっ！」

『お前の嘗めていた奴らの実力だぞ？感想は？』

なんか、悪役みたい。

使者「すみませんでした！」

『お前が謝っても意味がない。大和のお偉いさんに伝えろ。』

使者「な、何と？」

『通達が届き次第、そちらに伺います。とだ。』

使者「わ、分かりました！」

『じゃあ行け。』

使者は逃げるように走っていった。

『久しぶりに殲滅した。』

侵二「雑魚でしたが、楽しめましたね。」

壊夢 「確かに、面白かったぜよ。」

風魔 「余裕そうな顔が崩れたのは、爽快感があったな。」

幻夜 「久しぶりに暴られて楽しかったよ。」

『次は悪いが待っていてくれ。ちよつとohana shiするんな。』

侵二 「とりあえず、戻りましょう。」

・・・化け物一団移動中・・・

『諏訪子、今戻ったぞ。』

諏訪子 「あんた達、怪我は？」

一同 「無傷」

諏訪子 「・・・本当に凄いよ。ありがとう。」

『何、俺の本題はこれからだ。』

諏訪子 「何をするんだい？」

『大惨事大戦だ。』

おっと、使者が着いたか。

『悪いが行くわ。侵二、後の説明は頼んだ。』

侵二「了解です。」

風魔「気をつけるよ？ 不要な心配だが。」

『おうよ、じゃあ、また帰ってくる。』

・・・絶影移動中・・・

さて、ここが大和の国か。武装、二丁拳銃。

bgm MH ウカムルバス戦 絶対零度

門番「ひいっ！来たぞ！早く門を閉めろ！」

使者め、余計なこと話したな。まあいい、元から想定内だ。拳銃を門の間に挟み、こじ開ける。

『open sesame ご機嫌よう。門番諸君。勤務ご苦労、そしてさようなら。』

門番を打ち抜き、入る、

神7「ひいっ！来たぞ！迎え撃て！」

俺はガンダムヘビーアームズの装甲を装備、全弾掃射する。

瞬く間に、通路が赤一色に染まる。

『大和の神はいねえかあ？』

部屋の扉を開けて、全弾掃射をする。

『さて、他には？』

須佐之男 「何者だ？答えなさい！」

『ああ、須佐之男じゃねえか。元気だったか？』

須佐之男 「貴方のことなど知りません。」

『薄情な奴だ。・・・八岐大蛇。』

須佐之男 「・・・！兄上ですか？・・・死んだはずでは？」

『あれで死ぬかよ。証拠を見せてやる。』

俺は妖力を神力に変える。

須佐之男 「兄上・・・何故このようなことを？」

『これが理由だ。』

須佐之男 「これは！姉上が書いたものです。」

『天照（あまてらす）か？』

須佐之男 「ええ、兄上が死んだと聞いてから、言いつけを破っています。お願いです、言えた身分ではありませんが、姉上を止めて下さい。お願いしますー！」

『・・・クシナダ姫は？』

須佐之男 「元気です。」

『・・・行くぞ。』

須佐之男 「どこにです?」

『馬鹿、天照のところだ。』

須佐之男 「では!」

『その前にちよつといいか?』

・・・最高神説明中・・・

須佐之男 「分かりました。」

『よし、なら、すぐさま開始だ。』

side out

side 月読命

大変なことになった。諏訪の国に五百万人で攻めて、たったの五人に全滅した。更に一人の男が此方に来ているらしい。

須佐之男 「月読命兄様! 捕えました!」

須佐之男が帰ってきた。しかも捕まえてきただど?

「よくやった。彼ですか? 侵入者は。」

全く、恐ろしい妖怪もいたもんです・・・あれ？どこかで見たよう
な・・・

天照「妖怪、貴方がやったのですか？」

『ああ、そうだが』

天照「妖怪づとときがここにくるなど許されません。」

『貴女か？諏訪の国に大群を送ったのは。』

天照「だから何です？たかが一つの国ぐらい。どうなったっていい
でしょう？」

「天照！止めなさい！」

『そうか・・・ならば、』

『許さん。』

思い出した。彼は、兄上だ。

月読命「・・・龍一兄様？」

天照「月読命兄さん？何言ってるの？こんな奴が兄上な訳・・・な
よ、このふざけた神力。」

『まだ分からんか。』

天照「まさか、本当に・・・」

『そうだったらどうする?』

天照「何故たかが小さな国や唯の妖怪に味方するのです!」

『ド 阿 呆!!』

室内に雷が落ちる。

天照「ひっ!」

『貴様らのみでこの世界は成り立ってないわ! バランスを考えろ! 大体五百万人が俺たちにやられるなどだらけすぎだ! 仕事をしろ! 鍛えろ! 大国などと調子付きおって!... いつそのことこころ一帯更地に戻そうかなあ』

天照「すみませんでした!」

『許してやらんことはない。ただし、条件がある。』

「条件とは?」

『一つ目、諏訪の国の洩矢諏訪子と同じ程度の神を連れてきて、二日後、一騎打ちをさせる。』

二つ目、今後一切神だからと偉そうにするな。次してみる。今度こそ更地にするからな。』

天照「はっ! はい!」

『ならいい、通路は掃除しておいた。殺した奴らも復活してるはずだ。二日後全員連れて来い。以上だ。 : 騒いですまなかつたな。龍華も連れてきてくれ。じゃあな。』

龍一兄様は去っていった。

天照「こ、怖かったー」

「天照、反省しましたか？」

天照「はい、須佐之男にも迷惑かけたわね。ごめんなさいね。」

・・・本当、嵐のような人だ。

s i d e o u t

次回へ続く

第十七話 決着・宴会

side 龍一

あいつ等も根は真面目何だがな・・・まあ、他人を見下してたからな。それはそれ、これはこれだ。ともかく、諏訪大戦に戻せそうだな。龍神が大和の国荒らすとか笑えん話だ。後で消してもらおう。真実は闇の中へ・・・ツインバスターライフル使えなかったぜ。畜生。

『着いた着いた。ただいまー。諏訪子、侵二、壊夢、風魔、幻夜。』

諏訪子「龍一！本当に帰ってきたんだね！」

『当たり前だ。それよりも、決闘、二日後な。』

諏訪子「わ、分かったよ。」

『大丈夫だ。相手がイカサマや規則破ったら更地にするから。』

諏訪子「ちよつと龍一が言うことやりそうだから止めてよ！」

侵二「・・・大和の方は？」

『聞きたいか？』

侵二「結構です。」

『ちつ、そんなことよりも、決闘の後、宴会するぞ。』

諏訪子「え？この国は？」

『そんな簡単に信仰が移ってたまるか。自分の行いを省みろ。不安か?』

諏訪子「ううん、みんな、私のことを慕ってくれた。きっと最後まで信じてくれる。」

『ならいいんだ。きっと応えてくれるさ。』

諏訪子「そうだよね!ありがとう。龍一!」

諏訪子の不安もなくなったし、後の問題は・・・龍華か。こいつだけはどうしようもない。

まあ、寝て待つか。

・・・二日後・・・

『はいはい、いらっしやいませ、大和の皆様。』

数名を除いて引きつってる、ワロス。

龍華「お兄ちゃん!!」

『龍華!』

龍華「今度は何やったの?」

『何だ、その犯罪みたいな言い回し。ただohanasshiしただけだ。』

龍華 「それで、大和壊滅状態に？」

『あれだけ人を見下すなど言ったのにしてたからな。反省もしていないし、後悔もしていない。』

龍華 「お兄ちゃんらしいや。それより！決闘の事なんだけどね。」

『ああ、誰が諏訪子の相手をするんだ？イカサマすると（ry）』

龍華 「大丈夫。神奈子！来て!!」

??? 「はっ！何ですか？龍華様。」

龍華 「様付けはやめてって。あ、お兄ちゃん、紹介するね。うちの、軍神の八坂神奈子（やさかかなこ）だよ。この子が諏訪子ちゃんと相手するよ。神奈子、この人がお兄ちゃんの神矢龍一だよ。」

神奈子 「は、初めまして。八坂神奈子です。お会いできてきよ、恐縮です。」

『そう硬くなるな。神矢龍一だ。大和の軍と本国荒らしたのも俺だ。すまなかつたな。』

神奈子 「い、いえいえ、謝るのはこちらです。私の管理不足でした！」

龍華 「ほらほら、硬くならない。」

『あ、そうだ。こっちも紹介する奴がいるんだ。侵二、壊夢、風魔、幻夜!』

侵二「呼びました？おや？貴女は・・・龍華様ですか？」

壊夢「主の妹さんだったぜよか？」

風魔「そちらの方も、かなりの神とお見受けいたします。」

幻夜「うん、ピリピリするね〜」

龍華「この人達は？」

『俺の式神であり、友人。最初の群壊滅させたのも俺ら。』

侵二「初めまして、侵二と申します。」

壊夢「初めましてぜよ、俺は壊夢ぜよ。」

風魔「初めまして、私は風魔だ。」

幻夜「初めまして〜僕は幻夜だよ〜」

神奈子「龍一殿、この妖怪の種族は？かなりの強さですが。」

『おや、分かるか。』

侵二「私が饕餮で、」

壊夢「俺が燒骨で、」

風魔「私が窮奇で、」

幻夜「僕が混沌だよ〜あ、マスター、諏訪子連れてきたよ〜」

『以上だ。ついでに幻夜、ご苦労さん。』

諏訪子「龍華様、初めまして、私は洩矢諏訪子です。」

龍華「貴女ね。今回の国の指導者。」

諏訪子「はい。」

龍華「今回は宜しくね。」

神奈子「初めまして、今回相手する八坂神奈子だ。よろしく。」

諏訪子「洩矢諏訪子。よろしく。」

『よし、じゃあ準備するか。』

『不殺結界（ふさつけっかい）』

龍華「これは?。」

『ここで死ぬと結界から出される。この中では死なない結界だ。これで本気でやれるだろ?。』

龍華「お兄ちゃん、更に強くなってない?。」

『多分強くなった。』

須佐之男「龍華様! 兄上!。」

『おつ、須佐之男、嫁連れか?』

クシナダ「お久しぶりです。あの時は亭主がお世話に……」

『気にしなくて結構。』

月読命「兄さん。」

天照「兄上。」

『お前らも来たか。……天照、頭冷めたか?』

天照「はい、兄上、ごめんなさい!」

『わかればよろしい。』

俺は天照の頭を撫でる。

天照「ちよ、ちよつと兄上!」

龍華「ずるい!私も!」

『はいはい。』

龍華「ああく久しぶり〜」

『まあ、立ち話も何だ。その辺に座りな。ほら、お前らも、引きつってないで適當なところに座れ。』

諏訪子「じゃあ、また後で。」

神奈子「龍一殿、後ほど。」

『頑張れよう?』

さて、観戦しますか。

side out

side 諏訪子

「神奈子だっけ? 堅苦しいの嫌いだからこれで話すね。」

神奈子「ああ、構わないさ。私も普通にするよ。」

「じゃあ、正々堂々、」

「勝負!」

l d
b g m 神さびた古戦場
S u w a F o u g h t e n F i e

私は、侵二に不意打ちの指導をしてもらった。何故か?・・・私は、他の神より背が低い。だから力では負けることが多い。なので、奇襲を教えてもらった。

「はあっ!」

地面を盛り上げる。勿論、当てるつもりはない。

神奈子「ふんっ!」

神奈子は、柱みたいなもので地面を壊す。ガンキャノンだっけ？龍一が似たようなものを出してた。

まあ、場はオツケイ。砂煙と共に、音をたてずに後ろから鉄の輪を投げる。

神奈子「!?くっ!」

惜しい、外しちゃった。これはまずいかも。

神奈子「危ない危ない、でも、次はないよ。」

うん、これは負けたね。

side out

side 龍一

龍華「お兄ちゃん、どっちが勝つと思う?」

『神奈子。』

須佐之男「即答ですね。何故ですか?」

『経験の差だ。侵二、何教えた?』

侵二「絶影流不意打ち術」

『おい、なんて物教えてやる。』

侵二「教えましたが、最初の一撃だけです。」

『うん、諏訪子の負けだ。』

月読命「その不意打ち術とは？」

『種族関係無く確実にダメージを与える技。覚えるのに数年かかる。』

天照「名前からしてまずいんですが。」

『おっと、勝負終わったぞ。』

諏訪子「負けちゃったよ。」

『一撃は与えられたか？』

諏訪子「うん、倒せなかったけどね。」

神奈子「危なかったよ。もう少しでやられかけたよ。」

『侵二、上等だ。』

侵二「諏訪子殿、お疲れ様です。」

神奈子「では、信仰は頂くぞ。」

『ところがギッチョン!!皆様、右をご覧下さい、森!...いけね間違った、左をご覧下さい、』

諏訪の民1「俺たちが信仰するのは諏訪子様だけだ!」

「「そうだ!!」」

『と言うわけだあ。』

龍華 「じゃあ、この勝負は……」

『無駄アーではない。諏訪子は負けた。だから、形式はそのまま、裏のみ変える。新しい神を立てて、諏訪子が表、神奈子が裏の支配者になる。どうだ?』

龍華 「いいと思うよ?」

須佐之男 「どこからその発想を?」

『内緒だ。それより!宴会するぞてめえら!!』

四凶 「よっしやあ!!」

壊夢 「俺特製の酒ぜよ!飲め!」

侵二 「さあ、腕を奮いますよ!」

縁 「私も手伝います!」

風魔 「私も手伝おう。」

幻夜 「じゃあ、僕はマジックでもしてるね」

『騒げ!飲め!無礼講じゃあ!』

須佐之男 「兄上、どうぞ。」

『あ、悪いな。ほら、お前も飲め。』

須佐之男「では、頂きます。・・・美味しいですが、強くないですか?」

『壊夢?この酒の度数は?』

壊夢「九十八パーセントぜよ。」

『無茶苦茶じゃねえか!見ろ!もう酔ってる奴出たじゃねえか!』

龍華「お兄ちゃんが二人に見えるく」

天照「兄上く」

駄目だこりや。被害者続出。

月読命「兄さん、生きてたんですね。」

『ああ、あれは死ぬかと思ったがな。生きてたよ。』

月読命「依姫達、鏡一を超える!って努力してますよ。」

『そうか・・・』

月読命「兄さん、・・・戻っては来ないんですか?」

『・・・戻らない。関わるかもしれないが、住むことはもうないと思う。』

月読命「そうですねか・・・依姫達には黙っておきますね。」

『悪いな。手間をかけさせて。』

そう、俺は戻らない。いや、戻れない。依姫達が頑張っているんだ。今更生きてたなんて言えないさ。・・・また、会えるとは思うがね。

諏訪子「何の話だい？龍一く」

神奈子「ちよつとクラクラするぞ・・・」

お前らもか、雰囲気壊しやがって。

『しんどいなら早く寝ろ。体に悪いぞ。』

神奈子「ああ、そうさせてもらうよ・・・」

諏訪子「またねく」

そうして、宴会は夜まで続いた。今起きているのは、俺、月読命、須佐之男、侵二、壊夢、風魔、幻夜だ。

『さて、じゃあ、ここからお暇するか。』

月読命「別れはいいので？」

『いらん、なら、伝言頼む。』

月読命「またですか・・・内容は？」

『またな。これだけでいい。須佐之男、月読命、あばよ。』

須佐之男「お気をつけて。」

月読命「たまには来てくださいね。」

俺たちは、諏訪の国を後にする。

『さあ、次はどこに行こうか。』

また、新しい波乱を探して。

次回へ続く

第六章 日本大旅行

第十八話 欲望って何だっけ

side 絶影

どうも、皆様、前回諏訪の国を飛び去った絶影です。え？龍一はつて？いや、前から数千年経ってしまって、まあ、今は飛鳥時代です。で、今聖徳太子の居る町？村？に居ます。・・・流石にすぐに面会はな？で、妖怪退治を裏で少々証拠を残してやっています。そろそろ気づくかな？

侵二「気づくと思いますよっ。」

『まあ、そうだといいがな。』

side out

side ???

??? 「太子様！また妖怪が減っております！」

??? 「またか・・・どうします？太子様？」

私は豊聡耳 神子（とよさとみみのみこ）今話している二人は物部布都（もののべふと）と、蘇我 屠自古（そがのとじこ）。二人ともよく私のために働いてくれている。

「では、屠自古に妖怪を減らした犯人を探してもらいます。そして、連れてきていただけますか？」

布都「我はどうすれば?」

「布都には私の手伝いをしてもらいます。」

布都「分かりました! 太子様!」

「屠自古も、お願いしますね。」

屠自古「分かりました。では、行ってきます。」

誰がやったのでしょうか? 詳しく調べないと・・・

side out

side 絶影

俺たちは、今、団子屋にいる。こここの店主の娘さんが攫われたのを助けたのが原因。

店主「あ! 旦那、また来てくれたんですかい。」

『ああ、今日もいつものもらえるか?』

店主「あいよ!」

娘「どうぞ。」

侵二「ありがとうございます。」

壊夢「頂くぜよ。」

風魔「やっぱり旨いな。」

幻夜「美味しいね〜」

屠自古「そこの方、ちよつといいか？」

『ん？何だ？』

屠自古「最近、この辺で妖怪が減っている。何か知らないか？」

『いや、特に、』

ここで言うのと怪しまれる。俺は茶を口に含む。

屠自古「話によると、五人組でだそうだが。」

茶を吹いた。こいつ絶対気付いてるだろ！

店主「旦那、俺の娘を妖怪から助けてくれたじゃないですか。」

屠自古「ほう、どうやら、貴方たちらしいな。」

『ゲホツゲホツ、・・・何の用だ？』

屠自古「太子様・・・聖徳太子様が、貴方たちを連れてきてほしいと言っけていてな。来てもらえるか？」

『まあ、いいが・・・お前らー！集合ー！』

侵二「聞こえてますよ。」

壊夢 「何ぜよ?」

風魔 「何だ?」

幻夜 「何く?」

『太子殿とやらが、お呼びだそうだ。行くぞ。店主、これ代金な。また来る。』

屠自古 「では、案内する。こちらだ。」

・・・人間十化け物一団移動中・・・

屠自古 「太子様、連れてきました。」

神子 「ありがとうございます。わざわざ来ていただいてありがとうございます。ありがとうございます。」

『いえいえ、では、名乗らせて頂きます。絶影です。』

女性がひっくり返る。

神子 「ぜ、絶影!」

『続けますね、』

侵二 「侵二です。」

壊夢 「壊夢ぜよ。」

風魔「風魔だ。」

幻夜「幻夜です〜」

神子「冗談ですよね？」

『いや、本気で。』

神子「なら、欲を見させてもらいます。」

侵二（ここを詳しく見てみたいですね。）

壊夢（酒が飲みたいぜよ。）

風魔（ここに刀はないのか？）

幻夜（団子食べたいな〜）

神子「フリーダムすぎる。絶影さんは……」

絶影（無欲）

神子「何なんですか？無欲って。見たことがないんですが……」

『いや、そう言われてもな、認めてもらえるか？』

神子「認めるしかないでしょう。で、何故妖怪退治を？」

一同「気分」

神子「……………」

『で、貴女は？』

神子「し、失礼しました。私は豊聡耳 神子です。」

屠自古「私は蘇我 屠自古です。」

神子「もう一人いるのですが・・・布都ー！」

布都「何ですか？神子様って何奴！」

よし、ふざけるか。

『フハハハハ、私は侵入者だ。』

布都「神子様！侵入者ですぞ！」

屠自古「・・・布都、侵入者が名乗るわけないだろう。」

布都「はっ！では、そちらの方々は？」

神子「妖怪退治をしていた絶影さん達です。」

布都「おお！そうでしたか！我は物部布都だ。」

自己紹介省略

『でだ。何で呼んだ？』

神子「お礼がしたかったのです。」

『ああ、そうでしたか。じゃあ失礼する。また来ても?』

神子「ええ、どうぞ。」

『では、・・・帰るぞ。観光はまた今度安定してからだ。』

四凶「了解」

俺たちは飛び去った。

次回へ続く

第十九話 神様ってすげー（種族言ってみろ）

side 絶影

あれ以来、神子達の所には、ほぼ毎日押しかけゲフンゲフン立ち寄っている

途中、料理を作ることになって、侵二と俺の料理が大好評だったのをきっかけに、時々三人の料理を作っている。

・・・それでいいのか御三方。

神子「いいんですよ。美味しいですし。」

屠自古「私も、これは悔しいよりも凄いなと思うな。」

布都「我もじゃ。特にぷりんとやらがうまかったぞ。」

おい、誰だこの時代にプリン流した奴。

侵二「主上は謎の食べ物をよく作りますよね。」

・・・俺だった。

他にも、幻夜がマジック見せたり、壊夢の酒飲んで三人が倒れたり、騒がしい。

??? 「神子様、お久しぶりです。あら？そちらの方々は？」

神子「青蛾、久しぶりですね。紹介します。絶影さん、この人は、霍

青蛾（かく せいが）です。青蛾、この人は絶影さんです。」

青蛾「ぜ、絶影!？」

なんかデジヤヴ。

『知ってんの？俺のこと。』

青蛾「ええ、伝承では、〔大昔から存在する妖怪で、実体は無く、影である〕と、書かれていました。」

『ちよつと誇張されすぎだな。』

青蛾「しかし、私達の国の四凶を倒したとも言われています。」

侵二「あ、私たちですね。」

青蛾「ええ!?!あとは、神かもしれないとの噂が……」

『正解。』

神子「ちよつと待ってください！絶影さんは有名な妖怪で、しかも侵二さん達は四凶で、正体は神様なんですか!？」

『うん、そんな感じ。ちなみに本当の種族は龍神な。』

青蛾「??龍神様は神界にいるのでは?。」

『俺はその兄、神矢龍一、事実上の地球創成者。まあ、今は唯の自由神、龍一さんだ、最も、今は絶影だが。』

神子「凄い人だったのですね・・・こんな人に料理を・・・」

『あ、気にしないでよ？今は唯の妖怪だし、』

青蛾「コホン、話を戻しますね。・・・神子様、どうします？仙人になりますか？」

神子「・・・」

『神子、お前はどうしたい？』

神子「私は、もっと長生きして、多くの人を救いたいです。」

『なら、なれば？』

神子「でも、あの二人を置いていくのは・・・」

『なら、二人に聞けば？・・・幻夜、』

幻夜「はい。連れてきたよ」

布都「聞きましたぞ！太子様！」

屠自古「盗み聞きして申し訳ありません。でも、一人で悩まないで下さい。」

布都「屠自古の言うとおりですぞ！我はどこまでもお供しますぞ！」

屠自古「私もです。どこまでもお供しますよ。」

神子「屠自古・・・布都・・・ありがとうございます。」

青蛾「では、どうします?」

神子「やります。お願いします。」

青蛾「では、この薬を・・・」

『ストップ、それはアカン』

青蛾「何故ですか?これは仙薬ですが・・・」

『じゃあ、俺が食ってみるぞ。』

俺は仙薬(水銀)を口に入れる。まずい。(よい子も悪い子も絶対に真似しないように!!)

『ゴハッ!』

神子「ちよっと!絶影さん!」

『と、いうように、確実に死ぬ。』

青蛾「生きてた!?!」

『ともかく、その薬の方法は危険だ。やめとけ。死んだ奴大量にいるぞ。・・・ごく稀に成功するが。』

神子「では、どうすれば?」

『俺は方法は知らん。だが、薬の毒は抜き取れる。これで大丈夫か

？青蛾。』

青蛾「ええ、大丈夫だと思うわ。お願いします。」

『了解、じゃあ、ほいっと。』

青蛾「もうですか？」

『ああ、過程を二三箇所省略したからな。』

神子「そんな常識外れのことできるわけが・・・」

『俺は龍神だ、理屈を求めるなど不可能。』

青蛾「神って凄いのね・・・」

『俺だけだな！』

青蛾「ともかく、これを飲むと、数か月深い眠りにつきます。どうぞ。」

神子「行きます！」

布都「我也！」

屠自古「私も！」

『俺も！』

青蛾「ちよつと絶影さん！何やってるんですか！」

『気分』

侵二「青蛾さん、私たちは気分で動いています。だから、突っ込むだけ無駄ですよ。」

神子「あれ？少しも眠くありませんよ？」

『あ、効果まで一日掛かるぞ。毒のせいで寝込むようなもんだし。』

青蛾「そう言えば、侵二さんでしたっけ？絶影さんを主上って……」

侵二「ああ、私たちは、龍一殿の式神なので。」

壊夢「種族は俺が焼骨で、名前は壊夢ぜよ。」

風魔「私は窮奇で、名前は風魔だ。」

幻夜「僕は混沌で、名前は幻夜だよ」

侵二「私は饕餮で、名前は侵二です。」

青蛾「式神!?まだ成功した者がいないというあの!？」

『マジで?数分ですんだけどな。』

青蛾「本当に神様って何なんですか……」

『何回も言うが俺だけだからな。』

侵二「まあ、それは置いておいて、宴会、するんでしょっ?」

『逆にしないと思うか?』

侵二「いえ、全く。」

『つまりそういうことだ。準備開始!!』

神子「え?..ちよっと?..」

侵二「さあ、神子さん、布都さん、屠自古さん、青蛾さん、少々お待ちを。」

壊夢「酒はどうするぜよ?..」

『度数の一番低い奴を。風魔、幻夜、お前らは食器やらを並べてくれ。』

風魔「もう終わっているが。」

幻夜「こつちも終わったよ。」

侵二「主上!..デザートはどうします?..」

『ダンダリオンで保存した奴を。今は寿司でいいか?』

侵二「了解!..」

俺は魚を取り出して投げる。侵二はそれを翼で器用に三枚におろす。

『ナイス!..行くぞ!..』

それを俺が細かく切る。通称、【踊る高速クッキング】

肉眼では捉えられないスピードで作業する。

神子「」

布都「な、何じゃあれは？」

屠自古「もう料理じゃねえな。」

青蛾「しかも丁寧・・・」

『へいお待ち！』

侵二「これくらいでいいんですか？」

『そんな大宴会じゃねえしな。これでいいだろ。』

並んだのは十人前程の寿司。

『デザートは後で出す。』

侵二「全ての準備完了しました。」

『では、乾杯！』

布都「うまい！太子様、こんなうまい寿司は初めてですよ！」

屠自古「確かに、こんな寿司食べたことがなかったな。」

神子「美味しい！でも、こんなに作ってもらって・・・」

『気にしたら負けよ！気にしないで食いな！』

青蛾「このお酒は？」

壊夢「俺特製の酒ぜよ。度数も控えめぜよ。」

青蛾「美味しいわ。」

壊夢「なら、もっと飲むぜよ。」

布都「幻夜殿、まじつくをやってくれんか？」

幻夜「良いよ〜じゃあ、ここに何も無いよね〜　ここから・・・それ〜」

幻夜が手から花束を出す。・・・上手くね？

布都「おお！凄いな！」

屠自古「太子様、一緒に見ましょう！」

神子「ええ、・・・絶影さん、いや、龍一さんありがとう〜ございまして。」

『案外、仙人になっても会えるかもよ？』

神子「そうですね！では！」

それから数時間後、神子達は静かに眠った。

『寝たか・・・青蛾、後は頼んだ。』

青蛾「ええ、分かりましたわ。」

『じゃあな、また会おうや。』

青蛾「ふふ、では。」

後日、神子達は病気で療養中と言われるようになった。

『じゃあな、神子、布都、屠自古、青蛾、また会える日を。』

その後、俺たちは再び旅に出た。

新しい波乱を求めて。

さあ、次はどうしようか。

次回へ続く

第二十話 人と妖怪の共存

side 絶影

神子達が眠ってから数百年今は平安時代。え？奈良時代はって？
・・・暇だったんだ、何もなかったよ。

で、今、暇なので楽器を侵二達に教えてます。

曲は色々、最終的には何でも演奏できるように。目指せ楽団。

侵二「で、村を巡りながら演奏して旅の途中なんですよね。」

そうそう、・・・ってオイ！何で心読んでる！

侵二「少し前に主上が『意思疎通出来ればよくね？』って言った
じゃないですか。主上の意思で変更できるようなものを。」

あ、そうだった。じゃあ、切るぞ。

侵二「で？…どうするんです？..」

『そんなんだよな。どうしようか。ん？..』

風魔「どうした？..主上。」

『戦闘準備。来るまで五秒前。』

侵二「了解。」

風魔「了解。」

今ここにいるのはこの二人。後の二人は散歩中。お、今見えた。

『来たか。』

俺の目の前と後ろの空間から妖力弾が飛んでくる。

『まあ、知ってたけどね。』

避けて謎の空間から引きずり出す。

??? 「きゃっ!」

風魔 「女性か?」

侵二 「どちらにしろ関係ないですが。」

『おい、いきなり何だ?』

??? 「私は八雲紫（やくもゆかり）、先程は失礼しましたわ。」

侵二 「それで済むとでも?」

風魔 「何が失礼しましたわ、だ。」

風魔と侵二が妖力を一割出す。

紫 「っ!」

『止めろお前ら。で?何の用だ?』

紫「私は、人と妖怪が共存できる世界を目指しています。」

侵二「無茶ですね。」

風魔「無理だな。」

壊夢「無理ぜよね。」

幻夜「無理そうだね〜」

『面白いこと考えるな。』

紫「しかし、人間と妖怪が仲良くできたら素晴らしいと思いません？」

『まあ、そんな面白いこと考える奴がいてもいいと思うぜ？』

紫「本当ですか？」

『嘘つくかい。で？用は？』

紫「私の式になって手助けしてほしいと思ひまして……」

『へえ……』

侵二達に疎通で意思を伝える。

『別にいいが……飼いならせるか？この俺、絶影を。』

妖力を一割出す。普通の奴なら卒倒するが、紫は立っている。冷や汗大量に流して。

紫「なっ・・・無理そうですね。他を当たりますわ。」

『まあ待て、式にはならんと言ったが、協力しないとは言っていないぞ？』

紫「ではー。」

『俺は協力する。友達としてな。お前らは？』

侵二「・・・どうせ私達共存してますし。」

風魔「することもないし。」

壊夢「戦えそうぜよし。」

幻夜「楽しそうだしいいんじゃない？」

『決まりだな。じゃあ、協力する。が、あんたについて詳しく教える。俺達も教える。』

紫「分かりましたわ。では、私は八雲紫です。種族はスキマ妖怪、一人だけの種族です。」

『ほい、俺は絶影。知ってるだろうから省略。後、胡散臭い態度と敬語はいらん。』

紫「貴方がこんなに軽い妖怪だとは思わなかったわ。」

『うるせえ、威厳とかめんどくさいだけだ。強けりゃいいんだ。強けりゃ。』

侵二「私は侵二、饕餮です。ご存じですか？」

紫「あの中国の？」

侵二「そうですね。主上……絶影の式神です。」

風魔「次は私だ。私は風魔、窮奇だ。同じく主上の式だ。」

壊夢「俺は壊夢ぜよ。橈杙ぜよ。主の式ぜよ。」

幻夜「僕は幻夜、混沌で、マスターの式だよ」

『ざっとこんなもんだ。で？俺らは何をすれば？』

紫「もう場所をとっているの、後は住民のみななの。だから……」

『住民候補を探せと。何でも良いか？』

紫「ええ、どんな種族でもいいわ。お願いね。」

『了解。ああ、注意事項があつてな。俺についてだが……』

紫「何かしら？」

『俺は龍神だ。』

紫「は？りゆ、龍神!？」

『ああ、本名は神矢龍一だ。後、人によっては名前が違うぞ。俺は。』

紫「りゅ、龍……様。」

『様付けは無し。』

紫「分かったわ。じゃあ、宜しくね。絶影。」

『その名前でか。おうよ、よろしくな。』

紫「じゃあ、早速行ってもらいたい所があるんだけど……」

『どこだ?』

紫「妖怪の山よ。その天狗と鬼が争っているの。だから……」

『両方誘おうか?』

紫「できるの?片方だけでいいんだけど……」

『いや、いける。知り合いもたぶんいるし。』

壊夢「前に言っていた鬼子母神ぜよか?」

『その通り。お前とはすぐ気が合うと思うぞ。』

紫「案内するわ。貴方たちの力を見せてもらいたいし。」

『いいけど、無理すんなよ?まだ若い女の子なんだから。』

紫「そ、そんなこと初めて言われたわ。」

侵二「(出ましたね、主上の無自覚女性落とし。)」

風魔「(またか・・・)」

幻夜「(これで何人目だっけ?)」

壊夢「(明らかに百人は超えてるぜよね。)」

何か聞こえたが気にしない。紫も顔赤いし。

紫「(かつこいい・・・)」

『紫、早く行くぞ。』

紫「う、うん、こっちよ。ところで、どうするつもり?」

『戦争、行くぞお前ら!』

四凶「おう!!」

紫「え?まさか、参加する気?どっちに?」

『天狗、明らかに不利だしな。別に第三勢力でもいいが?』

紫「それだけはやめて。」

『なら、天狗だ。絶影で通れるだろ。』

紫「いや、まあ、知らない妖怪居ないわよ?」

『絶影は神だった真実は話すなよ?』

紫「分かったわ。」

『よし、じゃあ、第三者が驚く展開にしようぜ!』

侵二「了解。」

風魔「天狗か、風を操るのだったか、・・・楽しみだ。」

壊夢「鬼ぜよか。ぜひ戦いたいぜよ。」

幻夜「今回は気が乗らないなく後方支援でいい?」

紫「自由ね、貴方たち。」

『気にすんな。』

さあ、ショータイムだ。

次回へ続く

第二十一話 ナヤミゴト

side 絶影

ついに妖怪の山に到着。さあ、暴れるぞ。

天狗1 「待て！ここは妖怪の山だ。今すぐ立ち去れ！」

『まあ、待て、俺らはあんた等と鬼の戦争を止めに来たんだ。』

天狗1 「黙れ！立ち去らぬならここで切る！」

聞く気なしと、ついつい吹き飛ばしたくなるがこらえる。・・・壊
夢、闘争心丸出しじゃねえか。落ち着け。

風魔 「私は天狗だが・・・入っていいか？」

天狗1 「失礼いたした、さき、どうぞ。」

風魔 「(すぐに誤解を解いてくる、待っていてくれ。)」

『(頼んだ。)』

風魔が天狗と共通点があるので怪しまれず入る。後は待っただけだ。

『頼んだぞ？風魔。』

side out

side 風魔

私は一人で妖怪の山を登る。

「すまん、ちよつと聞いていいか？」

天狗2「はっ！何でしょうか？」

「実は旅の天狗でな・・・この最高責任者は誰だ？」

天狗2「この最高責任者は天魔様です。ここをまつすぐ行けば付きます。」

「それはありがたい。しかし、何故敬語なんだ？」

天狗2「貴方様から凄まじい妖力を感じますので。かなりの強さだと思われますので。」

なるほど、ここでは強さ＝階級か。

「ところで、天魔殿は名前か？」

天狗2「いいえ、階級です。本名は風切 伊織（かざきりいおり）様です。くれぐれも失礼のないようお願いします。」

「色々ありがとうございます。では、失礼する。」

・・・窮奇移動中・・・

ここか。入るか。

side out

side 伊織

まずい、鬼がかなりの速さで攻め込んで来ている。このままでは、やられてしまう。

??? 「失礼する。」

誰ですかね？こんな時に。

「どうぞ。入って下さい。」

??? 「では・・・」

その声の主が入ってきた。瞬間、呼吸が止まった。カッコいい、それが第一印象だった。顔が赤くなり、心臓の動機が速くなるのが分かる。

「どちら様ですか？」

??? 「旅の天狗、風魔と申します。以後、お見知りおきを。」

風魔さんが微笑む。とたんに私の顔が更に赤くなる。

「わ、私は風切伊織です。天魔と呼ばれています。は、初めまして。」

今まで千年以上生きてきたが、こんなに話していて慌てたのは初めてだ。ああ、これが一目惚れだとなんとなく感じる私だった。

side out

伊織殿の第一印象は可愛いだった。こんな時に何を言い出すのかと思われるが、少し興味が沸いた。……ってこんなことを言っている場合ではない!!

「済まぬが要件を急いで伝える。鬼の件だ。」

伊織「!!その件は……」

「私達が援護する。が、他五名が天狗でなくてな……足止めを食らっているのだ。どうにか出来ないだろうか？」

伊織「特別に許可します。案内してください。」

悪いが案内する暇がない、壊夢が暴れだしてしまう。

「悪いー!」

私は伊織を抱える。

伊織「え?ちよ、ちよつと風魔さん？」

嫌がっているだろうな。……仕方あるまい!

「嫌だろうが我慢してくれ!急ぐぞー!」

伊織「べ、別に嫌ではってきやああ!」

私は最高速で飛ぶ。風圧は能力でなくす。……見えた。よかった。壊夢は暴れていないようだ。そのまま私は地上に降りる。

「着いたぞ。すまなかつたな。」

伊織「い、いえ！別に・・・（うれしかったですし）」

何か言っていたようだが聞こえない。

伊織「それより！貴方たちの入山を許可します。」

天狗1「天魔様！よろしいので？」

伊織「構いません。風魔さんのご友人だそうです。引き続き巡回を頼みます。」

天狗1「分かりました！」

伊織「さあ、此方に。」

途中、主上が話しかけてくる。

『彼女は？』

「最高責任者の風切伊織、天魔と言う階級らしい。」

『随分と伊織はお前に気があるようだが・・・』

まさか、もしそうだったらうれしいものだ。

「そうだといいがな・・・」

『（コイツ、気づいてねえな。ひどい奴だ。）↑ブーメラン発言』

伊織「着きました。此方でお話を・・・」

『了解しました。失礼します。』

「失礼する。」

伊織「では、お名前を聞いていいですか？」

『俺は絶影、影妖怪だ。』

伊織「絶影!? あ、あの伝説の?」

この光景を見るのも慣れたものだ。

『次、』

侵二「私は侵二、饕餮です。」

壊夢「俺は壊夢、橈杙ぜよ。」

幻夜「僕は幻夜、混沌だよ」

紫「私は八雲紫、スキマ妖怪ですわ。」

伊織「と、いうことは風魔さんの種族も・・・」

はあ、ばれてしまったか。しょうがない。

「ああ、窮奇だ。」

伊織「ま、まあ、気にしません。それより鬼の件ですが・・・」

おや？驚かれない？嬉しいものだ。大体は驚いて距離を取るのに。

『ああ、それなんだが、鬼の首領は？』

伊織「鬼子母神です。」

『だとよ、壊夢。』

壊夢「楽しみぜよねえ。」

伊織「後は鬼の軍勢が六百程・・・」

「問題ない、だろう？主上。」

『ああ、問題は誰が行くかだ。』

「私に行かせてくれ。同じような種族だ。他の天狗も嫌がらないだろう。」

『本心は？』

「分かっているだろう？」

『いいぜ。侵二、幻夜、お前らは？』

侵二「いいですよ。」

幻夜「良いよ〜二人の邪魔はしたくないしね〜」

「げ、幻夜、貴様！」

幻夜「あ、ごめん。」

伊織「え、ええ？」

何てことしてくれた。くそつたれ。こうなればやけくそだ。

「伊織！」

伊織「は、はいっ！」

「お前は私が守る。いいな？」

伊織「そ、それって……」

「嫌か？」

伊織「い、いえ！むしろ嬉しいで……あ、」

「今のは？」

伊織「ち、違っ、これは……その……」

幻夜「ん〜？」

ええい、ニヤニヤするな！幻夜！ああもう！

「なら、私が守る。この戦が終わるまでな！拒否権は無しだ！」

伊織「はいっ！お願いしますー！」

とりあえず、幻夜は一発殴っておいた。

side out

side 絶影

あれから数時間後、風魔が俺に話しかけに来た。

風魔「主上、私はどうすればいいのだ？」

『守りたい奴が出来たんだろ？なら、守れ。たとえどんな奴が来ても。』

風魔「では、主上とは？」

『馬鹿、それは自分で決めろ。俺、最初に言っただろ？好きにしろって。』

風魔「分かった。私は、伊織を守る。だが、主上の式でもある。だから……」

『だから？』

風魔「困ったときは呼んでくれ。私はいつまでも主上の式だ。」

『……ああ、なら、約束だ。もし俺が死んでも、お前等は死なない。だから、幸せにしてやれ。お前が死ぬまでな。』

風魔「……御意」

風魔が立ち去る。あいつは義理堅いからな・・・

壊夢「主・・・」

『ん？何だ？壊夢。』

壊夢「もし、俺に守りたい奴ができてても。俺もずっと主の式ぜよ。」

『・・・泣かせにくんじゃねえよ。お前も守りたい奴が出来たら守れよ。最後までな。』

壊夢「勿論ぜよ。」

壊夢も立ち去る。

紫「何で絶影はそこまでするの？」

紫か・・・

『俺は昔、守りたい奴らを守って、死んだことになっている所がある。だが・・・最後まで、とは行かなかった。多分、これからもそうだな。だからこそ、あいつ等には同じような道を選んでほしくないからだな。』

紫「そう・・・ねえ、絶影、」

『ん？』

紫「貴方の事、師匠って呼んでいい？」

『何でだ？』

紫「私が目指す世界、それを絶影は一人だけでもやっているから……」

『俺は当たり前前の事をしたただけだ。この世は弱肉強食、でもな、たまには救世主がいてもいいと思うんだ。だからこそ、気分で弱者を助けた。これからもだ。』

紫「で、師匠って呼んでいい？」

『……良いぞ。いつ辞めてもいいぞ。修行もやりたければ言いな。ちよつとぐらいなら手助けできるからな……』

紫「ありがとう。師匠。じゃあ、また明日。」

もう夕暮れだ。紫も立ち去る。

『……で、いつまで見てる？ 幻夜、侵二。』

侵二「ばれてましたか。」

幻夜「あちゃー」

『バレバレだ。』

侵二「主上って時々未来のことが分かるみたいですね。」

こいつ等には話そうかな……

幻夜「もしかしてこの世界の人間じゃなかったりしてね？」

『そうだとしたらっ?』

侵二「別に?なんとも。」

幻夜「気にする必要がないね。」

俺は、神界の龍源の事を話した。

侵二「だから何ですか?主上は主上でしょう?」

幻夜「そうそう、別に気持ち悪くないよ。」

侵二十幻夜「友人でしょう? (友人でしょう?)」

俺の胸のつかえがとれた気がした。

『ああ、そうだよな。そうだよな!』

悩んでいるのが馬鹿らしい。そうだ!俺は神矢龍一、この世界の住民だ!

『あーあ、悩んでたのが阿呆らしいわ。』

侵二「それでこそ主上でしょう。」

幻夜「そうそう、早く寝に行こう?」

昔、龍源に言った言葉、俺が実践できてねえじゃん。だが・・・もう、悩まない。止まらない。突き進む。

この命尽きるまで。

さあ、明日が楽しみだ。

次回へ続く

第二十二話 神速と剛力

side 絶影

日が明けた朝、俺たちは天狗達に指示を出す。正確には風魔がだが。

風魔「というわけで、壊夢、先陣は任せる。主上、侵二、幻夜、紫殿は後方支援、怪我人の治療を頼む。」

壊夢「任せるぜよ！」

『俺らも異論は無しだ。どうだ？天狗の方々？』

伊織「私は構いません。風魔さんを信じます。」

風魔「伊織殿……」

天狗3「我らも信じますぞ！なあ！皆。」

天狗達「我ら一同、風魔様に従います！」

風魔「では、行動に移ってくれ。」

伊織と俺達を残して移動する。

風魔「では、主上も。」

『了解した。絶対に守れよ？』

風魔 「ふっ、言われなくとも守りますよ。」

『そうだな。じゃあ、俺らも動く。また後でな。』

さて、邪魔者は下がりますか。

side out

side 風魔

伊織 「大丈夫ですよ？風魔さん。」

「大丈夫だろう。むしろ鬼が心配だ。」

伊織 「違います。風魔さんですよ。」

「何を言う。こう見えて長生きだぞ？」

伊織 「私よりも？」

「ああ、私からすれば伊織もまだまだ若いさ。」

伊織 「こんなに話せる人は初めてです……」

私は決心した。言おう。

「伊織、話がある。もし私でよければ……」

『(風魔！会話中悪いが来たぞ！)』

伊織 「何ですか？風魔さん。」

「・・・悪いが後だ。来たぞ！」

見えるのは鬼の大群。伊織も流石にひるむ。

伊織「こ、こんなに・・・」

ざっと三百程か？・・・どうやらまずい奴が二名いるようだ。そこ
その妖怪だな。伊織よりも妖力が多い。

まあ、私には及ばないし、壊夢のいる方角だ、かわいそうに。

「さあ、来い。」

私は戦う、守るもののために。

bgm DOES バクチダンサー

sideout

side壊夢

「おお、絶景ぜよ。」

数は少ないぜよが、一体ずつの妖力が大きい。

さあ、四凶一の剛力、見せてやるぜよ。

鬼1「行くぞお前等！突撃だ！」

「悪いぜよが、通行止めぜよ。通りたければ俺を倒してからぜよ！」

鬼1「おもしれえ！行くぜえ！」

鬼の一匹が殴りかかってくる。

「遅いぜよー！」

遅すぎる！気絶する程度に抑えて蹴り飛ばす。

鬼達も驚いたようぜよな。

「さあ、次は誰ぜよ？」

鬼達は相談しているようぜよ。まどろっこしい。

「全員来いぜよー！」

鬼達「うおお!!!」

俺は主から教えられた技を試す。

「必殺！【ロケットキック】!!!」

鬼達が気絶する程度に吹き飛ばす。が、俺の速度は止まらない。

「この技は、飛び蹴りの後、後ろから気を放出し、速度をあげる技ぜよ。」

さあ、このまま本陣まで突入ぜよ！

side out

壊夢の方角の鬼が吹き飛ぶのが見える。・・・かわいそうに。

鬼2 「な、何じやありやあ！」

それもそうだ。何せ直線状の鬼が凄まじいスピードで吹き飛んでいるのだ。驚かない奴は主上と私達ぐらいだ。

伊織 「風魔さん！私達も！」

「分かった。行くぞ、伊織。」

伊織 「はいっ！」

鬼が大群で突撃してくる。伊織は風で吹き飛ばす。なら、私も！

「竜巻！」

ゴウツと音がなったとたんに鬼が打ち上げられる。これはひどい。もちろん、威力は弱めてある。

伊織 「風魔さん！次も来ました！」

「少し本気を出す、下がってくれ。」

伊織 「え？は、はい。」

伊織が下がる。よし、

「せいっ!!」

私は光の速さで飛び回りつつ、鬼達を気絶させる。

伊織「」

天狗達＋鬼達「」

何だ、あいつ等？顔が青いが・・・まあいい、つとまずい！

「伊織！後ろだ！」

伊織「え？きやつ！」

危ない危ない、危うく鬼の攻撃が伊織に当たりかけたし、攻撃した鬼を撲殺するところだった。

「伊織！大丈夫か？」

伊織「なんですかあの速さ!?!私でも見えませんでしたよ!?!」

「あれぐらい出せないのか？」

伊織「無茶言わないで下さい!!」

無理か・・・天狗なら出来ると思ったのにな・・・残念だ。

「まあ、此方はほぼ鬼は全滅した。後は壊夢のいる辺りだけだな。」

『風魔、守りきれたか？』

主上が来た。

「主上、怪我人の手当ては？」

『幻夜が回復術を覚えた。侵二も「怪我食べれますよね？」とか言うてな。全部終わった。』

ああ・・・やらかしたか。

『それより、守れたか？』

「当然だ。約束通り怪我はゼロだ。・・・危うく鬼を一人殺しかけたが。」

『あ、うん。なんとなく分かった。』

伊織「風魔さん、敵影はないそうですよ？」

「分かった。主上、ここは片付いた。」

『よし、後は壊夢のみだな。』

後は頼んだ。壊夢。

side out

side 壊夢

暇ぜよ。もうあれから数分経ったぜよが、一向に本陣が見えんぜよ。

鬼4「何だアイツ！全然疲れてねえぞ！」

??? 1 「あんた等、私達に任せな！」

??? 2 「ほら、下がった下がった！」

「お前等は？」

??? 1 「私は伊吹萃香さ、んで、こっちは……」

??? 2 「誰がこつちだい。私は星熊勇儀さ、アンタは？」

「俺は壊夢ぜよ。で？何用ぜよ？」

萃香 「そりゃあ勿論勝負さ。」

勇儀 「あたし達とも勝負してくれるかい？」

「いこぜよ。」

萃香 「じゃあ、私からでいいかい？勇儀。」

勇儀 「別にいいよ。」

両方同時でもよかったんぜよが……まあいいぜよ。

勇儀 「じゃあ、私が審判をするよ。」

いつの間にか他の鬼達も起きている。賭け事までしてるぜよ。

「ルールは？」

萃香「特になしでいいよね。じゃあ、行くよ！」

「いつでも来いぜよー！」

さて、本気で行くぜよ。

次回へ続く

第二十三話 剛力無双

side 壊夢

bgm ガンダムG 明鏡止水くされどこの掌は烈火の如く

萃香「はあっ！」

萃香が飛び蹴りをしてくる。それを俺は真正面から受け止める。

萃香「何！」

「ぜいっー！」

俺はそのまま振り回して岩にぶつける。が、手応えがない。

「おや？」

萃香「よそ見してる暇あるのかい？」

後ろから殴ってきたので、とりあえず後ろ蹴りをする。が、また外れる。

萃香「危なっ！・・・よくわかったね。」

分かったぜよ。外れた原因は能力ぜよな。・・・試してみるぜよ。

萃香「どこへ行くんだい？・・・何だい、それ。」

俺は地面を丸ごと持ち上げる。主に見せたら、『どこの上院議員

だ。』って言ってたぜよな。

萃香「ちよつと！そりゃ無理だろう！」

「問答無用！行くぜよ！」

岩の塊を投げる。勿論、少し手を抜いてぜよよ？

萃香「し、死ぬかと思った……」

「やっぱり能力ぜよか。」

萃香「……まさか、確かめるためにあの技を？」

「それ以外にあるぜよか？」

萃香「とんだ化け物だね……そうさ、私の能力は【密と疎を操る程度】の能力」さ、でも、だから何だい？」

萃香が見えなくなる。多分、意識を萃めたんだろうぜよが……

「無意味ぜよ。」

俺は意識を頼らず、気で察知する。いた！俺の右正面！

「そこぜよ！」

萃香「なっ！くっ。」

油断してたようぜよな。当たったぜよ。

萃香「なら、本気で行くよ！」

萃香が分裂する。ならば！

「わっ!!!」

大音量で叫ぶ。小さいからかなりの影響を与えるはずだよ。周りで倒れている鬼は気にしないぜよ。

萃香「あつつ・・・何だい、その声。耳がおかしくなるよ。」

「この程度ぜよか？」

萃香「言ったね！行くよ！」

萃香に攻撃が当たらなくなる。・・・しょうがないぜよ。能力使うぜよ。

「螺旋突き!!」

萃香「え？うわっ！」

命中。萃香が吹き飛ぶ。

「まだやるぜよ?」

萃香「降参するよ。勇儀、変わるよ。」

勇儀「じゃあ、次は私が相手だ！」

「いつでも来いぜよー！」

勇儀は真正面から殴ってくる。

「おっ？」

拳が重い、なかなかの威力ぜよ。が・・・

「まだまだぜよ。」

軽く押し切れる。まだ一割も出してないぜよよ？

勇儀「萃香が言っていた通り、化け物みたいだね。なら！」

勇儀は回し蹴りをしてくる。が、腕で受け止め、はじいて空中で蹴り飛ばす。

勇儀「ぐっ！まだまだ！」

次は殴ってくる。なら、あれぜよ。

「もらった！背負い投げ！」

背負い投げで勇儀を地面に叩きつける。が、激突寸前に足を着かれ、躲される。

勇儀「次で最後だ！止めてみな！【三步必殺】！」

「ならば・・・【三步爆砕】！」

俺と勇儀は同時に一步を踏み出す。そして激突する！

勇儀「ぐっ！」

「無駄無駄ア！ぜいつ！」

勇儀が吹き飛ぶ。

「俺の勝ちぜよ。」

鬼達が騒ぐ。

鬼5「やりやがったぞ！あの兄ちゃん！！」

鬼6「すげえ！」

茜「何事だい？」

鬼5「げっ！茜さん！」

勇儀「茜？何でここに？」

萃香「ほんとだよ。何で来たのさ？」

茜「あんた等が負けた相手を見に来たのさ。」

「あんたがリーダーぜよか？」

茜「そうさ、私が鬼子母神の茜さ。」

「なら話は早い。勝負してくれぜよー！」

茜「アツハハハ！！いいねえ！惚れそうだよ！」

「惚れてもいいぜよよっ。」

茜「勝ったら考えるよー！」

「なら勝つてやるぜよー！」

茜「いいねえ！来な！」

「最初から行くぜよ！【ソニックブーム】！」

茜「速い！でも、当てられる！」

茜は正確に殴ってくる。って何！

「ゴハッ！」

茜「この程度かい？さあ、惚れさせてみせな！」

強いぜよな。油断しすぎたぜよ。なら、全力で！

「妖力全開！」

茜「それが本気かい・・・とんでもないね。」

「行くぜよー！【スピンストーム】！」

螺旋状に気の塊を放出する！

茜「ふんっ！」

茜は耐えようとする。が、この技は主にダメージを与えた技！そう簡単に防げないぜよ！

「ぶっ飛ばせ!!」

茜「うわっ!」

茜が打ち上げられる。それを俺は受け止める。

「どうぞよっ…」

茜「・・・降参するよ。久しぶりだよ。負けたのは。本当に惚れたよ。」

「うれしいぜよね。こっちも惚れたぜよ。」

茜「そうかい!ところで、何で来たのさ?」

「ああ、それはぜよな・・・」

『壊夢、終わったか?』

「あ、主。終わったぜよ。」

茜「ん?鏡一じゃないかい?」

『よっ、茜、久しぶりだな。』

「茜、茜が負けたのはまさか・・・」

茜「あんたもかい。そうさ、鏡一、いや、龍一に負けたのさ。」

「俺もぜよ。主には勝てんぜよ。」

『何だお前ら、とりあえず宴会やるぞ。鬼の奴らも来な。無礼講だ。』

茜「いいのかい?」

『壊夢の彼女だろ?なら来ねえと。』

いやいや、そんなすぐになるわけない

茜「そうさね。じゃあ、行くよ、壊夢。」

「いいぜよか?俺で?」

茜「何言ってるのさ。私が気に入ったんだ。行くよ!」

ああ、これが好きということぜよな。

「おう!!」

『ならさっさと準備!ハリーハリーハリー!』

さあ、飲むぜよ。

次回へ続く

第二十四話 護るべき者

side 絶影

壊夢の奴、ちゃっかり彼女を作りやがった。・・・まあ、いいんだけどね？早いよ、お前ら。

『で？宴会するが。壊夢、お前は どうするんだ？』

壊夢「言ったように、いつまでも主の式ぜよ。ただ、大事な者が増えただけぜよ。」

『なら、お前は俺が敵になったら どうするんだ？』

壊夢「その時は、合法的に勝負できるから いいぜよ。」

それで いいのか。

『まあ、気にしないなら いいや。好きにしろ。・・・いづれ働いてもらうがな。』

茜「じゃあ、これから宜しくね。壊夢。」

壊夢「こちらこそぜよ。茜。ところで、名字はどうするぜよ？」

茜「そーいや無いね。今は絶影だっけ？何かないかい？」

丸投げ止めろ。・・・そーうだ。

『神鬼（かみき）でどうだ？』

茜「いいねえ！」

壊夢「気に入ったぜよ！これからは神鬼壊夢ぜよ！」

茜「じゃあ、私は神鬼茜だね！」

『喜んでもらえて結構。風魔、お前は？』

風魔「！・・・よし、伊織。」

伊織「はい。」

風魔「もし、私でよければ、守らせてくれないか？君を。」

伊織「!!・・・はいっ！お願いします！」

風魔「これが答えだ。主上。」

『了解。お前は俺が敵になったら？』

風魔「勿論、真正面から立ち向かうさ。・・・本気でな。」

おお、怖い怖い。

『悪い、ちよつと話続けるわ。紫、例の話、するんだろ？』

紫「忘れていたかと思ったわ。・・・伊織さん、茜さん。聞いていた
だけですか？」

茜「いいよ。何だい？」

伊織「構いません。なんですか？」

紫「私の作る世界・・・人と妖怪が共存できる世界に住んでほしいのですわ。」

茜「別にいいよ。どうせ、壊夢は賛成だろう？」

伊織「私は少し待っていただけですか？この階級を整えるので。」

紫「ありがとうございます。では、出来上がり次第、お迎えに上がりますわ。」

『はい、重い話終わり！宴会やるぞ！』

侵二「了解です。じゃあ、料理しますね。」

幻夜「今回は侵二を手伝うよう」

壊夢「じゃあ、俺は酒を出すぜよ。主、いいぜよね？」

『酒なら何でも良い。祝い酒だ。』

紫「私はどうすれば？師匠。」

『侵二と幻夜の作った料理を運んでくれ。風魔は？』

風魔「・・・伊織の書類整理を手伝ってから行く、何、数分で終わるわ。」

『了解。じゃあ、また後で。俺はこの辺にいるよ。・・・会いたい奴

がいてな。』

茜「恐魔のことかい？」

『ああ、いるか？』

茜「いるよ。ルーミアは去ったけどね・・・恐魔！」

恐魔「へいつ！つて鏡一！久しぶりだな！あ、今は絶影だっけ？」

『おお、久しぶり！どうだ？最近。』

恐魔「一応、そこそこの妖怪になってな。今は鬼の組み手相手だ。」

『へえ・・・そんなに強くなったんだ。蹴りで吹き飛んだ奴が。』

恐魔「いや、その理屈はおかしい。あの蹴りは絶対に吹き飛ぶ。」

『まあ、飲めよ。』

恐魔「悪いな。・・・何か燃えてるんだが。」

『そういう酒だ。飲んでみる。』

恐魔「お、おう・・・」

『どごうだっ？』

恐魔「なかなか旨いな。が、ちよつと濃くないか？」

『まあ、そこそこな？』

風魔「主上、戻ったぞ。」

『ああ、お帰りって早っ！まだ数分しか経ってねえぞ！何したんだ？』

伊織「風魔さんが影分身の術とやらを使っていましたか・・・」

何故お前等はすぐ技を開発する。実体ありの影分身とか怖いわ。出来るけど。

???「すみません、ちよつと取材いいですか？」

『ん？誰だ？』

???「あやや、失礼しました。清く正しい射命丸文（しゃめいまるあや）と申します。取材いいですか？」

丁度侵二と幻夜が来た。

『良いぞ。答えるだけか？』

文「はい！では、一つ目、年齢を教えてくださいいただけますか？」

伊織「ちよつと文、あまり失礼なのは・・・」

侵二「一億歳です。」

壊夢「一億歳ぜよ。」

風魔「一億歳だ。」

幻夜「一億歳だね」

龍源の世界をここの時間に変えると・・・

『百億以上だな。途中で数えるのを辞めた。』

文「」

伊織「凄い年上じゃないですか。」

茜「私よりも年上かい。」

文「つ、次に移ります。種族は？」

侵二「饕餮です。」

壊夢「橈骨ぜよ。」

風魔「窮奇だ。」

幻夜「混沌だよ」

『影妖怪。』

紫「私も答えようかしら？スキマ妖怪よ。」

文「」

伊織「特殊な妖怪しかいませんね・・・」

茜「しかも一人一人が最高クラスかい。」

文「さ、最後です。何故ここに来たんですか？」

紫以外『「気分」』

紫「話をするためにですわ。」

文「理由が気分……」

伊織「紫さん以外普通じゃないですね。」

茜「気分で来られちゃたまらないね。」

『終わりか？俺達にあまり意味を求めるなよ？』

四凶「暇を持て余した。」

『化け物の。』

四凶十絶影『遊び。』

紫「謎の一体感……」

勇儀「あ、壊夢じゃん。」

萃香「あんた達は？」

『ん？俺は絶影だが。』

萃香「あんたが壊夢の主かい？」

『ああ、そうだが・・・』

勇儀「私と萃香と勝負してもらえるかい？」

茜「やめときな。」

萃香「何でだい？」

茜「私と勝負して圧勝したんだ。やめといたほうがいいよ。」

『ああ、そんな事もあったな。』

壊夢「俺も勧めんぜよ。心臓を貫いたのに生きてたぜよからねえ。」

侵二「あと、首も切りましたよね。」

『ああ、あれじゃあ死なんよ。核でも無傷だったし。』

紫「もう妖怪じゃないわね・・・」

『失礼な、後三億回ぐらい殺せば死ぬし、能力では流石に死ぬぞ?』

紫「その三億が無理なのよ。殺せる能力ではないし。」

勇儀「・・・止めとこうか。萃香。」

萃香「・・・うん、止めとこう。」

『そういや、茜達はどうするんだ?』

伊織「それなんですけど、一応、絶影さん達なしでは負けが確定だったんで、ここでは鬼の方が位は上です。なので、住んでいただいで構いません。」

茜「それはありがたいねえ。」

壊夢「じゃあ、勝手に家は作るぜよ。得意ぜよし。」

『となると、風魔と壊夢はここにいるのか?』

風魔「そうだな。まあ、また会えるだろう。」

壊夢「何かあれば呼ぶぜよ。」

『よし!壊夢、アルコール100%出すぞ!酒飲み大会だ!!』

聞いていた鬼が歓声を上げる。

『ルールは簡単、ビン一本飲み切ったら合格。飲み切った数を競う!では、初め!』

あらかじめ能力で増やす。え?そんな能力あったかって?何でも出来るんだよ。俺の能力。

・・・数時間後・・・

結果

恐魔 五本

伊織 三本

茜 十本

文 一本

勇儀 五本

萃香 五本

紫 四本

幻夜 二十本

侵二 二十五本

風魔 三十本

俺 三十本

壊夢 四十本

俺達の数字がおかしい。他の鬼や天狗は一本いかず壊滅。俺たちは、まだ酔っていない。

『今回もやっちゃったな。』

壊夢 「まだ行けるんぜよがねえ。」

『流星に駄目だ。・・・じゃあ、そろそろ帰るぞ。またな、風魔、壊夢。』

風魔 「主上も元気で。」

壊夢 「また会おうぜよ。」

『ほれ、紫、行くぞ。』

紫 「頭がクラクラする・・・」

『チツ 負ぶってやるよ。じゃあな。』

俺たちは、二人をおいて、また旅に出かけた。

さあ、次はどこに行こうか。

次回へ続く

第二十五話 英雄の名

side 絶影

妖怪の山の一件から数日後、俺と侵二は交代で紫の修行の手伝いをして、幻夜は「出かける」とかぬかして行方不明。あいつは一番フリーダムだ。

で、今、暇だ。修業はしばらく侵二が担当するし、することが無い。まずい。これは死活問題だ。面白いことを探さねばならぬ。

俺はすぐさま鏡一になつて出かけた。

・・・超人移動中・・・

とりあえず団子屋に着いた。情報収集スタート。

『店主、なんか面白いことないか?』

店主「そうだねえ、面白いことかは分からないが、最近はおぐや姫の話ばかりさ。」

かぐや姫ねえ、ん?待てよ?ここ東方の世界だよな。なら輝夜か。

『ほう、じゃあ見てくるかね。ありがとさん。』

店主「毎度!つてこれ代金多いよ!」

『情報料も入れといた。じゃあな。』

よっしゃ、これで暇じゃなくなった。もう何も怖くない。

俺は全速力で輝夜の家に向かった。

・・・超人移動中・・・

よし、着いたぞ。

??? 「おや?どちら様かな?」

『失礼、矢川鏡一と申します。貴方は?』

??? 「私は藤原不比等（ふじわらのふひと）だ。」

げっ、貴族だ。

『不比等様でしたか。何故ここに?』

不比等 「様付けはやめてくれんか?私がかぐや姫に会いに来たんだ。」

やけに優しいな。

『では、不比等さん、俺も同行していいですかね?ちよつとかぐや姫と話がしたいので。』

不比等 「一向に構わないよ。・・・ところで、君は旅人かい?」

『ええ、旅人ですよ。それも特殊なね。』

不比等 「なら、私の娘に話をしてくれんか?」

『いいですよ。いつでもどうぞ。』

不比等「ありがとう。まあ、今はかぐや姫に会いに行こうか。」

『そうですね。お先にどうぞ。』

不比等「ありがとう。失礼します。」

『失礼します。』

かぐや姫「どうぞ。」

あら、簾掛かっている。・・・当然か。

不比等「今回、私は求婚に来ました。」

かぐや姫「そうですか。しかし、他にも求婚者はいます。なので、後程皆さんを集めます。その時にまた来て下さい。」

不比等「分かりました。では、鏡一殿、貴方もまた。」

かぐや姫「！」

『ええ、ではまた後日。』

不比等さんが退出した。・・・さて、

『では、話をしましょうか。月の住人さん？』

かぐや姫「まさか、矢川鏡一？」

『半分正解。』

かぐや姫「嘘よ。彼は死んだもの。」

『じゃあ、何を言えば分かる?』

かぐや姫「月ロケットの打ち上げについて。」

『はあ・・・打ち上げ後化学班の核ミサイルが暴走、それを俺は地上100キロメートルから狙撃、連結部分を破壊、その後爆風で死亡だったわけ?』

かぐや姫「・・・本物らしいわね。で、半分正解って?」

『俺は人間じゃない。』

かぐや姫「え?」

『実はな、月読命の国の視察に来てた龍神だ。』

かぐや姫「ええ!」

『まあ、そんなわけだ。蓬萊山輝夜(ほうらいざんかぐや)?』

輝夜「私の名前を・・・!」

『何でもお見通しだ。・・・蓬萊の薬の一件もな。』

輝夜「!!・・・ええ、そうよ。追放されたのよ。」

『まあ、そうがっかりすんな。ここもいとこだぞ?』

輝夜「後一か月で迎えが来るのよ。」

『あっそ、良かったじゃん。俺は無理だが。』

輝夜「・・・ええ。」

『良ければ、俺の旅の話でもしようか？月の様子と引き換えに。』

輝夜「いいわよ。聞かせて頂戴。」

俺は大惨事大戦の話や式神の話をした。

輝夜「月読命様入れて八百万の神様と戦争って・・・」

『楽しかったぞ？神々が阿保みたいに弱かったが。』

輝夜「しかも式神と共同で無傷って・・・」

『・・・あいつ等は規格外だ。もはや妖怪じゃねえ。』

輝夜「結構無茶苦茶やったのね。」

『自由の塊だしな。』

輝夜「(いいなあ)」

『じゃあ、次は月の事教えてくれ。』

輝夜「いいわよ。まず永琳からね。・・・ショック受けてたわよ。」

『グフツ。・・・止める、罪悪感あるんだ。』

輝夜「でも、泣いてはなかったわ。」

『マジで?・・・約束守ってくれたんだ。』

輝夜「次は貴方のことね。【英雄鏡一】とか【最強の狙撃手】とかよ。」

『いや、そんなに凄い狙撃したか?』

輝夜「後ろ向いて三キロメートル先狙撃したのに普通なの?」

『いや、あれはな?ちよつとしたジョークだ。』

輝夜「あれがジョークだったら全部ジョークよ。」

『俺って実感が無い。』

輝夜「こつちでは学校で最初に習うぐらいよ?」

『【衝撃】 狙撃手は神だった。』

輝夜「本当にそれよ・・・」

『凄いな。学校も知らない事知ったぞ。』

輝夜「いや、嬉しくないわ。」

『喜べよ。数人しか知らない真実だぞ?』

輝夜「それより、婚約はどうしよう。」

『絶対にクリア出来ない条件ならあるが。』

輝夜「何？」

『龍神の首飾りと絶影の首。どっちも俺だからな。』

輝夜「いいわね。首飾り採用させてもらうわ。一番嫌な奴に言う。」

『後は侵二曰く絶対にない火鼠の皮衣とか。』

輝夜「ないの？」

『絶滅したらしい。』

輝夜「蓬莱の珠の枝とかは？」

『お主も悪よのう。』

輝夜「いいのよ。別に。」

『じゃあ、手に入れようとするると不幸が舞い降りる燕の子安貝とかはっ。』

輝夜「それもいいわね。」

『別に四凶の首でもいいぞ？絶対にやられないから。』

こうして物騒な会話は夜まで続いた。

『もうこんな時間か。』

輝夜「ついつい話すぎたわね。」

『じゃあ、また来るよ。助けてほしけりや「助けて鏡一！」とか叫べ。コンマ一秒で来る。』

輝夜「ありがとう。またね。」

俺は退出した。

侵二「主上、ここにいたんですか。」

紫「何してたの？師匠。」

『月の住民がいてな。ちょっと昔の会話をした。』

紫「師匠の顔って広いわね・・・」

『まあそれはそれでだ。幻夜は？』

侵二「あいつならまだ帰って来ていないですよ。」

「この所数日間いない。」

『アイツ、何してるんだらうな。』

次回へ続く

第二十六話 その頃の幻夜①

鏡一が輝夜と会う数日前に遡る・・・

side 幻夜

「あゝ暇〜」

ヤツホ〜幻夜だよ〜今暇ですることがないんだよね〜

ゆかりんの修行の手伝いをするのもいいけど性格が変わっちゃうからね〜

「マスター、ちよつと出かけるね〜」

『へいへい、自由に。』

「じゃあね〜」

と言つても行く当てがないんだよね〜

「まあ、フラフラしてればいいか〜」

・・・幻夜移動中・・・

「何か面白いものないかな〜?」

妖怪1「おい、そのアンタ、俺達はこれからある妖怪を退治しに行くんだが。来るか?」

んん？？楽しそうだし、

「良いよ〜どこに行くの〜？」

妖怪2 「向日葵畑だ。」

「分かった〜でも、何で退治しに行くの〜？」

妖怪1 「気に入らねえからだ。」

「ふーん」

妖怪3 「兄貴！早く行きましようぜ！」

妖怪1 「新入り、お前にはおとりを任せる。」

「良いよ〜」

・・・妖怪一団移動中・・・

妖怪1 「ここだ。じゃあ、新入り、行け！」

「はーい」

そう言えばおとりってどうするんだろう？まあ、いいか〜

「それにしても綺麗にだね〜僕も花を育てたりしてるけど、ここの花はみんな生き生きとしてるね〜」

??? 「褒めていただいて嬉しいわ。・・・直ぐに立ち去りなさい。」

「ん〜？君は〜？」

??? 「私は風見幽香（かざみゆうか）よ、早く立ち去りなさい。」

「えーせっかく綺麗なのに〜」

幽香 「・・・貴方、この花を盗ろうとしないの？」

「しないよ〜こんなにみんな仲良しなのに、可愛そうだよ〜」

幽香 「貴方！花の気持ちが分かるの!？」

「大体ね〜」

幽香 「面白いわね。貴方、名前は？」

「僕は幻夜だよ〜」

幽香 「じゃあ幻夜、何しに来たの？」

「あ、ちよつと来て〜」

せっかくいい妖怪なんだし、・・・裏切ってもいいよね〜

妖怪1 「てめえ！何で帰ってきて・・・風見幽香」

妖怪2 「裏切ったな！」

幽香 「これはどういうことなの？」

「んーとね。ここの三人に退治しようって誘われたんだけど・・・」

妖怪3 「兄貴！やっちゃいましたよ！」

「辞めた。花と君が可愛そうだ。」

幽香 「貴方、口調が、」

「四凶が一人、混沌の幻夜！やられたい奴から来い！」

妖怪1 「ひるむな！行け！」

「武器展開！凍結槍！凍れ！」

妖怪2 「あ、足が！」

「ホラホラ！どうした？」

妖怪1 「チツ！だが、これを見ろ！」

幽香 「それは！」

妖怪1 「ホラホラ！手を出してみろ！向日葵をへし折るぞ！」

幽香 「くっ！」

「・・・す」

妖怪1 「ああ!？」

妖怪2 「兄貴、まずい気がするんですが。」

妖怪3 「お、俺もです。」

「殺す。」

妖怪1 「ヒッ！」

「マスターの命令でなるべく殺すと言われてたが……生かして帰さん。」

妖怪1 「チッ！本当に折るぞ！」

「手が無いのか？」

妖怪1 「は？何を……」

妖怪2 「あ、兄貴、腕が……」

妖怪1 「え？ギャアアアア！」

「おや？お前等、足は？」

妖怪1 「ウワアアアア」

妖怪2 「か、勘弁して下さい！」

妖怪3 「た、助けて……」

「どごすするっ……幽香。」

幽香 「今回だけ勘弁するわ。」

「了解、ほれ。」

妖怪1 「あれ？手と足が・・・」

妖怪2 「あ、ありがてえ。」

「ほら、失せな。ここの主のご命令だ。」

妖怪1 「し、失礼しました！」

妖怪3 「待って下せえ！兄貴！」

妖怪達が逃げて帰った。あー疲れた〜

「ごめんね〜騒いじやって。」

幽香 「いいのよ。ありがとう。花を守ってくれて。」

「こっちが一方的に悪いからね〜感謝される理由がないよ〜」

幽香 「良ければ、私の家で話でもしない？」

「いいの〜?」

幽香 「ええ、花の気持ち分かる人は歓迎よ。」

「じゃあ、お邪魔します。」

幽香 「何もないけどね。」

「じゃあ、何の話からする〜?」

幽香「そうね・・・」

・・・妖怪雑談中・・・

幽香「へえ・・・貴方、あの影妖怪の式なの。」

「まあね、式って言っても服従はしないけどね」

幽香「ところで、途中、喋り方が変わったじゃない。あれは？」

「特定の条件下で、ああなるんだよね」嫌だった？」

幽香「いいえ、格好よかったわよ。」

「えへへ〜照れるな〜」

幽香「(かわいい)」

「今失礼な事考えなかった？」

幽香「べ、別に？」

「じゃあ、そろそろ帰るね〜」

幽香「泊まって行けば？」

「んんの〜」

幽香「はいわよ。」

「ありがとう〜お礼に料理作るね〜」

幽香「料理作れるの?」

「二応ね〜侵二とマスターには負けるけどね〜」

幽香「楽しみね。」

何作ろう〜・・・オムレツでいいや〜

「マスター直伝奥義、【踊る高速クッキング】」

・・・幻夜料理中・・・

「はい、完成〜」

幽香「速っ!もう出来たの?」

「侵二とマスターなら三秒でできるよ〜」

幽香「何そのいらぬ神業。」

「まあ、どうぞ。」

幽香「いただきます。」

・・・花妖怪食事中・・・

幽香「ご馳走様でした。凄く美味しかったわ。ちよっと悔しいわね。」

「お粗末様でした〜」

幽香 「話変わるけど、妖怪達の手足をなくしたのって」

「うん、能力だよ。脳内に手足がないと言う間違った情報を流したんだ〜」

幽香 「凄いわね・・・そう言えば、貴方の好きな花は？」

「ん〜菊かな〜」

幽香 「気になる人とかは？」

「いるよ〜何でそんな事聞くの〜？」

幽香 「なんとなくよ。誰なの？」

「幽香？」

幽香 「私？何で？」

「同じような趣味持ってくれてるし、美人だし？」

幽香 「そ、そう？」

「まあ、僕には眩しいけどね〜」

幽香 「(そんなことないわよ)」

「ん〜？何か言った〜？」

幽香 「いいえ、何も。それより、寝る場所よね。案内するわ。」

「いや、外で寝るつもりだったんだけど」

幽香 「お客にそんなこと出来ないわ。どうぞ。」

「ありがとう〜じゃあ、お休み〜」

幽香 「ええ、お休み。」

side out

side 幽香

「はあ・・・」

今日はどうしたのだろう。幻夜を追い払おうとしたのに興味が湧いて、同じような趣味を持っていて、妖怪を追い払ってくれて、ちよつとだけドキツとした。

「幻夜の事、好きになっちゃったのかしら・・・」

分からない、かなりの時間を生きてきたがこんな気分は初めてだ。

「幻夜は私が気になるって言うてくれたけど・・・」

どうなのだろうか。友人としてか、異性としてか。

「ああ、もう！寝よう・・・」

寢室に来たものの眠れない。ずっと幻夜の事が頭の中でいっぱい

だ。

「本当、どうしちゃったのかしら・・・」

時間はある、ゆっくり考えよう・・・

そのまま、私は意識を手放した。

s i d e o u t

次回へ続く

第二十七話 その頃の幻夜②

side 幽香

眼を覚ますと、もう朝だった。

「ん？この匂いは・・・。」

幻夜「あ、幽香、おはよ〜」

「幻夜？何してるの？」

幻夜「料理中〜」

「幻夜の方？ごめんなさいね。寝ちゃってて。」

幻夜「ううん。幽香の方も作ってるよ〜」

「え？私の分も？」

幻夜「嫌だった〜？」

いや、嫌とかじゃなくて、嬉しいけどってああもう！

幻夜「どうしたの〜？顔赤いよ〜？」

「え？ちよつと近い近いー！」

幻夜「あ、ご、ごめんね〜」

・・・何やってんだろ、私。

「ま、まあいいわ。とりあえず、朝ご飯、いただいていいかしら？」

幻夜「あ、どうぞ」

幻夜から朝食を受け取る。・・・凄く美味しそうだ。

幻夜「じゃあ、ちよつと外にいるね」

幻夜が部屋から出た。

「いただきます。」

その後朝食をとった。滅茶苦茶美味しかった。

「あ、私も向日葵に水をやらないと。」

私も外に出るために準備をした。

side out

side 幻夜

マスターから離れてもう数日、幽香の家には一日前からいるけど、

「そろそろ戻らないと駄目かな」

『おい、幻夜。何やってんだ？』

「あ、マスター、どこにいるの？」

『念話中だ。それより、どこにいるんだ？もう数日経ってるぞ。』

「今、向日葵畑く幽香の家の前だよ」

『マジか。で？泊めて貰ってんのか？』

「うん、そうだよ」

『・・・お前等女運高いな。で？どうするんだ？告白すんのか？』

「いや、何でそうなるのさ・・・まあ、気になるけどね」

『じゃあ、やってみろよ。お前等顔の基準高いし、強いんだから。俺も手伝うが？』

うーん。どうしようか。やろうと思っても方法がね」

「別にいいんだけどね？方法がね」

『確か花妖怪だろ？お前も植物好きだし、そんな感じでやれば？』

「ん。花言葉とか？」

『そうするか？なら、必要な花言葉。創造してザガンで調節するか
ら。』

「じゃあ、育てた花の種があるから、それでやってくれる？」

『構わんが、何の花だ？』

大体はあれらしいけどね〜そうだ。

「・・・だよ。色は赤でお願いね〜」

『了解。今からダンダリオン繋ぐ、そこに種を入れる。ついでだから枯れないようにしといてやるよ。』

「ありがとう〜」

『数日後、挨拶ついでにお渡しいたします。なんてな、ダンダリオン繋いだ。入れろ。』

空間から手が出る。

『ほら、よこせ。』

「はい、お願いね〜」

『じゃあ、完成次第届けに行く。バイビー』

マスターが消えた。

幽香「何をしてたの？幻夜。」

「前に言ったマスターとの会話だよろ数日後に来るって〜・・・いい？」

幽香「絶影さんでしょ？歓迎よ。」

「ありがとう〜」

幽香「……帰っちゃうの?」

「どうかなくって、何でそんな顔してるの?」

幽香「……別に。」

「いや、何かあるよね?」

幽香「何もないわよ、ただ、さみしいなくって。」

「へ〜」

幽香「ちよっ!今の忘れて!」

「やだね〜」

幽香「忘れなさい!」

「いーやーだ〜」

どうせ、何処にも行かないけどね〜

side out

side 侵二

「何やってるんですかね……」

主上とは別に様子を見に行ったらあれですか。……もう付き合ってるんじゃないですかね?

「心配するだけ無駄でしたね……」

まったく、まあ、

「成功するといいですね、幻夜。」

私は向日葵畑を立ち去った。

side out

side 龍一

現在、龍神の力全力で植物改良中。

紫「師匠、何やってるの？」

『人の恋路の手伝い。』

紫「ふーん……そう言えば、師匠に好きな人っているの？」

『いや？いないぞ？何でそんな事聞くんだ？』

紫「べ、別に？」

『あっそう。……よし、不朽の術完了。次はカラーか。赤だっけ？』

……龍一、自分に対する好意には気づかない男である

侵二「主上、戻りましたよ。……まだやってるんですか。」

『ああ、一応出来たんだがな？俺からの贈り物の花に苦戦して

な・・・』

侵二「これですか？」

『ああ、それぞれ。・・・ところで、見てきたんだろ？』

侵二「流石主上、見てきましたよ。」

『で、どうだった？』

侵二「もう付き合ってるんじゃないですかねって感じでしたよ。」

『要らないんじゃないか？この花。』

侵二「でも、二人とも付き合ってる感覚はないようでした。」

『・・・めんどくせえな。』

紫「花ってことは、幽香？」

『ん？知り合いか？』

紫「ええ、花畑に入ったら容赦なく追い払うような奴だけだね。いい友達よ。」

侵二「そうは見えませんでしたよ？」

紫「あの幽香が？・・・雪でも降るんじゃないかしら。」

幽香「はくしよん！」

幻夜「風邪引いた？」

幽香「紫ぐらいが噂してるんじゃないかしら……」

侵二「幻夜とは明るく楽しそうでしたが……」

『幻夜に【他人の本心を出させる程度の能力】でも、あるんじゃないかねえか？』

侵二「幻夜ならありそうですね……」

『そうだろ？……出来た。』

侵二「早いじゃないですか。」

『せっかくだし、一日開けるか。』

侵二「不比等さんとは？」

『それは明後日。輝夜とはその次の日。』

紫「一応、予定は立ててあるのね。」

『失礼な。それじゃあ、俺が気分で作れた生物みたいじゃないか。』

紫「いや、そうでしよう？」

侵二「否定できないですね、主上。」

『てめえら、表へ出ろ。久々にキレちまったよ……』

侵二「喧嘩ですか？いいでしょう、受けますよ！」

紫「悪かったわ。だからその刀をしまってください。侵二さんも翼しまってください。」

『拒否権は無しだ！空間転送！』

侵二「行きますよ！」

紫「やめてええええ！」

この後、本気で喧嘩した。

……一日後……

『絶影にチェンジ。じゃあ、行ってくる。』

紫「気をつけてね？幽香、血の気が多いから。」

侵二「幻夜もいますからね。よろしくと言っておいて下さい。」

『了解。じゃあな。』

……絶影移動中……

『ここだっけ？』

幽香 「止まりなさい。何の用かしら？」

『ここにいるはずの幻夜に用があるんだがつと！』

幽香 「惜しい。」

『惜しいじゃねえ！ちっ！こういうことかよ！』

めんどくせえな・・・

『ま、行きますか。』

次回へ続く

第二十八話 花言葉

side 絶影

どうも、絶影です。

現在進行形で幽香さんからの攻撃を避けてます。ふざけんな。いきなりこれかよ。笑えねえわ。

『だーからー！幻夜に用があるんだっての！』

幽香「知ってるわよ。」

『じゃあ、やめてくれん』だから戦うのよ。・・・解せぬ。』

会話のドツジボールだ。

『何で戦おうとするんだよ!?!』

幽香「絶影でしょ?だからよ。」

『幻夜の野郎!バラしやがったな!』

幽香「ちなみに幻夜は寝てるわよ。」

『あの野郎!ぶっ飛ばしてやる!』

幽香「私を倒してからね!」

『結局戦いたいだけじゃねえか!幻夜はどうなんだよ?』

幽香「幻夜は強さが分かってるからいいのよ。」

『ふざけやがってえ!』

幽香「で?どうするのかしら?」

『・・・もういい!かかってきやがれ!魔装、ブアレフオール!』

俺はブアレフオールを宿らせる。

幽香「あら?その姿は?」

『術の一種だ!行くぞ!』

bgm 今昔幻想郷〜Flower Land

幽香「はあっ!」

幽香が成長させた花で攻撃してくる。・・・ザガンでも面白かったか?

『花を停滞、凍結。』

花を止めて、凍らせる。

幽香「幻夜の武器そっくりの能力ね。」

『まあそうだな。クラッシュ。』

幽香「!くっ!」

俺は凍らせた花を爆散させるが、日傘で飛ばされる。ホームラン間

違いなし。

『お見事、じゃあ、次は【氷獣咆哮破（ガルフォル・ザイル）】』

幽香「な！」

掌サイズの氷の槍を飛ばす。それも複数。

幽香「くっ！【マスタースパーク】！」

あれか。マスタースパーク。どれぐらいの火力かな？

幽香「次はこっちの番よ！【マスタースパーク】！」

『魔装切り替え！バアル！【雷光剣（バララーク・サイカ）】！』

光線と光線が激突する！

幽香「押されている・・・！」

『まだまだ行くぞ！ぜいっ！』

雷光剣が幽香にぶつかる！

幽香「しまった！くっ！」

幻夜「凍結槍展開！凍結！」

バキツと言う音と共に雷光剣とマスタースパークが凍り付く。

幽香「幻夜・・・！」

『・・・遅えぞ、幻夜。見てただろ。』

幻夜「ばれた〜？・・・ごめんね〜幽香。邪魔しちやって。」

幽香「いいのよ。失礼したわ。絶影さん。」

『気になさるな。で、幻夜。例の物出来たぞ。』

幻夜「早いね〜」

幽香「例の物？」

幻夜「せっかくだし、中で話そうよ、いい？幽香。」

幽香「ええ、招待するわ。どうぞ。」

・・・絶影、幻夜、幽香移動中・・・

幽香「どうぞ。」

『すぐ出ていく。お邪魔します。』

幻夜「こっちだよ〜」

幽香「で、幻夜、例の物って？」

『ほれ、幻夜、行け。』

幻夜「う、うん、・・・幽香、これなんだけど・・・」

幽香「赤い菊？花言葉は・・・まさか、」

『【貴女を愛しています】。だろ？』

幻夜「うん、幽香、もし僕で良ければ。」

幽香「・・・・・・・・」

幻夜「君が死ぬ一日前まで守らせてくれないかな？」

幽香「・・・・・・・・」

幻夜「僕と、結婚を前提として付き合ってくれないかな？」

幽香「・・・・・・・・これが答えよ。」

幻夜「黄色のヒヤシンス？花言葉は・・・」

幽香「【貴方となら幸せ】よ。喜んで！」

幻夜「ありがとう!!マスターも・・・あれ？マスターは？」

幽香「手紙が置いてあるわよ。」

幻夜「手紙？」

side out

side 幻夜

『拝啓、幻夜及び幽香様』

このたびはおめでとうございます。幻夜、ご苦労さん。良かったじゃん。

幽香も、幻夜を末永く頼みます。

我々は、もうしばらく此方に滞在します。

紫からは、「おめでとう。幽香、絶対に私も追いつくからねー！」と、

侵二からは、幻夜、「おめでとうございます。幻夜、頑張ってくださいね？幽香さんも、幻夜をお願いします。」と。

最後になりましたが、私からのプレゼントを置いてあります。

お幸せに。

敬具、絶影一同』

幻夜「マスター……」

幽香「紫まで……」

幻夜「プレゼントって、これかな？」

幽香「デンファレ？花言葉は……」

「お似合いの二人」

幽香「あつ。」

幻夜「マスターも粋なことするね〜」

侵二、紫、マスター。僕、必ず幽香を幸せにするからね〜

side out

side 絶影

贈り物の意味、分かってくれたかね〜？

『まあ、どう見ても夫婦だ。お幸せに。幻夜、幽香。』

侵二「主上、お疲れ様です。」

『幻夜もか・・・』

侵二「そうですね・・・寂しいものですね。」

『次はお前の彼女かな?..』

侵二「私には勿体無い人ばかりですよ。」

『そういう奴ほどモテるんだよ。知らないのか? 町じゃ侵二と輝夜の噂ばっかりだぞ?..』

侵二「私も? まさか、主上もよく聞きますよ?..」

『んな阿呆な。』

侵二「まあ、気になる人が出来るといいんですがね……」

『お前なら出来るさ。』

侵二「そうですかねえ……」

紫「師匠！お帰り！」

『おい、そんなにくつつくなよ。』

侵二「(主上……気づいてないじゃないですか……)」

紫「(気づいてくれない)」

『紫？何で顔膨らましてんだ？』

紫「……別に？」

いや、絶対に何かあるよな。侵二、何故頭を抱えている。

侵二「ところで主上、不比等さんとは何処で会うのですか？」

『ああ、迎えに来てくれるらしい。侵二、紫。お前等も来るか？』

侵二「じゃあ、行きましようかね……」

紫「私は幽香と会ってくるわ。だからやめておくわ。」

『はいよ。じゃあ、明日に向けて寝るか。』

侵二「了解です。」

紫「分かったわ。」

俺はそこで意識を手放した。

次回へ続く

第二十九話 子と親

side 鏡一

『よし、侵二、準備出来たか?』

侵二「オツケイです。いつでもどうぞ。」

紫「いつてらっしゃい。師匠、侵二。」

『おう、じゃあ、また明日。侵二、行くぞ。』

侵二「了解です。では、紫殿、また。」

早速不比等さんからの迎えが来たので、牛車に乗る。

運転手「では、行きますぞ。」

侵二「お願いします。」

・・・鏡一、侵二移動中・・・

運転手「お二人さん、ご主人様の知り合いかね?」

『ああ、娘さんに旅の話をする約束でな。』

侵二「私は主上の付き添いです。」

ちなみに、侵二も今は人間だ。

運転手「そうかね。ご主人様も旅の話を聞くのが好きでいらっしやるからのう。」

『へえ・・・あ、侵二、楽器持ってきたか?』

侵二「簡単な物が演奏出来るぐらいは・・・」

『ならいいな。ところで、運転手さん、不比等さんってどんな人だ?』

運転手「ご主人様は私達にも優しく、娘さんを大事にする方です。」

侵二「随分と貴族っぽくないですね。」

運転手「よく言われますな。しかし、私達にとっては、最高の主です。」

随分と評判がいいようです。

運転手「着きましたぞ。ささ、どうぞ。」

不比等「おお!鏡一殿!来てくださったか!」

『そりやあ来ますよ。あ、今回、供を一人連れてきました。』

侵二「侵二です。お初に御目にかかります。」

不比等「私が藤原不比等だ。鏡一殿、侵二殿、どうぞ。」

俺達はやけに長い廊下を歩く。・・・絶対にめんどくさいだろ。

不比等「こちらです。入るぞ、妹紅。」

『失礼します。』

侵二「失礼します。」

???「お父様、誰？」

不比等「この前言った旅人の鏡一さんと侵二さんだ。鏡一殿、後は
お願いします。」

『分かりました。初めまして。矢川鏡一と申します。』

侵二「侵二です。名字はないですね。」

???「私は藤原妹紅（ふじわらのもこう）。宜しくね、鏡一、侵二！」

『宜しく。じゃあ、何から話そうか。』

妹紅「絶影さんの事が聞きたい！」

『ブツ』

侵二「・・・何故ですか？」

妹紅「最近有名な妖怪さんの話聞きたくて・・・何か知ってる？」

『（侵二、話すぞ。）』

侵二「（・・・自由に。）」

『・・・妹紅、今ここに妖怪が居ても驚かないか？』

妹紅「うん、驚かないよ。」

『あのな、絶影は俺だ。侵二は俺の式だ。』

不比等「何い!!」

不比等さん聞いてたのかよ!

妹紅「お父様!？」

不比等「い、今の話は本当ですか?」

『ええ、何なら証拠見せましょうか?』

俺は影に変形する。

妹紅「ほ、本当に影だ。」

不比等「絶影様が目の前に・・・」

『この事は秘密だ。今は矢川鏡二で通ってるからな。』

妹紅「凄ーい!」

不比等「勿論です!」

侵二「話が逸れていますよ。」

『おっと、失礼。じゃあ、始めようか。絶影の冒険譚を!』

侵二「いいでしょう？どうせばれますし。」

『まあ、そうなんだがな。・・・話戻すぞ』

不比等「きよ、鏡一殿はとんでもない方だった・・・」

妹紅「鏡一って凄ーい!」

『で、俺らは楽器やらの演奏で渡り歩いているんだ。』

侵二「・・・するんですか?」

『当然じゃないか。じゃあ、今から演奏するぞ。』

演奏曲 MH タマミツネ戦 b g m

・・・鏡一、侵二演奏中・・・

『演奏終了!』

侵二「ありがとうございます。」

拍手が外からも聞こえる。・・・そんなに聞いてたのかよ。

不比等「感動しましたぞ!!」

妹紅「かつこいい!!」

『好評で結構。ありがとうございます。』

不比等「こうして旅をさせていたのですな。」

『まあ、そうだな。あ、敬語外させてもらおうぞ。』

不比等「……これからも娘の為に来ていただけますか？」

『勿論、行かせてもらおうぞ。……ところで、何故かぐや姫に求婚を？』

不比等「実はですな……」

妹紅「私のお母さん、死んじやったんだ。」

不比等「……それで、母代わりにならないかと……」

『……五人だ。』

不比等「は？」

『不比等さんを入れて五人が求婚者だ。』

不比等「何故それを？」

『数日前、かぐや姫に護衛の許可を貰った。だから情報が来る。』

不比等「そうですか……」

『かぐや姫がどうするかは知らない。唯、俺はあんたをできるだけ手伝う。』

不比等「ありがたい。しかし、かぐや姫が断れば私は諦めます。」

『それで結構。どうするかは不比等さんの自由だ。』

不比等「うむ・・・」

妹紅「お父様、無理しなくていいからね?」

不比等「妹紅・・・」

妹紅「鏡一、侵二。今日は家でご飯食べて行ってよ。」

『いいのか?』

侵二「よろしいので?」

不比等「構いません。ゆっくりして行ってください。」

『じゃあ、』

侵二「お言葉に甘えますか。」

妹紅「やった!」

不比等「じゃあ、待っていて下され。」

不比等さんが退出する。・・・何しよう。そうだ。

『妹紅、ちよつと見てろ。』

妹紅「何?」

『【銀糸操作】あれでいいか。』

俺は指先から銀の糸を出しながら空中で編んでいく。

『・・・出来た。』

妹紅「不死鳥？」

『正解、やるよ。プレゼントだ。』

妹紅「ありがとう！」

不平等「妹紅、鏡一殿、侵二殿、準備が出来ましたぞ！」

『行くか。侵二、妹紅。』

侵二「了解です。」

妹紅「はい。」

それから、特に問題なく夕食が終わった。

不平等「今回は泊まってくたされ。」

『それじゃあ、そうさせてもらう。』

妹紅「お休みく鏡一。」

『お休み。妹紅。』

侵二「では、私はいつも通り・・・」

『立って寝るんだろ？変な奴だ。』

そう、こいつは妙な寝方をする。

侵二「こっちの方が落ち着くんですよね。」

『じゃあな。お休み。』

さて、明日は輝夜とか。忙しいな。・・・嫌じゃ無いがな。

次回へ続く

第三十話 五つの難題（鏡一編集）

side 鏡一

俺達は早朝、不比等さんの屋敷を抜け出し、輝夜の所に向かった。そして、屋敷に入る。

『お邪魔しますーす！』

輝夜「どこから入って来てんのよ！」

・・・縁側から。

侵二「お邪魔しますね。」

輝夜「貴方達、早いわね。まだみんな寝てるわよ？」

『気にすんな。それより、無理難題もとい五つの難題は？』

輝夜「火鼠の皮衣、燕の子安貝、仏の御石の鉢、蓬萊の珠の枝、絶影の首よ。」

やったぜ。ちなみに、どれも俺達で押収済みだ。

侵二「お二人共、顔が悪いです。」

『誰だ、嬉々として押収手伝ったの。』

侵二「まあ、そうなんですけどねえ？」

全員黒い、ここに光はないのか。

『んじゃ、護衛のフリしておく。侵二は俺の前な。』

侵二「了解です。・・・武器は？」

『雷斬刀出してろ。俺も新月とライフル出しておく。』

・・・久しぶりだな。このライフル。

輝夜「そのライフルって、都市の時の？」

『ああ、こいつには世話になった。勿論、これからもだがな。』

侵二「お客さんが来ましたよ。」

輝夜「じゃあ、お願いね。」

俺は輝夜の簾の端に座り込む。侵二はその逆。

不比等「失礼します。」

阿倍御主人「失礼します。」

大伴御行「失礼する。」

石上麻呂「失礼します。」

石作皇子「失礼します。」

輝夜「皆様、集まっていたいただきありがとうございます。して、集まっ

て頂いたのは貴方がたに、今から出す難題を解いていただきます。」

おっ、食いついてる食いついてる。

輝夜「難題とは、火鼠の皮衣、燕の子安貝、蓬萊の珠の枝、仏の御石の鉢、絶影の首のいずれかです。何を選んでいただいても構いません。」

不平等「……………」

五人の求婚者が相談している。……決まったようだ。

輝夜「では、阿倍御様が火鼠の皮衣、大伴様が絶影の首、石上様が燕の子安貝、石作様が仏の御石の鉢、藤原様が蓬萊の珠の枝です。期限は二週間後です。では、また後日。」

大伴御行「待たれよ、かぐや姫、そこの汚い二人は？」

輝夜「この二人は護衛です。」

大伴御行「こんな奴らがですか？」

やべえ、キレそう。

輝夜「なら、試しますか？」

おっ？いいのかね？やっちゃまうぞ？

大伴御行「なら、うちの最強の陰陽師と勝負をさせましょう。」

あ、侵二の口が歪んでる。

侵二「主上、任せてもらっていいですか？」

『どうぞ。』

大伴御行「一人でですか？」

陰陽師1「相手になりませんな。」

・・・そういや、こいつが俺の首だったっけ？

陰陽師1「こんな奴、すぐに終わりますよ。」

侵二「さあ？どうでしょうか。」

陰陽師1「ぬかしおって！」

陰陽師が靈力を込めた札を投げる・・・普通ならダメージが入るだろう、普通なら。

侵二「なんですか？今のは？」

陰陽師1「ひるみもしないだど!？」

侵二「終わりですか？・・・残念です。」

陰陽師1「ひっ！」

おい、侵二、そう言いながら雷斬刀に雷を帯電させるな！

輝夜「そこまです。」

大伴御行「何故だ！」

侵二「賢明な判断ですね。」

陰陽師1「助かった・・・」

圧勝、その一言で済む。

大伴御行「くっ！覚えていろ！」

陰陽師と共に逃げていく。しよぼい悪役かよ。

輝夜「では、また。」

他のメンバーも帰っていく。・・・不比等さんを除いて。

輝夜「？貴方は？」

不比等「かぐや姫・・・正直に申して下さい。貴女は結婚する気がないですね？」

輝夜「・・・!!」

『輝夜、不比等さんは信用できる。話して大丈夫だ。』

輝夜「なら・・・」

輝夜は月の住民であること、次の満月に迎えが来ることを明かした。

不比等「そうでしたか・・・なら、私は婚約破棄をします。」

輝夜「何故ですか？」

不比等「もし、手に入れたとしても、絶対に心を開いて下さらないでしょう?。」

輝夜「そうね・・・ありがとう。不比等さん。」

不比等「しかし、他の四人は？」

『それなら大丈夫だ。』

不比等「何故ですか?。」

『侵二、』

侵二「御意。」

不比等「これは!!。」

『そう、お題の物、全部こっちで押収している。』

不比等「絶対に無理だったと?。」

『イエス、すでに仕込まれていたのさ。』

輝夜「不比等さん。お願いがあります。」

不比等「何ですか?。」

輝夜「私と結婚する、ということにしていただけですか？」

不比等「それで他の四人を？」

輝夜「ええ。駄目かしら？」

不比等「一度惚れた方です、お手伝いしましょう。」

『・・・決まりだな。』

侵二「では、これを・・・」

侵二が不比等さんに蓬萊の珠の枝（本物）を渡す。

不比等「分かりました。これでうまく騙しますぞ。」

輝夜「お願いします。・・・娘さんの件ですが、連れてきて下さい。」

不比等「ありがとうございます。」

『あ、不比等さん。俺達護衛が絶影と饕餮だつて事は秘密で。』

侵二「もし破ると・・・」

不比等「・・・殺すのかね？」

侵二「いえ、何も。ばれたらしようがないですね。」

不比等「何ですかそれは・・・とにかく、お任せください。」

輝夜「お願いね。」

不比等「かぐや姫、口調が・・・」

輝夜「ああ、あれしんどいのよね。これでいい？あと、私の名前は蓬萊山輝夜よ。」

不比等「ええ、いいですよ。そして、宜しく、輝夜殿。」

・・・随分と歴史が変わったもんだ。

『じゃあ、不比等さんにバラすけど、俺の本名は神矢龍一だ。知ってるかな？』

不比等「か、か、かつ、神矢龍一!?あの龍神様の!？」

『正解、と言っても拝むなよ?面倒だから。』

不比等「話すのはこのままで?」

『勿論、そうしてくれた方が嬉しいな。』

不比等「分かりました。・・・では、絶影と言うのは?」

『絶影は元々俺が正体を隠すための名前。だが、やりすぎてな・・・』

不比等「はあ、」

侵二「で、人間になっているんですよ。」

不比等「では、妹紅が見たという不思議な術は?」

『銀糸操作な。あれは能力。一応、他にも魔術や陰陽術は使える。』

不比等「……何者ですか？」

『……わからん。』

侵二「まあ、そんな感じですよ。」

輝夜「どんな感じよ。」

不比等「……そろそろ失礼します。鏡一殿、侵二殿、護衛、頑張つて下され。」

『おう、またな。』

侵二「では、また。」

不比等さんが去って行った。

『で、輝夜、話があるんだが。』

輝夜「何？」

『お前、帰りたいのか？』

輝夜「帰りたいわけじゃないじゃないっ…… どうせ、いい実験道具よ。」

『じゃあ、どうしてほしい。』

輝夜「……守って頂戴、月の奴らから。」

『やれやれ・・・元月の英雄が裏切りか・・・』

輝夜「それは・・・」

『・・・楽しそうだな。どうせ月には行けないんだ。それに、今は死んでいるんだ。死人が裏切っても裁けるまい。侵二、殺るか?』

侵二「ええ、逝きましようか。」

輝夜「ねえ、何か不吉なものを感じただけけれど。」

・・・聞こえない。俺はコロンに出てきたナイト○ロンの仮面をつける。

『どうだ?・似合うか?』

輝夜「まさか、本当に・・・」

『ああ、元月の軍人鏡一。もとい絶影。貴女をできるだけ守ろう。』

侵二「保証はしないですよ?」

輝夜「ありがとうっ!」

『ま、その前にあの俺の首取りに行った貴族のめさないと。なあ?』

侵二「そうですねえ。」

輝夜「ちよつと、二人共怖いから止めて。」

『さて、忙しく（楽しく）なりそうだ。』

俺達は口を三日月に歪めて笑う。

そして、貴族達が再び集まった・・・

次回へ続く

第三十一話 嘘だらけの五つの難題（鏡一主犯）

side 鏡一

遂にこの日が来た。

輝夜「じゃあ、護衛のふり、お願いね。」

侵二「了解です。」

『了解。侵二、武器出してろよ。』

侵二「はい。．．．ところで、数日前まで何を？」

『ライフルのメンテナンスと強化。どんな弾でも撃てるようになった。．．．勿論、非殺傷も。』

侵二「随分とこだわるんですね。」

『ああ、好きだからな。このライフルが。』

実を言うと、前世でデユナメスのライフルを見て、感動したため、フレームは同じだ。

侵二「そうなんですか．．．」

『まあな。月でもこいつには世話になった。』

侵二「後ろ向いて三キロメートル先の的撃ち抜いたり？」

『そうそう、地上から成層圏の核ミサイルのジョイント部分撃ち抜いたりもな。』

輝夜「二人共、来たわよ。」

『了解。』

侵二「では、黙りますね。」

貴族達が来た。大伴御行ぐらいだ。面倒なのは。おっ、妹紅もいるな。

阿倍野「では、私から紹介します。これが火鼠の皮衣ですぞ！」

『(・・・) 侵二』

侵二「(偽物です)」

輝夜「では、ここで火をつけます。鏡一！」

『御意。アシユタロス。』

Qそこまでしなくても・・・

A慈悲など与えるな。

火鼠の皮衣(偽)が消し炭になる。やったぜ。

阿倍野「ああ！」

輝夜「残念ながら失格です。次、どうぞ。」

石作「これが仏の御石の鉢です！」

勿論偽物。てかどう見ても違うだろ。

輝夜「明らかに違います。次、どうぞ。」

・・・石上さんは手に入れようとして骨折。失格となった。

大伴「次は私ですな。これが！絶影の首です！」

嘘つけ、ここに本人がいるんだ。

輝夜「大嘘です。」

大伴「なっ、何を証拠に！」

輝夜「・・・絶影、来なさい。」

おやおや。もうお呼びか。

『御意。何でしょうか？』

輝夜「この首、貴方のものですか？」

『はあ、違いますが・・・』

大伴「嘘だ！嘘だ嘘だ嘘だ！誰か来い！」

侵二にのめされた陰陽師が来た。

大伴「嘘だ！貴様こそが偽物だ！」

『ウルサイナア。』

大伴「ひっ！」

侵二「陰陽師さんは私が相手にしますよ？ねえ？唯の陰陽師さん？」

陰陽師1「ひいっ！」

大伴「に、逃げるぞ！」

『ニゲラレナイヨ。【影踏み】。』

大伴「あ、足が……」

『ネエ？ダレガニセモノダツテエ？』

大伴「ゆ、許して……」

『どうしようか。侵二？』

侵二「……無抵抗の人はやめましょう。寝覚めが悪いです。」

『……そうだな。失せろ、てめえら。二度と来るな。』

大伴「ひいっ！に、逃げるぞ！」

陰陽師1「はいっ！」

逃げて行った。ざまあ。

侵二「ふふふっ。」

『はははっ。』

妹紅「鏡一！凄ーい！」

『そうか？』

不平等「お見事ですな。・・・少々不気味でしたが。」

『わざとだ。』

輝夜「次、不平等さんね。」

不平等「これです。・・・と言っても渡されましたからな。」

輝夜「合格です。」

不平等「妹紅、輝夜姫は話した通り遠い星の人だ。だから、結婚はしない。でも、私の友達だ。」

妹紅「分かった。輝夜、宜しくね？」

輝夜「ふふっ、宜しくね。妹紅。」

『めでたしめでたし』

侵二「ではないですね。」

『いや、そうなんだがな?』

侵二「大体二週間後に月から来るんでしよう?」

『来るな。・・・月には浄化能力のある武器が多い。当たるとなよ?』

侵二「喰えばいいのでは?」

『それだ。』

輝夜「貴方達がいると常識が逃げていくわね・・・」

『まあ、俺達は常識という流れに対する魚のような感じだな。』

不比等「それを貴方がたが言われるとやけに説得力がありますな。」

妹紅「ねえ、鏡一。他の式神さんってどんな人なの?」

『侵二、説明するか?』

侵二「そうですね。」

『まず、侵二。こいつは見れば分かるよな。他にも三人いてな。壊夢、風魔、幻夜の三人だ。』

輝夜「とりあえず常識外れだというのが分かるわ。」

『壊夢、こいつは凄い怪力だな。鬼子母神以上だ。「ぜよ」口調が特徴でな、酒作りが上手い。』

「不平等」「作る酒と言うのは？」

『神狂いや魔水。知ってるか？』

不平等「・・・流通するのがごく稀の伝説の酒ですか？」

・・・何してんだ。壊夢。

『・・・多分。』

侵二「気を取り直して行きましょう。次は風魔ですね。」

『あいつは真面目だ。侵二と同じようにな。飛ぶのが速くてな、光の速さで飛び回るぐらいだ。特技は鍛冶などだな。剣術も凄い。』

妹紅「へえ〜」

『最後は幻夜、あいつは俺達の中でも気分屋でな。凄いマイペースだ。植物が好きでな、いつもは優しいんだが、二重人格でな。戦闘時は口調は強く、性格も変わるんだ。』

輝夜「やっぱり化け物しかないじゃない。」

『まあ、俺は無敗だし、侵二達も俺以外には全勝だ。』

輝夜「月の都市、滅ぼせるんじゃないの？」

『俺たちのうち一人で十分だな。・・・綿月は無理かもしれんが。』

侵二「知り合いですか？」

『俺の元弟子みたいなものだ。．．．あの時以来会っていないが。』

侵二「主上の弟子ですか．．．なら、会った時は主上に任せますね。」

『悪いな。迷惑かける。』

不比等「鏡一殿は昔から凄かったのですな．．．」

『照れるぜ。』

輝夜「褒めてないと思うわよ．．．」

『どちらにしろ、依姫と豊姫が来ないと俺達は止められん。』

侵二「さて、あと数日ですよ？月からのお迎えが来るのは。」

『俺の指示がない限り殺すなよ？知り合いかもしれんからな。』

侵二「了解です。．．．ただし、輝夜殿、不比等殿、妹紅が襲われた場合、命令は無視します。」

『当たり前だ。やって構わん。』

侵二「御意。」

『じゃあ、結界貼るか。．．．我の結界の中、影、必ず有り。壊れることなく、唯、我の命のもとにあり続ける。結界、展開！』

見えない結界を展開する。俺、侵二しか破れない。

侵二「出来ましたか？」

『出来たぞ。』

侵二「なら、私も。．．．この中に存在せし者、必ず侵される、故に浄化されぬ。不浄化結界、展開！」

『．．．こんな物何で作ったんだ？』

侵二「浄化魔法や神対策に。」

『．．．おかげさまで絶対に負けないわ。』

『ハツハツハツ』

乾いた笑みが空に響いた。

．．．逃げろ、月の使者よ。

次回へ続く

第三十二話 裏切り者

side 鏡一

輝夜、不比等さん、妹紅しかいないから絶影になっておこうかなとか考えてたら・・・何だよ、この大群。何？竹取物語の護衛なの？邪魔だよ？

輝夜「帝からの護衛ね・・・」

「そーいや帝も求婚してたっけ。」

『あれ？帝さん来てた？』

輝夜「断つたらすぐに諦めたわよ。」

・・・ここのお偉いさん方異様に優しくね？

『にしても多いだろこれ！今から屋敷に突入でもするのかよ！邪魔だよ！』

・・・全く、これではライフで一掃出来ないではないか。月の使者が全員気絶させるのを強く希望します。

侵二「まあまあ、・・・ところで、作戦は？」

『あ、そうだな。・・・輝夜は使者の注意引き、不比等さんと妹紅は俺の金属シールド内で待機、侵二は命令があるまで隠れていてくれ。俺は屋根にいる。輝夜の合図でスタートだ。』

侵二「了解です。」

『作戦名は【抵抗軍の舞】（レジスタンスダンス）だ。』

輝夜「何そのネーミングセンス。」

不比等「私達は隠れているだけでよいのですか？」

『その後逃走を謀るから気絶されると困るのでな。待機という状態にさせてもらう。』

不比等「分かりました。」

妹紅「無理しないでね？」

『俺の辞書に不可能と無理という文字はない。』

侵二「挫折とか諦めはあるんですがね。」

『なんだとテメエ。』

侵二「冗談ですよ。．．．ところで逃げ場所は？」

『作る。』

侵二「了解です。」

輝夜「いやちよつと待って。作るって何よ。」

『いや、だから遠い場所にちよつと。』

不比等「もう常識が消えていますな。」

失礼な、俺にだって常識ぐらいあるさ。・・・多分。
そうこうしているうちに夜になった。

侵二「満月ですか・・・力が漲りますね・・・」

『そうか？俺は全くだが。』

俺は満月でも力が漲らない。新月の時と三日月の時に発生する。

侵二「・・・基本的に満月の時に強くなるのですが。」

『そんなもんかね。・・・来たぞ、スタンバイ。』

侵二「了解！」

俺は前に作った仮面をつける。・・・一応有名人なので。

『うわあ・・・』

月からお迎えの車・・・ではなくいかにも機械らしいロケットが来た。・・・ロマンやセンスのない奴らだ。

周りにいた護衛の兵達が一斉に弓矢を撃つ、が、無効。

突如ロケットから三分間の石のような光が出る。

兵士達は「目があああ」とかにはならず気絶。

駄目じゃねえか

『ここまで役に立たないとさすががしいな。』

月のロケットから兵士が出てくる。・・・勿論、永琳もだ。

永琳「姫様・・・戻りましょう。」

輝夜「嫌よ、私はここにいたいわ。・・・だって、楽しいのだから。」

永琳「分かりました。」

兵士1「永琳様、此方に。」

永琳「残念ながらお断りするわ。・・・元々姫様の従者だもの。姫様に従うわ。」

隊長「やはり裏切ったか。・・・やれ。」

一斉に銃口が向く。

永琳「姫様、逃げて下さい。ここは私が！」

輝夜「・・・大丈夫よ。助けなさい!!絶影!!!」

ミッシヨンスタートだ!絶体絶命?まずはそのふざけた幻想をぶち殺す!

bgm ガンダムW White Reflection

『了解！』

兵士2 「何処だ！」

『狙い撃つぜ！！』

兵士1 「なっ！」

兵士2 「馬鹿な・・・」

二十人ほどの兵士の銃のみを撃ち抜く。

『お呼びですか？姫様？』

輝夜 「前にいる奴らを追い払って頂戴！」

『了解！侵二、カモン！』

侵二 「御意！」

『姫様のご命令だ。追い払えだど。』

隊長 「たった二人、さらに妖怪ごときが！」

『先に聞く、何番隊だ。』

隊長 「貴様に言っても分からないだろうが・・・五番隊だ。」

五番隊・・・ああ！勝手な隊か！

『了解。侵二。』

侵二「はっ？」

『サーチアンドデストロイだ。殺るぞ。』

侵二「了解！」

『姫様！屋敷の中に！』

輝夜「お願いね！永琳、行くわよ！」

永琳「え、ええ、誰だか分かりませんがお願いします。」

『お任せあれ。』

隊長「ちっ！やれ！」

『侵二！半分頼んだ！ライフル変換！散弾銃！』

侵二「了解！」

『乱れ撃つぜ！』

兵士「ぐあっ！」

五人を撃ち殺す。楽勝だな。

隊長「何をしている！やれ！」

『……絶影流、【影斬り】！』

兵士2「うわあっ！」

影を切り取る。．．．知ってるか？影がないのは存在しない証だ。残りの五人の兵士も消える。

侵二「片付きました。全員美味しくいただきました。」

隊長「ば、馬鹿な．．．」

『最後だな。どうする？』

侵二「お任せします。」

『了解。おい、てめえ。』

隊長「なんだ！」

『依姫と豊姫の様子はどうか。答えれば助けてやるよ。』

隊長「二人共立派に働いているよ！いつか私の物にするのさ！」

『元気か．．．』

隊長「さあ、私を解放しろ！」

うぜえ。

『お前は生かすと言ったな。』

隊長「そうだ！早くしろ！」

『あれは嘘だ』

隊長「え？ウワアアア！」

ダンダリオンで谷底に落とす。やったぜ。

『さて、次の仕事だ。』

俺はロケットに向かう。

『あつた、通信装置。宛先は依姫でいいか。』

・・・絶影電文送信中・・・

『よし、届いたかな？』

side out

side 依姫

兵士3 「隊長！五番隊が勝手に地上へ！」

「何ですって？・・・急いで連れ戻します。ついてきなさい。」

全く、迷惑だ。鏡一が生きていればこんな事には・・・

兵士4 「隊長！電文です。」

「見せて下さい。」

『拝啓、依姫様』

突然ですが、電文を送ります。先程、我々のテリトリーで、女性に武器を向けていたため

処分しました。とりあえず、電文の送信リストから適当な所に送信しました。

勝手ながら申し訳ありません。 敬具 絶影

P S

すまん。』

兵士4 「何と？」

「……五番隊が壊滅しました。壊滅させた妖怪からの電文です。」

兵士3 「まさか！一応精鋭部隊ですよ？」

「しかし、絶影は地上最強の妖怪だそうですよ。一理あります。…とりあえず、追いかけるのはやめましょう。」

兵士3 4 「了解！」

体…
…それにしても、何故妖怪が電文を？それに、『すまん』とは一

「まさか、ね…。」

side out

side 絶影

俺はロケットをレラージュで粉々にした。証拠隠滅完了。

輝夜「絶影！ありがとうございます！」

永琳「ありがとうございます。」

『敬語やめろ、八意永琳？』

永琳「何故、私の名前を!？」

『それはな……』

俺は仮面を外す。

永琳「嘘……」

『久しぶりだな。永琳。そして、悪かったな。すまん!』

永琳「鏡……生きてて、良かった、よお!」

『ただいま、永琳。だから泣くな。』

永琳「うんっ。本当に、良かった……」

輝夜「良かったわね。永琳。」

永琳「ねえ、鏡一、何で生きてたの?」

『俺が神様だったから。』

永琳「鏡一ならあり得るわね。・・・本当に心配したのよ。」

『悪いな。』

永琳「良いわよ。今ここにいるのだもの。」

『ありがとう。』

侵二「では、逃げ場所、作りますか？」

『そうだな。ダンダリオン。さあ、一人ずつ入れ。直ぐにつく。』

輝夜「ここは、竹林？」

『yes. じゃあ、始めるか。ザガン展開、竹、極限強化。この林に許可なく入りし者、未来永劫迷うように。我、ここに命ずる。』

侵二「次は私ですね。我、ここに命ずる。作りし屋敷、決して時に喰われること無きように。」

数秒前の竹林が懐かしい。今は高々と竹が生え、見事な屋敷が建っている。

輝夜「これは？」

『プレゼントだ。この竹林は外敵から守るために。』

侵二「この屋敷は決して朽ちない屋敷です。どうぞ。」

永琳「ありがとう。鏡一。．．．姫様、蓬萊の薬のことですが。」

輝夜「ああ、いいのよ。」

永琳「いえ、私も飲みました。」

輝夜「え？何でよ！」

永琳「いつまでもお仕えますよ。姫様。」

輝夜「永琳．．．ありがとう！」

．．．いい話だ。

不比等「妹紅！何やってる！」

．．．え？

妹紅「私も一緒にいる！友達だもん！」

．．．飲みやがった。

不比等「．．．なら私も！」

オイオイオイ!!．．．ああ、飲んじまった。って若返つとる！

不比等「おお、若返つたぞ！」

輝夜「貴方達、何で？」

妹紅「友達でしょ？」

不比等「そうですね。迷惑かもしれませんが、私たちも一緒ですぞ！」

輝夜「……馬鹿ね、貴方達。でも、ありがとう。」

『不比等さん、名前変えるか？有名すぎて面倒だろ？』

不比等「そうですね……」

侵二「【義炎】（ぎえん）はどうでしょう？」

不比等「義炎ですか……気に入りました。なら、私は今日から藤原義炎だ！」

侵二「喜んでもらえて何よりです。」

紫「ただいまくあら？お取込み中？」

『おお、紫、丁度いいや。お前の世界の住人候補だ。』

永琳「え？」

紫「分かりましたわ。幻想郷は全てを受け入れますわ。」

『……というわけだ。お前等も受け入れられるわけだ。後々俺もそつちに行くよ。』

永琳「じゃあ、お願いしますね、紫さん？」

紫「紹介が遅れたわね。私は八雲紫。貴女達は？」

永琳「私は八意永琳。」

輝夜「私は蓬萊山輝夜よ。」

義炎「私は藤原義炎だ。」

妹紅「私は藤原妹紅！」

『四名様プラスこの屋敷だ。頼む。』

輝夜「屋敷って呼びづらいから【永遠亭】（えいえんてい）なんてどう？。」

永琳「いいですね。そうしましょう。」

義炎「では、輝夜殿、永琳殿、しばらくやっかいになります。」

紫「じゃあ、四名様ご案内ー」

『じゃあな。永琳、輝夜、義炎、妹紅。』

永琳「じゃあね！」

永琳達がスキマに入った。

紫「ふう・・・絶影、月ってどんな所なの？」

『技術が凄い。俺のライフルみたいなのがごろごろしてる。』

紫「へえ・・・」

何気ない会話、これが後々あんな事を起こすとは・・・

次回へ続く

第三十三話 饕餮、潜入

side 絶影

『そーいや紫、何でここに来たんだ?』

紫「あ、そうだ。師匠、私の式候補が見つかったの!」

『あ、そう。式に出来んのか?』

紫「私なら大丈夫よ!」

慢心かな?え?俺?今までの例がないのだよ。

『で、種族は?』

紫「九尾の狐よ!」

侵二「へえ・・・」

『おや、侵二、興味あるのか?』

侵二「そりゃあ私の故郷の妖怪ですしね。ちよつと楽しみです。」

紫「で、私一人でやってみたいの!いい?」

・・・いい成長になるか。

『ああ、いいよ。(侵二。)』

紫「やった！じゃあ、しばらく留守にするわね！」

侵二「(了解。)」

『じゃあな。気をつけてやれよ。』

侵二「では、私は幻夜の所に。」

『行ってこい。じゃあな。』

紫がスキマに入った。・・・よし。

『侵二、後は頼んだ。人に変えておく。好きにしてくれ。』

侵二「能力や武器は？」

『武器は形を変えさせてもらう。太刀にな。能力はそのままにしておく。』

侵二「御意。」

『んじゃ、俺は俺の空間で修行しておく。また今度。』

侵二「主上、道具は借りても？」

『いつも通りだ。勝手にしろ。』

侵二「じゃあ、遊んできますね。」

『せいぜい好きにしな。送るぞ。多分この辺の九尾ならあいつだ。・・・転送！』

侵二「了解！」

侵二がダンダリオンで転送された。

『よっしや。後は頼んだ。』

side out

side 侵二

「よつと。．．．ここですか。」

門番1「誰だ！」

．．．何故主上といると毎度門番に話しかけられるんですかね。

「新しく雇われたものです。」

門番1「そうか。すまん。こつちだ。」

え？即戦力ですか？

門番1「こつちだ。では、頼んだ。」

「了解です。ありがとうございます。」

門番1「何、これも仕事だ。お主はまず中の妃殿に挨拶をしておくように。」

「わざわざありがとうございます。」

さて、少々驚きましたね・・・まさか、即戦力とは・・・

「とりあえず入りますか。・・・失礼します。」

??? 「入れ。」

「初めまして。今日から護衛に就任した侵二と申します。宜しくお願いたします。」

??? 「私がこの妃だ。よろしく頼む。」

「では、妃様と呼ばせていただきます。」

妃「いいぞ。なら、侵二と呼ばせてもらう。」

「はっ。」

妃「まずは話相手になれ。」

「分かりました。なんですか?」

妃「お前はどこからきたのだ?」

「しばらく旅をしていました。故郷は向こうの大陸です。」

妃「・・・私と同じか。なら、向こうの料理も・・・」

「勿論、知っていますよ。」

妃「本当か!なら、教えてくれないかな?」

「喜んで。何を教えましょうか？」

妃「そうだな・・・」

随分と親しみやすいですね。まあ、同じ故郷ですしね。

・・・侵二、妃料理中・・・

「今更ですが、勝手にしていいのですか？」

妃「いいぞ？・・・それにしても、美味しいな。」

「・・・何なら、何か食べたいものでも作りましょうか？」

妃「そ、そうか？なら、油揚げを頼む。」

やっぱり狐の妖怪ですね・・・

「少々お待ちを・・・」

・・・侵二、高速料理中・・・

「どうぞ。」

妃「どれ・・・んっ！これは!!」

「まずかったですか？」

妃「美味しい!!何だこれは!？」

良かった・・・尻尾が出ているのは黙っていよう。

妃「今までで一番美味しかったぞ。」

侵二「光荣です。」

妃「ところで・・・見たか？」

「何をですか？見たかも知れませんが。」

妃「尻尾だ。見たのか？」

おやおや、そんなに妖力を出して・・・

「見ましたが、問題でも？」

妃「え？」

「え？」

沈黙。

妃「驚かないのか？気味悪くないのか？」

ああ、そういうことですか。

「いえ、別に？襲われないのでいいですよ？何度も喰われかけたので、今更驚きませんね。」

妃「面白いな。なら、私の種族を当ててみる。」

「九尾の狐ですか？随分と位の高いことで・・・」

九尾「よく分かったな。貴様も妖怪か？」

言うとは面倒ですね・・・

「名乗れる妖怪じゃないですよ。」

九尾「フン、そうか。つまらんな。」

「申し訳ないです。」

まあ、驚きますしね？

九尾「まあいい。私は寝るとする。」

「了解です。では、必要ないと思いますが見張っていますね。」

九尾「フン。（・・・感謝する。）」

おや？つぶやきが・・・まあいいですがね。

九尾さんが寝ました。女性でしたし、ちよつと料理の話に喰いついてきて嬉しかったですし・・・興味が出ましたね。

おや、誰か来たようだ。

盗賊1「おい、動くな。」

盗賊2「動くと殺すぞ。」

盗賊3 「金目の物出せ。」

「うるさいですね・・・寝ている女性に迷惑ですよ。」

盗賊2 「なんだとテメエ！」

「はあ・・・いただきます。」

・・・侵二捕食中・・・

「うわ、不味いですね。食べるんじやなかった。」

やはり人間は不味いものと旨いものがありますね・・・

「まあ、抵抗しませんでしたし、良しとしましょう。」

さて、寝ますか・・・紫殿来ますし。

side out

side 九尾

今日、面白い奴が来た。侵二と言ったかな。私と同じ故郷で、私が九尾だと知っても驚かなかった。嬉しかった。しかも料理が上手かった。美味しかった。

彼は「大した妖怪じゃないですよ」と言っていたが嘘だろう。何か秘密があるのかもしれない。

??? 「失礼しますわ。」

「誰だ！」

??? 「私は八雲紫。貴女、私の式にならないかしら？」

式？確かに、私の力は強力だ。故に何度か利用されかけた。実を言う
うとあまり好きではない。

「私を式にしてどうする？」

紫 「人と妖怪が共存できる世界の為に使わせてもらおうわ。」

面白い。しかし、何かが私の気持ちを止めた。

・・・侵二。

何故だろう。彼が頭を横切る。昔から人間や妖怪にはあまり興味が
なかった。恋愛感情などもつてのほかだ。しかし、彼は何故か印象
に残った。

「・・・少し、時間をもらえるか？考えておく。」

紫 「ありがとうございます。では、二日後にまた・・・」

紫とやらが消えた。面白そうだ。しかし、違和感に気づいた。

・・・何故侵二が来ない？

もしや、この事を予測していたのだろうか。・・・まさか。紫がこ
れないようにしただけのはずだ。あの妖怪は私よりも強かった。多
分勝てないだろう。

「寝るか。」

その日、私は二人の人物で頭がいつぱいのまま眠った。

————朝————

侵二「おはようございます。」

「ん、ああ、おはよう。」

侵二「朝食の用意が来ています。どうぞ。」

「ありがとうございます。．．．ところで、貴様は四凶を知っているか？」

侵二「ええ、当然でしょうね。」

そう、四凶。昔、私が憧れていた妖怪。しかし、数百年前出て行ってしまった。私は噂だけだが、憧れた。特に饕餮さんに。こんな人と将来を一緒にいられたら、などと何度も思った。だから日本に来た。しかしどうだ。四凶のうち三人は付き合っていると言うではないか。私はシヨックだった。饕餮さんはまだいないようだが、時間の問題だろう。だから、せめて一目会ってみたいと思っている。

「私が此方に来た理由は四凶に会いたかったからだ。」

侵二「なるほど、四凶の為に、ですか。今は絶影の式らしいですよ。」

「何故知っているんだ？」

侵二「旅の途中に。しかし、もうしばらくすると人と妖怪の共存で生きる世界へ行くそうですが。」

「何!? 本当か!？」

侵二「ええ、どうかしましたか？」

「いや、なんでもない。」

侵二「・・・四凶の方に恋心を？」

「ぼつ、馬鹿を言え! 無理に決まっているだろう!」

侵二「行けると思いますよ? 素敵の方だと思いますし。」

「そ、そうか?」

侵二「ええ。」

侵二が微笑を浮かべた。何故だろう。心が動いた。

侵二「では、鍛錬をするので失礼します。」

侵二が外に出た。

side out

side 侵二

・・・まさか、四凶の一人が私なんて言えない。

「ぶっ・・・」

とりあえず、剣を振る。・・・スピードを下げて。

「侵二流薙刀術応用！【昇竜斬】！」

刀を下につけて跳躍と共に切り上げる。まあ、合格ですかね？

九尾「凄いぞー！」

「ありがとうございます。」

九尾「凄かったぞ。・・・ところで、貴様には妻はいるのか？」

「いえ、いませんよ？こんな奴に見合う人はいないでしょう。」

九尾「そうか？勿体無いな。」

・・・何故よく言われるんですかね。そんなに凄いですかね？

九尾「ところで、侵二だけに話すが、私は昨日八雲紫に誘われてな。人と妖怪の共存できる世界を作るための式にならないかと言われたのだが。どうすればいいと思う？」

「好きにすれば良いのでは？誰かに仕えるのも面白いですよ？」

事実、主上に仕えていますし。

九尾「そうか・・・ううむ。」

「まあ、どちらにしろ勧めますね。最近、貴女が妖怪では？という噂もありますし。」

九尾「決めた。やろうと思う。・・・四凶にも会えるかも知れないしな。」

「それがいいと思います。」

九尾「二日後、八雲紫が再び来る。その時に侵二も来い！」

「え？私もですか？」

九尾「興味が沸いた。一緒に来い。」

「・・・喜んで。」

・・・だから、何故そこで顔が赤くなるんですかね。

それにしても、九尾殿の妖怪の確認もその日の夜なんですよね・・・

まあ、いざとなれば殺りますか。

・・・私の気になる人の為に。

次回へ続く

第三十四話 真の妖怪

side 侵二

「・・・なので主上、殲滅します。」

『まあ、弟子と式のためだ。許可する。その代わり、自分でけじめつけろ。』

「ふっ、当然じゃないですか。」

『ははっ。そうだったな。』

「・・・まあ、やらせていただきます。」

『はいはい、・・・死ぬなよ？無用な心配だが。』

「まさか、あいつ等で死ぬのは不本意ですよ。」

『まあ、あれだ。しっかりやれ。』

「御意。」

陰陽師1 「妃様と妖怪が対談しているぞ！」

陰陽師2 「やはり妖怪だったか！皆の者、行くぞ！」

阿呆くさいですが、一応ついていく。裏切り者？元から敵ですよ。

side out

side 九尾

紫「・・・じゃあ、来るのね？」

「ああ、貴女の式になろう。」

あれから二日、私の心は決まっていた。

紫「分かったわ。今日から貴女の名前は八雲藍（やくもらん）よ。いわね？」

「はい、紫様。」

陰陽師1「そこまでだ！妖怪！我らが退治してくれる！」

「なっ！」

その数、ざっと百人。紫様でも勝てないかもしれない。

陰陽師2「さらに！貴様達のが能力が使えないようにしてある！覚悟しろ！」

紫「くっ！能力が使えない！しまった！」

もう駄目だ。私は覚悟を決めた。

侵二「なんて、上手くいくわけがないですよね。」

「え・・・？」

紫「侵二さん!？」

侵二「ああ、紫殿。たまたま気分でここにいたらこうなりました。」

陰陽師3「貴様!この裏切り者が!」

侵二「何寝言言ってるんですか?元々味方じゃありませんでしたよ?」

陰陽師4「しかし、この数!さらに能力も使えぬ!我らの勝ちだ!」

侵二「それ、フラグですよ?」

陰陽師1「ふらぐ?まあいい!殺れ!」

侵二「九尾殿・・・いや、藍さん。四凶に会いたいそうでしたね。」

「何故その話を?」

侵二「さあ来なさい陰陽師!四凶妖怪饕餮が相手だ!」

私が好意を初めて持った人、侵二。彼こそが、私が憧れた人、饕餮だった。

侵二「さあ、せいぜい楽しませて下さいね?」

side out

side 侵二

bgm 魔王魂 ダンジョン12

陰陽師1 「はっ！何が四凶だ！やってしまえ！」

「捕食、結界。いただきます。」

紫 「嘘……」

藍 「け、結界をまるごと……」

陰陽師2 「ば、化け物！」

「ご馳走様でした。さて、次は貴方達ですかあ？」

主上というおかげでどんどん妖力が増えていくので今では翼が十枚に。

「じゃあ、いただきます。」

取り敢えず前方の十二人を喰う。

「おえっ。食べられるもんじゃありませんね。」

陰陽師1 「い、一瞬で十二人も……」

「これぐらい基本ですよ？本気、出しましょうか？」

陰陽師2 「ひ、ひいつ！」

「紫殿！ちょっと離れて下さいね？」

紫 「藍！離れて！」

藍「はっ、はいっ！」

「極大妖術、【黒稻妻】（くろいなずま）！」

陰陽師が雷で焦げる、否、消し炭になる。

「数が多いですし、騒ぎにしたくないので。これでもどうぞ！」

陰陽師5「何だこれは・・・ぐあっ！」

「殺生石です。触ったり近づくと死にますよ。ささやかなプレゼントです。」

紫「絶対にあんなプレゼントは嫌ね・・・」

「感想述べている暇があったら逃げますよ！閃光玉！」

主上から貰った人間が浴びると二日寝込む閃光玉を投げる。

「ほら！藍さんも早く！」

藍「ああ！」

・・・侵二、紫、藍逃走中・・・

侵二「ここまでくれば大丈夫でしょう。」

紫「侵二さん、助かったわ。ありがとう。」

『全く、何してんだよ。』

紫「し、師匠！」

藍「え？」

藍さんが混乱している。

「あのですね。私の主上で紫殿の師匠の、」

『絶影だ。初めまして。』

藍「ぜっ、絶影!?!」

『気にするな。それより紫、怪我ないか?』

紫「・・・怒らないの?」

『別に?自分で反省してるだろ?なら、それを次に生かせばいい。』

紫「師匠お、ありがとうっ!」

藍「それより、侵二。まさか貴方が・・・」

「騙して悪かったですね。・・・そうです。饗養の侵二です。」

藍「饗養・・・様。」

「様付けは止めて下さいね?」

藍「し、しかし!」

「貴女は紫殿の式でしょう？敬語は主のみでいいのですよ。」

藍「しかし、その口調は……」

「私は元からですよ。……それよりも、話が。」

藍「何ですか？いや、何だ？」

「もし、藍さんの気持ちが昔から変わっていないければ。この侵二、貴女を守らせていただいてもよろしいですか？」

藍「……私は、饗養さんを尊敬していた、憧れていた。そして、侵二殿に好意を持った。……そんな人からの願い。聞き入れられないわけがない。」

「……なら！」

藍「ただし、条件がある。……その、何だ、わ、私の事をさん付けで呼ばないでくれないか？」

……ああ、気にしてたんですか。

「……なら、藍、これでいいか？」

藍「ああ！そ、それでいいんだ。」

紫「藍、本当は駄目だけれど、これだけは認めるわ。おめでとう。
(絶対に追いつくから！)

藍「ありがとうございます！紫様！」

『おい、侵二。何が出来ますかね？だ。出来てんじやねえか。』

「ええ、出来ましたね・・・私でいいんでしょうか？」

『はあ・・・一人だった女性の孤独を紛らわせ、百人ほどの魔の手から救つてもお前はくだらないのか？』

「・・・今考えるととんでもないことしてたんですか。気づきませんでした。」

『ほら、それぐらい一生懸命だったんだろ？お似合いだぞ。てめえら。』

「藍、本当に俺でいいか？」

藍「ああ！勿論だ！」

・・・実は、誰にも言っていない事がある。数百年前だったか、主上との旅の途中、迷子になっていた狐の子がいた。その子が、藍そっくりなのだ。多分、彼女は気づいていない。だが、昔から会っていたのだ。運命の女性に。

「主上、もし、藍や紫殿に意味なく危害を加えるような人になら変わってしまったら、殺しますね。」

『お前にやられるなら本望だ。が、多分ならないな。それより、他の奴らから守れよ。』

・・・主上は変わり者だ。ひよつとしたら、この世界の住民ではないのかもしれない。しかし、主上は主上ですから。最後までいますよ。

・・・たとえば、主上が死んでも。

side out

side 絶影

・・・結局、あいつ等は全員付き合った。侵二はもしかしたら・・・
と思っていたが不要だった。

俺だって好きな奴はいる。だが、今は駄目だ。だから気づかないふ
りを続けている。

・・・いつか、できるようになればなあ。

今宵付き合い始めた二人を祝福するように、月が明るく輝いてい
た。

次回へ続く

第三十五話 破門

side 絶影

前回から数十年、紫は相当な大妖怪になった。俺の弾幕（一厘）を躲すようになっていたり、藍の扱いも上手くなった。俺たちには及ばないが。

紫「凄いでしょう？」

だが、最近調子に乗りすぎだ。何かないものか・・・

『まだまだだろ。それじゃあ月の奴らにも勝てないぞ。』

紫「何よ、いつもいつも。」

お？ 反抗する気か？ 面白そうだ。

『事実を言ったただけだが？ 大体、それで怒るなら半人前いや、それ以下だ。』

紫「ぐっ・・・！」

『そんなに悔しけりや俺に一発でも当ててみな！ 半人前！』

紫「うるさいっ！」

『だから、「フツ」それで、「ヒョイ」怒るのは、「スカッ」駄目だつて。』

はい、零点、弾幕自体のスピードは速いがばらつきが強い。

『言ってるんだろ?』

最後の方はムーンウォークで躲す。

紫「何で、当たらないのよ!」

『貴様に足りないもの!それは!パワー!冷静!速さ!そして何よりも……』

『忍耐が足りない!』

紫「もう知らない!」

『けっ、勝手にしやがれ。何処へ行こうが知ったことか。破門じゃ馬鹿弟子。』

紫「こつちだって知らないわよ!この馬鹿師匠!」

『阿呆はお前だ。』

紫「馬鹿って言う方が馬鹿なのよ!」

『残念、俺が言ったのは阿呆だ。残念でした。』

紫「つつ!もういい!」

紫が出ていった。……まあ、発信機付けたんだけどね?詰めが甘い。

侵二「やれやれ・・・せっかく寝ていたのに・・・」

『あれ？藍は？』

侵二「・・・昨日喧嘩したんですよ。」

お前もか、ブルータゲフンゲフン侵二。

『お前もかよ。』

侵二「ええ、どっちが美しいかって。藍に決まっているのに・・・」

何してんだよ。

『阿呆、それで喧嘩かよ。』

侵二「・・・ええ。」

駄目だ、砂糖が出る。

侵二「主上は？」

『あんな奴知るか。破門だ、破門。』

侵二「・・・何度目ですか。」

『お前等よりしました。バカップルが。』

侵二「それよりも、いいんですか？」

『何かあつたらすすっ飛んで行くが、何もないだろう、好きにさせる

や。』

侵二「口は挟みませんがね？近々月に行くそうですよ？大丈夫ですか？」

・・・は？

『ポケツ！早く言え！あいつ等だけじゃあ全滅するわ！』

侵二「風魔、壊夢、幻夜は行かないそうですよ。」

『尚更駄目じゃねえか！向こうにはお前等には及ばないが化け物がいるんだからよ！』

侵二「なら、行きますか？」

『いや、喧嘩したんだ、ピンチになるまで待機だ。いいか？』

侵二「御意、他のメンバーと彼女は行かないそうです。藍以外は。」

『いいのか？それで。』

侵二「ええ、後悔しません。」

『上等、お前等はピンチの時に出勤、俺はちよつと作業してから行く。』

侵二「了解です。準備しておきます。」

・・・ついでだ、派手な演出でいこう。

『上空百メートルから落とす。着陸次第やつてしまえ。』

侵二「了解、風魔達呼びます。」

『さて、俺は……』

……数分後……

風魔「呼んだか？」

壊夢「呼んだぜよ？」

幻夜「呼んだく？」

『悪いな。紫が月に攻め込むらしくてな。後方支援や殿を頼む。』

侵二「上空百メートルからスタートだそうですよ。」

風魔「主上は？」

『俺は後で機械で攻撃しに行く。その間の撤退を頼む。』

壊夢「そこまでやばい奴がいるんぜよか？」

『いや、圧倒的に相性が悪いだけだ。そこまで強くはない。』

幻夜「具体的には？」

『浄化してくる。後は神力を所持した奴がいる。……できればリーダー格は残しておいてくれ。』

風魔「何故だ？」

『俺の元弟子兼隊長だ。俺がけじめをつけなければならん。』

風魔「了解。しかし、どうごまかすのだ？」

『仮面でごまかす。名前も大丈夫だろう。』

風魔「分かった。では、スタンバイ完了だ。」

壊夢「俺もぜよ。」

幻夜「僕も〜」

侵二「自分も完了しました。」

『よし、あいつ等がピンチになり次第送る。』

さて、紫達は何をしてるのかね？

side out

side 紫

・・・言ってしまった。師匠にもう知らない!と。

「はあ・・・」

藍「どうしました、紫様？」

「ああ、藍、実は師匠と喧嘩しちゃって・・・」

藍「そうですか・・・でも、今は月への攻撃を考えましょう。」

「そうよね。成功して師匠に認めさせてやるわ！」

藍「その意気です。」

私は集まった妖怪達に号令をかける。

「聞け！妖怪達よ！今から月に攻め行く！我らの目的は技術を奪うこと！準備出来た者からこの中へ入れ！」

私は湖と月を繋ぐ。行ける！

藍「行きましょう！紫様！」

「ええ！」

それが、地獄の始まりだった。

side out

side 藍

ありえない。月に進攻して数時間、壊滅状態に陥った。

強すぎる。その一言ですむ状態だった。初めは千を超えていた人数が今は百人程度、月の兵士は倒しても消えるのみ。圧倒的に不利。さらに紫様は混戦で行方不明だ。

『月には行くな。』「月はやめた方がいいですよ。」侵二達が言ってい

たのはこの事だったのかと今更ながら気付いた。今も月の兵は来る。私は覚悟を決めて目をつぶった。

・・・その時だった。

突如、上空から氷柱が落ち、突風が吹き荒れ、地面が隆起し、黒い雷が落ちてきた。

「え・・・？」

上空から人が四人降ってきた。一人は籠手を地面に叩きつけて着地、一人は双刃刀を持って風を起こして静かに着地、一人は槍を地面に先に突き立ててその上に着地。

そして、もう一人は薙刀を持って空中回転しながら着地。

・・・見間違えるはずがなかった。私を助け、私の憧れで、今は私の愛人の。

侵二「援軍、推参ってどこですかね？」

侵二がそこにいた。

「侵二、何で・・・」

侵二「彼女を助けるのに意味は不要でしょう？そういうわけです。」

「でも・・・喧嘩して・・・」

侵二「んな事後だ!!逃げろ!俺たちが止める!」

「っ！ああ！頼む！私は撤退する者をまとめさせてもらおう！」

侵二「了解！」

月の兵士1「逃がすな！穢れた奴らを追え！」

幻夜「悪いね〜」

風魔「ここから先は、」

壊夢「通すわけには、」

侵二「いかないので、」

四凶「全力で止める！（ぜよ！）（よく）」

侵二「さて、勝手に入った責任はあるにしろ、彼女を傷つけようとした罪、償って貰いますからね？」

この日、月と化け物五人組が激突する。その幕開けだった。

次回へ続く

第三十六話 捨てきれない思い

side 侵二

「風魔は壊夢と共に左を！幻夜は私と右を！」

壊夢、風魔、幻夜「了解！」

「行きますよ！」

bgm ガンダムW 思春期を殺した少年の翼

「最初から撃ちます！【黒雷光】！」

幻夜「応！【エアフリーズ】！」

エアフリーズで空気が凍り、兵士も凍結、又は動けなくなる。そこを黒雷光で殲滅！

幻夜「うわ、おっかないな。」

「よく言いますよ、空気を凍結させるとか、よく思いつきますね。」

幻夜「まあ、そうだがな？・・・来たぜ。」

「了解、さっさと本陣までやっちゃいましょう。あ、主上の分も残しましょうね。」

幻夜「はいはい、分かってるよ。」

「じゃあ行きましょう！」

幻夜「そうでないと！」

side out

side 風魔

「壊夢！来たぞ！」

壊夢「了解ぜよ！【溶岩砲】！」

「よし！【ハリケーン】！」

溶岩砲で巨大な焼けた岩が飛ばされ、そこをハリケーンで空気を送って点火！あたり一面が溶岩で埋まり、焼け野原に。

「よし、次だ！【切断風】！」

壊夢「【ガトリンググロック】！」

あらゆる物を粉々にする風の中に大量の岩石が飛びこむ。粉々になつた岩石があらゆる方向に飛び散る。これぞ合成技！

「【散弾岩石】！」

もはや地獄絵図だ。今頃月のお偉い方も聞きつけたところだろう。

壊夢「そろそろ本陣ぜよよ！」

「よし！潰すぞ！」

side out

side 紫

・・・大失敗だ。今私は捕まっている。

月に攻め込んだ人数は千人、今は百人以下。全滅もそう遠い事ではない。

あの時、師匠と喧嘩しなければと自責の念が沸き起こる。

月の兵士2 「依姫様！大変です！攻撃隊が半壊しました！」

依姫 「なっ！何故ですか？」

月の兵士2 「突如現れた四人組によって蹂躪されています！」

・・・え？

依姫 「妖怪さん、貴方は何者かご存知ですか？」

分からないわけがない。五人組で、私達の中でも最強と言われる集団、

「えええ！四凶妖怪達よ！」

侵二さん達が来たのだ！

しかし、四人組と言っていた。師匠はやはり怒っているのだろうか。

月の兵士3「隊長！人質を殺しましょう！戦意がくじけるはずです！」

依姫「仕方がないですね。」

・・・しかし、私が殺されるのは当然だ。それは仕方がない。

「せめて、師匠に謝りたかったなあ。」

銃口が一斉に向けられる。

「師匠、ごめんなさいっ！」

月の兵士4「隊長！此方に高速接近してくる物があります！」

依姫「何ですかそれは？」

月の兵士4「せ、戦闘機ですっ！戦闘機が高速で向かってきています！」

・・・え？

side out

side 絶影

絶影参上！俺が地上で何をしてたかって？戦闘機の製造だ！

『侵二ーこちら絶影！コードネームはシャドウ！応答願う！』

侵二「遅いですよ！情報を提供します！紫殿が捕らわれているそうですー！」

『了解！ちよつと潰して来る。風魔達にも伝えろ！突撃開始だ！』

侵二「了解！」

『あの馬鹿弟子が！師匠より先には死なせん!!』

b g m I n t h e Z o n e

『どけてめえら！絶影さんのお通りだ！』

ん？敵戦闘機？マジかよ、もうあるのかよ。・・・上等だ！撃墜してやる！

『ミサイルロック！奥義！【ひつたくり撃墜】！』

真正面から対面し、すれ違う瞬間にミサイルで撃墜！次！

敵戦闘機パイロット1「な、何だあれは！後ろに回れ！落としてやれ！」

おつと、後ろに三機か・・・やるか・・・！

『【左捻りこみ】だ！』

宙返りを途中で左に旋回し、後ろに回る、三機撃墜！

敵戦闘機パイロット2「化け物だ！逃げろ！」

よっしゃあ！待ってるよ！紫！

side out

side 紫

ありえない、師匠が来るわけがない。そう思っていた。しかし、今はどうだ。

『紫い！助けに来たぞお！』

依姫「迎撃しなさい！」

『ヒヤツハアアアア！急降下爆撃じゃあ！』

単身で突撃しに来て、助けにきたと言うではないか！

「し、師匠っ！」

『つかまれ！』

そして、私は、差し出された師匠の手を、

しっかりと掴んだ。

『よし！乗っている！俺は降りる！自動で戻るようにしてある！反省は後だ！』

「うんっ！」

師匠は飛び降りた。

「頑張つて！師匠！」

side out

side 絶影

飛び降りた俺は着地・・・するはずもなく、ツインバスターライフルを構える。

『皆様初めましてえ！』

挨拶（喧嘩）は大事。

月の兵士3「どわあ！」

壊滅

『初めまして。絶影です。』

依姫「・・・貴女が五番隊を全滅させた？」

『ええ、そうですね。・・・ところで、さっきの奴、見逃してくれませんか？』

依姫「・・・初めて会った者にいきなりですか？」

あ、ちなみに俺は仮面をかぶっているので誰かわかっていません。

『タダでは言いません。まず、私達が撤退します。』

月の兵士4 「信用できるか！隊長！やりましょう！」

『やれやれ・・・フルオープン』

ヘビーアームズに変身、全弾掃射。依姫以外気絶。

『と、いうわけです。』

依姫 「まさか、全滅・・・」

豊姫 「依姫！援護に来たわよって何事よ！」

『初めまして。絶影です。』

豊姫 「・・・貴方がやったの？」

『ええ、身の危険を感じたので。・・・で、次のメリットです。矢川鏡一の情報をお渡しします。』

依姫 「鏡一の!!!」

豊姫 「本当に!!!」

『ええ、私に勝ったら・・・ね?』

依姫 「いいでしょう！行きましょう！姉さん！」

豊姫 「ええ！」

よっしゃ、・・・弟子の成長、見せてもらおうか。

『さあ、来い!』

次回へ続く

第三十七話 弟子の成長

side 絶影

さて、依姫達と勝負することになったんだが・・・武器どうしようか。新月を出すと俺だとわかってしまう。・・・しようがない、金属器でごまかすか。

『魔装、ベリアル』

依姫「大鎌ですか・・・！行きます！」

まあ、勿論俺の戦術で通すわけでして。

『あらよつと！』

切ると見せかけてからの武器のみ絡めとる・・・つもりだったが。

豊姫「依姫！」

依姫「分かっています！その戦術は覚えています！」

避けられるので鎌の刀身の先で突く。上手いものはまだ俺が上手か。

依姫「ぐっ！」

豊姫「はあっ！」

依姫が下がる瞬間に豊姫が風を飛ばす・・・成長したな。

『ぜいっ!』

一応鎌を振った衝撃波で受け止めて両方四散。

豊姫「鏡一そっくりね・・・」

依姫「そうですね。なら!」

豊姫が切りかかって来る。おっ! 教えたこと実践してくれてるじゃねえか!

依姫「さらに行きます!」

二人で切りかかって来る。・・・圧倒的に不利だ、こっちは大鎌、相手は片手の剣だ。こっちが隙だらけになる。・・・対応策はあるが。

『【ハイパージャマー】』

豊姫「どこに行きました?」

依姫「くっ!」

距離をいったん置いてジャマーで察知不能に。まるでデスサイズのように。

『ぶった切る!』

依姫「ぐうっ!」

・・・受け止めやがった。豊姫は後ろで風を飛ばしてくる。

『ちっ！』

仮面に掠る。ダメージは無しだ。

『危ねえ危ねえ。やるじゃねえか！』

依姫「約束したんですよ！鏡一と！絶対に強くなるって！」

豊姫「私たち両方ね!!」

・・・やっべ、泣けてきた。まだ覚えてんのかよ・・・

『嬉しいだろうなあ！こっちも行くぜ！【影縫い】！』

豊姫「なっ！」

依姫「動けない・・・！」

『続けて【影龍】！行け！』

影から作り出した龍を突撃させる、が、雷によって止められる。

『おお・・・今のを消すか。』

依姫「能力も上手く扱えるようになりましたからね！」

雷・・・神力・・・そうか。

『・・・建御雷神か。厄介だな。』

豊姫「私も、本気で行くわよ！」

雷と暴風が巻き起こる。まさに地獄。あ、ここ宇宙か。

『つて冗談じゃねえ！両方妖怪に使うもんじゃないだろうが!!』

依姫「何処が妖怪ですか！これを避けている時点で化け物ですよ！」

豊姫「どんな機動性しているのよ！」

そんなこと言われても流石に当たると俺でもダメージは受ける、てか死ぬ。残機が減る。

『当たると怖いからな！火事場の馬鹿力だ！』

とは言っても実はまだ妖力は1.5割である。流石に二割出すとやばい。

『ええい！逃げてるだけじゃつまらん！【絶葬鎌】（ベリオル・ゴルドレーザ）！』

勿論、断絶させても直すつもりで切る。

依姫「しまった！きやつ！」

豊姫「依姫！きやつ！」

両方の利き手を切る。

『・・・勝負ありかな？』

豊姫「私達の負けね・・・」

依姫「鏡一、すみません・・・」

『いいや、約束は守ってるな。』

依姫「え・・・？」

一応、俺にも攻撃が入った。おかげで仮面が半分割れた。

『おい、見覚えがねえか？』

豊姫「・・・鏡一？」

依姫「死んだはずでは・・・」

『そう、生き残ってな、・・・このぎまだ。妖怪になっちまった。』

依姫「生きていたんですね・・・！」

豊姫「依姫・・・良かったわね。」

流石に神とは言わない。面倒なことになる。

『無事とは言えないがな。生きてるよ。・・・弟子が迷惑かけたな。』

依姫「いいんですよ！鏡一が生きていたのが分かったんですから
！」

豊姫「そうよ。そんなこと気にしないわ。」

『お前等……ありがとう。』

依姫「そういえば、永琳様は？」

『永琳なら地上で暮らすそうだ。輝夜と一緒にいな。』

豊姫「……無事なんですね？」

『それは保証する。……あと、悪いな、もう一緒にいられなくて。』

依姫「いいんですよ！次は負けませんからね！」

『ははっ、返り討ちだ。……そろそろ帰るわ。じゃあな、いや、またな！』

豊姫「またね！」

依姫「ちゃんと来て下さいね！」

『あ、そうだ。鏡一が生きてるってのは内緒でな？』

依姫「分かりました。では！」

『ああ。』

俺はダンダリオンで帰った。

side out

side 依姫

豊姫「行っちゃったわね・・・」

「・・・ええ。」

鏡一は約束を結局守ってくれた。でも、勝てなかった。

「次は勝ちますからね！鏡一！」

豊姫「・・・依姫らしいわね。さ、帰りましょう！」

「はいっ！」

・・・これ以来更に豊姫、依姫が強くなったのは余談である。

side out

side 絶影

『よつと。』

侵二「お帰りなさい、主上。こっちも楽しみましたよ。」

『そうか。・・・わざわざ来なかったんだろ？』

侵二「さて、何のことやら・・・」

『ごいつ、・・・ありがとうな。』

侵二「風魔達は帰りましたよ。後、礼には及びません。」

「……いつつらしいな。さて、」

『いつまでそこにいるんだ？紫。』

紫「……っ！」

『そこにいたら分からねえぞ？』

紫「……師匠、ごめんなさいっ！」

『何が？』

紫「勝手に月に行ったり、師匠に生意気な口をきいたり……」

『……何の事だ？俺は知らんぞ？』

紫「……っ！そうよね……師匠、ありがとうございました。」

『は？何処行くんだ？ついてくんじゃねえのか？馬鹿弟子。』

紫「……え？」

『分かってねえのか？来いって言うてんだろ？破門されたいか？』

紫「うう、師匠おお！ありがとうおお！」

『……まあ、あそこまで行ったんだ。よくやったな。』

紫はそれから十分ほど泣いていた。……俺にしがみつきなながら。

『……落ち着いたか？』

紫「うん・・・師匠、私、師匠から離れて旅がしたい。」

『理由は?』

紫「ずっと師匠に頼りすぎだから、駄目かなって・・・」

『・・・よく言うぜ、半人前。・・・行ってこい。その代わりに、次会ったら成長してろ! いいな! 分かったな!』

紫「うんっ!」

『侵二、お前は藍の彼氏だから紫についてろ。何かあったら連絡しろ。』

侵二「了解。主上は何処に?」

『海外だ! じゃあな! 頑張れよ!』

紫「行ってらっしゃい!」

藍「行ってらっしゃいませ。」

侵二「野垂れ死にしないようにして下さいね。」

『へいへい。アディオス!』

ダンダリオン、転送!

さあ、久しぶりの一人旅だ。何処へ行こうか。

次回へ続く

第七章 一人気ままに海外旅行
第三十八話 第二回海外旅行

side 絶影

さて、気分というか、弟子のためというか、海外にきております。場所はヨーロッパかな？

『あ、種族変えねえと、絶影は怪しまれるわ。』

うむ、種族・・・魔法使いでいいか。神父も兼ねたらいいか。

『名前は・・・シユナイダーで、能力は・・・』

よし、【架空の物、伝説の生物を召喚する程度の能力】にするか。・・・
と言っても程度をはめるだけで、事実上何でも召喚可能である。

『取り敢えず寝床探さねえと。』

・・・神父移動中・・・

『あーあ、何もねえな。』

村人1「ひいつー！助けてくれ！」

『ん？どうした？』

村人2「おお！神父様！助けて下せえ！俺たちの村が襲われているんだ！」

波乱キタコレ！

『よし、何とかしよう。案内してくれ。』

・・・神父一同移動中・・・

村人1「ここです！」

おお、いるわいるわ。グールかな？まあ、潰しますか。

『生き残っている村人を教会に移せ！全員だ！』

村人2「へいつー！」

『さて、・・・我々は神の代理人、神罰の地上代行者、我らが使命はわが神に逆らう愚者を、その肉の最後の一片までも絶滅すること。・・・Amen』

メイン武器は銃剣になりそうだ・・・行くぜ！

『おらっー！』

やっぱり体が腐っているからか？切り裂きやすい。

『次い！死にたい奴から来いつー！』

あ、死んでたな。

『めんどくさいのでやっぱ全員一気だ！』

銃剣を大量に召喚、投げまくる。全部心臓か頭に命中。

『ふう……こんな感じかな?』

一応、見えた奴は全滅した……はず。レーダーにも反応無し、やっぱり全滅。

『おーい!終わったぞ!』

村人1 「本当に全滅してやがる……」

村人2 「すげえな兄ちゃん!」

『信じる者は救われる。当然のことさ。』

??? 「お兄さん凄い!」

『ん?嬢ちゃんは?』

村人1 「……この子には親がいねえんだ。捨て子なんだ。」

??? 「でも、私は大丈夫ですよ!」

……銀髪か、まさかな。

『嬢ちゃん、名前は?』

??? 「ないの。いつも銀髪ちゃんって呼ばれてるから……」

『なあ、名前つけていいか?』

??? 「いいの!？」

『構わないか?』

村人1 「銀髪ちゃんがいいなら、なあ?」

『よし、【十六夜 咲夜】(いぎよいさくや)だ。俺がいた東の国の名前だ。』

咲夜 「十六夜、咲夜・・・ありがとう! 所謂いえば、お兄さん、名前は?」

『シュナイダーだ。・・・ところで、寝床を探しているんだが・・・』

村人2 「丁度いい! さつき、あの悪徳神父が死んだんだ! 代わりになつてくれんか?」

『俺でよければ。だが、俺は多分数年でいなくなるぞ。咲夜、今何歳だ?』

咲夜 「えっと・・・五歳です。」

『なら、三年で技術を教える。あんた等も子供がいれば色々教えようと思うが?』

村人2 「本当か! なら、お願いする!」

咲夜 「先生! お願いします!」

『はいはい、宜しく。』

よし、寝床は決まった。後は咲夜を育てるのみだ。

『よし、まずは戦闘技術だ！武器を決めるぞ！』

咲夜「はいっ！」

『何が使えるか？』

咲夜「ナイフなら少し・・・」

『よし、やってみろ。』

咲夜「えいっ！」

『・・・上手いのだが振りが遅い、後、ナイフが足りなくなる。』

咲夜「・・・能力が使えます。」

『能力は？』

咲夜「時間が止められます。」

『怖いか？』

咲夜「ちよつとだけ・・・」

『なら、俺も使おう。【時間停止魔法】』

咲夜「あれ？先生も時間を・・・」

『ちよつとだけな？時間を止めて投げたナイフを回収するのか？』

咲夜「はい、・・・駄目ですか？」

『いや、ばつちりだ。よく考えたな。』

咲夜「やった！」

『よし、俺に当ててみる。スタート！』

咲夜「行きます！」

俺が避ける場所を予測して投げてきやがる・・・やるな！

『ごつちも抵抗するぞ！そらっ！』

咲夜「え？きやあつ！」

『まあ、合格かな？次は実践だ。悪意のある化け物を退治して行く。』

咲夜「何で全部倒さないんですか？」

『・・・あのな？化け物だつて意思があるんだ。ひよつとしたら仲良くなるかも知れないだろ？俺も向こうに化け物の親友がかなりいるぞ？』

咲夜「そうなんですか！分かりました！」

『聞き分けがよろしい。寝るぞ。』

咲夜「先生！お休みなさい！」

『はい、お休み。』

・・・さて、残業するか。

・・・魔法使い移動中・・・

『お邪魔しますね？』

吸血鬼「人間か、何しに来た？」

『いえ、この先の小さな村に攻め込んでほしくないのですよ。』

吸血鬼「私たちに対しての利点は？」

『私が攻撃しません。これでどうですか？』

吸血鬼「フツ、いいだろう、人間、いや、絶影？」

『感謝しますよ。スカーレット家当主？』

吸血鬼「フツ、また来い。娘たちと遊んでくれ。」

『・・・了解です。夜分遅く失礼しました。』

・・・理解の速い吸血鬼で良かった。これで雑魚しか攻めて来ないはずだ。ついでに成長した咲夜を養ってもらおうしよう。

『・・・てか、当主の娘ってあれか、レミリアとフランか。・・・能

力を抑えないとな。』

・・・魔法使い移動中・・・

『到着、ギリギリ夜明け前か。』

一応、神父としてるので教会に行く。

『・・・・・・・・Amen』

咲夜「先生、おはようございます!」

『おはよう、咲夜。よく眠れたか?』

咲夜「はいっ!」

『ならいい。あ、スカレットと名乗る吸血鬼には攻撃するな。仲間だ。』

咲夜「先生、夜にもやってたんですか?」

『何、大したことじゃない。』

咲夜「じゃあ、今日もお願いします!」

『はいはい、じゃあ・・・』

・・・魔法使い指導中・・・

『今日はこれで終わり。先生は他の子どもたちの事教えるから。』

咲夜「はいっ！」

『はい、君達、今日から先生になったシュナイダーだ。宜しく。』

生徒達「はい！」

『じゃあ、まずは……』

……魔法使い教育中……

『以上だ。今日はおしまい。また明日。』

生徒達「ありがとうございました！」

『気をつけて帰りなさいね。』

ふう……忙しい。

咲夜「先生、飲み物を持ってきました。」

『お、ありがとう。いただきます。』

咲夜のいれた紅茶を飲む……旨い！（テレーツテレー）

『旨い！ありがとう。』

咲夜「そうですか？良かったです。」

『あ、今夜は先生いないからな。』

咲夜「何処に行ってるんですか？」

『ちよつとな、吸血鬼と仲良くなつてな、その娘さんに挨拶に行くのさ。』

咲夜「もう出来たんですか！」

『ちよつと挨拶に行ったらな？俺は有名だから。』

咲夜「先生の言っていた国ですか？」

『そうそう、向こうじゃ最強を名乗ってたからね。』

咲夜「そんなに強いんですか・・・」

『まあな。咲夜も来るか？』

咲夜「行かせてください！」

『いいよ。じゃあ、夜中に準備な。』

咲夜「はいっ！」

咲夜、聞き分けがいいな。・・・本当に五歳児か？

そして、深夜

『よし、準備完了だ！行くぞ。』

咲夜「はいっ！」

・・・魔法使い十少女移動中・・・

『お邪魔します。』

咲夜「お、お邪魔します。」

吸血鬼「よく来たな。シュナイダー。」

『ちゃんと来たぜ。』

吸血鬼「前は名乗らなかったな。私の名は、オルゴイ・スカーレットだ。」

『俺はシュナイダー。この子は俺の教え子の、』

咲夜「い、十六夜咲夜です。」

オルゴイ「ほう！私の威圧を受けても倒れんか。」

『やめてくれ、俺は効かないが咲夜が倒れる。』

伊達に最年長じゃない。カリスマ（笑）など通用しない。

オルゴイ「おっと、失礼。お嬢さん、初めまして。」

咲夜「初めまして。」

『約束通り遊びに来た。』

オルゴイ「感謝する。レミリア！フラン！お客さんだ！」

レミリア「何？お父様。」

フラン「お客さん？」

『やあ、初めまして。シユナイダーだ。』

咲夜「十六夜咲夜です。」

オルゴイ「じゃあ、遊んでおいで。」

『咲夜、行ってこい。』

咲夜「いいんですか？」

『いいよ。行ってこい。』

咲夜「はいっ！」

オルゴイ「貴殿は？」

『ちよつと話がしたい。いいか？』

オルゴイ「良いぞ。絶影？」

『その呼び方やめい。・・・咲夜の事だ。』

オルゴイ「あの子がどうした？」

『俺は三年後にここから旅立つ。だから、あの子を頼みたい。』

オルゴイ「いいのか？」

『あなた以上に信用出来る吸血鬼は見たことない。それに、あなたも娘で悩んでるだろ？同じものどうしだ。』

オルゴイ「構わない。……しかし、何故娘で悩んでいるのが分かった？」

『妹の方から狂気が見えた。どうするつもりだ？』

オルゴイ「貴様なら何とかできるのか？」

『出来るが……誇りはいいのか？』

オルゴイ「そんなもの娘と比べる必要無し！頼む！」

『……明日また来る。その時に抑えておく。』

オルゴイ「……ありがとう。」

『気にするな。……で、最近ヴァンパイアハンターが多いな。大丈夫か？』

オルゴイ「大丈夫だ。……きつと守るさ。」

『……俺も協力する。元は化け物だしな。』

オルゴイ「なら、我らのスカーレット家に入ってくれ。」

『いいぜ。じゃあ、これからはシュナイダー・スカーレットとも名乗らせてもらう。』

咲夜「先生、何の話ですか？」

『咲夜、お前はこの家庭を攻めたいと思うか?』

咲夜「うん、レミリア様とフラン様はいい人だし、オルゴイさんも悪い人じゃない。だから、駄目だと思う!」

『うんうん。なら、どうする?』

咲夜「レミリア様とフラン様を助けたい!」

『・・・というわけだ。オルゴイ。俺達も支援する。』

オルゴイ「助かる。シュナイダー、貴殿にレミリア達の兄になってほしいのだが・・・」

『いきなりかよ。・・・うん、まあ、いいよ。』

諸君、俺は決してロリコンじゃない。

オルゴイ「レミリア!フラン!」

レミリア「何?」

フラン「この人はだあれ?」

オルゴイ「お前達の兄だ。」

『シュナイダー・スカーレットだ。宜しく。』

レミリア「お兄様!?!」

フラン「やったあ！」

咲夜「・・・オルゴイさん、私、いずれここで働きたいです！」

オルゴイ「・・・ありがとう。じゃあ、その時は頼むよ。」

『んじゃ、レミリア！フラン！遊ぶか！』

レミリア「ええ！」

フラン「やった！お兄様！トランプしよう！」

『はいはい、やるか！』

咲夜「私もやります！」

・・・魔法使い＋少女＋吸血鬼姉妹トランプ中・・・

『げっ！』

フラン「やった！あがり！」

現在ババ抜き中、咲夜は寝ている。・・・俺の膝の上で。

で、手加減してます。おい、オルゴイ、笑ってんじやねえ。

『悪い、そろそろ帰るわ。もう夜明けだ。』

オルゴイ「残念だな・・・」

レミリア「また来てね？」

フラン「約束だよ？」

『はいはい。また明日な。んじや、お休み。』

オルゴイ「ありがとうな。気をつけて帰れよ。」

『ああ、じゃあな。』

・・・魔法使い十少女移動中・・・

帰宅成功。咲夜は・・・まだ寝てるな。

咲夜「んう・・・」

『・・・お休み。』

さて、俺も休む

生徒達「先生！」

・・・無理です、ハイ。チクシヨウメ。

次回へ続く

第三十九話 狂気なんざ怖くねえ!

side シュナイダー

『・・・はい、今日はこれでおしまい。さようなら。』

生徒達「さようなら!先生!」

・・・生徒達も結構物覚えがいい。俺がいなくなっても大丈夫そう
だ。

咲夜「先生、おはようございます。」

『おはよう。・・・もう大丈夫か?』

咲夜「はい、大丈夫です。」

『ん、ならいい。今日もオルゴイの所に行くつもりだが・・・大丈夫
か?』

咲夜「大丈夫です。」

『よし、まあ、今からいつも通り訓練するぞ。』

咲夜「はい!」

・・・魔法使い指導中・・・

『・・・以上!今日は終了。』

咲夜「ありがとうございました!」

『・・・咲夜、ここじゃあ魔法使いはどんな扱いだ？』

咲夜「私の村では気にしないですよ？・・・他の村だと処刑される
そうですが。」

『咲夜の村、かなり平和なんだな。』

咲夜「はい、何で聞いたんですか？」

『俺が魔法使いだから。』

咲夜「本当ですか！じゃあ、魔法とか使えるんですか？」

『まあ、見せようか？』

咲夜「お願いします！」

『【熱魔法】』

取り敢えず初期魔法を唱える。

咲夜「わあ・・・！」

『・・・まあ、こんな感じだ。まだまだ使えるけどな。』

咲夜「凄いです！」

『ありがとう。まあ、皆には内緒な？』

咲夜「はい！」

『じゃあ、ちよつと寝ていなさい。また夜に出かけるからな。』

咲夜「お休みなさい！」

『お休み。』

咲夜が寝に行った。

『ふう……』

フランの狂気、どうしようか。いつその事項こうかな？

『まあ、行ってから考えるか。』

俺も取り敢えず銃剣の練習をする。……未だに銃剣神父みたいに投げられません。あれは化け物だ。

『はあ……』

やっぱり時々急所から外してしまう。……回転させて投げるか？

『おらっ！』

あ、行けた。てか普通に投げるより深く刺さった。

『よっしゃ。次、二丁拳銃。』

やっぱり吸血鬼って言ったら拳銃だろ。銃系統は俺の特技だ。多分百発百中、外したことはない。

『よし！全弾命中！』

銃弾は大体妖力や魔力で代用、なのでヘビーアームズの乱射などがいつでも出来る。

『つと、もう夜か。咲夜起こさねえと。』

・・・魔法使い移動中・・・

咲夜「zzzz」

『おい、咲夜、起きろ。』

咲夜「はっ！おはようございます！」

『おはよう。行くぞ？』

咲夜「分かりました。着替えて来ます！」

・・・俺の子供みたいだな。作る気はないが。

咲夜「出来ました！」

『よし、行くぞ。』

・・・魔法使い＋少女移動中・・・

道中雑魚吸血鬼に遭遇したが退治。咲夜もグールを十体倒した。・・・五歳児ですか？

吸血鬼は俺がやった。

『邪魔するぞ。』

咲夜「お邪魔します。」

オルゴイ「邪魔するなら帰ってくれ。」

『あいよ〜って帰るか!』

なぜ貴様がそのギャグを知っているんだ。

オルゴイ「冗談だ。今日も来てくれたか。」

『半分は仕事でな。』

レミリア「あ、お兄様! 咲夜も!」

フラン「お兄様! 咲夜! 遊ぼう!」

『はいはい、咲夜、行くぞ。』

咲夜「はい!」

・・・魔法使い+吸血鬼姉妹+少女遊戯中・・・

よし、フランの狂気抑えるか・・・

『なあ、皆の能力って何だ?』

咲夜「私は【時間を操る程度の能力】です。」

レミリア「私は【運命を操る程度の能力】よ。」

フラン「わ、私は……」

『どうした？怖がらないから言いな。』

フラン「うん、【ありとあらゆる物を破壊する程度の能力】だよ。」

おおう、知ってるとはいえ、やばいな……

フラン「だから、ちよつと怖いのだ。」

『……俺に能力を使えるか？』

フラン「出来ないよ！」

『ならいい。分かっているなら大丈夫だ。……俺の友達にもやばい奴がいるからな？』

フラン「……どんななの？」

『……【有象無象を喰らう程度の能力】』

フラン「え？」

『……あいつは駄目だ。でもな？あいつは普通に暮らしてるぜ？だからな？大丈夫だ。』

フラン「でも……出来るかな？」

『……もし不安なら手伝ってやる。俺は魔法使いだからな。』

レミリア「そうなの？」

『ああ、魔法でフランを手伝ってやる。』

フラン「・・・本当？」

『ああ、行くぞ。・・・フランが大事な人を壊さないように！』

魔法じゃ無理なんで絶影の能力で影に移して狂気を取り込む。

フラン「あれ？体が軽くなった！」

『さあ、これで大丈夫だ。』

フラン「ありがとう！お兄様！」

レミリア「お兄様、フランを助けてくれてありがとう！」

『いいってことよ！せっかくだ、魔法使ってやるよ！』

・・・魔法使い＋吸血鬼姉妹＋少女遊戯再開中・・・

『おし、これで終わり。流石に疲れた。』

はい、嘘です。まだまだ行けます。

レミリア「残念・・・」

フラン「・・・また見せてね？」

咲夜「私にも見せて下さいね？」

『はいはい、そろそろ寝ろ。』

咲夜「そうします。」

レミリア「お休み。お兄様。」

フラン「お休み……」

……少女達睡眠中……

『よし、寝たな。』

オルゴイ「……感謝する。」

『気にすんな。俺に四人の式がいるの知ってんだろ？あいつ等より
ましだ。』

オルゴイ「……貴様は、いつもそうするのか？」

『ああ、する馬鹿と見る馬鹿なら、する方がいいだろ？』

オルゴイ「……面白い奴だな。」

『波乱上等、だから、それで死んでも悔いはないさ。』

オルゴイ「……私も、無茶を試してみるかな？」

『そうだ、無茶やろう！』

何だこの絵面。

オルゴイ「そうだな。ヴァンパイアハンター退治したら、レミリアに当主権譲るか。」

『お前は？』

オルゴイ「隠居する。好きにやるさ。」

『いいんじゃないの？』

オルゴイ「お前といると正直になれるな・・・」

『俺の特技だ。』

オルゴイ「ははっ、今日は泊まって行くか？」

『・・・そうだな。【影分身】』

影「はっ。」

『すまん、教会で先生やってくれ。』

影「了解。じゃあな。」

影分身、まあ便利。

オルゴイ「・・・常識外れなことをするな。絶影、いや、神よ？」

『やっぱ気づくか。お前すげえな。』

オルゴイ「神は天敵だからな。・・・お前は別だが。相当上位か？」

『ただの龍神の兄だ。』

オルゴイ「・・・全権放棄したあの最強の気分神か？」

なにそれひどい。

『多分そうだな。』

オルゴイ「何故ここに来た？」

『・・・弟子の自立のためだ。』

オルゴイ「弟子とは？」

『・・・人間と妖怪が共存できる世界を作りたいたんだと。面白そうだから手伝っているんだ。』

オルゴイ「・・・私達も行けるのか？」

『行ける。弟子の言葉を使うなら、幻想郷は全てを受け入れる。』

オルゴイ「ほう・・・いずれ行かせてもらう。」

『約束な？・・・俺はいないかもしれないが。』

オルゴイ「分かった。今日はゆっくりしていつてくれ。」

『ああ。』

後三年で別れか・・・

その後も、俺とオルゴイの雑談は続いた。

・・・約三年後・・・

咲夜「先生、そろそろ故郷に帰るんですね。」

咲夜は紅魔館で働くことになり、八歳とは思えない働きぶりだ。

『ああ、そろそろだな・・・』

俺のいた村は若い衆に防衛術を覚えさせ、そこそこ対応できるようにした。

咲夜「私はお嬢様を守ります。先生も頑張ってください。」

『ああ、・・・成長したな、咲夜。』

あれからオルゴイは当主の座をレミリアに譲り、一部屋で隠居中だ。

『さて、咲夜、テストだ。今からヴァンパイアハンターが来る。そいつ等を撃退しろ。』

咲夜「はい、先生。」

『レミリア、フランもだ。無理せずに頑張れよ。』

レミリア「当主として頑張るわ！」

フラン「分かった！お兄様！」

『オルゴイも、ねえと思うが死ぬなよ？』

オルゴイ「冗談ぬかせ、死なないさ。」

『よし、じゃ、行きますか。・・・彼らに加護があらんことを、A m e n』

銃剣と拳銃を装備、こんなに月が綺麗なんだ。

『さあ、踊ろうか。』

次回へ続く

第四十話 帰還

side シュナイダー

『さあ、踊れやハンター共!』

bgm イマジンプレイカー

開幕銃剣、一人目をめつた刺し。

ハンター1「くそっ!ひるむな!行け!」

ざっと五十人か?・・・やけに弱いが。

『お帰り下さい。』

銃剣楽しい。さて、咲夜は・・・

咲夜「お嬢様達に手は出させない!」

おうおう、的確にナイフを投げていやがる。・・・負けるかもしれない。

レミリア「私達も!【グングニル】!」

フラン「【レーヴァテイン】!」

うっわ、もう使えるのかよ。・・・オルゴイは。

オルゴイ「久しぶりに戦うなあ!【ロンギヌス】!」

・・・は？いや待て！ロンギヌスってお前！

オルゴイ「ぜいっ！」

あーあ、魔術師の防御魔法が紙切れみたいに・・・

『うわ、もう十人しかいねえ。』

ハンター1「くそっ！あれを出せ！」

出てきたのは・・・吸血鬼？

吸血鬼1「オルゴイ！貴様等を倒して私が頂点につく！」

ああ、欲望が丸出し。・・・だが、厄介なのは確かだな。

『オルゴイ！殺していいか？』

オルゴイ「・・・人間に身を売ったものなど知らん。」

『了解。【召喚魔法】バジリスク。』

バジリスク。視線だけで石化する能力を持つ化け物。勿論危険。

『咲夜！目をつぶれ！』

咲夜「え？はいっ！」

バジリスクがハンター達を見る。一斉に石化する。

『よし、召喚生物分解。』

吸血鬼Ⅰ「役立たず共が・・・！」

あ、やっぱり吸血鬼には効果ないんだ。

『それはないだろ・・・』

吸血鬼Ⅰ「黙れ！人間風情が！」

『・・・咲夜、レミリア達を連れて下がれ。オルゴイも、・・・久々に切れちまったよ。』

魔装ベリアル、レラージュ。

『おい、吸血鬼。』

吸血鬼Ⅰ「何だ貴様！・・・し、神力だと・・・！」

『小便は済ませたか？神様にお祈りは？部屋の隅でガタガタ震えて命乞いする準備はOK？』

吸血鬼Ⅰ「ふ、ふざけるな！誰が貴様なんぞに！」

『レラージュ、重力十倍。』

吸血鬼Ⅰ「がつ！・・・貴様、何を！」

『説明する必要がある。・・・それに、これから死ぬ貴様に理解する必要はない。』

吸血鬼Ⅰ「おのれえ！」

『【絶葬鎌】（ベリオル・ゴルドレーザ）』

亜空間に叩き込む。．．．終了。

咲夜「先生．．．」

『テスト結果だ。．．．合格。これからも頑張れ。』

咲夜「．．．！はいっ！ありがとうございます！ございました！」

『レミリア、フランも、よくやったな。頑張れよ。』

レミリア「はいっ！」

フラン「うんっ！」

『オルゴイも、またな。』

オルゴイ「ああ、またな。」

『じゃあな。俺は帰るわ。．．．また会えたらいいな。』

咲夜「さようなら！」

レミリア「お兄様！またね！」

フラン「また会おうね！」

『おうーじゃあな！』

ダンダリオン展開。さて、帰りますか。

・・・魔法使い移動中・・・

『・・・にしても、呆気なかったなあ。』

おっと、着いたか。

『ただいまー・・・あれ?』

いないな。・・・レーダー展開。

『・・・冥界か。』

侵二、紫、藍が察知出来た。

『よし、飛んで行くか。』

絶影にチェンジ。新月も装備。

・・・妖怪移動中・・・

『よつと。・・・ここかね?』

??? 「何者だ。ここは冥界、西行寺幽々子(さいぎょうじゆゆこ)様の場所だ。」

『失礼、この主の知り合いに用が・・・』

??? 「知らぬ。さては、曲者だな!」

何故そうなる。

『いや、攻撃するつもりはないって。つと!』

危ねえ。風魔レベルの太刀筋だな。

『攻撃されたらしようがない。・・・正当防衛だ。』

??? 「ここは通さぬ!」

『だったら強行突破だ!』

??? 「いざ!」

『勝負!』

bgm 広有射怪鳥事〜Till When

??? 「参る!」

居合か、タイミングを予測して・・・

『飛ぶ!』

成功、剣は下を通った。

??? 「なっ!」

『そいゃっ!』

そのまま空中キック、しかし全部避けられる。

??? 「【断迷剣】(だんめいけん)！」

衝撃波か！風魔レベルだ。

『危ねえ！食らいやがれ！』

鞘を投げる。・・・勿論おとりとして。

??? 「何！くっ！」

予想外だったのか体制を崩す。

『隙あり！一閃！』

??? 「かつ！・・・見事。」

峰打ちで気絶させる。・・・強かった。

それにしてもどうしようか。

『取り敢えず担いで行くか。』

side out

side 侵二

「・・・おやっ？」

藍 「どうした？侵二。」

「いえ、何も。」

・・・帰ってきましたか。

幽々子「侵入者なら大丈夫よー。妖忌がいるからね。」

紫「そうよ。心配しすぎよ!」

「今、妖忌さんが勝負してます。」

幽々子「そうなの?」

紫「大丈夫よ。」

藍「相手は?」

「・・・です。」

紫「え?聞こえなかったわ。」

「もう一度言います。」

『私だ。』

紫「し、師匠!」

藍「絶影殿!」

「・・・お帰りなさい。」

『ただいま。』

side out

side 絶影

紫「師匠！お帰りなさいっ！」

『ただいま。あ、下にいた人間、気絶させて担いでるから降ろす。』

幽々子「妖忌がやられたのね。随分と強いのねー」

紫「でしよう？私の師匠よ！」

『初めまして。絶影だ。』

幽々子「初めまして。西行寺幽々子よ、宜しくね。・・・妖忌を倒したの？」

『ああ、強かったな。』

侵二「あの剣術は風魔レベルですよね？」

『・・・あれは凄い。』

妖忌「うう・・・」

幽々子「目が覚めたわね。妖忌。」

妖忌「はっ！幽々子様！申し訳ありません！」

幽々子「気にしないでいいわよ。貴女が相手したのは紫の師匠よ。」

妖忌「な、何ですと！し、失礼しました！」

『いいよ。許可なく侵入しようとした俺が悪いし。』

妖忌「そうですか。ありがとうございます！」

『ところで紫、いつから幽々子と知り合いなんだ？』

紫「結構前からよ。」

『ふーん。で、侵二、風魔達に変化は？』

侵二「風魔と壊夢が結婚しました。」

・・・マジかよ。

『あ、うん。いつ頃？』

侵二「私も知りませんでした。主上が出てから一年後に二人共だそうですよ。」

『あ、そうですか。幻夜は？』

侵二「まだです。自分もです。」

『了解した、俺は吸血鬼と仲良くなった。多分幻想郷に来る。』

紫「そうなの？」

『ああ、大丈夫だろ？』

紫「ええ！大丈夫よ！」

『助かる。』

幽々子「ねえ、絶影さん、絶影さんって何歳なの？」

『何故聞いたか分からんが・・・百億歳ぐらいだ。』

幽々子「凄いわねー」

『ところで、泊まらせてもらっていいか？』

幽々子「いいわよー紫も泊まっているしね。」

『ありがとう。』

まあ、これでここでも落ち着いたな。

あ、勿論波乱は必要だが。

次回へ続く

第八章 西行妖く残された時間 第四十一話 惨劇

side 絶影

俺はしばらく幽々子の屋敷・・・白玉楼に泊まらせてもらうことになっただが。

・・・惨劇が起きた。

そう、始まりは幽々子の一言である。

幽々子「お腹すいたわ」

妖忌「げっ！」

紫「来たっ！」

藍「・・・侵二、大丈夫か？」

侵二「・・・」

『おい、どうした？』

幽々子「絶影さん、料理はできるの？」

『まあ、それなりに。』

幽々子「……作って下さる？」

『ああ、いいよ。……侵二。』

侵二「……御意。」

この時、俺はあの事を忘れていた。

『はい、どうぞ。』

幽々子「頂きます！」

秒速。その言葉に相応しかった。

『はい？』

幽々子「お変わり頂戴！」

……忘れていた。そう、幽々子は大食漢だった。しかも食うのが異常に速い。

侵二「……理解しましたか？」

『よし、こつちも意地だ。能力使う。……俺と侵二の速度を三倍に。』

侵二「意地ですね？了解です。【踊る秒速クッキング】」

料理は台所でするんじゃない、料理する所が台所だ。

『行くぞオラア！』

侵二「了解！」

俺達は秒速、いや、それ以上で料理をした。なのにだ。

幽々子「次まだー？」

ええい、化け物め！↑ブーメラン

『ええい！五倍速！』

その後も料理と言う戦争が続いた。一時間ほど。

幽々子「ご馳走様でした。」

侵二「はあ、はあ、お粗末様でした。」

『脳味噌が爆発する・・・』

時間、空間を制御するために作っていた能力・・・[間を司る程度の能力]がここで役に立つとは。おかげで脳がオーバーヒートだ。もう疲れたよ○トラッシュ。

侵二「・・・どうですか？」

『駄目だな、この作業。』

侵二「・・・そうでしょう？」

その日、俺達は死んだように眠った。

そんなことよりおうどん食べたゲフンゲフン・・・そんなことより、幻想郷完成するまでの最大のお題があった。・・・西行妖である。

西行妖、能力が【死に誘う程度の能力】で、事実上、殺す能力だ。俺でも死ぬと思う。しかも、死に誘う、これは多分能力も入る。侵二なら拮抗するかもしれないが「喰らう」と「殺す」ではレベルが違う。多分能力は無理だろう。俺の金属器にフェニクスがあるが、あれは治療するのであつて、寿命が延ばせたり、生き返らせたりは出来ない。なので事実上確実に西行妖を殺すのは不可能。

なら、何故原作は封印出来たのか？答えは依代だ。封印術があるものを媒体としてかけた・・・幽々子の肉体をだ。なので原作では封印できた俺は考える。

しかし、これでは幽々子が死んでしまう。亡霊として帰ってくるがせめて老い先短くても寿命で死なせてやりたい。・・・なので、俺が神力でねじ伏せる。つまりご都合主義だ。結局はこうなる。が、一応、歴史に背くことになる。今までの前科を入れると俺はそろそろ消されるかもしれない。・・・まあ、俺は復活するはずだが。

侵二「何考えてるんですか？」

『・・・侵二、俺が死んだらどうする？』

侵二「冗談が過ぎますよ。それに、死んでも復活するんでしょう？」

『いや、そうだけどな？』

侵二「・・・まあ、死んだときは主上の意思、受け継ぎますよ。」

『・・・ありがとな。』

侵二「逆に、私が死んだらどうしますか?」

『藍を残して死んだら嘲笑う。棺桶にゴキブリ入れてやる。』

侵二「何ですかその地味な嫌がらせ。・・・ええ、死にませんとも。」

『まあ、のこのこ死んだら地獄から引きずり出してやるわ。』

侵二「お願いしますね?」

『馬鹿、手間をかけさせんな。』

侵二「そっくり返しますよ。」

『言うじゃねえか。』

侵二「・・・主上、好きな人がいるんですよね?」

・・・突然だな。

『・・・ああ、だが今は駄目だ。』

侵二「理由は?」

『・・・俺が消えた時のショックが強くなるだろう?』

侵二「・・・消えるつもりなんですネ。」

『ああ、多分な。』

侵二「何度も言いますが・・・帰ってきて下さいね?」

『俺は多くの人に嘘をついてきたが・・・まあ、それは守ろうと思う。』

侵二「好きにして下さい。・・・一応、式ですから。」

『ほんとに一応だがな。』

侵二「主上には感謝してますよ。・・・私達以外の人と関わって、式になって、戦争して、一緒に料理して、旅をして、今じゃあ彼女まで出来ましたからね。」

『俺はきっかけを作っただけ。選択したのはお前等だ。俺も楽しんでるしな?』

侵二「・・・昔、主上に会う前に、こう言われたんです。「お前等は何でいるんだ。」って。・・・でも、今じゃ胸を張って言えます。「気分」とね。」

『それ、進歩してんのか?』

侵二「さあ?」

『さあ?じゃねえよ。・・・まあ、お前等らしいが。』

紫「何の話?」

『さあな。』

紫「教えてよ!」

『やなごった。んじや、侵二、また明日。』

侵二「御意。」

紫「え？ちよつと！待ってよ！」

次回へ続く

第四十二話 気分生き……

side 絶影

『……なあ、紫。』

紫「何?」

『……あの桜、おかしくねえか?』

あれから数日、そろそろ西行妖の妖力がやばいので聞く。

妖忌「……私が説明します。」

『じゃあ、妖忌、……あれは何だ?』

妖忌「数十年前、幽々子様の父上殿はあの桜について歌を読みました。……それは、死ぬときは桜の下で死にたい。そのような内容でした。そして、歌の通りあの桜の下で亡くなりました。それ以来、その歌に共感したのものや、家族が次々と亡くなりました。そして、あの桜は今のような状態に……」

紫「幽々子もあの桜、西行妖のせいと能力が【死霊を操る程度の能力】から【死に誘う程度の能力】になってしまって、コントロール出来ていないのよ。後一年で幽々子は……」

『……ほう、封印は出来るか?』

紫「……頑張ってみようと思うわ。」

『悪いが、あいつはまずい。多分能力も無効化される。・・・そうじゃないのか?』

紫「ええ、境界も操れないのよ、あいつだけは。」

よし、話が聞けたので作戦を考えるか。

『ありがとう。俺もどうにか出来ないか考える。』

よし、作戦を考えるか。

まず一つ目、消耗戦。・・・これは論外。あいつがどれだけ妖力を持っているか不明だし、何より「死」のエネルギーで動いているはずだ。そうするとほぼ妖力は無限だ。なので却下。

二つ目、消し去る。・・・これも良くない。西行妖も一応「死」を管理しているので消すとどうなるか分からない。龍神の力でどうにか出来るだろうが、確証がないので却下。

三つめ、紫が封印する。俺達はバックアップ。・・・多分これが最良だろう。幽々子が自害する可能性があるので眠らせる。・・・紫が無防備になるので全力で守る。多分、これが被害がない。

・・・めんどくせえ。全く、西行妖じゃなかったら消してたわ。

『・・・まあ、大事な弟子と、その友人のためか。』

俺は作戦を紫、妖忌、藍、侵二に伝えた。

作戦実行は三日後に決まった。

そして、三日後・・・

『よし、準備はいいな。紫は封印の準備、藍、妖忌、侵二、俺はその援護だ。』

紫「幽々子は私が守る！」

藍「私もだ！」

妖忌「幽々子様は桜なぞに死なせぬ！」

侵二「了解、さっさとやりましょう。」

『よし、幽々子は寝かせた。行くぞ！』

作戦開始だ。

bgm 煉獄庭園 最後のレクイエム

紫「行くわよ！」

『了解！』

西行妖も危険に気づいたのか攻撃してくる。

『まあ、通さんがな！』

能力が使えないので新月に高周波を流して切る。

侵二「能力無しは面倒ですね・・・」

侵二も薙刀で枝を切り落としていく。

藍、妖忌も後ろで切り落としていく。

西行妖「ギイイイイ！」

妖力弾まで飛ばして来やがった……！

『当たるなよ！当たったら死ぬぞ！』

妖忌「なっ！うっ！」

『妖忌！大丈夫か！』

妖忌「何、唯の枝でした。」

『一応下がれ！藍も治療を頼む！』

藍「はっ！」

『侵二、行けるな？』

侵二「……上等です。」

『おっしや！行くぞ！』

枝を切り落として十分、西行妖のヘイトが全部こっちに向いた。

『よし！避けるぞー！』

侵二「もうやってますー！」

『へいへい！ぜいつ！』

巨大な枝を切り落とす。

『紫！まだか!?!』

紫「後、十分ほど！」

『理解した！死ぬ気で行く!』

侵二「昇竜斬！」

『ブラックホール!』

侵二「枝は切ります！主上は妖力弾を！」

『よし、任せろ!』

新月のリミッターを一段階解除。一度鞘に収める。

『・・・ハアッ!』

横一文字に切る。

侵二「主上！紫殿が！」

紫の後ろに枝が迫る。

『ちっ！地面に隠してやがったか!』

新月抜いてる暇はねえ！

『紫！どけっ！』

紫「きやつ！」

杖が俺の右肩に刺さる。

『がっ……！』

紫「師匠！」

『うるせえ！さっさと続けろ！』

フェニクスで取り敢えずは止血。……妖力がかなり持っていかけた。

紫「でも、師匠の傷が！」

『……この程度で騒ぐな。さっさと続けろ。』

紫「……分かったわ！」

ここが正念場だ。妖力全開放。

『【影縫い】！【影結び】！』

影縫いで動きを止め、影結びで俺と繋ぐ。

『てめえの妖力もらうぞ！西行妖！』

妖力吸収。・・・取り敢えず表面上は回復した。

『今だ！やれ！紫！』

紫「・・・封印！」

西行妖「ギイイイイ！」

『やかましい！大人しくしやがれ！』

西行妖を切る。・・・やったな。

『ふう・・・』

侵二「紫殿、お疲れ様です。」

紫「・・・やったの？」

『・・・ああ、』

妖忌「絶影殿、申し訳なかった。」

『気にするな。こうして全員無事だったんだ。喜べ。』

藍「侵二！無事だな!？」

侵二「大丈夫だ。心配かけたな。」

紫「師匠、傷は・・・」

『大丈夫だ。』

・・・表面上はな。

侵二「・・・・・・・・」

紫「終わったんだし、宴会しましょう！」

『ああ、そうするか。』

その後、宴会は夜更けまで続いた。

そして、その夜。

侵二「・・・・・・・・主上。」

『・・・・・・・・侵二か。』

侵二「・・・・・・・・随分と無茶をしましたね。」

『・・・・・・・・どういふことだ？』

侵二「妖力がほとんど無いですが。」

『・・・・・・・・ばれたか。』

侵二「・・・・・・・・どうしました？」

『・・・・・・・・寿命をこっそり持っていかれた。』

侵二「・・・・・・・・残量は？」

『・・・三年だ。』

侵二「・・・馬鹿じゃないですか？」

『後悔はない。』

侵二「やれやれ・・・そう言いますよね。」

『当然。』

侵二「じゃあ、後三年悔いのないように。」

『・・・了解。』

全く、こいつにはいつも救われるな。

『ありがとう、侵二。』

侵二「・・・お互い様です。紫殿達には黙っていますね。」

『ああ、風魔達には念話で伝える。』

風魔「その必要はない。」

壊夢「ここにいるぜよからね。」

幻夜「無茶したね〜」

『お前等・・・』

風魔「・・・どうせあれだろう?。」

壊夢「そうそう、何か復活しそうぜよ。」

幻夜「確かにね〜」

侵二「ここに主上の死を悲しむ者はいません。にこやかに見送りますよ。」

『・・・悪い、ちよつと泣くぞ。』

俺は数億年ぶりに涙を流した。

『お前等、本当にありがとう!』

風魔「・・・さようなら、いや、また会おう、主上。」

壊夢「今度会ったら勝負するぜよよ?」

幻夜「じゃ、待ってるからね〜」

『・・・ああ、あばよ、いや、またな!!』

侵二「残り短いその命、大事に過ごしましょう。」

『ああ、そうだな!』

・・・俺のこの命が消えるまで、後三年。

次回へ続く

第四十三話 気分が斃れる

side 絶影

西行妖を封印してから一週間、幽々子が逝った。……元々体調が悪かったらしい。

……あれ？あの食事は……

しかし、幽々子は亡霊として帰ってきた。……俺の都合で西行妖についての記憶は消させてもらった。

紫「これからも友達よ、幽々子！」

幽々子「ええ、そうね！」

何とも嬉しいことだろう。

そして、妖忌が修行に出た。孫……妖夢と刀を残して。

妖忌「己の無能を知りました。少し修行に行ってきます。」

幽々子はこれを聞いた時、直ぐに肯定したらしい。

そんなことがあって二年後、幻想郷完成までの最後の作業に入った。俺の寿命は後一年。

紫「……だから、向こうの世界と分けるための結解を作るわ。」

『了解した。俺は霊力と神力を使う。』

紫「いつもありがとう、師匠。」

『俺が決めてしている事だ。』

紫「・・・そうね。」

『ほら、さっさと行くぞ。』

紫「あ、うんっ！」

・・・絶影、スキマ妖怪移動中・・・

『おし、準備完了。神力送るぞ。』

紫「行くわよ！」

俺の九割の神力、霊力をつぎ込む。・・・一応四凶が全員フルパワーで暴れても大丈夫なようにはした。じゃないと確実に幻想郷が崩壊する。

『ふう・・・』

紫「お疲れ様、師匠。」

侵二「お疲れ様です。風魔達の能力も使用しました。」

『・・・となると。』

侵二「確実に破壊不可能です。」

やべえ、オルゴイ達入れるかな？

『お疲れさま。』

紫「後はこの結界を管理する神社だけよ！」

『……そうか。よし、手伝おう。』

多分、この命最後の建築だろう。

そして、二か月後、全て手作りで神社が完成した。

紫「……出来た!!」

『ああ、出来たな。これで……』

紫「ええ！幻想郷の完成よ！」

完成したか。……この命が消える前に見れて良かった。

『……よく頑張った。』

紫「師匠のおかげよ。」

『……いや、お前の苦勞の賜物だ。』

紫「今までありがとう、師匠。」

『ああ、こちらこそ楽しかった。ありがとう、紫。』

藍「あの、紫様、」

紫「何？藍、侵二さんも。」

藍「えつとですね・・・」

侵二「私達、結婚します。」

・・・お前もゴールか、侵二。

『おめでとう。』

紫「藍、貴女も頑張ってくれたわね・・・最高の結婚式にしましよ
う！」

俺、紫、侵二、藍のみの静かな結婚式が行われた。・・・司会は俺
(シユナイダー)だ。

『八雲紫の式、八雲藍、貴女は、彼を永遠に愛しますか？』

藍「はい。」

『俺の式兼友人、侵二、お前は、彼女を永遠に愛し、守れるか？』

侵二「・・・当然ですね。守りますよ、最後まで。」

『では、誓いのキスを、』

藍「い、行くぞ。」

侵二「・・・まどろっこしい。」

侵二が藍の顔を抑えてキスをした。

『では、もう一度言う。．．．おめでどう。』

こうして残りの十か月も早く過ぎた。

そして、俺の寿命の三年目。

紫「師匠、どうしたの？」

『．．．いや、何でもない。強いて言うなら．．．』

せめて、弟子の成長を見ないとな。

『．．．俺と勝負しろ。俺に成長したという事を証明しろ。』

紫「え．．．？」

『．．．嫌か？』

紫「ううん、受けるわ！」

侵二「なら、審判を行います。勝敗は紫殿が倒れたら主上の勝ち、主上に認めさせたら紫殿の勝ちです。．．．では、初め。」

さあ、これぐらいの壁、ぶち壊して見せろ。

side out

side 紫

bgm プライド革命

「はあっ！」

『まだまだだ！その程度か！』

私が人間と妖怪が共存できる世界をまだ、夢のレベルで思っていたころに会い、初めて受け入れられ、そして、ここまで引っ張ってくれた人、絶影。

師匠はいつも気分屋で、喧嘩好きで、でも優しくて。尊敬する人だ。それに、龍神の兄と言う凄い偉さなのに、決してそれを自慢せず、使わずに色々な人と平等な関係に立っていた。

・・・そして、私が好きになった人。師匠はその感情には疎いので、気づいていないと思う。でも、私は師匠が好き。多分、一目惚れだったと思う。それで、どんどん興味が出て、好きになったと思う。

そんな師匠を認めさせる。とてつもなく大変な事だ。・・・でも、逃げない、諦めない。師匠は絶対に逃げずに立ち向かった。諦めずに手伝ってくれた。だから！

「まだまだだ！絶対に認めさせる!!」

『・・・そうだ！もつと来い！』

例え負けても構わない。でも、絶対に！

「諦めないっ！」

『ならば来い！全力の一撃を！』

「はあああああ！」

『……………』

「行くわよ！」

そして、私の全力の妖力弾は師匠に命中した。

『……………合格。』

そこで、私の意識は途切れた。

side out

side 絶影

『……………合格。』

上等だった。あの後直撃を受けて吹き飛ばされた。

『……………まさか、ここまで成長したとはな……………』

侵二「お疲れ様です。」

『……………これで、思い残す事はないな。』

侵二「……………何言ってるんです。まだ、残っているでしょう?」

『……………紫に伝える、か。』

侵二「残酷でしょうが、仕方がないことです。」

紫「・・・師匠？」

『・・・起きたか、紫。』

紫「・・・私。」

『合格だ。・・・よくそこまで成長したな。』

紫「・・・本当に？」

『嘘つくか、よくやったな。』

紫「・・・やった!!」

『これで、俺がいなくなっても大丈夫だな。』

紫「え・・・？」

体が崩れ落ちる。・・・駄目か、時間切れだな。

紫「・・・師匠、どうしたの？」

『悪い、もう体が動かねえんだ。』

紫「何ですよ!？」

『西行妖のあの時、寿命を持っていかれた。』

紫「・・・じゃあ。」

『今日が多分命日だ。・・・すまん。』

紫「・・・侵二さん、冗談よね？」

side out

side 侵二

紫「・・・侵二さん、冗談よね？」

「・・・悪いですが、現実です。」

紫「そんな、侵二さんはいいの!？」

「・・・」

紫「ねえ！」

「良いわけないでしょう！」

多分、今酷い顔をしているのだろう、紫殿が絶句している。

『・・・侵二、これを。』

主上が剣と銃を投げってくる。

「・・・これは？」

『俺の残りの神力を入れている。・・・何処かに置いていてくれ。』

「・・・御意。」

紫「師匠、最後に言わせて。」

『・・・何だ？』

紫「・・・ずっと、好きだったの。」

『・・・・・・・・』

紫「私は、師匠が好きでした。」

『・・・ありがとう、実は俺もだ。』

紫「嘘・・・」

『・・・俺も、お前の事が好きだ。』

紫「師匠・・・」

『ありがとう、こんな俺を好きになってくれて・・・』

・・・全く、だから大丈夫だって言ったじゃないですか。

『悪い・・・眠くなってきた・・・』

「さっさと逝って下さい、これ以上泣かせないで下さい。」

『・・・・・・・・うわ、ひでえ。』

紫「師匠、ううん、絶影、お休みなさい。」

『・・・ああ・・・それじゃあ・・・お休み・・・』

紫「絶影、ありがとう！うっ、うわああああ！」

「黙って逝って下さいよ・・・」

全く、きついものですね・・・

誰かをここまで騙すのは。

side out

後日、ライフルと剣は神社の桜の木の下に立てかけられた。

その神社の名前は、

博麗神社。

次回へ続く

第四十四話 七年後・・・

side 侵二

主上が眠ってから早くも七年。幻想郷にルールが出来ました。

それは「スペルカードルール」で、このルールは、相手との強さを対等にするために作られたルールです。

まず、相手を殺すのは禁止。殺すと紫殿が罰を下します。・・・私も参加します。

次に、攻撃は大体弾幕で行い、「弾幕ごっこ」と呼ばれる。これは非殺傷の弾幕で、勝負中、避けられない弾幕は禁止されます。

最後に、「スペルカード」について、これはいわゆる必殺技で、通称スペカです。この技？はカードに自身の想像で作られ、使用宣言中は攻撃禁止です。

後、幻想郷では「異変」というものがしばしば発生します。これは大体博麗神社の巫女・・・今は博麗霊夢（はくれいれいむ）が大体解決します。

ちなみに、私もスペルカードは作りました。

・・・これぐらいですかね？変わったのは。

??? 「侵二様！」

あ、そうそう、娘のようなものが出来ました。藍の式なんですけどね。

『・・・橙か。どうした?』

この子の名前は八雲橙（やくもちえん）、化け猫です。

橙「紫様が呼んでます!」

『・・・そうか、ありがとう。』

・・・侵二移動中・・・

「どうしました?」

紫「近々、異変が起きるわ。侵二さん、行ってきても良いわよ。」

「了解、行かせてもらいます。」

紫「侵二さん、随分と馴染んだわね。」

「そうですね?」

私は藍と結婚したのでマヨヒガ・・・紫殿の隠れ家に住むようになりました。

「確かに、最初は違和感たっぷりでしたからね。」

紫「ええ、本当に・・・今から霊夢の所に行くわ、来ます?」

「じゃあ、行きますか。」

side out

side 霊夢

「はあ……平和だわ……」

私は縁側で茶を飲む。

??? 「おーい、霊夢、遊びに来たぜ！」

「あんたがいなきやもつと平和だったのに。」

??? 「おいおい、それはないぜ。」

こいつは霧雨魔理沙（きりさめまりさ） 腐れ縁の友人。

魔理沙 「客に茶はないのか？」

「勝手に飲みなさい。」

魔理沙 「冷たいなあ。」

「ほぼ毎日来られるところなるわよ。」

紫 「あらあら、仲いいわね。」

「……なんだ、紫か。」

紫 「酷いわね！……あの頃はよく甘えて来たのに。」

こいつは八雲紫、胡散臭い。

侵二「まあまあ、あ、お邪魔しますね。」

この人は侵二さん。紫の古くからの知り合いらしくて、凄くやさしい。

侵二「これ、お賽銭です。」

「ありがとう！」

侵二さんはいつもお小遣いみたいにお賽銭をくれる。

紫「随分と対応が違うわね・・・」

「そりゃそうよ、胡散臭いのと優しいのじゃ優しい方に行くわよ。」

当然じゃない。

魔理沙「おっ、侵二さん。」

侵二「やあ、魔理沙。」

魔理沙「そうそう、聞きたいことがあったんだぜ。」

侵二「何ですか？」

魔理沙「この神社の桜の下の剣って誰のだ？」

侵二「・・・」

侵二さんが黙る。

侵二「……あれは、ここの神様のものですね。」

「そうなの?」

侵二「……ええ、見たことがないでしょうね。」

この神社に神様がいたなんて初耳だ。

「どっどこにいるの?」

紫「……この世にはもういないわ。」

侵二「七年前、亡くなったんです。」

魔理沙「……何か、悪かったぜ。」

霊夢「……ごめんなさい。」

侵二「気にしないでいいですよ。」

紫「今、どうしているのかしら……」

紫が寂しそうな顔をする。紫があんな寂しそうな顔をするのは初めて見た。

侵二「さあ?」

侵二さんはどこか笑っている。……不思議な感じだ。

魔理沙「……そ、それより! 霊夢! 勝負だぜ!」

・・・魔理沙も空気が重かったのか話を変える。

「嫌よ。面倒くさい。」

侵二「・・・良ければ、勝負しましょうか?」

魔理沙「本当か!? 侵二さんとするのは初めてだぜ!」

侵二「・・・そうですね。じゃあ、始めましょうか。」

紫「じゃあ、審判をするわね。被弾数は三、スペルは二枚、初め!」

bgm 恋色マスターパーク

魔理沙「最初から行くぜ! 魔符【スターダストレヴアリエ】!」

侵二「よつと。」

侵二さんは全部見えているかのように避ける。・・・凄い。

魔理沙「嘘だろ!」

侵二「隙あり。」

魔理沙「くっ!」

弾幕が丁度相殺されない所に撃ち、当てた。

侵二「後二回ですね。」

魔理沙「くそっ!」

侵二「ではこちらも・・・雷符【ライジングレイン】」

雷の塊が降る。

魔理沙「これぐらいなら！」

侵二「あ、連結しますよ？」

魔理沙「え？うわっ！」

弾と弾が繋がって大きくなる。

魔理沙「危なかったぜ・・・」

侵二「・・・残念。」

魔理沙「こうなったら奥の手を使うぜ！恋符【マスタースパーク】
！」

侵二「おお、回避場所は・・・そこか！」

魔理沙「避けられた!?!」

侵二「惜しかったですね！」

侵二さんが弾幕を二回当てる。

紫「そこまで！」

魔理沙「くそっ！」

侵二「まだまだですね。・・・でも、最後の判断は早かったですね。」

魔理沙「侵二さん滅茶苦茶強いぜ・・・」

紫「侵二さんは弾幕ごっこ無しだとほぼ最強よ。」

「そんなに強いのか!?!」

侵二「まあ、一度だけ負けましたね。数千年前に。」

魔理沙「侵二さん、何歳なんだから・・・」

侵二「紫殿より年上ですね。」

「はあ!?!じゃあ、幾つなのよ?」

侵二「一億歳ぐらいですかね?・・・もうお爺さんですよ。」

いやいやいや!一億歳!?!どう見ても年上のお兄さんぐらいにしか見えない。

魔理沙「す、凄すぎるぜ・・・」

侵二「心は若いつもりですがね。」

魔理沙「じゃあ、この神社の神様とはどんな関係だったんだぜ?」

侵二「・・・私の主でした。私は元々主上の式だったんですよ。まあ、友人みたいなものでしたが。・・・私に勝った唯一の人でしたね。」

紫「私は師匠だったわよ。」

「そうなの・・・」

侵二「おっと、もう昼ですね。私が昼食を作りましょう。」

「本当!？」

侵二さんの料理は美味しい、悔しさも消えるぐらい美味しい。

侵二「じゃあ、作ってきます。」

魔理沙「・・・ん？」

「どうしたの？魔理沙。」

魔理沙「いや、あそこの剣が光った気がしてな。」

「気のせいじゃない？」

魔理沙「ああ、多分気のせいだぜ。」

幻想郷は今日も平和だ。

次回へ続く

第九章 紅霧異変くやって来た吸血鬼
第四十五話 紅い霧

side 侵二

「紫殿、異変ですか？」

紫「・・・ええ、」

この日、空が真っ赤に染まっていた。

「・・・主上の残した宿題ですね。」

主上は吸血鬼と関わって、いずれ来いと言う約束をしたらしい。おそらく空の色、少しの血の気配からその吸血鬼と思われる。

紫「霊夢達はもう行ったわ。侵二さんは？」

「取り敢えず挨拶に行ってきます。では。」

特に急ぐわけではないので歩いて向かう。

・・・侵二移動中・・・

「・・・ここは霧の湖でしたっけ？」

主上が気に入りそうな所だ。今は空のせいで赤く見えるが多分綺麗な水色をしているだろう。

??? 「貴方は食べてもいい人間？」

感傷に浸っていると声をかけられた。

「食べてはいけませんし、第一妖怪ですよ。」

??? 「そーなのかー」

「そうですよ。君は?」

??? 「ルーミアなのだー」

ん?ルーミア?

「失礼しますが・・・常闇妖怪の?」

ルーミア「わからないのだー」

リボンが怪しいので触れてみる。

ルーミア「あら、普通にしゃべれるように・・・」

「もう一度伺います。常闇妖怪ですか?」

ルーミア「ええ、何故知ってるの?」

「主上から聞きました。」

ルーミア「主上?」

「失礼、神矢龍一殿のことです。」

ルーミア「ああ！龍一ね。龍一は今どうしてるの？」

「七年前、亡くなりました。」

ルーミア「あらそう、残念ね。」

「……何故そのような状態に？」

ルーミア「ああ、これね？……ちよつと自分で封印してるのよ。」

「何故ですか？」

ルーミア「ここが面白いからよ。封印を解くと誰からも危険視されるもあるしね。」

「……そうですか。ところで、ここらに新しく出来たものはありますか？」

ルーミア「ああ、出来たわよ。ここからすぐ先よ。……面白い事が聞けたわ。ありがとう。」

「……こちらこそありがとうございました。では。」

さて、先に進まなければ。

……侵二移動中……

ルーミア殿に聞いた方向に歩いて三分、怪しい建物に着いた。

「……うわあ、目に悪いですね。」

全て紅一色、住み慣れるのに時間が必要でしょうね・・・

「・・・おや、霊夢と魔理沙はもう入っていますね。」

じゃあ、私も正面から入りましょう。

??? 「止まって下さい。・・・何のご用ですか？」

門番らしき女性に止められた。

「貴女は？」

??? 「私はこの館の門番、紅美鈴（ほんめいりん）と申します。」

「侵二です。用はあります。・・・ここに、昔人間の男性がいませんでしたか？」

美鈴 「・・・シユナイダー様の事ですか？」

「そうです。彼からこの主に伝言が・・・」

美鈴 「失礼ですが、シユナイダー様の知り合いですか？」

「まあ、友人ですね。・・・入って大丈夫ですか？」

美鈴 「・・・」

まあ、信用出来ませんよね・・・

「なら、これを預かっておいて下さい。私の武器です。」

美鈴 「何故ですか？」

「その武器で今切ってもらっても構いません。」

美鈴 「・・・分かりました。どうぞ。」

「ありがとうございます。・・・捕食、傷。」

美鈴 「あれ？傷が・・・」

「せめてものお礼です。・・・霊夢達のせいでしょうか？」

美鈴 「いえいえ、私の実力不足ですよ。お嬢様の失礼のないように
お願いします。」

「分かりました。では。」

それから、館内に入り十分程。

明らかにおかしい。歩いているのに戻される感覚がある。主上で
経験済みです。

・・・何かあるんですかね？

「捕食、前面の空間」

・・・出た。謎に部屋が一つだけ隠されていた。

「お邪魔します。」

??? 「誰だ？」

「侵二と申します。」

??? 「貴殿が侵二か。私は元当主のオルゴイ・スカーレットだ。」

「貴方ですか、主上の友人は。」

オルゴイ「・・・そうだな。・・・シュナイダー、いや、龍一は？」

「・・・亡くなりました。」

オルゴイ「・・・そうか、最後はどうだった？」

「眠りました。それは静かに。」

オルゴイ「・・・悔いはなかったのだな。」

「・・・ええ。」

オルゴイ「・・・そのために？」

「約束でしたからね。」

オルゴイ「感謝する。・・・せっかくだ、ゆつくり話そう。」

「お言葉に甘えます。」

side out

数分前

趣味の悪い館に入ってからかなり経った。・・・さっさと出たい。

魔理沙「なあ、霊夢、二手に別れようぜ?」

「・・・いいわね。じゃあ、向こうを頼むわ。」

魔理沙「分かったぜ!」

さて、私もさっさと帰りたいたので捜査を続ける。

・・・少女移動中・・・

しばらく経って、いきなり何かが飛んできた。

「っ!」

??? 「侵入者ね。」

「あんたがこの異変を起こしたの?」

??? 「・・・いいえ、私は唯のメイドの十六夜咲夜、起こしたのはお嬢様よ。」

「なら、とつとと止めさせてくれない?」

咲夜「無理な相談です。それに、お嬢様に害をなす者として排除します。」

「なら、さっさと終わらせるわよ!」

b g m ナイト・オブ・ナイツ

「はあっ！」

咲夜に弾幕を放つ、が咲夜がない。

「・・・瞬間移動？」

咲夜「さあ？どうでしょうか？」

後ろに気配を感じて飛んで躲す・・・何処からナイフが？

「くっ！」

ナイフが掠る。あれ？同じナイフだ。

瞬間移動・・・同じナイフ・・・謎の位置からの攻撃・・・

「分かったわよ！あんたの能力が！」

咲夜「・・・！しかし、分かったところで！」

「いいえ！行けるわ！」

咲夜「・・・なっ！動けない!？」

分かった時から札をバラバラに投げている良かった。

「とどめよ！霊符【夢想封印】！」

爆風が収まった。

咲夜「くっ……!」

「あんたのお嬢様ってどこよ。」

咲夜「言いません、……お嬢様、先生、すみません。」

咲夜が消えた。……逃げられた。

「はあ……無駄に動いたわ。」

魔理沙「おーい、霊夢!」

「魔理沙、どうしたの?」

魔理沙「異変の犯人見つけたぜ!」

「あらそう、しつかりやってたのね。」

魔理沙「ま、まあ、たまにはな? (図書館で本読んでたなんて言えないぜ)」

「それで、どこなの?」

魔理沙「この先らしいぜ。」

さあ、さっさと解決して帰ろう。

次回へ続く

第四十六話 説教

side 霊夢

魔理沙に案内された所に着いた。

魔理沙「ここだぜ。」

言われた通り何か怪しい部屋だ。

「よし、入るわよ！」

??? 「お姉さま、来たよ！」

??? 「珍しい客だな。人間か？」

「あんたがこの異変の犯人かしら？」

??? 「そうだ。私がここ、紅魔館の主、レミリア・スカーレットだ！」

??? 「私はその妹、フランドール・スカーレットだよ！」

「そう、洗濯物が乾かないし、止めてもらえる？」

レミリア「無理な相談だ。」

フラン「勝負して決めよう！」

「・・・はあ、行くわよ、魔理沙。」

魔理沙「おう！何時でもいいぜ！」

side out

side 侵二

オルゴイ殿と談笑中、突如爆音が響いた。

オルゴイ「何だ？」

「……ああ、異変を解決しに来た霊夢達でしょう。」

オルゴイ「そうか……五月蠅いし、」

「……止めますか。」

オルゴイ「……そうだな。」

私達は部屋を出て歩いた。

「そう言えば、娘さんの能力が危険だと聞いていたのですが……」

オルゴイ「フランの事か。龍一が狂気を消してくれたから大丈夫だ。」

「……まあ、主上に狂気は効きませんからね。」

オルゴイ「……龍一には感謝していた。」

「あ、多分帰ってきますよ。」

オルゴイ「……確証は？」

「無いですけど、何か『何度でも蘇るさ。』みたいに帰ってきそうじゃないですか？」

オルゴイ「フフツ、確かに。」

「まあ、着いたので止めましょうか。」

オルゴイ「そうだな。……止めんか馬鹿者!!!!」

「いい加減にしなさい!!!!」

レミリア+フラン「お父様!？」

霊夢「侵二さん!？」

魔理沙「何でここにいるんだぜ!？」

オルゴイ「……お前達、確かに好きにしなさいと言った。……だがな? 館を壊してどうする。」

レミリア「……ごめんなさい。」

フラン「ごめんなさい!」

おやおや、説教中ですか。……こっちもしますか。

「あのですね、こんなに壊してどうするんですか? 修理にどれぐらいの費用と時間がかかると思います?」

霊夢「ごめんなさい……」

魔理沙「わ、悪かったぜ……」

「はあ……今回だけですよ？壊してもいいですが、しつかり後片付けできるようにしてからして下さいね。」

霊夢「気をつけます……」

魔理沙「これから注意するぜ……」

「はい、よろしい。オルゴイ殿、終わりましたか？」

オルゴイ「そろそろ終わる。……いいな？咲夜にこれ以上迷惑をかけさせるなよ？」

レミリア「はい……」

フラン「咲夜、お父様、ごめんなさい。」

咲夜「私はいいですよ。」

オルゴイ「今回だけ許す。……終わったぞ。」

「じゃあ、私が修理します。……捕食、数分前の衝撃全て。」

衝撃を喰ってなかったことにする。

オルゴイ「……すまないな。」

「いえいえ、……貴女達、決着をつけるために表に出なさい。」

オルゴイ「……行つてきなさい。」

レミリア「分かったわ。行きましょ、フラン。」

フラン「はい。」

霊夢「じゃあ、私達も行きましょう。」

魔理沙「そうだな、行こうぜ。」

霊夢達は外に出た。

オルゴイ「……ここは平和だな。」

「ええ、平和ですね。」

咲夜「……あの、お知り合いですか？」

おっと、名乗っていなかったですね。

「初めまして、侵二と申します。咲夜殿ですね？」

咲夜「はい、……何故ご存知なのでしょうか？」

「絶影……シユナイダーの友人です。」

咲夜「先生の!?!じゃあ、先生の言っていた何でも喰う化け物つて……。」

「多分、いや、絶対に私です。」

咲夜「そうでしたか！先生は今何処に？」

オルゴイ「……………」

「……主上は遠くに旅に出かけています。暫くは帰ってきません。」

咲夜「……………そうですか。あの、さつきから主上や絶影って……………」

「シユナイダー、これも名前の一つです。絶影でもありませんしね。貴女の言う先生は。」

咲夜「先生が絶影!？」

「ええ、で、主上と言うのは私は絶影の式だからです。」

咲夜「先生って、私が知っている以上に凄かったんですね……………」

まあ、誰だって驚きますよね？

オルゴイ「……………そう言えば、絶影の能力って何なんだ？」

「ああ、【影を司る程度の能力】ですね。」

オルゴイ「影を？規格外だな。」

「オルゴイ殿は？」

オルゴイ「【跳ね返す程度の能力】だ。」

「オルゴイ殿も規格外じゃないですか。」

オルゴイ「・・・まあ、そうだな。」

「主上は規格外すら生温いぐらいですが・・・」

オルゴイ「止めてやれ。」

「そう言えば、咲夜殿は人間ですよ？何故ここにいるんですか？」

咲夜「私は親がなくて、五歳の時に先生に引き取ってもらったんです。」

「・・・それで主上に影響を受けたと。」

咲夜「はい。」

主上、置き土産多すぎです。どうしてくれるんですか。

再び爆音が発生する。

「・・・じゃあ、霊夢達見に行きますか。」

オルゴイ「そうだな。娘達も見に行くか。」

咲夜「私も行きます。」

さて、どうなってますかね？

次回へ続く

第四十七話 決着

side 侵二

外に出ると、霊夢達が弾幕の撃ち合いをしていた。

「元気ですねえ。」

オルゴイ「……貴殿がそれを言うか？」

「まあ、まだまだ私も元気ですけどね。」

美鈴「侵二さん、」

「おや、美鈴殿、先程ぶりです。」

美鈴「薙刀、お返しします。」

「……忘れていました。ありがとうございます。」

美鈴「ところで、旦那様、あれは？」

美鈴殿が霊夢達を指差す。

オルゴイ「あれか？遊んでいるんだ。」

美鈴「そうなんですか……」

「そういえば、美鈴殿は中国の妖怪ですか？」

美鈴「はい、何故分かったのですか？」

「友人に同じ様に気を使う奴がいるんです。」

美鈴「そうなんですか？お名前は？」

「壊夢、ご存知でしょうか？」

美鈴「か、壊夢さん!?まさか侵二さんも侵食の侵に二の……」

「その侵二です。……饕餮の方が早かったですか？」

美鈴「じゃ、じゃあ、他のお二人も……」

「風魔と幻夜ですか？あいつ等もいますよ。」

美鈴「ひええ〜」

オルゴイ「……レミリア達の支配の夢も不可能だったのだな。」

「あ、支配するつもりだったんですか。」

オルゴイ「……勝手にな。」

「随分物騒ですね。」

オルゴイ「……しかし、向こうの娘達で止められそうだな。」

「そうですね。それにしても……」

「楽しそうですね。」

side out

side 魔理沙

レミリア「貴女達、なかなかやるわね。」

フラン「凄い凄い！お兄様とはどうだろうね？」

「なあ、そのお兄様って誰なんだぜ？」

レミリア「凄く強かった魔法使いよ。」

フラン「そうそう、私達以外の吸血鬼倒せるぐらいにね！」

是非ともその魔法使いに会ってみたいぜ。

霊夢「さっさと終わらせるわよ。」

レミリア「こっちの台詞だ！神槍【スピア・ザ・グングニル】！」

フラン「行くよ！禁忌【レーヴァテイン】！」

霊夢「魔理沙！お願い！」

「任されたぜ！」

私の特技、行くぜ！

「恋符【マスタースパーク】！」

霊夢「霊符【夢想封印】！」

レミリア「押し負けている!?!」

フラン「凄い!」

弾幕はパワーだぜ!

レミリア「きゃあっ!」

フラン「きゃっ!」

二人がピチュった・・・終わったぜ。

霊夢「・・・はあ、終わったわ。」

「いやー楽しかったぜ。」

侵二「お疲れ様です。」

s i d e o u t

s i d e 霊夢

侵二「お疲れ様です。」

「侵二さん、何時からいたの?」

魔理沙「そうそう、気になるぜ。」

侵二「霊夢達の十分程後ですね。」

「何してたの？」

侵二「主上の友人か確かめに来てたんですよ。」

うちの神社の神様、人脈広いわね。

魔理沙「それで、どうだったんだぜ？」

侵二「友人でした。」

オルゴイ「・・・見事だったぞ。」

魔理沙「そーいやおっさん誰だぜ？」

オルゴイ「レミリア達の父だ。オルゴイと言う。」

「この人が神社の神様の友人？」

オルゴイ「そうだな。霊夢と魔理沙だったか？娘が世話になった。」

レミリア「・・・霊夢と魔理沙、強かったわ、惨敗よ。」

フラン「あれ？お兄さん誰？」

侵二「私ですか？君達のお兄さんの友人です。」

レミリア「シユナイダー兄様の？」

侵二「そうですね。」

「(侵二さん、神様ってシユナイダーとも言うの?)」

侵二「(ええ、名前が多すぎるんです。主上は。)」

フラン「お兄様は何処に行ったの?」

侵二「遠い場所に出かけています。」

・・・そうか、亡くなっているのよね。

フラン「そうなの?」

侵二「ええ、・・・いつ帰って来るかは分かりません。」

レミリア「残念ね・・・」

魔理沙「ん?ちよつと待ってくれ。侵二さんの主上がシュナイダーか?」

侵二「そう言う事です。」

魔理沙「・・・絶対に勝てないぜ。」

フラン「ねえ、侵二お兄様、お兄様って強いのか?」

侵二「私がお兄様ですか?・・・まあ、そこそこ強いですよ。」

フラン「何時からシュナイダーお兄様と知り合ったのか?」

侵二「かなり前に殺し合った時に。」

・・・殺し合ってたんだ。

フラン「お姉さま、お兄様の言ってたお友達って……」

レミリア「……侵二さん、貴方、【有象無象を喰らう程度の能力】？」

侵二「……そうですよ。」

フラン「お兄様が言ってたの、……私も同じような能力だから。」

侵二「どんな能力ですか？」

フラン「【あらゆるものを破壊する程度の能力】だよ。」

……凄い能力ね。

侵二「大したことないですね。」

……は？

侵二「友人に【災害を操る程度の能力】や【万物を貫く程度の能力】、【万物を欺く程度の能力】とかいますよ？」

私が言うのも何だけど規格外だ。

フラン「……お兄様は暴走とかしなかったの？」

侵二「……そう言う事ですか。……じゃあ、家族や友人をその能力で傷つけたいですか？」

フラン「絶対に嫌！」

侵二「……その意思です。大切なのは。それさえあれば暴走しませんが？」

フラン「……お兄様も同じ事言ってた。」

侵二「そうでしょうか？大丈夫ですよ。……もし、何かあったら助けてあげます。主上なら、絶対にそうしてくれますよ。」

侵二さんがフランの頭を撫でたとき、別の人物に見えた。……それよりもだ。

「ねえ、終わったんだから霧、消してもらえるかしら？」

レミリア「そうだったわね。いいわ、消すわよ。」

侵二「待って下さい。……消させて貰えますか？」

レミリア「？いいわよ？」

侵二「……フラン、見ていて下さいね？私は能力が暴走しませんから。」

侵二さんの背中から翼が生えた。

侵二「捕食、霧。」

侵二さんの翼が二つに割れて空を喰った。

レミリア「」

フラン「え？」

魔理沙「」

オルゴイ「見事。」

咲夜「」

美鈴「」

私も絶句した。何だあれは？

侵二「あれ？どうしました？」

駄目だこの人、早く何とかしないと。

次回へ続く

第四十八話 宴会は賑やかに

side 侵二

異変から二日後の今日、宴会をすることに。今は準備中です。

「大体何人来ますか？」

霊夢 「分からないわ、関係ないのに来る奴もいるし。」

「・・・壊夢呼びますか。」

念話で壊夢と繋ぐ。

壊夢 「・・・呼んだぜよ？」

「あ、壊夢、こちらに最大濃度の酒、何本か送って貰えますか？」

壊夢 「了解ぜよ。俺は参加しないぜよ。十分後送るぜよ。」

「ありがとうございます。待ってますね。」

霊夢 「誰と話してたの？」

「壊夢、昔からの友人兼主上の式です。」

霊夢 「この神様って式何人いたの？」

「私を入れて四人です。」

霊夢 「強いのか？」

「まあ、鬼子母神倒したぐらいですね。」

霊夢「……冗談よね?」

「……冗談に聞こえますか?」

霊夢「……侵二さんってその四人の中で何番目に強いのか?」

「二応、リーダーやってみましたね。」

霊夢「……」

絶句。変な事言いましたかね?

壊夢「侵二! 届けに来たぜよ!」

おっと、もう来ましたか。

「お疲れ様です。」

壊夢「簡単な事ぜよ。ん? その娘は誰ぜよ?」

霊夢「あ、博麗霊夢です。」

壊夢「この子が神社の?」

「ええ、強いですよ。」

壊夢「ほう?」

「貴方と比べないで下さいね?」

壊夢 「分かってるぜよ。んじゃ、帰るぜよ。」

「何か用事が?」

壊夢 「茜等と飲むぜよ。」

「そうですか。」

壊夢 「じゃ、また来るぜよ。」

壊夢が飛んで帰った。

霊夢 「……今の人が?」

「ええ、式最大の怪力の持ち主の壊夢です。」

霊夢 「あれ?そのお酒……」

「神狂いですか?」

霊夢 「それ、伝説の名酒よ!」

「作者あいつですよ。」

霊夢 「え?」

「あいつが作ってます。」

霊夢 「……………」

再び絶句。

「はい、さっさと料理作ってしましましょう。」

霊夢 「神社の神様何者よ・・・」

龍神の兄です。

魔理沙 「おーい、 霊夢！来たぜ！」

「行ってきなさい。作ってますから。」

霊夢 「いいの?」

「ええ、それに料理法は企業秘密です。」

霊夢 「・・・分かったわ。ありがとう、 侵二さん。」

さて、何時もの行きますか。

「【踊る高速クッキング】スタート！」

本当は主上とやりたいんですけどね。

side out

side 霊夢

台所から出た。

魔理沙「霊夢、酒持って来たぜ！」

「ありがとう。侵二さんが台所に入るなって。」

魔理沙「・・・気にならないのか？」

確かに気になる。

魔理沙「ちよつと覗こうぜ。」

「・・・そうね。」

ちよつとなら侵二さんも許してくれるだろう。

魔理沙「・・・覗くぜ。」

台所を覗くと、高速で分身しながら料理している侵二さんがいた。
こつちを見て。

魔理沙「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

魔理沙「み、見なかったことにしようぜ。」

見てはいけないものを見た。

「ええ、そうね。」

扉が開いた。

侵二「見くまうしくたくね〜？」

魔理沙「ごめんなさいだぜ！つい・・・」

侵二「別に良いですけどね？料理完成しましたし。」

「速っ！」

侵二「あ、お客さん来ましたよ。」

レミリア「来てやったわよ。」

フラン「魔理沙、霊夢、侵二お兄様！来たよ！」

美鈴「二日ぶりですね。」

咲夜「今日は。」

???「初めましてね。」

???「初めましてです。」

侵二「お二人は？」

???「私はパチュリー・ノーレッジよ。初めまして。」

???「私は小悪魔です。初めまして。こあつて呼んで下さい。」

魔理沙「おう、パチュリーも来たのか。」

パチュリー「ええ、その男性は？」

侵二「侵二です。初めまして。」

フラン「あのね、パチュリー、侵二お兄様シユナイダーお兄様の知り合いなんだって！」

パチュリー「シユナイダー様と!？」

・・・またとんでもないことしてるのね。

小悪魔「それってバジリスクを召喚した？」

侵二「主上は使えない魔法は無いですからね・・・」

パチュリー「・・・凄いわ。」

侵二「ぶつちやけますけどシユナイダーは超高齢です。一億超えます。」

レミリア「お兄様そんなに年上なの!？」

フラン「お父様より年上なの？」

パチュリー「・・・」

小悪魔「凄い高齢なんですわ・・・」

咲夜「先生、凄かったんですね・・・」

美鈴「どんな方だったんですか・・・」

一億歳以上の神様となると相当上位のはずだ。

魔理沙「それより、早く飲もうぜ！」

侵二「どうぞごゆっくり。」

宴会が始まった。

side out

side 侵二

宴会の輪から離れて酒を飲みだして数分、主上の桜の木の下のそばに誰かが来た。

??? 「チルノちゃん、止めておこうよ。」

??? 「大丈夫よ！早くあの剣抜こう！」

・・・させはしない。

「君達、止めてもらえるかな？」

??? 「誰だオマエ！」

??? 「チルノちゃん！・・・ごめんなさい。」

「その剣はダメです。持ち主がいるのでね。」

??? 「あの、誰ですか？」

「私は侵二です。君達は？」

??? 「アタイはさいきよーのチルノよ！」

??? 「チルノちゃん！・・・私は大妖精です。」

「チルノちゃんはさいきよーなんだね。私もだよ。」

チルノ 「何だとオマエ！」

「あ、私は強い、の最強じゃなくて、おみくじの凶の最凶です。」

チルノ 「そうか、ならいいぞ！」

大妖精 「すみません・・・何故最凶なんですか？」

「強いと書くつまり負け知らず、当てはまらないですからね。」

大妖精 「そうなんですか・・・」

チルノ 「その剣は誰のだ？」

「『この神社の神様のものですね。』

大妖精 「ここに神様いたんですか？」

「いますよ。負け知らずの神様がね。」

チルノ 「そうだったのか！じゃあな！侵二！」

大妖精 「ありがとうございました。」

「また来て下さいな、神様も喜びますから。」

大妖精「はい！」

チルノ達が向こうの団体に向かって行った。

「……ねえ、主上？」

宴会は夜更けまで続いた。

……その夜……

レミリアが酔いつぶれ紅魔館の住民は帰宅。

チルノ達は普通に帰宅。

魔理沙、霊夢は酔いつぶれて神社の中で眠っています。

私は一人で深酒です。……主上の桜の木の下で。

「……最初の宿題終わらせましたよ。主上。」

紫「私も一緒にいいですか？」

紫殿か……

「どひどひ。」

紫「師匠、見てくれていたかしら……」

「見てましたよ、多分ですが。」

藍「侵二、紫様、ここにいたんですか。」

「・・・悪いな。」

藍「いや、いいんだ。」

私は酒を盃に注ぎ、木の下に垂らす。

「・・・それにしても、この桜、成長しましたね。」

紫「そうですね・・・」

夏のせいか、葉や枝が多い。異常に。

藍「侵二、そろそろ戻ろう、橙が寝る時間だ。」

「分かりました。・・・では、主上、また来ます。」

とある夏の日、主上との約束を一つ果たした。

次回へ続く

第十章 春雪異変く舞い降りる一つの矢
第四十九話 終わらぬ冬

side 侵二

暦上は春だというのに未だに冷える。

藍「・・・寒いな。」

「・・・ああ、冷えるな。」

異変ですかね？

藍「異変だろうか？」

「まあ、異変なら霊夢が解決しに行くだろうな。」

藍「・・・そうだな。」

ふと、空を見上げる。・・・今日は新月ですね。

藍「そう言えば、紫様がいないな。・・・ちよつと行ってくる。」

「ああ、俺は博麗神社にいるよ。風魔に会うのでな。」

藍「分かった。じゃあ、行ってくる。」

「了解、何かあったら連絡してくれ。」

さて、神社に行きますか。

・・・侵二移動中・・・

「靈夢「あ、侵二さん。」

「靈夢、また炬燵ですか？」

「靈夢「侵二さんは寒くないの？」

「心頭滅却すれば火もまた涼し、その逆です。心の持ち方一つですよ。」

「主上がブアレフオール使っていたので・・・ね？」

「魔理沙「おーい、靈夢！異変だぜ！」

「魔理沙が来ましたね。」

「靈夢「・・・異変？」

「魔理沙「そうだぜ！こんなに冬が続くのは異変だぜ！」

「「よく気づきましたね。」

「靈夢「・・・めんどくさいし、寒いから嫌よ。」

「魔理沙「・・・そんなんでいいのか？」

「靈夢「・・・五月蠅いわね。」

「駄目だこれは、仕方がないですね・・・」

「異変解決したら私がご馳走しましょうかね・・・」

「霊夢 「魔理沙、行くわよ。」

「魔理沙 「よし、行こうぜ！（侵二さん、ナイスだぜ！）」

「いってらっしゃい。お賽銭も入れておきますね。」

「霊夢 「早く行くわよ！」

「魔理沙 「おう！」

「霊夢達が飛んで行った。」

「さて、いつまで木の上から見てるんです？風魔。」

「風魔 「・・・いや、何、早く来すぎたのでな。」

「流石四凶最速。速いですね。」

「風魔 「止めろ四凶最凶。随分と平和ボケしているじゃないか。」

「それは風魔もでしょう？何なら試しますか？」

「風魔 「いや、止めよう。主上の命日だしな。」

「・・・そうですね。」

「そう、今日は主上の命日、記念していいのかわからない七年目。」

風魔「壊夢は地底の大工作業が、幻夜はいつの間にか結婚、今年が四年目らしいしな。」

「壊夢は仕方がないとして、幻夜は嫌なんでしょうね。来るのが。」

風魔「・・・確か、今日は新月だったな？」

「ええ、主上が最大の力を出せる日です。」

風魔「流石に規格外の主上でも復活はするまい。」

「ええ、多分ですがね。」

と言うより復活されるとまずは殺らないと。紫殿泣かせたのでね。

風魔「・・・そろそろ戻る。伊織に書類整理を任せているのでな。・・・また来る。」

「了解、また呼びますね。」

風魔は賽銭箱に砂金を入れて帰って行った。・・・砂金はないでしょう。

「私は主上の剣の手入れでもしますか。」

主上の剣をこの日毎年手入れする。銃も行う。

「ふう・・・これでいいですかね。」

手入れが終わった。

「……この銃で片手で狙撃ですか、随分と重いですね……」
やはり主上は常識外れだ。

「これが出来るなら、さつさと帰ってきて下さいよね……」

藍「侵二！大変だ！」

藍からの念話だ！

「どうした!？」

藍「西行妖が……復活した。」

「……了解、すぐに向かいます。」

藍「すまない、頼んだ。」

あの桜が復活した。随分と不味いことになった。多分私達の次に
まずい妖怪でしょう。

まあ、面倒な原因が「死」を管理しているからなんですがね。お
かげで殺せない。

ともかく、流石に完全復活とはいかないでしょう。私一人で抑えら
れるはず。

「さつさと行きますか！」

私は翼を広げて飛び立った。

s i d e o u t

その数分後、数名が博麗神社に黒い星のような物が落下したのを目撃した。

勿論、侵二達は知らない。

次回へ続く

第五十話 落ちた矢

side???

「あいつつつ。着地失敗だな。」

やっちゃまった。まさか神界から飛び降りたのは良いものに高かったとは……

「……取り敢えず、ここ何処だ？」

まずは場所確認。……神社か？

「……まさか、博麗神社か？」

もうそんな時期かよ。時間かかりすぎだな。

「……そうだ、賽銭入れておくか。」

取り敢えず賽銭箱にある程度のお賽銭を入れる。……それにしてもだ。

「この景色と気温はおかしいだろうがオイ!!」

春じゃねえのかよ!? 一面雪景色じゃねえか!

「……クソツタレ、異変じゃねえか。」

時期が悪い。ちきしょう、紅霧異変見れなかったぜ。

「……あ、そうだ。」

俺は神社の裏の桜の下に行く。

「・・・風魔の野郎、やりやがるな。」

刀に紙が括られていた。

「・・・拝啓、主上。」

長旅ご足労様だ。幻想郷は平和そのものだ。・・・感動を返せ。

敬具、風魔」

何て文だ。・・・まあ、俺が悪いんだが。

『・・・てか、俺って分かったじゃねえか。・・・ま、いいか。』

俺、帰還完了。感動も何もない始まりである。

『・・・侵二の奴も、武器の手入れしてくれていたのか。・・・侵二は?..』

・・・待てよ、終わらない冬、いない八雲家・・・まさか。

『・・・西行妖い!!』

西行妖が復活する。許さん、奴は許さん。紫を殺しかけたんだ。処す。

『・・・ライフルは準備完了。新月も問題なし!ぶっ飛ばす!』

あ、冥界って何処だ？

『……分かん。』

始まりからグダグダである。

『……取り敢えず、人里に行くか。』

……龍一移動中……

『……よし、てか、人いないな。』

この寒さのせいかな、人がいない。

『うーむ、どうしたものか。……ん？』

人影が二つ、……あれ？

『おい、義炎か？』

義炎「ん？おお！龍一！」

妹紅「あ、龍一じゃん。久しぶり。」

『……お前等、変わらねえな。……じゃねえ！』

義炎「どうした？」

『義炎！冥界って何処だ!?!』

義炎「……冥界？何故ですかな？」

『話は後！何処か知ってるか!?』

妹紅「そーいや、さつき侵二が向こうに行つたよ。」

侵二がいるか、よし！

『ありがとう、妹紅、義炎！急いでるんでな、じゃあな！』

ダンダリオンで瞬間移動しようと思つたが、細かい位置が分からないので不可能。フォカロルで飛ぶ。え？神力？ザガンを桜に移して補給していたから大丈夫だ！

『……間に合えよ!』

side out

冬の雪景色の中、高速で飛ぶ神が一人。

まだ、冬は終わらない。しかし、確信できる事がある。

彼がいる限り、BADENDは受け付けない。

あるのはただ……

気分とHAPPY ENDのみ。

さあ、天を仰げ、主が戻る。

第五十一話 されど気分は不滅なり

side 侵二

冥界に駆けつけると、西行妖が復活していた。・・・ほぼ完全に。

紫「侵二さん！」

霊夢「侵二さん!？」

魔理沙「何でいるんだぜ!？」

「話は後! 藍、状況説明求む!」

藍「ああ! 霊夢達が異変解決後西行妖が復活した! 幽々子様を取り込まれている!」

「了解、紫殿、封印可能ですか?」

紫「ええ! 時間はかかるけど出来るわ!」

「了解、霊夢達、力を貸してもらえますか?」

霊夢「よく分からないけど良いわよ!」

魔理沙「分かったぜ!」

咲夜「了解です。」

「妖忌の孫の妖夢! 貴女も!」

妖夢「は、はい！」

さて、殺せないのが不本意ですが・・・封印しましょうか。

side out

side 霊夢

侵二さんの様子がおかしい。いつもニコニコしていて、少し落ち着いた人だと思っていたからか、こんなに緊張した侵二さんを見るのは初めてだ。

侵二「攻撃に当たらないように！これは弾幕ごっことは大違いです！死にます！」

魔理沙「冗談じゃないぜ！」

さつきから西行妖から殺気がする。少し前までは普通の異変解決だったはずだ。

「っ！」

侵二さんからもそれと同じぐらいの殺気が出る。

「霊夢達は弾幕で枝を、私は妖力弾を破壊します。」

侵二さんが落ち着いている。もはや別人だ。

魔理沙「了解だぜ！」

妖夢「わ、分かりました！」

咲夜「了解です！」

「分かったわ、侵二さんは大丈夫なの？」

侵二さんが笑う。

侵二「何、多分大丈夫です。」

紫「十分だけお願い！」

侵二「了解です。」

侵二さんが私でも見るのに苦勞する速度で駆け出し、妖力弾を叩き落とす。

「速い！」

魔理沙「私達も行くぜ！」

私達も弾幕で枝を破壊する。

侵二「妖夢！後ろに枝来てます！」

妖夢「っ！はい！」

侵二さんは一人で妖力弾を処理しているのに疲労感がまるで無い。

侵二「どうしました西行妖！その程度でしたか？」

逆に楽しそう、てか怖い。

・・・十分経過・・・

「はあ、はあ、はあ、」

あれから十分、枝を私達で百本ほど壊した。

魔理沙「後どれくらいだ？」

紫「後ちよつとよ！」

侵二「了解です。本気で行きます。」

侵二さん、まだ本気じゃなかったのね。・・・本気ってどれくらいなのかしら？

侵二「下がって下さいね？」

侵二さんから凄まじい妖力が出てきた。

side out

side 侵二

被害を想定して最大に抑え込む。さあ、行きますよ！

【黒稲妻】！

西行妖に命中、四分の一を抉る。幽々子も引きずり出す。

魔理沙「わ、私のマスターspark何て相手にならないぜ・・・」

まあ、こちらは反動が大きいんですがね。数十秒は動けません。

「紫殿！今です！」

紫「分かったわ！封印！」

西行妖が封印された。

side out

side 霊夢

「……やったの？」

侵二「ええ、お疲れさまでっ!!紫殿！後ろです！」

紫「え？きやつ！」

紫が避ける。

侵二「……まーだ元気ですか。これはマズイですね……」

侵二さんの顔が歪む。……確かにこれはマズイ。侵二さんの一撃でも倒れなかったのだ。私達が勝てるわけがない。

紫「どうすれば……」

侵二「……ん？」

侵二さんが何かに気づいたように見える。

紫「……侵二さん？」

『……やつとですか。』

魔理沙「……侵二さん、どうしたんだぜ？」

侵二「……I n t o t h e s k y . . . 」

……侵二独唱中……(旧支配者のキャロル)

咲夜「……侵二様？」

妖夢「……侵二さん？」

藍「侵二、……どうした？」

侵二「……T h e y w i l l r e t u r n . 」

紫「え？」

「……何言ってるの？侵二さん。」

侵二「……そろそろですかね？」

突如、空が黒く染まる。西行妖の動きも止まる。

「一体何が……」

侵二「……さあ、西行妖、貴方の年貢の納め時が来ましたよ？」

侵二さんに攻撃が襲いかかる。しかし、侵二さんは笑っている。

「侵二さん！避けて！」

『天仰げ、空高く、』

侵二「凄いですね、タイミングバツチリです。」

『・・・今宵、我戻る、何てな。』

西行妖の攻撃が何者かによって阻止される。・・・誰？

侵二「・・・遅いじゃないですか。」

side out

side 侵二

「・・・遅いじゃないですか。・・・主上。」

『・・・待たせたな。』

主上の登場により、桜の妖は狼狽し、博麗の巫女と魔法使いと庭師は混乱し、館のメイドは驚く、幻想郷の賢者の式は喜び、賢者は嬉し涙で崩れ落ちる。

そして私は微笑、と、随分と絵になりますねえ。絶対に狙ってましたね。

『俺、参上!!』

侵二「お帰りなさい。主上。・・・して、その桜、どうしますか？」

気にすると終わらないので、と言うか早く西行妖滅ぼしたいんです。

『スルーするなよ。・・・あの日死んでから肉体を一から構成するのに三年、幻想郷を神々に認めさせるのに三年、そして・・・西行妖を「死」から引きはがすのに一年間！成功した！殺しても構わん！と言うより殺す！』

・・・そうではなくては。

「御意！妖力全開放！」

『俺も全開放で行く！七年分の恨みだ！』

やっぱり、主上がいなくては。

b g m R a b p i d | S a n k t i t y E x t e n d e d
(龍一テーマbgm)

『侵二！最高火力で放て！俺が西行妖を拘束する！』

すでに結解がきしんでいる。が、無視。流石主上。

「了解！電磁砲行きますよ！」

『オツケイ！ザガン！西行妖を固定しろ！』

・・・主上の腕は落ちてないですね。

「行きますよ！【黒電磁砲】！」

翼を全て後ろに下げ、地面に突き刺す。薙刀から放射！

西行妖「ギ・・・ガ・・・」

西行妖の三分の二が炭になる。

霊夢「・・・凄い。」

と言つても西行妖はまだ動きます。・・・面倒な。

『まだ死なんのか。侵二、俺が止めをさす。』

「どうぞ。」

『・・・【ツインバスターライフル】最大出力！破壊するぜ！』

西行妖が動かなくなる。

「やりましたね、主上。」

side out

side 龍一

侵二「やりましたね、主上。」

俺が死んでからいや、正確には三億個のうちの一つが殺されてから七年、紅霧異変見えなかったぜ畜生どうしてくれる。時間はかかった

が完全復活。

『ちよつと帰つて来るのに時間がかかったがな。』

侵二「……とりあえずごまかしてましたからね。」

こうなる事は分かっていた。四凶にはばらしていたが。

紫「師匠！」

『おお、紫、ただいま。』

紫「……どうして帰つてこれたの？」

前までは気分、と、ドヤ顔で答えるはずだが今は違う。

『……お前のためだよ。もう言わせんなよ。』

紫「え？何で……」

『お前、あれだけ俺に言つて俺がこのこ死ぬわけねえだろうが。』

すみません、死んでました。

紫「じゃ、じゃあ……」

その刹那西行妖の枝が紫に襲いかかる……くどいわ！

『……どけっ！』

同じ事させやがって……

枝が同じく右肩に刺さる・・・と思っていたのか？

『・・・右腕爆発。』

俺の右腕ごと枝を爆破。こうすれば速かった。・・・あの時は焦りすぎたな。

紫「師匠！」

『つたく・・・消え去れ！』

西行妖の妖怪の部分を引き出す。

侵二「頂きます。・・・そこそこの味ですね。」

侵二が喰う。これが出来なかったからな。

紫「・・・師匠・・・腕が・・・」

あ、忘れてた。再生開始。

『大丈夫大丈夫、これぐらいなら再生する。』

藍「絶影殿！」

『おう、久しぶりだな。』

咲夜「先生！」

『咲夜、随分と大きくなったなあ。』

魔理沙 「どうなってるんだぜ……」

霊夢 「……紫、神社の神様って死んだんじゃないの？」

『ああ、死んでたよ。……さつき復活しただけで。』

霊夢 「じゃあ、この人が……」

侵二 「ええ、あの神社の神様ですね。」

『俺神社で祀られてんのか?』

紫 「勝手にごめんなさい。」

賽銭入れちやったよ。……まあ、

『別に構わんよ。どうせ全人類に祀られてるようなもんだし。』

霊夢 「あれ?うちの神社の神様そんなに凄いの?」

魔理沙 「神様、どれくらい偉いんだぜ?」

『龍神の兄。それだけ。』

霊夢 「りゅ、龍神の兄い!？」

咲夜 「え?先生が神様?」

妖夢 「祖父の知り合いが龍神の兄上……」

魔理沙「世界で一番偉い神様だぜ……」

『肩書きだけな。事実上全権は妹の龍華に移ってるし。』

侵二「じゃあ主上、とりあえず死んで下さい。」

開口宣言、これは酷い。

『やなごった。こっちだつてすぐに行きたかつたわ。』

侵二「しかし、紫殿は泣かせたでしよう?」

反論の余地なし、

『……そうだな。よし、侵二、介錯を頼む。』

侵二「あの世で会いましょう。」

霊夢「いや、ちよつと待ってよ!」

『……と、言いたいんだが。』

侵二「冗談なんですよね。こちらも冗談です。」

流石侵二、冗談が本気に聞こえる。……本気だったな。

紫「……あの、龍一、さっきの……」

『……ああ、紫。』

侵二「さて、妖夢殿、台所借りますよ、霊夢達も来て下さいね。」

妖夢「え？あ、はい！」

霊夢達がいなくなる。侵二・・・悪いな。

『紫、お前を永久に守る、拒否権は無しだ。』

紫「・・・私でいいの？」

『・・・二度は言わん。いいか？』

紫「・・・喜んで!!」

侵二が溜息をつきながら来る。

侵二「・・・やれやれ、何年かかっているんですか。・・・まあ、おめでとうございます。」

前世の俺じゃあ、こんな事には絶対にならなかつたな・・・

『・・・そうだな。ありがとう。』

・・・二度と死なねえようにしないとな。・・・無理か？

次回へ続く

第五十二話 主上のいる風景

side 龍一

西行妖を消滅させて一日、今は桜の再生中だ。

『よし、ザガンで再生完了。』

侵二「お疲れ様です。・・・流石に壊しすぎましたか?」

『いや、まだ再生圏内だった。後、位置特定の手伝いサンキューな。』

侵二「・・・気づいてましたか。」

そう、最初の黒稲妻は俺に位置情報を教えるために撃ったようだ。・・・それにしては被害がデカい。

『よく俺が復活したの分かったな。』

侵二「冥界に着いた時に神社に何か落ちたのが分かったんですよ。ついでに言うと、風魔は薄々気づいてましたよ。「そろそろ復活するんじゃないか?」って。」

『・・・マジで?』

うわ恥ずかしい。感動の再開が感動（爆笑）の再開ではないか。

侵二「・・・まあ、いいじゃないですか。紫殿が応えてくれて。」

『まあ、そうかな?』

侵二「紫殿、凄く嬉しそうでしたし。」

紫が俺に好意があつたのは月面戦争（急降下爆撃したあれ）ごろから感じてはいたが、まさか俺が消滅する間に告白してくるとは想定外だった。・・・俺も告白はやらかした。あれはないだろう。思い返すと恥ずかしい。

侵二「私も嬉しいですよ。また料理が一緒に出来て。」

『それは良かった。早速宴会だからな。』

侵二「・・・それにしても、よく西行妖を消せるようになりましたね。」

『流星にあれは疲れた。何しろ「死」から外す必要があつたしな。』

侵二「それでもよくやりますね・・・」

『龍神だからな。』

龍神補正万歳。おかげで一から肉体を再構成したのに神力そのままだったしな。

侵二「幻想郷も認めさせたそうじゃないですか。」

『あれは簡単だった。唯OHANASIしただけだし。』

そう、龍華と天照、月読命、須佐之男、クシナダ姫、神奈子、伊弉諾、伊邪那美は快く承諾してくれたが、後は反対したので弾圧（物理）で黙らせた。地球は俺の独裁国、これぐらいは認めさせるZOY

侵二「・・・参加したかったですね。」

止めろ侵二、俺だけで崩壊しかけたんだ。お前が入るとマジで崩壊する。

紫「龍一！何話してるの？」

『俺が死んでた七年間の作業。』

紫「ふーん。．．．幻想郷を認めさせてくれたって本当？」

『本当だ。てか、七年待たせたんだ。これぐらいの償いはな？』

紫「いつもありがとう。師匠。」

『師匠は止めろ。もう弟子じゃなくて彼女なんだからよ。』

紫「うんっ！」

侵二「．．．紫殿、宴会はいつですか？」

紫「二日後よ。」

『そうか、じゃあ、神社に戻るか。』

幽々子「そう、残念ね〜」

『まあ、宴会の時に会おうや。』

妖夢「あの、龍一さん、いつか稽古をお願いしていいですか？」

『良いよ。どうせなら俺達の組み手も見せる。』

妖夢 「ありがとうございます！」

侵二 「さて、神社に帰るとあいつ等が待ってますよ。」

『じゃあな、また来る。』

紫 「幽々子、また今度ね！」

ダンダリオンで帰る。転送術は紫よりも速いが、どうもそれ以外は出来ない。

・・・龍神、侵二、紫移動中・・・

『よつと。』

霊夢 「龍一さん、お客さんが来てるわよ。」

お客、ねえ。

霊夢 「凄くいい人ね！お賽銭凄くくれたわ！」

魔理沙 「・・・霊夢はそこが基準か。」

霊夢 「いいじゃない。」

風魔 「・・・帰って来たか。主上。」

『七年ぶりだな、風魔。』

風魔 「こちらは変化なしだ。そっちは？」

『俺の方も変化なし。』

風魔「さて、重いのはやめだ。二日後の宴会の時、私も行く。」

『よし、分かった。・・・賽銭箱に何入れた？』

風魔「・・・砂金だが？」

『・・・あえて突っ込まんぞ。また後で勝負だな。』

風魔「そうだな！壊夢も心待ちにしていたぞ！」

壊夢「随分と待たせたぜよねえ。」

『おお！壊夢！』

壊夢「久しぶりぜよ。あ、賽銭入れるぜよ。」

霊夢「ありがとう！」

『壊夢、そつちに変化は？』

壊夢「全くないぜよ。地底も楽しい物ぜよ。」

『宴会を二日後にする。来るか？』

壊夢「断る理由が無いぜよ。勿論行くぜよ！」

『それでこそだ。待ってるぜ！』

壊夢「了解ぜよ！あ、幻夜呼んだぜよ。」

幻夜「よく生きてたね〜」

幽香「龍一さん、ごきげんよう。」

霊夢「・・・風見幽香。」

魔理沙「・・・何でいるんだぜ。」

幽香「あら、霊夢、久しぶりね。」

幻夜「こらこら、喧嘩しようとししないでよね〜」

幽香「そうね。止めとくわ。」

幻夜「で、お帰り〜」

『軽いなおい、ただいま。幽香も久しぶり。』

幽香「久しぶりね、帰ってきたのね。」

幻夜「で、宴会するんだって〜？」

『ああ、勿論、』

幻夜「僕は行くよ〜幽香は〜？」

幽香「私も行くわ。久しぶりにね。」

『了解、後遅れたが結婚おめでとう。お幸せに。』

幽香「あ、ありがとう。」

幻夜「うん、ありがとう。あ、お賽銭入れとくねくマスターの神社だし。」

霊夢「龍一さんの知り合いが凄く優しいっ!」

おい霊夢、そこで感動するなよ。

幻夜「でくマスターに弾幕ごっこ教えたの?」

紫「あつ。」

知っているが一応聞く。

『何だそりや?』

紫「幻想郷の新しいルールよ。みんなが平等に戦えるように作ったの!」

侵二「要するに非殺傷の私達の喧嘩ですよ。」

『ああ、あれな。いつもやるやつな。』

紫「それに避けられない弾幕を出すのが禁止って言うルールを付け足した物よ。」

風魔「後はスペルカードと言う必殺技のカードがある。これが無くなっても負けだそうだ。」

『…一応聞く、お前等の対戦結果は？あ、お前等の闘争は外して。』

侵二「なら全勝です。」

風魔「全勝だ。」

壊夢「全勝ぜよ。」

幻夜「全勝だよ。」

やっぱ化け物だわ。

紫「で、このカードがスペルカードの元よ。何枚か渡すね。」

よし、これで金属器使い放題だ！

『これにどうするんだ？』

紫「これに想像して作るの。」

『ごうか、ん？乱符【必要のない自爆装置】？』

絶対にあれだ。ヘビーアームズのだ。

紫「速っ！もう出来たの？」

霊夢「名前が怪しいわね。」

魔理沙「物騒な名前だぜ……」

侵二「よく使う奴ですね。」

『これ、面白いな。印刷して大丈夫か?』

紫「出来るなら良いわよ。・・・販売はしないでね?」

『商売はするつもりだがこれは売らない。』

紫「ならいいんだけど。」

侵二「・・・あれですか?金属器と魔法全部移すんですか?」

当然じゃないか。

魔理沙「そうそう、龍一さん、魔法使いなんだって?」

『ああ、そうだが。』

魔理沙「なら、魔導書とかあったら貸してほしいんだぜ!」

霊夢「やめた方が良いわよ。盗られるわよ。」

魔理沙「死ぬまで借りるだけだぜ!」

『あ、貸すとか無しで、あげるよ。要らないし。』

魔理沙「本当か!?!」

『ああ、丁度あるし、売るところだったからプレゼントするよ。』

魔理沙「ありがとうだぜ!」

霊夢 「龍一さん達って太っ腹ね。」

『そうか？大した物じゃないしな。俺が書いたし。』

魔理沙 「これ龍一さんが書いたのか!？」

『悪い、読みにくかったか?』

魔理沙 「滅茶苦茶分かりやすいぜ！」

幻夜 「マスターって何でも出来るよね〜」

『確かにそうだな。』

侵二 「主上は何でも努力しますしね。」

魔理沙 「……この魔導書もか？」

『それは千年ぐらい考察して作った。が、お遊び半分で書いた。』

魔理沙 「……ジャガイモの皮を剥く魔法まであるぜ。」

『それは大事だぞ！それが出来なくて死んだ魔法使いもいるぞ！』

どこかの絵本にあったはず。

霊夢 「龍一さんって結構無茶苦茶ね。」

まあ、気分で生きてますから。

幻夜 「そういや、マスターの家何処〜?」

忘れてたよ。

『何処に作ろう。』

紫「私の住処には来ないの?」

『侵二がいるしな。流石に大人数すぎだろ。・・・水の上がいいな。』

魔理沙「なら、霧の湖はどうだぜ?」

あそこか・・・確かに行けそうだな。

霊夢「神社にはいないの?」

『四凶が毎日来るぞ。博麗神社じゃなくて四凶神社になるぞ。』

こんな神社に行きたくない。四つの災いが降ってきそうだ。

霊夢「し、四凶!?!」

あれ?言っただけじゃなかったのか?

侵二「そーいや忘れてましたね。改めて名乗ります。私は八雲侵二、饕餮です。」

風魔「私は風切風魔、窮奇だ。」

壊夢「俺は神鬼壊夢、橈骨ぜよ。」

幻夜「僕は風見幻夜、混沌だよ、改めてよろしくね」

こうしてみるとやばい奴らばかりだったんだな。

霊夢 「どうりで侵二さんが強かったのね。」

侵二 「まあ、弾幕ごっこは自信ないですがね？」

魔理沙 「絶対に勝つぜ！」

『勝てたら最くの称号が手に入るぞ。』

侵二 「私が最凶で、」

風魔 「私が最速、」

壊夢 「俺が最硬で、」

幻夜 「僕が最狂だね〜」

霊夢 「何で幻夜さんは狂なの？」

幽香 「幻夜は二重人格なのよ。」

幻夜 「そうそう、今が表でく……裏はこうなるぜ。」

霊夢 「……凄い人ばかりね。」

四凶十龍一 『何を今更。』

やっぱりいつ等といると楽しいわ。

次回へ続く

第五十三話 建設

side 龍一

『侵二、ここか?』

侵二「そうですね。ここが霧の湖です。」

前回から一日後、今は家の建設準備中だ。

『よし、ここにするか。』

それにしても広いな、これならそこそこの物が作れる。

??? 「こらー! 何してる!」

??? 「あ、侵二さん。」

『ん? 誰だ?』

??? 「アタイは最強のチルノだ!」

??? 「わ、私は大妖精です。貴方は?」

『俺は神矢龍一、よろしく。』

侵二「この前言った神社の神様ですよ。」

チルノ「そうか、何しに来たんだ?」

『ここに家を建てに来た。』

大妖精「変わった人ですね。私は気にしませんよ。」

チルノ「アタイに勝ったら良いぞ！」

『弹幕だんまくらどこでか？』

チルノ「そうだ！」

大妖精「すみません……」

侵二「主上、スペルカード一枚しかないですよね。」

『大丈夫だろう。お前等の時は無かったし。』

と言うより本気で理不尽な弹幕乱射してたし。全部スペルカードみたいなもんだろ。

チルノ「じゃあ、行くぞ！」

『了解、来い！』

チルノ「氷符【アイシクルフォール】！」

チルノがいきなりスペルカードを使って来る。あれ？これ正面安置じゃないか。

侵二「……これは。」

『なあ、これわざとか？』

チルノ「こういうスペルだ！」

『……うん、まあ、乱符【必要のない自爆装置】』

試しに作ったスペルだが威力は？

侵二「……何ですかこれ。」

俺の体にヘビーアームズの装甲（EWバージョン）が装着される。

チルノ「うわっ！」

アカン、ミサイルやガトリングがそれぞれ発射されて回避可能ギリギリの量に。

『……これ、セーフか？』

侵二「……ギリギリセーフですかね？」

取り敢えず、勝った。

大妖精「チルノちゃん、大丈夫!？」

チルノ「オマエ、凄いな！」

『お、おう、大丈夫か？』

チルノ「大丈夫だ！」

侵二「じゃあ、ここに家を建てても……」

チルノ「良いぞ！いいよな、大ちゃん！」

大妖精「うん！どうぞ。」

取り敢えず成功した。よし、作ろう。

『取り敢えず、普通の家でいいか。』

材料は全て魔法で生成する、勿論仕掛けを作る。・・・普通が消えた。

『・・・こんなもんか？』

侵二「いいと思いますよ。」

取り敢えずマジのユナンさんの家みたいなのが出来た。・・・地下室も作った。

内装は後々考えるとして、地下室の設備を考える。

宴会場、商売用の倉庫、転送装置ぐらいで良いか。

侵二「・・・完成ですか？」

『一応完成した。後はスペルカードだな。』

侵二「それなんですがね？四凶のメンバーで同じスペルを作ったんですよ。」

『見せてくれ。』

侵二「これです。風魔達からも借りました。」

『騒符【狂喜乱舞】か。で、それぞれが「文字か?」』

侵二「ええ、私が【舞】です。」

成程、面白い事を考えるな。

『じゃあ、俺は【騒】で、行こう。』

侵二「全員特技を混ぜています。主上はどうしますか?」

『・・・お前等のコピーにするか。』

侵二「混乱しますね、それは。」

『取り敢えずそれは完成。次だ。』

金属器を全部移転、これがやりたかった。

侵二「速いですね・・・」

『魔法を移しただけだしな。』

次、ガンダムのデータだ。取り敢えずデユナメスはカード化、・・・
と言うより装着するタイプにするか。後はSEEDのガンダムは使
おう。

『・・・そーいや侵二、お前、異変起こす気ないか?』

侵二「・・・するんですか?」

『いや、もう少し先にやろうかなーと。』

侵二「・・・良いですよ?。」

『・・・よし、その時はいつものメンバーで行くか。』

侵二「昔じゃこんな事ありませんでしたね・・・。」

『何だ?また昔の事か?』

侵二「ええ、昔じゃ能力も上手く扱えない下級妖怪だった自分がここまで強くなって、主上に仲間として認められて、ふらふらと旅に出て、気の向くままに過ごせて、異変まで起こせるんです。楽しい毎日ですよ。」

『・・・お前も下級妖怪の時はあつたんだな。』

そこにびっくりだわ。

侵二「失礼な、何度か能力の翼が暴走して、喰われかけた事があるんですよ。」

『それはそれは・・・』

侵二「まあ、すぐに治るので気にしてませんでしたね。」

『お前って不死身か?』

侵二「いえ、死にますよ?・・・多分。」

多分かい。正直転生した俺を外すと侵二達が最強かもしれない。……四凶怖い。

侵二「そう言えば、主上がする商売って何ですか？」

『よく聞いてくれたな。では問題、幻想郷にないものは？』

侵二「あー、海ですね？」

『そう、すると海産物が出回らない。海産物を外から持ってくる。これができるのは紫と俺のみ。』

侵二「紫殿はするつもりがない。……ならば。」

『俺の専売特許になる。……つまり、何処にもない商品が出せる。』

侵二「セコイですね。」

『聞こえんなあ、それに、この儲けは幻想郷に寄付する。ついでに博麗神社がこの商売をしているとなると……？』

侵二「博麗神社に信仰が向くと。……随分と考えられていますね。」

『信仰はしばらく後だな、じゃないと露骨すぎる。』

俺の前世じゃ通用しないこの方法、やってやるぜ。

侵二「よく考えますね。」

『簡単なことだ。後は信用と転送する場所が必要だな。』

信用第一、これ大事。

侵二「信用は龍神の兄とばらせば一発ですね。場所は紫殿に聞きませんか？」

『ああ、そうする。・・・タコとかイカは最初は引くだろうな。』

侵二「他にも、元からある屋台はつぶさないようにしましょう。」

『そこには売る、又は渡す感じで行こう。』

侵二「後は、店ですね？」

『店も人里だっけ？そこの有力者に頼まないとな。』

侵二「すると資金が要りますね。・・・作るんですか？」

『いや、駄目だ。』

幻想郷内でそれをすると確実にインフレ化が始まる。

『全て自分達で稼ぐ必要がある・・・と言ってもかなり資金があるんだ。多分する必要がない。』

いざとなれば株の要領でいこうと思ったが大丈夫そうだ。

侵二「宴会も利用しますか？」

『よし、かなりの人数が来るだろうから海産物の料理で行こう。・・・幽々子には最大限の注意を払え。間違えると失敗する。』

侵二「・・・了解。」

人生初めての商売、成功するかな？

次回へ続く

第五十四話 組み手（他人から見たら殺し合い）

side 龍一

『侵二！行くぞ！』

侵二「御意！」

宴会当日、高速クッキングの準備！海産物がメインの料理で今回は行く。

『【踊る高速クッキング】!!』

料理は台所でするんじゃない、料理する所が台所だ。

侵二「魚捌き終わりました！」

『こつちも鱗剥がした！追加頼む！俺はたこ焼き作っておく！』

侵二「了解！」

魚が宙を舞う。それを侵二が掴む。

侵二「お見事！じゃあ、捌きます！」

侵二が一秒で三枚におろす。

『ナイス！こつちも完了！』

その後も料理と言う名の格闘は続いた。

一時間後……

霊夢「……凄い。」

侵二「今回は力作ですね。」

『久しぶりに料理したな。』

作ったのは魚の造り、煮物、寿司、たこ焼き、鰹出汁の吸い物、その他もろもろだ。

侵二「試しに食べます?」

霊夢「いいの!?!」

『別にいいぞ?好きな選びな。』

霊夢「じゃあ……これにする。」

霊夢は吸い物を選んだ。

『了解、どうぞ。』

霊夢「頂きます。……美味しい!!」

鰹出汁を飲んだ事がなかっただろうから不安だったが……良かった。

侵二「……良かったですね。」

霊夢「これ何の料理?」

『外の世界の魚の吸い物。取り寄せてきた。』

霊夢「ふーん。売ったらどう?」

霊夢は俺に敬語無しで話すようになっていいる。・・・霊夢曰く神様より兄に見えるそうさだ。

『もう計画済み。準備も出来てる。』

霊夢「速っ!」

侵二「今回は試験も兼ねてこの料理なんですよ。」

霊夢「そうだったの・・・美味しい。」

魔理沙「霊夢ー! いるかー!?!」

霊夢「あ、魔理沙。」

魔理沙「酒持って来たぜ!」

霊夢「ありがとう。」

・・・仲が良いな。

侵二「・・・主上。」

『・・・ああ、俺たちにも来たな。』

幻夜「ヤッホー、来たよ〜」

幽香 「また来たわよ。」

壊夢 「ちよつと早かったぜよね。」

風魔 「また来たぞ。」

『よう、お前等。』

紫 「龍一！」

『紫、先に来てたぞ。』

侵二 「藍も来たのか。」

藍 「たまにはな。橙も来ている。」

橙 「侵二様ー！」

おお、親子みたい。似合ってるな。

紫 「あれ？外の世界の魚？」

『ああ、そうそう、……これで商売してもいいか？』

紫 「……いいけど、儲けは？」

『八割は幻想郷に寄付する。後の二割は俺が使う。』

紫 「そんなにいいの？」

『まあ、何もしないってのもつまらんし、気分でするから。そこはいい。』

紫「良いわよ！せっかくだしね！」

よし、商売準備完了。これで行商もあり、店もありだ。

壊夢「ほう、商売するんぜよか。」

『ああ、どうかしたか？』

壊夢「俺の酒も売るぜよ？・・・余らせ過ぎたんぜよ。」

これは受けると儲かる。

壊夢「・・・まあ、後で話すぜよ。俺達の目的は。」

風魔「主上との喧嘩だ。」

幻夜「早くやろく？」

侵二「私はパスで。結界でも展開しておきます。」

『了解、・・・で？誰からだ？』

壊夢「俺からぜよ。格闘だけぜよ？」

『当たり前だ。博麗神社が爆砕するだろうが。』

壊夢「それでもいいぜよ。」

『よろしい、ならば戦争だ。行くぞ!』

壊夢 「来いぜよ!」

side out

side 霊夢

bgm 明鏡止水くされどこの掌は烈火の如く

『オラッ!』

壊夢 「ぜいっ!」

「・・・これ、本当に組み手?」

幻夜 「普通だね」

いやいや!これが普通!?龍一さんと壊夢さんの拳が見えないんだ
けど!

風魔 「あれでもまだ遅いし弱い。普段なら地面が衝撃で捲れる。」

侵二 「片付けが楽ですね。」

この人達私が言うのも何だけど私より強い。絶対に勝てない。

壊夢 「ぜいっ!」

『おらあっ!』

回し蹴りがぶつかり合う。

魔理沙「うわっ！」

風圧が凄い。魔理沙の帽子が飛びかけた。

壊夢「フフツ、」

『ははは、』

『ハハハハハ!!』

十分ぐらい続いただろうか。

『「行くぞ（ぜよ）!!』』

侵二「・・・はあ、来ますよ。」

「え？何が？」

紫「・・・あれね、霊夢、下がちなさい。」

「え？何が？」

何が来るの？

『粉碎！』

壊夢「爆碎！」

二人が同時に踏み込む。

『大、喝、采!!』

拳が激突した。

「きゃっ!」

魔理沙「うおわっ!」

瞬間、凄い衝撃波が来る。

風魔「・・・決まったな。」

二人が土煙から出てくる。

壊夢「いやー完敗ぜよ!」

『いやー面白かったぜ!』

「いや、何で無傷なの!?!」

壊夢「え?吹っ飛んだだけぜよ。」

魔理沙「おかしいぜ・・・」

この人達おかしい。あの威力だと紫でもダメージが入るはずだ。

紫「やっぱり龍一達凄いわね。」

『まだまだだ。次はどっちだ?』

風魔「次は私が行く。能力指定の組み手だ。」

『了解、俺は鏡一的能力で行く。・・・お、幽々子か。』

幽々子「ごきげんよう。」

妖夢「こ、今日は。」

『レミリア達も来たか。』

フラン「お兄様ー!」

『うおっと!フラン!久しぶりだな!』

オルゴイ「・・・しれっと帰ってきておって。」

『何の事だ?・・・レミリア、久しぶり。』

レミリア「・・・久しぶりね、お兄様。」

『何だ?こつち来ないのか?』

オルゴイ「恥ずかしいのか?」

レミリア「・・・うん。」

『じゃあ、また来い。俺もそつちに遊びに行く。』

レミリア「はい!」

龍一さん、どんな人にも優しいわね。・・・兄の雰囲気が出ている。

咲夜「先生、勝負ですか？」

『ああ、妖夢、これが俺達の組み手だ。』

もはや殺し合いだと私は思う。

風魔「・・・四凶最速！災害の申し子！我は最強の神の式！我こそは風切風魔！今日ここで主上に勝つ！！」

・・・風魔さんが壊れた。

『・・・地上最強！この世界の創成者！気分にあざされた男！我こそは神矢龍一！我はここに正々堂々勝負することを誓わず！』

風魔「情け無用で！」

『『貴様（主上）に勝つ！』』

風魔「・・・いざ！」

『尋常に！』

『『勝負！！』』

龍一さんもおかしい。どうしたのかしら。

side out

side 龍一

bgm Emiya | time alter |

ふざけた宣言の直後、風魔が土煙を起こした。

『……上だ!』

風魔「チツ!」

奇襲が速い、流石四凶最速、

『やるじゃねえかつと!』

新月を前に突き出す。……風魔の左頬に掠った。

風魔「……!ハアツ!」

『ゴツハア!』

脇腹を蹴り飛ばされる。……痛つてえ!

風魔「覚悟!」

俺は地面に寝そべった状態、マズイ!

『グアツ!』

風魔「グウツ!」

俺がとつさに新月を突き出し風魔の右肩に刺さる。が、俺の右肩にも疾風刀が刺さる。

風魔「……流石主上！一筋縄では行かん。」

『お前も、流石だな。』

風魔「……行くぞ！」

『……来い！』

side out

side 霊夢

どう見ても殺し合いだ。紫は止めないのか？

「……いいの？」

侵二「二人共手を抜いていますよ？……ほら、顔をみて下さい。」

龍一さんと風魔さんの顔は血濡れていたが、笑っていた。

「……笑ってる。」

妖夢「……凄い。」

咲夜「……先生、楽しそう……」

『隙あり!!』

風魔「そんなものは無い!!」

龍一さんの武器の形が変わったものの、風魔さんが弾く。

魔理沙「……これが、龍一さん達の遊びか……かなわないぜ。」

侵二「二人共！その辺にして下さい！掃除はどうするんです？」

風魔「了解！行くぞ主上!!」

『来い風魔!!』

二人が独特の構えをする。

妖夢「……っ！凄い気迫です。」

気迫が凄い、……動くとき切れそうな、そんな錯覚がする。

『一閃!』

風魔「何の!」

剣が激突し、甲高い金属音がする。

『……グッ!』

龍一さんの右手が飛ぶ。

「龍一さん!」

風魔「……見事!」

風魔さんが膝をつく。……よく見ると胸に傷がある。

『よっしやあ!』

風魔「・・・負けたな。」

「・・・終わったの?」

侵二「そこまでですね。お疲れ様でした。」

咲夜「先生!怪我は!」

妖夢「風魔さん!大丈夫ですか!」

「そうよ!大丈夫なの!」

魔理沙「酷い傷だぜ・・・」

『・・・おい、風魔。』

風魔「ん?」

龍一さんが風魔さんに武器を突きつける。

「何してるの!」

『・・・【フェニクス】!』

風魔さんの傷が消えていく。・・・能力の一つ?

風魔「すまない。助かった。」

『次は俺だな。・・・よし、治った。』

妖夢 「・・・あの、大丈夫なんですか?」

『大丈夫大丈夫、どうだった?これぐらいの組み手なら妖忌でも出ていたが。』

妖夢 「祖父がですか!」

『ああ、ちよつとだけやったがな。だから、妖夢も強くなるぞ。』

妖夢 「・・・ありがとうございます!」

魔理沙 「・・・治った奴、これも魔法なのか?」

『ああ、確か○○○○の理論から××××して、△△△△の合成で武器の能力を促進させた。』

何を言っているのか分からない。

魔理沙 「よく分からないぜ・・・」

そうだ!組み手の後の血が!

『ふう、掃除終わり。』

・・・え?

「速っ!」

『この程度ならすぐに出れる。』

フラン「お兄様かつこよかった！」

レミリア「流石私達のお兄様ね！」

オルゴイ「・・・衰えてないな。」

幻夜「じゃあ、次僕ね〜」

龍一さんが色々と速い。・・・どうなっているのかしら。

幻夜「スペルカードで勝負しよう〜」

『良いぜ、行くか。』

龍一さんの弾幕ごっこは見たことがない。勿論、幻夜さんもない。

幻夜「・・・じゃあ、」

幻夜さんの様子が変わる。

幻夜「行くぜ！」

『おうー！』

やっぱり二人共笑っている。

まるで、遊んでいる子供のようだ。

侵二「初め!!」

龍一さんと幻夜さん、どんな弾幕を出すんだろう？

次回へ続く

第五十五話 弾幕ごっこ

side 霊夢

bgm A Sutorannger I Remain

幻夜「行くぜ！」

幻夜さんは青い弾幕を発射する。

『甘いわあー!』

対する龍一さんは銀色や黒色の弾幕を出す。

幻夜「まだまだあ！」

幻夜さんの弾幕が地面に着いた瞬間凍る。空中でも幾つかが凍る。・・・あれ全部氷なの!?

『うわ、めんどくせえー!』

幻夜「スペルカード! 幻術【騙された友人】!」

ここでスペルカード!? しかも弾幕の数が多い! これでは避けられない!

魔理沙「・・・反則じゃないのか?」

侵二「・・・いいえ、幻夜は騙すことに関しては達人です。これがヒントです。」

『……そこだ!』

龍一さんが弾幕の真ん中を突っ切る。しかし、当たっていない。

幻夜「チツ!ばれたか!」

魔理沙「あれ偽物が入っているのか!?全く分からないぜ!」

幻夜「次だ!氷符【雪原の追跡者】!」

大雪が降り出す。……これも偽物?

侵二「あれは本物です。そう思わせるのが幻夜の特技です。」

幽香「幻夜は掴みどころがないのよ。……そこがいいんだけどね。」

『……動きにくい!』

幻夜「覚悟!」

幻夜さんが槍を持って龍一さんに襲いかかる。

『……スペルカード、炎符【アモン】!』

龍一さんの姿が変わる。……炎?

幻夜「……幾つあるんだよ。ソレ。」

『企業秘密だ。行くぞ!』

一気に雪が溶ける。

幻夜「チツ！」

『炎符【アモール・ゼルサイカ】！』

炎の一閃、威力も高いし速い！

幻夜「・・・うっ！」

幻夜さんの左腕に掠る。

『・・・どうだ？』

幻夜「やっぱ強いな！これで最後にする！騒符【狂喜乱舞 』狂』」

『それか！』

歪な弾幕が数個、かなりの速さで動き回る。

『・・・規則性がねえ！』

幻夜「・・・後三十秒！」

『あぶねえー！』

途中で弾幕がバツクした。

『・・・ここで魔装切れか！』

幻夜「後二十秒！」

弾幕の速度が上がる。

『よっ！とっ！』

幻夜「・・・やるねえ！」

『ごうじゃねえとお前等の主なんて務まらねえよ！』

幻夜「やっぱりマスターについて来て良かったぜ！」

『それは光栄だ！乱符【必要のない自爆装置】！』

幻夜「後十秒！スピードアップ！」

幻夜さんの弾幕が目まぐるしく不自然に動く。それを龍一さんは落としていく。

『絶対に負けねえぞ！』

幻夜「・・・行くぞマスター！」

『来い！幻夜！』

幻夜「らあっ！」

幻夜さんが槍を持って突撃する。

『正面から受け止める！』

幻夜さんの槍を龍一さんは手で受け止める。

幻夜「・・・負けたよ。」

『・・・後三秒速かったら引き分けだったな。』

幻夜「よく言うぜ、俺の勝ちだろ?」

『さあ、どうだか。』

幻夜「あーあ、また負けた!」

凄く高度な弾幕ごっこだった。楽しそうで、綺麗だった。

幽香「幻夜、お疲れさま。」

幻夜「・・・悪い、また負けた。」

幽香「でも、かつこよかったわよ?」

幻夜「・・・そうか、ありがとう。」

宴会に来ていた人からも拍手が巻き起こる。

幻夜「あれ?こんなに見てたんだ?」

幻夜さんが戻った。

『そうらしいな。・・・またやろうぜ?』

幻夜「勿論!」

龍一さんと幻夜さんが拳を合わせた。

その姿は、小さな子供が遊んでいたように見えた。

次回へ続く

第五十六話 前科持ち

side 龍一

幻夜との弾幕ごっこは面白かった。・・・【狂喜乱舞】はおかしい。

侵二「・・・さて！」

『飲むか！』

紫「宴会の音頭してくれる？」

『何故に俺？』

紫「だって、せつかく帰ってきたじゃない。」

あー、そう言うことね。

『分かった。・・・野郎共！注目！』

宴会に来ていたメンバーが全員こつちを向く。

『知らねえと思うが、俺が博麗神社の神だ。・・・随分と平和になったな。』

宴会に来ていたメンバーから驚きの声や歓声が聞こえる。

『まあ、それだけだ。』

侵二「後！ここの神社の神は、幻想郷の賢者と付き合い始めました！」

紫「えっ／＼」

さつき以上に歓声が増えた。

『・・・幻想郷が平和になったのど!』

侵二「お二人が付き合い始めたのに!」

『・・・乾杯!!』

宴会は最高潮に達した。

壊夢「ホラ!じゃんじゃん飲むぜよ!」

壊夢、既に三人酔い潰させる。

幽々子「美味しいー」

妖夢「あ!あんまり食べ過ぎないで下さい!」

幽々子「いいじゃないのー」

そう言いつつも十人前は平らげている幽々子に思わず口元が引きつる。

侵二「・・・桃色の悪魔。」

まったくもってその通りである。・・・よくもまあそんなに。

??? 「すまない、貴方がここの神社の神様か?」

『どちら様だ?』

??? 「失礼、私は上白沢慧音（かみしらさわけいね）と言う者です。」

『そうか、俺は確かにこの神社の神の・・・神矢龍一だ。』

慧音「かつ、神矢!?・・・失礼、先日、チルノ達が世話になったので礼がしたかったのです。」

『ああ、いいよいいよ。こっちの都合だし。』

侵二「こちらこそ申し訳ありませんでした。」

慧音「し、侵二様!私などに頭を下げないで下さい!」

慧音が異常に侵二に物腰が低い。

『俺達には敬語はいらないし、怖がらないでくれないか?』

慧音「は、はい!しかし・・・」

『・・・侵二、何かやったのか?』

侵二「確かに、確かあの時は橙を寺子屋に預けた帰り道に藍とデートしていました、その道中妖怪が人里で暴れていました・・・」

『・・・まさか、』

侵二「手加減間違えて帰らぬ人に・・・」

駄目じゃねえか。

慧音「いえ！その妖怪は人間も殺していていずれ倒す必要が・・・」

『なら何故？』

侵二「・・・あ、指一本で殺ってしまいました。こちらも藍とデー
ト中で邪魔されたのでね。」

『・・・で、圧倒的な力に驚いた、と。』

慧音「は、はい！」

あー、そりや怖いわ。ちよつと細めの侵二が指一本で妖怪を殺すと
か、想像できない。

侵二「・・・大した事なかったんですがね。」

『お前を基準にするな。・・・俺達だと確かに普通だが。』

侵二「・・・申し訳ない。」

『まあ、仕方がない。・・・で、どうやって？』

侵二「心臓を一突き。」

『やっぱりかよー！』

誰だこいつ野放しにした奴・・・俺だ。

侵二「別にお咎め無しでした。」

『まあ、ともかく、慧音、敬語は無しで。』

慧音「……分かった。して、賢者殿から聞いたが商売をするそうだが。」

『ああ、人里の権力者に聞きたいのだが……知らないか?』

慧音「私がそうだ。商売の件は喜んで受ける。」

知ってた。

『そうか、ありがとう。』

慧音「……良ければ、今度人里で教師をしてくれないか?」

『何をすれば?』

慧音「龍一殿についてなど……」

『うーむ、自然に絶影と繋がるがいいか?』

慧音「絶影!?!」

『あー、絶影って言うのは俺の仮の姿。神様だと面倒だしな。』

と言いつつ仮の姿でも騒がれる俺、まさに龍一クオリティ。

侵二「……誰ですか?仮の姿で八百万の神に喧嘩売ったのは。」

ダレデスカネーワタシハシラナイデスネー

『ま、まあ、かなり重い話や怖い話が出るがいいか?』

慧音「そうしてくれると有り難い。」

風魔「いつまで真面目に話しているんだ?」

『おう、悪い悪い、じゃあ、慧音、また今度。』

俺達は風魔の方に向かう。

『へいへい、来ましたよー』

フラン「お兄様ー!」

突撃してきたフランを止める。・・・鳩尾に直撃のコースだった。

オルゴイ「・・・で?いつ帰ってきた?」

『・・・話をしよう、あれは今から七年前、俺は寝た。・・・そこから復活までに三年かかり、神界でお話するのに三年、こうする元凶の妖怪を倒す下準備に一年、で、帰ってきたのが四日前?』

オルゴイ「・・・よく帰ってきたな。」

『気分神ですから。復活はお手の物だ。』

レミリア「お兄様、紅魔館に住人が増えたのよ!」

『お!それは良かった。』

フラン「でね、パチュリーって言う魔法使いがいるんだよ！」

『ほう、魔法使いか・・・』

レミリア「で、是非会いたいんだって！だから・・・」

フラン「・・・遊びに来てね？」

『了解、また遊びに行く。』

幻夜「マスター、ちよつと来て〜」

『何だ？』

幻夜「霊夢と魔理沙が聞きたいことあるんだって〜」

『霊夢、魔理沙、何だ？聞きたいことって。』

霊夢「紫と付き合ってるって本当？」

『事実だ。それがどうかしたか？』

魔理沙「何時から知り合ったのかわかなくと思ったんだぜ。」

ああ、確かに昔から知り合っていたな。

『・・・確か千年ぐらい前か？紫が俺を式にしようとして狙っていたな。まあ、気づいて引きずり出して、話をしたのが最初だ。』

侵二「私と風魔で殺気出しましたね。」

紫「あれは怖かったわ・・・」

『で、人間と妖怪が共存出来る世界ってのが面白そうだったから手伝った。』

紫「・・・私の初めての理解者で、師匠だったの。」

『で、色々手伝った。妖怪の山の戦争に交じって暴れたり、まあ、俺達のやりたいようにした。』

紫「それで、いつの間にか龍一が好きになっていたのよ。」

霊夢「じゃあ、龍一さんは紫のどこに惹かれたの？」

『・・・無理だと言われても一生懸命やって、自分で達成しようとする、という点と、何故か守ってやりたくてな。いつしかこうなつた。』

紫「・・・／＼」

魔理沙「じゃあ、次だぜ。何で龍一さんは死んでたんだ？」

『俺たちが粉碎したあの桜を昔に一度封印してな。その時に紫をかばって怪我、その怪我に三年後に死ぬという呪いがかけられてた。』

流石にあれは駄目だと思った。・・・死ぬ直前に俺の命の数思い出しましたが。

『で、ぽっくり逝った。』

霊夢「ふーん。」

『その後、俺が死ぬ直前に紫が告白してな、……まあ、そういうわけだ。』

紫「……本当に悲しかったのよー！」

『……悪かったって。』

紫「フーン！」

今更過ぎるわ。……仕方ねえな。

『おい、紫。』

紫「何よ！……むぐつ。」

俺は紫の口を塞いだ。……後は言わん。

紫「……え？」

『……これで勘弁してくれ。』

紫「……バカ、良いわよ／＼」

侵二「……霊夢、緑茶貰えますか？」

霊夢「……私も飲もう。」

魔理沙「……甘すぎるぜ。」

『んだとてめえら！侵二に関してはブーメランだろうが！』

流石に人前は駄目だと思いが侵二に言われるのは遺憾である。

侵二「・・・確かに。」

駄目だこいつ。

侵二「・・・まあ、いいじゃないですか。」

結局はこれで終わる・・・だが、これが良い。

『そうだな。』

俺は遅すぎる言葉を発した。

『・・・ただいま、幻想郷。』

今日も今日とて平和である。

幽々子「もうないのー?」

・・・前言撤回、平和じゃねえ!

次回へ続く

第五十七話 友人万歳

side 龍一

現在進行形で料理中だ。理由は何も言うまい。

侵二「料理完了です！」

風魔「・・・なぜ私も。」

『悪い、人手が足りんのだ。この速度に対応できるのは俺と侵二、風魔のみだ。』

風魔「・・・まあ、仕方がない。」

侵二「助かります。」

おのれ冥界の主人、まさかあの料理を全て食うとは・・・

『嬉しいが食うのが速い！』

侵二「ぶつぶつ言っていないで動いて下さい！」

『やかましい！首から下全部働いてるわ！』

風魔「・・・地獄絵図。」

『おいやめろ、その通りだから！』

まさに台所が戦場状態、キッチン戦争。

侵二「次！出来ました！」

『了解！紫！いるか？』

紫「何？」

『悪い、料理を冥界のご主人に渡してくれ。』

紫「うん！」

幻夜「・・・もうちよつと欲しいってさ」

風魔「・・・馬鹿な。」

侵二「・・・主上、」

『あー！もうくそっ！』

壊夢「他全員幽香と幻夜と共同で酔い潰したぜよ。」

『ナイス！』

酔い潰された参加者に敬礼。だが助かった。

幻夜「レミリアだっけ？帰ったよ」

『あらら残念、仕方ねえか。』

幻夜「で、オルゴイから伝言、「先に帰る、ファイト」だっけさ」

・・・お前か。

『……ありがとう。』

侵二「感動してないで動いて下さい。」

『……ちっつ、分かったよ。』

その後、十分後にご馳走様でしたが聞けた。料理時間、まさかの四時間。

幽々子「また来るわー」

妖夢「……すみませんでした。今日はありがとうございました。」

『……いいよ、気にすんな。』

侵二「……お気を付けて。」

俺達は半分白い灰に。

幻夜「……眠い〜」

幽香「……お疲れさま。」

風魔「……今日はもう寝よう。」

壊夢「じゃあ、帰るぜよ。」

『壊夢、お前のスタミナどうなってんだ。』

壊夢「いや、結構疲れたぜよ。」

『すげえな。』

壊夢 「こうじゃないと鬼の旦那は務まらんぜよ。」

・・・お前も苦勞してたんだな。

壊夢 「また明日ぜよ。」

幻夜 「僕達も帰るね〜」

幽香 「龍一、また会いましょう。」

『ああ、幻夜、幽香、じゃあな。』

風魔 「さて、私も帰るか。」

『いや、お前大丈夫か?』

風魔 「ギリギリ音速なら・・・」

『何処がギリギリだ。速いじゃねえか。』

風魔 「まあ、帰る、じゃあな。」

『おうよ、じゃあな。』

風魔は何処が疲れているかと言う速度で帰った。・・・俺より速いんじゃないだろうか。

侵二「・・・さて、帰りますか、主上。」

『ああ、じゃあな。』

紫「待って！」

『何だ？』

紫「・・・泊まって行かない？」

『いいのか？』

紫「勿論！」

侵二「自分はどうでもいいですよ。」

『どうでもいいって何だよ。全く・・・』

侵二「いつも一緒じゃないですか。親友でしょう？」

『・・・最高だな。』

紫「じゃあ、来て！」

・・・最高神＋化け物＋少女移動中・・・

紫「入って！藍！お客さんよ！」

『邪魔するぞ。』

侵二「邪魔するならお帰り下さい。」

『あいよーって阿呆か!』

藍「どちら様だって龍一様!」

『よっ、今日世話になる。』

橙「藍様、誰ですか?」

『初めましてかな? 侵二の友人だ。』

橙「侵二様の!?! 初めまして!」

凄い賑やか。

侵二「ただいま。今日主上が泊まるそうだ。」

藍「そ、そうですか! どうぞ!」

俺は居間に案内された。

紫「初めてよね、龍一が来たの。」

『あー、そうだな。最近まで死んでたし。』

侵二「そうですね。死んでましたしね。」

橙「あの、龍一様が死んでたって・・・」

侵二「そうだったな。橙、この人が前教えた俺の主だ。」

橙「あれ? 死んだんじや・・・」

侵二「そう思っていたが生き返った。」

橙「そうなんですか!？」

『ああ、生き返った。』

藍「橙、そろそろ寝なさい。学校だろう?」

橙「はい、藍様、紫様、侵二様、龍一様、おやすみなさい!」

紫「お休みなさい、橙。」

侵二「お休み。」

龍一「お休み。」

ちよつと残念。

侵二「・・・久しぶりに徹夜します?」

『ああ、そうだな。どうせ寝なくても疲れんし。』

紫「・・・あの、龍一。」

『ん?』

紫「・・・本当に私なんかで良いのよね?」

『・・・あのな、』

何度言わせる。

『恥ずかしいけどな、俺があんな事言ったのお前だけだから、他にいないから、俺が決めたんだ。・・・文句あるか?』

紫「・・・ううん、大好き!!!」

『俺もさ、好きだ。』

侵二「・・・手間かかりすぎですよ。」

『うるせえ。お前が早すぎんだよ。一か月って何だよ。』

侵二「壊夢は半日、風魔は二日、幻夜は四日ですか?」

駄目だわこいつ等。何?気が早いのか?新幹線なの?

『お前等を基準にするな。色々おかしいから。』

こいつ等に常識を入れると非常識が消える。

侵二「そうですね。で、明日はどうするんですか?」

『言わずとも分かっているだろう?』

侵二「・・・確かに。」

紫「・・・また気分?」

『その通り。』

明日の俺に聞け。

侵二「・・・まあ、主上らしいって言っちゃあ、」

紫「らしいと思うわよ。いいんじゃない？」

『それはどうも。』

紫「そう言えば、侵二とどう会ったの？」

『え？俺が絶影になって海外に渡って、侵二達の噂を聞いて、』

侵二「殺し合いました。」

『あれはヤバかった、二回死んだからな。・・・一騎打ちで俺殺したの壊夢とお前だけじゃないか？』

紫「え？龍一、侵二に殺されたの？」

侵二「いや、あれは首切ったのに生きてたじゃないですか。」

紫「首を切ったのが凄いわ・・・」

侵二「そんなものですか・・・」

紫「そうそう、龍一、侵二が弾幕ごっこ凄く強いのよ！」

聞き捨てならぬ。

『はっ？』

侵二「確かに、風魔達には負けてませんが、その程度ですよ？」

『馬鹿言え、お前等の弾幕ごっこはごっこじゃねえんだよ。弾幕合戦だよ。』

侵二「主上に言われると世も末ですね・・・」

『確かに！悪かった。』

侵二「まあ、またやりましょう。」

『そうだな。』

紫「後ね！・・・」

こうして、俺と侵二と紫で朝まで話した。

次回へ続く

第五十八話 世界は広く見えて狭い

side 龍一

紫の家にお邪魔した次の日の朝、

『そうだ、人里行こう。』

侵二「・・・唐突ですね。」

『何とでも言え。じゃあ、行ってくる。』

ちなみに紫は寝た。なので静かに行く。

侵二「せっかくなので寺子屋を見ては？」

『そうする。じゃあな。』

侵二「はいはい、行つてらっしゃい。」

・・・最高神移動中・・・

初めて人里に行った時は急いでいたのでよく見なかったが、かなり人が多い。

『寺子屋ねえ・・・』

うん、場所が分かんらん。

『どっしょようか・・・』

義炎 「ん？龍一殿！」

『お、義炎、』

知り合い発見。助かった。

義炎 「どうされた？」

『寺子屋って何処だ？』

義炎 「こちらですな。ついてきて下さい。」

『ありがとう、助かった。』

義炎 「いえいえ、前回は何かあったのですか？」

『ちよつと数年前の復讐に。』

義炎 「そうでしたか。・・・着きましたぞ。」

『ありがとう、迷惑かけたな。』

義炎 「いえいえ、ここに用があったので。」

『そうか、あ、俺この辺で店開くことになった。』

義炎 「ほう！ぜひ行かせてもらいます。」

『ああ、じゃあな。』

さて、入るか。

『失礼します。』

慧音「おお、龍一殿！来てくれたか。」

『約束なんでな。邪魔か？』

慧音「いや、今は休憩時間だ。」

チルノ「おお！あの時の兄ちゃん！」

大妖精「お久しぶりです。」

『お前等、ここで勉強してんのか。』

大妖精「はい！」

チルノ「なあ、兄ちゃん、アタイの師匠と戦ってくれよ。」

『師匠？』

チルノ「おう！アタイより氷を使うのが上手いんだぞ！」

何だろう、嫌な予感がする。

大妖精「それじゃあ幻さんに悪いよ。」

あれ？俺にも氷を使う幻のつく友人がいるぞ？

幻夜「おい、お前等、元気か？」

やっぱりな！お前かよ！しかも性格変わってんじやねえか！

『お前だったのか。』

幻夜「・・・マスター？」

『よう、幻夜、教師してんのか？』

幻夜「ああ、悪いか？」

『いや？いいと思うぜ？』

幻夜「そうか、ありがとよ。」

よく見ると幻夜の髪の色が変わっている。いつもは紫色だが今は黒色だ。

慧音「・・・知り合いか？」

幻夜「ええ、俺の友人です。」

チルノ「兄ちゃん師匠の知り合いか？」

幻夜「おう！昔からのな。」

『しかし、何やってんだ？』

幻夜「生活のためだよ。てか、この口調しんどいわ。」

『知るかよ。我慢しろ。』

幻夜「ちっ、じゃあ、慧音先生、次俺の授業ですよね？」

慧音「ああ、算数だ。」

『ほう、幻、見せろ。』

幻夜「了解、じゃあ、教科書開け。問題読むぞ。」

幻夜・・・もとい幻が教科書を読む。案外上手い。

幻夜「これだけじゃ分からんな。前に例を出すぞ。」

幻が空間に林檎を作り出す。・・・あくまでそう見せている。実物は無い。

幻夜「で、林檎が一つ百円です。二つを五百円で買いました。残りはいくらだ？」

分かりやすい図で解けそうだな。上手い。事実全員が手を挙げた。

幻夜「じゃあそこ！解いてみる。」

生徒1「はい！」

どうにかならんのかその口調。

生徒1「出来ました！」

幻夜「・・・よし、正解！次行くぞ！」

一時間経過・・・

幻夜「よし、これで終わりだ！よく頑張った！」

『ふーん、結構やるな。』

幻夜「何かさ、楽しいんだよな。こうやって教えるの。」

『良いんじゃないの？で、幻夜だってみんな知ってるのか？』

幻夜「あー、忘れてた。」

『忘れるもんじゃねえだろ！』

幻夜「悪い悪い、俺が上位妖怪なの忘れてたわ。てか、俺偉いんだな」

『いや、まあ、うん・・・』

そうだった、こいつ等自覚がないんだよなあ。

幻夜「まあ、別に怖がりやしねえだろ。で、慧音先生が言ってた特別授業の先生ってマスターか？」

『そうそう、俺についてだと。何話せば良いのやら・・・』

幻夜「マスターの話全部冒険譚だろ・・・」

慧音「龍一殿、そろそろ授業の準備を頼む。」

『了解、幻、始めるか。』

幻夜「へいへい。」

『さて、今回特別に先生になった神矢龍一だ。宜しく。』

生徒達「よろしくお願いしまーす！」

『はい、元気があってよろしい。で、質問する。龍神って知ってる人。』

生徒全員が手を挙げた。

『うん、全員知ってるな。龍神の名前は？』

生徒2「はい！」

『じゃあその君、答えてくれる？』

生徒2「はい！神矢龍一だったと思います！」

『正解、俺の名前は？』

・・・沈黙、その後、

生徒達「ええええええええ！」

『ストップ、？だと思おう人。』

何人かが手を挙げる。

『まあそうだ。じゃあ、証拠を見せよう。・・・幻夜！』

幻夜「呼んだか？」

・・・再び沈黙

生徒達「嘘だあ!!」

慧音「幻君、本当か？」

幻夜「黙っててすみません。俺、風見幻夜です。」

慧音「そ、そうか・・・」

幻夜「・・・まあ、信じられないと思うから先生の能力を見せる。」

大妖精「先生、能力があつたんですか？」

幻夜「ああ、例えば・・・」

幻夜が慧音に変身する。

生徒達「わあ!!」

慧音「・・・おお！」

幻夜「・・・まあ、こんな感じ、混沌の所有能力、【万物を欺く程度の能力】だ。」

『慧音先生、龍神の伝承の能力って何ですか？』

慧音「確か、炎と草を操るなどが・・・」

『・・・ザガン、アモン、ベリアル!』

中心がベリアル、右がザガン、左がアモンの魔装状態。

生徒達「わああ!!」

幻夜「・・・そんなのあったか?」

やった事ねえよ。誰だよ噂流した奴。

『・・・証拠になるか分からんが、どうだ?』

生徒2「私・・・信じます!」

生徒3「俺も!」

次々に信じると言ってくれる。

『・・・ありがとう。』

幻夜「・・・で?話逸れすぎじゃねえの?」

忘れてたよ。

『すまん、忘れてた。』

この後、絶影も俺だとカミングアウトして、さらに騒がれたのも間違いない。

次回へ続く

第五十九話 人格

side 幻夜（裏）

マスターの授業が終わった。

てか、マスターって俺達と会う前からぶっ飛んでたんだな。よく分かったわ。

「よし、お前等今日の授業は終わりだ！またな！」

生徒達 「慧音先生、幻夜先生、龍一先生、さようなら！」

慧音 「気を付けて帰るんだぞ？」

『あばよ、またな。』

「怪我すんじゃないぞ？」

チルノ 「師匠！遊ぼう！」

・・・チルノが俺を師匠と呼ぶのは俺が教師を始めて、いきなり喧嘩を売ってきて、それを俺が迎撃してから呼ぶようになった。

「・・・なあ、マスターが弟子とる時ってこんな感じだったか？」

『よく覚えてない。いつも通りやってたからな。』

「ふーん、で、チルノ、何するんだ？」

チルノ 「師匠と弾幕ごっこがしたい！」

・・・またかよ、まあ、俺が氷を使うから同じような感じで憧れている・・・と、大妖精は言っていたな。

「いいぞ、外行くぞ！」

・・・悪くはねえな。

チルノ「うん！」

『・・・仲がよろしいようで。』

side out

side 龍一

幻夜がチルノと外に出た後、何人かが来た。

『・・・？確か、大妖精、リグル、ミスティアだったか？どうした？』

大妖精「・・・あの、幻夜先生ってどんな人なんですか？」

『幻夜？何で？』

ミスティア「幻夜先生は口が悪いけど優しくて、何だかお兄さんみたいな人なんですけど、」

リグル「僕達と別れた後、何をしているかわからなくて・・・」

あいつが兄ねえ・・・まあ、俺が言える立場じゃないが。↑管理世界
界の兄

『そうだな・・・まず、あいつは優しい、これは確かだ。花とか、生き物には大体優しいな。』

幽香の敵や俺等の敵は除くが。

大妖精「そうなんですか・・・」

『後、あいつは結婚してる。』

ミスティア「そ、そうなんですか!？」

リグル「だ、誰とですか？」

『幻夜、本名は風見幻夜。・・・分かるか?』

ミスティア「ゆ、幽香さんですか・・・」

『そうそう、幻夜は普通だと多分幽香ぐらいの強さだな。』

リグル「でも、そうは見えないんですが・・・」

『・・・普段はな。あいつは人格が変わってな。普段はマイペースでのんびりしているか、今みたいな感じなんだが、怒るとヤバい。幻想郷死滅する。』

正直四凶の中で怒ると一番まずい。幻想郷凍結する。異変じや済まねえ。凍結異変とか笑えねえ。・・・他の奴らも幻想郷壊せるが。

大妖精「そ、そうなんですか・・・」

『まあ、ちょっとびっくりしたな。あんな性格があったのは。』

ミステイア「いつもと違うんですか？」

『明らかに違う。何というか、凄い兄っぽくなった気がする。』

謎だ、俺の知り合いは大体兄貴肌なのだろうか。

大妖精「そうなんですか・・・」

こうなると風魔や壊夢、侵二も兄貴分の可能性が・・・

リグル「・・・あの、幻夜先生が僕達の事どう思っているか分かり
ますか？」

『確証はないが、信用していると思う、多分、娘ぐらいに考えている
だろうな。』

彼女達が嬉しそうにする。・・・はい、幻夜は兄確定。

幻夜「戻ったぜ」

チルノ「また負けたー！」

『おう、戻ったか。』

幻夜「弾幕ごっこって難しいな。」

『ぬかせ、狂喜乱舞は何だ。』

幻夜「マスターは別だ。手加減が要らねえからな。」

『そりゃそうだ。』

チルノ「師匠に絶対勝つからな！」

幻夜「おうおう、来やがれ。返り討ちだ。」

『ハハハ、仲いいなあ。』

幻夜「そうか、まあ、……悪くねえな。」

『……丸くなったなあ。』

幻夜「……確かに、ここは平和だしな。多少暴れたいがな？」

『そうだな。』

いずれ異変起こすがな！

チルノ「なあ、師匠、兄ちゃんとは友達か？」

幻夜「……親友って言うか、」

『悪友？』

幻夜「……そんなもんじゃねえの？俺等。」

チルノ「……？よく分かんないけど友達なんだな？」

『ま、そうだな。長い付き合いだし。』

幻夜「……そういや、もう方は超えてるな。」

『……確かにな、てか、その性格何時出来た?』

幻夜「……知らねえ、いつの間にか寺子屋ではこうなった。」

幻夜、まさかの三重人格。怖っ。

幻夜「お前等、先生は大事な話をする、ちよつとどつか行つてろ。」

大妖精「わかりました!」

彼女達が離れていった。でだ、幻夜君、何かね?

幻夜「あー、そうそう、龍一の店、もう出来てる。」

『ファッ!』

幻夜「壊夢が「暇ぜよ。」つって一日前作った。壊夢、建築業してるらしい。」

そういや前世、じっちゃん「友達を選べ」って言ってたな。まさか数億年後に使えるとは。すげえ。

『……別に普通だよな?』

幻夜「大丈夫、壊夢はそこはおふぎげが嫌いらしいし。侵二も見てたぜ?」

『すまん。いつも。』

幻夜「ま、そういうわけで、マスターのお好きにどうぞ。」

『了解、じゃあ悪いが案内してもらえるか?』

幻夜「仰せのままに・・・何てな?こつちだ。」

・・・最高神+化け物移動中・・・

幻夜「ここだね」

『・・・性格戻るんだな。・・・おお、すげえ。』

至って普通の店だった。イメージは〇ヤイアンの店だな。

幻夜「中も出来てるらしいよ」

中に入る。・・・割とマジで作ったようだ。ちよつと感動。

幻夜「で、何時から店始めるの?」

まずは店員だな、俺一人でもできるが面倒くさい。召喚魔法で何か呼ぼう。

『・・・明後日?』

在庫移転が時間がかかるし、何よりもう夕方だ。

幻夜「へ、直ぐに出来るんだね」

まあ、元々計画してたし、海から既に魚類は取り寄せ、養殖している。え?養殖方法?・・・分からんからザガンで成長させた。やっぱ

り前世の養殖業って凄いなーと、つくづく実感させられた。

『さーて、上手く行くか?』

幻夜「頑張ってね〜?」

次回へ続く

第十一章 萃夢想く兄の気質 第六十話 営業

side 龍一

寺子屋で俺の自己紹介をして早二日、店の開店だ。

さて、店を開いたものの、客が来るはずがない。それが当たり前だ。なにしろ謎の魚や生物が売っているのだから。

『やっぱ失敗かなあ。』

なんてぬかしていると大勢の人間が店に来る。何？俺何かした？

里の人間1「龍一様！いらっしやいますかー？」

・・・は？

いや待て、龍一が有名なのは百歩譲る。しかしだ、店の事はどこで広がった？寺子屋でも言っていないはず・・・

『・・・ああ、確かに俺が龍一だが？』

とりあえず焦りを見せないように対応する。

里の人間1「龍一様！話は侵二様から聞きました！面白い物が売っているそうで！」

また 侵二か

『確かに、外の世界の魚などを売っているぞ？後様付けやめてくれ。』

里の人間1 「分かりやした！おい！ここで合ってるぞ！」

里の人間2 「本当か！」

何だ、普通のお客様か、安心したぜ。

『気になる物は聞いてくれ。ついでもならここで料理する。』

里の人間3 「これは何ですか？」

『それは鰹、吸い物や普通に生で食べる。』

里の人間1 「これは？」

『それは鮪、外では有名な魚だな。』

義炎 「龍一殿、本当に店を開いたようすな。」

『お、義炎か、何か買っていくか？』

義炎 「ふむ・・・懐かしい物が多いすな。これで。」

義炎が選んだのは鯛、そういや、貴族って食べること多かったな。

『はい、毎度。』

義炎 「・・・安すぎでは？」

『いや？これでいいぞ？』

人件費、電気代、水道代、スポンサー、その他もろもろがゼロ円なので安くできる。大体前世の十分の一で売れる。・・・せこいからね。これぐらい安くしないとね。

里の人間1 「俺も買います！これ下せえ！」

里の人間2 「俺も！」

初日で大繁盛、大満足。

幻夜「・・・よく売れたね？」

ちなみに途中で幻夜が様子を見に来た。

『まさか開店三時間で完売とはな・・・』

俺がびつくりだ。しかも途中でオークションになってやけに儲けた。

幻夜「凄いな」

凄いな何も、大体侵二の仕業である。

侵二「・・・おや、主上、随分と？盛したようじゃないですか。」

来たな元凶。

『・・・お前、人里では有名な？』

侵二「・・・ばれましたか。まあ、それなりに私は人里では知られているんですよ。」

『俺が龍一だと言うのも?』

侵二「まあ、少し言いましたね。で、店はどうだったんですか?」

幻夜「マスター凄いですよ」

『開店三時間で完売。おかげさまで大儲けだ。』

侵二「良かったじゃないですか。」

『いや、条件が良かったただけだろう。』

てか、大体てめえのせいだろ。とは言わない。

侵二「そう言えば届け物です。壊夢曰く「最高傑作ぜよ。」だそうです。」

来たのは酒、それも度数九十九だ。・・・よく作れるわこんなもん。点火するわ。

幻夜「・・・うわ、凄く匂うね?」

幻夜の言う通り、周りに酒の匂いが。・・・何いれてんだよコレ!

侵二「・・・早くしましましょうか。」

俺達だから大丈夫なのであって、普通・・・紫ぐらいまでは匂いのみで潰れる。普通って何だっけ。

ちなみに俺達は直で飲める。・・・化け物？褒め言葉だ。

侵二「あ、そう言えば主上、近く、異変が起きるそうですね？」

『・・・言っているのかよ？』

侵二「紫殿が「龍一なら大丈夫！」だそうですが？」

成程、信用されていると。

『了解、しかしまあ、紫はよく予測できたな。』

一応、この先が大体予測できるのは俺と龍源のイレギュラーだけの
はずだが。流石に侵二達でも未来予測は不可能というわけだ。お
およそ能力の応用だろうな。

侵二「紫殿の友人が起こすはずらしいのでね。」

なんだ、そういう事か。・・・確かに、次はアレだな。

幻夜「ふーん、で、マスターはどうするの〜？」

『・・・今回は様子を見るかな？』

侵二「おや、珍しいですね？」

『・・・今回はアイツがまとめて終わるのがいいだろう。』

幻夜「・・・ふーん？」

侵二「……まさか、もう誰が起こすか知っていますか？」

『ああ、分かった。……しまった!』

侵二「……どうしました?」

春雪異変の次……宴会が何故か連続発生……料理……マズイ、幽々子が来る。早く終わらせないと死人が出る。特に俺と侵二以外の料理担当が過労死する。

『今回の異変、ドジると死人が出る。』

侵二「……!了解、アレ、ですね?」

『……そうだ、アレだ。』

元気に食べるのは良いのだが、幽々子は限度を知らない。妖忌も「食事が……!」って嘆いてたしな。

幻夜「……うん、マズイのはよく分かったよ」

『……幻夜、そろそろ宴会が起きるはずだ。その時の料理、任せていいか?』

幻夜「僕一人で?」

『いや、俺と侵二が幽々子を担当、お前はそれ以外を担当してくれ。』

幻夜「うーん、別に良いよ?」

助かった。とりあえず被害者は減るはずだ。

幻夜「……でも、何で壊夢とか風魔には頼まないの？」

『説明しよう。あいつ等の料理は宴会に向かない。』

幻夜「あー、仕方ないね」

壊夢はスタミナ料理（激辛）しか作らないし、風魔はあまり多くの量は作れない。量より質のタイプだ。

幻夜？普通に美味しいのだが、「ごめんね？」とか口歪めて言いながら山葵とか山椒などを容赦なくぶち込む時がある。幽香にはしないらしい。まあ、見てて面白いから文句は言わん。……時々砂糖をぶち込まれて吐くがな。

侵二「まあ、近日、でしょうか？」

『そうなんだけどな？被害者は減らさねえと。』

特に宴会場提供の霊夢とか、従者の妖夢とか、疲れるだろうしな。

『じゃあ、アイツに連絡するぜ？』

侵二「了解です。こつちも任せてください。」

——おい、——いるか？

俺達の戦い、スタート。

次回へ続く

第六十一話 戦場と言う名の宴会

side 龍一

事の始まりは、誰かが「春だ、毎日花見しようぜ!」とか言ってから始まったらしい。出てこい、ぶっ転がしてやる。

『にしてもなあ・・・宴会多いわい!』

そう、多い!一週間に五日だけ?その内幽々子は三日来る。殺す気か!

幻夜「眠い」

幽香「幻夜、もうちよつとよ!」

幻夜はここ連続料理で大ダメージ、侵二は、

幽々子「おかわり」

妖夢「幽々子様!まだ食べるんですか!?!」

侵二「・・・・・・・・」

アカン、目が死んでる。アイツが来るまで後二日はあるのに・・・

霊夢「・・・・・・・・龍一さん、侵二さん大丈夫なの?」

『・・・・・・・・ご覧の通り大丈夫じゃない。問題だ。』

かく言う俺もかなりヤバい。早く来い!

霊夢「……これ、異変よね？」

魔理沙「まさかあ、そんな訳ないだろお？」

魔理沙、既に酔ってるじゃねえか。

『うーん、異変かもな？』

紫から「言わないでね？」と、言われているので言えない。てか、言う前に逝きそう。

霊夢「……ちよつと調べてみる。」

霊夢は調べてみる様子、めんどくさがりだったらしいが、俺達化物集団のせいで力をつけようと思っただけ。済まない。……まあ、元が強いので大丈夫だろう。

『おい、魔理沙、しっかりしな。』

とりあえず酔いを醒ませる。俺と壊夢の共同開発したアルコール分解水を飲ませると治る。何、変な物が入ってねえよ。

魔理沙「はっ！」

『酔いすぎんなよう。ほら、行ってきな。』

魔理沙「ありがとうだぜ！」

幽々子「おかわりー」

さつきから幽々子「おかわりー」しか言わねえなあ！

侵二「……………」

やめろ侵二！しびれを切らして樽ごと飯を……行けるなそれ！

『ナイス侵二！』

侵二「……ハハハ」

目が笑ってねえ。怖えよ。

『よっしや！お待ち！』

大鍋ごとスープを出す。侵二は樽ごと飯を出す。

幽々子「頂きます！」

妖夢「龍一さん、侵二さん、すみません……」

『いいよいよよ、気にすることないぜ。』

侵二「……大丈夫ですよ。」

てか、妖夢よく幽々子の食費管理出来るなあ。

幻夜「……マスター、終わったよ」

『おっ、お疲れ。』

幻夜「……寝るね……zzz」

寝るの早えよ。・・・まあ、お疲れ様。

侵二「・・・主上、ちよつと、」

『休め休め、お疲れさん。』

侵二「面目ありません・・・」

侵二にしては珍しく、倒れた。・・・お疲れ様。

藍「侵二！」

侵二「・・・すまん、ちよつと寝る。」

藍「お疲れ様だ。」

感動的だが、飯でこうなったからな？別の意味で泣きそうだわ。

幽々子「おかわりー」

慈悲がねえなおい!!

『ええい、最終兵器！』

奇跡的に作り置きが完全に残っていた。・・・あぶねえあぶねえ。

そして、作り置きも残り僅かで、ご馳走様でしたが聞けた。太陽はもう沈んでいる。

しかし、今気づいた。

・・・無限食でよかつたんじゃね？

侵二「・・・ふう。」

『いや、起きて大丈夫か？』

侵二「大丈夫ですよ。しかし・・・アイツが来ないですね。」

『・・・来ねえな。ま、気長には待てんが待つか。』

侵二「そうですね。・・・生きてられますかね？」

『・・・・・・・・』

侵二「・・・・・・・・」

『「無理だな(ですね)。」』

アカン、早く来ねえと俺と侵二は瀕死で済むが、幻夜が壊れるかもしれん。あ、既に壊れてるわ。

侵二「・・・どちらかを呼びますか？」

『やめとけ、二人共忙しいだろうしな。』

二人共・・・風魔と壊夢だが、この寒かった異変のせいでもかなりの場がマヒしているらしい。

壊夢曰く、「こっちは雪は降っていなかったが、ここまで冷えたのは初めてぜよ。」らしい。おのれ西行妖、まだ我らを苦しめるか。

幻夜「……マスター、幽香、侵二、おはよ〜」

幽香「……幻夜、本当に大丈夫？」

幻夜「大丈夫大丈夫〜」

足取りがおぼつかない状態で言われても困る。

幻夜「……今〜アイツから連絡来たよ〜」

でかした工d……違あう！

幻夜「えーつと〜、明日には来れそう〜だつてさ〜」

よっしゃ！これで何も怖くない。

侵二「(主上、それフラグですね。)」

「こいつ……！直接脳内に……！」

侵二「ボケる余裕が出来たんですね？」

『ああ、霊夢もこれが異変だと気づいたようだな、捜査中らしい。』

幽香「良かったわね。幻夜。」

幻夜「うん、じゃあ帰るね〜？」

『おう、……後一日だ、ファイト！』

幻夜「・・・おうよ！」

侵二「了解しました。死ぬ気でいきます。」

何度も言うが、飯の事だぜ？世界の終わりとかじゃねえからな？

『じゃ、解散。また明日。』

幻夜「はい、幽香、帰ろっか〜」

幽香「ええ、龍一、侵二、また明日ね。」

『おう、幽香も休めよ、幻夜の手伝いしてくれたんだし。』

幽香「ありがとう。じゃあね？」

手をつないで帰って行った。絵になるねえ。

侵二「・・・では、私も休みますね。」

『おう、明日も頼むぜ？』

侵二「・・・りよ、了解しました。」

『・・・早く来いよ、——お前の妹分が悩んでいるんだからよ。』

俺は鳥居に手を振って帰った。

side out

side ???

「・・・ありや、ばれてたか。龍一には勝てそうにないね。」

というか、龍一、戻ってきていたんだねえ。

「さて、いつ龍一以外は気づくかねえ？」

楽しみだねえ。

side out

その夜、鳥居近くには、しばらく霧がとどまっていた。

次回へ続く

第六十二話 孤独を救う者

side 龍一

昨日と変わらず大戦争、戦場は台所。

幽々子「おかわりー」

侵二「どうぞ！」

俺達は飯を釜ごと、鍋ごと出す。じやないと追いつかない。

え？無限食？・・・丸？みしやがったよ！再生する前に食われたよ！

結論、無限食意味なかった。畜生めえ！

幻夜1「ハイ、お待ち！」

幻夜2「あゝ、出来たよ〜」

幻夜3「出来たぜ！」

幻夜は人格を分離・・・奇術【スリーフィーリング】とか言うスペルを使ったらしい。最初の奴が兄貴肌、次がいつもの、最後は戦闘狂の性格だ。

『よくやるな、幻夜の奴。』

幻夜2「思い出したんだよね〜」

幻夜1「チツ、最初から使えよな？」

オイコラ、自分で喧嘩すんな。

幻夜3「うるせえ！働け！凍らすぞ！」

地獄絵図、いくら幻夜能力やステータスが三分割されたとは言え、三分の一でも危ない。なんて物を作りやがった。最高じゃねえか。・・・おつと本音が。

『やめろ！ここで暴れんな！』

侵二「・・・てめえら、働け。」

『落ち着け侵二、口調が乱れてるぞ。後、後ろの翼が表現出来ない声で呻いてる(?)から！しまえ！数名がやべえもん見たような顔で気絶してるから！』

翼一枚一枚が謎の軋むような音立ててるから！面倒事増やすな！

侵二「了解・・・で、まだ来ないんですか？」

収まったか・・・そう言えば来ない。

幽々子「おかわりー」

・・・まあ、そんな暇ねえわな。

『・・・行くぞ貴様ら!!』

侵二十幻夜1. 2. 3「了解!!」

どうやら、休みは無いようだ。

我ら、これより修羅に入る。

side out

side???

「・・・何だいアレ。」

そう言うしかなかった。幻夜が三人いるし、龍一と侵二が凄いスピードで動いている。

『幻夜2！休んでねえで動け！』

幻夜3 「2つてどれだよ！」

幻夜2 「やつほく・・・あ、僕だねく」

龍一以外も、どうやら私には気づいたみたいだねえ。幻夜なんか手振ってきたし。

「・・・誰か、戦えるのはいないかな。」

??? 「・・・まーったく、ここにきていたんぜよね。萃香」

声のした方向を向くと、

「・・・壊夢？」

壊夢「主に呼ばれたと思ったら、そういう事だったぜよか・・・」

そこには、壊夢が立っていた。

side out

side 壊夢

萃香「・・・何で、ここに、」

俺は萃香の頭を強く撫でる。

「・・・妹分を探す。それだけに意味が必要ぜよか？」

萃香「・・・え？」

「・・・茜に勇儀も心配してたぜよ？」

萃香「・・・！」

「別に怒つとらんぜよよ？心配してただけぜよ。」

萃香「・・・私は、」

「戦いたかった。地底に飽きた、ぜよか？」

萃香が黙って頷く。

「・・・すぐに言えばよかったぜよ。だーれも止めんぜよ。」

萃香「・・・本当かい？」

「・・・鬼は？が嫌い、焼骨の俺も嫌いぜよ。皆待ってるだけぜよ。」

萃香「・・・ありがとう。」

「・・・おっと、来たぜよね？」

霊夢「・・・この異変、アンタの仕業ね・・・壊夢さん!？」

「霊夢、こいつが異変の黒幕ぜよ。・・・さて、萃香、戦いたかったんぜよよね？霊夢と勝負すればいいぜよ。」

霊夢「どうでもいいわ。早く終わらせましょ？」

萃香「・・・壊夢、」

「ん？」

萃香「・・・ありがとう。」

「後から言うぜよ。・・・じゃあ、始めるぜよ！」

萃香「ああ！勿論さー！」

『・・・見つけたぞ壊夢!!』

・・・こつちも、する事があるぜよしね？

side out

side 龍一

壊夢「いやー、済まんかったぜよ。」

侵二「……御免で済んだら怒りませんか？」

『遅いんだよ！』

一万年と二千年前から愛して……違う！遅い！

壊夢「すまんすまん、……代わりに、幽々子用に酒、持って来たぜよ？」

『……許す。』

侵二「……いいでしょう。勘弁します。」

幻夜1「だから、」

幻夜2「できるだけ早く〜」

幻夜3「飲ませて来やがれ！」

壊夢「……了解ぜよ！」

壊夢特製、「大食い制圧専用酒」、と言っても、毒は入っていない。

……まあ、度数高すぎて寝るがな！五時間ぐらいな！……多分？いや、おそらくは……

と、いうわけで、今回、壊夢を呼んだ。風魔は忙し過ぎて欠席。……あいつが一番大変そう。

壊夢「幽々子が寝たぜよ！」

『よしー！行くぞー！』

．．．で、鬼の揉め事は壊夢に丸投げおつと、．．．もとい、任せている。

侵二「後、これで行けますか!？」

まあ、壊夢も兄貴分だったようで、心配してたしな。．．．マジで全員兄貴分じゃあるまいか。

『よしー！それでラストー！』

ま、遅かったら俺が解決してたがな。能力消えてるが。

幻夜「戻って、よし、こっちも出来たよう！」

俺、気づいたら絶影とシユナイダーと鏡一の固有能力以外消えてたよ。龍華に移ってたのさ。．．．おのれ西行妖！許さん！（冤罪）

壊夢「よし、俺は霊夢と萃香を見てくるぜよ。」

侵二「頼みます。」

『霊夢が解決できる範囲は横槍を入れるなよ？俺が紫に怒られるから。』

まあ、ポカポカ叩かれ、涙目で怒るだけだが。可愛い。

壊夢「しないぜよ。じゃあ、行ってくるぜよ。」

幻夜「はいはい、てか、マスターも十分甘い生活してるよね〜?」

よく言うぜ、幻夜、お前も十分甘いからな。てか、二番目に甘いぞ?
?

侵二「・・・確かに、自重したらいかがでしょうか?」

『お前だけには言われたくねえよ!バカップルが!』

生活の甘さダントツで甘い。常人なら一日一緒にいるだけで砂糖を吐き出して親指立てながら倒れる。

侵二「主上も最近、店で紫殿と営業してるじゃないですか?あれ、夫婦か?と言う質問が来たんですよ?」

『・・・お前よりはました。』

アカン、この会話不毛すぎるわ。やめやめ!クリスマスこのメンバーで行ったら核爆発しそう。否、必ず爆発する。

神社付近で爆音と土煙が上がった。・・・俺等当てじゃないよな?

『・・・終わったか?』

幻夜「・・・逸らしたね〜?」

知るか。

侵二「・・・主上の言う通り、終わったようですね?」

幻夜「やつとだね〜?」

この異変、萃香よりも幽々子のせいで疲れた。事実、幻夜と侵二が倒れたしな。

風魔? アイツなら山に籠って刃物を作るか、書類の山を整理するか、冥界で妖夢の稽古に付き合っているらしい。ここ一週間寝てないとか。壊夢から聞いた。忙しそう(小並感)

『ま、決着は分かるが、見に行くか。』

実は霊夢は侵二がここ最近鍛えている。俺? 教えるの嫌いなんだよ。侵二は得意らしい。流石完璧妖怪。何でも出来るな。

で、決着は・・・言わずとも分かるな?

霊夢「あ、龍一さん! 終わったわ!」

萃香「あいたたた、・・・なかなか人間もやるねえ。」

ま、そうなるか。萃香も妖怪の中ではトップクラスなんだけどなあ・・・

壊夢「お疲れ様ぜよ。」

ちなみに、妖怪の中には四凶は入っていない。妖怪からも化け物認定。よかったね。(呆れ)

『お疲れさん。』

霊夢「こいつが異変を起こしたみたいよ。」

俺十幻夜十侵二「知ってた。(よく)(ました。)

霊夢がずっこける。

霊夢「何で言ってくれなかった・・・ごめんなさい、紫ね。」

『理解が早くて助かる。で、萃香。』

萃香「・・・何だい？」

『遊び終わったか？』

萃香「・・・！ああ！楽しかったよ。」

『ならいいや。じゃ、壊夢、後頼んだ。』

壊夢「丸投げぜよか・・・」

『黙らっしやい。霊夢、宴会に戻るぞ。』

霊夢「あ、はい！」

壊夢に丸投げする。面倒なのが主な理由。・・・まあ、それ以前に、

義兄妹仲に首は突っ込まねえさ。ゆっくり話してな。

侵二「主上！幽々子殿が起きました！」

・・・ま、まあ出来るだけ早く来いよ？

次回へ続く

第六十三話 遊び

side 龍一

何故か幽々子が起きたので絶賛料理中。何故だ！

侵二「壊夢の酒にも耐性があるとは……」

しかし、幽々子の食欲を侵二が喰って、精神安定剤を別生活で俺達宛に頂いたのでかなり安定した。二時間程全員喜怒哀楽が少なくなり、機械的に動いたが……これでラストだ。

食材は精神安定剤と共に別生活で頂いた。大感謝。

幻夜「お待ちどお〜」

幽々子「ありがとうねー」

終わった。……料理時間、まさかの六時間、一日の四分の一が料理。ここ、飯屋じゃねえからな？

『終わった……お疲れ様。』

幻夜「お疲れ〜」

侵二「お疲れ様です。」

暫くは宴会はしたくない。てか、料理したくない。

壊夢「主、終わったぜよ！」

『お、こっちも終わったぞ。』

萃香「……あのさあ、龍一。」

『ん?』

萃香「……迷惑かけて悪かったね。」

『いやいや、遊んでただけだろ? 被害者が俺達だけなんだ。セーフだ。』

色々と犠牲はあったがな。(主に精神面)

萃香「……いや、でも、」

『俺なんて昔……四凶を式にしたばかりの頃、こいつ等との遊びで山一個ぐらい普通にぶち壊したからな?』

否、正確に言うとな二峰。馴染んだ後は大和と月の軍半壊。反省はしていないし、後悔もしていない、むしろすがすがしい。

萃香「……あ、ああ、そうかい、ありがとう。」

『謝るんなら霊夢に言いな、霊夢が宴会をまとめてたからな。』

萃香「……ああ! 分かった!」

『……でだ、壊夢、これからどうするんだ?』

壊夢「……どう、とは何ぞよ?」

『萃香だよ、地底に帰らせるのか?』

壊夢 「いや、残らせるぜよ？萃香は残りたらしいぜよし。」

『そうか、ならいいんだがな。』

壊夢 「・・・なあ、主。」

『あ？』

壊夢 「・・・妹って、難しいぜよねえ？」

『・・・慣れるしかないんじゃない？俺も龍華が出来た（？）時は悩んだしな。』

あの時は驚いたし苦労した。今は立派になったがな。おかげでお兄ちゃんも個人的に仕事出来る。・・・そこ！丸投げとか言わない！てか管理時間俺の方が数倍長いから！

壊夢 「そうぜよか・・・」

『そうだな。忙しいだろうが頑張れ。』

壊夢 「そうぜよね！主、助かったぜよ！」

『何もしてねえよ。・・・まあ、いずれ働いてもらうからな？』

壊夢が獰猛な笑みを浮かべる。怖いわ。

壊夢 「・・・了解ぜよ。楽しみにしてるぜよよっ。」

『おう、その前にも異変がそっちでも起こるかもしれないねえから、その

時は頼んだ。』

壊夢 「了解ぜよ!」

霊夢 「あれ?壊夢さん帰るの?」

『壊夢はこう見えて地底の鬼の棟梁だからな。忙しいんだ。』

誰もが納得できるわな。山一峰ぶち壊したのこいつだし。

壊夢 「こう見えてって何ぜよ。」

風魔も妖怪の山の裏ボスである。この幻想郷怖い。↑元凶

萃香 「・・・もう帰るのかい?」

壊夢 「ああ、また来るぜよ。・・・偶には顔、見せに来るぜよよ?」

萃香 「ああ!ありがとう!」

壊夢 「んじや、また来るぜよ!」

そう言つて飛び去った。・・・音速超えて。メンバー全員が音速超えたぜ!(白目)

『で、萃香。これからどうするんだ?』

霊夢 「神社に居候するらしいわ。」

萃香 「と言うわけさ。宜しく。」

『宜しく。あ、そうだ霊夢。』

霊夢「何?」

俺は店の儲けの一割を渡す。二割が俺の取り分だったが、多すぎて使い道がねえ。

霊夢「……え?こ、これ何?」

『寄付金。俺の神社だし、これで生活してくれ。』

霊夢「……ありがとう!」

多分、中の金額は前世で言う数万ぐらい?貧乏巫女卒業だな。

萃香「……やっぱり、龍一達のすることは規模が大きいねえ。」

『そう言われてみるとそうだな。』

遊びで山を壊し、他人との喧嘩で国を半壊、作るものは化け物レベル。……確かに!

『まあ、大は小を兼ねるって言うじゃん?』

萃香「……兼ねてないと思うよ?」

『言うな。てか、俺は自重してるからな?』

侵二「……どの口が言ってるんですか?」

紫「龍一!おはよう!」

うん、突っ込みどころが多い。まず侵二に言われるいわれはない。次、紫、起きるの遅い。

『……おはようじゃねえよ。もう昼だぞ?』

紫「い、忙しかったのよ。結解の補修とかで。」

『おい、こつちを見る。』

目え逸らしてんじゃねえか。

『……まあ、別に悪かねえがな?動かないと体に悪いぞ?』

侵二「……私は?」

『黙ってる規格外生命体。お前も動いてるだろうが。てか寝ねえだろうが。』

てか寝てても立ちながら寝てるだろうが。今度龍源にこんな生命体生まれるのか聞こう。

紫「……そうよね、」

幻夜「うんうん、それに、太っちゃうよ?」

あ。

紫「……」

『……阿保、それは禁句だ。デリカシーが無いぞ。』

幻夜「ん〜？幽香は何も言わないけど〜？」

幽香も苦勞してるなあ……この無神経戦闘狂マイペース野郎が。こいつが教師とか世も末だ。

『紫？別に太ってないからな？俺はどっちでも良いし。』

前世は女子に興味が無かった。彼女いるわけねえだろうがなんて言ったが、彼女も実際要らなかつた。

紫「……本当に？」

『このタイミングで？つくと思うか？』

幻夜「つくんじゃないの〜？」

黙れ、てめえは能力があるからそうなるんだ。

『……大丈夫、信じろ。』

紫「……うん！」

侵二「……めでたしめでたし。ですかね？」

幻夜「良かったね〜」

『お前が言うな。誰のせいだと思ってるんだ？』

幻夜「さあね〜？」

手応えがねえ。・・・ま、内心謝ってるし許そう。

萃香「・・・紫、終わったよ。博麗の巫女の強さ、よく分かったよ。」

紫「そう、良かったわ。楽しめたかしら？」

萃香「ああ！・・・後、霊夢、すまなかったねえ。」

霊夢「別にいいわよ。龍一さんが凄くお金くれたしね！」

紫「・・・いくら渡したの？」

『・・・店の儲け一割？』

紫「・・・いいの？」

『別に？使い道が無いしな。』

てか買い物しても龍神様だからとか、侵二様の主様だとかで割引される。

俺もう龍神じゃねえからな？龍神の兄、だからな？偉くねえぞ？

侵二「・・・まあ、これで宴会と異変は終わりですね。」

『やっとか・・・暫くは宴会したくねえな。』

幻夜「もう連続は御免だね」

侵二「そうですね・・・ちよつと休みたいです。」

『そうだな。暫くは普通に過ぐすか。』

異変は解決した。何とか死亡者も0だ。薬飲んだが。

・・・めでたしめでたし、と。

次回へ続く

第十二章 小休止く化け物達の日常
第六十四話 誤情報

side 龍一

宴会から数日、未だに料理したくない。

『毎度ありー』

店は相変わらず開店三時間で売り切れ。・・・おかしいだろ！

幻夜「マスター、店終わった〜？」

『終わったぞ？何か用か？』

幻夜「慧音に呼んできてって言われてさ〜」

『そうか、で、何でだ？』

幻夜「・・・忘れた〜」

『忘れんなよー！』

幻夜「・・・まあ、僕達についてだったと思うよ〜？」

『・・・分かった。とりあえず行く。』

幻夜「こっちだよ〜」

・・・化け物＋最高神移動中・・・

幻夜「慧音く連れてきたよ〜」

慧音「ありがとう、幻夜。」

『何の用だ?』

慧音「うむ、龍一殿は【幻想郷縁起】を知っているか?」

あれだっけ? 妖怪やらの情報の書いてあるいわゆる図鑑みたいな奴か。

『ちよつとは。それがどうかしたか?』

慧音「これは稗田阿礼・・・今は稗田阿求（ひえだのあきゆう）によつて書かれているのだが、龍一殿と四凶の方々の事も書きたいらしく、今回、お願いしたいのだが・・・」

『・・・幻夜、お前は?』

暇か、とは聞かない。・・・どうせ暇だしな。この自由人が。

幻夜「暇だよ〜?」

『とすると侵二、壊夢、風魔か・・・』

風魔「・・・呼んだか?」

『おわっ!・・・何でいるんだ?』

風魔「久しぶりの休暇だ。一ヶ月ぶりのな。・・・で、幻想郷縁起

だったか？私はいいぞ。」

『そうか、良かった。』

壊夢「幻夜？いるぜよか？」

幻夜「あ、来たね〜？」

『壊夢、お前も来たのか？』

壊夢「おう、萃香の様子見ついでぜよ。」

『・・・後は、』

侵二「私ですよね？」

『やっぱ来たのか。』

侵二「そりゃあ来ますよ。午後は暇なのでね？」

『そうか、・・・全員集合だな？』

慧音「・・・では！」

『よし、書いてもらいに行こうか。』

慧音「案内させてもらう。こちらだ。」

・・・少女＋四凶＋最高神移動中・・・

慧音「阿求、入らせて貰うぞ？」

??? 「慧音さんですか？どうぞお入りください。」

慧音 「では、龍一殿達も。」

『・・・よし、てめえら、静かに行くぞ。脅かしてみようぜ？』

四凶 「了解。」

俺達は気配を消す。・・・ちよつと遊びたくなつたからな。慧音も苦笑いしてるしOKって事だな。

慧音 「入るぞ。」

??? 「はい！どう・・・ぞ？」

『ちわーっす、龍一です。』

四凶 「お邪魔しまーす。」

三河屋風にお邪魔する。

??? 「・・・あの、慧音さん？この人達は？」

慧音 「龍一殿と四凶の方々だな。」

??? 「ええ!?は、は、初めまして、稗田阿求です。」

うん、そりや緊張するわ。現代で言う隣に校長先生が座るぐらい緊張するわ。

『お騒がせした。・・・今回、幻想郷縁起を書いてもらいに来た。』

瞬間、阿求の目の色が変わった。・・・熱心だな。

阿求「本当ですか!？」

『ああ、お願いする。』

阿求「では、始めに前代の書き記したものを・・・」

『ありがとう。』

俺達は丁寧に広げて見る。大事な物だからな。嫌な予感しかしねえが。

『・・・ブツ!』

はい的中、やべえ、笑った。壊夢の身長3メートルだよ。クマか。

侵二「・・・クツ、これは・・・」

風魔「・・・ククク。」

壊夢「・・・クツ。」

幻夜「・・・ハハハ。」

色々と酷い、壊夢は3メートルだし、侵二は目が四つ、風魔は：誰だこれ、幻夜なんて人間の形してねえ。アメーバじゃねえか。俺は・・・

「神矢龍一、詳細不明。」

アカン、吹いた。詳細不明の一文だった。笑い過ぎで死ぬ。

阿求「……すみません、情報不足でして……」

『ククク……あ、悪い。いやいや、よく調べたと思うぜ?』

阿求「そうですか?」

『ああ、俺等以外は正確だしな。……すげえな。』

紫とかも丁寧に書いてある。うーむ、凄い。

阿求「ありがとうございます!」

『だが……俺らが……クツ、酷すぎ……駄目だ、死ぬ。』

まだ笑いが収まらねえ。え?どんな感じか?こんな感じだ。

【侵二】

種族……饕餮

人間友好度……低い

危険度……超極高

能力……【有象無象を喰らう程度の能力】

身長……2メートル50センチ

詳細・・・恐ろしく危険な妖怪で、敵対すると死ぬ。目が四つあり、人の心を読むと言う。性格は恐ろしく残酷で、血を好む。

・・・こんな感じ。腹いてえ。身長で吹きそう。実際は190センチだぜ？しかも目が四つって・・・心読まねえからな？

性格も真逆、どちらかと言うと優しい方だ。(四凶基準)・・・これで一番ましな奴だぜ？

一番酷いのはこいつだ。

【幻夜】

種族・・・混沌

人間友好度・・・極低

危険度・・・測定不能

能力・・・〔万物を狂わせる程度の能力〕

身長・・・50センチ〜2メートル

詳細・・・危険過ぎて訳の分からない妖怪。太陽の畑に行つて帰らなくなるのはこの妖怪の仕業。形がなく、何にでもなると言う。能力によつて、脳を壊される。非常に危険。

・・・もはや幻夜じゃねえ。笑い殺す気か？能力も全然違う。幻夜も流石に苦笑いする程。更に身長はガタガタ、実際は185センチ、危険度測定不能でトドメを刺される。死ぬ。何を想像したんだ。5

0センチって何処から来た。侵二が身長喰ったか？

侵二「・・・あ、絶影のページありましたよ。」

『・・・どれだ？』

【絶影】

種族・・・影妖怪

人間友好度・・・中

危険度・・・死

能力・・・【影を司る程度の能力】

身長・・・100センチ

詳細・・・一番敵に回してはいけない妖怪。危険すぎて誰も顔を見たことがない。又、危険すぎて情報がこれ以上無い。

『・・・ワハハハハハハ！』

アカン、もう限界。100センチで、身長喰われた。・・・しかも危険度が死ってなんだよ！

慧音「・・・こつ、これは・・・」

慧音まで笑ってるんだからかなり酷い。・・・俺、身長195ぐら
いだからな？

阿求「・・・私も、初めて見ましたが・・・ここまでとは・・・」

『・・・これは・・・再編集・・・する・・・必要が・・・あるな。』

侵二「・・・そ、そうですね。・・・ククク。」

風魔「・・・主、主上が100センチ・・・」

壊夢「・・・げ、限界ぜよ。」

幻夜「・・・お、お腹痛い・・・」

『・・・ふう、さっさと直そうぜ?』

落ち着け、アテンションプリーズ。

幻夜「ハイテンションプリーズ?」

ヒヤッハー!・・・じゃねえ!

『ボケ、これ以上はやめろって。まともに息が出来ねえから。』

幻夜「・・・はい、」

『てか、これでよく俺等怖がられなかったなあ。』

慧音「怪しすぎて皆信用しなかったのだ。」

幻夜「僕も疑うように騙したしね〜」

『またかよ。』

阿求「……コホン、では、龍一さんからお願いします。」

『……おっと、分かった。お前ら、変なこと言うなよ?』

その後は、種族、身長、能力、人間友好度（紫連絡済み）、危険度（他メンバー採点）、詳細、対処法、そして弱点を聞かれた。弱点は異変などを起こした時の万が一の対象の為らしい。俺達に弱点あったっけかと悩んだ。俺等つてやっぱ化け物だな。

『……こんな感じでいいか?』

阿求「はい！ありがとうございます！」

見違えるように俺等の情報はましになった。

侵二「上出来ですね。」

『そうだな。……それじゃあ帰るか。』

慧音「わざわざすまなかった。」

阿求「すみませんでした……」

『いいよいいよ、暇だったし……楽しかったしな?』

四凶全員が頷く。……上等だ貴様ら！それでいい！

次回へ続く

番外編3 幻想郷縁起に記された四凶、及び龍一、龍華

【幻夜】

種族・・・混沌

人間友好度・・・高（低）

危険度・・・中（極高）

能力・・・【万物を欺く程度の能力】

身長・・・185センチ

詳細・・・四凶と呼ばれた妖怪で、この世に一体のみしか存在しない妖怪の一人。普段は温厚でのんびりしているが、戦闘に入るか、怒らせると性格が真逆に。こうなると幻想郷の賢者・・・八雲紫も止められない。近年、寺子屋で教師をする姿が目撃される。その時は性格は荒いものの、危険度は低い。弾幕ごっこを好む。現在は太陽の畑に住んでおり、風見幽香と結婚済み。

対処法・・・とにかく敵に回さない事。風見幽香を敵に回しても自動的に幻夜も敵に回る。また、億が一攻撃出来てもその行為は四凶を敵に回すので、後に紹介する侵二、壊夢、風魔も攻撃に来る。

弱点・・・弾幕や槍で攻撃する事が多いので、近距離が苦手。しかしながら爪で引き裂く所を目撃した者もいるので、決してはつきりした弱点とは言えない。

他メンバーより、（四凶基準）

侵二「人格でムラがあるんですよね・・・」↑そうは見えない
風魔「まだ遅いぞ？」↑どうしろと
壊夢「防御力が低いんぜよねえ・・・」↑硬すぎるだけです
『耐久性、攻撃力がちよつと低いかなあ？』↑貴方に言われると終わりです

【壊夢】

種族・・・槌杓

人間友好度・・・中

危険度・・・極高

能力・・・【万物を貫く程度の能力】

身長・・・2メートル

詳細：・四凶の一体。能力は他メンバーに対して見劣りするが。吸血鬼、フランドール・スカーレットにも劣らない危険性を持つ。性格は豪快で嘘を嫌う、鬼のような妖怪。恐ろしい怪力の持ち主で、鬼子母神すら歯が立たない程の怪力。更に、地上最強の妖怪、絶影の心臓を貫いた事がある。時々人里に大工や酒を売りに来ている。現在は地底で鬼の棟梁をしており、そこから人望と強さが伺える。更に、鬼子母神と結婚している。弾幕ごっこは苦手な分類。しかし、弾幕が飛ばせないのではなく、威力が強すぎて弾幕とは言えないだけである。

対処法・・・基本的に攻撃はしてこないため安全。しかし、鬼の兄貴分の為、鬼を退治しようとする、何処からか飛んでくる。また、博麗の巫女の札や八雲紫の結界をもともせず、弾き返し、叩き割る。

他の四凶のメンバーによると、一度も傷を負ったのを見たことがないらしい。敵に回さないのが基本。

弱点・・・格闘術に優れる反面、遠距離を苦手とする。しかし、絶影を遠距離攻撃で殺したため、当たると確実に死ぬ。はつきりした弱点とは程遠い。

他メンバーより、

侵二「弾幕が下手なんですよね・・・」↑上手すぎるだけです

風魔「遅いぞ！」↑それしかないのか

幻夜「強いけど、ごり押しばつかなんだよね」↑あんたも同じだ
『まだ火力が足りんな』↑これ以上はやめてください

【風魔】

種族・・・窮奇

人間友好度・・・中

危険度・・・極高

能力・・・【災害を操る程度の能力】

身長・・・190センチ

詳細・・・四凶妖怪の一人。性格は真面目で厳格。剣術を得意とし、その領域は達人を超える。元々は正々堂々と勝負していたが。窮奇の本能か、多少の卑怯や不意打ちは気にしなくなった。異常な速度で空を飛び、その速さは光と同じ。しかし、地上最速と呼ばれるのを嫌い、幻想郷最速は射命丸文に譲り、自らは四凶最速を名乗る。妖怪の山のまとめ役の天魔と結婚しており、仲間意識が強い天狗にも慕われており、事実上妖怪の山の裏ボス。弾幕ごっこもかなり得意。

対処法・・・基本的に人間には無関心なので敵に回さない限りは問題ない。しかし、他メンバー同様、怒らせると切り刻まれる。敵に回さない事。

弱点・・・近接戦、弾幕戦、広範囲戦闘、なんでもこなすため弱点は無い。但し、他メンバーと比べると長時間戦闘は苦手。(あくまでも四凶の中の話である。)

他メンバーより、

侵二「速いですけど、持久力がちよつと・・・」↑基準が高すぎるんです

壊夢「まだまだ威力が低いぜよ！」↑硬すぎるだけです

幻夜「んく、奇襲が甘いねく」↑あんたが上手すぎるだけです

『俺以上の速度出せるけど、持久力が低い』↑基準がおかしい

【侵二】

種族・・・饕餮

人間友好度・・・極高

危険度・・・極高

能力・・・【有象無象を喰らう程度の能力】

身長・・・190センチ

詳細・・・四凶妖怪の一人で、四凶のリーダー的存在。性格は温厚で優しく、誰にでも親切。妻である八雲藍と、その式である八雲橙以外には敬語で話す。能力、妖力は四凶の中でも最強で、未だに絶影以外が彼に勝利したことがない。更に絶影の首を切り落とし、即死させ

た伝説、人里で妖怪を指一本で殺した伝説を持つ。(すべて事実)薙刀の達人でもあり、風魔と切り合っても互角の腕。一番恐ろしいのは背中に生える翼で、様々な形に変わる。この翼が文字通り全てを喰らう。翼は現在十二枚で、異常な再生能力を持つ。この再生力は博麗大結界にも使用されている。

対処法・・・幻想郷の賢者の式の旦那の為、基本的に人間妖怪問わず攻撃しないので安全。他メンバーと違って危険性は低い。が、強すぎるため敵になると非常に危険。絶対に敵に回さない事。

弱点・・・他メンバーのように突出した能力がない代わりに、低い能力が無い。故にバランスが良すぎる為弱点と呼べるものは勿論、苦手分野も無い。

他メンバーより、

風魔「私よりは遅いが、他が凄いぞ」↑侵二さんおかしいです

壊夢「近距離が今ひとつぜよ」↑あんたが強すぎるんです

幻夜「んく、優しすぎ、甘いねく」↑基準がおかしい

『能力以外は俺と互角だな』↑強すぎるだろう

【神矢龍一】

種族・・・龍神(本人曰く龍神の兄)

人間友好度・・・極高

危険度・・・極高

能力・・・【金属を創造、司る程度の能力】、【影を司る程度の能力】、【架空の物、伝説の生物を召喚する程度の能力】(元々は【全を司る程度の能力】があったらしい。)

身長・・・195センチ

詳細・・・言わずとも知れた世界の創成者。性格は大らかで非常に軽い。人間妖怪嫌われ者問わず優しい。八雲紫の元師匠らしく、今は彼氏。恐ろしい顔の広さを持ち、幻想郷の実力者の半分以上が知り合い。何度か死んだ事があり、しれつと復活するそうだ。(四凶談)もう一つの姿を持ち、その時は絶影。つまり、絶影Ⅱ龍一である。その為、侵二に勝った人物は彼である。妹がおり、妹・・・龍華が龍神の仕事をしている。

対処法・・・敵に回さない事。幻想郷、四凶、彼の知り合い、妹に大怪我をさせなければ安全。一番安全。

弱点・・・絶影以外にも姿があり、更に戦闘時に姿が変わる時がある(10種類)その為弱点がコロコロ変わる。というか元から無い。弾幕ごっこも幻想郷のできる前から似たような物を行ったらしく、異常なレベルで強い。侵二も負ける程。

他メンバーより、

風魔「速度以外は欠点無しだな」↑勝てるか!

壊夢「格闘以外は俺よりも上ぜよ」↑絶対に勝てるか

幻夜「んく、不意打ち以外は僕より強いよ」↑もう勝てない

侵二「私より強いですね、能力では負けませんか?」↑駄目だ

【神矢龍華】

人間友好度・・・不明

危険度・・・不明

能力・・・【全を司る程度の能力】

身長・・・140センチ

詳細・・・現在の龍神。ここからは龍一殿からの話で、「かなりやんちやでイタズラ好き、でも優しすぎて戦闘は苦手、どちらかと言うと事後処理や管理の仕事が得意。」との事。

外見は髪の色が水色、龍一殿から、「・・・艦これの駆逐艦の電?」との事。よく分からない。

対処法・・・基本的に幻想郷には来ないが、過去数度目撃された。危険性は低いが、龍神なのでちよつかいをかけない事。龍一殿から、「手え出すと消すぜ?」との事。

弱点・・・戦闘が苦手。なので敵になることは無い。

以上、幻想郷縁起より抜粋。by龍一

第六十五話

休暇宴会

side 龍一

宴会したくないと言ったな。あれは嘘だ。

今回の宴会は咲夜と藍と妖夢が料理担当をするらしい。まあ、侵二がやろうとしたらしいが藍と橙に、「馬鹿者！無理せず休め！」「そうですよ侵二様！」って泣きつかれたらしい。・・・薬で完全復活してんだけどなあ。後、甘い。

・・・で、咲夜も「先生！これ以上すると死んでしまいます！」ってマジ顔で言ってきた。うん、本当にいい子になった。

妖夢も、「幽々子様のわがままに付き合って下さいましたから、私もお返しします！」との事。

で、本当に何もしなくていいらしい。

『・・・マジでする事がねえな。』

侵二「そうですね・・・」

幻夜「そうだねく・・・はい、あーん」

幽香「ちよ、ちよつと幻夜？」

あのなあ・・・

『人前でするなって言ってるんだろ！』

幻夜「いいじゃん別に〜」

いや、幽香顔真つ赤じゃん。初めてそんな顔見たわ。

幽香「・・・次、幻夜ね、はい、あーん。」

幻夜「あーん。・・・それにしても、また風魔来なかったね〜？」

『ああ、なにشت「呼んだか？」』

来たのかよ。後幻夜、お前は動じねえのかよ。

『いや、忙しいんじゃないのか？』

風魔「終わらせてきた。」

『はい？』

風魔「もう慣れた。書類程度なら十分で終わる。」

『ああ、うん、』

化け物じゃねえk・・・すまん、化け物だったな。

風魔「・・・今回は宴会は何もしなくていいらしいな。」

『ああ、ついでだし壊夢も・・・』

壊夢「よう、来たぜよー！」

『一々地面抉って着陸すんじゃない！』

飛行禁止令でも出してやろうk・・・いや、ジャンプで来るからな。

『てか、何しに来た。』

壊夢「萃香の様子見せよ。」

結構な頻度で来るな。・・・ま、大事な事だしな。

萃香「よう壊夢、また来てくれたのかい？」

壊夢「そうぜよ。・・・元気そうぜよね。」

萃香「ああ！」

数分で賑やかに、・・・それがいいんだけどな！

壊夢「んじや、萃香達と飲んでくるぜよ。」

風魔「・・・私は、妖夢を見てくるか。」

幻夜「僕らはここに居るね。ね？幽香？」

幽香「ええ、そうね。」

魔理沙「お、いたいた。侵二さんに龍一さん、ちよつといいか？」

『ん？なんだ？』

魔理沙「まず、龍一さん、これ、返すぜ！」

そう言つて渡してきたのは魔導書・・・あー、あげてたな。

『あれ？あげるぞ？』

魔理沙「・・・いや、ちよつと私に合わない魔法が多かつたんだぜ。」

あ、そつか、幻想郷の魔法使いには型の概念がねえのか。

『・・・あー、よし、侵二、俺に会いたい魔法使いが確か紅魔館にいたよな？』

侵二「ええ、パチュリー殿ですよね？」

『そう、でだ、魔理沙、レミリア達と会う約束もしてるんでな。一緒に来るか？』

魔理沙「喜んで行くぜ！」

この世界の月とか日の魔法がどの型か知る必要がある。そのついでに型も教えようそうしよう

侵二「・・・で、私は？」

魔理沙「侵二さん、勝負だぜ！」

・・・やっぱそうなるか。

侵二「ククク、・・・ハハハ！いいでしょう！」

で、お前も乗るのか。休んだ意味あるのか？

『物壊すなよ?・・・被弾数は3、スペルは制限なし、気絶しても終了。・・・始め!』

侵二「了解です。さあ!行きましようか!」

あつという間に観客も揃う。うん、平和。

b g m D a n c e i n t h e s k y

侵二「今回はこつちから行きますよ!雷符【ライジングレイン】!」

魔理沙「それはもう慣れたぜ!」

うん、色が禍々しい。黒色じゃねえか。

侵二「それなら・・・こうで行きますよ!」

侵二が指を動かすたびに、雷の弾幕は分裂、合体を繰り返す。

侵二「・・・頃合いですね。」

弾幕が四散。・・・まあ、侵二の周りを二、三個回っているのだが。霊夢のパクリか?

魔理沙「うおっと!・・・今度は私の番だぜ!魔符【スターダストレヴァリエ】!」

『・・・速いな。』

侵二「・・・おお、強化されていますね!」

魔理沙「龍一さんの魔導書のおかげだぜ！」

・・・役に立ってたんだな、あのハイテンションで書いた魔導書。

侵二「ほう！・・・なら、ちよつと本気で行きますよ！喰符【全弾捕食】！」

誰の弾幕でもおかまいなしに喰う。自ら出した弾幕も喰う。無茶苦茶じゃねえか！

魔理沙「？だろ!？」

侵二「これが現実ですね。・・・後、よそ見は」

魔理沙「駄目なんだろう？わかってるぜ！」

珍しく侵二が接近するが、魔理沙は弾幕で退ける。

侵二「・・・その通りです。・・・さて、電符【プラズマチャージ】」

侵二が止まる。そして、弾幕のみ喰ったので、周囲に散らばっている電気エネルギーを一点・・・薙刀に集める。感電しないのが凄い。

魔理沙「何するかわからないが、させないぜ！」

侵二「・・・」

魔理沙「行くぜ！恋符【マスタースパーク】！」

侵二「・・・」

魔理沙の放ったマスタースパークが侵二に直撃しそうになるが……
てか、出力すげえな。壊夢の拳骨といい勝負か？

侵二「さて、行きましようか。」

一秒遅かった。てかわぎとだろ。

侵二「黒符【黒電磁砲】」

マスタースパークをいとも簡単に押し切り、魔理沙に当たる。……
勿論、威力は極限まで下げてある。……って、瓦吹っ飛んでいやがる。

『……終わりだな。』

相手の隙に強烈な一撃を叩きこむカウンター戦法、これが侵二のスタイル……まあ、数が多いと戦法関係なく翼の暴力で抑え込むんだが。

侵二「……いやあ、危ない危ない、負けかけましたよ。」

その為、危険を伴うのだが……翼で防ぐため、この発言は嘘っぱちである。この化け物。てか瓦どうする。

『……その言葉、聞き飽きたぞ?』

侵二「そうですか?まだこれで48回目ですよ?」

『そんな事を聞いてんじゃねえ!てか聞いてねえ!』

侵二「いいえ?今回は割とマジでしたよ?」

『・・・ほう。』

侵二「魔理沙はかなり上達してきています。・・・案外、手を抜いた私なら行けるかもしれません。前回も同じスペルでしたが、精度が圧倒的に違いましたしね。」

確かに、侵二には珍しく、短期決戦だったな。

『珍しいな、お前がそんな事を言うのは。』

侵二「・・・そうですかね？何故かそんな気がするんですよ。」

駄目だ、侵二まで兄貴化してきた。いや、親父化か？橙の親父の立ち位置だしな。

・・・ま、外見だけ見れば兄妹なんだが。魔理沙といてもおかしくないしな。そんな見た目で1億超えてんだぜ？JJ I だぜ？

魔理沙「・・・まだまだ勝てないぜ。」

侵二「いえ、幻想郷で幻夜達以外に黒電磁砲使わせたのは初めてですよ？久々にちよつと力入れましたしね。」

そうだろうな、あれだけ言ったのに神社の瓦吹っ飛んでるからな。・・・キレるぞ？

魔理沙「そうなのか!？」

侵二「ええ、魔理沙、貴女は強くなっていますよ。」

魔理沙「よし！次こそ勝つぜ！」

うん、元気でよろしい。

藍「何やってるんだ侵二！」

ところがギツチヨン、平和に終わらない。そういや侵二、休む必要があつたんだっけ？・・・まあ俺もだが。てか休み要らねえが。

橙「侵二様！」

侵二「・・・あ、すまん。」

やべ、めつちや侵二動揺してやがる。・・・向こうで幻夜もニヤニヤしてるな。けしからんもつとやれ。

藍「あれ程休めと言つたのに、お前と言う奴は・・・！」

侵二「・・・馬鹿言え、あの程度で藍と橙を置いて死ぬかよ。」

・・・幻夜、つまんないからつてそつぽ向くな。後風魔、壊夢、もう慣れたような目つきすんなよ。慣れたがな！

藍「・・・しかし、」

侵二「・・・悪かった。俺の落ち度だ。次からは気をつけるさ。橙も、すまなかつたな。」

藍「分かればいいんだ。」

魔理沙「・・・なあ、龍一さん。」

うん、何言いたいかよく分かる。

『俺（私）達、必要ないな（ぜ）』

侵二と藍、橙居るところに砂糖有り。・・・以上がこの宴会での教訓になりそう。

『って、教訓になるかい!!』

何だこの茶番劇。

次回へ続く

第六十六話 大喧嘩

side 龍一

宴会終盤、侵二の砂糖騒動も終了し、かなりのどかに……

幻夜「おい壊夢、喧嘩しようぜ！」

ならねえよな！幻夜が裏の性格出しやがった。

壊夢「珍しいぜよねえ……」

幻夜「幽香との格闘戦が普通にできるようにしたくてな。いいか？」

『やめろ、する場所がちが「乗ったぜよ！」聞けえい!!』

駄目だこいつ等、軽く酔ってやがる。これじゃあ聞かねえ。……
どんだけ酒飲んだんだ貴様等。しかも侵二がいねえから止まらねえ。
まあ止めさせないがな！

幽香「幻夜、考えてくれたの？」

幻夜「……一応旦那だし、ましな事出来てねえしな。たまには役に立たねえと、な？」

あいつがあんな感じの事をするとか体の女性が落ちる。それを見
てきた。てか、酔ってるせいでウインクまでしていやがる。お前は本
当にこの世界出身か？その系統の仕事してないよな？

幽香「……ありがとう。」

うん、めっちゃ顔赤い。湯気出てるぞ。幽香。

壊夢「・・・で、ルールはどうするぜよ?」

幻夜「あ、悪い、能力無しで行こうぜ?」

俺達の能力無し。片方が気絶するまで容赦なし。

『俺が止めるまでな?加減が出来ねえだろ?』

酔いながら喧嘩するな。デスマッチでマリアナ海溝作った野郎共が。

幻夜「・・・まあいいや。じゃあ、行こうぜ!」

壊夢「行くぜよ!」

『へいへい、・・・始め!!』

ま、好きにしろや。

bgm FF13 閃光

壊夢「せいっ!」

真空を作り出す程のアップercut、・・・手加減忘れてやがる。てか爆音がうるせえ。

幻夜「うおっ!危ねえ危ねえ。」

「霊夢「何!?!何が起きたの!?!」

霊夢が急いで来る。まあ爆音がしたしな。

『あー、大丈夫だ。只の喧嘩だ。』

霊夢「いや、普通の拳で爆音はしないわよ!」

侵二「・・・何事ですか?」

『喧嘩だ喧嘩。大したことじゃねえだろ。』

侵二「・・・ああ、喧嘩ですか。」

それでいいのか侵二。

霊夢「・・・大丈夫なの?」

侵二「このぐらいで気にすると身が持ちませんよ?」

『そうだぜ?気にしすぎると大変な事になるぜ?』

一時期気にしすぎで髪の毛全部白くなったからな。今でも真っ白だ。

壊夢「フハハ!」

幻夜「ハハハハ!」

・・・だからもう気にしない。

霊夢「・・・そ、そうなの。」

壊夢「ぜいっ！」

幻夜「危なっ！」

霊夢「げ、幻夜さんの足が!!」

『あ、折ったな。』

侵二「折りましたね。」

うん、あれは膝関節やったな。周りも驚いてやがる。

霊夢「と、止めないと！」

『いや？止めないが?』

霊夢「え?」

『幻夜は足を折ったのは確かだが・・・』

幻夜「ハハハハ!・・・行くぜ！」

『あれ、自分で折ったぞ?』

幻夜「そらよ!!」

折れた足を使ってヌンチャクのようにしならせる。・・・幻夜曰く、「騙す以外にも意表をつかないとね?」らしい。と言う訳でアイツの足技を初見で避けるのは不可能。慣れても避けられない。・・・壊

夢は躲すが。

壊夢「おっと！」

幻夜「ちっ！」

ちなみに戻る。どんな構造してんだ。

霊夢「・・・う、？でしょ？」

『アイツ等に常識を求めるなよ？』

ちなみに幻夜はどの関節も外せる。首も外せる。・・・まさに混沌。あれ？混沌ってなんだろ。

侵二「おや、幻夜が腕を外しましたよ。」

後、分離も出来る。・・・あいつは〇ーンXか。

壊夢「ちっ、当たらんぜよ・・・」

幻夜「おらあっ！」

幻夜が外した腕で殴る。

壊夢「おっと！そうはいかんぜよ！」

壊夢の真剣白刃取り（取ったのは腕）、あの野郎、遂に日本武術まで習得しやがった。

幻夜「ちいっ！」

壊夢 「幻夜！覚悟ぜよ！」

ゴスツ、と言う鈍い音がする。

幻夜 「グアッ！」

壊夢の頭突き。威力は・・・

幻夜 「・・・それはねえよ・・・」

幻夜が一撃で倒れるぐらい。慧音も頭突きをするらしいが比べちやいけねえ。

壊夢 「主！終わったぜよ！」

幻夜 「・・・これは勝てねえよ。」

と言いつつ衝撃を最小限まで抑えた壊夢さんと、被害が広がらないように流した幻夜さん素敵。出来るならここですんな。馬鹿共が。

『はいはい、そこまでにしやがれ。特に幻夜、お前が関節外したせいで怖がつてんじゃねえか。後壊夢、酔ってるからって頭突き使うな。地底で使え地底で。』

幻夜「悪い悪い、俺が関節外せるの知らなかったんだっけか。後、酔いは頭突きで冷めた。」

壊夢「いやー、すまんぜよ。つつい楽しかったから使っちゃまったぜよ。」

駄目だ反省してねえ。もういいや。

侵二「じゃあ、片付けましょうか。」

『そうだな。誰かが瓦吹っ飛ばすし、地面抉って来るし、頭突きで結局陥没してるしな!』

能力消えて片付け面倒になったんだよなあ。畜生。

侵二「誰ですか?」

『お前だよ!瓦吹っ飛ばしたのはお前だよ!地面抉ったのは壊夢、陥没は幻夜と壊夢・・・幻夜!!逃げんな!!』

幻夜「チツ・・・はい。」

駄目だ、四凶の統率が出来ねえ。↑今更

侵二「逃げるのは駄目ですが、邪魔です。壊夢もちよつと外してください。」

幻夜「はいはい。」

壊夢「了解ぜよ。」

とりあえず邪魔者は去った。・・・てか風魔、呆れてるんだったら手伝え。気配を消すな。忍者か。貴様の出身は日本か。

『侵二の言うことはよく聞くよな。何時からお前等は知り合ってるだ?』

侵二「・・・主上と会う一億年前です。」

『おい待て、今おかしい数字が聞こえたんだが。』

侵二「・・・大体一億年前です。その頃は私達四凶妖怪もわんさかいましたし・・・」

大体八岐大蛇封印した時期か？・・・長寿過ぎないか？

『お前等本格的に長寿だな・・・何だ？全員神とかか？』

侵二「・・・いえ、確か風魔は風神としていた時期がありますけど、
他は・・・」

ますます分からん。あんまり人の過去を見る気はないが、こいつ等は聞く必要があるかもしれんな。

『てか風魔の奴、元風神かよ。・・・やっばてめえら規格外だな。』

侵二「・・・ははっ、そうですね。」

この時、侵二の目がいつもと違う気がした。

ま、気のせいだな。

次回へ続く

第六十七話 久々の紅魔館

side 龍一

何とか休めた宴会だが、する事が多い。主に店とか紫の結界調査の手伝いとか店とか店とか店とか。

だが、店は終わった上に、結界は何処かの侵二のせいでダメージ0、俺こんな化け物式にした記憶ねえぞ。↑すつとぼけ

侵二「・・・よく言いますよ。私達全員統率しておいて。」

『うるせえ、ここまで魔境に行くと思っただけでなかつたんだよ。てか、何で来た。』

侵二「紅魔館に行くんでしよう？私もオルゴイ殿と仲良くなりましたし・・・」

まあ仲良くなってもおかしくない。物騒な会話しながらウイスキーでも交わしてんじやなろうか。ああ見えてオルゴイの奴血の気多いし。

魔理沙「私が案内するぜ！」

前回の約束通り、紅魔館にお邪魔する事になった。

『ああ、よろしく頼む。』

魔理沙「こっちだぜ！」

侵二は独自のルートから向かったらしく、見に行くと文字通り茨の道だった。流石侵二。馬鹿野郎。

侵二「……成程、こちらからでしたか。」

『成程じゃねえ。あの道はおかしいだろ。』

森の中突っ切るとかふぎけんなよ。

魔理沙「着いたぜ！」

美鈴「また魔理沙さんですか……あ、侵二さんも。そちらの方は……」

おっと、龍一からシュナイダーに変えよう。一番説得力があるだろうし。

『……よつと、初めましてだな。シュナイダーだ。』

美鈴「シュナイダーさんですか!?!少々お待ち下さい!!」

美鈴が走って紅魔館に入った。……あ、戻ってきた。

咲夜「先生！来てくれたんですね！」

『おう、宴会以外じゃ久しぶりだな。入って大丈夫か?』

咲夜「はい!……美鈴も、大事なお客様だから、入ってきなさい。」

美鈴「あ、はい！」

……魔法使い+他一団移動中……

さて、入ったのだが……目に悪いな。あれ程黒にしろと言ったの

に。

咲夜「お嬢様の部屋はこちらです。魔理沙は……自由にどうぞ。侵二様は……」

侵二「あ、侵二さんでいいですよ。私も部屋は覚えてるので、美鈴殿、行きましようか？」

美鈴「え？私ですか？」

侵二「ええ、あまり話していなかったの……いかがですか？」

美鈴「……咲夜さん、良いですか？」

咲夜「ええ、いいわよ。先生、こっちです。」

『じゃあな、侵二。後で会おうぜ。』

侵二「了解です。」

『……さて、邪魔するぞ。』

フラン「お兄様ー!!」

フランの突進、来ると思ったぜ!

『カハッ!……よう、フラン、久しぶりだな。』

速い、まさかと思って防御魔法張ってたが……少なからずダメージを受けた。痛え。

レミリア「お兄様!!」

『よう!約束通り来たぞ。』

うーん、レミリアはもうちょっと周りにも明るくすればいいのにな。威厳とかカリスマとか要らないし。侵二曰く、「カリスマを気にしちゃ勝てませんよ?」幻夜曰く、「要らなくない?」との事。貴様等は黙っている。

咲夜「……」

『……別に甘えに来てもいいぞ?別に違和感もないだろ?』

咲夜「……はい!」

うん、甘えてくるのな。まあ全員妹に見えるんで大丈夫だが。

レミリア「お兄様、暫く何処に行っていたの?」

フラン「あ、私も気になる!」

咲夜「私も気になります。」

『……実家?』

死んだとは言えねえ。間違っても黄泉の国なんて言えねえ!

レミリア「何してたの?」

『妹に顔見せてたのと、……まあ、友人と会ってたかな?』

龍華が身長変わらなかったのは驚いた。

レミリア「へえ……」

フラン「妹ばっかりずるいー!」

『いや、フランもレミリアも咲夜も妹だからな?』

フラン「やった!」

レミリア「……でも、お兄様って龍神なんですよ?」

『あれ?言ったっけ?』

フラン「侵二お兄様から聞いたよ?」

また 侵二 か !

咲夜「私は聞きましたし……」

『あー、うん、俺は確かに龍神だぜ?まあ、神矢龍一ってのが本名だけれどな。本名まで言っただけじゃなかったよな。』

フラン「ええ!?!……じゃあお兄様って、この世界を作ったお凄なお爺さ『ストーツプ!!』」

『やめろ。お爺さんとは言うな。せめておじさんにしてくれ。』

精神面が学生なのにお爺さんとか呼ばれるのは流石にキツイから。JJ-I(ジジイ)ならOKだが。そこは侵二共には叶わん。アイツらなんてもう歳だとかぬかしやがる。何処に未だに遊び回って山崩す

年寄りがいるのか。いるわけなからうが。

フラン「は、はい。」

咲夜「先生、そろそろオルゴイ様の所に行かれますか?」

『・・・そうだな。レミリア、フラン、行ってきていいか?』

レミリア「ええ!フラン、図書館で待ってましょ!」

フラン「うん!お兄様、また後でね!」

咲夜「・・・では、案内します!」

・・・龍一移動中・・・

咲夜「オルゴイ様、失礼します。」

咲夜がドアを開ける。

侵二「・・・では、これでは?」

オルゴイ「・・・ほう、では、これでどうだ?」

美鈴「あ、シュナイダー様、先程ぶりです。」

『おう。で、その紳士(外見のみ)共はゲーム中か。』

侵二とオルゴイがしているのはチェスか。

侵二「うーん、こうですかね。」

まあ、発言と駒を動かすスピードが違うのだが。駒見えねえ。

オルゴイ「・・・チェックメイト。」

侵二「あー、これで25勝25敗ですか・・・」

『待てやお前等。』

数十分で何回やってんだこいつ等は。あ、50回か。

侵二「あ、主上。終わっただんですか？」

オルゴイ「・・・久しぶりだな。」

『・・・まあいいか。久しぶりだな。募る話はあるか分からんが、取り敢えず侵二、図書館行くぞ図書館。』

侵二「え？私もですか？」

『ハハツ、寝言を言っているのかね？速く来やがれ。ハリーハリー。』

侵二「了解です。」

オルゴイ「・・・私も行くか。」

『いや、うろついているのか？』

オルゴイ「別に大丈夫だが？それに、最近レミア達と弾幕ごっこで外出しているが。」

隠居生活（大嘘）。あれか、結局隠居生活は飽きるのか。まあオルゴイは部屋で読書より外でロンギヌスが似合うな。

『了解、ま、魔術の話なんだがな。』

オルゴイ「・・・ふむ、あの召喚魔法も原理はあったのか。」

『当たり前だろ。あるに決まってるんだろ。』

一応原理はある。原理やら方式やら数えてたら一億超えて面倒になって数えるの辞めたが。ダンダリオンは分からん。何だあれ。↑
作った本人

美鈴「私も少し気になりますね。」

『んじゃ、さっさと行くか。咲夜、悪いが案内頼む。』

咲夜「畏まりました。」

あ、魔法使うの10年ぶり以上だ。・・・まあ、大丈夫か。

いや大丈夫じゃねえや。大問題だ。

次回へ続く

第六十八話 魔道

sideフラン

「お兄様遅いー!」

つまんない。お兄様はお父様とお話したり、侵二お兄様もあんまり遊びに来ないし。

レミリア「仕方ないわよフラン。お兄様は忙しいんだから。」

「むー。」

あーあ、たまには遊びたいなー。

魔理沙「じゃあ、私と弾幕ごっこでもするか?」

「うーん、そうしよっかな?」

『・・・ウルトラソウル!!ハイ!』

変な声を上げて、炎を纏ったお兄様が来た。

「お兄様ー!」

『よっ。来たぜ。』

侵二「・・・主上、一々演出がいるんですか?要りませんよね?」

『いや、気分だ気分。これでも我慢してるんだぜ?・・・よし、魔理沙、魔法の説明するわ。フラン達も聞くか?』

魔理沙「あ、ちよつと待ってくれ。パチュリー呼んでくるぜ！」

私は魔法は分かんないけれど、お兄様は見せながら教えてくれるから好きだ。

「うん！見る!!」

『よし、レミリアはどうする?』

レミリア「私も見る！」

『よし、んじゃ始めますか。』

side out

side 龍一

いやー、良かった良かった。ちゃんと使えた。まさか爆発オチかと思っただが案外行けた。チツ

『・・・さて、説明準備するか。』

俺は取り敢えず魔方陣を書く。この魔方陣は魔法使いが中心に立つと相性のいい魔法の位置が光る。俺が立つと全部光るので正常だ。

魔理沙「龍一さん！連れてきたぜ！」

『お、来たか。初めまして。シユナイダー・スカーレットだ。・・・
というのは偽名で、神矢龍一だ。よろしく。』

パチュリィ「は、初めまして。パチュリィ・ノーレッジです。」

『あ、軽くていいぜ？緊張されるの苦手なんだよなあ……』

うん、緊張してるが……何でだ？

小悪魔「初めまして。小悪魔です。」

『おう、よろしく。よし、じゃあ始める。……まず、この世界の魔法の属性は幾つあるんだ？』

パチュリィ「月、火、水、木、金、土、日の7種類よ。」

『サンキュ。だが、俺は何でか知らんが違う。8種類ある。』

魔理沙「は!?聞いたことないぜ!？」

『だろうな。俺の魔法は1〜8型に別れる。1は炎、2は水、3は光、4は雷、5は風、6が音、7が力、8が命、生命の魔法に入る。』

パチュリィ「……炎や水、音や風も分かるけれど、力、命は知らないわ。」

だろうな。ベクトルを捻じ曲げる魔法なんて俺しか使えないからな。

『うん、説明しよう。まず7から。こいつは、殴った衝撃を飛ばす、捻じ曲げるなどの事が出来る。……例えば、ここに鉄骨がある。これは重力で下に落ちるが、魔法を使用すると。』

鉄骨のベクトルを変えて上に持ち上げる。そのまま捻じ曲げる。

『・・・と、まあこんな感じだ。』

パチュリー「そんな事が出来るの!？」

いやいや、基礎ですぜ。↑あくまでもコイツ基準

『覚えれば出来る。俺は魔法で飛ぶときはこれを使う。』

シユナイダー「じゃ普通に飛べませぬ。

魔理沙「じゃあ、8つて何なんだぜ?」

『主に命・・・例えば、植物の成長を進めたり、傷を速く治したり、精神を壊したりする魔法かな?』

俺の得意魔法だ。

レミリア「最後おかしくない?」

『いや?壊せるよ?幻夜を想像してみろ。アイツと同じだ。』

一同「あー。」

納得してくれたか。正確に言うと奴の下位互換である。

『・・・ちなみにだが、この魔法は合わせられる。』

魔理沙「そんな事出来るのか!？」

『出来る・・・つてか、聞いてると日と月の魔法が複合に聞こえるぞ

？』

おおよそだが3と7か、3と8じゃなからうか。

魔理沙「へえー！」

パチュリー「・・・そこまで分かる貴方が凄いわ。」

『あんま買ひ被るなよ？俺だつて普通の人レベルから始まつたしな。努力の結果だ。』↑百億年以上前の話

侵二も多分そうだ。自分から言わないが、よつぽどの怨念か意思がないとここまで強くならない。・・・まあ、侵二の場合明らかに前者だな。薙刀の色がおかしい。妖怪の運命か、それとも・・・

侵二「では、複合とはどんなものですか？」

・・・やーっぱ侵二の奴、触れられたくねえな。まあ触れないが。

『・・・うーん、あ、大閃光（デストロクシオン）とかだな。』

咲夜「それはどんな魔法なんですか？」

よし、真顔で言つてやろう。

『火山噴火レベル。ここで撃つと紅魔館吹っ飛ぶ。』

オルゴイ「帰れ。」

『速えよ。撃たねえから。てか幻想郷じゃ禁じ手だから。てか侵二の雷の方がおかしいから。』

小悪魔とか美鈴顔青いじゃねえか。撃たねえから。．．．多分、いや、きつと。

ちなみに言うのと、侵二の本気の黒電磁砲（西行妖に撃ったアレ）はこの二倍の火力を誇る。．．．そら西行妖吹っ飛ばわ。一ミリだが可哀想に思う。壊夢君の本気の頭突きは更に二倍。風魔の本気光速ギロチンは黒稲妻レベル、幻夜の本気の最高火力（予測）も黒稲妻レベルだ。．．．アカン、火力インフレ祭りや。龍華、お兄ちゃん死にそう。龍源、この世界絶対違う。ここ魔境や。

フラン「何だ、侵二お兄様よりはちよつと低いんだ。」

待てい、ヤバい発言が聞こえたぞ。

『．．．おい、侵二、何吹き込んだ。』

侵二「いやー、ちよつと、ね．．．？」

オルゴイ「．．．すまん、侵二と弾幕ごっこをしてな。その時、私のロンギヌスと侵二の雷が衝突s『．．．もういい』．．．そうか。」

よく分かった。俺達の火力を別にして見てるわけだ。珍しく良いことしやがるじゃねえか？

侵二「さて、そろそろ私は帰りますね。」

フラン「えー？」

オルゴイ「もう帰るのか？」

侵二「じゃあもうちよつと居ますか。」

すつごい日常的な会話。このままだと良いな↑フラグ成立

『なんだよそ・・・!!侵二い!』

侵二「!!了解!紅魔館から8時方向の空中に巨大な物体出現!二分後結界をぶち抜いて激突します!!被害想定!幻想郷半壊!」

阿吽の呼吸!てかそんな暇ねえ!フラグ回収しましたあ!

『悪い!オルゴイ!時間ねえ!紅魔館に結界張れ!幻夜あ!』

幻夜「なんだよ・・・っ!!了解!人里全員避難させりやあ良いな!」

『ああ!行き場所は俺の家の地下!良いな!』

幻夜「へいよ!・・・聞いたかためえら!死にたくない奴は速く逃げろ!付いてこい!」

風魔「主上!妖怪の山の全員は避難させた!!」

早いが助かる!

『よし!次!壊夢!アレしてきたか?』

壊夢「応!地底の入り口塞いできたぜよ!!無論許可は取ったぜよ!」

『おし!風魔!今から言うポイントに上昇気流起こせ!!』

風魔「分かった!!」

『壊夢！面倒だろうがポイント真下の地盤緩めとけ!!じゃねえと爆発オチだぞ!』

誰も期待してねえだろうしな!

壊夢「了解ぜよ!」

『取り敢えず現場に行く!悪いがレミア達!今回はお開きだ!絶対に外に出るな?』

紫「龍一!大変よ!」

『分かってらい!スキマ開け!幻想郷の住民を俺の家に入れろ!幻夜がまとめてるはずだ!取り敢えず四次元につないである!』

紫「……!ありがとう!」

『構わん!俺等は現場に行く!危ないだろうから霊夢も避難させろ!異変のレベルじゃねえ!』

紫「分かったわ!……無茶しないでね?」

『……善処する!じゃあな!』

……最高神+四凶急行中……

『……よし!侵二!結界真つ二つにしろ!修繕が面倒だ!』

侵二「御意!……はあっ!」

結界真つ二つ!!よっしや!

『風魔!』

風魔「承知!...喝!!」

上昇気流起動!...ってあれ鉄の塊じゃねえ!戦艦や!もつとア
カン!

『あれはアカン!幻夜!俺もブアレフオール使う!止めるぞ!』

幻夜「へいへい!奇術【スリーファイリング】!続いて冷氣展開!

『魔装!【ブアレフオール】!』

悪いが間に合わん!エンジンが逝かれてやがるのか!

『侵二!悪いが衝撃を喰え!ついでに壊夢!地盤どうだ!?!』

壊夢「よく分からんぜよ!取り敢えず柔らかくしたぜよ!

『上等!クラッシュしなけりゃ構わん!』

ほぼゆつくりと戦艦が着陸した。この間、僅か二分。疲れた...

『...ふううく。』

取り敢えず、乗員は無事なはずだ。てか、何処からおいでなすった。
見る限りラーカイラムそっくりなんだが。作った覚えねえぞ。もし
や異世界か?

『それはそうとして……この先どうしようか。』

マズイな、考えてねえ。俺の言う台詞じゃねえが。

『……えらいことになったなあ。』

願わくば平和でありますように。……まあ、無理ですよねハイ。

次回へ続く

番外章 く我、二つの世界にて暴走す
第六十九話 突撃

side 龍一

『……えらいことになったなあ。』

鉄の塊が落ちてきたのは置いておいて。(置くな。) 起動しない。エンジンがやられたのか、又は情報取得中か。……俺ならば索敵を行い、状況把握、機体の状態を真っ先に調べるが、それすら出来ない状況なのか？

風魔「……！チツ、あの阿保共が……」

『どうした？』

風魔「……すまない、理性の低い妖怪が未だにうろついているが、どうすればいい？」

『……壊夢と一緒に回収しろ。だが……無理に回収しろ、とは言わない。いいか？』

風魔「……了解、出来る限り避難させる。行くぞ壊夢。」

壊夢「応！すぐ戻るぜよ！」

殺せ、とははつきり言えない。涙目の紫に怒られるからな。……まあ多分アイツら見たら逆らわねえだろうし。杞憂だな。

『ぎーて、お邪魔しまさ痛った！・・・壁？』

痛えよ。足の小指ぶつけただろうが。

『・・・侵二、行けるか？』

侵二「いつものとは違いますから・・・行けるかどうか分かりませんよ？捕食、目の前の壁。」

行けるかどうか、とか言いつつ十二枚全部ですかい。容赦しねえな。

侵二「・・・あー、駄目です。壊せますが一日中かかります。」

壊せるんかい！そこは「・・・くっ、無理です。」とか言う空気だろ！壊せんの!?

『・・・分かった。止めとこうか。何かこっち向いてるしな！』

どう見ても主砲ですね。アリガトウゴザイマスカエツテクダサイ。

『・・・幻夜！主砲逸らせ！注意引いてくれ！』

よく見れば物騒な物が出始めた。・・・ミサイルもいるじゃねえか。よろしい、ならば戦争だ。

『幻夜は主砲を抑えろ！侵二、お前は爆弾らしき物体を喰え！俺は本体をやる！・・・魔装！アシユタロス！ぶっ壊してやらあ！』

・・・はじかれた。硬え！

風魔「待たせたな！」

壊夢「馬鹿は送ってきたぜよ！」

うわ、めつちや清々しい笑顔と返り血。死人が出たでえ。

『よし、上等！「龍一さん！」あ？・・・おい風魔！何で霊夢連れてきてる！』

霊夢「私が行くって言ったのよ！」

『・・・何でさ？』

霊夢「・・・その、ずっと龍一さん達に頼りきりだったからよ！」

『・・・そつくりだな。』

霊夢「何が!？」

『・・・紫にだよ。しゃーねえな！帰るまでが戦争だ！気抜くなよ！』

侵二「・・・主上を折るとは、見上げた根性ですねえ。無茶しないように。」

幻夜「龍一に負けないようにな！」

『馬鹿！油注ぐな！・・・霊夢、何してもいいからよ。死ぬなよ！』

あ・・・ やつべ、ちよつとマジになっちまった。キャラじゃねえんだよな

霊夢「はい！」

．．．ま、やるなら本気でやろうか！その方が楽しいしな!!

『壊夢！バリアー殴り続けろ！形ある物だ！壊せねえ訳がねえ！』

壊夢「．．．応！ゼアアアアアアア!!!」

流石のバリアだ。幻想郷をギリギリ破壊出来ないレベルの壊夢のラッシュを防ぐとはな。

風魔「．．．っ！あの砲塔が喧しい!．．．喝！」

霊夢「えええええええ!!」

一閃、マジか、ビーム切りやがった。

侵二「．．．ならばこっちも!．．．ここだっ！」

『．．．ビーム喰うな!!』

喰いやがった。．．．げっ、博麗第結界きしみ始めた。

『．．．毒を食らわば皿まで！次はテーブルだ!』

もうやけくそ。ぶっ壊してやる。

幻夜「お!．．．マスター！入れたぜ！」

『どっやって入った!』

幻夜「企業秘密ってね！ちよつと荒らしてくるぜ！じゃあな！」

『……了解！ん？粉みたいなのが……！これは青酸カリ！』

侵二「遊ばないで下さい！こんな危機的状況で！」

壊夢「ふんっ！……チツ！再生したぜよ！」

この粒子、バリアの補強用か！みるみるうちにヒビの入ったバリアがさいs……ヒビ!?壊夢ぶつ壊しかけたのかよ！化け物かよ！……ごめん、化け物超えた修羅だったな。

壊夢「ぬえりやああ!!」

出た！壊夢の頭突き！対象に再びダメージが入る！てか衝撃波で飛んできたミサイルが吹っ飛んだ！……ミサイル!?

『……いやー、ハツハツハ……自宅警備システム！起動！』

久々にキレたぜ。ミサイルを森の中で撃つとはいい度胸じゃないか。

『……自宅警備システム！KMY（来た奴間違つてやつちやった☆）スタンバイ！』

単なるキャノン砲だが、何でも撃てる。今回は……

『……装填！乗組員が足の小指ぶつけるようになるミサイル！略してNA（何か足ぶつけた）ミサイル！』

容赦しねえぞ！ファイヤ！

『・・・着弾！一気に畳みかけてやる！』

第二ラウンドと行こうか！

次回へ続く

第七十話 侵食

side 龍一

『やけくそじゃオラア!!』

幻夜「・・・ごめんね〜?」

『いや、情報があるからな! 取り敢えず有人なんだろう!』

結局霊夢はここにいると危険なのでオルゴイに連絡を頼んだ。

幻夜「それは間違いないね!・・・でもさ〜、なーんか変なんだよね〜」

『あ?..』

幻夜「・・・人が少な過ぎるんだよね。後、金属が動いていたように見えたんだよね〜」

『・・・まさか、な。』

ダブルオーのアレじゃなからうか。まあそんな訳ねえか。(FUR AGU)

『・・・取り敢えずだ。最大火力(幻想郷壊れない出力)! 発射準備!』

面倒だが仕方ない。スタミナ? あってないようなもんだろ?

侵二「・・・やれやれ、行きますか！」

壊夢「応！待ってたぜよ！」

風魔「脳筋思考で困る・・・悪くないがな！」

幻夜「はい。待ってたのさ！」

・・・敢えてあの方法でも良いわけだ。ぶっ壊せ！

『魔装！アシユタロス！爆破！』

周りの被害？知るか。どうせ直るしな！

『・・・なんて終わるわけねえよなあ！』

はい、本体無傷でございます。バリアはヒビ入ったが・・・それだけか。

『・・・いてっ！』

幻夜「・・・何それ？新しいオシヤレ？」

『あ？何言って・・・ELSじゃねえか！侵食されるぞ！って遅いか。』

侵二「・・・ちよつと遅いですかね？」

あーあ、侵食されちった。・・・まあ、効かないんですが。

『しばらく付けとくか。剥がせねえし。』

火力バカ程度で四凶とは片腹痛い。察した方もいらつしやるか？こいつ等、神以外じゃ殺せねえんだぜ？状態異常？侵食？効くかあ！！

『幻夜！行け！』

幻夜「ほいさくそおいつ！」

爆破！・・・ぬけぬけと幻夜が帰って来る訳なからうが！取り敢えず爆弾と壊夢の酒と水素を入れさせてきた。幾らELSがいても乗員は魔改造出来まい！水素爆発を喰らえ！酒で昏倒しろ！例え俺が死んでも十分後に爆発する！敵かどうか知るか！売られた喧嘩は買う！買ったらたき売りだ！え？魔法使え？結局は爆弾で何とかなるんだよ！↑極度の変化のなさに発狂中

壊夢「・・・ゼアツ！」↑ELS摩擦で消し炭になる

それにな、武器？そんなのゆとりです。只の・・・

侵二「体が軽い！」

リミッターですよどうしてくれる。止まらねえよ！

風魔「影分身！」

風魔「1000」おお！」「↑ELS何処に付いたらいいか分からず機能停止

侵二「・・・頂きます。」↑ELS捕食

幻夜「・・・言う事聞いてね？」↑ELSハッキング（物理）

『・・・頭痛い。・・・畜生！異変の首謀者！終わったら人間なら俺の頭突き、人外なら壊夢の頭突き喰らわせてやらあ！』

・・・よし、お膳立ては整った。さあ！大芝居をやるるか！幻夜！

幻夜「・・・はい。潰せ☆」

side 幻夜

「・・・チツ、やれやれ。アイツも人使い荒いぜ。」

??? 「〜♪」

まあ、俺のサブもよくやるよなあ。まさか金属に化けさせるとはな。・・・取り敢えずそこで歌ってる奴刺すか。うぜえ。

??? 「誰だ！」

「・・・チツ、コホン。別に名乗るほどの者じゃないよ〜」

あー、イライラする！この性格チンタラしすぎなんだよ！

「・・・でき、龍一に怪我させた（大？）のどう落とし前つけるんじやごらあ！」

やっぱこっちの方が俺だな。スッキリするわ。

??? 「む？今何と言った？」

だから過剰防衛だったの。次聞いてみる。俺は四凶内で一番気が

短いんだ。刺すぞ。

??? 「ちよつと待っている！」

・・・チツ、前面戦争は無理か。

??? 「ちよつと待つとけとの事だ。何やら誤解していたらしいな。」

誤解で済むか。・・・まあいいや。どうせ酒は起爆するんだ。俺も？しか言つてねえしな。

「はい。てかさ、脳死するぐらいの能力かけてるんだけど、何ともないね〜？」

??? 「毎日が脳死するぐらいの生活だからな。」

・・・殺す気失せたわ。まあ、元からそんな事してないけどなあ！
こっちの発言に違和感を感じないようにしてるがな！

??? 「そう言えば貴様、名前は？」

「風見幻夜。君は？」

??? 「私はニムバス・シユターゼンだ。」

異国人か？まあいいや。

幻夜（表） 「戻ってきな〜」

仕方ねえな。主導権握ってるのアイツだしな。

「悪い、ニムバス。そろそろ戻る。」

ニムバス「そうか、済まなかったな。」

「いいよ別に、あ、先に行っておく。・・・これはお返しだ。じゃあな！」

ニムバス「何？ちよつと待っ」

『幻夜！急いで戻れ！喜劇始めるぞ！』

「マジで!?!行く行く！」

side 龍一

『・・・さーて、観客が少ないがいいか。』

ELS放置してたら凄い事になった。頭以外ほぼ侵食された。・・・鏡一でコピー取ったがな！

霊夢「龍一さん！オルゴイさんは人里で「大掃除だ」だそうよ！・・・！龍一さん！」

『・・・そうか、霊夢、人里でオルゴイを手伝え。』

霊夢「でも・・・！」

『死ねば直るからな。行け。』

霊夢「・・・分かったわ。」

そう、それでいい。

bgm Day after day

『・・・やっぱり、人間が強いつてわけか。』

悔いはない。それよりも楽しかったな。

『・・・まあ、最後に一仕事行きますか！』

が、あいにく俺は往生際が悪くてな。この勝負、引き分けにしようか。

『・・・壊夢！』

壊夢「応！」

俺は負けないさ。・・・さて、叫ぼうか！

『愛してるんだあ！君達を！ギャハハハハハ！！』

侵二「・・・何してるんですか？」

『いや、ちよつと遊びをね？』

壊夢「主！行くぜよ！」

『おう！行けえ！！』

・・・さて、仕返しじやオラア！

b g m 盆回し

幻夜の巧妙な(?) 嘘のおかげで相手は油断しきっている!

『よし! バリア剥がれた! . . . 痛いのを喰らわせてやれ!』

壊夢 「御意! ぬえりやあああ!」

核ミサイルを喰らえ!

『これで引き分けじゃあ!!』

爆発四散! この手に限る。 って待てや爆風がここまで来て

『阿呆!! ワンランク上の奴投げやがってええええ!』

壊夢 「悪かったぜよおお!」

風魔 「馬鹿たれがあああ!」

幻夜 「よく飛ぶねえ〜」

侵二 「もう慣れてますよおお!」

その後、爆風でかなりの範囲が更地になり、戦艦内部で酒が爆発したのを記す。

s i d e o u t

のちに彼らはこう語る。

『今度は圧勝してやる。』と。

次回へ続く

第七十一話 和解

side 龍一

??? 「なんかすいません。恩を仇で返すような事してしまつて。」

いやまあ面白かつたし。・・・後で頭突きするし。

侵二「別に大丈夫ですよ?・・・美味しかったですし。」

人様のE L S喰うな!吐き出せ!

侵二「・・・ペツ。」

壊夢「にしても、硬かつたぜよねえ・・・」

??? 「ああ、あれは核百発当てても大丈夫ですよ。」

壊夢「ほーう?」

うん、硬いな。やめろ壊夢!ここでリミッター外すな!地球が割れる!・・・風魔!お前も刀研ぐな!お前がそつちに行くと突つ込みがいなくなる!

風魔「・・・チツ」

そう怒るなよ。どうせ森と地面吹き飛んで・・・アカン、腹立ってきた。落ち着け、クールダウン。

??? 「そう言えば、名乗り忘れていましたね。俺はE L S刹那さんで

す。この戦艦……ネエル級一番艦ネエル・ラー・カイラム改の艦長をしています。」

ほほう、それで見たことが……

『じゃ、俺も軽く……神矢龍一、只の龍神の兄っす。』

刹那さん「龍神の兄!?!」

『なんだ?一般人だと思ったか?』

刹那さん「それはない。」

『あー、で、ここだけの話、一酸化中毒で死んだ。龍神によってここに来た転生者だ。』

刹那さん「俺達を助けてくれたのもその龍神なんですよ。」

あ?……くっそあの野郎!アイツの仕業か!次会ったらぶん殴る!これで刹那への頭突きはチャラだ。……早く龍源来ないかな?

刹那さん「……じゃあ、他の面子の紹介を。」

やっぱ何人かいるのか?……約一名知り合いいるんですがそれは。

???「俺は刹那・OF・ヴィーニングだ。この艦の副艦長だ。」

???「私は闇那・OF・ヴィーニングだ。同じく副艦長だ。一応不老不死だ。」

『一応?』

いやまあ四凶も不老不死説が浮かんできたので突っ込まねえが。

闇那「刹那が死ねば俺も死ぬ。いわば影。」

影ね。絶影やってるからよく分かるな。

??? 「はいはい、退いた退いた！私はマリオン・ウエルチよ。」

あー、EXAMの犠牲者ね。

マリオン「失礼な事言つてない？」

貴様、ニュータイプか！・・・そうでしたね。

マリオン「刹那、一旦龍一ぶつ殺していいかい？」

いやいや、女の子がそんな事言っちゃ駄目よ？

刹那「好きにすれば？」

取り敢えず気づかないスピードで刹那を殴った。よし！気づかれてねえな。(黒笑)

マリオン「オーケー！おいで！死神！」

魔装準備、ベリアル

すぐEXAMになったなあ。あ、風魔ストップ!!

『ああ、すみませんでした(風魔さんに向けて)ハイ。要らん事考え

てました。(幻夜が爆発させようとしてた)ハイ』↑コイツ反省してねえ。結果的にはいいしかマリオンに言っつてない

マリオン「まあ、良いわ。私よりもっと怖い奴がいるからな。」

およ?許されてる。…まあいいや。合理的にぶつ飛ばせると思っただのになー。

侵二がちよろすぎると感じて引いてら。

??? 「あー、うるさいところ悪いんだが、俺はユウ・カジマだ。通信係を務めている。」

よし、次やる時のターゲット一号だな。↑落ち着いていない

ニムバス「よっ、幻夜。俺はニムバス・シユターゼンだ。宜しくな。」

幻夜「ういーっす。」

??? 「私はクロエ・クロニーチエ。独りにしたら、ぶつ殺すからねえ?」

ゲンキダナー

刹那+俺『は、はいいいいいい!!』

やべ、乗っちゃった。全然怖くないな。真面目に震えてる刹那に一日ブチ切れた侵二といさせたら死ぬな。

・・・最高神回想中・・・

侵二「おはようございます。死ね。」

『お、おう、どうした?』

侵二「いえ別に?死にさらせ。」

.....

あの時はヤバい。語尾が全部死ねだった。しかも翼が呻く始末。

??? 「三日月・オーガス。普段はミカでいいよ。」

・・・でだ、知り合いだよなあ!

アリス「龍一、久しぶりね。」

・・・what?もういい、考えるのはやめだ!

『ほい、じゃ、軽くこっちも紹介。』

侵二「八雲侵二です。・・・喰いちぎるぞ?」

幻夜「風見幻夜だよ。・・・脳壊そうか?」

壊夢「神鬼壊夢ぜよ。・・・ぶん殴つていいぜよ?」

風魔「風切風魔だ。・・・八つ裂きにしてやる。」

やめろ貴様等、風魔に至っては冗談じゃないじゃねえか。見ろ、俺にへばりついてる金属が震えてるジャマイカ。

『……ま、まあよろしくな。で、修理する必要があるよな?』

刹那「そうですね。取り敢えずさっきの爆発でほとんど壊れまして、暫くは……」

馬鹿野郎（建前）けしからん、壊すなら全部だ（本音）

『どれくらいだ?』

闇那「大体に週間以上は要るな。それで応急処置だからそれにプラスだな。」

『んじや、暫くは人里に滞在しな。』

妖怪の山の近くなら間違はなく首がなくなる。人里がギリギリ安全だ。

侵二「……主上、金属反応、人里にて、です。」

『……オルゴイ、聞こえるか?』

思念伝達。

オルゴイ「なんだ?」

『やれ。』

オルゴイ「……それなら既に潰しているが?」

『何だって!?!』

クソツ、俺の分は無しか。

『・・・あ、てかこのアクセサリー邪魔なんだが。』

刹那さん「あ、そう言えばなんとかしないとな。ちよい待って。」

・・・何をしているのかね？・・・お？馴染んできた？

刹那さん「二言返事でOKです。」

ふーん、面白いな。後で侵二の胃袋直行だが。

幻夜「僕達には？」

刹那さん「なんか嫌がってますよ。殺されたとか言ってますし。」

幻夜「へー。・・・おい、殺されなくなったら来い。来ねえと・・・！」

急いで武器に入った。

幻夜「・・・まあいいか。ありがとう」

『じゃ、人里に行くか。』

・・・戦艦十団体移動中・・・

『さーて、・・・うわあ。』

うん、予想はしていたが。・・・そこには

オルゴイ「これで終わりだな。」

義炎「龍一殿！遅いですぞ！」

風穴空いた戦艦二隻と、竹の生えた金属の山が並んでいた。

・・・まあ、これで人里の被害もおあいこつて事だな！

次回へ続く

第七十二話 後片付け

side 龍一

『あー、うん、なんかすまぬ。』

いやー、おあいことか言ったじゃない？よく見ると動力部ぶち抜いてやがるし、ELISも竹の養分にされかけなんだわ。

『……義炎、悪いがああ竹戻してくれ。』

義炎「？分かりましたぞ。」

義炎もおかしかった。何だ、【竹を司る程度の能力】って。地味に聞こえるが反則能力じゃねえか。

風魔「……ふむ、見事だな。」

いや、まあ、風魔の機嫌は直ったけどよ？刹那達見ろよ、目が点じゃねえか。

幻夜「これが盆栽か〜」

違う！絶対に違う！

『……修理期間は？』

闇那「……一ヶ月増しだ馬鹿野郎！」

！
デスヨネー。……しかし！あくまでもそちらでの話！壊夢！出動

壊夢 「応！主！ダンダリオン借りるぜよ！」

『いや、取り敢えず地底だな？接続！』

壊夢 「・・・おい！野郎共！仕事ぜよ！」

鬼達 「へい！兄貴！」

なにこれ。

侵二 「主上、どうしますか？住民出します？」

『あ、悪いが頼む。』

侵二 「了解です。」

風魔 「・・・さて、すつきりしたから私も手伝おう。」

『いやほんと助かったぜ、義炎、オルゴイ。』

オルゴイ 「まあ、古くからの付き合いだ。この程度何てことない。」

義炎 「水臭いですぞ？当然ではないですか。」

しかしまあ、人里の被害はクレーターのみである。よくやるぜ。

『まあやりすぎなんだけどな？じゃ、責任取って人里の二隻はこっちが全部直す。』

刹那 「いいのか？」

『気にしなさんな。この程度屁でもねえさ。』

なんせ地底の建築物を全て一夜で作り上げた大工組織の棟梁がいるんだからな。

壊夢 「野郎共！この戦艦の修理が仕事ぜよ！．．．刹那さんだつたぜよか？やっていいぜよか？」

刹那さん 「あ、はい、お願いします。」

壊夢 「行け！仕事開始ぜよ！」

もはや解体作業かと聞かれんばかりのスピードで徐々に直って行く。材料出してるのは俺だが。てか壊夢、一々材料を丸太で撃ち飛ばすな。丸太がブームか。

鬼1 「兄貴！エンジンどうしやすか？」

『あ、それは俺が行く。．．．鏡一変化。エンジン修正！』

エンジン程度なら直せる。↑未だ残るチート能力

鬼2 「兄貴！この材料でかすぎやすぜ！」

風魔 「私に任せろ。．．．喝！」

真つ二つに。シールドなかったらこうなってたのか．．．ある方が良かったな。なかったら対象年齢がグンと上がる。流血沙汰だぜ。
↑今更

鬼3 「兄貴！もうすぐですぜ！」

・・・オイコラ速すぎだろ！何だその組織！確かに鉄骨やらが飛び交ってたがどうなんだよこの速度！

壊夢 「阿呆う！遅いぜよ！さっさと仕上げるぜよ！」

遅いのかよ！とんだイカれた野郎共だぜ！

鬼達 「へい！」

壊夢 「よし！それが後二ミリぜよ！」

恐ろしいね（小並感）流石D a i Eメンバー。怖いわ！

闇那 「どうだ？・・・は？速すぎるだろ！」

そうなるよな。でもこれがこっちの普通です。諦めたまえ。

壊夢 「最後！行くぜよ！」

そう言いながら戦艦をぶん殴る。・・・おい、ましな耐久試験はなかったのか？

壊夢 「・・・よし！完璧ぜよ！」

刹那さん 「どうなってるんです？」

『聞かないでくれ。』

一説によると風魔も特殊部隊所持とかで、その中に文もいるらし

い。風魔壞夢が味方で良かった。敵に回すとミンチ確定である。

侵二「・・・まあ、取り敢えずこの二隻はOKです。・・・後主上、速くクレーター直しましょう。紫殿が倒れます。」

『やべっ！侵二！後頼んだ！俺ちよっど行ってくる！』

侵二「了解です。」

完全に忘れてた。ついでに森も直してこねえと！

side 侵二

「・・・さて、と。この度は申し訳ございませんでした。」

刹那「いやいや！顔を上げてくれよ！」

今回は明らかにこちらのミスですから・・・

幻夜「何重い事やってんのさ。ねえ、ニムバス？」

ニムバス「そうだな。こちらも気にしていないだろうか？刹那。」

刹那「・・・ああ、侵二さん、こっちも悪かったんだ。だから顔を上げてくれよ？」

侵二「分かりました。では私は侵二さんではなく、侵二、とお呼び下さい。・・・後幻夜、少しは自重しなさい。」

幻夜「やだね〜」

「はぁ・・・」

まったく・・・コイツはいつもいつもこの調子ですか。

『イヤツフウ！たっだいまー！』

「あ、どうでしたか？」

『直ったぜ！森も地面も以前通りだ！』

刹那「え・・・？速すぎじゃ・・・」

「あ、気にすると負けですよ？私達のルールに【後片付けができる範囲で暴れる事】っていうルールがあるんですよ。暴れるために皆、片付けの技術は負けませんか？」

刹那「あー、もう突っ込まない。」

それで正解ですね。気にしたら負けですよ。

『・・・で、後はその戦艦だけが・・・おい、壊夢！見積もりはど
うだ!？』

壊夢「そうぜよねえ・・・内部の修復は勝手に始まつてるみたいぜ
よから、後は外部だけぜよ。が・・・かなり仕組みが厄介ぜよ。」

刹那「そりゃ、自慢の艦だからな。」

壊夢「・・・せいぜい三日間ぜよかねえ？」

刹那+閻那「・・・は？」

『三日か・・・旧地獄の修繕以来の長時間だな。』

「かなりかかりますね・・・」

壊夢「・・・まあ、仕方ないぜよ。」

闇那「・・・ハハハ、冗談だろ？」

『いや、行けると思うぜ？壊夢は素材さえあれば何でも作れるからな。』

羨ましいですね。私はこれといった特技がないですからね・・・↑
お前が言うな。

風魔「・・・だからだな、そこで刀を振るんじゃない。いいか？こ
うだ。」

三日月「こうか？」

風魔「そうだ。後は振る速度を極限まで・・・」

『風魔さん？その剣術増やさないでくれますか？誰が機械に乗ってそ
れ振るの？てか三日月も出来るの？ホントやめて？鞘から刀出さず
に切るのをおかしいだろ？』

風魔「・・・極限まで隙を減らした振り方だ。別に悪くないだろう
？それに、三日月はすぐに習得したぞ？」

三日月「よし、風魔、ありがとう。」

風魔「気にするな。その程度なら何時でも教えられる。．．．妖夢が覚えられないのは何故だろうか。」

『いや、普通出来ないから。俺は出来るけど普通は出来ないから。』

「え？私も出来ますが．．．」

『黙ってる。てめえも論外だ。』

．．．ううむ、不本意です。

風魔「うん？侵二、羽、増えてないか？」

「え？．．．あ、二枚増えていますね。」

．．．もうあれは捨てたはずなんですがね。

『．．．「二枚増えていますね」じゃねえだろ！これ以上魔境に行くんじゃねえ！』

「．．．まあ、いいじゃないですか。」

『あー、もう増やすなよ？』

自重します。

次回へ続く

第七十三話 俺達の冒険はこれから（ry

side鏡一

どこの建築業者達によって、全てが元に戻った。オイコラ速すぎるわ。

壊夢「知らんぜよ。」

いや、まあ、片付けは大事だけどな？・・・こうなるとお前等は全部ぶっ壊すだろうが。

侵二「主上、先程はすみませんでした・・・」

『いや、別にいいぜ？』

侵二の奴、ELS喰わせると言い始め、逃げようとしたELSに俺は攫われた。・・・というのが一時間前。これを何処から聞いたか（絶対に幻夜）紫がブチ切れ、戦艦をぶっ壊そうとしたのが数分前。ちなみに迎撃された。・・・ったく、無茶するなよ。

紫「龍一！大丈夫なの？」

『大丈夫大丈夫。お前は怪我がねえのか？』

紫「う、うん・・・」

『なら休んでろ。・・・刹那さん、いや、せっさん、刹那と闇那は博麗神社だったか？』

刹那さん「ああ、そうだと思うが?」

『じゃ、俺等も行くこうぜ?』

風魔「私はもう少し三日月を鍛える。」

三日月「よろしくな、風魔。」

ちなみに言うとE.L.Sは風魔と共生出来なかった。理由?速すぎるんだと。遂に地球外生命体すらも奴を止められんか。風魔自身も「・・・己の刀のみで十分だ。」だと。おい、本当に侍じゃないだろうな?まあ、壊夢も共生できるようなやわな体じゃないので出来ませんでしたとき。幻夜は・・・人格3の兄貴肌状態でのみ使えるそうだ。・・・今は、な?

刹那さん「そーいや龍一、酒を持ってきていたんだが、飲んでみるか?」

侵二「私が飲んで良いですか?」

『ほいよ。』

侵二「頂きます。・・・っ!」

倒れた。そりやまあ原液ですしな。

侵二「・・・つと、いいですね。かなり美味しいです。」

うん、しれつと二秒で立ち上がるな。

侵二「・・・ところで、名前は?」

刹那さん「【絶滅】・・・だったかな？」

おっと、これは壊夢といい勝負だ。アイツは今、【羅刹】とやらを作っているらしい。

度数？・・・400%ぐらいじゃねえの。もう知らねえぞ。

『さて、じゃあ、行きますか。博麗神社に。』

・・・最高神＋お客様＋捕食化け物移動中・・・

『よし、霊夢？いるか？』

爆音で帰ってきた。ついでに博麗神社消し飛んできた。

『・・・ハツハツハ、ジョン、これは何の冗談だい？』

侵二「いやあ、私も知らないですね。ボブ。」

刹那さん「・・・二人共大丈夫か？」

おっと、現実逃避をしてしまった。神社がぶっ壊れたのは・・・これで五回目だな。(四凶が一回ずつ破壊したらしい。)

『大丈夫大丈夫。取り敢えず刹那と閻那の二人ぶん殴っていいか？拒否権は無しな。』

侵二「私は霊夢と魔理沙に説教ですかね？」

『よし、左から背後に回れ。お前が先な。』

侵二「了解。」

刹那さん「すまない。」

いや、合理的に殴れるんでOKです。

侵二「……二人共く……何してるんですか？」

魔理沙「ひっ！」

霊夢「……し、侵二、さん？」

この隙に刹那の背後に回る。

侵二「ちよつとお話しましょうか。後、刹那殿、闇那殿、……後ろ、見ちゃ駄目ですからね？」

刹那+闇那「え？……あ。」

『やあ！……取り敢えず吹っ飛ば！』

取り敢えず一発ぶん殴った。……いやー、スッキリした。

刹那「痛って！」

幾らお客様でも暴れられると……ねえ？無事に帰れるのは保証しないぜ？

侵二「……何回目ですか？そろそろ怒りますよ？」

霊夢「い、ごめんなさい！」

魔理沙「……き、気をつけるぜ。」

侵二「……いいでしょう。次はちやんとしまししょうね？」

怖っ！侵二さん怖っ。

『二人共、幾ら名前を呼び捨てにされたって神社壊すんじゃねえ。後幻夜！混乱を広げようとするな！見えてんぞ！』

幻夜「ちえっ。じゃあね〜」

『逃すか！』

【絶滅】を投げつける。

幻夜「うぐっ。……」

沈黙。見事に口に入って飲んだな。ざまあ。

幻夜「……っと、ちよつと濃すぎかな〜」

あ、倒れた。

『……で、霊夢、向こうじゃ何もなかったな？（博麗神社を除く）』

霊夢「え、ええ。もめ事もなかったわよ。」

『よし、上等。』

刹那さん「そーいや刹那、あれ言ったのか？」

刹那「あ、まだだな。」

刹那さん「じゃ、俺が言う。」

『ん？何じやらほい。』

刹那さん「鏡……俺達の世界に行ってみないか？」

・・・Sorry, wait please.

『はあああああああ!?!』

・・・いや、同じ事言ったの誰だよ。

次回へ続く

第七十四話 温度差

side 龍一

・・・いやまあどうしようか。誘われたのは良しとしてだ。向こうの世界で必要になるISとやらのコアを貰った。

・・・そこまでは良いんだ。だがな？侵二、風魔、壊夢、幻夜、てめえらは駄目だ。

幻夜、てめえはガンダムデスサイズヘル（EW）だよな？如何にも分身しそうなんでやめてくれ。

壊夢、既にマスターガンダムの時点で駄目だが、格闘術全て対応ってなんですか？俺に過労死させようとしたのか？

風魔、ガンダムエクシアは千歩譲って許そう。・・・だが、常にトランザムってなんだよ。しかもまだ加速できると、おお神よ！救いはないのですか!?

侵二、もう何も言わねえぞ。プロヴィデンスガンダムだなそれ。ビーム砲40個ぐらいある奴か。神は死んだっ!・・・あ、ごめん、俺が神だわ。

俺はツダ。と言っても木製だがな。刹那達は笑っていたが。皆様、よく考えてくれ。俺はザガンを持っている。植物を操る。木製のツダ。・・・おかわりいただけだろうk・・・おわかりいただけただろうか。更に鏡一的能力で金属を展開する事も出来る。・・・これ、改造すれば相当な化け物になるぞ。・・・ああ、白髪が増える・・・あ、もう全部白髪だった。

で、戦略兵器のことについて霊夢が問い詰めようとすると・・・

刹那さん「この辺り見てくるから後よろしくー!（逃げるんだよお!）」

うん、逃げたな。勝手に遊んでくれ。パト○ツシユ、俺はもう疲れたぜ……

霊夢「刹那さん？あの二人が行きそうな所を教えて貰えるかしら？」

刹那「湖か山だな。」

山はねえな。風魔と特殊部隊が何時でもスタンバイしているからな。流石の戦艦でもエクシアを持った風魔には勝てないだろう。もし逃げられたとしても、確実にバリアをぶっ壊すだろう。よし、やれやれ！……つと、つい本音が。

魔理沙「何で知ってるんだ？」

刹那除く艦隊メンバー「……そりゃあ、俺達もあの馬鹿と闇をぶっ殺したいからなあ！」

刹那「いつてらー。」

霊夢「私達も行きましょー！」

フラン「お兄様、ちよつと狂気借りていい？」

うぬぬ……まあいいや。

『ほい、無理すんなよ？』

フラン「はーい！行ってきまーす！」

後せつさん、明らかに狂気の質が変わってるんだが。絶対にELSのせいだな。オイコラ、またMKY起動させて、頭上にたらいが降ってくるミサイル、AO（安定したオチ）でも撃ってやろうか。碌なミサイルがない？うるせえ。120ミリ徹甲弾ぶっ放すぞ。．．．別に頭上からマグロが落ちてくるミサイル、MS（マグロ、撮影開始）でもいいが？

侵二「そう言えば主上、戦略兵器どうしますか？」

忘れてたな。うーむ、．．．あ、あれで行ける！

『時間停止魔法、発動。』

そして時は止まる。よし、戦略兵器は取り敢えず俺の家の部屋、一つ空けてぶち込んどくか。ついでに、侵二に喰わせてみたが、「核は不味い。」だと。じゃあ他はいいのかよ。後侵二、しれつと動いてんじやねえ。ついでに幻夜、壊夢、風魔。貴様等も動くな。．．．あ、風魔、その二人はぶん殴れ。

侵二「．．．ご馳走様でした。これで最後でしたね。」

『よし、解除。』

そして時は動き出す。．．．あ、ごめん咲夜、パクリだわ。

風魔「主上、取り敢えず殴った。」

『よし、俺等の仕事は終わり。．．．後は若いのに任せようぜ。』

丸投げとも言うがな!!

侵二「……そうですね。じゃ、年長者はどうしますか？」

『……取り敢えず、片付けをしながら向こうの世界に行くメンバーを考えるか。』

侵二「私は……どうしましょうかね。」

『……悪いがな。一つ打算があるんだが、聞くか？』

侵二「……なんですか？」

『俺達全員で向こうに行く。すると……俺達を恐れている月はどうなる？』

侵二「……成程。つまり、遊びに行くついでに月を攻撃しよう。」

『そう。俺達は遊びに行ける。幻想郷の問題は減る。』

これぞ正にウインウインじゃないか。

侵二「……乗った!!」

よし来た。ついでに風魔達には許可を取っている。侵二が乗るか不安だったんだよなあ……

『よし、じゃ、全員で突撃訪問って事で……後向こうでは主上呼びは無しな。鏡一と呼べ。OK?』

侵二「了解。鏡一。」

『んじゃ、待ちますか。』

この後、半日間追いかけてつこが続いた上、せっさんが戦略兵器をばら撒いていたらしく、いつものオチの後、霊夢達がピチユリ、朝日を迎えた。・・・新しい朝が来た。なんちゆう朝だ。

第七十五話 どんでん返し

side 鏡一

どうしてこうなった。

・・・ついてこれない？よし、一から雑に説明しよう。

あれは今から36万・・・いや、数分前か。突如人里に理性のない妖怪（侵二の獲物）が大量に来了。勿論迎撃（殺戮）に向かい、安定して殺り・・・迎撃出来た。そこまでは良いんだ。勿論野郎共全員と刹那達で殺した。・・・俺以外のいつものメンバーがISに乗って。

そう、野郎共は乗り回しやがったのだ。人里で。

更にだ。そこで倒れていた奴がいた。幸い怪我がないのか普通に話せた。・・・数千年前に会ったような奴なのだが。

で、今。

『・・・すまん、会ったことないか？』

??? 「あります！覚えていますか!?あの都の元門番です!!」

ハッハッハ、ポール、面白いジョークを言うもんだね。・・・マジか。

『いや、まあいいや。・・・何の用だ？ただ事じゃないだろう？』

門番「・・・お願いします！月が謎の生物によって壊滅状態です！

どうか、助けて頂けないでしょうか!!・・・このままでは月が絶滅します!」

刹那達「ハアアアア!?」

『・・・続けたまえ。』

門番「はい・・・」

どうやら、謎の緑色の触手が地面から生えて、月を殺戮のステージにしているらしい。・・・途中、触手や生物と聞いて侵二の翼が吼えたのは言うまでもない。やめろ馬鹿野郎。

・・・で、精鋭部隊のみが残ったが、孤立状態なのだ。

『はあ・・・めんどくせえなあ。』

どうせ俺の『やれ』で全部殺せるんだ。不死身だろうが知るか。生憎だが・・・神喰いと神斬りと神崩しと神狂わせがあるんだ。しかも幻想郷の外、つまり本気でねじ伏せられる。能力無効?それすら喰らい、壊し、斬り、欺く、そして殺す。・・・やっぱ面倒じゃねえや。俺は行くぞ。こんな合法的に暴られるチャンスもう二度とねえぞ。

『・・・前言撤回!行くぞてめえら!』

四凶「了解!」

万が一失敗して月が壊れても、何故かここ最近著しく妖力と何故か出現した魔力が増え、裏人格がしょっちゅう出だした幻夜に過去、未来、歴史。全てを欺き、何もなかった事にしてもらおう。・・・相変わらず幻夜は謎が多い。まあ侵二もどっこいどっこいだが。・・・ち

なみにこいつらは酸素を必要としない。もはや生物ではないのか。
あ、俺も要らないです。

『じゃ、刹那達！いきなりで悪いが行くか!!』

刹那さん「了解した！刹那！闇那！お前等！行くぞ！鏡一達も乗っ
てくれ！」

あ、乗らせてもらえるのか。別に飛んで行けるのだが。（化け物検
定初段、月まで飛んで行ける）

『なんだそうか。・・・てつきり飛んで行くかと思っただぜ。・・・よ
し！乗らせてもらう。すまん。』

刹那「待て、飛んで行くってなんだ。」

『・・・普通だろ?』

刹那達「普通じゃねえ!!」

うむ、やはりそうか。

次回へ続く

第七十六話 軸ずらし

side 鏡一

大変、月がピンチだ！よっしや滅ぼさねえと！（便乗）・・・とかな
ると思った？残念！俺達の世界はノーダメージだ！（舌打ち）

幻夜「あー、疲れた〜」

原理はこうだ。幻夜が世界線欺いて歪ませ、こちらの世界に被害が
なかったことにした。

・・・すっげえ無茶苦茶だな。

てなわけで、これから月で会うのは別世界の人間。例えるなら、依
姫と会っても他人の依姫。という感じである。・・・代償？ねえよそ
んなもん。幻夜だから、出来た事。

刹那さん「無茶苦茶だな。」

機械性能が無茶苦茶なそちらに言われるとは不本意だ。

『・・・ま、幻夜だからな。』

幻想郷トップクラスの奇術師を嘗めるな。いざとなれば別世界と
繋ぐ、別れる、法則を書き換えるなどなど、大体出来る。すげえ。

幻夜「かつてこつちの世界を一から作った神様には言われたくない
ね〜？」

H A H H A H A、黙れ。

刹那「着いたぞ。ここが俺達の世界だ。」

うん、普通だな。もつとジエネシスとか浮いてるのかと

刹那さん「衛星軌道上はカオスな事になっていきますが。」

思って・・・ジエネシスじゃねえか！ジエネシスじゃねえか！（大
事な事なので二回言いました）

『へえ・・・』

落ち着いているように見えるが、滅茶苦茶テンション上がってます
る。

『すげえ物作ったなあ・・・あ、なんか見えた。』

ユウ「レーダーに反応！数、およそ20億と推定！」

わあい、多過ぎるわボケ。どないせえっちゅうんじゃ。

『おいおい、？だろ？』

刹那「とにかく、迎撃するしかないか。ユウ達に艦は任せた。鏡一
達、すぐ行くぞ！」

オイコラ、巻き込んでくるな。（内心興奮気味）

『・・・よしコラ！行くぞ貴様等！』

四凶「了解！（やだ〜）」

『オイコラ幻夜コラ。』

幻夜「冗談だって。行くよ！」

そういやコイツ、あんまり言葉の最後、伸びなくなつたな。それに
乗じて裏もしょっちゅう出てるし。なんかあるのかね？

『……まあいいや。鏡一、逝きまーす！』

……しまつたイントネーションミスつた！このままだと行くつもりが逝つてしまう！……わけないか。

『……ここが宇宙ねえ。今まで碌な飛び方してねえからな。』

戦闘機やらダンダリオンやら。まともに宇宙を見たことねえ。

幻夜「ちよつと頭痛いなー」

そりや酸素なしでISに乗って動いてるからだろ。俺も痛え。(四
凶、鏡一揃つて無酸素状態)

『あ、そうそう、未確認物体だが。……せつさん、後ろをご覧くださいませ！』

刹那さん「え？ぎやああああ!!」

綺麗に吹っ飛んだ。腹が痛い。100点満点中満点。

『やっぱELSですかい。……平和だねえ。』

月にわけわからん物があるのは知らん。ぼくもうおうちかえる。

刹那「お、久しぶりだな。ELS。」

刹那の機体に刺さる。うん、そのまま振り回すんじゃない。これ以上白髪増えねえぞ。

刹那「お前ら全部で何体だ？」

ELS「20ミリオンの。」

おかしいな。今だけ鮮明にELSの、しかもわけわかんねえ数字が聞こえた。勿論冗談だよねえ？ポール。

刹那「二十億かい。」

侵二「ジョン、諦めて下さい。これが現実です。」

おのれ西行妖！（確実な冤罪、なんでや西行妖関係ないやろ！）

刹那「取り敢えずISになつてくれないか？誰が誰だか分からん。」

いや、集まれば分かるんかい。・・・おお、徐々に集まってるな。ストライクフリーダムなのは突っ込まんぞ（木製のツダ）

壊夢「多いぜよなあ・・・」

その数、約4・5億体。・・・冗談じゃねえ、鰯投げつけるぞ。（謎の鰯）

ELS「その気になればもっと増やせますよ？」

何故だ。さつきからELLSの声が聞こえるし、言うことがおかしい。……ま、ここが宇宙なんで本気出せば勝てるだろうが。まあやめよう。

刹那「じゃあ、行くぞー！」

『ほいよ。おら、潰しに行くぞ貴様等。』

侵二「……喰っていいんですよねえ！」

壊夢「骨のあるやつはいるぜよかねえ？」

風魔「楽しみだ……心行くまで斬らせてくれ。」

幻夜「……じゃ、行こうか。」

オイコラ幻夜、台詞奪うんじゃねえ。

次回へ続く

第七十七話 真の敵はリミッター

side 鏡一

前回、ぶっ飛ばしてやる！と、意気込んだのだが。・・・本気が出せねえ。

何故か？・・・俺達が一人でも本気を出したら空間が歪む事が分かった。畜生。またかよ。刹那達に支障はないようだが世界がもたねえ。そもそも俺等の世界が異端なだけのように、試しに風魔が本気で（他メンバーで全力で世界の維持）刀を振ったが、アンドロメダ銀河を通り越して、何処かの星を叩き切り、そのままブラックホール破壊しやがった。・・・止めようぜそういうの。つまんねえとか関係なしにあぶねえ。これが壊夢じゃなくて良かった。壊夢で予想を立てたが、確実に銀河系一個壊れることが分かった。二度と宇宙に行くな。

と、言うわけで本気が出せません。仕方ない。刹那達と勝負した妖力、霊力で行くか。

刹那「鏡一達！下がっていてくれ！」

おやまあ、いきなりかい？・・・若いっていいなあ。

『ああ。』

刹那「撃て！ジェネシス！」

ちよつと血の気が多いな。（特大ブーメラン）触手（？）が半分消し飛んでるジャマイカ。

『まあいいか。お前ら！・・・殺れ。』

幻夜「・・・ハイハイ！うらっ！」

触手らしきものを素手で三本引きちぎった。槍使えよ。

壊夢「オラッ！」

おい、殴って穴開けるな。

風魔「・・・」

・・・風魔？触手がギヤリギヤリ言ってますけど？・・・削り取るな！

『・・・侵二は、・・・何でもないか。』

侵二「・・・」

喰ってた。コイツ喰いやがった。

侵二「・・・まあ、そこそこですね・・・」

評価すんなよ。てか美味しいのかよ。

『・・・で、刹那達は・・・』

・・・闇那？刀持って回転するなよ？確かに切れてるが風魔がキレるぞ？

後刹那！絶対にそれどつかの少佐の有名シーンのバズーカ砲だよな！アトミツ○バズーカだよな？なんでアトミツク○ズーカ連射出来るの？主人公補正？

『・・・無茶苦茶だな。』

幻夜「動くんじゃない、よつと！」

ゴメン、こつちも無茶苦茶だった。背後に回り込んで槍で抉ってやる。

『・・・しっかし、刹那達慣れてるなあ・・・』

見事見事。俺等も対人戦なら無敵なんだけれどなあ・・・

風魔「・・・遅い。消えろ。」

テメエ、光の速さ越えるな。俺じゃないと見えねえぞ。・・・しれつと闇那殴るな。

『・・・まあ、負けてられねえな。』

俺もツダのシールドピックで触手(?)を抉る、次！

『・・・よつと！』

ザガンを動かし、触手(?)のエネルギーを吸い取る。・・・あ、これデビルガンダムか。ちよつとエネルギー違うからすぐ分かった。わあい再生すんじゃないか。

『あー！めんどくせえ！沈みやがれ！』

めんどいので対艦ライフル発射。・・・げつ、本体狙ったが近くの触手で止められた。

『うわ、マジか。』

異常な再生力、ちよつと硬い触手（？）、危ない刹那達。

・・・いやこれ、どないせえつちゆうんじや。

次回へ続く

第七十八話 冗談とフラグ

side 鏡一

『そらよっ！』

触手(?)を木製のヅダで破壊。・・・いやー、もう十分な強度になつたな。

刹那「・・・さて、内部に突入するか。鏡一、行くよ。他の奴らはここで待機、また何かあったら怖いからな。」

何かつてなんだ？幻夜が触手(?)を三本同時に穴開けた奴か？それとも風魔があれだけ硬かったのにへし切ったアレか？それとも壊夢が素手で引きちぎった奴か？・・・まさか侵二が14枚の翼で14本の触手(?)を喰った奴か？それとも・・・

・・・やめよう。あつた事が多すぎる。

『はいよ。じゃ、逝ってくる。』↑諦めた

侵二「行ってらっしゃいませ。」

壊夢「了解ぜよ。」

風魔「了解した。」

幻夜1「逝ってらっしゃーい。」

幻夜3「へいへい、逝ってきな。」

幻夜2 「行つて来い。・・・あーうぜえ！死ねっ！」

後半適當。つてか最後あいさつの後に触手(?) 殺しに行つてんだが。

刹那 「出来たぞ！」

『はいはい。』

・・・侵二と風魔の間に妖力が感じられるのは黙っていよう。修業が足りぬぞ。

side out

side 侵二

「・・・行きましたよ。後ばれてましたよ。」

紫 「嘘でしょ!?!」

「・・・ところがどっこい、現実です。・・・これが・・・現実です。」

まあそれは置いておいて、

「・・・それにしてもまあ、よく罫に嵌められましたね?・・・あ、何したかは聞きませんよ。」

紫 「・・・そうね。バツチリよ。」

幻夜1 「・・・やったか？」

ハハハ、あからさま過ぎますよ。フラグじゃないですか。

闇那「あいつ、騙されてキレるとELSと合体して50メートル級のMSへと変貌するぞ?」

・・・いやですねえ、ジヨニー、冗談が上手いですね・・・

幻夜1「そんな事あるわけないよねえ・・・」

はい、二つ目ですね・・・フラグ。

刹那「E E E E E E E E E E E E E E E L U U U U U U U U S U U U U U U U U U!!!」

・・・嫌ですねえ。騒がしい。

紫「どうするのよ!鏡一も中に・・・!」

side out

side 鏡一

『ドアを蹴破る、・・・そのままダーツシュ!!』

紫「鏡一!」

『誰だアイツ騙したの!先生怒らないから出てこい!』

幻夜1・2・3「紫。」

壊夢「紫ぜよ。」

風魔「紫だ。」

侵二「紫殿です。」

紫「ちよつと貴女たち！」

『そうかそうか。・・・紫、後で屋上な。』

「・・・いや、それよりもアレ、どうします?」

『・・・あれはフランの狂気に染まっている。このままだと俺達が危ない。・・・正当防衛って事で。やるか?』

四凶「・・・よつしやああああ!!!」

『まあ、紫は下がってる。これは俺達年長者の仕事、お前にやまだ早い。』

紫「・・・ありがとう。」

『ついでにお前らも逃げるか?』

侵二「冗談!逃げるわけないでしょう!」

壊夢「最後までついて行くぜよ!」

風魔「今更言わせるな。」

幻夜2「止めるわけねえだろお!」

幻夜3 「うるせえ。・・・てなわけで。」

幻夜1 「止める気はないね〜」

『・・・よし！・・・だが、先に言っておく。』

侵二 「私たちも言いたい事があります。」

『・・・てめえらと心中は御免被る!!』

四凶 「・・・こっちの台詞じゃあ!!」

・・・いつも通り。さーて、行きますか!!

次回へ続く

第七十九話 回収

side 鏡一

・・・さーて、後で紫は屋上として・・・どうすんだよこれ。特に幻夜、てめえ、世界三大フラグの「やったか!」使いやがったな。ちなみに後二つは「大丈夫だ。問題ない。」と「もう何も怖くない!」だぞ?間違ってもこんな生きるか死ぬかの場面で使わないように。じゃないと俺等みたいになる。

『・・・つと!』

うわ危な。・・・当たったらどうするんだ!擦り傷が出来るだろうが!

風魔「・・・ふう。」

おい風魔、落ち着いて受け流すんじゃねえ。・・・あそうだ。MSの大体の弱点!

『喰らえ!あるの忘れてて使わなかったシュツルムファウスト!』

直撃・・・したよな?よろけてるだけって何さ。てかよろけながらマシンガン撃つんじゃないが邪魔だ。

・・・てか、マシンガン切り裂く闇那も頑張るなあ。つて、やつぱりパワー負けしてんのか。・・・あー、ソード折れたな。

闇那「うわっ!」

刹那「破壊シテヤル！ハハハハハハハ！」

・・・わあ凄い。発狂してる。・・・取り敢えず、掴まれて月に投げられた闇那に黙祷。願わくば、かの子羊に神の加護があらんことを・・・なんでえ。生きてらあ。(神の発言)

『あーあ、壊夢、止めれる?』

壊夢「・・・(ぶっ壊さないようにするなら)一分だけぜよ!」

『よーし。風魔!取り敢えず攪乱しながら切って・・・るな。OK OK。』

風魔「・・・喝!」

おい、しれつと真つ二つに切るんじやねえ。

『で、侵二はダメコン。取り敢えずこの辺の奴ら全員な。幻夜は・・・暴れてろ。いるだけで相手攪乱出来るわ。』

侵二「了解しました。」

幻夜1「ほいほい。・・・聞いた!?!」

幻夜2「聞いたぜ!」

幻夜3「うるせえつての!・・・聞こえてるぜ!」

『よーし、せつさん!そつちも働けよ?』

せつさん「分かった!・・・お前ら、主砲発射準備!関節をよーく

狙えよ!？」

『よし、……んじゃ、俺も撃ちますかつと!!』

対艦ライフル、五発中三発命中。反動がでかすぎると他二発も当たったから上等か。よし、右肩ショット!……つと。主砲も上手いな。左肩、右手首か。今度自宅兵器にタンホイザーつけようかな？

と、言いつつ十分後。

幻夜2「うらあっ!」

最後の腕破壊……もらったあ!!

『これでトドメだ!! (狂気は) 土に還れオラア!!』

コクピットにヒートホークを突き立てる。……やったか?↑世界三大フラグの一つ

『……よし、取り敢えず終わったか?』

なんだつまんねえ。人がせっかくフラグ建てたのに復活しねえのかよ……つと、お?モニターがついたな。ラウンド2行くか?

刹那「……うーん。な、何があつたんだ?」

『「知らない方がいい。』』

知らぬが仏。雄弁は銀沈黙は金。黙つていよう。

『で、そのデカイのどうにかならんのか?』

刹那「……ああ、これなら時間制限だからね。後5時間かな。」

『……んじや、地球に降りるか。野郎共！撤退！』

再び俺等は乗せてもらい。降り始めた。……大気圏突入、この身一つでやりたかったなー。

『あ、また何か見えた。』

……ここまでくれば暴れますか。後紫、先帰るか屋上か……逃げてんじやねえか。

まあいいか。

次回へ続く

第八十話 空気

side 鏡一

んー、見えた。……って喧嘩中か？（大違い）てか、流石にIS多いな。……一個ぐらい貰うか。

『……って、着水かよ！侵、幻、壊、魔！口閉じてしやがめ！舌噛むなよ！』

四凶「了解！」

……てかひるまない刹那達に脱帽するわ。神界から飛び降りた事しかなかったからな。二回ぐらい。……しかもその内一回地面に激突したからな。

『っておい！刹那！』

行っちゃまった……EXAMやら起動してるし……仕方ない。【影分身】、そして【遁甲】開始。……沈めるなら一機ぐらい貰おう。取り敢えず刹那の影に入る。

刹那「キサマラハミンナシンジャエ!!」

……後で狂気返せよ？……つと、三機一気に破壊ですか。こりゃ貰えねえかもな。

てか強いな……まあ、俺等のいつものステータスを上回るだけあるな。……つと！逃げ出した奴見つけ!!

『もーらいっ!!』

丸ごと影に引きずり込む。有人か無人か知らんが取り敢えず刹那達の敵だとは分かったからな。喧嘩相手(友人)減らされると困るんでね。・・・よし、気付かれてねえな。・・・お、あれも貰った。

逃げ出したISが地面に引きずり込まれる奇妙な状態に陥ったが知らん。・・・これでガンタンク作るか。

刹那「・・・フウ、アラカタ片付イタかな。」

狂気もこつそりと回収。・・・取られると面倒なんでね。・・・あ、急いで戻らねえと!!

・・・影妖怪帰還中・・・

『・・・ふう、あぶねえあぶねえ。』

セーフセーフ。気づかれると色々と聞かれそうなんでね。彼等のような若者は知らなくても良いことだ。・・・はあ、もう100億歳越えか。やだねえ。

侵二「何してたんです?」

『しっ!・・・回収だ回収。言うんじゃねえよ。』

侵二「あー、そう言う事ですか。」

闇那「何か言ったか?」

『いや、何でもないぞ。』

闇那「そうか。．．．そろそろ行くぞ?」

『ほいよ。．．．野郎共、移動するぞ。』

四凶「了解!」

．．．さてと、行くか。

．．．最高神+野郎共+闇那達移動中．．．

刹那「．．．皆、ただいま。」

ゴメン、飛び過ぎてよく分かんない。俺がISパク．．．貰って
から何があったんだ。

『悪いが俺等空気なんだが。』

一夏「ん?誰だこの人達?」

．．．こいつが一夏だったな。．．．ふむ、悪くない目だ。って何
やってんだ俺。

『あー、幻想郷知ってるか?』

一夏「あー、一応弾幕ゲームやってましたから。」

理解が早くて助かる。

『その住人。．．．後ろの四人組もそう．．．おい幻夜!何してる!!』

駄目だ。早速あの野郎ふざけてウインクしたな……この天然ホステスが。

『……ああ、侵二が止めた……あ。』

時、既にお寿司……じゃねえ。遅し。あーあ、天然執事で被害倍増。もう知らねえ。

刹那「……鏡一。」

『ん？…どうした？』

刹那「……今までありがとう。最後に、ガチバトルと行こうぜ？」

……分かってんじゃねえか。……丁度野郎共も聞いてたな。

『……ああ!!いいぜ!!』

さあ、踊ろうか。

次回へ続く

第八十一話 野郎共 別世界でも暴走す①

side 鏡一

刹那「鏡一、準備は良いか？」

『ああ、大丈夫・・・だと思う。』

刹那「で、どうする？」

『弾幕ごっこで大丈夫か？』

刹那「ああ、大丈夫だ。」

『・・・まあ、ハンデはつける。5対5、お前らはISに乗って大丈夫だ。・・・俺等は生身で行く。まああれだと動きにくいからだ。更に、スペルカード以外で能力は使わん。・・・と言っても使わない事が多いからな。スペルカードは侵二が配った奴だ。出る奴が使え。』

刹那「分かった。」

『よし、・・・聞いたな野郎共。向こうは兵器使ってくるからな。・・・てなわけで全員、妖力二割開放。これで兵器にもショックは入る。が、騒符【狂喜乱舞】は使うのを控えろ。・・・逆に言えばそれ以外はじゃんじゃん使え。後！分かってるだろうが人は狙うなよ？風魔、刀は制限しねえが殺すな。殺すと絶縁だ。』

風魔「その辺りの礼節は心得ている。心配無用だ。武士とはそうあるべきであろう？・・・ところで、私の騒符【狂喜乱舞『乱』】も駄目か？」

『あー、お前は良し！攻撃スペルじゃないだろ？』

風魔「ああ、影響を与えるスペルだ。」

聞いた事ねえがそうなんだよなあ・・・

『・・・だが、その代わり凶符【凶星墜ちる】は駄目だな。』

風魔「・・・神ではないから使う必要もないだろう。」

『よし、他の奴らは騒符【狂喜乱舞】は駄目だからな。』

その代わり【黒電磁砲】でもなんでも使いやがれ。勝てばいいんだ勝てば。

ちなみに、戦闘メンバーは俺達五人組対、刹那、闇那、ユウ、クロエ、せっさんだそうだ。・・・別に全員・・・いや、せっかくだし学園全員参加でも良かったんだぜ？

『じゃ、20分後スタート。それまで準備やら作戦やら相談してきてくれや。』

刹那「分かった。・・・後でな！」

『おうよー・・・さて、お前ら、どうするっ？』

侵二「・・・どうするも何も、」

壊夢「どうせいつもの、」

風魔 「ゴリ押ししか、」

幻夜 「頭がないでしょ?」

『・・・よし、お前ら表出る。・・・じゃねえよ。ちゃんと計画はあるぞ?』

侵二 「・・・どんな?」

エリアはこの島全部、広い上に障害物が多い。・・・そこで、敵を見つけ次第、念話で連絡しろ、各個撃破で行く。・・・失敗すりやいつものだ。真正面から叩き潰せ。』

侵二 「了解しました。・・・さーて、じゃあ、私が東を、」

幻夜 「僕は南を、」

壊夢 「俺は北を、」

風魔 「私は西か、これでいいか?」

『・・・ああ、上等!俺は中央に行く。いいな?』

四凶 「了解!!」

『後、やられたら即連絡。俺がその方位に回る。』

侵二 「・・・並大抵の事で被弾するとも?」

『思わん。・・・じゃ、行くか。』

さーて、いっちょ暴れますか!!

次回へ続く

第八十二話 野郎共、別世界でも暴走す②

side 鏡一

bgm AC4 Fall

・・・全員準備完了。後は動くのを待つのみ。悪いが勝たせてもら
うぜ。刹那。

侵二「こちら侵二、異常なしです。」

風魔「こちら風魔、異常なし。」

壊夢「こちら壊夢！異常なしぜよ！」

幻夜「こちら幻夜、異常なしだよ。」

『了解。引き続き哨戒しておけ。見つけ次第報告、一気に叩き潰
せ。』

四凶「了解！」

まあ、しばらく待つだけだが。

side out

side 侵二

「やれやれ・・・全然いませんねえ・・・」

・・・ん？金属の臭い？

「・・・なーんて、言つてたら来ましたねえ・・・」

さて、誰ですかね？・・・まあ、先ずは攻撃ですね！

「はっ！」

刹那「うわっ！・・・げっ！侵二！」

刹那でしたか・・・つと！

闇那「チツ！」

まさか二人とは・・・面倒な。

「まだまだ甘いですねえ。（主上、二機発見、交戦中です）」

闇那「・・・このまま行くぞ！刹那！」

刹那「ああ！」

・・・普通ならここで戦うんでしょうが、生憎我々は化け物なので
ね。

風魔「その意気やよし。しかしだ・・・背後に気を付けろ？」

・・・それ斬つてから言います？

刹那「うわっ！」

闇那「くっ！」

幻夜「次上だよー・・・凍符【フリーズランス】」

鬼畜。いくら戦場かいくぐっているとはいえ対人戦しか彼等はしてないんですよ？

闇那「なんの！」

刹那「そらっ！」

・・・まあ防げてるので脱帽ですが。

壊夢「そらっ！プレゼントぜよ！」

こら壊夢、その辺のコンクリート投げない。

刹那「うわっ！」

刹那「くそっ！」

一部被弾ですかね？・・・まあコンクリートなので大丈夫ですよね？

『そして！超高度からの狙撃に注意!!』

刹那「のわあっ!!」

闇那「どこから撃ってきた!?てか、どこから声がした!？」

さあ、生憎私達にも見えないので・・・本当に何処ですかね？

刹那さん「刹那！闇那！大丈夫か!？」

『……仕留め損ねたか。逃げるぞ!』

いや、本当に何処にいたんですか。

「了解しました。……では、この辺りでドロクさせていただきます。
では、」

……いやー、惜しかったですねえ。

『まあ上出来だろ。このまま削るぞ。』

四凶「了解!」

さて、持ち場に戻りますか。

生憎私は性格が悪いのでね。……今までの分、きっちり返させて
頂きますからね？

side out

side 風魔

奇襲しながら削る勝負か。偶にはこんな勝負も良いものだな。……
さて、他には……いた。クロエとユウだったか?……ふむ、二人
で行動か。……計画的で悪くはない。相手が人間なら、な?残念だ
がこれは我々にとっては遊びだ。……つまり、その程度の勝負な訳
だ。だが、それが面白い。

「主上、見つけた。が、手出しは無用。一人で相手させてくれ。」

『んあ？いいけど被弾するなよ？ダサいぞ？』

．．．さて、どうか。当たるのもそれもまた必然だったと認めねばな。．．．毛頭当たる気は無いがな。

「了解。．．．さて、騒符【狂喜乱舞『乱』】。」

雨が降り、風が吹き、霧が立ち込める。．．．これが私の狂喜乱舞だ。

「さて．．．避けてみる。」

このおかげで音もなく、気配も揺らぎ、相手の動きも鈍らせる。

ユウ「ん？雨．．．？」

「．．．」

．．．今だ。

「残念だ。．．．貰ったな。」

目標、頭部の機械。．．．切り捨て御免。

ユウ「な!?クロエ！伏せろ！」

クロエ「はあ?．．．っ！」

チツ．．．惜しい、気付かれたか。だが見事！

「見事だな。．．しかし、そちらの攻撃は、はたして私に当たるのか？」

ユウ「なんだと!？」

クロエ「言うじゃないの!行くわよ!」

．．しばらく斬り足りなかったからな。．．見せてもらおうか。

side out

side 鏡一

曇天。正にその二文字。

実際、天候に係るスペルは今まではほぼなかった。．．しかし、あいつは作った。

．．風を読み、水を操り、大地を唸らせる。狂喜乱舞『乱』もその災害の一環。故に奴は、天候が悪くなる程、より動きにキレが増す。要約すると、自らで災害を起こし、そのエネルギーで強くなる化け物。

『．．あー、見えねえ。狙撃援護しようと思ったのによ。』

にしては雨、降りすぎだろ。何?洪水でも起こすのか?やめろよお前、誰が片付けると思っただバロー。後、狙ってたの頭部だったろ。反則だ反則。それに斬らせろってなあ、この生物切り裂き魔。いや、八つ裂き魔か。

『．．お、見えた。』

風魔発見。．．うーわ、蹂躪してやがる。クロエもユウもスペル

を使ってるが・・・風魔の奴、ビーム兵器の水に弱い弱点を見出したか。目の前に霧を展開して防御、その霧は雨から・・・そういう事か。ひでえな。・・・と、さっきのせいで刹那達が動き出したな。

『・・・おい、風魔、そろそろ引き上げだ。援軍が来たぞ。』

風魔「了解した。・・・残念だが勝負はお預けだ。さらば！」

悪役じゃねえか。最後まで生き延びて邪魔し続ける悪役じゃねえか。・・・まあ、俺を入れると魔王とその四天王だな。・・・ま、悪くはねえな。

『んー、後喧嘩売ってないはせっさんだけか?・・・やなんだよなあ、絶対戦艦でぶっばだろ。』

流石に能力無しで勝てる気がしない。・・・壊夢なら行けるか。いや、俺のスペルでギリギリか?

幻夜「(こちら幻夜!ちょっとマズイ事になってる!)」

・・・一難去ってまた一難。

『どうした?』

幻夜「(新たな敵を発見。・・・ELSがいるよ。)」

bgm 盆回し

『・・・おい、冗談だろ?』

?だろ・・・ここでELSだと?

幻夜「(・・・冗談じゃないよ。)」

『・・・そうか。・・・全員聞け！幻夜がELSを捕捉した！・・・死ぬ気でかかれ。』

風魔「馬鹿な・・・！了解した。」

侵二「ハハハ、殺s・・・了解。」

壊夢「・・・了解せよ。」

士気がだだ下がり。ま、侵食されたり得物壊れかけたり事件の元凶だったり：俺もELSは苦手だ。まあ半分侵食されたからだ。後侵二、駄目だぞ？

『・・・これ、マズイかもな。』

さて、・・・勝てるかねえ？

次回へ続く

第八十三話 野郎共、別世界でも暴走す③

side 鏡一

ELSだぜ！ふぎけんなよ弾幕全部フルパワーでぶっこむぞゴ
ラア！

『……つたく、おい、てめえら。作戦変更。……見敵必殺！見敵
必殺！見つけ次第遊ばずやれ！……ここで負けるのはやなんぞな。』

侵二「……了解しました。」

風魔「……承知！」

壊夢「応！任せるぜよ！」

幻夜「へいよー、適当にやってるねー」

『こうなりや意地だ。……侵二、二分後に刹那とクロエがその先に
出る。幻夜とスタンバイ。壊夢、風魔、お前らは闇那、ユウ。一分後
に中心付近。俺は東にいるせっさんを殺r……倒す。良いな!?!』

四凶「了解！」

一騎打ちでは互角でも、組織戦では勝てるまい。こちとらこれで一
発喰らえば死ぬ世界を数万年生き延びてんだ。

『……さーて、……狙い撃つぜ!!!』

発射。相棒のスナイパーライフルと二丁拳銃は持参してるんで
な。……よし、威力はほとんどお遊びだが命中！攻撃開始!!

『・・・見つけた!! 覚悟しやがれ!』

せつさん 「なんの!!」

やっぱり戦艦でぶっぱじゃねえかあ!!

『ストップストップ!! くっそが! 当たるだろうが!!』

掠りかけた。・・・いい度胸だこの野郎!! 確実に倒す!!

『・・・乱れ撃つぜ!!』

二丁拳銃乱射。・・・が、案の定全部防がれる・・・と思ったか!
徹甲榴弾だよ!

『爆破!!』

せつさん 「うおわっ!!」

サーベル破壊成功!!

『よっしゃー! このまま・・・出たなELS!!』

せつさん 「すまん! 助かった!」

駄菓子菓子・・・じゃねえ、だがしかし!! こちとら専用スペル作つ
たんだよ!

せつさん 「行くぞ! 滅符【フルバースト】!!」

『とんでもねえ、待ってたんだ。鏡符【三面鏡】!!』

このスペルは何か？攻撃スペルじゃない。

『攻撃を三倍にして跳ね返すだけのスペルだあっ!!』

せっさん「何いつ!？」

『ELS！覚悟しやがれ!』

照射!!

『・・・ハハハハハ!!粉碎！玉碎！大喝采!!』

せっさん「・・・貰った!」

『うおわっふう!』

変な声が出た。あぶねえ。避けてやがったか・・・

『まあこの辺のELSは全滅!!行くぞ!』

せっさん「来い!!」

side out

side 侵二

「・・・その程度ですか?」

幻夜「もうちよっど行くこうかー」

刹那「嘘だろ・・・」

クロエ「・・・っ!!」

・・・まあ、予測していた上に、再び風魔の雨ですからね。地の利、天の利、全てこちらにあります。

幻夜「・・・まあ、僕等にダメージを与えただけでも拍手喝采だけどねー」

「まったくです。・・・将来が楽しみですね。」

まさか弾幕の合間を縫って斬撃とは・・・過小評価してはいませんでした。予想以上の強さでしたね。

刹那「そりやどうも!!連符【艦砲射撃要請】!!」

クロエ「今度こそ!!乱符【飽きることなき野望】!!」

遠距離にいる戦艦からの射撃と連続攻撃ですか・・・

「・・・幻夜?」

幻夜「ほいっ!凍符【フリーズストリングス】、そこまでだよー」

刹那「なっ!」

クロエ「止められた・・・!」

「上出来です。では、黒符【黒電磁砲】。お疲れ様でした。」

では、おやすみなさいませ。

「……ふう。」

幻夜「……ふう〜」

「体が重い……してやられましたね。」

幻夜「……あー、だるーい。」

あの時の斬撃はこれを狙っていたんですか……お見事。これでは謀られたので引き分けですね。

幻夜「引き分けかー。まあ、楽しかったしね〜」

「……後はお願いしますね。風魔、壊夢。」

side out

side 風魔

「はあっ！」

闇那「なんのっ！」

切り込み、弾かれ、突き、薙ぎ払う。……もう百合は続いているか、久しぶりだな。こんな強敵に値する剣客は。

「……フフツ。」

闇那「何笑ってんだよつと!!」

「いや、何、久しぶりに斬り合える者と会ったのでな。．．やはり人間は素晴らしいものだ。．．が、」

闇那「．．あんたもか。．．いいぜ!」

「次で!終わらせる!!」

素晴らしいものだ!!

闇那「うおおおつ!!!」

「．．っ!斬!」

．．疾風刀が折られた。が、一閃は叩き込めた。

闇那「チイツ!まだまだあつ!」

「．．見事!!」

闇那「．．やった．．か。」

まさか、まだ動けたとはな。．．咄嗟に無刀取りで止められたが、斬られたか。

「．．私の勝ち。などとは言えんな。私が今までに会った中で、最強の人間やもしれぬな。．．これから精進してくれ。．．いずれ、私程度なら斬れるだろう。」

「気絶した闇那を担ぎ上げる。．．さて、壊夢、貴様はどうだ?」

side out

side 壊夢

「ぬうんっ!!」

ユウ「くっ!」

全然当たらんぜよ。・・・これがEXAMとやらぜよか・・・

ユウ「攻撃してもダメージ無しとかおかしいだろ!!」

「案外気合で何とかなるもんぜよ!!」

ユウ「なるかあっ!」

「じゃあ、俺は動かんぜよ!動かせばお前の勝ちぜよ!!」

ユウ「・・・面白い!やってやる!」

「それでこそ男つてもんぜよ!」

ユウ「行くぞ!全符【フルシテイメカニックバズーカ】!!」

「ぬうんっ!!」

ユウ「吹き飛ばえッ!」

なかなかやるぜよが・・・

「その程度じゃ一向に効かんぜよ!!」

ユウ「なっ!化け物だろ!!」

「こっちも行くぜよ!・・・ハッ!!」

ユウ「間に合わないっ!・・・ならあっ!!爆符【戦略兵器起動】!!・・・
うわあっ!!!」

直撃ぜよが・・・こっちも駄目ぜよかねえ!!

「この勝負!引き分けぜよ!!」

流星に一步下がっちまったぜよか・・・なかなかやるぜよねえ・・・

ユウ「・・・あれで一步かよ・・・まだまだなのか・・・!」

「俺が動くと言うことは、主がぶっ飛ぶレベルぜよが?」

ユウ「・・・なんだ、あんたが異常なのか。ハハハ。」

「ハハハハハ!・・・ほら、立つぜよ。」

ユウ「すまない。・・・楽しかったなあ。」

「俺もぜよ!・・・さて、侵二と幻夜と風魔も引き分け、主上が残り
ぜよか・・・」

ユウ「・・・あんたの主、おかしくないか?」

「いやいや・・・」

元からいかれてるぜよ！

次回へ続く

第八十四話 野郎共、別世界でも暴走す④

side 鏡一

『どっから沸いてきたお前らあつ!』

ELS再生するのかよ!しかも数増えてんじゃねえか!

『んのやろお!・・・いいだろう。それならこっちにも考えがある。・・・シユナイダー、能力使用、・・・召喚、ELS!』

俺等の世界だと架空の生物(?)だからな!一応召喚範囲に入る!

『これでお互い邪魔者は無し。・・・さあ、闘争を続けようぜ!』

せつさん「望むところだ!」

bgm 「cytus」 r a b p i d | s a n k t i t y

二丁拳銃(弾幕)を撃ちまくる。向こうはビームライフル(殺戮兵器)、・・・滅茶苦茶不利だわ。

『・・・しかも当たたらねえと来た。だめだこりゃ。』

せつさん自体の動きも速い。・・・よし、

『・・・仕方ねえな。どっちかがぶっ倒れるまでタイマンと行くかあ!!』

せつさん「・・・絶対に勝つ!!」

あんまり時間かかるのは苦手なんだがな。．．．そうでもしねえとあのハンデで勝てん。

『まあ、行くぜ！鏡符【ねじれ鏡】。』

せつさん「ん？．．．ゲツ！ビームが歪む！」

『．．．これ使ってる間は遠隔攻撃全部当たらなくなるからな。．．．俺もな！』

このスペル効果が強過ぎるな。．．．いや、これ欠陥品か。修正する．．．別に良いか。

せつさん「．．．じゃあ、接近戦で行くか！」

『．．．やっぱ、こうじゃねえとつまんねえだろ！行くぜ！』

新月を抜き放ち、縦切りをするが．．．案の定防がれる。

せつさん「おつと！」

『．．．やべえな。ここ最近新月使ってねえからなあ．．．グダグダになるな!!』

．．．五時間経過．．．

せつさん「はあつ！」

『なんのっ！』

ブースト全開で突進．．．人にする攻撃じゃねえだろお!?

『やるな！だがな。隙だらけだ!!』

せつさん「そうかな？」

そのままブーストで逃げた・・・!?

『ヒュウ！流石！・・・だが、よく考えると紫をしばらく必要があるんだ。・・・これで最後にするぞ!』

新月を前に構える。・・・突撃！

せつさん「行くぞおっ！」

『来いっ!』

・・・ぶつかり合いながら俺は切りつけ・・・いない!?

せつさん「貫った！」

『後ろか!』

まさかこのタイミングで加速されるとはな！

『・・・っ!んのやろお!』

せつさん「・・・っ!うらあっ！」

斬撃、峰打ちの後・・・

せつさん「ぐふっ・・・強すぎるだろ。」

立っていたのは俺で、

『……よく言うぜ、右眼抉ったくせによ……』

斬られたのは俺だった。

……ここに、二つの世界を巻き込んだ喧嘩が終わった。

……二時間後……

せつさん「あ〜！楽しかったー！」

『ハハハ！俺も楽しかったぜ！』

侵二「主上と相打ち……化け物はここにいたんですね。」

『……否定できねえな。』

風魔、壊夢、幻夜は口を揃えて「伊織（茜）（幽香）の所に戻る。」との事らしい。わあフリーダム。……うちの馬鹿共が申し訳ない。

せつさん「……じゃあ、そろそろお別れか。」

『あ、ちよつと待て。ぶつ壊れたIS貸してくれ。ここで修理する。』

せつさん「いや、こっちで直せるから大丈夫だぞ？」

『まあまあ、修理開始。』

ついでに装甲材質の性能を20%上昇させる。……これは内緒の事。

『……よしと。色々が悪かったな。』

せつさん「俺達もまあ……お互い様だろ？」

『そう言ってもらえると助かる。……んじや、そろそろ帰るか。』

刹那「ああ、ありがとう。」

闇那「ありがとうな！楽しかったぜ！」

クロエ「ありがとうね！侵二、次は負けないわよ！」

ユウ「ありがとう。……また会えたらいいな。」

せつさん「他の奴らはちよつといないが……じゃあな！ありがとう！」

『ああ！……じゃ、最後にプレゼントだ。……気分神の加護だ。これを受けていれば何かある……かもな？じゃあな！……また会おうぜ！ダチ公！』

世界線を捻じ曲げて入り込む。……見納めかねえ。

せつさん「じゃあなー！」

そのまま俺と侵二は空間に入り込んだ。

『……終わりか。』

侵二「楽しかったですねえ……」

『あ、そうだ侵二、幻想郷縁起書き直すように頼んどいてくれ。無敗の次に、一度だけ引き分けがあつた。……とな。』

侵二「……そうですね、承りました。」

『……よし！じゃ、戻るぞ！』

空間から出るとそこは……

『今戻つた……あ？』

夜だった。

『……侵二、現在時刻。』

侵二「幻想郷は1025、まだ朝……のはずです。」

『ふざけんなよゴラアツ!!』

夜の中、俺の怒り交じりの叫びが響いた。……どうせ月だろ！

『野郎、ぶっ飛ばしてやる!!』

次回へ続く

第八十五話 明けぬならく

side 龍一

ハツハツハ、ブチ切れるぞ。刹那達の世界から帰還したらいきなり異変か。別に永琳達や紫達は責めない。．．．紫はやっぱ後で屋上行きだが。だが月、依姫と豊姫と三郎と月読命以外の今いる月の軍の野郎共、てめえらは駄目だ。てか化け物に襲われたんじやなかったのか：．．あ、幻夜が過去欺いたな。それは置いておいて何回目だと思っ ていやがる。そんなにも死にたいか。．．．よかろう。望み通り天国への片道切符をたたき売ってやろう。無理だとしても地獄の一部を見せてやらあ。

『おい、侵二、ネタバレいいか？』

侵二「なんですか？」

『幻夜が月の歴史欺いた結果、月の敵、来る、消してから行く、OK？』

途端に侵二の奴、口が三日月型に割れた。．．．怖いっての。まあコイツも月はあまり好んではない。．．．あの家事、戦闘、全てを完璧にこなす上に、対応が紳士の完璧妖怪の侵二すら嫌うんだぜ？いや、まあ、理由が藍を怪我させたからなんだが。仕方ないな。

侵二「OK！．．．決まりは？」

『．．．わざと結界脆くして、月の奴らをお迎え、その後破壊。それを口実に兵器のみ破壊。．．．ま、不慮の事故での死人は見逃す。』

侵二「ククク．．．了解しました。」

ぶち壊す。ちなみに風魔達にも「朝になっても夜だったら月にご挨拶」と前から言っているので既に嬉々とした表情でストレッツチやら準備やらを始めているだろう。・・・今度月に金盞花添えよう（仏壇に添える花）

『あ、気づかれないようにしろよ?・・・まーた紫が心配するから。』

侵二「もう結婚したらどうですか・・・了解しました。あくまでも隠密にですね。」

『そうだ。後前半分いらねえ。生憎する予定がない。』

結婚は無理。悪いけど無理。完全に学生と断絶されそうなんので。それだけは嫌だ。

侵二「そんな所は頑固なんですよねえ・・・」

『うるせえ。取り敢えずまだ帰ってきたとは思われてないだろうから、俺は家の警備システム、KMY使えるようにしてくる。』

弾?そんなもの120ミリ徹甲弾〔YB〕(やっぱり爆破に限る)に決まってるじゃないか。あ、砲塔はレールガンだぜ?

侵二「了解しました。・・・月のお客様、ぶっ壊してやります。」

すつごい不吉な発言が聞こえた。人殺しは駄目だから・・・あ、人間じゃなかった。よし、半殺しだ。

『・・・ちよつと竹林の方行ってくる。足止めの計画があるんでな。』

侵二「あ、はい、分かりました。風魔達呼んできます。」

『ほいよ。じゃあな。』

・・・最高神移動中・・・

・・・あぶねえ。途中で霊夢と紫に見つかりかけた。咄嗟に竹の影と同化したので助かった。

『・・・さて、目当ての人物は・・・お、いた。義炎、妹紅、久しぶりだな。』

義炎「ん？龍一殿、何かありましたかな？」

妹紅「龍一、久しぶりー」

見つけた見つけた。幻夜曰く、「二人揃ってると以上に強いよ」との事。

『おう、・・・単刀直入に言う。異変の事だ。』

妹紅「・・・流石に龍一の頼みでも止められないよ？」

『いや、その逆、異変解決組を止めてくれ。』

妹紅「・・・ふーん、父さん、いいよな？」

義炎「・・・私は戦闘は苦手なんですがな。」

？だろ。

『は？妹紅は強いのは知ってるが義炎、どこの誰が金属に竹を生やした？』

義炎「・・・それは、近くに竹林があったからですぞ。」

目を逸らすな。

妹紅「・・・父さん、久しぶりに本気出したら？いつつも手抜いてるじゃん。」

義炎「・・・・・・・・・・」

『頼む。また月が来るんだ。(俺達が潰すけど)』

義炎「分かりましたぞ。久々に本気を出させてもらおう。・・・竹林不敗は伊達じゃないですぞ！」

不敗かよ。お前も化け物かよ。貴族だったよな？

妹紅「そうそう、久しぶりに行こう！」

義炎「龍一殿、この義炎と妹紅、出来るだけ暴れさせて頂きますぞ！」

『・・・・・・・・ああ！任せた！』

よし、これで自宅警備装置をしっかりと使える。やったね！自宅警備員が要らないね！

『上空で機械が爆発したら終わってくれ。・・・すまん。』

妹紅「あの時は助けてもらってばっかだったし、今度は私たちの番だろ？」

義炎「左様、龍一殿は気にせず暴れて下され！」

『おうー！』

よし！これは暴れねえと！

侵二「……主上、少し良いですか？」

侵二からの念話だ。

『どうした？』

侵二「……風魔が、「首都は陥落させても大丈夫か？」と。聞いているんですが、どうなんですか？」

吹いた。……あの野郎！

『馬鹿！落とすな！あくまでも兵器のみだ！……予定だけだがなあ？』

侵二「ククク……了解しました。そう伝えておきます。」

油断も隙もあつたもんじゃねえ。まあ、それが風魔なんだが。

『……さて、始めるか。……今宵始めるは只の喜劇。……さあ、踊ろうか。』

てか、この中二病満載の台詞止めようか……いや、最後までやっ

てやろう。

side out

side 霊夢

「……まだ夜なの？」

おかしい。これは異変ね。

「……よし！行こう。」

龍一さん、侵二さん達の勝負を見て、凄いと思った。……自分が勝てないことも分かった。

紫「……霊夢、今回は私も異変に行く……霊夢、変わったわね。」

「何が？取り敢えずさっさと行きましょ！龍一さん達に言わないと！」

紫「そうね。……でも、この異変は厄介よ。」

「知らないわよ。どんな異変でも止めてやるわ！」

紫「そうね！行きましょ！私も龍一に自慢しないと！」

……この時、こつちを見ていた影に気付かなかった。

幻夜「うーん、良いねえ、……さて、こつちも飛び回ろーっと。」

side out

side 紫

これはかなりの誤算だ。龍一がここにいないのはかなり大変かもしれない。

実際、侵二さんが視察と称して殴り込みに行った時、機械類が異常に増えていたらしい。・・・龍一が聞くと鼻で笑っていた。『ガンタンクで十分』だそうだ。・・・よく分からない。

龍一はいつもそう。何を考えているか分からない。けれども、誰よりも優しく、自分を犠牲にする。だからこそ頼ってしまうし、心配してしまう。本当は私がするべきなのに、背負ってくれる。(龍一曰く物事は背負い投げしてるだけ)

・・・でも、それじゃあいけない。いつかは本当に会えなくなるかもしれないから。

「・・・よしー!」

これぐらい、私達でなんとかしないと!

side out

・・・この後、霊夢達が呆れるのは言うまでもない。

さあ、月の民、歴史上三度目の壊滅だが知らぬ。(紫奪還時、刹那達との異変時、今) 全力で逃げろ。

次回へ続く

第八十六話 明けるまで待とう

side 霊夢

紫「異変の元はここね・・・」

魔理沙「霊夢！お前も異変解決か？」

「魔理沙！・・・と、アリスじゃない！あんた達も異変解決かしら？」

魔理沙「そうだぜ！」

アリス「偶には良いかなと思って私も来たのよ。」

紫「・・・今回は多い方が良いわ。行きましょう。」

・・・紫が久しぶりに集中している。そんなにまずいの？

レミリア「ちよつと待った！私も行くわよ！」

咲夜「今回は協力させて頂きます。」

レミリア「夜は私のステージ、勝手はさせないわ。」

咲夜「・・・と、言う訳です。よろしくお願いします。」

紫「ええ、今回はよろしく。」

今回は多いわね。すぐに終わりそうだわ。

紫「さて、行きましょう！」

・・・異変解決者達移動中・・・

「・・・紫、まだなの？」

魔理沙「もう十分は飛んでるぜ？」

紫「・・・ちよつと止まってくれるかしら？」

レミリア「はあ？・・・どうしたのよ。」

紫「道が塞がれている・・・いえ、道が書き換えられているわ。」

アリス「・・・どういう事なの？」

紫「・・・何者かが私達の足止めをしているのよ。」

すると、男性の笑い声が聞こえてくる。

咲夜「・・・何者ですか？」

義炎「ハハハハ！お見事お見事。よくぞ見破られた。・・・っと、失礼、私の名は藤原義炎。この竹林のしがない案内役ですぞ。そしてこっちに居るのが・・・」

妹紅「藤原妹紅だ。友達と恩人の頼みで、この先は通さない。」

義炎「・・・と、言う訳でしてな。帰って頂けませぬか？」

「下がるわけにはいかないわよ。こっちだって夜が続くと困るんだから。」

・・・それに、侵二さんや壊夢さんに認めてもらう為に。

義炎「左様ですよなあ・・・争い事は苦手なのですが、止めさせて頂こう。」

妹紅「そうでないとな。・・・てか、父さん、ノリノリだな。」

義炎「偶には良いだろう？・・・と、始めますか。」

妹紅「そうだな！行くぞ！」

魔理沙「望むところだぜ！」

「・・・かかってきなさい。」

これぐらい、すぐに終わらせるわ！

side out

side 龍一

やれやれ、始まったか。解決組は結解組、魔法使い組、紅魔館組か。計六人。

・・・ま、相当上位にいる妹紅と義炎（化け物）なら互角か。いや、一説によると霊夢は壊夢の下で体術、魔理沙は侵二の下で魔法を、咲夜は幻夜の下でトリックの修行をしているらしいからな・・・ちなみに風魔は妖夢の指導。うーむ、面白そうになってきた。いずれいい勝負になるだろう。・・・義炎が手を抜けば。

『・・・つと、そんな事言ってる場合じゃねえな。取り敢えず永琳達

に許可を取るか（今更）。』

まあ、竹林に呪いを付けたのは俺なので道には迷わない。更に、義炎が竹林の竹を操っているため俺の周りだけ竹が消える。なんだよこの反則能力。

『・・・着いたなつと！うわっふう！』

永遠亭到着直後に毘です。本当にありがとうございます。ぶっ壊すぞ。

『ふう・・・あぶねえあぶねえ。ま、取り敢えず行くか。』

俺は永遠亭の永琳達がいるであろう部屋の窓から飛び込む。

『AMEN!!』

輝夜「何!?!...って龍一!?!何で窓から入ってくるのよ!」

永琳「姫様!何事で・・・龍一!」

???'「師匠!どうしたんで・・・誰ですか!?!」

『よう。久しぶりだな。』

輝夜「え、ええ、久しぶり・・・って違うわよ!何で窓から入ってきたの!?!」

『気分。』

輝夜「ええく」

当然じゃないか。俺達と普通に過ごすなら、喧嘩売るな、突っ込むな、嫁を侮辱するなの3つのお約束があるんだ。突っ込んだら負けです。大事なので2回言います。突っ込んだら負けです。

永琳「龍一！久しぶりね！」

『久しぶりだな。あんまし変わってねえな。』

???「師匠？この方は？」

永琳「・・・ああ、龍一、紹介するわね。彼女は鈴仙・優曇華院・イナバ（れいせん・うどんげいん・いなば）よ。優曇華、この人は龍神の兄の神矢龍一よ。」

鈴仙「・・・ええええ!!？」

『どうも、神矢龍一、しがない神様です。』

鈴仙「は、初めまして。鈴仙・優曇華院・イナバです。」

『鈴仙・優曇華院・イナバだな？よろしく。』

鈴仙「初めて名前を全部覚えて貰った・・・！」

いや、感動するところがおかしい。このぐらいの名前すぐに覚えられるぜ？寿限無じゃねえんだしな。

『・・・して、要件に移る。異変の事だがな。まあ、月なんだが。』

鈴仙「・・・っ！」

『……どうした？』

鈴仙「……いえ、何も。」

永琳「……鈴仙、話さない。」

鈴仙「で、でも……」

永琳「意外なことが聞けるわ。言いなさい。……大丈夫、龍一は信用できるわ。」

鈴仙「……はい。」

聞く流れじゃねえか。……まあ、聞くつもりだが。

『……じゃ、聞かせてもらおうかな。』

鈴仙「はい。……私は元々月にいました。そして、月の軍に所属していました。」

『ほう。』

鈴仙「しかし、ある日、妖怪が攻めてきたと聞いて……私は、逃げだしたんです。仲間を見捨てて。」

あ、それ刹那達のあの化け物の名残か？……あ、俺等だわ。紫が捕まって俺らがぶっ壊した奴だわ。……わあどうしよう。

『ほ、ほほう。』

冷汗がダラダラである。

鈴仙「……それ以来、怖いんです。月の皆がどう思っているのか、私は生きていていいのか。……ずっと怖いです！」

……ふむふむ。

『……で?』

鈴仙「……え?」

待て、いや、それだけ?逃げただけ?風魔だと確実に阿呆と言うぞ?

『いや、だから何?』

永琳「龍……!」

……くだらねえ。

『あのさあ、矢川鏡一って知ってるよな?』

鈴仙「え?あ、はい。……凄いですよね、自分の命を捨ててまで皆を助けて。」

『それ俺。』

鈴仙「はい?」

『いや、だから。矢川鏡一イコール俺。OK?』

鈴仙「……だったら！私の気持ちなんてわかるはずが！」

……いやまあそう来るよな。ま、知るはずもないし、知る気もなく、知る必要性も価値もない。無価値なり。

『次、絶影って知ってるよな？』

鈴仙「……月を荒らした地上の妖怪ですよね。それが何なんですか！」

『それも俺。』

鈴仙「……は？」

ヤバい。反応が一々面白い。輝夜、後ろで吹くな。一応シリアスな場面なんだ。半分ほどシュレッダーにかかってシリアルになってるけどな。

『だーから、龍一イコール鏡一、イコール絶影イコール俺。OK？』

鈴仙「……いや、冗談ですよね。」

ところがどっこい！これが現実です！これが……現実……！

『……鏡一の真実を言ってやろうか。生きて月で会う約束を放棄！そのまま妖怪になって月の軍の輝夜回収を妨害！その後月と全面戦争！多数の人間を殺害！……お前ら以上に月と衝突してんだよ！』

全部敵だ。……しかも月読命の公認の月殺し。やったぜ。

鈴仙「……嘘、ですよね？」

『悪いが現実。分かっただろ？お前の悩み事なんてな。俺のやらかした事とは比べものにならないんだよ！……お前は悪くない。誰だっ生きていたいだろうしな。悔やんでるんだろ？それでいいんだ。』

俺なんて不謹慎だが、反省も後悔もない。むしろ清々しいです。
(完全に末期)

鈴仙「……っ！」

『ここに敵はいない。少なくとも俺は味方だ。……だからよ。泣きたいなら泣く！はつきりせんか！』

鈴仙「……はいっ、ありがとうございますっ、ございますっ！」

鈴仙が泣いた。……よっぽど辛かったのだろうな。前世の俺だったら同じことになってるわ。今？ハハハ、もう遅いわたわけ。歯車は既に回りすぎて止まらぬよ。

鈴仙「……」

ありや、泣き疲れて寝てら。

永琳「……龍一、ありがとう。……本当にお兄さんみたいね。」

……もう全員の兄でいいやと思ってます。

『いや、まあ、龍神の兄ですから。……でだ、不謹慎だが月の奴ら、もう一回ぶっ飛ばしていいか？』

永琳「・・・またなの？」

『いやー、俺等からは攻めないつもりだったがな？ロケット飛んできたんだわ。』

現在、月から10000メートル先ぐらいか。無人、そろそろワープすると見た。帰れ。

永琳「・・・よく見えるわね。」

『狙撃手の名は伊達じゃねえぜ？』

マサイ族もびつくりの視力。逆に怖いぐらい見える。・・・まあ左眼だけだな。

永琳「・・・どうせ姫様の回収のためだわ。お願いしてもいいかしら？」

とんでもねえ、(その言葉を)待ってたんだよ。

『どうせ輝夜は・・・』

輝夜「嫌よ。行かないわよ。」

もう慣れてら。

『了解。・・・侵！幻！壊！魔！お許しが出たぞ！殺が・・・攻撃準備開始！』

四凶「了解！」

よし。……月の連中には予想の斜め上に行く地獄を見せてやろう。
(三回目)

次回へ続く

第八十七話 待てるか！by龍一

side 龍一

よし、月の連中、恨みはないが覚悟。

『ほい、侵二君、結界の強度弱めてくれ。』

侵二「了解しました。」

実際に壊すのは紫が作ったので不可能だが、耐久面は侵二の翼なので侵二が管理中。俺達が博麗大結界を手伝ったのは実はこのためだったりするとかしないとか。黙秘権を行使します。全ては闇の中へ。

『よーし、壊夢、風魔、神社に何故かいる幻夜。ダンダリオン開けるから、上空でロケット吹っ飛んだら入れよ？殺人は禁止。・・・無理にとは言わんがな。』

禁止。とか言ってもどうせ聞かないふりするので意味がない。この辺は軽く縛る程度でよし。・・・現在、ロケットが結界を破るまで残り一分。最後の通達です。帰って下さーい。(心の中で)

壊夢「了解ぜよ。」

風魔「了解した。・・・無理にとは言わんのだな？」

幻夜「ほいほーい。」

・・・残り40秒。てか義炎、妹紅。お前等強すぎだろ。全然霊夢達が来ねえぞ。

『畜生！人選間違えた・・・！』

side out

side 霊夢

・・・強い。もうかれこれ十分は戦っている。

魔理沙「くらえっ！」

義炎「・・・妹紅、下がって弾幕の準備だ。」

妹紅「はいよ。」

義炎「・・・全体！防御！」

また竹が動き出し、魔理沙の弾幕を全て防ぐ。

魔理沙「？だろ!？」

妹紅「貰った！蓬莱【凱風快晴 — フジヤマヴォルケイノ】！」

「くっ！夢符【二十結界】！」

義炎「・・・さて、追加ですぞ！義符【千年竹】。」

「・・・何も起きない？」

紫「・・・！霊夢！下よ！」

「……え？きやつ！」

下を見ると大量の竹が生えてきていた。

妹紅「父さん、防御が特に強いよな。……だから助かるんだけど。」

レミリア「くっ！神槍【スピア・ザ・グングニル】！」

義炎「全体、防御！」

いくら攻撃しても竹に防がれ、妹紅からのカウンターをくらう。

義炎「まだまだこれからですか？……つと、そろそろですかな。」

紫「……しまった！時間が！」

「ちよつと紫？どうし……何？あれ。」

空から謎の物体が迫って来ていた。

レミリア「……まさか！紫！あれは月の兵器なの!？」

紫「……ええ、そうよ。こんな時に……っ！」

霊夢「紫？月からってどういう事なの？」

紫「昔、私が負けた話をしたわよね。……その時の相手よ。」

そんな馬鹿な。

アリス「……倒せるの？」

紫「……いいえ。倒せるかどうか分からないわ……」

咲夜「では、どうすればいいのですか!？」

紫「……せめて、龍一がいれば……!」

『フハハハハハ!』

聞き慣れた笑い声が聞こえる。

紫「その声は……!」

『まだまだ俺達に気づかないとは甘いな!』

「龍一さん!？」

義炎「時間ですか?」

『そうだな、やり過ぎだがな。誰が本気出すんだよ。……さて、貴様等!準備はいいな!』

幻夜「いいよ」

侵二「何時でも大丈夫です。」

よく見渡せばいつの間にか侵二さんと幻夜さんもいた。

『……と、言うわけでだ!俺達に任せろ!あ、拒否権は無し!』

紫「……ごめんなさい、またお願いするわ。」

「龍一さんなら倒せるの？」

『余裕だな。・・・自宅警備システム起動！』

・・・なら、今回は頼るしかないだろう。

「龍一さん、お願いします!!」

『任せろ！』

side out

side 龍一

いやー、誰も気づいていなかったとは、まだ甘かったか。・・・まあいいや。ぶっ壊してやらあ！

bgm 盆回し

『ハハハ、沈め！照準ロック！・・・皆様！目の前にご注目下さい！』

前面にモニターを出す。よし、やっぱり無人だな（凄い今更）。滅べ。

『発射！』

超高速で徹甲弾がロケットに突き刺さる。・・・そして！

『消し飛ばえ!!』

爆発!!・・・この手に限る。

幻夜「いいねえ!」

霊夢達「ええええええ!!」

驚いている霊夢達を背に、

『展開が速いだろうが・・・突撃!』

四凶「了解!!」

各自がダンダリオンに入る。今頃着いただろう。月の軍に合掌。

霊夢「龍一さん!?何をしてるのよ!?!」

『説明は後!・・・てなわけで、霊夢達は普通に異変解決、頑張れよ!じゃあな!』

ダンダリオン展開!挨拶(殴り込み)に行ってきます!

霊夢達「・・・出来るかあああ!!」

・・・ごもつとも。

・・・最高神移動中・・・

『・・・よつとー!』

まあそれは放り投げておいて、俺も着いた訳だが・・・野郎共とは場所が違う。都の中だ。・・・いや別に内部崩壊とか企んでないから

な？いや、その手もあつたか・・・！

月読命「兄上!？」

『久しぶりだな。・・・まあ、来た理由は分かるな?』

月読命「またですか・・・！重ね重ね申し訳ありません。」

『いや、別に構わんよ?悪いが俺の式にとっては助かるしな。』

野郎共も一応妖怪なので時々恐れや恨み、血が欲しくなるわけだ。(特に幻夜、悲鳴を聞くだけでステータスが上がる。どうやら只のアルティメットサデイストではない模様)・・・侵二はあんまり要らないらしいが。風魔も斬れば良いらしいしな。

月読命「・・・仕方ありません。これをお渡しします。」

『・・・なんだこれ?』

月読命「ブラックリストです。そこに書いてある人物が今回の元凶の確率が高いです。お願いします。」

うん、サラツと言うな。幻夜が聞いてたら喜ぶぞ。

『・・・つまり消せと。』

月読命「・・・はつきりとは言えません。」

『まあそうか。・・・取り敢えず消せばいいんだな。』

と、言いつつ見てみるが・・・見事に豊姫、依姫の一番隊、昇級し

た三郎の四番隊のメンバーは0か。上等・・・じゃねえ。あの三人どうするか・・・どうせ勘づいて・・・

依姫「曲者！・・・鏡一!？」

うわ、来ちまった。・・・ま、想定内なんです。

『よう。・・・いきなりで悪いが、豊姫と三郎も呼んでくれるか?』

依姫「・・・?分かりました。後で詳しく聞かせてもらいます。」

うん、結局呼ぶのな。・・・そこは信用されてるのか、依姫の注意力が少し低いか・・・前者だと願おう。後者は困る。

月読命「・・・兄上、いえ、鏡一、どういふつもりですか?」

『悪いが、ちよつとあの三人の部隊借りるぞ。』

月読命「はあ・・・」

俺の計画（アドリブ）はこうである。

まず、豊姫、依姫、三郎に龍一だと言う。・・・いやまあこの時点で失敗しそうなのだが次、元から月読命に頼まれていた（一部?）と言うことを話す。・・・最後、人質として待機してもらおう。監視役は侵二が買って出た。まあ消去法だ。壊夢は性格上待つのが無理、風魔はしれつと斬りそうなのでアウト、幻夜は色々と論外。俺はこの三人を抑える必要がある。・・・つまり侵二しかいないわけだ。まあ適役だろう。

何故人質にするか。理由は簡単。他処分相手の士気を折る為

だ。……と言つても茶を啜つて話してるだけだろう。それに、現在強力なのが三人の部隊、つまりこの部隊に恐怖を植え付けければ終わりなのである。植え付ける方法? ……いや、侵二がいるし、適当に破壊シーン見せれば大丈夫だろ。これぞ恐怖政治。

依姫「連れてきましたよ。」

豊姫「鏡一!? 何故いるの!？」

三郎「きよ、鏡一殿……!」

『よう。数百年ぶりか? ……今回は大事な話がある。』

依姫「突然現れていきなりですね……何ですか?」

『……俺の本名神矢龍一。以上!』

依姫+豊姫+三郎「か、神矢ああ!？」

もうテンプレです。気にしない気にしない。(震え声)

『そ、神矢。俺が生きてたのも実はこれが理由。』

豊姫「じゃあ、もう戻れないというのは……」

『戻れないと言ったな。あれは嘘だ。』

依姫「良かった……!」

いや、只の知り合いだろ? 俺の変わり程度は何人もいるだろ……
三郎とかいるじゃん。

三郎「では、神矢様、来られた理由は？」

やめろ三郎、お前まで敬語か。

『敬語やめてくれよ……後、鏡一でいいぜ。慣れてるだろうしな。で、来た理由なんだが。』

依姫「……もしや、またこつちの者が……」

……いやー、察しがよくて助かる。

『……ま、そうだな。』

月読命「……私からも頼んだのです。永琳や輝夜にはもう来てもらう必要がありませんから。」

『……で、悪いが凄まじい流血沙汰になる。確実に狂死体やら水死体やら焼死体やら頭蓋骨潰れた奴が出る。で、勝手ながら付き合いの長いお前等には危害は加えたくない。……勝手なのは承知、一旦、俺達の人質になつてもらえるか？』

依姫「……」

ま、悩むわな。迷惑とはいえ味方を殺されるのを黙って見てろつて言ってるもんだしな。まあ、断ると片道切符叩き売り状態なのだが。

三郎「……自分は構いません。元より鏡一殿に拾われた命ですから。」

豊姫「……私もいいわよ。依姫、貴女は？」

依姫「……鏡一、民間人には手を出さないと約束してくれますか？」

いや、流石にそれはないから。一応野郎共もそこはしつかりしてるから。幻夜以外。幻夜以外！

『……攻撃する訳なからうが。約束してやる。……ま、ブラックリストの奴は身分無視で行くがな。』

依姫「……なら、私も構いません。……こう言うのもなんです
が、お願いします。」

『……すまん。……侵二！』

侵二「はっ。」

控えてやがった。……式としては勿体無さすぎるが、他の奴だと手懐ける前に手を喰われる。事実、あの時フリーだった野郎共は何度か部下になどとさせられかけたが、喰ったらしい。……今更ながらよくこんな奴式に出来たな。

『この三人と軍を頼んだ。右から依姫、豊姫、三郎だ。三人に紹介する。侵二だ。』

侵二「こうして会うのは初めてですかね？侵二です。鏡一の部下の
ようなものです。」

やめろ勿体無い。

依姫「……随分と物腰が柔らかい方ですね。」

侵二「……いえ、これは癖のようなものでして、普通に話すのが苦手なんです。」

『まあ、話は後にしてくれや。じゃあ侵二、頼んだ。』

侵二「御意。」

……さーて、ここからは切り替え。

『んじや、軽ーく行きますか。』

幻夜が消した歴史の時の月は悲惨だったが、それは別の話。

『俳句を詠め。』

野郎共、突撃。

次回へ続く

第八十八話 広がる波紋

side 龍一

『ダンダリオン展開、整列！番号！』

侵二「245！」

風魔「5・6！」

壊夢「弍！」

幻夜「seven！」

突っ込みどころが多いわボケ！

『無茶苦茶じゃねえか！……ったく、行くぞ！』

四凶「了解!!」

bgm 殷々たる煌黒龍 アルバトリオン戦闘bgm

side out

side 侵二

……なんて茶番の後、主上が動き出してから数分、既に攻撃は始まっています。

『……よう！侵二！見えてるな！どうだ？ISで作ったガンタンク

は?』

「はいはい、見えていますよ。心からえぐいと思いますよ。・・・状況はどうですか?」

『大体役割は決定・・・おい壊夢! ハンドル逆だ!・・・俺と壊夢で兵器、幻夜と風魔で人間を攻撃予定・・・壊夢! 撃て!』

壊夢「応!」

・・・主上が出した兵器、【ガンタンク】と言うらしいですが、おかしいですよ。主上曰く、『これぞ凶悪兵器。』らしいですが、主上が作ったんじゃないんですね・・・作り上げた方々、脱帽です。

『OK! 次、行くぜ! じゃあな侵二! また何かあったら報告する!』

「了解しました。・・・さて、申し訳ありませんね。色々騒がしくて。」

依姫「いえ、大丈夫ですよ。」

現在、人質になって頂いたので、豊姫殿、依姫殿、三郎殿以外の軍の方は、芝居によって騙させて頂きました。

・・・まあ、ただ単に三人を攫って「そこで大人しくしないと皆殺しですよ?」って微笑んで言っただけなんですけどね・・・まあ、ハツタリのつもりですし。

「まあ、立ち話もなんですし、どうぞお掛け下さい。」

主上が『適当にダンダリオン繋いどくから椅子とか出せ。』と言って

いたので遠慮せず使います。

豊姫「……今のは何処から？」

「……さあ？主上の技なので分からないですね。あ、お茶も出しませぬ。」

三郎「……鏡一殿なら仕方ないですね。」

「随分と分かっているらしいや。……そう言えば、ご三方はどのようにして主上と？」

依姫「……初めは三郎が会ったんでしたか？」

三郎「そうですね。……確か、私がまだ新米の一般兵だった頃でしたかね、その日は永琳様の護衛で、妖怪に襲われたときに、奇妙な掛け声で飛んできました。」

……まあ、主上らしいですね。

依姫「私は確か、入隊希望の兵の確認中、少し鏡一が気になり、勝負したところ、負けました。」

……その頃から引き分けはありますが無敗ですか……

豊姫「私はその事を依姫から聞き、私も気になったので勝負、負けました。」

それぞれ不思議な会い方をしていたんですね……大体勝負ですが。

豊姫「じゃあ、侵二さんはどのようにして鏡一と？」

「最初主上は私達・・・同じ式兼友人の幻夜、壊夢、風魔を殺すつもりだったそうなんです。気が変わったらしく勝負を挑んで来まして・・・」

依姫「やはり負けたんですか？」

「いえ、首を斬って一回殺しました。」

豊姫「は!？」

「しかし、不死身だったらしく、再生されて・・・結局負けました。」

三郎「その時も異常に強かったんですか・・・」

「いや、まあ、主上は理から外れていますし・・・で、何故か気に入られて式になりました。・・・そのおかげで今では所帯持ちですよ。」

依姫「え!?! 侵二さん結婚されているんですか!?!」

「ええ、まあ。私には勿体無い妻ですよ。」

依姫「は、はあ・・・」

「(三方は)結婚は?」

豊姫「私と依姫は考えてないけれど、三郎は結婚してるわよね?」

三郎「はい、このような者ですが一応・・・」

「おめでとうございます。．．．ところで何故お二人は考えていないんですか？」

豊姫「．．．鏡一が凄すぎてなかなか興味を引く男性がいないのよねえ．．．」

「．．．あー。」

．．．主上、いつからコレやってるんですか。被害者多すぎますよ。これで3ケタ超えましたよ。無自覚なのが恐ろしい．．．

「．．．では、主上の事が？」

依姫「それも違うんです。．．．その、なんて言いますか．．．お兄さんみたいな．．．」

「．．．」

．．．何やってんですか。主上。また存在が考えられた【全ての兄になる程度の能力】発動ですか。これは被害者人数は億超えていますよ。

「ハハハ、主上はよく言われていますよ。」

さて、主上はどうなっていますかねえ。

side out

side 龍一

．．．いやー、ガンタンク最高。見ろ、敵戦車モドキがゴミの用だ

！刹那達に感謝。

壊夢 「随分とこの乗り物硬いぜよねえ……」

『まあな。ちよつとやそつとじゃ壊れねえよ。……だからハンドル逆だつての！』

壊夢 「おお、すまんすまん。おつと、敵！右にいるぜよ！」

『よし来た！……発射！』

あ、弾薬が尽きた。

『チツ、弾切れだ壊夢。降りてろ。突撃させる。』

壊夢 「了解ぜよ！」

【爆破装置】作動。じゃあな。ガンタンク。

『……壊夢！次行くぞ！』

壊夢 「応！」

後ろで爆発してるが無視。取り敢えず次。ツダを出そうと思ったが地上戦が多いので却下。てかガンタンク強すぎだろ。

『【召喚魔法】、ヒルドルブ。』

今度はコイツ。取り敢えずスモーク張りながら砲撃でいいや。

『壊夢！乗れ！』

壊夢「応！」

ま、後数機で終わりだろう。・・・幻夜達はどうかねえ。

side out

side 幻夜

「よつと、これで28人目。」

風魔「こつちはこれで29だ。」

じゃあ、一人だけ上かゝ

・・・キヤハハハ！

「・・・っ！」

風魔「・・・おい、幻夜。どうした？」

「い、いや、何でもないよ〜？」

・・・もつと暴れろよ！この程度じゃつまんねえぜ！

ちよつと黙って。

・・・無理だなあ！テメエは俺なんだからよ！

「・・・っ。」

風魔「・・・幻夜、ただ事じゃ無いだろう。寝ている。」

「う、うん。・・・ごめんね〜」

落ち着かないと。また暴れちゃうだろうしね・・・

風魔「幻夜、待っている。・・・主上! 『どうした?』・・・幻夜の調子がおかしい。」

『あ? 幻夜ならいつもおかしいだろう?・・・って、こっちから見えるがただ事じゃねえな。幻夜、寝てろ。』

いやいや、見えてるの!?

「うん、ごめんね〜」

『謝るんなら一々宴会に波乱起こすな。』

「あ、それは無理かな〜」

『・・・チツ、まあいい。・・・なんかあつたら言え。』

・・・随分と甘えなあ?

黙れつての!

「・・・ふう。」

『本当になんかあれば言え。・・・一人で背負うな。』

あ、こればれてるや。

『じゃ、もうちよつと暴れてくらあ。・・・壊夢！それブレーキじゃなくてアクセ・・・轆いちまったよ。じゃあな！』

風魔「・・・幻夜、取り敢えず返り血を落とせ。」

「いや、先に風魔が落とした方がいいんじゃない？」

目、見えてないよね？

風魔「・・・いや、昔からこうだった気がしてな。まあいい。先に拭け。お前は重病かもしれんぞ。」

「うん、そうだね。・・・ありがとう。」

side out

side 鏡一

・・・さーて、片付けは終わり。途中で壊夢がヒルドルブで轆きまくる事件、風魔が誤って軍事基地をぶった切って死者（ブラックリスト登録）が出た（絶対に故意）ぐらいだ。ど阿保（でかした！）。

『・・・お騒がせした。これで処分は終わりだ。』

依姫「それはいいんですが・・・兵が怯えているのは何故ですか？」

『・・・知らん。』

言えねえ。途中で風魔がカメラ付近でターゲットを切断し、その微笑しながらカメラに手を振って破壊・・・とか言う恐怖映像を流した。

てか幻夜大丈夫か。元からおかしいが更におかしいぞ。

依姫「そうですか・・・」

いや、追求しないんかい。・・・まあそんな場合じゃない。

『すまん。幻夜の調子が悪いんでそろそろ引き上げる。』

依姫「そうですか。お大事にしてください。」

『ああ、言っておくよ。・・・あ、聞き忘れたが、紫が月を止めたんだが、どれだけ月に支障が出る?』

依姫「支障はありませんよ。・・・唯、日食と赤い月が近日に同時発生するようになりました。」

『・・・そうか。ありがとう。・・・じゃあな!また行けそうなら行く!』

依姫「はい!待ってますね!」

・・・にしても、日食と赤い月同時発生か。・・・如何にも魔物とかが狂いそうだな。

side out

side ???

・・・俺という存在が抑え込まれ、使役されるようになってからから数億年以上経った。・・・ま、最近、主導権は未だに握れねえが、ちよつと出てこれるようになったし、スキマ妖怪のおかげで速く出て

これそうだな！

「・・・ヒヒヒ、楽しみだねえ！」

さて、暴れるために暫く寝ておこうか。・・・待ってるよ、幻夜。

「殺してやるからなあ！」

次回へ続く

四凶 Story 狂の章 とある奇術師の物語
第八十九話 裏か表かそのまた別か

side 龍一

幻夜の調子が悪い。それも恐ろしく重体だ。
あれからすぐに幽香が看病しているが、一向に良くならない。

『……つたく、あの野郎、遂に寿命か?』

侵二「……いや、それはないですね。」

あの後、月から帰ってきた時。異変は解決されていた。……どうやら義炎と妹紅がおかしかっただけのようだな。わあい化け物増えた。……すぐに幻夜を永琳に診てもらったが、永琳でも分からないそうさ。マジか。

永琳「……幻夜は確実に病気じゃないわ。でも、何かが体内で起きてるみたいよ?」

『……あれか。』

侵二「……何か知ってるんですか?」

『いや、依姫曰くな?明日の午前中から赤い月と日食が同時に起きるらしい。……それがカギかもしれないぞ。』

侵二「日食?……いや、まさか。」

『おい、どうした?』

侵二「主上と会う数億年前、幻夜が「日食は嫌だね」と、言ったのを思い出したんですが……」

……うーむ、詳しくは分からんか……

永琳「……ごめんなさいね。力になれなくて。」

『いや、ありがとう。取り敢えず死なないことは分かった。』

アイツが死ぬとか見てみたいわ。絶対に死なねえだろアイツ。

……最高神＋化け物移動中……

『……日食、ねえ。』

咲夜「……先生、幻夜さんの体調は……？」

なんだ、咲夜は来てたのか。……幻夜が暴走すると面倒なので、霊夢達には『幻夜は体調不良』とだけ言っておいて、宴会をさせている。……ちなみに幽々子は「少しの料理でも美味しい食べ物を食べる方が良いわねー」との事。全てが救われた。

『ああ、あの馬鹿は取り敢えず死なんはず……ところで咲夜、幻夜が変な事言っただけだったか？』

咲夜「……変な事、ですか？……何も言っただけでしたよ？」

……手がかり無しか。

咲夜「あ、でも、この前、スペルカードを使った後、一人に戻るま

でに時間が掛かってました。」

・・・人格が原因か。いや、待てよ？

『・・・謎の魔力、二重人格、危険な能力、まさか憑依か？・・・日食、赤い月が封印条件とすると・・・』

侵二「主上？」

だとするとそろそろだな。

『・・・よし、大体掴めた。すまん侵二、ちよつと神界に行ってくる。調べる必要がある。』

侵二「・・・？了解です。」

・・・もしこれで正しいなら、全てに説明が出来る。・・・恐らく
幻夜は・・・

side out

side 侵二

・・・主上は一体何に気づいたんでしょうか。

咲夜「侵二さん、幻夜さんはどんな人だったんですか？」

「幻夜は昔からあんな感じで裏表がありましたね。」

咲夜「じゃあ、今の寺子屋の人格は？」

「つい最近ですね・・・」

何故でしょうか？人格を増やせるなら消せるはず。なら何故裏を消さない？・・・いや、消せないのでは？何故？まさか何者かの抑制？裏人格の抑制？

「・・・まさか、裏は幻夜ではない？」

ならば誰ですかねえ・・・ん？背後に妖力？

??? 「・・・っ！ゲホッ！」

咲夜 「・・・！誰ですか!？」

「・・・誰です？」

??? 「おい、俺だよ俺。寺子屋の幻・・・ゲホッ！ゲホッ！」

ああ、幻夜ですか。・・・しかし酷い血だ。

咲夜 「幻夜さん!?!血が・・・!」

怪我の箇所は背中・・・凍傷？

「・・・幻夜、それは貴方の血ですよ？何があったんです？」

幻夜3 「端的に言う。・・・悪い、表がしくじった、・・・で、裏が暴走した。表が瀕死だ。」

「馬鹿な・・・！咲夜！その幻夜を永遠亭に！私は幽香殿と表を助けてきます！」

幽香 「その必要はないわ。 …取り敢えず、表は連れてこれたわ。」
表は完全に出血多量ですね …このままではまずい。

「幽香殿、怪我は？」

幽香 「ないわ。幻夜がかばってくれたから …」

…ちゃんと守ったんですね。

「取り敢えず二人とも永遠亭に！今主上が裏の情報を探しています！」

咲夜 「分かりました！」

幽香 「分かったわ。幻夜 …！」

side out

side 幻夜1 (表)

??? 「やっと出られたぜ！死ねえ！」

「やめろ！暴れて何になる！もうそんな時代じゃないんだ！」

??? 「うるせえ！どいつもこいつもものんびりとしやがって！」

幽香 「幻夜！大丈夫なの!？」

??? 「うるせえこの野郎！死ねえ！」

幽香 「きゃっ！」

「させるカツ．．．ハ．．．」

幽香 「幻夜！」

「．．．ごめんね。守り切れないかも．．．っ！よいしょっ！」

幻夜3 「あ？なんだ．．．おい！何があった！」

「．．．ごめん、マスターに頼んで．．．裏が暴走した．．．」

幻夜3 「おい！．．．チツ！待ってろよ！」

??? 「逃がさねえぞ！」

幻夜3 「うわっ！チツ！」

．．．マスター、

幽香 「させない！」

??? 「めんどくせえなあ！」

．．．ごめん、

幽香 「今よ！」

幻夜3 「任せろ！裏、じゃあな！」

・・・一人じゃ無理。

「・・・っ！」

・・・なんだ、夢・・・じゃないね。目覚め最悪。

幽香「・・・幻夜！起きたのね！」

「・・・あれ？なんでここに？」

頭が回らないや。

侵二「あ、貧血なのと傷だらけなので動かないように。・・・幽香が連れてきて下さったんですよ。」

「・・・そうなんだ。ごめんね幽香。」

幽香「ううん、いいのよ・・・！良かった・・・！」

「・・・なんで泣くのさ。・・・咲夜も、ごめんね。」

咲夜「・・・いえ、大丈夫それで良かったです！」

侵二「・・・幻夜、聞かせてください。裏は誰なんですか？」

・・・言うしかないか。

「……えつとね。」

『アイツの正体はカオス。「なっ！」安心しろ咲夜。源初神じゃないカオスだ。正確にはカオス属。アミーバの一種。だろ?』

「……正解。」

『どこで混じったのか知らねえが、魔獣の素質も混じっていやがる。おおよそ裏が独自発展、寄生したんだろうよ。んで生物を消す……おそらく、完全に取り寄り宿主を殺す。化け物だな。』

……そうなんだよね。

「……大体一緒だね。」

『だったら聞かせろ。お前は何故寄生されたのに自我があるのか。』

「……分かったよ。じゃあ、話すよ。つまんない重い話を。」

次回へ続く

第九十話 僕、オレ、俺、誰？

side 龍一

幻夜「・・・じゃ、話すよ。」

『・・・ああ、無理はすんなよ。』

幻夜「うん、・・・先ずは裏から。さっきマスターが言った通り、アイツはアメーバ。・・・正確にはアメーバ【だった】かな。」

『は？どうなってるんだ？』

幻夜「裏はとある妖怪に乗り移った。その時に魔力を手に入れたらしいんだ。」

『・・・で、その乗り移られたのは誰なんだ？』

幻夜「混沌。」

・・・は？

幽香「・・・幻夜、それって、」

幻夜「いや、僕じゃない。僕の一族全部。・・・僕自体に家族はいなかった。というか独りぼっちだった。」

幽香「・・・何で？」

幻夜「僕は混沌の中でも一番おかしかった。・・・混沌っていう種族は【他の生物になった】と自らに誤認させて別の種族になる。まあ

歪な習性なんだけど、・・・そうやって増えていつてまた混沌に戻った。・・・僕はそれが出来なかった。自らを騙しきれなかった。体が強過ぎたんだ。」

・・・強過ぎて生き延びられないか、酷い話だな。

幻夜「そんな時にアイツが来た。・・・で、一族全部殺された。・・・その中に魔力を所持していた同族がいて、その時に奪ったみたい。で、勿論僕も取り憑かれたんだけど、・・・体が強過ぎて、アイツも僕の意識だけは奪えなかった。・・・それからかな。二重人格になったのは。」

『・・・つまり、お前は混沌で、体が強過ぎたイレギュラーだった。裏はアミーバの種族で、こいつもまた独自進化出来たイレギュラーだった。で、お前の体で争ってたよ。』

幻夜「・・・うん。で、何とか勝って二重人格として封印した。・・・唯ね、強すぎて封印に条件を出した。それが、「日食と赤い月の同時発生」だったんだけどね。・・・それが裏目に出た。そのちよつと後に侵二達と会ったよ。」

だから二重人格か。・・・んな偶然あるんだな。

咲夜「・・・？ちよつと待って下さい。・・・じゃあ、寺子屋の幻夜さんは何なんですか？」

幻夜3「・・・俺は表から出来た。それは裏が寺子屋に行くには危なかったから、表が【もう一つ人格がある】という事にしたわけだ。・・・まあ、それ以外にも役割はあるが。」

咲夜「・・・理由ですか？」

幻夜3「ああ、理由は「僕が言う」・・・分かった。良いんだな？」

幻夜「うん、・・・理由は幽香、君だよ。失敗して僕が死んだときの代役としてね。」

幽香「・・・私？」

幻夜「そう。・・・初めて会った時、裏を出したよね？マスター達は除いて、怖がらなかつたのは幽香だけだった。・・・ずっと気味悪がられて、一族でも褒められたことがなくて、マスター達にすら言われなかつた、でも、幽香は言ってくれたよね？・・・「格好よかつたわよ？」って。」

幽香「・・・覚えてたの？」

幻夜「うん、・・・すごく嬉しかった。初めて異性に褒められた。初めて僕を褒めてくれる人と会えた。・・・その時から僕は、ずーっと君のことが好きになった。」

幽香「幻夜・・・」

・・・そうか。・・・コイツは、愛されたことがなかつたんだな。

幻夜「・・・それだけは裏も一緒。幽香に攻撃したのも、僕がかばうって知ってたから。・・・だってその後、一度も攻撃しなかつたでしょ？」

幽香「・・・馬鹿、そんな事、早く言いなさいよ！」

幻夜「幽香・・・？」

幽香「……だって、私も幻夜が好きだから。今まで愛されなかった分ぐらい、すぐに取り返してあげたわよ!……私はどんな幻夜も、大好きだから……」

幻夜「……ありがとう。」

幻夜3「……そんだけじゃねえ。俺が行ってる寺子屋、お前も来ただろ?……お前はたくさんの人間、妖怪、妖精達に好かれてんだよ。」

咲夜「……幻夜さん、私も、幻夜さんのことがお兄さんみたいで好きです!」

幻夜「……」

……世話のかかる式なこと。

『阿保、俺達も外すんじゃないやねえ。この中じや阿保みたいに付き合いたいんだ。独りぼっちだ?ほぎけ、何黙ってたんだよ。紐なしバンジーさせるぞおい。……ずっと俺達がいるだろ?てめえの葬式も抹香ぶちまける為に出てやる。百年後、千年後?甘い!俺が死ぬまでずーっと、てめえが死のうが俺の式だよ。』

侵二「……幻夜、絶対に風魔、壊夢も同じ事を言いますよ。私だっ
て同じです。……大切な友達ですから。」

幻夜「……みんな、ありがとう。」

『別にてめえのためじゃねえ。てめえが死ぬと寝覚めが悪いからな。』

幻夜「ツンデレ？」

『おい、ぶち殺すぞ化け物。裏の前にてめえを殺すぞ。』

幻夜「・・・アハハ、ごめんね〜？」

・・・それでいいんだよ。幻夜、お前に涙は誰から見ても似合わねえ。せめて半笑いにしろや。・・・あ、ゴメン普通にヘラヘラしてろ。半笑い気持ち悪い。

幻夜3「・・・すまねえ。マスター。表が迷惑かけた。」

『・・・いいや。構わんよ。・・・俺は見たいんだ。あの夫婦の本気を。』

幻夜3「善意だけじゃねえのかよ。」

幻夜「幽香！行こっ！」

幽香「もう・・・いいわよ！行きましよ！咲夜も来なさいよ！」

咲夜「え、は、はい！」

幻夜「ほら！侵二とマスターも早く来てよ！」

・・・つたく。世話のかかる阿保だぜ。（かつてなんちやつて死で騒がせた神の発言）

侵二「やれやれ・・・主上、行きますか。」

・・・悪くねえがな。

『よし！行くか！幻夜、手伝ったんだから飯奢れよ！』

幻夜「トマトサラダでいい？」

『良いわけねえだろ！人の食べねえ物知ってんだろ！』

幻夜「・・・じゃあ、ポテトサラダ？」

『食べるけどよ！サラダから離れろ！』

幻夜「ほいほい。オムライスね〜」

『・・・ったく、最初からそうしやがれ阿呆。』

・・・んじや、謎に雪が降ってるくせに植物に当たってない太陽の畑に行きますか。なんだその地味な優しさの見える裏側。不器用か。

幻夜「・・・オレは僕と俺で止める。」

幽香「・・・幻夜、頑張りましょう。」

咲夜「幻夜さん、「お兄ちゃんていいよ〜」・・・考えさせて下さい。「ちえっ、「いや、言っただけいいんですか？」」

侵二「・・・仲良しですねえ・・・」

『・・・ま、適当に行きますか。』

こんなもん気張って行けるか。前の空気緩すぎるわ。これが戦い

に行く空気か？絶対にピクニックに行く空気だ。闘争の空気とは程遠い。

『ま、それでいいんだがな。』

次回へ続く

第九十一話 誰であろうが・・・

side 龍一

いやもうホント不器用か幻夜（裏）。太陽の畑無傷じゃねえか。それとも逆にあれか。ターゲットは幻夜（表）のみか。

幻夜「・・・アイツ、やっぱり・・・」

なーんか、幻夜（裏）も独りだったのかね・・・

咲夜「・・・いました。」

幻夜（裏）「・・・来たかあ?」

幻夜「・・・ああ、来たよ。」

幻夜（裏）「じゃ、話は速い。・・・てめえの体をよこせ!」

幻夜「・・・やだね。はぐれ物でも、異端者でも、嫌われても、僕は僕だ!」

うわ、主人公みたいな台詞。・・・残念だが幻夜、お前に主人公補正はねえ・・・ぞぞ?

幻夜（裏）「てめえ・・・!いつもそうだ!何でそんなにヘラヘラ出来るんだよ!」

・・・幻夜だからじゃねえの?緊張のシーンに見えるが、観客置いていつてるからな?

幻夜「・・・さあね？分かんないや。・・・じゃあ、行こうか。」

幻夜（裏）「チツ！殺す！」

なんでやねん。殺してどないするんや。本体要るんやろ。

『手伝わなくていいか？』

幻夜「暫く手出しは要らないよ！」

・・・まあ、くれぐれも暴れ過ぎないようにって、聞かねえか！

bgm A Stranger I Remain

幻夜「よっ！」

幻夜（裏）「殺す！」

幻夜は槍主体、裏は素手、・・・素手!?てか裏、怖いから落ち着けよ。

幻夜「くっ！」

幻夜（裏）「貫った！」

いや裏！てめえアメーバだったからって手伸ばすの駄目だろ！

幻夜「なんの！」

それを首折って躲すな！お前ら両方生物のルール無視じゃねえか。

幻夜（裏）「消えろお!!」

・・・なんて言うか、裏の奴、感情が分かっていないように見えるな。・・・本気で暴れてるような・・・

幻夜「はあっ！」

幻夜（裏）「ぐっ・・・！」

腕を切り落とす・・・が、流石元アメーバ。すぐに引つ付いたな。混沌を幻夜以外ぶっ殺したのも納得がいく。・・・まあ、混沌自体の力は弱いらしいが。・・・んー？他の奴ら（風魔、壊夢、侵二）は？

幻夜（裏）「うらあっ！」

てか、今更だが両方幻夜で分かりづらい。

幻夜「くっ！」

あ、槍折られた。・・・折った!?マジでか!?あれ一応幻夜以上の妖力が要るんだが、まさか裏の奴、幻夜の能力そのままか！

幻夜（裏）「死ねっ!!」

幻夜「うゝあゝっ！」

幽香「・・・幻夜！」

右肩を抉られたか・・・

幽香「・・・見てられない！【マスタースパーク】！」

『あ、おい!』

幻夜(裏)「チツ!」

・・・攻撃の気配ゼロ?

咲夜「・・・私も!」

それはアカン!!

『おい!待て!』

ストップストップ!助けたいのは分かるがやめい!

咲夜「はあっ!・・・っ!弾かれた!」

中指と人差し指でナイフを掴みやがった。・・・世紀末格闘家かな?
?

幻夜(裏)「あゝ?・・・目障りっ!」

咲夜「キヤツ!」

一応アイツも音速超えるのな!仕方ない!予測してたがな!

『どけっ!・・・痛ってえ!!』

幻夜(裏)「な・・・!」

痛ってえ。右肩から先が無くなったな。

幻夜「マスター!？」

『ボケ!モタモタしてんじやねえ!人が腕一本犠牲にしてんだ! さっさとやれ!』

・・・滅茶苦茶痛い。

咲夜「先生!」

『・・・下がってろ。てめえも誰の元生徒に攻撃しとるんじやゴラア!』

幻夜(裏)「ゴホッ!」

取り敢えず蹴り飛ばしつつ、自分の腕を切り落とす。

『再生!』

ええい、本当に持っていられるとは思っていなかった。痛え。

幻夜「マスター!ごめん!」

『うるせえ!さっさと終わらせろ!紫やら霊夢が来たらどうする!』

うるさいに決まってるだろ。俺等が血を流すだけで騒ぐんだからな。風魔がいれば切り傷だらけだったの。

幻夜「・・・ありがとう。了解!」

幻夜(裏)「どいつもこいつも邪魔しやがって・・・!みんな消えろ

!!

幻夜3 「させるかよ!」

侵二 「それ以上はいけませんねえ・・・」

何がじゃ阿呆。人の腕切り落として注意引いて拘束か。・・・俺じやなきや出来んぞ。

幻夜(裏) 「てめえらあ!」

・・・計画通r・・・いけね。

『・・・さつさとやれ!』

幻夜 「ほいつ!・・・これで最後!」

幻夜の攻撃が、裏の心臓部に届・・・

幻夜 「・・・なんてやだね。」

・・・かねえ。やっぱな!そうするよな!読めてた。・・・まあ、アイツに任せてるから何も言わん。

幻夜(裏) 「何で殺さねえ!」

幻夜 「・・・あのさあ、もう止めない?」

幻夜(裏) 「は?」

幻夜 「・・・止めよう?」

幻夜（裏）「……俺を生かしておく、またてめえを殺そうとするぞ？」

幻夜「……生憎まだ死ねなくてね。幽香がいなくなるまでは無理かな？」

幻夜（裏）「……何でそこまで出来るんだよ！」

幻夜「……好きだからだよ。幽香が。」

幻夜（裏）「なんだよソレ。俺には分かんねえよ……」

幻夜「……じゃあ、君が幽香を狙わなかったのは？」

幻夜（裏）「……」

ここまで幻夜しか喋ってねえ。幽香と幻夜以外空気だわ。↑場違い野郎

幻夜（裏）「……分かんねえ。あれ？何でだ……！」

幻夜「……そんな感じだよ。」

幻夜（裏）「んー、……やっぱり、俺みたいな形のねえ奴には分かんねえ。」

幻夜「……だったら、暫く僕の中で過ごしなよ。よく見てれば分かるだろうから。」

幻夜（裏）「……殺すかもしれねえぞ？」

幻夜「・・・その時はその時。それに一回抑えられたしね。どうする?」

どうするじゃねえ。俺が面倒だからやめろ。

幻夜(裏)「・・・俺にも出来るか?」

幻夜「・・・出来る。僕でも出来たんだよ?」

幻夜(裏)「・・・教えてくれ。この分からねえ物が何か。」

幻夜「いいよ。・・・だって、君は僕だから。」

幻夜(裏)「ちげえよ。俺は化け物だ。・・・お前の一族を殺した化け物だ。」

幻夜「で?もう昔の事でしょ?」

幻夜(裏)「・・・俺を許すのか?」

幻夜「許すも何も・・・怒ってないよ?気にしてないよ?」

『・・・残念がらな?こいつも化け物なんぞな。それは言い訳にならねえ。』

化け物Ⅱ俺達の式が出来てるからな。

幻夜(裏)「・・・お前の主人、変わってんな。」

幻夜「まあね。・・・どうする?僕と一緒に過すごす?」

幻夜（裏）「……分かった。だが、いずれてめえの体、奪ってやるからな！」

幻夜3「残念、俺がさせねえよ。……そうなる俺の居場所が無くなるからな。」

幻夜（裏）「なんだと？」

幻夜「……喧嘩しないの。……じゃ、宜しくね。相棒？」

幻夜（裏）「……なんだそれ。……ま、宜しくな。」

『んじゃ、これでめでたしめでたしか「まだだ」……最後まで言わせろよ。』

幻夜（裏）「……先に言わせろ。まず娘……咲夜だったか？悪かったな。殺そうとして。……多分もうしねえと思う。」

咲夜「……全然気にしてないです。よろしくお願ひしますね。幻夜さん！」

幻夜（裏）「ああ、……次、幽香だったか。暫く厄介になる。後、幻夜と俺は別人だから、旦那と間違えんなよ。」

まあ礼儀正しい。幻夜にも見習って欲しいわ。アイツ、嫌いな奴は最初のコミュニケーション「そおい！」でその辺の泥投げて終わらせるからな……

幽香「いいわよ。……宜しくね。」

幻夜（裏）「・・・次に、コイツの主とダチ、昔から会ってたが、改めて宜しくな。」

『・・・ああ、宜しく。』

侵二「よろしくお願いしますね。」

幻夜（裏）「・・・最後に幻夜、お前に俺の特徴を移す。上手く使えよ。」

幻夜「いいのかい？」

幻夜（裏）「どうせ奪うんだ。変わらねえだろ？」

幻夜「負けないからね？」

幻夜（裏）「けっ、どうか。」

幻夜「・・・これで、めでたしめでたしだね。」

『あ！てめ！台詞奪いやがったな！』

またかよ！

次回へ続く

第九十二話 行ってきます

side 龍一

あれから数日。俺は飯を奢られに来た。幻夜（裏）はかなり落ち着いたらしい。今やかつての奇術「スリーフィリング」を使っても問題ないらしい。・・・俺の右腕を返せ。

しかも幻夜（裏）、名前を貰ったらしい。幽香の幽と幻夜の夜で幽夜（ゆうや）：子供か!!完全に幽香と幻夜の子供みたいになってんじやねえか。しかも今仕事でいない幻夜₃がいると兄弟に見える。・・・これで幽夜は他人の空似だぜ？

で、気になっていた日食と赤い月だが、オルゴイが「月のバランスが悪い。」の一言でロンギヌスを投げ、その衝撃で月の軌道を戻した。月読命からは「何ですか！戦争ですか!？」と、来た。・・・すまん、俺の知り合いのおっさんの遊びだ。

幽香「・・・はい、あーん。」

幻夜「あーん。」

しかもコイツ、右腕が治らないそうで、ずっと包帯で治療しながらあの状態。砂糖、いや、グラニュー糖吐くぞ。それに上乗せで永遠亭で治療した背中の子でどう見ても事故に巻き込まれたように見える。元凶なのにな。

幽夜「ほれ幻夜。」

他にも、妖怪暴走するんじやねえか・・・とか、想定していたんだが、危険視していた奴らは、・・・何故か丸太を持った男と、刀を持った男に、何故か殺されていた。理由?・・・知らないです

ね。

幻夜「あ、ありがとう。」

てか、幻夜達、その、なんか、すげえ家族に見える。侵二なんぞこれ見て「・・・お幸せに。」なんて言ってたからな。ちげえよ、もう既に結婚してんだよ。幽夜も子供じゃねえよ。

『・・・いやー、にしても花が咲き乱れてんな。ここら辺春ってか・・・あ。』

・・・ハツハツハ、異変じゃねえか。幽香に冤罪かけられる確率が高いアレじゃねえか。・・・駄目だ名前出てこねえ。そろそろ物忘れが激しくなってきたな・・・

『そーいや幻夜、この辺に大量の花が咲いてんだが、幽香となんかしてんのか?』

幻夜「んー?してないよー?」

幽香「・・・流石に季節に合わない花は咲かせないわ。別の奴がしてるわね・・・」

幽夜「へえー?その言い方は・・・マスターは分かったのか?」

『ああ。・・・彼岸の方でよく心当たりがあるぞ?』

まあ、龍神の兄だったんで何回か視察には行ってるからな。・・・地味すぎて話すこと無いがな。三途の川泳いでたら怒られたぐらいだしな。それ以来水の上を歩いて向かうのだが、また何故か怒られる。何でだろうな?そうか、川を割れと。

幻夜「・・・ふーん。」

『まあ普通ならここが怪しいと思うだろうな。幻夜君?』

幻夜「そうだね。・・・幽夜、手伝ってくれる?」

幽夜「はあ?・・・暴れられるのか?」

幻夜「どう?誰が来そう?」

『そうだな・・・霊夢、魔理沙、妖夢、後お前らは知らねえだろうが
鈴仙だな。四人。』

咲夜は敵対しないだろうから除外。来るには来るだろうな。

幻夜「・・・どう?」

幽夜「あいつらか・・・乗った。その代わり、俺に半分体よこせ。・・・
戦ってる間だけな?」

幻夜「それぐらいならいいよ。」

「幽夜「・・・成立だな。」

アカン、こいつら撃退する気満々だ。・・・まあ、幻想郷のルール
に異変解決者に勝つちやいけないルールはねえよなあ!

『・・・つたく、血の気が多いな。さっさと終わらせろよ?案内して
やるからよ。』

まあ、ちよつと霊夢達の実力も見たいし、この先を決める必要があるからな……

幻夜「……んじゃ、さっさと治そつと。……マスター、頼んで良い？」

『チツ、……。『フェニクス』、腕貸せ。』

幻夜「ほい。」

『貸しだからな？……。つとーOK。動くか？』

腕を入れ替える。……若干痛みがある程度か。

幻夜「うん、動くね。助かるよ。」

かなりの怪我だな……。よくこれで生活出来たな。人間なら死んでんじゃね？

『再生。……よし、完了完了。じゃ、行つて来い。』

幻夜「……。行こうか。」

幽夜「……。そうだな。」

幻夜3「今戻ったぜ……。なんだお前ら、どっか行くのか。」

幻夜「うん、霊夢達ぶつ倒すんだけど……。どうする？」

幻夜3「……。俺だつてお前だ。手伝うぜ。」

幻夜「……よし！じゃあ幽香！行つてきます！」

幽香「……ええ、行つてらっしゃい！」

……じゃあ、俺も見に行くか。

……最高神+奇術師移動中……

幻夜「……この辺かな？」

『……500メートル先に霊夢達発見。来るぞ。』

さて、観客は引つ込んでるか。

幽夜「……さて、体に入るぞ。」

幻夜「ほーい。」

幻夜3「じゃ、俺も入るか。」

ある意味不気味な状況だな。……全部幻夜で括れるが。

さーて、……見せてみる。お前らの本当の力を。

side out

side 幻夜

「……来たよ。」

冤罪でも、負けるのは癪だからね？……ま、普通に起こしても

負ける気ないけどね。

・・・なあ幻夜。

んー？何か用？

・・・本当に俺を受け入れて良かったのか？

またその話？僕が良いんだからいいよ。

・・・そうそう、今更気にしてんじやねえよ。幽夜。

・・・そうだな。・・・これからよろしく頼む。

これからも。だよ？

・・・ああ！ま、何時でも乗っ取るからな。

「さて、・・・んー？見ない顔もいるけど、揃ってどうしたの？散歩？あ、観光？」

・・・ホントお前ってぶれないよな。

霊夢「・・・ここら一带に大量の花が咲いてるの。幽香がしたの？」

「・・・いいや？幽香ではないよ？・・・僕かもね？」

・・・けっ、お前もやる気満々じゃねえか。

魔理沙「幻夜さんなのか？」

「・・・聞きたきや戦おうか。皆そのつもりでしょ？」

咲夜「私は違います。・・・見に来ただけですから・・・」

・・・おい幻夜、心配されてるぞ。良かったな。

良くないよ。・・・後で大丈夫って言わないとね。

「ふーん。じゃあ、そっちの三人は？」

霊夢「当然じゃない。戦うわよ！」

「やれやれ・・・ところで、鈴仙だっけ？マスターから聞いてるよ。」

鈴仙「え、あ、はい！幻夜さんですよね？」

「うん、・・・ま、話は後かな？」

・・・幻夜！体貸せ！

え？幽夜？今？

・・・いいから貸せ！

分かったよ。ほい。

「サンキュー・・・さーて、かかって来い。返り討ちだ。」

霊夢「望むところよ！」

あー、もう。何してくれてんのさ。

・・・そう言うな幻夜。幽夜に貸せばこうなるって知ってたろ？

ま、そうだけどね。暫く様子見てようか。

・・・そうそう。お前が選んだ道なんだからよ。

そうだねえ・・・後全部頼んだよ。幽夜。

・・・おい、投げる気満々だったのかよ。

次回へ続く

第九十三話 奇術師の本気

side 幻夜 (幽夜)

bgm A Stranger I Remain

「んじゃ、行くぜ！」

霊夢「させない！皆！行くわよ！」

魔理沙「おう！」

妖夢「はい！」

鈴仙「は、はい！」

・・・上等じゃねえか！俺の存在意義があるってもんだぜ！

「オラオラオラオラ!!」

霊夢達は全員弾幕を撃ってくる・・・一対一は不利ってか？甘い!!

「幻術【騙された友人】!!」

魔理沙「うおわっ！」

鈴仙「キャッ!・・・あれ？当たって・・・」

当たらねえよ。只の時間稼ぎのスペルだからな。全部偽の弾幕だ。・・・そこを狙って撃つ!!

「ほーらよっ！」

妖夢「させません！」

「・・・チツ！」

惜しい。・・・なかなかやるじゃねえか。

霊夢「そこっ！」

「うわっとー！・・・ええい！」

数が多い！面倒だ！

・・・幽夜！半分借りるよ!?

あ？幻夜か？よく分からんがいいぞ？

・・・そいつと！

「よしよし、行けた・・・後ろに魔理沙！」

そう言うことね!!やるじゃねえか！

・・・よし！反撃と行こう！

bgm Cytus Ververg

「よし来たー！凍符【フリーズランス】!!」

魔理沙「なっ！何で分かったんだぜ!？」

・・・次！妖夢のスペルカード！

よし来た！丁度いい、幻夜、俺の体の能力はこう使い！

妖夢「貰った！人符【現世斬】・・・なっ！」

地面に腕を突き刺す！伸ばす！・・・よし！掴んだ！！

「捕まえた！」

霊夢「どうなってるのよその体!?!」

「新しい能力だな！教えねえがな！」

そのまま地面に叩きつける。

妖夢「ぐっ・・・！」

戻す。・・・どうだ？他にも使えるぜ？

・・・やるねえ。今度使おうかな。

・・・おい！話してる最中に悪いが、右から鈴仙の弾幕、上から魔理沙！霊夢は夢想天生の準備中だぞ！

・・・了解！幽夜！霊夢はあのスペルで撃退！魔理沙と鈴仙はいつもので行くよ!?!

了解した！行くぜ、相棒！

「『奇術【スリーフィリング】!!』」

幻夜「よし、出れた！行くよ！」

幻夜3「へいへい！行くぜ！」

「おうよ！．．．んじゃ、行くぜ！」

幻夜「先ずは僕！幻術【一感消滅】！」

魔理沙「．．．ま、前が見えないぜ！」

鈴仙「．．．あれ？耳が．．．」

「おいおい！視覚と聴覚かよ。お前らもやるじゃねえか！」

幻夜3「んじゃ、俺も！凍符【雪上の追跡者】！」

辺り一面雪景色、地面は氷つてか。最高だなあ！

幻夜「よし、僕は魔理沙、そっちは妖夢と鈴仙ね！」

幻夜3「よし来た！任せろ！」

悪いな、二人共、．．．って、瞬殺かよ！まあ、俺達のホームグラウンドの雪上で満身創痍と視覚、聴覚がねえんだし当然か。ちよつと本気出させてもらったぜ。

霊夢「くっ！．．．でも、これで！【夢想天生】！」

．．．マスターから霊夢の切り札、当たると死ぬ。と聞いてたが．．．

実に厄介そうだな。

「ま、今の俺達には勝てねえさ！」

もう一人じゃねえ。こいつ等がいるからな！

「奇術【オールコピー】!!・・・発動!【夢想天生】!!」

『せい!』

「黙ってるマスター!」

外道なのは承知してんだよ!!相手のスペルを丸写し、その10%上の火力なんてよ!!

「これでトドメだ!!」

霊夢「なっ!・・・くっ!」

・・・霊夢も倒れた。・・・何とか三人で勝てた・・・か。

幻夜「お疲れ様」

幻夜3「おう、お疲れさん。」

「ああ、お疲れ様。」

・・・ともかく、俺は勝てた。

side out

せこいわ。なんじゃあの【オールコピー】って。勝ててたまるか。

・・・実は幻夜、今、侵二以上の妖力がある。・・・何故増えたかは明確。こわっ、混沌とカオスこわっ。

咲夜「・・・先生、幻夜さん勝ちましたよ！」

絶対にあいつ反則だろ。・・・結構このスペルカードルールガバガバだな。(狂喜乱舞創作加担者)

『・・・そうだな。』

めでたいんだが、圧倒された霊夢達が酷い。・・・ったく。適当に理由付けて休ませるか。あれか、幻夜がイライラしてた、で行くか。・・・滅茶苦茶納得行くんだが。

幻夜「終わったよ〜」

『・・・おう、幽夜、お疲れ様。』

幽夜「俺の勝ちじゃねえ。俺達の勝ちだ。」

『ふーん、・・・変わったな。幽夜。』

ちよつと変わりすぎだがな。主人公かお前は。

幽夜「・・・ああ、何でこいつが必死だったか分かる気がする。」

『へえ・・・良かったじゃねえか。』

・・・勝てねえ。無理無理。本気の5割出さねえと負ける。

『・・・で、行くか？彼岸旅行。』

咲夜「いやそれ旅行じゃないですよね？」

幻夜「そうだねえ・・・行く？」

幽夜「行こうぜ。」

幻夜3「どうせ暇なんだ。さっさと行くぞ？」

咲夜「え？ちよつと待って下さい。」

はい決定。

『それでは4名様、ご案内ー！』

幻夜「お先！」

幽夜「そらよっ！」

幻夜3「ほいつと！」

咲夜「え、ちよつと何で私もキヤアアア!!」

『・・・ミスった。・・・ま、良いか。』

咲夜関係なかったな。・・・まあ、近くにいたんで。

・・・最高神＋奇術師＋少女移動中・・・

俺だけ先に出る。

『よっこいしよー！・・・ゴハツ！』

おい！誰だ上乘ったの！！

咲夜「すみません先生!!」

・・・全てを許そう。てか滅茶苦茶軽い。

『大丈夫大丈夫、まだまだ体は元気だか・・・てめえは駄目だ!』

人里幻夜は逸らす。幽夜も逸らす。幻夜は咲夜を担いで退けた後、サマーソルトで蹴り飛ばす。

幻夜「ぐっふう!」

咲夜「幻夜さん!?!」

蹴りの体制で出て来やがった。油断も隙もあつたもんじゃねえ。誰だこいつの飼い主。↑お前だよ！

『おい、寝てんじゃねえ。行くぞ。』

幽夜「・・・つたく、行くぞ幻夜。」

幻夜「・・・ほいよー、よっと。」

しれっと首の骨を折って衝撃を逸らして戻すな。気持ち悪い。(ど

ストレート)

『・・・ほい、じゃあ三途の川泳いで行くぞー』

幻夜「ほーい。」

幽夜「分かった。」

幻夜3「初めて泳ぐなあ・・・」

咲夜「いやいやいやいや!!泳ぐところじゃないですよね!」

ナイスツツコミ、しかし俺達は泳げる。否、俺は泳いだ!残念!

『・・・まあ、泳がないが。ちゃんと陸路で行くぞ。幻夜、凍らせろ「ういーつす。」よし、これで先に「違いますよね!」・・・チツ、ああそうだよ音速で飛んで行くんだ「いやだから違いますよね!」・・・死神探すぞ。この辺で寝てるだろうしな。』

今更だが、小町とも映姫とも面識がある。俺が川泳いで怒られたのは何を隠そう映姫。勿論お説教は聞き・・・流した!大体3時間聞いてからな。その先は極端論で受け流しを続けた。・・・小町はその時に会った。といっても何度か他にも会っている。え?知らない?普通すぎてネタにならねえんだよ!まいったか!!

幻夜「あそこで寝てる娘ー?」

娘ってなあ。・・・実際年齢コイツが上か。じゃあ仕方ない。・・・まあ、俺の呼ばれ方も・・・分かるよなあ?

『おい、また寝てんのか。起きろ!』

小町「うーん、もうちよつとだけ『ほぎけ小娘。』・・・痛ったあ!!」
デコピンで起こした。

『おい、また映姫に怒られるぞ。』

小町「うん?・・・あ!龍一兄じゃないか!」

・・・知ってた奴、挙手!・・・妹分が増えてんだよど畜生。

『よう、じゃねえ!また寝てたのかお前は!?!』

小町「いやー、あのー、これは、・・・そう!休憩だよ!」

『眼が右向いてるぞ?。「え?!」嘘だ。「あ、」・・・そう言うことにしてやるよ。・・・オイコラ右から三番目の魂!何しとるんじやゴラア!コンクリ詰めにして三途の川に沈めるぞゴラア!』

逃げた・・・ここまで来て何盗み働いとるんじや。侵二がいたら喰わせてるぞオイ。

小町「あはは・・・相変わらずだねえ・・・」

『相変わらずじゃねえよ。・・・あ、で、要件なんだが。この辺で花が咲き乱れてんだが、あの季節か?』

小町「・・・あー、多分そうだと思うよ。でも、一応四季様に聞いた方が良いかな?」

『・・・いやー、それはちよつと・・・』

幻夜と相性が絶対悪いだろうしな・・・

映姫「呼びましたか？」

来ちゃったよ。・・・うーわ、どうしようか。

次回へ続く

第九十四話 話を聞かない野郎共

side 龍一

映姫「呼ばれましたか？龍一様。」

・・・まあ来ますわな。この場混乱確定だな。

「二応な。・・・まあ、用があるのは俺じゃねえんだが。」

映姫「そうでしたか。・・・で、小町、貴女はまたまたサボっていましたね?」

小町「え、あー、」

幻夜「いやー?サボってなかったよ?」

いや、流石に亡霊がたまっている状態でその?は・・・

幽夜「オラ、キビキビ歩きやがれ。」

幻夜3「・・・ったく、幽夜、俺等の姿消すの面倒なんだからさつさとしろよ?」

幽夜「へいへい、次ー、」

咲夜「ええ・・・」

完全犯罪。今回だけだからな小町。感動してんじやねえ。

幻夜「ね?ちゃんと動いてるよ?」

映姫「……そのようですね。貴方は？」

幻夜「んーと、風見幻夜。用があるのは僕。」

とか言いつつ、最後の船を幽夜が蹴り飛ばして出発。パーフェクトだ、幻夜ズ。

映姫「……そのようですね。何用でしょうか？」

幻夜「んつとね、最近植物が咲き乱れてるんだけど、ここの作業らしいんだけど。どうなの？」

映姫「そうですね。こちらの作業……と言いますか、自然現象です。」

幻夜「あ、そうなんだ。いつ頃戻るの？」

映姫「後二、三日で収まるはずですよ。」

幻夜「オツケー。ありがとうねー。」

さて、一件落着、……とはならない。

映姫「……待ちなさい。」

幻夜「んー？」

映姫「貴方は少しマイペース過ぎます。」

そう、善業を詰めとの説教である。……これが面倒。

映姫「もう少し周りに合わせ「咲夜、今晚ウチでご飯食べる?」「え、いや、幻夜さん……」……聞いてますか!？」

幻夜ズ「「聞いてないよ? (ぜ?) (に決まってるんだろ?)」「」

『ツハツハツハ!!』

くっそ、予想通り過ぎて吹く。閻魔の前でそれは……

映姫「なっ……!」

幻夜「本人が聞く気が無いんだから仕方ないねー」

自分で言うな。

小町「……凄い人が来たもんだねえ。」

『仕方ねえよ。幻夜だしな。』

映姫「そのままだと地獄に落ちま「別に良くね?」「いいんじゃない?」「大丈夫だろ?」……」

咲夜「あはは……」

『ハハハハハハ!』

真正面から叩き潰す発言。……まあ幻夜なんぞを地獄に送ると確実に亡者共を統括して地獄を更なる地獄絵図にして帰って来るだろう。「ただいまー」なんて言うだろうなあ。腹痛い。

映姫「ぐぬぬ・・・！」

『やめとけやめとけ。こいつに説教は火に油だ。』

映姫「いいえ！風見幻夜、貴方は殺人と言う業を背負っています！それは『俺は？俺こいつの二倍はやってるぜ？』・・・止めて頂けませんか？」

殺人は言わないお約束だ。

幻夜「・・・じゃ、直すところないね？」

映姫「ぐぬぬ・・・」

幽夜「・・・おい、閻魔。」

映姫「なんですかこんな時に？」

唐突な幽夜の壁ドン。

映姫「な、ななななな何を？」

咲夜は顔が真っ赤、小町は隠すふりをしながら直視。・・・何やってんだ幽夜。

幽夜「閻魔、いや、映姫。・・・笑った方が可愛いぜ？」

映姫「ふえく？」

映姫、沈黙。

幽夜「・・・子供みたいでな？」

ぶち壊しだこの野郎。狙ってただろ。

小町「・・・全部手玉に取ってるじゃないか。」

そうか、ホステスの性格は幽夜か。

幽夜「・・・まだ興味はないがな。」

幻夜「やるじゃん。」

幻夜3「流石じゃねえか。」

駄目だこの幻夜ズ、

侵二「随分と面白い事になってますねえ・・・」

小町「し、侵二様!?!」

侵二「ああ、小町、ご苦労様です。・・・で、何故映姫は寝てるんですか?」

『幻夜にやられた。・・・で、お前は何でここに?』

侵二「ああ、言ってますでしたね。・・・私は人里、そしてこの担当者なんですよ。紫殿が嫌らしいので。」

マジかよ。コイツかなりの重労働してんじゃねえか?

『忙しいのな。』

侵二「主上が西行妖で死ぬ前の重労働を全部請け負った人に言われ
てもねえ……」

『いや、書類の山だけだろ?』

たかが10000枚の書類だけだ。一夜で終わる。それを二ヶ月……神界の手伝いよりましだな。

侵二「……その根性が恐ろしいですよ。」

『知らねえよ。もう慣れてんだよ。』

侵二「ま、そのおかげで仕事、少ないんですがね。助かってますよ。」

『そうかい。……おい!右から35番目の幽霊!列から出るな!おい小町!サボるな!どうせ六十年周期だろうが!今日ぐらい真面目に動けい!』

小町「は、はいっ!」

咲夜「先生、六十年周期って一体……」

『あー、あのな、これは自然現象って言っただろ?……厳密に言う
と、幽霊が六十年周期で大量発生する。すると、その発生した幽霊は
花に取り憑く。……で、花満開。……一応小町が回収係なんだが、
如何せんサボり魔だ。で、グツダグダになる。……その対策で俺の
式を一人貸し出す契約だったんだが忘れてたぜ。侵二だったのな。』

小町「さ、サボり魔……」

『事実だろ。……まあ一応、死神の中ではトップの成績なんだから
映姫と相談して抜擢したんだ。もうちよつと頑張ってくれや?』

小町「え、あー、わ、分かった。頑張らせてもらうよ!」

『上等!』

幻夜「じゃ、これで終わり?」

『ああ、終いだ。ご苦労。』

幽夜「……パツとしねえなあ。ま、霊夢達との勝負が面白かった
から良いんだが。」

幻夜3「……ま、いいんじゃない?」

幻夜「いや、せつかくだしさあ、……皆で幽霊集めない?」

咲夜「え?」

幽夜「……ま、俺等暇だし、」

幻夜3「良いんじゃない?」

侵二「良いんじゃないですかね?」

小町「い、良いのかい?」

侵二「ばれやしませんって。それにどうせ見つかったも、」

『俺が言いくるめるから大丈夫だしな。』

侵二「そうです。捻じ伏せられますよ。」

どうせこの件は侵二が担当だ。こいつが許可したんだから何も悪くない。

咲夜「・・・私も、今回はオルゴイ様から許可を頂いています。だから行けます！」

オルゴイの奴、「レミリア達も身の回り程度、並に出来ねばならん。」とか言つて、時々咲夜を休ませ、自分自身も身の回りの事をこなす。

奴曰く、「王であろうが神であろうがなんであるうが、自らの事は自らで少しでも行え。」との事。全くその通りだが、お前は本当に吸血鬼かと聞きたくなる。一度オルゴイが作業着を着て壁に釘を打ち付ける姿はどう見てもおっさんだった。

『許可あるんならオツケイ！行くぞてめえら！』

幽霊回収開始!!

幻夜「アクション！」

映画じゃねえ!!

次回へ続く

第九十五話 花咲き乱れる地で・・・

side 龍一

『・・・さーて、回収回収！おい、お前ら、そろそろ帰りな。』

幽霊自体は結構大人しいようで、声をかけると彼岸に帰る。幻夜と大違い。

小町「あ！こら！待ちな！」

まあ、逃げる奴もいるのだが。しかしだ。相手が非常に悪い。

幻夜3「よつと、動くんじゃねえぞ？動くと真つ二つだぜ？」

幻夜3は氷の糸で固定。ウォルターさんか貴様は。

咲夜「止まって下さい！」

咲夜は時間停止。

小町「・・・よつと！捕まえたよ！」

小町は【距離を操る程度の能力】で近づいて捕獲。

幽夜「おい！出てこねえと・・・」

侵二「私と幽夜でこころ辺全部更地にしますよ〜？」

幽夜、侵二は共同で脅す。元の世界だと犯罪です。

幻夜「ほうほう、君は長生きしたんだねえ．．．君は子供が出来たんだねえ。」

幻夜は話を聞いてスッキリさせて捕獲。．．お前そんなに優しくかったか？

『幻夜、お前そんなだったか？』

幻夜「ん？あー、凶暴なのは全部幽夜だったし、話聞いてると面白いしねー」

脅す幽夜を見ると納得がいく。いつもならあそこは幻夜だ。

侵二「．．．よしよし、大人しくして下さいね？」

『なあ、小町、侵二ってこの件になると何時もああか？』

小町「．．．うーん、ここ最近だけどね．．．最初は優しくかったんだけど、言う事を聞かない幽霊が増えてね．．．」

『じゃ、仕方ねえな。．．お前ら、あの兄ちゃんらに殺されたくなくなったら大人しくついてきな。．．じゃねえと食い千切られて死ぬぞ〜？』

心なしか幽霊が怯えた。．．事実しか言っていない上に、俺はもう慣れたぞ（白目）

侵二「失礼ですね．．．」

『不本意そうにするな。流れるように人里の敵を始末する野郎が。』

侵二「仕事ですから。」

プロフェッショナル、侵二の流儀。何も言えねえ。

『……ところで小町、後どれくらいだ?』

小町「うーん、……後は妖怪の山だねえ……」

『よし来た!』

息を吸う。

『……風魔あつ!!!』

吐き出す。

風魔「……何だあつ!!!」

『……幽霊回収しろおつ!!!』

風魔「……どんな奴だあつ!!!」

『……季節感の違う花に憑いてるはずだあつ!!!』

風魔「……了解したあつ!!!直ぐに回収……し終わったぞ。」

知ってたなああの野郎。

『ご苦労っ!……で、お前ら、何で寝てるんだ?』

小町「み、耳が……!」

咲夜「こ、声大き過ぎますよ・・・」

幻夜「あ、頭が・・・!」

『あー、悪かった。後幻夜、てめえは?だな。』

幻夜「あ、ばれた?」

『どれだけ付き合い長いと思ってた。その程度でダメージ受ける善人じゃねえだろ。』

幻夜「そだねー」

風魔「・・・で、これはどうするんだ?」

『おお、すまんすまん。こっちで回収する。』

風魔「・・・そら、妖怪の山の幽霊全部だ。噂は全部文から聞いていた。」

『そうか。』

小町「ありがとう、これで終いだよ。」

幻夜3「へえ、アンタ、糸操れたんだな。で、あだ名が死神、カツコイイな。・・・え?強敵と勝負して負けた?・・・楽しかったんだな。勝ちたかった?・・・じゃ、次の世界でもソイツと逢えたら良いな。また喧嘩する為に。」

待て、その会話してる奴は誰だ。俺知ってる気がするんだが。ご本

人じゃねえか。ドルネーズさんじゃねえか。

幻夜「幻夜？そろそろ行くよー？」

幻夜3「分かった！・・・じゃあな。アンタも頑張れよ！」

これにて、異変終幕・・・

幽夜「あ、映姫どうすんだ？」

・・・終幕しねえや。

侵二「私に任せて下さい。」

『お、おう。』

嫌な予感しかしねえ。

・・・最高神一団移動中・・・

映姫は・・・まだ寝てるな。

『侵二、行って来い。』

侵二「了解しました。」

何故か侵二がそこで見ていてくれ。との事なので、全員離れて見ている。俺は声も聞こえる。

『何するんだアイツ・・・』

侵二「映姫、そろそろ起きてください？」

映姫「……はっ！」

侵二「……起きましたか？」

映姫「し、侵二様！も、申し訳「いいんですよ。」え？し、しかし……」

侵二「……いいですか、単刀直入に言うとう働きすぎです。休みなさい。」

映姫「し、しかしですね。「ストップ」ふえっ？」

撫でた。……知ってた。

幻夜「……マスター、ポリスマン呼ぶ？」

『……呼ぶなバカ。』

犯罪一歩手m……いや、対象は13歳以下だし大丈夫だな。

侵二「無理は禁物ですよ？貴女は今でも必要以上に働いているんですから……」

映姫「わ、分かりました。……ですから、撫でるの止めて頂けますか？」

『……来るぞ、侵二の必殺技が。』

侵二「……駄目でしたか？」

出たあつ！侵二の「……駄目ですか？」効果は対象の女性を沈黙させる。……あの野郎、遂に女性の気を引いて逃げる技を極めやがった……しかし未だに本人は無自覚つてのが恐ろしい。

映姫「うっ！……い、いえ、そんなに駄目では……」

小町「……四季様のおんな姿、アタイ初めて見たよ……」

幽夜「やっぱあすりや良かったな。」

『やめろ。……ゲッ！あの野郎、出てきて大丈夫のハンドサインしてやがる……！』

やると思ったぜ我が悪友……！

侵二「……おやおや、皆様お揃いで。」

そしてこの白々しさ。最高だな！

『ああ、このメンバー全員で幽霊の回収してたぜ。……三日かかるのを半日で終わらせた。』

侵二「それはそれは……」

映姫「……お疲れ様でした。幻夜、貴方にも失礼な事を……」

幻夜「いいよー？僕はさ、何言われても……僕だから。」

幽夜「てなわけで、気にしちやいねえよ。……まあ、人殺しは俺には痛いかな。」

幻夜3 「おいおい、何じめつとしてんだ。やる事残ってんだろ？」

『え？なんか残ってたか？』

幻夜3 「お前もかよ・・・宴会だよ宴会！後、霊夢達にどう言い訳
付けんだよ？」

『あ。』

忘れてたぜ畜生!!

侵二「・・・そうだ、映姫、小町、貴女達も来なさい。」

小町「え？四季様はともかくアタイもですか？」

侵二「・・・駄目ですか？」

小町「うぐっ。」

コイツ、流れるように「駄目ですか？」を・・・!

『やーめーろっての!!』

畜生、どう始末つけようか・・・

次回へ続く

第九十六話 ただいま

side 龍一

『・・・あー、苦勞が増える・・・』

フリーダムにやって来たツケだろうが、これは酷い。

『・・・で、いつまで落ち込んでんだお前らは？』

霊夢「・・・」

魔理沙「・・・」

妖夢「・・・」

優曇華「私は大丈夫です。」

『なら良いんだが・・・お前等は？』

霊夢「・・・全然歯が立たなかった。」

魔理沙「全部一撃だったぜ・・・」

妖夢「今までの経験が使いませんでした・・・」

あ、それでか。

『・・・いや、今更だろうが。』

霊夢「え？」

『いやいやいや、言っちゃ悪いがな?・・・お前等に苦戦する程度の奴が、幻想郷が出来るまでの血で血を洗う時代を駆けられたと思うか?』

妖夢 「っ!それは・・・」

『無理、ぶつちやけ言う生き延びた方が奇跡。折角だから言っておく。・・・幻想郷での俺を含む野郎共と、確実な戦闘理由のある俺と野郎共は別物だ。天と地の差がある。で、今回は幻夜の、【自らで異変を止め、それまでの敵は倒す】と言う確固たる理由があった。だから幻夜、正確には幻夜、人里の幻夜、裏人格だった幽夜にぼろ負けした訳だ。』

霊夢 「・・・っ!」

『どうせお前らは【異変を止める】しか考えてなかっただろ?それでもしっかりした意志でもあるが・・・それじゃ一生無理だ。・・・誰も望んじやいなかったが、今や伝説の一部にまでなった野郎共をぶっ倒すなら、【確実に倒す】と言う一念を持って、倒さず・・・殺すつもりで来い。そうすりゃ怪我ぐらいは俺等も負う。壊夢以外。』

魔理沙 「・・・つまり、まだまだって事か?」

『そうだな。侵二のもうちよつとは一年かかる。採点が高い。俺のもうちよつとは・・・一日程度か?俺は辛口採点なんだ。ま、風魔に言わせりゃ「顔を洗って出直せ」のレベルだろうな。』

霊夢 「そう、だったの・・・」

落ち込むのはよく分かる。・・・スペルコピーの幻夜、千変万化の

幽夜、ゲンヤー・C・ドルネーズ（仮名）の三人組は俺もしんどい。絶対に相手したくない。

『ま、そうそう気落ちするな。結局のところ、俺達を止められた奴はいないからな。』

幽夜「そうそう、特に俺なんか戦うために生まれた生き物みたいなもんだしな。」

『なんだよ、聞いてたのか。・・・ま、そんな訳だ。』

魔理沙「・・・よし！絶対に侵二さんを超えるぜ！」

妖夢「私も絶対に風魔さんを「師匠と呼べ馬鹿者!!」は、はいっ！」

「聞こえてんのか風魔。」

優曇華「・・・私も、頑張ってみます・・・！」

ちなみに咲夜は既に理解したらしく、幻夜、幽夜、ゲンヤー戦の時に言ってきた。

霊夢「・・・龍一さん、」

『何だ?』

霊夢「・・・絶対にいつか倒すわ。」

・・・やっぱ良いなあ。こういうのは!!

『・・・ああ、止めてみるよ。』

こうじゃねえとつまんねえな。

幽夜「いずれ俺もか……」

『ああ、叩き潰される覚悟してろよ。』

幽夜「ああ、……なあ、マスター。」

『あ?』

幽夜「サンキュー、色々世話になった。」

『ほぎけ、これからも馬車馬のように働いてもらうからな。』

幽夜「マジかよ……」

『うるせえー! さつさと侵二の手伝いして来い!』

幽夜「馬車馬ってそれかよ!」

『それしかねえだろ! 行け!』

幽夜「へいへい!」

『ったく……』

取り敢えず、話しながら作っておいた料理を宴会場に投げる。

『へい! 追加!……っち、あの野郎……』

幻夜の野郎、寝てやがる……

『……ロック、』

ライフルを片手で構える。

『照準せず、角度最悪、姿勢論外、……発射、しなくていいか!』

ライフルを降ろす。……よくよく考えるとあの野郎、最近まで大怪我状態だったんだっけな。

『……ま、今回きりだぞ。』

ちなみに、狙撃準備をしながら作っていた料理は出来上がり、酒で次々に客を酔い倒す壊夢と萃香は結局弾幕でぶち抜いた。

『……ま、日常茶飯事だな。』

映姫「いいですか？ 貴方は……」

映姫も本職(?)の説教に、

侵二「小町！ 働くんならそれ運んでください。」

小町「分かったよ！」

小町はいつもはサボる癖に今回は仕事を、……やつぱいい仕事するじゃねえか。選んで正解だな。

魔理沙「よし！ 霊夢！ 勝負だ！」

霊夢「いいわよ!」

向こうでは弾幕ごっこ、

オルゴイ「・・・そうか、ゆつくり出来たか。」

咲夜「はいっ!」

オルゴイ「・・・やはりレミリア達に家事は難しいようだ。身長が
なあ・・・」

咲夜「あはは・・・」

あつちは・・・何やってんだ?

妖夢「・・・師匠!」

風魔「・・・ぬ?」

妖夢「・・・今まで以上に、鍛えて頂けますか!?!」

風魔「・・・気づいたか。」

妖夢「え?」

風魔「・・・いや、いつ気づくかと思ったが・・・今までの特訓は
【基本的な体力を上げる】だけだ。剣術にはあまり関わらん。」

妖夢「ええ・・・」

あそこは・・・何も言うまい。

『・・・あー、平和平和。』

幽々子も最近は食事量が一般の女性まで減少、侵二と俺が嬉しさのあまり発狂した。妖夢は普通に喜んだ。

『・・・よいしょつと、』

さて、平和は置いておいて・・・次は何が起こるかねえ？

『ま、普通には終わらせねえさ。』

だつてつまんねえしな！

・・・なんて言ったら夜が更けた。幻夜起こすか。

side out

side 幻夜

『おい、そろそろ起きろ。』

「んー？」

『てめえ、昨日は俺の家で寝るし、そろそろお前の家に戻れよ。』

「・・・そうだね。幽夜、幻夜、」

幽夜「あ？..」

幻夜3「俺はもうお前の中にいるが？」

「オツケイ。・・・帰ろつか？」

幽夜「そうだな。帰ろうぜ？」

幻夜3「俺たちの家にな。」

『へいへい、途中でドブに落ちるなよ。じゃあな。』

「ん、じゃあね〜」

・・・奇術師移動中・・・

そう、僕等には帰れるところがまだある。その為に戦うし、その為に頑張る。

幽香「・・・お帰りなさい、幻夜。」

・・・そして絶対に帰ってきて言うんだ。

「うん！ただいま!!」

・・・何かあったの？

・・・うーんとね、ま、色々かな？

・・・適当だな幻夜。

s i d e o u t

幻夜の章、完。

次回へ続く

第十三章 ふと増えた野郎共の日常
第九十七話 夏の風物詩

side 幽夜

「・・・つたく、幻夜の野郎、飯作るなら最初に材料確認しろっての
！」

なーにが「卵買ってきてー」だ、ふざけてんのか。

「・・・さつさと届けに行くか・・・」

ま、ぶつぶつ言いながら買ってる俺が言えた立場じゃねえな。

??? 「驚けえ!!」

「あゝ?」

変なのに絡まれたか・・・チツ、

「あゝ?てめ、今なんつつた?ぶつ殺されたいか?」

??? 「うえ?あ、あの、・・・ご、ごめんなさい!!」

「・・・分かれればいい。」

あー、幻夜の野郎が甘いとか言えねえなあ・・・

??? 「うう・・・ごめんなさい。」

「……いや、もう怒ってねえが、誰だてめえは？」

???'「わ、わちきは多々良小傘（たたらこがさ）、傘の付喪神。あ、貴女は……」

「何だ、それで脅かしたのか。……残念だが、俺は幽夜、妖怪だ。相手が悪かったな。」

小傘「なんだあ……」

「で、脅かしたいのか？」

小傘「そ、そうなんだよ、ここ最近全然人が来なくて、脅かせなくてえ……」

「オイコラ泣くんじゃねえ!……くつそ、飛んで帰れば良かったな。」

……くそつ、これが乗り掛かった舟って訳か。仕方ねえ。

「……おい小傘、」

小傘「は、はい?」

「脅かしたいんだな?」

小傘「う、うん……」

「仕方なく手伝ってやる。」

小傘「ほ、本当に!？」

「ああ、どうせ卵は夜まで要らんしな。」

小傘「・・・ありがとう！」

「構いやしねえさ。ほれ、行くぞ。」

side out

・・・十分後・・・

side 龍一

『で？幽夜が帰ってこねえと？』

幻夜3「ああ、あの野郎、買い物に行ったきり帰ってこねえんだ。どこで何してるんだか・・・」

『俺に聞くな。』

で、周囲が暗くなってるのは何故だ。

『なあ幻夜、お前何かして「驚けえ!!」ハンズアップ!!「え？え？」』

曲者！

幽夜「やめろ小傘！そいつ等は脅かせな・・・遅かったな。」

咄嗟に銃口を向けたが・・・何やってんだこいつら。

『何だ、そこにいたのか幽夜、幻夜が探してたぜ？』

幽夜「悪かった悪かった。ところでマスター、銃口降ろしてやってくれ。」

『あ、すまん。』

小傘「あわわわわわ・・・」

幽夜「おい！焦ってんじやねえよ！」

小傘「はっ！」

幻夜3「・・・脅かすつもりだったか？」

幽夜「・・・まあそうなんだが、なかなか人が来ねえからな、しかも来たのがマスターと幻夜。最悪だ。」

『・・・んだよ、そんな面白い事やってんのかよ！』

けしからん、俺も混ぜろ。

『あー、嬢ちゃん、名前は？』

小傘「た、多々良小傘です・・・」

ああ、あの傘の妖怪か。

『了解、俺は神矢龍一、つても、絶影の方が分かりやすいか。』

小傘「ぜ、絶影・・・」

『そ、あんま気にすんなよ。・・・で、そこにいるのが幻夜。』

幻夜3「よろしく。」

『・・・で、幽夜、何で手伝ってんだ?』

幽夜「・・・乗り掛かった舟って奴だな。まあ、小傘の話聞いてるとちよつと・・・な?」

思念伝達で全部聞こえてくる。・・・苦労してんなあ・・・

『そうか、じゃ、俺達も混ぜろ。』

幻夜3「おい、俺達ってどういう意味だ。」

小傘「い、良いんですか!?!」

『混ぜさせてくれ。・・・面白そうだから手伝う。』

小傘「お、お願いします!!」

『成立だな。』

幽夜「・・・悪いな、助かる。」

幻夜3「チツ、・・・いいぜ、俺も乗った。」

さて、野郎共集めるか・・・

・・・一時間後・・・

集まった奴らは、小傘、風魔、壊夢、侵二、幻夜、幽夜、幻夜3、才

ルゴイ、俺。この暇人共が。．．．てか何でオルゴイ来たんだ。

『これだけ集まれば肝試し出来んじゃないやねえの?』

侵二「この近くに墓地がありますし、．．．出来ますね。」

オルゴイ「ならば大人数を呼ぶか。新聞などがあれば．．．」

風魔「ならば文に頼もう。．．．しかし、道具はどうする?」

壊夢「この前解体工事やったぜよから、それなりに物はあるはずだよ。どう進ませるぜよ?」

『それならもう出来てる。．．．最後は小傘で決めるからな．．．』

幽夜「最後は俺が手伝う。良いな?」

小傘「う、うん。」

『幻夜、お前らは脅かす筆頭だ。良いな?』

幻夜＋幻夜3「了解。」

『じゃ、実行は明日って事で。．．．本気出すぞてめえら!』

四凶＋オルゴイ＋小傘「応! (はい!)」

肝試しを本気でするとどうなるか教えてやろう。

side out

「……肝試し?」

魔理沙「そうだぜ! これを見てくれ!」

「どれよ?」

私は新聞を読む。

「……人里の離れで肝試しを開催、ルールは弾幕、空中移動の禁止。主催者は……龍一さん!」

魔理沙「そうなんだぜ! しかも侵二さん曰く、「霊夢達にはテストの対象になって貰います。」だそうだぜ!」

「これ、何時やるの?」

魔理沙「今日だぜ!」

「今日!」

魔理沙「ああ! 参加するのは私だろ? 咲夜、妖夢、優曇華、後は霊夢だけだが、どうするんだぜ?」

「……私も行くわ。」

魔理沙「よし! 決定だな! じゃあ、夜にまた会おうぜ!」

「ええ、そうね。」

・・・夜・・・

魔理沙「霊夢！遅いぜ！」

「あんたが早すぎるのよ！」

咲夜「待ったかしら？」

妖夢「暗いのは嫌ですよ・・・」

優曇華「こ、怖いのは苦手です・・・」

「・・・何で来たの？」

妖夢「・・・師匠が、「怖い？・・・この戯けがあっ！」って、無理矢理に・・・」

優曇華「・・・私は姫様に「行ってきなさい、命令よ！」って・・・」

「・・・大変ねえ。」

幻夜「そうだねえ・・・」

妖夢「ひいっ！」

幻夜「あ、ごめんごめん。・・・皆揃ったね？じゃあ、ルートに従ってね？ごゆっくりい〜」

妖夢「さ、早速驚かしに来ていますよ・・・」

「あ、まあ、行きませう？」

魔理沙「そうだぜ！行こうz・・・うわあっ！」

咲夜「一体何が・・・きやあっ！」

「な、生首・・・！」

な、何で生首が・・・!?」

生首「・・・キヤツハハハハハ！」

う、動いたツ!!

妖夢「イヤアアアア!!」

優曇華「帰りたいですうう!!」

???「キヤーツハツハツハ!!」

「誰!?今のは!?!」

魔理沙「・・・なあ、これってまずくないか？」

「よ、予想以上ね・・・」

咲夜「・・・ひ、久しぶりに焦ったわ・・・！」

優曇華「もう嫌ですう・・・！」

妖夢「師匠おお・・・！」

s i d e o u t

まだまだ夜は始まったばかり・・・

次回へ続く

第九十八話 ようこそ地獄へ 表

side 霊夢

妖夢「イヤアアアア！」

優曇華「キヤアアアア!!」

「っ！何で火の玉が・・・！」

しかも幾つも・・・！！

魔理沙「に、逃げようぜ！」

咲夜「魔理沙！下！・・・下に!!」

魔理沙「・・・え？うわああつ!!」

「・・・手！」

魔理沙の足を地面から生えた手が掴んでる!?!・・・何？何なのよ!?!

魔理沙「・・・は、離れろおっ!・・・頼むからあ・・・！」

手が離れた。しかも手を振ってる・・・

魔理沙「・・・こ、怖かったぜえ・・・」

咲夜「・・・確実に驚かされるわね・・・」

「・・・そうね。」

妖夢 「イヤアアアア．．．あれ？」

優曇華 「．．．火の玉が消えています！」

「そう、なら早く．．．あれ？」

雨．．．？

咲夜 「．．．何でいきなり雨が降ってるの？」

「分からないけど、急いで先に行きましょう！どンドン強くなってるわ！」

．．．少女達移動中．．．

魔理沙 「どンドン雨が強くなってきてるぜ！」

妖夢 「もう嫌です！」

優曇華 「姫様あ．．．」

咲夜 「あ！目の前に小屋があるわ！急いで入りましょう！」

「如何にも罨っばいけど．．．行きましょう！」

小屋に飛び込んだ途端、雨が更に降りだした。

「危なかったわね．．．！」

??? 「おやおや、お疲れ様です。」

魔理沙「・・・！ど、何処だぜ！」

妖夢「・・・一体何処に・・・！」

優曇華「キヤアアアア！」

咲夜「優曇華！どうしたの!？」

優曇華「う、上に、」

「上？」

「恐る恐る上を見上げると・・・

侵二「ここです、ここ。」

「イヤアアアア！」

侵二さんが、天井に足を付けて立っていた。

魔理沙「うわああっ！」

咲夜「ツツツツ!!」

妖夢「キヤアアアア！」

侵二「アツハハハハハハ!!・・・し、失礼。ここは休憩ポイントです。ちよつと脅かしたかったんです。すみません。」

よく見れば一本の蠟燭が立っていた。

妖夢「よ、良かったあ……」

優曇華「もう帰りたいですう……!」

咲夜「……」

魔理沙「そろそろキツイぜ……」

「……こゝ、こゝで終わり?」

侵二「ハハハ、冗談も甚だしいですね。」

……え?

侵二「ここまではまだまだ前座。……ほら、」

何処からか鐘の音が……!

「……こゝ、鐘なんて無いはずよ?」

侵二「ほら、」

蠟燭が消えた……!

妖夢「い、嫌ああ……」

あ、足音も……!

侵二「ほらね?……さて、頑張つて下さいね。」

魔理沙「……も、もう勘弁してほしいぜ……！」

侵二「難しいですね。……では、行ってらっしゃい。

あ、勿論後ろの方々もですよ？」

「……つつつつつ!!!」

そのまま私達は後ろを見ずに走って逃げた。

「……はあ、はあ、はあ、」

優曇華「もう帰らせて下さい……！」

咲夜「……私も、限界よ……！」

そう言っていると、何かが飛んできた。

魔理沙「な、何なんだぜ次はあ!？」

「い、蝙蝠よ!!」

??? 「だけだと思っじゃん？」

咲夜「……!キヤアアア!!」

「咲夜!？」

咲夜「助けて、引っ張られて……！」

「分かったわ!」

魔理沙「引っ張れえ！」

咲夜「キャツ！……ありがとう、た、助かったわ……」

でも、一体何に……？

妖夢「霊夢さん！あれ！」

「……あれは！」

最初に魔理沙が掴まれた手……!!

優曇華「……な、何か持ってますよ。」

「て、手紙？」

しかも律儀に渡してきた。

「あ、ありがとう。……き、切り裂き魔に注意？ちよつと、これどう言う……あれ？」

いない……？

???「……らせろお。」

「……っ！」

妖夢「な、何か居ますよ！」

魔理沙「お、落ち着け、大丈夫だぜ。」

??? 「……らせろお！」

優曇華 「……ひっ、」

??? 「……斬らせろおっ！」

「キヤアアアア！」

魔理沙 「ウワアアツ！」

咲夜 「キヤアアアア！」

妖夢 「イヤアアアア！」

優曇華 「キヤアアアア！」

??? 「待てえい！斬らせろお！」

「ど、どうするのよー！」

魔理沙 「走るしかないぜ！」

妖夢 「イヤアアアア！」

優曇華 「うわあああん!!」

咲夜 「霊夢！前！」

「えっ？……つつっ！」

大量の腕・・・!!

??? 「おいでえ・・・?こつちにおいでえ・・・」

ネエ? オイデヨオオオ!!!」

「い、イヤアアアアツ!!!」

魔理沙 「もう嫌だぜえええ!!」

妖夢 「うわあああん!!」

咲夜 「イヤアアアア!」

優曇華 「もう嫌ですつつつ!」

私達は遮二無二走り出した。

??? 「イーチ、ニーイ、サーン、・・・ミイツケタア!!!」

妖夢 「イヤアアアア!」

??? 「後ろの正面、ダーレダ?」

優曇華 「ヒイイイ!!!」

??? 「どーコーダー?」

咲夜 「・・・!!!」

??? 「カーゴーマーガゴーマー」

魔理沙「……もう限界だぜ……」

??? 「キヤーツハツハツハ!!」

「キヤアアアア!」

遮二無二走り続けた。途中、墓が倒れたり、地面から手が生えてきたが、走り抜けた。

優曇華「い、いつまで続くんですかあ……!?」

咲夜「……見て! ゴールよ!」

??? 「「「「ニガスカア!!!!」」」」

「急ぐわよ!!」

妖夢「幽々子様あああ!!」

魔理沙「二度と肝試しなんて御免だぜえええ!!」

そして、私達は……

幽夜「……うーい、ご苦労さん。」

「お、終わったあああ!」

等々ゴールに辿り着いた。

「魔理沙「・・・暫く夜は外に出れないぜ・・・」

妖夢「えつぐ、うう、怖かったです・・・」

優曇華「も、もう嫌です！」

咲夜「・・・さ、流石に怖かったです・・・！」

幽夜「・・・ご苦労さん。・・・皆ちゃんというな？」

六人。」

「・・・？」

え？六・・・人？

「ま、まさか・・・」

幽夜「え？後ろにいるぜ？」

そして、ついつい・・・

振り返ってしまった。

??? 「・・・驚けえっ!!!」

「「「い、イヤアアアアッ!!!!!!」
「「「」

それから先、私達はどうやって帰ったか覚えていない。

s i d e o u t

それ以来、博麗の巫女たちを怯えさせた肝試しとして、暫くの間有名となった。

次回へ続く

第九十九話 ようこそ地獄へ 裏

霊夢達を真面目に怯えさせた肝試し。その少し前・・・

Side 龍一

『よし、最終確認。全体的には俺と幻夜と人里幻夜がメインで脅かし、風魔は背景、天候。壊夢は音。オルゴイは景色と蝙蝠。幽夜と小傘は共同で王手な。侵二は出来るだけ案内役として怖がらせてくれ。』

侵二「了解しました。」

『んじや、全員配置につけ。・・・二人ぐらいは泣かそうぜ。』

幻夜「悪い趣味だねえ・・・嫌いじゃないけどね。」

小傘「あれ？この人達結構外道・・・」

幽夜「今更か。ここには化け物と外道しかいねえぞ。」

風魔「外道とは失礼な。せめて卑怯者と言え。」

幽夜「変わらねえだろ!？」

『うるせえ黙れ!・・・来たぞ。幻夜!』

幻夜「ほいさー!」

・・・まずは暗闇からの幻夜の出現で掴んだ。すぐさま侵二から貰った生首を幻夜3の糸で操ってもらう。声は俺が担当。

『・・・キヤツハハハハハ！』

妖夢「イヤアアアア！」

成功。続いて第二波！声色更に変更！

『・・・キヤーツハツハツハ！！』

霊夢「誰!?!今のは!?!」

私だ。

『・・・次、風魔、侵二、火の玉担当、行け！』

侵二「了解。」

風魔「承知。・・・五行、炎！」

風魔の炎に侵二の翼を上乗せして移動させる。・・・これが歪な軌道の秘密だ。

『・・・次！幻夜GO！』

幻夜3「あいよっ！」

幻夜が地面に潜る。幻夜3の特徴的な能力は・・・

魔理沙「うわああっ！」

地面に潜る。・・・と言うか、地中を泳げる。

魔理沙「・・・た、頼むからあ・・・」

『幻夜、手振って帰って来い。・・・フェイズ1終了。全員引き上げだ。・・・そして風魔、やれ。』

風魔「承知・・・五行、水破！」

やっぱり夜は雨だろ。・・・これで壊夢がわざとボロボロに作った屋敷に行くはず・・・

『風魔、もつとやって良いぞ。』

風魔「そうか！・・・滅！妖！水！」

雨量増加。

『よっしゃ、入った！侵二！行け！』

侵二「御意！」

さて、ここからが正念場だ。覚悟しやがれ。

side out

side 侵二

「・・・さて、蠟燭の準備も完了。では、合図したらお願いします。」

『へいへい、・・・風魔、壊夢、スタンバイ。』

霊夢 「危なかつたわね・・・！」

よしよし、来ましたね。天井にへばりついている甲斐がありました。さて、イタズラ開始。

「おやおや、お疲れ様です。」

魔理沙 「・・・！ど、何処だぜ!？」

妖夢 「・・・一体何処に・・・！」

クツクツクツ・・・

優曇華 「キヤアアアア！」

あ、気づかれましたね。

咲夜 「優曇華！どうしたの!？」

優曇華 「う、上に、」

霊夢 「上?！」

「ハハハです、ハハハ。」

霊夢 「イヤアアアア！」

魔理沙 「うわああっ！」

咲夜 「ツツツツ!!」

妖夢 「キヤアアアア！」

こ、これは面白い・・・！

「アツハハハハハハ!!・・・し、失礼。ここは休憩ポイントです。ちよつと脅かしたかったんです。すみません。」

妖夢 「よ、良かったあ・・・」

優曇華 「もう帰りたいですう・・・！」

咲夜 「・・・」

魔理沙 「そろそろキツイぜ・・・」

霊夢 「こ、ここで終わり？」

さて、休憩終了。覚悟して下さいね。

「ハハハ、冗談も甚だしいですね。」

霊夢達の表情が一変。ここだ。

「ここまではまだまだ前座。」

床を一度叩く。壊夢出動の合図。

「・・・ほら、」

ナイスタイミング、鐘、ちゃんと鳴らしてくれましたね！

霊夢「……ここ、鐘なんて無いはずよ!？」

続いて地面に電気を流す。風魔スタンバイ。

「あら、」

見事な隙間風。蠟燭が消えましたね。……ついでに気温まで下げ
て……

妖夢「い、嫌ああ……」

極め付けですね。……足音を関節を鳴らして再現。ちよつとした
テクニクですね。

「……ほらね?……さて、頑張ってくださいね。」

魔理沙「……も、もう勘弁して欲しいぜ……!」

現在恐怖感は高いはず。なら追加で……!

「難しいですね。……では、行ってらっしゃい。」

さあ!どうなりますかね?」

「……あ、勿論後ろの方々もですよ?」

ま、?なんですが。

霊夢達「……つつつつ!!」

あ、決まりましたね。後ろすら見ずに逃げましたね。

「ククク、・・・アーツハツハツハ!!」

最高ですね。

「・・・あ、主上、フェイズ2終了。ラストスパートどうぞ。」

『了解。外道。・・・オルゴイは蝙蝠で幻夜とコンビ。幻夜はまだ驚きの薄い咲夜に行け。』

さて、そろそろ引き上げましょうか。

side out

side 龍一

何てことしやがったあの外道は。滅茶苦茶怖がつてんじやねえか。・・・ま、止めないがな!

『オルゴイの蝙蝠は・・・何じやありやあ!?!大群じやねえか!』

狂気の沙汰じやねえか!五百はいるぞあれ!

魔理沙「な、何なんだぜ次はあ!?!」

霊夢「こ、蝙蝠よ!」

幻夜3「だけだと思っうじやん?」

俺もそうだと思っただぜ(適当)

咲夜「……！キヤアアアア！」

脅かすって本気かアイツ！脚掴んで引っ張って……近くに井戸ま
であるじゃねえか！完全に引きずり込むつもりかよ！

霊夢「咲夜!？」

咲夜「助けて、引っ張られて……！」

霊夢「分かったわ！」

魔理沙「引っ張れえ！」

頑張れー、幻夜、そろそろ次だ。

咲夜「キヤツ！……ありがとう。た、助かったわ……」

『幻夜、準備。』

次は幻夜が手紙を渡すはず……ちなみに内容は【切り裂き魔に注
意】……誰か分かるな？

風魔「……らせろお。」

滅茶苦茶ノリノリじゃねえか風魔。

妖夢「な、何か居ますよ！」

魔理沙「お、落ち着け。大丈夫だぜ。」

と、思うだろ？……野郎、全員出動。所定の位置でスタンバイ。

風魔「……らせろお！」

優曇華「……ひっ、」

優曇華と妖夢がもうちよつとだな。……やれ風魔。

風魔「……斬らせろおっ！」

霊夢「キヤアアア！」

魔理沙「ウワアアツ！」

咲夜「イヤアアア！」

妖夢「イヤアアア！」

優曇華「キヤアアア！」

風魔「待てえい！斬らせろおっ！」

霊夢達は再び走り出した。……よつしやラストスパート!!

『幻夜！』

幻夜3「おいでえ……？こつちにおいでえ……

ネエ、オイデヨオオオ!!!」

霊夢「い、イヤアアアツ!!!」

妖夢「うわあああん!!!」

『一人目!・・・次!幻夜!』

幻夜「イーチ、ニーイ、サーン・・・ミイツケタア!!!」

妖夢「イヤアアアア!」

『次!・・・は俺か!』

行くぜ!

『後ろの正面、ダーレダ?』

優曇華「ヒイイイ!」

これは楽しい。

『次!風魔!』

風魔「どーコーダー?」

咲夜「・・・!!!」

『侵二い!行けえッ!』

侵二「カーゴーマーガゴーマー」

魔理沙「・・・もう限界だぜ・・・」

『オルゴイ!』

オルゴイ「キヤーツハツハツハ!!」

キヤラが違うツ!!

霊夢「キヤアアアア!」

『つしゃ!壊夢!後作りの墓倒せ!幻夜!手増やせ!』

咲夜「・・・見て!ゴールよ!」

『「「「「ニガスカア!!!」」」』

・・・貴様等!即刻ターン!止めのラストフェイズ行くぞ!

野郎共「了解!」

大急ぎで隠れて観察に移る。・・・妖夢と鈴仙は泣かせたな。最高。

『・・・来たぜ。』

幽夜「・・・ご苦労さん。・・・皆ちゃんといるな?」

・・・さあ、これが・・・

幽夜「・・・六人。」

俺達の、

霊夢「・・・?」

幽夜「ほら、後ろにいるぜ？」

小傘「・・・驚けえっ!!!!」

本気の脅かしだ。

霊夢達「い、イヤアアアアッ!!!!!!」

一目散に逃げていった。・・・ククク、

『アーツハツハツハ!』

幻夜+幻夜3「ハハハハハハハハハ!!!」

侵二「クククククク!!」

壊夢「ワーツハツハツ!!」

風魔「フハハハハハ!」

オルゴイ「クハハハハハハ!!」

小傘「や、やった!」

幽夜「ハハハハハハ!・・・ああ!お前が止めをさしたんだ!!やる
じゃねえか!・・・ハハハハハハ!」

駄目だ、笑いが止まらねえ・・・!

『ハハハ!・・・はあ、はあ、・・・お疲れさん!満足しただろ?』

小傘「はいっ！ありがとうございますっ！」

風魔「心なしか妖力が増えているようだな。良い事だ。」

小傘「ありがとうございます！・・・幽夜、ありがとう！」

幽夜「構いやしねえよ。・・・ま、これからも頑張れよ。」

小傘「うん！・・・じゃあね！さようなら！！」

小傘は何処かへ飛んで行った。

幽夜「・・・あー、楽しかったあ・・・！！」

『・・・ああ、最高の夏だな！』

霊夢達にとっては最低の夏だろうな。・・・ちよつとやり過ぎた。反省。

side out

この後、霊夢達を怯えさせた肝試しとして、一躍有名に、俺達も暫くの間、恐怖の九人組として恐れられた。が、俺は、『・・・誠に不本意だ。せめて外道八人組にしてくれ。（小傘は除く）』と堂々と言い放った。反省してなかったわ。

ちなみに、後日風魔が涙目の妖夢に怒られたの言うまでもない。見たかったなー

次回へ続く

第百話 買い物

side 龍一

『……え？香霖堂？』

いきなり霊夢が知ってるかと聞いてきたが……行ってねえなそういえば。

「行ったことあるの？」

『ねえわ。……えーつと、あった。魔法の森の奥か。』

「……その目、便利ね。」

若干呆れつつ、羨ましそうに霊夢が言う。

『……まあ、千里眼ではないから中途半端だな。見えるっちゃ見える。』

俺は適当に返す。正直この能力はいらん。しかも中途半端。

「……で、良ければそこでお茶の葉を買ってきて欲しいのだけれど……」

申し訳なさそうに霊夢が言うが、正直侵二共のように顎で使ってもらって構わない。

『良いぜ。おみくじ作りで忙しいだろ？』

以前、博麗神社の名物作ろうぜと立案し、霊夢と野郎共の間で決

まったのがおみくじ。普通に大吉、中吉、小吉、吉、凶、大凶。オリジナルで四凶・・・誰だ立案したの!?

「・・・神様なのに使っちゃってごめんなさい・・・」

『構わねえよ。・・・ちよつと肝試しの件もあるしな。』

瞬間、霊夢の顔が引きつる。

「・・・あ、あれは怖かったわ・・・」

ちよつとやり過ぎたか・・・あのままあれは？盛、日替わりで幻夜ズが登場、小傘もずつとそこで脅かしをしている。特に幽夜が怖いとか。

『まあ、取り敢えず茶だな？・・・風魔と幽夜でも連れて行くか。』

今日の肝試しのシフトは幻夜だったはずなので幽夜を呼ぶのは決定。

「ありがとう!」

ぱつと霊夢の顔が明るくなる。

『気にすんな。・・・じゃあな!』

そう言つて俺はふらふらと歩き始めた。

・・・と、言うのが少し前。

「何で俺と風魔誘つたんだ?」

鬱陶しそうに聞くな幽夜。

『てめえの新しい武器探し、風魔も確か疾風刀ぶつ壊れただろ?』

風魔に聞くと、笑いながら答えられた。

「うむ、・・・直してはいるが、折角なので武器を変えようと思ってな。しかし、なかなか案が浮かばん。お手上げだ。」

『だが、月はどうしたんだ?』

真顔で答えた。

「手刀だ。」

『ふざけてやがる・・・』

刀ならオツケーってか? やかましいわ。

「お、見えてきたぜ!」

そうこうしつつ歩いていると、目的の場所と思われる場所に着いた。

・・・如何にも古そうな店だが、案外落ち着きがあり愛着が持てそうな家だな。・・・こんなデザインでも良かったな。

『さて・・・邪魔するぞ。』

「入るぜー」

「失礼する。」

すると店の奥から落ち着いた声が聞こえる。……うむ、窓から入れば良かったか？

「いらっしやい。……おや、見ない顔だね。」

『……まあ、俺は最近来たしな。初めまして。博麗神社に何故か祀られている神様だ。』

未だに何故俺が祀られたかが分からん。前世で祀られていた方に全力で土下座したい。

「初めまして、僕は森近霖之助（もりちかりんのすけ）だ。……博麗神社に神様がいたのかい？」

『ああ、そうらしい。……で、名前は神矢龍一。よろしく。』

「……驚いたね。あの神社の神様はそんなにお偉いさんだったのか……」

霖之助は驚いたようだが……調子が変わらん。侵二じゃねえか。

『……ま、気にしなさんな。で、そこにいるのが風魔と幽夜。』

「よろしく。……ところで、今回は何を？」

『霊夢が茶を欲しがっててな……どれを買ってるんだ？』

「ああ、ちよつと待っておくれ……あった。これだ。」

霖之助が引き出しから至って普通の茶葉を取り出した。

『サンキュー。．．．にしても、変わった物が多いな．．．』

それを聞いた霖之助は笑った。

「．．．色々と魔理沙が集めてきたり、僕も拾いに行くからね。．．．
ところで、これは何か分かるかい？」

そう言つて示されたのは冷蔵庫．．．つてそのまんまだな。

『．．．あー、それは冷蔵庫だな。物を冷やす為に使うものだな。』

「．．．分かるのかい？」

驚かれた様子で聞かれた。．．．分からねえと思つたのか？普通なら分からんから大丈夫だ。

『ま、ちよつとは．．．ところで、武器はないか？』

「ああ、一応あるよ。．．．この奥だね。何故だい？」

『そこの二人組が必要としていてな。』

と、言いつつ覗いてみるが．．．ハルバード、レイピア、珍しい武器が多い。

「二人は何か希望の物が？」

相変わらず適当そうに幽夜が答える。

「そうだなあ、一応槍があるし……変わった武器かねえ……？」
貴様の基準が分からん。

「私は……うん？」

「風魔は普通に刀を物色しているが……」

「……どうかしたかい？」

「……店主、これは刀の鞘だな？」

「ああ、魔理沙が持って来たんだが、肝心の刀がないんだ。……何処にもね。」

何それ怖いしらねえ。

「……これを貰う。」

おのれ風魔、乱心したか？

「え？ 鞘だけだが大丈夫かい？」

霖之助も驚く。……なら何故売り物にしてるんだ……？

「大丈夫だ。……何故か惹かれた。」

見る限り、1.5メートル程、黒い色に銀の筋が二本通った装飾の普通の太刀の鞘に見える。……鞘から爆発的な執念が見える以外。何じゃありや。妖刀の鞘かよ。しかも長え。どうやって振り回してたんだ。

「ああ、分かったよ。．．．幽夜君は？」

「．．．んー、．．．お！」

間延びした声が変わった幽夜が掴んだのは．．．

「．．．何だこれ？」

「．．．それはよく分からないんだ。何か不思議な形をしているんだが．．．」

大きさは右手につけられるぐらいのサイズ、金属製で溝があり、その中に何かが．．．

『．．．って、フアングじゃねえかよ!!』

○ンダムスローネツヴァイのアレじゃねえか！ 何でそんなもんがあるんだよ!?

「．．．フアング？」

幽夜が怪訝そうに聞くが、こっちが聞きたい。ナゼアルンデスウ!?

『．．．溝の中の物を飛ばして攻撃する兵器だ。文字で書くところ、【牙】で．．．一応武器だな。』

にしては小さいな。人間用サイズじゃねえか。．．．誰だ作ったの。

「．．．そんな武器があるのかい!？」

『・・・ああ、一応な。』

危険過ぎるがな。どっかの戦争屋さんも好きな武器だし。

「・・・ファング、ねえ・・・気に入った！買うぜ！他は・・・あ？
これ何だ？」

幽夜が見つけた武器を見て俺は吹いた。

『何故キュリオスのクロー部分だけあんだよ・・・!?』

これもまた人間サイズ。早速幽夜は腕につけて笑っている。

「いいじゃんこれ。店主・・・霖之助！これ追加な！」

まずい、幽夜に渡すとダメな武器だ。（しかし止めない）てか、なんて物が流れ着いてんだ・・・いや待て、何処かで見覚えが・・・

「・・・以上で大丈夫かい？」

『ああ、全部で幾らだ？』

「・・・大体このぐらいかな？」

提示された値段は6ケタ程度。ファングとキュリオスのクローがあるんだ。この程度でも少ないぐらいだが、マジで何だあれ。

『よし、俺が払おう。』

「いや、私が払おう。」

「いや、俺が。」

『いや、俺が全部払う。』

「「どつどつどつぞ。」」

『やりたかったただけだろ！』

「・・・随分と賑やかだね。」

若干呆れたように言われた。

『まあ、結構な付き合いだしな。・・・んじや、また来るぜ。』

「・・・ああ、ありがとう。今後ともご贖員に。」

マズイな、ここはついつい寄りそうだ。・・・フアングはねえだろ。キュリオスのクローもだが。この前の刹那達の時に空間軸捻じ曲げたせいか・・・いや、待てよ？

「・・・しかし、面白れえ武器だな。・・・如何にもマスターが作りそうだな。」

あ、過去に作ってライフルと選んで捨てたのがあった・・・！それかよ・・・！

「・・・この鞆、何処かで見たような・・・気のせいかな。」

異風なものしか買ってねえな。茶葉以外全部おかし。

『ま、満足ならいいんじゃないかねえの？』

「俺は大満足だな！・・・これ一つ一つに能力も移せそうだしな！」

やめろ明るい声で魔改造宣言するな。・・・しかもあれ、俺が使う予定だったから異常に負荷がかかるかわりに性能が・・・やらかしたあつ・・・！

「私も、このサイズに合わせて太刀でも作ってみるか・・・」

しかし、定番の霊夢達がお代を払わない愚痴は聞かなかつたな。・・・侵二の小遣いのせいかな。まあ今回はいいかな。

「・・・！」

その時、風魔が戦慄していた。

『・・・どうした、風魔。』

「・・・いや、何もない。」

『そうか。』

さーて、神社に戻って四凶の分のお言葉書くか。

「・・・やはり、見た事がある。いや、使っていた・・・！」

・・・そう呟いた声は聞こえていた。
課題増加確定。クソが。

次回へ続く

第一百一話 日常・・・？

side 龍一

『・・・悔い改めないと侵二に喰い殺される。と。おみくじの四凶出来たぜ。』

「・・・それ本当に入れるの？」

『当然だろ。』

霊夢に半分あきれ顔で聞かれるが、当然入れる。

『入れないと面白味がねえだろ？』

「面白味を求める物なの・・・？」

困惑する霊夢を横目に飛んできた刃物を指で挟んで止める。

『俺が管理してるし大丈夫じゃね？・・・で、刃物投げた風魔君。これはブーメランかね？』

「今日も当たらんのか？まあ当然だが。・・・そうだ、金属で作ったブーメランだ。そのまま小型のナイフにもなる。」

うん、凄いの分かるが人に投げるな。

『そうかよ。で、何の用だコラ。』

ああそうだと風魔が呟き、小さなメモ帳を開いた。

「・・・今日から二日前に、妖怪の山頂上に神と思わしき人物が出現。部下に追跡させたものの、十分後行方を眩ませた。仮定として幻想郷外からの来訪者と予測。私と伊織は全責任を主上に押し付けることを決定・・・」

『・・・喧嘩売ってんのか?』

「まあ待て、これで終わりではない。無能・・・もとい若い天狗共が攻撃するも撃退された。御柱と鉄の輪によつてな。」

それを聞いた途端、自分でも笑っているのが分かった。

「そうか、アイツ等か・・・!」

霊夢がまたかと言うように聞いてきた。

「龍一さんの知り合い?」

『ああ、多分知り合い。てか八百万は全部・・・弟か妹。』

「ああ、そうだったのよね・・・」

『おう。で・・・腐れげどもとい侵二!いるか!?』

「誰が腐れ外道ですか。いますよ。ついでにその情報も飛んできてますよ。」

風魔が苦笑する。

「やはり情報は貴様も速いか・・・」

侵二が微笑する。

「そうですね、自分達で集める風魔達には負けますよ。」

『はいはい。で、侵二、出現した位置分かるか?』

侵二が思い出すように答えた。

「おおよそYの10です。」

「何それ!？」

霊夢がツツコムが、これは妖怪の山(Y)の頂上(10)の意味だ。

『了解。で、風魔。規則性は「二日ごとだ。つまり今日だな。」……オツケイ。』

俺は霊夢に向き直る。

『霊夢。ここ暫く留守にするかもしれん。何かあったら……幻夜ツ!』

「ほーい、聞こえてるよ。ね、幽夜?」

「へいへい。……で、用があんのか?言つとくが人里の幻夜はパスな。アイツ遠足らしいから。」

『おう、てなわけで霊夢。何かあったら人里に行け。そして貴様等、ここ数ヶ月空ける。さもなければ……』

「……さもなければ?」

霊夢が息を?む。

『ここにある薙刀と槍とブーメランをへし折る。』

「いつの間に・・・!」

霊夢が戦慄する中、侵二がため息をついた。

「その手にかかるだけでも?」

『あ?』

まさかこいつ等・・・!

咄嗟に盗んだ武器に目をやるが、

『・・・!竹輪、だと・・・!?!』

幻夜が腹の立つ顔で言う。

「いや、この前竹輪しか持ってねえってやってみたいって・・・」

『・・・竹輪しか持ってねえ!』

「くだらん。」

『うっせえぞ風魔!・・・んじや、バイビ「待つて頂戴。」紫?』

珍しく紫が来た。

「私も連れていつて頂戴。・・・どうせ遊ぶつもりでしょう?」

紫にジト目で見られる。

『・・・へいへい、んじや、幻夜か幽夜、どっちか留守番しろ。』

幽夜と幻夜が顔を見合わせた。

「そーいや幻夜、お前幽香と出かけんじやねえの？数ヶ月空けて大丈夫・・・じゃねえな。」

「うん、無理だし帰るよ。バイバイ。」

何をするでもなく幻夜が帰った。

『んじや、後は壊夢を引きずって・・・つと！』

ダンダリオンから壊夢を引きずり出す。

「ん？何用ぜよ？」

一升瓶を担いだまま壊夢を連れ出した。のだが、壊夢は普通に反応しやがった。

『急用だ。念の為数ヶ月空けろ。』

それを聞いた壊夢は頷いた。

「応！丁度仕事終了してここしばらく休みぜよ！」

『よっしや、じゃ、道中めんどくせえから・・・幽夜、行けるか？』

「へいへい、【エターナルフォースブリザードロード】！」

気だるそうに幽夜が放ったエターナルフォースブリザードロード。相手は死に絶え、空中に道が出来る。

『つしゃい、【レラージュ】発動。重力反転・・・停止。』

霊夢をその場に残し、俺達は氷の道の上に立つ。

『滑るぞ！』

「え？え？」

いきなりの展開に慌て始める紫。

『お前が来るって言ったんだからな！』

俺は紫の手を握り、滑り出す。

『行くぞ！突撃！』

風魔と侵二を筆頭に滑り始める。

「キャアアア!!」

『落ち着け、両足を付けてそのまま滑る。そうすりゃ何とかなる。』

「い、こう・・・？」

『よーし完璧だ！そのまま飛ぶからな！』

「いきなりハイレベル!？」

紫が久しぶりにツツコむが今回はスルーする。

『フライアウェイ!!』

「イヤツフウー!」

「キヤアアアア!」

よく考えれば紫飛べるじゃねえか!

『最後は着地!ここは任せろ!』

紫の手を引き、膝下に手を入れて抱えて上げる。

『風魔!行くぞ!!』

「了解!・・・五行!翔!」

高速で地面にぶつかる直前、上昇気流によって一気に速度が下がる。

『よっと。』

「到着ですね。」

「あつけねえな。」

「お、終わった・・・?」

『ん、終わったぜ。』

さて、目的の神は……？

『あれじゃね？』

「俺よく分かんねえ。」

「そうじゃないですか？」

「……龍一の知り合いだったかしら？」

『そうそう。……やい！そこなる神よ！ここを何処だと心得る！』

「……何故貴族の言い方なのだ？」

『気分気分。して、この我と勝負せ危ねえ！』

相変わらずお約束の分からない世界だ。

『……てめえ！諏訪子に神奈子！何しやがる！』

叫んだ途端、二人が飛び跳ねたのが見えた。

『あー、俺知らねえぞ！喧嘩じゃ喧嘩！』

「応！」

壊夢が何処からか角材を取り出した。

「いきなりするの……？」

「仕方あるまい。私はやらん。」

風魔は呆れる紫を宥めつつ不参加申告。

「そうそう、ちやっちやと行こうぜ。俺パス。」

お前も入らんのかい。

「なら、二対二っぽいので私も抜けます。面倒ですし。」

侵二は理にかなう発言を台無しにしながら欠伸をした。

『・・・じゃ、壊夢とだな。行くか!』

「応!」

俺は久しぶりに鏡一的能力に変えた。

『さて、行くか。』

bgm Slayer—Raining blood

『久し振りだな神奈子! 諏訪子! てなわけで覚悟しやがれ!』

「ほら! やっぱり駄目だったじゃん神奈子!」

「うるさい! お前がやっちやえって言ったじゃないか!」

二人が言い争っているのを完全に無視し、壊夢が角材を横に振る。

「うわあっ！」

諏訪子は跳躍して躲し、

「クツ・・・！」

神奈子は御柱で受け止める。

「ぬうんっ！」

しかし四凶最大の馬鹿力に適うはずがなく、神奈子はかなり先にぶっ飛ぶ。

『なんじゃその角材。』

「細かい事は気にしちやいかんぜよ！」

『了解。で、不意打ちが来るから・・・【メタルシールド】定点配置、右腕に【メタルランス】展開しつつ周囲に【メタルアロー】展開。』

金属のシールドを展開し、右腕にランスを取付け、周囲に矢をばら撒き狙う。

『・・・で、おそらくは御柱が来るから・・・壊夢、防げ。』

「・・・了解ぜよ。」

そう言っている間に諏訪子が接近、鉄の輪で奇襲してくるがお見通し。

「貫った！」

諏訪子は成功したと思っっている様子。

『かかったなアホが！【メタルシールド】 ツ！』

諏訪子の鉄の輪を絡め、そのまま【メタルランス】で弾く。

『で、まだやるのかね。・・・【メタルアロー】 照射準備。』

すると諏訪子は諦めたように、

「・・・降参するよ。久しぶりだね。龍一。」

『ああ、久し振りだな・・・って神奈子の心配は!?!』

諏訪子は諦めたように手を振る。

「あー、ダメダメ。相手壊夢でしょ？負けるじゃん。」

【「ガイアソード」！】

「・・・ッ！」

「で？前にも増して化け物だね。」

『そこは勘弁しろい。』

「ぬえりやあつ！」

壊夢が【ガイアソード】と称して角材に岩石を張り付かせ、巨大な角材（岩の塊）に仕立て上げ、神奈子を御柱ごとぶっ飛ばした。

「ほら、負けたじゃん。」

返す言葉がねえ。

『・・・悪い。』

当の壊夢は清々しく、

「いやー、やっちゃまったぜよ!」

の一言。貴様等、全部分かって二対二にしやがったな。

『やっちゃまった、じゃねえよ。・・・久しぶりついでに悪かったな。

神奈子。』

「いや、大丈夫だ・・・です。」

『やめんか。虫唾が走るから敬語省け。』

神奈子は迷った後、じゃあこれからはこれで行かせてもらう。と答えた。

『オツケイ。・・・で、何しに来たんだ?』

神奈子が一步前に出て、悔しそうに、

「向こうの世界で信仰が薄れてしまった。昔は信仰は薄れなかったが、最近は科学の進化でな・・・」

俺は紫に目をやり、大丈夫か確認。・・・大丈夫らしい。

『あー、それは大丈夫だ。誰かに許可取ったか?』

神奈子は紫に向いた。

「取っていないが・・・大丈夫だろうか?」

紫は何処か自慢そうに答えた。

「構いませんわ。幻想郷は貴女達を受け入れます。」

すると神奈子と諏訪子は顔を見合わせて笑った。

そこに、だがな、と、珍しく風魔が口を挟んだ。

「ここの管理は私がしている。あまり面倒事は増やしたくない。」

「ここは駄目ってことかい?」

諏訪子が残念そうに言った。ところが風魔は、

「そんな酷な事は言わん。ここに署名しろ。後で適当に数年前に契約した事にする。我々天狗は干渉しない。」

しれっと職権乱用の宣言と許可を風魔はした。

「本当かい!?!」

嬉しそうにする諏訪子に風魔は頷き、

「ああ、何をしようが知った事ではない。どうだ?」

神奈子は頷いた。

「ありがとう。そうしてもらえると助かる。」

『へい、成立成立。案外休み作らなくて大丈夫だったな。帰るか。』

そう野郎共と話していた時だった。諏訪子が真面目な顔でこっちに来た。

「・・・龍一、どうしても頼みたいことがあるんだけど、いいかな？」

『別に構わねえが？』

諏訪子は頷き、口を開いた。

「・・・早苗を、助けてほしいんだ。」

うん、休み空けて正解だったわ。

次回へ続く

第二百二話 華の学園生活

side 龍一

『待とうか、早苗って誰だ。何があった。そもそもどうしろと。』

諏訪子は落ち着いたように話し始めた。

「……縁は覚えてるか？」

『ああ、昔神社にいた巫女だろ？』

諏訪子は頷く。

「うん、で、その縁の子孫が早苗なんだけれど、早苗は私達が見えるんだ。」

『……科学蔓延る世界で神様がか？』

諏訪子は苦々しい顔で続けた。

「うん。そのせいで早苗は周りから奇妙なものを見る目で見られてしまうんだ。それだけじゃない、早苗の親は金や権力に夢中で早苗を道具としか見ていない……！」

『……そうか、』

諏訪子は俺を見上げ、泣きそうな顔で頼んできた。

「お願いだよ龍一、後数ヶ月だけでも早苗に楽しい思い出を残してあげたい……！だから……！」

いつの間にか神奈子も諏訪子の隣に来て、頼んできた。

「私からもお願いする。早苗がこちらに来る残り数ヶ月だけでも……！」

喜ばせるねえ。……うーん、思いつかんーどうしようかなー

『どうするかねえー、侵二ー、どう思うー？』

「うーん、分からないですねー」

『なら仕方ないなー、俺達が向こうの世界に紛れ込むしかないなそうだよなー』

「そうですねー」

クソつまらない棒読みで全員が理解したのを確認。

『……と、いう訳だ。仕方ないので早苗と同じ年齢の設定で行こう。仕方ない。』

「……楽しんでるわね？」

紫に凶星を突かれる。

『……バレてりや仕方ねえや。いいぜ。助けてやる。が！』

「「が？」」

『やり方はこっちで決める。何をしようが文句言うな。』

諏訪子と神奈子は頷き、笑った。

「ありがとう！龍一！」

「申し訳ない。助かる。」

『構いやしねえさ。紫はどうする？』

「・・・行ってみようかしら？」

『来るなら来い。たまには休もうぜ。』

紫は暫く考えた後、答えた。

「そうね、私も行くわ。」

『よし！じゃあ行くか！』

「「「了解！」」」」

野郎共は紫が考えている間に聞くと、全員揃って「面白そう連れてけ」の一言で決定。

『よく考えれば数年ぶりの幻想郷の外か。』

「そーいや俺も学生だったっけなあ・・・」

・・・最高神一団移動中・・・

『いよっと。変わらんなあ・・・』

あの時俺が死んだ時代とほとんど変わっていない。ちよūdのタ
イミングだったな……

「で、どうするんですか？」

「ああ、それなら大丈夫さ。」

神奈子が少し嬉しそうに言う。

「学校……って龍一は分かるな。そこに早苗は通っている。そこで
助けてやってくれ。頼む。」

『了解。行くぞ。』

諏訪子と神奈子に案内されようとするが、紫に止められる。

「ちよūtと待って、確か、保護者と言う立場が要るんじゃないかしら
？」

俺は正直呆れた。

『……何のために野郎共連れてきてんだ？幽夜がいるだろ？』

「ああ……そうね。」

紫も納得したようだった。勿論予想通り、入学手続き中延々と幻夜
が手続き相手を催眠状態にし、怪しまれることなくクリア。

「流石龍一達ね……」

『気づかない奴が悪い。』

「二理ありますね。」

後は延々と制服やらを購入、試着し、侵二に制服が似合い過ぎて大笑した。紫も似合い過ぎて喋れなかった。そうしていると夕方になってしまったので明日からということになった。

道中、神奈子と諏訪子は神社に戻った。

『ほい、終了。．．．どうするよ?』

そう野郎共に聞くと紫が俺の袖を引つ張り、上目遣いで見てきた。．．．やめろ耐性がねえ。俺死ぬわ。

「あの．．．ここに行きたいなああって．．．」

紫が行きたいと言ったのはカフェ．．．マジで?俺似合わないんだが。

『．．．構わねえが。貴様等はどうすんだ?』

侵二は少し散歩にと、風魔と壊夢は図書館に、幽夜はゲームセンターに既に直行していた。

『あのなあ．．．』

「速く行きませよ!」

紫に腕を引き摺られる。仕方ないか．．．

「いらっしやいませ。二名様ですか?」

カフェに入った後、店員さんに声をかけられる。

『はい。』

「こちらへどうぞ。」

一応何度か寄ったことはあるので店の雰囲気は大丈夫。だが合わない。

「えっと……」

紫がメニューを眺めている。……こんな幼く見える奴だったか？

「……あ、これで！」

紫が選んだのは如何にもこのタイミングで頼みそうなパフェだった。

『ほいよ。……すいません！コーヒーとイチゴパフェ一つで。』

「かしこまりました。……彼女さんですか？」

店員さんが受けてくれると共に聞いてくる。隣で紫が爆発した。

『そんなもんです。』

「そうですか、……少々お待ちくださいね。」

今のご時世聞いてくるのかね？珍しいんじゃないだろうか？

「……龍一、慣れてるのね……」

紫がメニューで顔を隠しながら聞いてくる。

『……ちよつとこの世界にいた事があつてな。』

「ふーん……」

なんだこの可愛い奴。

「お待たせしました。……ごゆっくりどうぞ。」

同じ店員さんが届けてくれた。紫はパフェを見た瞬間、目をキラキラさせていた。……やっぱ女の子は好きだよなー

「いただきまーす！」

俺は甘い物……生クリームが乗っているもの限定だが、あまり食えない。よく食えるな。

『……食べた事なかったか?』

「ええ、無かったわね……」

せめて口元についた生クリーム取ってから言おうか。

『威厳もクソもねえな。……ちよつと動くなよ。』

「わぶっ……」

生クリームを拭いてやる。……馬鹿野郎、紙ナプキンでだ。

『……ふう、』

俺もコーヒーを飲む。……そういや向こうじゃほとんど紅茶しか飲んでねえな、今度コーヒーでも作るか。

「……美味しいの?」

紫が俺のコーヒーを見ながら言う。

『……これも飲んだことねえか?』

紫がこくり、と頷く。

『……やるよ。』

半分程飲んで満足なので紫に渡す。

「……うえっ、苦っ……」

紫が盛大に顔をしかめる。俺は吹いた。

『クツ……』

よく見ればさっきの店員さんもニコニコしていた。

「うええ……」

余程苦かったのか半分涙目になったので、急ぎミルクを注文、店員さんは注文した瞬間に渡してきた。……慣れてらっしゃる。

『どうもすいません・・・ほら、飲め。』

紫にミルクを飲ませ、落ち着かせる。

「・・・苦かったあ・・・」

『・・・まったく、帰るぞ。ありがとうございました。』

「はい、毎度ありがとうございました。」

代金は安かった。また来るか・・・

「・・・龍一。」

そんな事を考えていると、紫が俺を呼んだ。

『ん?』

「・・・ありがとっ!」

『・・・この程度なら何時でもどうぞ。』

そろそろ帰らないと幽夜がゲームセンターを倒産させているかもしれん。アイツあの系統上手すぎるからな・・・

「申し訳ございませんお客様・・・!」

「え、マジで?全部取っちゃった?」

遅かった。ゲームセンターにたむろする不良よりタチが悪い。

「んー、お返しします。その代わりこれとこれだけ貰えるか？」

真っ青なゲームセンターの店長に商品二つで勘弁してやる（訳）との幽夜さんの一言。勿論店長さんは高速で領いた。

「悪いな。じゃあな。」

倒産の危機は去った。

「ん？主上か？」

ふと背後を見ると広○林と○リタニカ国際百科事典を脇に抱えた風魔と工具を担ぎ上げた壊夢がいた。ツツコミどころ多いわ！

「何ですかこの人だかりは……」

『……侵二、收拾がつかん。どうするよ？』

侵二は全部分かったのかため息を一つ、

「取り敢えず家に戻りましょう。そこの路地裏から帰れます。」

『おおそうか、じゃあ帰る……か？』

路地裏……だと？

「主上の地下室に繋がりました。これで家も大丈夫ですね。」

俺はツツコむべきか思ったが、

『……もういい。明日から真面目にな。』

やめた。クソ面倒なのに気づいた。

・・・まあ、紫と久しぶりに出かけられたし良しとするか。

次回へ続く

第百三話 HAYスクール生活

side 早苗

「・・・アハハ、マジー？」

「うん、マジでだってさ。」

私は教室で一人座って、クラスメイトのたわいもない会話を聞き流す。

私はクラスメイトの大半に、居ないように扱われているし、中には私にちよつかいをかけてくる人達もいる。

でも仕方ない。・・・私はみんなとは違うから。

「よし、ホームルーム始めるぞー」

担任の先生がそう言い、クラスは騒ぎながらも皆席につく。

「・・・さて、今日は新入生が来る。皆よろしくな。」

途端、クラスはざわつき始める。でも、私には興味がない。きっとその人も私を避けるに決まっている。

「矢川君、ここに、」

ほいさ、と、男性の声が聞こえて、白い髪をした背の高い男の子が現れた。

「・・・えー、矢川鏡一と言います。よろしくお願ひします。」

クラスの女子達は特にざわつき始めた。すると鏡一君が口を開いた。

「で、まあ他にも同じ奴らがいるんで、共々よろしくお願いします。……てめえら、並べ。」

すると、ぞろぞろと現れ始めた。

「おい、女子いるじゃん！」

「あの笑顔の人素敵じゃない？」

「紹介を軽く。」

鏡一君が言うと、微笑を浮かべていた男の人が口を開いた。

「……えー、八雲侵二と申します。このような場所は慣れていませんので……宜しくお願い致しますね？」

そうやって侵二君は私に笑いかけた。……え？私に？

次だなど、目つきの鋭い男の人が口を開いた。

「風切風魔と言う。宜しく頼む。」

そうやって風魔君も私の方を見た。少し笑っているのか、目元が緩んだ。

「じゃ、次俺か。」

少し口調と目つきが悪い男子が口を開いた。

「俺は風見幽夜。ま、よろしくな。」

怖そうだけれど、軽そうな雰囲気かしていた。

「……えっと、次は私？」

一人だけの女の子が鏡一君を見て言っていた。鏡一君は頷いた。

「……えっと、八雲紫です。侵二の同い年の妹です。よろしくお願
いします。」

紫さんはとても綺麗な顔立ちをしていた。

私はふと視線を感じて鏡一君達に視線を戻した。

「……最後は俺か。……っと、神鬼壊夢ぜ……だ。宜しくな！」

壊夢と名乗った男の人は私を見てニヤツと笑った。……何故私の
方を？

「……という訳で、まあ宜しく。」

鏡一君がそう締めくくった。

その後ホームルームが始まったが、クラスはそれどころではない空
気だった。

鏡一君達も綺麗な顔立ちをしていて、動作一つ一つが綺麗だった。
特に侵二君と鏡一君は、

「あ、消しゴムが……」

私の消しゴムが無くなった時、隣から消しゴムが飛ばされてきた。飛ばしたのは鏡一君のようで、侵二君が隣で消しゴムを的確に二つに割って椅子の下からアンダースロー、それを鏡一君が足で弾いて拾っていた。

「リーダー、半分よこします。」

「サンキュ、あ、その消しゴムプレゼントで。」

動きがスタイリッシュだった。

「あの・・・ありがとうございました。」

ホームルーム終了後、私は鏡一君にお礼を言った。すると鏡一君は、

「あー、あんま気にしないで大丈夫大丈夫。それよりさ、俺等ここよく分かんねえんだ。案内してくれるか？」

私は驚いてしまった。

「私ですか!?!」

「・・・忙しかったか？」

鏡一君が悪そうにするので急いで否定する。

「いえ！・・・その、私を変だと思わないのかと・・・髪の色とか・・・」

ああ、と鏡一君が納得したようだった。

「俺は白髪だが、「白髪!?!」逆になつてゐる方がいいだろ?全然変じやない奴とかさ、逆に気持ち悪いと思つて俺は。な?」

鏡一君が周りに言うのと、近くにいた侵二君達が頷いた。

「そうよ、ちよつとぐらゐ変わつてないと、ねっ!」

紫さんが鏡一君に抱きついた。

「やめろ、動けん。」

周りから男子に睨まれているが、近くで机に腰かけていた風魔君に睨まれて固まつていた。

「あの、お二人は……」

鏡一君が気だるそうに答えた。

「大体考えてるのが正解。……あー、くそっ、離れろい!」

隣でニヤニヤしていた幽夜君が、ふと私に向いてきた。

「あ、そうだ。これお前のだろ?落ちてたぜ。」

そう言つて幽夜君が渡してくれたのは、失くしたはずの消しゴムだつた。

「落ちてたぜ。……知らねえ奴の机の中にな!な!そこのお前達よ!見てるか?……ね、今どんな気持ち?NDK?NDK?」

そう言つて幽夜君は見てみると腹の立つような顔・・・近くで睨んでいた男女の集団・・・私をいつも虐めてくるメンバーをドヤ顔で見ている。男子の一人は何か言いたそうだったが、いつの間にか百科事典を抱えて座っていた風魔君に睨まれ、逃げるように去っていった。

・・・いやいやいや！風魔君!?

「ちよつと風魔君!?!何故百科事典を「ぶん殴る為に決まってる。」・・・ああ、はい、そうですか・・・」

隣でケラケラと笑っていた鏡一君から聞くと、「あんま気にすんなよ?・・・風魔と壊夢に喧嘩売ると大怪我、幽夜は身内の不幸、俺は何も無し、紫は全部。」だそうだ。そんな物騒な事聞いてません。

「ま、不良つてわけだ。」

そう言つて鏡一君達は笑っていた。

私も呆れたけれど、
少しだけ笑えた。

次の日、いつも私を虐めてくるメンバーの一人が右腕を骨折していた。

まさかと思ひ、鏡一君達に聞くと、幽夜君が

「俺じゃねえけどな、壊夢?」応、帰り道に殴ってきたから肘と膝で腕を挟んだだけぜ・・・だ。」アイツ雑魚すぎワロタ・・・ワロタつて使い方合ってるか?」

そう言つて壊夢君と幽夜君は笑った。

笑い事じゃないです。

「・・・腑抜けが多いな。」

そう風魔君が逃げ去った集団を睨み、嘲笑していた。違いますから。

「はいはい、毒吐くのもいい加減にしてくださいね。主・・・リーダー、次体育ですよ。ちやつちやと準備して行きましょう。」

「へいへい、おい、お前らさっさと行くぞー」

侵二君が同じように嘲笑いながら鏡一君に話しかけ、鏡一君も了承した。すると紫さんは、

「・・・覗かないでね？」

対する鏡一君は、

「あ、そうか。そんなトラブル展開あるよな。気付かなかったわ。しねえよ。」

アウトオブ眼中だった。紫さんは若干悔しそうにしていた。

その後男子の更衣室から辞書が落ちたような音がしたのは気のせいだと思いたかった。とある男子が風魔君と壊夢君に絡んだらしく、壊夢君に投げ飛ばされ、風魔君と幽夜君でリンチにされたらしい。ひたすらごめんなさいと呟いていた。

・・・丁度体育は体力測定だったのだが、鏡一君達は、

「ぬうんっ！・・・握力300か。」

握力計を壊しかけたり、

「よいい、始め！「着いたぞ。」は？」

50メートルを一秒で走ったり、

「立ち幅跳びねえ・・・よつと・・・おい、メジャーねえぞ。」

20メートルを立ち幅跳びで飛び、

「・・・残像です。」

反復横跳びを残像を作りながら動いていたり、

「・・・え？まだまだ行くわよ？」

長座体前屈で異常に体が伸びていたり、

「風向よし、・・・ソイヤツ!!」

ハンドボールが大空へと飛んで行ったりと、

控えめに言っただけ物でした。

更に持久走はその五人だけ常に全力疾走で息切れすらしていませんでした。幽夜君や鏡一君は四足歩行で走る始末でした。

「評価全部マックスでワロタ。」

「・・・あんまり力入れてませんがねえ・・・」

評価の紙を見て爆笑する幽夜君と本気ではないとサラツと恐ろしい事を言う侵二君を横に、私は鏡一君に聞いた。

「人間ですか？」

対する鏡一君の答えは単純だった。

『そんな訳ねえだろ。』

・・・はい？

『人間かと聞かれるとな・・・内緒だ。真意が知りたきや・・・』

神に聞きな。私が神子関係の者だと、神様が見えるとも一度言っていなかったのに、そう鏡一君が不気味に口元を歪めて言った。

「・・・!?!」

『ん？ジョークだぜ？またな早苗。明日からもよろしくな。』

そう言つて鏡一君達は去つていった。

今まで会った人達の中で一番不気味だと思つたけれど、一番優しく、久しぶりに素直に笑わせてくれた人達だった。

・・・ちよつと色々おかしいけれど。

次回へ続く

第四百四話 Daiスクールスチューデント

side 早苗

「鏡一君、変わった人だったなあ・・・」

学校からの帰り道、私は歩きながらそう呟いた。

少しでも学校が楽しみになった。

そう思っていた矢先、路地裏に引き込まれた。

「・・・!?!」

引き込んだ人の顔を見ると、いつも虐めてくるメンバーがいた。

「アンタ、侵二君と仲良くするとか、生意気。」

メンバーの一人の女子がそうやって私を蹴った。

「・・・っ!」

続けざまに女子が口を開いた。

「アンタなんかが、仲良くするとか、笑うとか、気持ち悪いのよ!」

そうやって蹴り続けてきたが、何も言えなかった。

「・・・!」

男子数人も蹴ってきた。

「てめえ気持ち悪いんだよ!うぜえし、暗いしよ!」

そう言つて更に暴行はエスカレートして来た。
大人達は時折路地裏を覗いてくるが、誰も助けようとしてくれない。

「てめえなんで、この世にいらねえんだよ！」

私は悔しいけれど、何もできず、涙をこらえながら暴行に耐えていた。

「……つつつ!!!」

……そんな時だった。場に合わない高笑いが聞こえてきた。

「ハハハハハ!!」

暴行を加えてきた全員が周りを見渡すが、誰もいなかった。

「んだよ！誰だ!!」

男子の一人がそう叫ぶと、

「オラアツ!!」

そう言つて上から男子の脳天に拳を叩き込んだ……

「んだよ、脆いなあ、ああ!?!」

幽夜君がいた。

「何しやがる!」

他の男子がそう言うと、幽夜君が口を歪めて言った。

「ああ!?!てめえこそ男のくせに女殴ってんのか!?!随分と腰抜けみてえな事してんなあ!あ!?!やんのか!?!耳の穴から腕突っ込んで奥歯ガタガタ言わせてやろうかゴラァ!」

そう言うと幽夜君は私を抱え上げて、放り投げた。

「え?え?」

「頼んだぜ壊夢!」

そう言うと幽夜君は再び虐めのメンバーに罵声を吐き始めた。

放り投げられた私は、壊夢君の腕の中にすっぽりと収まってしまった。

「・・・あーあー、折角の顔が台無しぜよ・・・」

壊夢君はそう言うと、私の顔に手を当てて何か呟いた。すると、みるみるうちに痛みが引いてきた。

「・・・!?!」

壊夢君は最初のイメージとは遠く離れた声の調子で、

「あんま気にしちやいかんぜよ!」

そう言っつて私の頭を軽く叩いた。・・・それよりも、だ。

「・・・あの、降ろして下さい・・・」

私はさつきまでの間、ずっと抱えられて・・・お姫様抱っこの体制だったので、流石恥ずかしく、降ろさせて貰った。

「おお・・・すまんすまん、慣れとらんぜよから・・・」

そう言うのと壊夢君は体格に合わず、頭を搔いた。少し笑ってしまっ
た。

「うるせえーこのジャガイモに芽が生えたみたいな物体！ミュータ
ンス菌！てめえらなんぞところてんに頭打つてくたばれ！！F a c k
y o u !!」

近くでは幽夜君がメンバーを青くさせる程の暴言を吐いていた。

「オラァー！文句あるなら来いよバーカ!!それとも・・・それすら出来
ないキングオブチキンかぁ!？」

幽夜君が舌を出しながら中指を突き立てた。すると怒った男子の
一人が殴りかかり、幽夜君を殴ろうと飛びかかった。勿論幽夜君は避
けて・・・

「当たったぁ!？」

私はつい突っ込んでしまった。男子も当たるとは思っていなかつ
たらしく、啞然としていた。

「あーあ、馬鹿な奴・・・」

微動だにしていなかった幽夜君がそう言い、殴られた跡が見えない

口許を歪めて笑った。

「おーい！俺も喧嘩売られた！」

そう言つて男子の急所を臆面なく蹴り上げた。

「あがつ・・・!?!」

気絶する男子を横目に、幽夜君は言葉を繋いだ。

「やっつていいよなリーダー！」

その声には返事がなかったが、路地裏で悲鳴が上がった。

「読書の邪魔だ。失せろ。」

『幽夜殴ったからだぜ？バーク、あ、適当に潰せ！』

「あら？女の子は私が容赦しないわよ？」

路地裏から見えたのは、辞書を振り回す風魔君と、壁に叩きつけて気絶させていく鏡一君と、女子を相手に蹴りを喰らわせている紫さんの姿だった。

「ひっ！冗談じゃねえ！俺は関係ねえか・・・ら・・・な・・・?」

何人かが逃げようとしたが、その先には、

「何やっつてるんですかねえ・・・」

同じように逃げたメンバーをアイアンクローで捕まえている侵二

君がいた。・・・いつの間に!?

「・・・あああああ!!」

一人の男子が錯乱し、鉄パイプを持ち出して笑っていた壊夢君に振りかざした。

「危な・・・」

危ない、そう私は言おうとしたが、時すでに遅く、鉄パイプは壊夢君の頭に直撃し、

鉄パイプが粉々になった。

「・・・い?」

「んー?」

当の壊夢君は無傷で立っていた。

「あ、あ・・・?」

そして、鉄パイプを粉々にされた男子に向かって、

「ふんっ!!」

強烈な頭突きを喰らわせた。男子は昏倒した。

「あらあら、全然喧嘩出来ないのねえ?」

紫さんも大勢の女子を相手に余裕そうだ。

『へいへい、そろそろ紫は下がれ。．．．先に言っておくが．．．』

鏡一君が初めの印象とはほぼ真逆の声と顔で、その場全員に、

『．．．失せろ。』

周りが凍り付くような声でそう言うと、女子全員が蜘蛛の子を散らすように逃げた。男子数名も腰を抜かし、逃げ始めた。

「けっ、私利私欲の為にたかって組織性なんぞねえてめえ等が、俺達に勝てるわけねえだろ！おととい来やがれぶち殺すぞ!!」

そう言つて幽夜君は最後の一人の急所を膝で蹴り上げた。

『あれは痛い．．．ご苦労。．．．早苗、大丈夫か?』

「あ．．．え．．．大丈夫．．．です。」

「嫌ねえ、妬みで殴るなんて。ね?」

紫さんが私に笑いかけながら鏡一君に言った。

『．．．ま、殴られる覚悟がねえのはよくねえな。』

紫さんを撫でながら鏡一君は頷いた。

『あ、そうだ侵二、早苗の手当て頼む。』

そう言つて侵二君に顎で合図すると、侵二君が包帯を持っていた。

「生憎これしか無くてですね・・・」

侵二君が申し訳なさそうにするが、私が十分だと思おうのがおかしいのかな・・・？それ以前に壊夢君が全部治してくれたのだけれど・・・？

『うーん、それは仕方がない！俺たちの家に連れて行こう。』

やけに棒読みな鏡一君がそう言った。だから治ってるんですって。

「そうですね。・・・いいですか早苗さん、これから路地裏の壁に激突します。」

「はい？」

意味が分からない。

『さあ、行くぞー！』

そう言うと鏡一君は紫さんを抱え上げて壁に飛び蹴りを・・・

「消えたあぁっ!？」

私が呆然としていると、壊夢君が腕を引いてくれた。

「大丈夫ぜよ。怖かったら目つぶるぜよよ？」

そう言うと、私の手を引いたまま壁に・・・

「・・・あ！」

ぶつからなかった。そこには巨大な部屋があった。

……ええええええええええええ!!?

啞然とする私の背後からやいこらと侵二君達も飛び込んできた。

「よつと、主上……じゃなかった。リーダー、どうするんです?」

鏡一君が首を捻り……

『いつも通りでよくね?』

いやしかしと鋭い顔をしていた風魔君が緩んだ顔で突っ込んだ。

「早苗はどうする? 怪我は既に壊夢の奴が治していたようだが……?」

『……んー、早苗、泊まるか?』

鏡一君が聞いてきた。

「いやいやいやいや、リーダー、んな無茶な……」

私は行けます、と言った。

「ほら見ろよ、行けるって……は?」

幽夜君が呆れたような、嬉しそうな顔で見返してきた。

「家は基本私が何をしても何をされても何もしてくれないので大丈夫です。」

笑っていた鏡一君が私がそう言った途端に顔を歪めた。

『あ？……んで頼まれたのかよ。』

「……？何か言いましたか？」

鏡一君の顔が戻った。

『いんや、じゃ、いいんだな。』

「はい……って、違います！ここ何処ですか!？」

流されていたけれどそれ以前の問題でした！悩んでいる侵二君がお茶を持ってきてくれながら言った。

「リーダーの家です。」

「そこじゃないんですっ!！」

私は机を叩いた。

「じゃあ何故鏡一君の家は壁に埋まってたんですか!！」

鏡一君が答えた。

『……立地条件?』

「そんな訳ないじゃないですか!どこに壁に埋まった家があるんですか!？」

第百五話 人外とは（哲学）

side 鏡一

やばいめっちゃ楽しい。早苗が面白いぐらい突っ込んでくれる。湯呑浮かせたただけであそこまでなあ……？

『ハハハハハハ、悪い悪い。ジョークジョーク。』

「もう、何なんですかあ……」

早苗が頬を膨らませて言ってくる。

『気にすんな。……えー、で、ここは何処かだったな。見ての通り俺の家だ。』

「そこじゃないんです!」

早苗が再び机を叩いた。……仕方ねえだろ家なんだからよ。

『壁にはまってるのは……俺の術。』

「はい!?!」

『俺も神社で仕事をしてる身なんでな。術の一種だ。』

神社で働いてる（祀られてる）から嘘ではない。……胡散臭そうに見られてるのは気のせいだろう。

「はあ、……って、いつ私が巫女だと言いました!?!」

『そこ聞く?」「聞きますよ!!」・・・あ、そう。えつとな、聞いた。』

「・・・誰からですか?」

視線が痒い。

『八坂神奈子と洩矢諏訪子。・・・いい証拠だろ?』

早苗が驚いた顔をする。

「何故神奈子様と諏訪子様の事を・・・!?」

「ここまで来れば下がれん。仕方あるまい。」

『俺の神社の奴と知り合いでな。(俺です)たまたま前に会ったんだよ。(故意的です)』

そして適当に早苗の状況を聞いた、依頼の件があったと、取り敢えず半分程度の真実を言った。・・・実際次が問題なんだ。

「・・・そうだったんですか、神奈子様と諏訪子様に心配をおかけしてたんですね・・・」

早苗が若干落ち込む。・・・滅茶苦茶ええ子やないかい。前世の俺と真逆じゃねえか?

『・・・ま、そうなるな。まあ、偶にはいいだろ?・・・幽夜なんぞアイツ等いつ殴れるか楽しみにしてたしな。』

あの場所で早苗が襲われる事は事前にキャッチしていた。侵二が虐めメンバーの一人を拘束、吐かせた。何をしたか知らんが拘束され

た奴は延々とごめんなさいと呟いていた。マジで侵二有能。幽夜も有能。俺無能。

『で、俺らの受けた依頼はお前が幻想郷とやらに行くまでの間、仲良くして思い出を残させること。・・・てなわけですよろしくな。』

早苗が少し嬉しそうな顔をして見上げてくる。

「・・・はい！」

『で、そのこのメンバーで化け物疑惑がかかっている奴な。全部説明する。』

「お願いします。・・・って、絶対壊夢君人間じゃないですよね？」

凶星過ぎる。

『まあまあ、・・・えー、その急所蹴り上げてた奴は幽夜で人外。隣の風魔は人外。元通り魔。アイアンクローかましてた侵二はぶつちぎりの人外。頭突きの壊夢はお察しの通り人外。紫も人外。俺人外。元連続猟奇殺人犯「？はやめましょうか」・・・うん、以上。』

「・・・」

早苗は呆然としていた。正解は全部人外だ！

『ん？まとめようか？全部人g「分かってますから!!」・・・ならいいじゃん。』

早苗がため息をついた。

「……で、人外って何なんですか？」

『その男衆は……四凶？』

しばしの沈黙の後、

「……冗談ですよ『だったら良かったな。』……」

そう言うのと今日一番の音で早苗が机を叩いた。

「何でそんな人がいるんですかあつ!？」

「ごもつともだ。……てか正直コイツ等を式にしたのが正解か分からん。力量不足だ。」

「……ま、細かいこと気にすんなよ。ぶつちやけ四凶だって事気にしてねえしよ。」

幽夜、フオローになってない。後お前は四凶すら喰い荒らした生命体だからな。

『んー、まあそこは置いておいてだ。この先勝手に色々とするから。変な事が起きたら、また矢川かぐらいの感覚で大丈夫だからなー』

守矢に負けてらんねえからな。……前世じゃ一生勝てねえけどな。

「……分かりました。」

『ん、じゃあ飯にするか……侵二ー!』

侵二に呼びかける、勿論侵二は準備をしていた。

「了解！・・・料理をする所は台所じゃありません。」

侵二が包丁を構えて言う。なら俺もだ！

『料理する所が台所だっ!!【踊る三秒クッキング】スターツト!!』

早苗が啞然とすること間違いなし。もう無視。

『侵二！微塵切り!』

「了解！仕上げ委任!」

挽肉を投げると野菜が混じった肉の塊が帰ってくる。それをフライパンで受け止めて着火、早苗視点だと残像しか見えてないはず・・・そして着火終了!!

『フィニーツシュ!!K O!!』

「Your Win!!」

そうして出来上がった饕餮と龍神の日替わり気分ディナー。今回はハンバーグ・・・だと思う。

『ほい。今日の晩飯な。異論は認める。覚悟できてればな。』

早苗が高速で首を横に振る。・・・侵二が包丁研いでるだけなんだが。

「俺食うからな。・・・いつも通りの腹立つぐらい美味しい奴だな。」

「……まあ、いつも通りか。」

「いつも通り美味しいと思うぜよ！」

野郎の反応がいつも通り過ぎて面白くない。……まあコイツ等食えたらなんでも食うから感想なんぞ気にせんが。

「……相変わらず美味しい……！」

それに対して紫は喜んでくれる。うん、普通こうしてくれると嬉しい。

「……下味、ですかねえ……」

クソ真面目に採点してる奴は知らん。仕方ねえだろ下味付け適当なんだからよ。

「……!!!お、美味しい……!？」

……相変わらず表情が豊かな奴だな。早苗は。

『そうがつつくな。適当に足りなけりや作るからよ。』

「……ありがとうございます!!」

明るい表情で元気よく早苗が返してくる。……天使か？

『……おい、貴様等、食い終わったら洗え。四秒でな!』

「流石に無理ですよn」「了解!」「……え?」

幽夜と壊夢と風魔の掛け声とともに皿が打ち上げられ、皿が瞬時に凍り付き、次の瞬間氷が爆散し、飛び跳ねた氷は風に巻き込まれて水蒸気に・・・意味わかんねえ技術磨くんじゃねえ。三秒で終わってんじゃねえか。

『ほい、侵二、貴様は二秒・・・いや、既に貴様は終わっているな。』

「・・・その通り、リーダーが洗えと言うその時！私は既に行動に移し終えているっ!!」

やめようか。どっかで聞いたことある流れだ。

「リーダー、クソ眠いから俺寝る。じゃあな。」

そう言うと幽夜は地下の六号室に籠った。まあ、アイツの第二の家だし？

「・・・リーダー、しばらく書斎を借りるぞ。」

『ほい。』

風魔が書斎に入り浸ると遠回しに宣言した。隣で早苗が書斎!?!と驚いているが、生憎地下どころか異空間に家が出来ているんだ。その程度存在する。

「んじゃ、俺も寝るぜよー」

壊夢は三号室に消えた。

『侵二、お前は・・・寝てら。』

相変わらずの立ち寝である。毎度毎度スタイリッシュな奴だ。

『で、紫は「……一緒に寝るのは？」却下。お前七号室あるだろうが。早苗は八号室な。』

舌打ちをする紫は置いておいて、早苗は八号室で大丈夫だろう。……ぶつちやけ九百まであるしな。使わねえ。

「分かりました。おやすみなさい……」

「……鏡一、お休み……」

……さて、立ち寝状態の侵二を省くと俺一人だ。

『つつてもまあ、する事ねえしな……』

仕方ないので俺はその場で寝る。勿論立ち寝だ。

「……結局主上も立ち寝じゃないですか。」

うん、聞こえない。

新しい朝が来た。(午前三時)

『……さて、飯飯。』

「くあ……ん？もう朝ですか……」

今更だが俺らの起床は朝三時から四時、睡眠は深夜十二時が基本。

ショートスリープレベルの生活。

『今日は・・・土曜か。クソ暇だな。』

生憎部活動なんぞ入ってねえ。てか確実に侵二は家庭科部に、風魔は剣道部に入れちゃなんねえ。

「で、今日はどうするんです、主上。」

さて、することが無い、ならばっ！

『早苗の家行くか・・・聞くと両親駄目っぽいし。諏訪子曰く権力争い真っ最中だとか。』

「マジか!!俺も混ぜろ!!」

颯爽とドアを蹴り飛ばして幽夜が現れた。・・・どうでもいいがノックしろ。

『・・・他人の不幸で?』

「飯が美味しい!!」

完っ全にクズじゃねえか。ドヤ顔で言うことじゃねえよ。

『んーじゃ決定。どうなってるか知らんがな。』

暇に変わりはないがしばらく遊べそうだな。

次回へ続く

第一百六話 激昂

side 鏡一

『……と言うわけで、お前の家行つて大丈夫か?』

早苗に家に行つていいか聞く。実際同年代だと展開が速いが、俺等は性別不明が混じっているうえ、俺以外の野郎共が婚約済み。何か起きる方がおかしい。てか早苗も全く気にしてない。

「いいですよ。……でも、お見せできる事が……」

早苗が悲しそうに下を向く。……さーて、第二の課題始めるか。

『……確か、跡継ぎでもめてるんだろ。』

「はい……」

なんて顔をしてやがる……

「……そんな顔しちやいかんぜよ。」

壊夢が早苗の肩を叩く。

「……壊夢君?」

壊夢が爽やかに、全部俺に振ってくる発言をしやがった。

「リーダーは依代になれるぜよから、何かあつたら神が降りるかもしれんぜよ。」

・・・いや、まあ、依代どころか本体だけだな!!

「・・・そうなんですか?」

早苗が心配そうに聞いてくる。・・・頷くしかねえじゃねえかよ。

『・・・ああ、大体降りてくる。化け物も降りてくる。』

こうなりや元から無いプランaだ。

『・・・で、今から行くが、準備できてるか?』

「はい、出来てます・・・」

『いいだろう。』

これ以上暗いとイライラしてくるのもう行く。

『風魔、いいな?』

つまらなさそうに聞いていた風魔が立ち上がり、頷いて飛び去り、帰ってきた。

「ポイント完了だ。行けるな?」

『よーし、上等!バースト!!』

空間を破って全員入る。早苗は混乱していたが神々の遊びと嘘をつくと納得したようだった。

して、辿り着いたのは普通の神社。・・・と、クソデカイ豪邸。神

仏の邪魔じゃい。

『……あれが家か?』

「はい。」

早苗が淡々と答える。

『ふーん。……おい幽夜、プランaだ。「分かんねえよ。」……騙せ「あいよっ!!」……あのなあ。』

幽夜がノリノリ過ぎる。外道め……

『じゃあ……俺が行くからな。』

豪邸のインターフォンを押し、失礼しますと営業スマイルから始める。侵二曰く張り付いた笑みで挨拶をする。

『今日は。つい最近お宅の早苗さんと仲良くさせて頂くようになった、矢川と言います。初めまして。』

「あら、早苗の?」

恐ろしくチャラチャラした早苗の母さん?が驚いたようだった。……こっちがビックリだわ。

『はい!実は僕も仏教関係の者でして、神による憑依が出来るんですが、そのせいであまり周りと馴染めなかった時に早苗さんが……』

勿論背後で幽夜が能力を使いまくっている。嘘だと感づかれる確率はゼロ。

『それで、お札にこの神を憑依させてこの権力をはつきりさせようと思ひまして……』

ここで怒ればリセット。喜べば地獄ルートだが……

「あらーなら歓迎するわ！ねえ、あなた！ウチの権力がはつきりし
そうよ!!」

地獄ルート確定。生き地獄じゃい。

『……なら、向こうにいる組織も同じでいいですか?』

瞬く間に了承された。そして神社の中へ案内され、親族と思わしき
奴らが集まってきた。

「……鏡一君、本当に……」

頷いてやった。……しかし、懐かしい霊力が感じ取れるな……

「さあ、鏡一君、お願いしてもいいかしら?」

諏訪子と神奈子は幻想郷にいたので勝手にさせてもらう。

『はい。……侵幻幽魔夢二夜風、絶!!』

……適当に頭を下げて、霊力から変換する。

『……聞け、貴様等。』

妖力になあ!!

『……つってもまあ、どうでもいいや。ここに権利書あるか？土地権利書。』

若干驚きつつ、おずおずと親族の一人が権利書を持って来た。

『ふーん、全部譲渡ねえ。じゃ、普通は一番才能がある奴だな！誰だー？』

「……ウチの早苗です！早苗は風祝の素質があります！」

だろうね。そう言うと思っただが、アンタが言えるわけないだろ。

『あっそう。じゃあ全権を早苗のみに譲渡！他は出て行け。いらん。』

「なっ……」

早苗の母親が絶句する。

『いや、当然じゃん。他要らないから。……それとも何？お前ら権力と金欲しさで俺呼んだの？』

周りが一度黙るが、何処からか当たり前だと叫ぶ声が聞こえた。……幽夜だろ teme 工!! おかげさまで周り全部そうなったじゃねえか。

『……あっそ。』

さてそろそろ雷落とすかと準備した。その時だった。

「いいかげんにせんかつ!!」

壊夢が拳骨を床に叩きつけていた。おーい、ぜよ抜けてるぞ。

「壊夢さん・・・？」

早苗が驚いたような、泣きそうな声でそう言うと、壊夢は更に逆上した。

「こんなに早苗が苦しんどるのに貴様等は自分のことばかりかつ!!
見苦しいっ!!」

あー、壊夢の奴、ブチ切れてやがる。

「何だこのガキ！勝手に家の問題に口を挟むな!!」

またか幽夜あ!!

「やつかましいっ!!家以前の問題だろうぜよがつ!!」

そう言うのと壊夢は、俺から権利書をひったくり、ふざけていた幽夜を引っ張り出し、書類を凍らせた。見ると、幽夜にも青筋が浮かんでいた。お前等・・・

遊ぶんなら誘えよ!

「一体何を・・・!」

馬鹿か早苗の親族の誰かさん。アイツ等書類ぶち壊すに決まってるんだろ!!

「ふんっ!!」

凍った書類を氷の塊ごとぶつ壊した。

周りから悲鳴が上がる。早苗もあまりの展開に驚いている様子。

『・・・ほう、やるじゃねえか、小僧。』

仕方ないのでそのまま進める。

『・・・で、これで権利書無くなったんだよなめんどくさい。まあ、これで普通になったわけだ。・・・で?ここ、誰が管理するの?あ、先に言うけどさ、書類消えたんて財産云々却下でね?』

誰も立ち上がらなかった。正確には早苗以外。

「私がやります!」

『お、決まったな。じゃあ閉廷・・・の前にだよ。お前らだよ早苗の親族共。権利目的かボケ。・・・やっぱ本人連れてこなくて良かったわ。・・・言い忘れてたがな?コイツ、鏡一は憑依能力高いからな。時々化け物が乗り移るんだわ。で、今乗り移ってんのは俺・・・絶影。』

数名がショックで崩れ落ちる。隣で幽夜が満面の笑み。

『で、自分達の神社の神様がどんな奴か分かってない奴らは素質無し。神社は貰う。契約しちまったからな。今回お前等は悪魔と契約しちまったわけだ。大人しく余生を過ごせ。せめての慈悲だ。そしてこの後貴様等の神社についての記憶は消滅する。以上。さっさと

失せろ。じゃねえとそこでニコニコしてる饕餮が貴様等を食い千切る。後、鏡一や早苗、そこにいる紫に危害を加えようものなら、我が特技の【津苦得ノ角二武津蹴琉】（杓の角にぶつける）呪いをかける。良いな・・・？』

そう言うのと、蜘蛛の子を散らすように逃げ去った。結局野郎の全員が青筋を立てていた。胸糞が悪い。

『・・・さて、早苗。色々悪いな。勝手にしちまって。・・・そろそろ帰りたいんだが、・・・ちよつとお前に会わせるべき奴がいる。』

「・・・私に・・・ですか？」

『ああ、野郎共もよく知ってるぜ。・・・な、

・・・縁？』

「・・・ふふつ、お久しぶりです。絶影さん達。初めましてよね。早苗。」

『えつとな・・・早苗、お前さんの先祖だ。』

早苗が立ち上がった。

「ご先祖様・・・ですか？」

ええ、と、縁が頷いた。

「私が初代の守矢の巫女よ。・・・ずっと見てたわよ。いつも自分を殺して、神奈子様と諏訪子様の為に努力していたのも。」

でもね、と、縁が続けた。

「私も同じように頑張ってたわ。でもね。私が死んだとき・・・諏訪子様と神奈子様は泣いていたの。・・・神様らしいことが出来なくてごめんって。だから、お願いがあるの。」

「・・・何ですか？」

縁は寂しそうに笑った。

「時々、神奈子様と諏訪子様に甘えてあげて頂戴？ちよつと我儘を言っただけお願い。」

早苗は、頷いた。

「・・・分かりました。縁・・・さん？」

「縁でいいわよ。それじゃあね。・・・絶影さん。ありがとうございます。あの時、とても楽しかったです！侵二さん達も、ありがとうございます。そして、紫さん。早苗がお世話になります。・・・では！早苗をよろしくお願いします!!」

そう言うと、縁の霊力が消えた。

『・・・了解。』

隣で何かを決意したような顔つきの早苗に、俺は霊力に戻して言った。

『望まない結果で悪かったな。』

いえ！と、早苗が今までで一番明るく笑った。

「ありがとうございました!!」

その顔からは、迷いや悩みが見えなくなっていた。

次回へ続く

第一百七話 結果・予定

side 龍一

あの壊夢君のすべて壊すんだっ！事件から早くも二日。あの後案の定早苗の親族はわざわざ訴えてきやがってくださった。ところがギッチョン、こちらには侵二がいる。類稀な外交能力と会話力、皮肉と毒の強さを最大まで活かし、あるうことか此方が恐喝されたといった案件に。しかも訴えた親族が精神科へ直行。・・・何やったんすかね、侵二君？是非ともお教え願いたい。

「ありがとうございます。・・・少し、スッキリしました。」

『構いやしねえよ。・・・不謹慎かつ失礼だったが楽しかったしな。』

今でも絶影に取り憑かれたふりは思い出せる。

「壊夢君・・・いえ、壊夢さんもありがとうございます。」

珍しく壊夢がキレたのはかなり驚いた。前例は地底での嫌われ者妖怪を受け入れるかの会議でブチ切れたらしい。受け入れるな派に「たわけっ!!」と一喝。

その時地面を思いつきりぶん殴ったらしく、地球のマントルを貫通してコアに衝撃を叩き込み、数百年ぶりに火山活動を活性化させ、幻想郷外の火山まで噴火させたらしい。・・・もうお前国作れよ。絶対島一つ作れるよ。

「・・・あんま慣れとらんから照れるぜよね・・・」

壊夢が頭を掻く。コイツは嘘をつくとか人を騙すとかが無理なので、感謝されるところなる。

「……主上、賠償金どうしますー?」

『何やってんだ侵二!?!』

侵二が言うには「ああ、向こうが訴えてきた要件を受け流し、こちらの言い分をやや脚色して返した上に皮肉全開で毒吐いたら勝ちました。地獄での映姫言いくるめるより余裕ですね。」との事。比べるな。

『……とりあえず賠償金無しで。要らねえ。』

「御意。続いて壊夢と幽夜が破壊した書類ですが、文章の文字から正式に早苗が後継者となりました。……まあ多少こじつけで認めさせましたが。以上です。」

もう何でこんな天才が俺ごときの式神なんだろうねえ。裏切られたら死にそう。……六回ぐらい?」

「分かりました。ありがとうございます。」

早苗がそう頭を下げる。侵二は微笑しながら答える。

「いえ、これらは後片付けに入りますし、我々が責任を持って全てを終わらせますから。」

『まあ、当然だわな。……で、紫と風魔と幽夜は?』

早苗が答える。

「あ、幽夜さんならゲームセンター行こうぜ! って、言い残していき

ましたよ。」

『それ倒産させる奴じゃねえか!』

幽夜の所持能力が増えたのか元からなのか、空間認識力が異常に高い。恐らくフアングのせいだろう。もうやめろよこれ以上ステータス上げんな収集つかねえ。

「いえ、紫殿や風魔もいますし大丈夫でしょう。」

『・・・あー、うん、大丈夫・・・?』

「きつと大丈夫ですよ!」

気のせいかな早苗が結構フランクと言うか軽いキャラになってしまった気がする。・・・オレラノセキニンジャナイヨネソウダヨネ

『・・・まあいいか。』

実は後処理がかなりややこしく、もうかれこれ一か月が経っている。その内三分の二は俺が紫に連れ回されたせいで遅れたのもある。・・・まあ良いんだが。外交は侵二、俺は片手間に書類を整理した。風魔は早苗に術の指導。その時の「幻想郷では護身術が必要。術が使えるだろうから使って私に当てろ。さもなければ私が今斬る。」といった遠回しの殺人予告もとい迷言は後世に残るだろう。ハードル高すぎるわボケ。全員が全員天狗じゃねえんだよ。

壊夢は風魔の代理として術を教えた。早苗もそこそこ成長し、何とか風魔の髪の毛に一発掠った。「・・・これで天狗共は撃退出来るだろう。」との迷言も出来た。お前そこまで底上げしたんかい。

幽夜は早苗へ弾幕回避の基礎を教えていた。もう基礎レベルでは

なかった。いきなり「飛べ。」は壊れてやがった。まあ分裂しろを言わなかったのは褒めるがおかしい。流石に飛行は俺が教えた。教えるの苦手だって言ってるんだろ。途中で早苗が「一番分かりやすい・・・！」と言っていたのは幻聴。きつと幻聴。今更だが紫に教えさせれば良かったと後悔している。反省はしていない。

その間に神奈子達に報告をした。流石に早苗の親族が大混乱の章は顔が引きつっていた。俺等に頼めばそうなるに決まってるんだろ俺等悪人なんだしよ。そもそも遊んでた奴が一人混じってたしな。

そしてオマケもとい余談だが神奈子達に若い天狗が何度か文句を言ってきたが、それを聞いた妖怪の山の裏ボスさんは「文句があるなら私に言え。まあそこそこ本気で制圧するが。」と天狗に一喝。修羅かお前は。

壊夢も壊夢で「俺も混じるぜよ！」の一言。勇敢にも突貫してきた若い天狗が一人居たが、おおよそ千の切り傷をうけ、五十か所を複雑骨折した。理由は言わぬ。その後俺がほぼぼぼ死んでる天狗を完全回復させた。それを見ていた古参の天狗達は「やはり風魔様達の力は健在であった・・・！」と、非常に風魔は尊敬されていた。と言うか崇拜されていた。

更に侵二が「・・・少々騒音が多いようなので、ここらで間引きをさせて頂きたいと思うのですが・・・」訳（うるせえ食い千切るぞ）と脅迫。もう霸王と魔王しかいねえのかよ。と言ったわけで若い天狗達は一切神奈子達に手出しが出来なくなった。風魔も有能すぎる。寝首搔かれそう。

拳句の果てに誰かさんが『いや、もう言う事聞かないなら二度と朝が来ないようにして空の星全部塗りつぶして年がら年中土砂降りにして貴様等全員脳味噌いじって殺し合ひさせて最後の一人だけ正気に戻して狂死させるぞ?』と冗談軽くかますと全員が顔面を引きつら

せながら命令に従い始めた。・・・俺ですよごめんなさい。全部出来るけどジョークだったの。半分だけ。

して何事もなく(?)数か月が過ぎた。土産話と言えば、高校の剣道部が以前幽夜に急所を攻撃された男子の知り合いらしく、仕返しをしに来たが、久しぶりに刀を持てると笑い出した風魔のクソ長い鞘で全滅。一振りで全員気絶。

俺達で体育祭のリレー同時出場。野郎レースに早変わりして300メートルフルダッシュで競い、観客啞然で同率四足歩行でゴール。

幽夜が昼休みにフルートを吹き始め、いつの間にか学生全員集合、拍手喝采事件。

俺達でテスト困惑させようぜと侵二が早苗に勉強を驚異的なトーク能力で教え、早苗と紫を含む野郎共でテストオール満点。どうしてもいいが最終日に高校の放送室で「制圧始めまーす」と共に三分で制圧完了。

正直言つて無茶苦茶だったが・・・楽しかった。

そして更なるオマケ。改めて分かった事があった。どうやら俺は・・・

鏡一とその他の顔が若干違うようだ。

・・・いや仕方ないじゃん。鏡見ないし。正直最近になって龍一の顔見て『誰だコイツ!』って叫んだからな。俺の元がボロクソに修正された感じだった。そうかこんなな美化されてたのか・・・うむ、侵二の隣にいても大丈夫そうだな。

紫に言うところ「え?今更・・・!?と言うかそもそもあんまり変わってないって・・・!」と叫ばれた。頬をつねった。幽夜に「今さらかよクソワロタ。てかそもそも変わってねえだろ煽るぞ。」と煽られた。引きちぎったが効果がなかった。

しかし、残念なことが一つ出来た。・・・早苗が慢心した。

「幻想郷でも頑張れそうです！」といった意気込みはよろしいが、勢力を広げるのは控えた方がよろしい。

なにしろ現在の幻想郷の九割は既に我々が干渉している。とかっこつきたいがまあ、知り合いがいるだけで大したもんじやない。地底と妖怪の山以外。

紫は何を思い出したか早苗の慢心発言を聞いては頭を抱えている。・・・野郎演出登場、俺戦闘機出陣・・・あれか。月か。

まあ、正直止める気はない。理由？・・・言わずとも知れた事よ。

Q 何をする気ですか？

A 宗教を理由に喧嘩売って遊びます。

よし、そうと決まれば即実行。

そろそろ帰ろう。幻想郷に。

次回へ続く

第百八話 逆戻り

side 龍一

『イヤーツ！トアーツ！』

転送魔方陣を開き、幻想郷に帰ってくる。……って、もう夕方かよ。

「何？……って龍一さんか……」

「ヘアアツ!!」

侵二の飛び膝蹴りが俺の後頭部に直撃。

『……ぬあつ……テメエ!』

侵二が腹の立つ表情で、

「……いつどんな時でも油断は禁物である。」

そうさざらりと言った。

『ああそうかい！勉強になるなつと!!』

「でやあつ!!」

背後から壊夢がリアットをくらわせてくるのは予測していたのでしやがむ。

「んなつ……!?!」

侵二は流石に壊夢のラリアットは予想外だったのか、腕をクロスして抑えこもうとするが、三メートル吹き飛ぶ。

『ヴァカメ！貴様こそ油断しすぎだ！』

「……何やってるの？」

霊夢のツツコミももつともだ。何処に帰ってきた途端殴り合いに発展するメンバーなんぞ聞いたことがない。そもそも生き返ってきた涙一つ流さない再開も初めて見た。逆に「感動を返せ」すら言われた。

『「いつもの。」』

なのに下らないところで一致する。素晴らしきかなこのクソ野郎共。

『……で、何でお前は縁側で茶を啜ってんだ幽夜！』

「平和だわー」

『それお前が言ってもしっくり来ねえよ戦乱の申し子!!』

「帰還数分で大騒乱。」

「……やかましい。静かにしろ。」

最後に出てきた風魔に止められるが、非常に何故か腹が立つ。誠に不本意だ。

「霊夢ー、帰ったわよーって……何してるの？」

普通にスキマから帰ってきた紫にすら呆れられた。仕方ない。いきなり侵二と壊夢が殴り合い、幽夜が茶を啜っているのだから。もうフリーダム過ぎる。

「……さて、主上、そろそろ帰らせてもらおう。白狼天狗のサボリへの罰に良い物が入ったので、今から使いに行く。」

『……分かったから嬉しそうに広辞○持つな！』

嬉々とした表情で辞書を振りかざす奴はこの百億年中に初めて見た。間違いねえ。生粋の馬鹿野郎だ。しかも異常に剣さばき、もとい辞書さばきが上手い。無駄に洗練された無駄のない無駄な動きとはこの事だろうね。

『……もういい。閉廷。……で、どうすんだよ。向こうで別れてからグダグダしすぎたせいで一週間誤差出来てるんだが。そろそろ動くと思うか？』

そう侵二に聞くと、侵二が真顔で答えた。

「……いえ、もう百メートル先にいますが。」

思考停止で全員に命令を出す。

『隠れろっ！』

途端に壊夢は跳躍して博麗神社の屋根に、風魔は桜の木の上に、幽夜は形を崩して地面と一体化、侵二はどこから持ち出したのか目しか見えない陰陽師の被り物を被り、紫はスキマに隠れ、俺はシユナイ

ダーに変化し、賽銭箱の後ろに避難。ついでに二丁拳銃【バラウール】と【クロウ】を装填。大惨事大戦の記憶を思い出すが良い。

「速ッー!」

霊夢が意味不明といった表情で叫ぶ。仕方ねえだろ?ここで俺らだと分かってしまうと全てがご破算だ。・・・神奈子達に俺の神社が何処か言わなくて正解だったぜ・・・!

「失礼します。」

早苗が走って、そして一礼をして神社の鳥居から中に入ってきた。侵二も満面の四十点。クソ採点過ぎる。

「は?え?何?」

「初めまして。私は守矢神社の風祝の東風谷早苗と申します。早速ではありますが・・・この神社を我々に明け渡して頂けませんでしょうか?」

侵二の採点が上昇。百点満点。・・・基準分かんねえよ!

「はあ!?そんなの良いワケないで「詳しくお伺いします。」ちよっ、侵二さん!」

ナイス侵二。

「・・・初めまして。私如きが名乗らせて頂きます。信用の信に二で、信二と申します。私如きでよければ、お伺いさせていただいてもよろしいでしょうか?」

これがアルティメット侵二の外交術か……！参考になりませんねえ全く。

「分かりました。お話しさせて頂きます。」

そして侵二が何を企んでいるのか霊夢は全く分からないまま淡々と進んだ。

「了解しました。では、こちらの祀られている神と、その従者、そしてこの神社の巫女、博麗霊夢がそちらに伺います。少々お待ちくださいませ。場所は存じ上げております。」

もう知ってる時点で怪しいのだが。一切早苗は気づいていない。

「さて、うちの神は気分神でして、ここの効能はどうなるか一切分かりません。・・・戯れと洒落こんで、我々の作ったくじでも引かれませんか？」

嫌な予感がして幽夜を睨むが、案の定【四凶】以外のくじは全部抜いてあるようだ。このど外道。

そんな事はつゆしらず、早苗は引いた。勿論四凶を。

「わざわざありがとうございます。・・・では、それは決して家に帰るまで開けてはなりません。かつて迷信だと開けた男は我が神の【苦紗魅蛾吐魔羅那射】（くしゃみが止まらない）呪いを受け、一族もろとも滅んだそうです。」

？です。そんな呪い強くねえよ（使えないとは言っていない）。

「そうですねか・・・それ程までに強力な方なのですね！では、良い返事をお待ちしております！」

そう言うと、早苗は律儀に一礼をして飛び去っていった。

「さて、もう大丈夫ですよ。」

滅茶苦茶過ぎる。計画性のけの字もねえ。・・・まあ、俺は計画し過ぎか・・・

「・・・そうか、もう出られるか。では、主上らの登山の許可を取ってくる。まあゆっくり来ていれば丁度だろう。」

『サンキュー、じゃ、行くか。霊夢はもうちよつとしたら呼ぶから待ってる。紫は・・・どうすんだ?』

風魔が高速で飛び去っていくのを背景に、紫は答えた。

「うーん、今回はいいわ。」

『了解。じゃ、野郎共、行くぞ。』

俺は目の前の空間を割って飛び込む。瞬時に空間は再生する。・・・実はこれだけ能力云々が関係ないのは内緒の話。普通に空間のズレを見つけて強制的にぶっ壊すだけであって、ワープではない。

「・・・また無茶苦茶な事してるわね・・・」

紫に呆れられるが仕方ない。そのまま暫く割れた空間の中を移動し、妖怪の山の麓についた。

『よっしゃ。到着。適当にウロウロしてから頂上に行くか・・・』

流石にワープまがいのことをしてすぐは怪しまれる。

「そこの者！何者だ!!」

近くの白狼天狗に止められる。：嫌な予感しかしねえ。てか一々門番に止められるのが鬱陶しい。何？俺絶対に止められるの？

『ん？あれ？許可貰ってるんだが・・・？』

「そんなもの知らん！今すぐ立ち去「うらあつ！」ガツ・・・！」

幽夜ツ！またお前か!!

「こつちも知らねえよ！一々止まれって言うんじゃねえ！止まらねえからな！」

止まるんじゃねえぞ・・・じゃなかった止まれ。そして黙れ。

『・・・ええいクソツタレが！お前がぶつ飛ばしたせいで増援増えるだろうがっ!!』

「・・・仕方ないぜよね・・・」

何で仕方なくてその辺の大木引き抜くかなあ!?!壊夢君!?

「・・・まあ、久しぶりの運動って事でいいですよね。」

なら薙刀しまえ！拳で行け！

「行くぜ！フアング!!」

『いい加減にしやがれ!!てかてめえ等も集まってんじやねえよ!!』

「行くぜオラアツ！」

『やめろつつてんだろ!!』

瞬く間に大乱闘（少数圧倒的有利）

『このタイミングで増援来るかなあ!?話聞けよお前らあつ!!・・・うわっふう!!』

静止しようとしたが、数匹の白狼天狗が刀を投げてきたので回避。もう我慢ならん。

『・・・そこまで遊びたいなら遊んでやるよコラア!!・・・自宅警備システム起動!暗証番号YAGAWA!繰り返し!YAGAWA!!ショックレールガン発射!!』

ドンツという音と共に青白い光を纏った弾丸が接近し・・・

『発動!』

爆発した。俺は既に金属で避雷針を作ったので回避。他全滅。野郎共?知らん。

「うへっ、いきなりあぶねえな・・・」

「我々じゃなければやられてましたね・・・」

「いやー、危なかったぜよ!」

・・・そこそこ信用してるしな。くたばらねえだろ。クソが。

「・・・で、どうするんですか。これ。」

『・・・うーん、どうするか・・・』

気絶した白狼天狗の山の完成。・・・いやどうするよ。誰だこんな事したのって俺か。

「・・・一体何事だ。昼間から騒々しい。・・・何だ、主上等か。」

風魔が丁度駆けつけてきたので文句を言う。・・・半分狙ってたんじゃないだろうか。

『おい風魔、許可取れてねえじゃん。』

風魔が顔をしかめて返す。

「また若い奴だけだったか・・・人の話を聞かん奴らだ。少しは権を見習え・・・」

そう言いながら風魔が書類を取り出した。

「ともかく、問題はない。さっさと行くぞ。」

鬼やこいつ。流石妖怪の山の裏ボスといったところか・・・

「ああ、そう言えば、主上の技術に興味がある奴が『GO!!』んなっ・・・」

問答無用ダツシュ！武器に興味がある奴に悪人はいねえ！そして

ロマン武器について聞かねば!!

「待て!道は『分かんねえわ案内しろ。』……了解した。」

これは早苗の神社訪問先延ばしだな!……まあおみくじ碌な事書
いてねえしな!!

次回へ続く

第百九話 前座

side 龍一

風魔に案内されて河童がいるという滝と池に到着。基本臆病で龍神の前に出るなんぞありえん寄り道すると言われるのを横に、俺は池に飛び込んだ。

『だったら！俺が！泳げばいいだろう!!』

俺はそのまま高速で泳ぎ、傍で動いたようなモノを掴んで飛び上がった。

「龍神の滝登り・・・鯉じゃあるまいし遊ぶな。」

「縁起よさそうですねえ・・・若干時期遅いです。」

「・・・マスターのはねる！しかし、何も起こらない!!」

「おお、主も泳ぐの速いぜよねえ！」

と、各々の一切までもではない感想を全て黙殺して着地する。それより本題だ。

『で、風魔、捕まえたぞ。』

「阿呆か。」

俺は片腕にジタバタしている河童を掴んだまま言うと、安定の発言で返された。

「なななななな、一体何が!？」

「すまんにとり。私の主人の暴走だ。」

「ひゅい!?!りゅ、龍一様ーっ!?!」

『……コント?..』

「殺す。」

風魔の見えない横一文字の斬撃を俺は上体を逸らしながら片手を地面に付けて蹴り返そうとしたが、躲すタイミングで当たった。单刀直入に言うと同髪を三センチ斬られた。

『……ごめんごめん。で、河童だよな?』

「あ、うん、そうだけど、いや、そうですね……」

『敬語カット。初めまして、神矢龍一だっ!……というのは置いて、单刀直入に聞きたい。……ロマンとは?..』

「ドリルっ!!」

にとりはそう叫んだ。

『……ほう?..』

「……」

『「同志よ。」』

「意味が分からん。」

俺にとりては手を繋ぎながら頷いた。風魔お前ドリルに謝れ。

「あ、ごめん。自己紹介まだだったね。私は河城にとり（かわしろにとり）、分かってるだろうけど河童さ。」

『よろしく。で、早速だが、俺の技術に興味あるとか一切ねえよヴオケ！とか。』

「ああ！あるんだよ！・・・あれ？今日は持ってないのかい？あの巨大な筒みたいなモノ・・・」

ライフルか!!

『あ、これ?』

俺が空間からスナイパーライフルを引っこ抜くと、にとりの目が輝いた。

「それぞれ!!どうなっているんだい!？」

『・・・じゃあ暫く貸そうか?』

俺はスナイパーライフルを担ぎ上げ、支えたままにとりに渡す。途端、にとりがよろける。

「んなっ!？」

『あ、いけね。・・・それ1トンあるから潰されないように。』

かつて古文の師は言っていた。左の頬を叩かれたら、いつでも復讐できるようにあらゆる物を鈍器として扱えるようにしなさいと。……あれ、すかさず裏拳を鳩尾に叩き込み、頭が下がった所に蹴りを叩き込みなさいだったか。いや、シャーマンスープレックスの後、唐竹割りをかまし、踵落としてトドメを刺せだったかな。ともかくそんな理由で俺の武器は新月以外非常に重い。銃剣も一本2キロ、二丁拳銃も元ネタの重量10キロを通り越して40キロである。もう鈍器。新月は1キロと軽い。余談だが壊夢の籠手は片腕で1トンである。ふざけんよ。

「い、1トン!？」

『おう、反動も500キロな。一般人ならぶっ放した途端死ぬから。』

「ぶっ!？」

にとりが盛大に吹いた。

『まあ撃たないんならこれ外すぞ。』

俺はロングバレル(200キロ)と銃弾十発(一発10キロ)とサイレンサー(100キロ)とブレ抑止用のアーマー(500キロ)を外した。これで1000キロ。

「ひええ……」

にとりが引いている気がするが、ここまでやらないと普通に死ぬ。

『まあ、これで本体だけな。そろそろ俺等行かなきゃならんのでな。ライフルはまた今度返してくれ。』

「うん！ありがとう!!しつかり調べさせてもらうよ!!」

俺は野郎共と共に引き返し、元の山道に戻った。

「・・・取り敢えずあの一件で壊夢が化け物なのが分かった。よくあれで殴られてびくともせんな・・・」

「んー？あの程度じゃまだまだぜよ。あれで吹っ飛んでちや鬼の旦那なんぞ務まらんぜよー！」

壊夢が遠い。今更ながらお前等生物基礎から外れてるだろ。もう脊椎動物かも胡散臭い。

「どうでもいい。正直の所急げ。これ以上書類案件を増やすな。」

「俺も飽きた。さっさと行って暴れようぜー」

本音を吐く風魔と馬鹿。馬鹿野郎オブラートに包んで宗教戦争と言え、誰が暴れるだその通りだよ！

「・・・そうですね。そろそろ早苗達も大騒ぎではないでしょうか。・・・念のため聞きますが、おみくじに何と書きました？番号は2ですが。」

『・・・タイムリミットは2時間。急いで懺悔しましょう。戸締り確認しましょう。』

「・・・脅迫文じゃないですか。」

『・・・やっぱり?』

いやー、薄々そんな気がしてたが、やっぱり脅迫文か。・・・どうしようか。

「いいから急げ。そして二度と家で暴れるな。」

『・・・位置について、』

「・・・用意、」

俺が遮って言うと、風魔も自身で遮って続けた。

『ドン。』

瞬間幽夜が地面に潜り、壊夢と俺と風魔が地面を爆走し、侵二が飛翔した。

接戦もクソもなく秒差で幽夜が勝った。幽夜が地面を凍結させて風魔にコンマ数秒のスリップ、壊夢と俺は追いつかず、侵二はまさかの不参加。

「これは俺の勝ちだな。」

『狂気のサタデーナイト。』

「黙れいい加減にしろ。」

「はいはい、さっさと衣服整えて下さい。」

口調が荒くなった風魔と冷静過ぎる侵二を横に、俺達はすぐさま衣服を整え、引き戸をノックしようとした瞬間、神社内から叫び声が聞

こえた。

「し、四凶ーッ!!?」

すかさずノックしようとした手を引いて戸を蹴り抜いた。

『おっ邪魔しまーす!!』

「来たあーッ!!」

慌てて早苗が俺達の方に来る。

「あ!先程の信二さんと・・・きよ、鏡一君っ!」

『どうも、あの神社の神の矢川鏡一改め神矢龍一だ。・・・呼んだか?』

早苗はしばらく固まると、慌てて奥の部屋へ引っ込んだ。

「ちよつと神奈子様!!何で鏡一君が神矢様なんですか!?と言うかそもそもお知り合いですか!!?」

「終わった・・・!どうしよう諏訪子、このままだと・・・!」

「・・・うん、神奈子・・・絶対に殺される・・・!!」

『二人で騒ぐなやかましい。』

「ギヤアアアッ!」

「何事ですか主上、さつさと喧嘩売った相手を喰おうと・・・あ、ど

うも。」

「ゲーツ!!」

侵二は特に諏訪子が叫んだ。

「……昼間から騒がしいな。今日は騒音日か? ……ん?」

「あーっ!!」

風魔は早苗が、

「やかましいぜよ。大体そんなに騒ぐ必要があるぜよか……おう、久しぶりぜよ。」

「ぶっ!」

壊夢は神奈子が、

「アー、スミマセン、富士山ハ山梨ヲミギデスカ?」

『誰だてめえ!!』

幽夜と思わしき外人は俺が叫んだ。山梨を右とかアバウト過ぎだろ。てかそもそも外人なのがおかしい。

『……でだ、久しぶり……でもないか。また会ったな、早苗。』

「え? あ、本当に鏡一君ですか……?」

早苗が半分嬉しそうに聞く。

『ああ、俺らが高校に入ったのもその二人に頼まれてな。・・・まあ幽夜は遊びに行ってたんだが。』

そして、と俺は逃げ出そうとする諏訪子と神奈子を幽夜に捕まえさせる。

『・・・で？お二人さん、今なら許してやろう。・・・俺に喧嘩売った？』

「売ってません!!」

「売ってない売ってない!!」

「あれ？でも諏訪子様も神奈子様も拠点増やそうと・・・」

真の敵は味方にあり。何も知らない早苗に裏切られた二人は青い顔になった。

『・・・おつやあー？聞き間違いかなあー？・・・懲りろ貴様ら。もう一回八百万を五ケタぐらい減らすぞ。』

「「すいませんでしたあツ・・・!!」」

『・・・侵二？』

俺は侵二に判決を下して貰う。

「・・・有罪で『おい、』・・・失礼、今回はお咎め無しです。」

『・・・と言うわけだ。まあ仕方ねえわな。俺等「わざと」場所教え

なかったしな。・・・いけね。』

幽夜が本音を混ぜ込んだ途端何故か壊夢に頭を撫でられ顔を赤くしていた早苗に詰め寄られた。

「ちよつと鏡一君じゃなかった、龍一さん！わざとつてどういう事ですか!？」

俺は幽夜にダブルチョップを叩き込んで三つに割りながら答えた。

『・・・俺達の理念は?』

「ああ気分でしたっけそうですねもういいです!!」

『・・・という訳で、ちよつと待ってろ。一応異変扱いになる・・・と思うから、弾幕ごっこをしてみよう。』

「・・・龍一さんですか?」

『いやそんな鬼じゃねえから。風魔、呼んで来てくれる「了解した。」・・・おおう。』

刹那風魔が爆音とともに消え去った。

「・・・あんなに風魔さん速いんですか!？」

・・・ああそうか、早苗はあの爆速サムライ知らなかったな。

『おう、ちなみに壊夢の奴がこの山の窪みとか穴掘ったから。』

早苗が天を仰いでいると、風魔と霊夢が来た。

「戻った。」

霊夢はいつも通りやや気だるげ……ではなく、異常にやる気で漲っていた。

『……何かやる気?』

「ええ!ここで圧勝しないと龍一さんに一生勝てなさそうだわ!!」

あ俺?侵二じゃなくて?……あんまり強くないがなあ……

『……んー、まあ、頑張れ。』

「はいはい、行きますよ?」

侵二が右手を掲げ、

「え?ちよつと、いきなりですか!」

『あ、諏訪子と神奈子も参加しろよ。』

「「ええ!」」

三名を無視して振り下ろした。

次回へ続く

第一百十話 圧倒的成長

side 龍一

侵二が右手を振り下ろした瞬間、霊夢の左右に陰陽玉が出現し、歪な軌道を描き始めた。

『……おい幽夜、まさかと思うが、お前あれを……』

「行くわよ!!」

嫌な予感がしたが、予想通り霊夢が出した陰陽玉が自立したように動き、弾幕を発射した。

『……こつち見ろ幽夜ア!!』

「……仕方ねえだろ霊夢が思った以上にセンスあったんだからよお!!」

予想通り幽夜は霊夢に不特定多数の位置からの攻撃を教えていた。

事実霊夢は昔から使っていたかのように陰陽玉のオールレンジ攻撃を使いこなしている。俺は十年かけて習得したが、霊夢は最近ということは数週間になる。……やっぱ天才だな。強いわ。

霊夢は天才的な戦闘センスがあり、俺達が人間だと到底敵わない。霊夢が天才なら俺は秀才になる。何億の年月をかけて戦闘技術を極限まで上げた。こう言うと凄いが、時間かければ誰でもできるのである。

「……しかし、早苗達の動きも悪くない。」

風魔が言うのも最もで、神奈子は自身の御柱を巧みに操り弾幕を逸らし、早苗は風魔の仕業か弾幕を直視したのち正確に躲し、諏訪子は過去に暴食の王こと侵二が鍛えたせいかやや余裕気味だ。

「・・・しっかし、なんでこう綺麗なのかねえー？」

幽夜がそう零す。実際俺等は弾幕勝負では不敗だが、正直美しくない。それぞれ一年かけて作り上げた【狂喜乱舞】以外はどうしても相手に当てることしか特化していない。

俺等はやはり、殺しや破壊やら殲滅思考やらが抜けきっていない。未だに頼まれると殺しも厭わないような奴が集まっている。

『・・・やっぱり綺麗だよな・・・もう、俺等の全盛期は終わりかな。』

しみじみと会話しているが、生憎やられる気はない。俺は幻想郷で絶対になると決めた事がある。それまでは絶対に最強の座は揺るがせない。

するといきなり霊夢が【博麗二重結界】を拳に収束し、神奈子の御柱を殴り、破壊した。

『ディストーションアタックかよ!?!』

俺は教えたであろう元凶を睨む。当人は飄々としたまま、

「おお！構えも威力も十分ぜよ!!」

などと言いやがった。

そのまま試合は拮抗したが、霊夢は相当化け物（アメーバ）に鍛えられたらしく、集中にブレが起き始めた諏訪子に陰陽玉を、神奈子に拳を、早苗に【夢想封印】を命中させ、流れ弾を壊夢が噛み砕いて終了した。

「つ、強すぎですよ……」

「……博麗の巫女ってのはこんなに強いのか……！」

「……侵二並みにまずいと思ったよ……」

三者それぞれが感想を呟いていると、突然霊夢が俺にお祓い棒を向けた。

「龍一さん、勝負してもらって良い？」

『えー……』

俺は断ろうとしたが、霊夢が本気だったので受けた。

『……良いけどよ、色んな意味で失望すんなよ?』

霊夢は笑いながら答えた。

「もう十分絶望したわよ。」

『随分と成長したもんで。……じゃ、軽ーく行こうか。』

相変わらずの侵二の気の抜けた合図とともに、俺は100個の銃剣を展開した。

「……え？」

『悪いが、そんな本気で来られたら全力で受けるんでね。剣舞【ツルギノマイ】。』

銃剣が直進し、霊夢を刺し貫かんと殺到する。

「……っ!! 霊符【夢想封印】!!」

霊夢が俺の銃剣を相殺せんとスペルカードで対応するが、俺は容赦しない。

『必死なの悪いが後ろ注意な。』

影から霊夢に拳銃を突きつけるが、引き金を引く前にお祓い棒で弾かれ、蹴りを叩き込まれる。

『ゴツ……!とと、分かってるからな。』

俺はその蹴りを片手で受け止め、そのまま動かさず、体を影の位置に移す。そこに銃剣が殺到する。

「しまっ……!」

『動いたら刺さるぞー』

そのまま銃剣は静止した俺達を掠め、地面に刺さった。

『どーするよ? まだ続ける?』

霊夢は首を横に振った。

「……いいえ、もういいわ。ありがとうっ!!」

霊夢が諦めたふりをして俺の背後に陰陽玉を仕掛けていた。

『どういたしました。……後、最後のは目線を逸らすな。減点だ。』

陰陽玉は俺が後ろに向けていた拳銃で打ち抜き、爆散させた。

「ええ、そうね!」

直後、真正面で霊夢が構えていた札が光った。想定外で俺も流石によろけた。

『チイツ!!この程度じゃ流石にやられねえか!!』

俺は霊夢の足を掴んだまま回転して受け身が取れないように投げ、札を指で挟み焼いた。

『はあ……仕方ねえなあ!』

俺は水魔法で大量の水を出現させ、そこに一気に高熱を送り込む。

『【水蒸気爆発】!!』

どうなるかと言えば単なる水蒸気爆発だが、如何せん魔法製なので規模がデカイ。

「……っ!!」

霊夢は咄嗟に结界を展開し、最低限の被害に抑えたようだが、生憎、

『俺は水蒸気爆発ぐらいじゃすつ飛ばねえしひるまねえ化け物なん
でなあっ!!』

身体全体をばねにして霊夢に飛びかかり、頭突きで结界をかち割る。そのまま後ろに跳躍し、地面に刺さっていた銃剣を再度射出して
霊夢の方に向ける。

『今度はぶっ刺すからなあ!!』

銃剣を回転させながら霊夢を挟み込むように飛ばし、木に張り付か
せる。

『木にだけどなあー!』

流石に人間、しかも女子に刃物を刺す気はない。 . . . まあ敵なら
別だが？

『. . . 流石にそこで抵抗されたら困るけど. . . どう?』

俺は拳銃の引き金に手をかけながら質問する。

「はあ. . . 無理よ、動けないわ。降参。」

霊夢がそう言ったので、俺は銃剣をしまった。

『お疲れ様。 . . . だーめだ、銃剣の数減つてら。修行不足は俺か。』

「まだ増えるの!?!」

『うんにゃ、一応千までは行ける……ん？早苗達、何あんぐりしてんだ？』

「……龍一、諏訪大戦の時手加減してた？」

『してた。』

神奈子がふらふらとしながら当然のことを聞いたので、当然のことを答えた。

「龍一ってさあ……性格悪いよね。」

諏訪子にそんな事を言われた。

『酷いなおい……まあ、元は龍神様だって人間だからな。特に性格悪かったし。』

矢川家随一の鼻つまみ者とは俺の事。神矢家も俺が一番性格が悪い。

『……何？無茶苦茶って言いたいのか!？』

「そうですね。ね？神奈子様、諏訪子様？」

早苗にシンプルに答えられた。全く傷つかない。

『……んー、そりゃ一応不敗だしな。不敗だからこそ性格悪いかもな。そこ行くと侵二は完璧だな。負けた事あるせいか優しいし紳士だし顔面偏差値マックスだし。』

「……そんな事ないですよ。多少なりとも暗い過去はありますし……」

ね？」

侵二が数千年ぶりに俺にしか分からないブラツクな微笑を向けてきた。周りはジョークと思っっているらしく、そんな事ないと言っている。

・・・何もねえだろうな？

『やめやめ、はい、戦闘結果よりうちの勝ち。・・・とは言っても張り合いがないと面白くない。そこで、幻想郷の住民を守矢に改宗させるのは許可。但し、お互いに危害を加えないように。神社よこせは・・・次はねえぞ。』

神奈子が真っ先に首を縦に振った。神奈子は特に俺が未だに怖いらしい。特に諏訪子について喧嘩売った時の笑顔が八百万の神を恐怖のズンドコじゃなかったどん底に落としたりらしい。他にも八岐大蛇見ても怯えず笑ってた噂が出た。誰だ流したの。須佐之男しかいねえや。・・・そういや八岐大蛇元気かね・・・？一回ぶっ殺したけど。

『で、筋肉バカと通り魔とアメーバは何やってんだ？』

俺は連れてきた他三人を探すと、幽夜は寝ていた。

「・・・おー、寝てたわ。どうだった？」

『いつも通り。以上。』

「あっそ、終わり？」

『終わり。』

「オーケー、壊夢なら萃香に呼ばれて飲みに行った。風魔は水蒸気爆発の時に頭バリバリ掻きながら始末書きに行った。次暴れたら斬るだってよ。」

『うへえ。』

そろそろ風魔に殺されそうで笑う。異変途中にグサツと行かれるんじゃないかな。

「……んー、なあ、マスター暇か？」

『ああん？お前が俺に頼み事する時喧嘩相手のくだりしかねえんだが？』

幽夜は面倒そうに頭を掻きながら人里の方を指さした。

「いんや。……人里幻夜が名前ややこしいからよこせてよ。」

『おう、珍しくまともな依頼だな。……良いぜ。お前等一家と俺で決めるか。』

「おう、んーじゃ人里の幻夜にも報告してくる。」

そう言うと幽夜は蒸発し、大気中を移動していった。

……待って？化け物増えてない!?

「……うい、報告終わり。俺の家来てくれ。幻夜が待ってる。」

『……分かった。けどな、顔だけ固体にして出すな。どうせ体あつ

ちだろ。』

「あ、いけね。じゃ、後で行くわ。」

幽夜がそう言うのと再び蒸発した。

『俺も行くか。・・・おい、侵二。後任せた。』

俺はそう言い残すと、返事無用で空間を蹴り抜いて入り込んだ。

次回へ続く

第百十一話 名前決め

side 龍一

で、まあ色々あって、

『さあ始まりました第一回幻夜君の名前を決めようのコーナー!!』

「いえーい。」

「……ここまでして俺の名前決めんの?」

『黙らっしやいゲンヤー君。「誰がゲンヤーだ。」お前のためにわざわざ幽香に幽夜に俺初対面だよな。アリスまで来たんだぞ。……つて何故にアリス? 関わりあった?』

するとゲンヤーが目を逸らし、アリスが顔を赤くする。

「……別に、なんもねえよ。「え、ええ、何も無いわよ。後、初めまして、龍一さん。話は幻夜から聞いてます。」『ん、よろしくな。』それよりもさっさと決めてくれ。」

俺はニヤニヤしながら幻夜と幽香に向く。

「何も無いって幽香。「そうらしいわね。……ええ本当に残念だわ。」そだねー」

最後に幽夜に向く。

「……俺見んな。ねーよ。」

すげえ、三者面談……じゃない、三者それぞれの事情が面白い。お

前ら一生幻夜ズ名乗れ。

『じゃ、俺から提案。ギルティナイト「口閉じろ。」……だよな。罪夜(ざいや)は?』

幻夜が首をひねる。

「……違うと思うなー」

「……災夜(サイヤ)人。『アウト。』」

やめろ幽夜。限りなくファールのアウトだアウト。

「……んー、鏡夜(きょうや)「絶対に却下。」……だよなー」

『オイコラどういう意味だ。「そのまま。マスターの名前借りるとか死んでもやだね。」よっしゃ表出る。』

乱闘間近だったが必死のアリスの制止によりゲンヤーが降りた。幻夜はニヤニヤした。

「……チツ、幽香はどうだ?」

幽香はしばらく考えた後、答えた。

「……アリヤ? 「ブツ!!」……フッフ、冗談よ。冗談。」

アリスが吹いた。もう確定事項だな。ちやつかりしやがって。

「……で、本当は……心夜(しんや)。どう?」

ゲンヤーが動きを止め、しばらく考えた。

「んー、悪くないな・・・」

すると幻夜が手を挙げた。

『はい、幻夜君。』

「はい、誓夜（たくや）。」

『・・・』

俺を含め、全員が幻夜を見た。

「・・・え？」

『いや、お前がまじめな案出すと思ってなかった。』

「・・・失礼じゃない？」

『全然？』

「・・・ちよつと外いこ？」

『おう、上等じゃい。』

勿論幽香に抑えられた。

『はい次。幽夜。「大喜利か。・・・そうだな・・・ゴーヤ。」・・・
座布団五枚!!』

「ふざけんなよ帰るぞ。」

『待て待て、悪かった。・・・本心は?』

「創夜（そうや）。・・・まあまあだろ?」

ゲンヤーが唸る。

「・・・どれもいいんだが、ピンと来ねえんだよなあ」「・・・幸夜（こ
うや）は?」「・・・へ?」

声のほうを向くとアリスだった。

「・・・どう?」

アリスが頬を赤く染めて聞いた。

「・・・うーむ、幸夜か・・・」

ゲンヤーは嬉しそうに笑うと、アリスの肩をポンと叩いた。同時に
アリスの頭もポンと音が出た。

「サンキュー！一番しつくり来た！お前らもわざわざありがとうな
！」

『・・・二人で夫婦水入らずで決めりや良かったんじゃねえの?』

アリスが再度爆発し、ゲンヤー改め幸夜が吹いた。

「・・・!?!」

「……ブッ！……まだ結婚してねえよ馬鹿!!」

ここぞとばかりに幻夜が突っ込んだ。

「……まだ?」

「……どういう意味かしらねえ、幻夜?」

「さあねー?」

「……てめえら、謀りやがったな……!」

幸夜が糸を部屋中に展開し始めたので抑えに出る。

『タイムタイム!……そもそもお前アリスと何処で会った?』

すると幸夜は糸を溶かし、頬杖をついた。

「……人里で勤務中に会った。アリスは裁縫の臨時教師でな。慧音が先生が頼んでるらしいんだわ。」

で、その時に会って……上海に懐かれた。あ、上海ってのはアリスの作った人形な。……なーんで懐かれたかわかんねーんだが。でまあ俺の特技が糸だろ?相性良くて話広がつてさ。……それ以外期待されることはねえよ。残念でした。」

アリスがコツソリ首降ってるのは黙っておこう。何かあったな。

「……僕もおんなじこと風魔に言ったな……その日に結婚式挙げたけどね。」

幻夜の爆弾発言!!

こうか は バツグンだ!

幸夜 は 倒れた！

アリス の だいはくはつ！

アリス は 倒れた！

オチ が ない！！

「馬鹿やってんじゃねーよ。・・・で、式はいつ？」

幽夜 の 便乗！！

「・・・いい加減にしやがれえっ！！」

幸夜 の げきりん！！

『何で俺じゃい!?!』

何故 俺が!?!

「ポケ○ンパロディやめろーっ!!」

『そこかーっ!?!』

結局目を覚ましたアリスによって制止された。

「・・・はあ、はあ、次は・・・ねえからな！」

「・・・何のことかなー？」

た。
幻夜と幸夜の本日三回目の大戦争を横に、俺はアリスにそつと言っ

『・・・アリス、あいつのことよろしくな。』

「・・・うん。」

アリスは赤いまま静かに頷いた。

・・・そしてここまで来て何人かはこう言うだろう。

幻夜と幸夜同一人物だろうがヴオケ！と。

説明しよう！幸夜は確かに幻夜の分離人格だが、肉体は既に幽夜のせいで別物である！更に！幻夜は混沌軽率担当に対し、幸夜は純情真面目担当！そして幸夜が人格として誕生したのはここ最近！

まあつまり、幸夜はうちで一番若い。ついでにもう別人だ。龍神六人衆結成。悪役出来るな。滅。

「・・・あの、龍一さん。」

アリスに声をかけられたので、俺は耳を傾ける。

『ん？』

「・・・あの、幸夜と付き合ってる事は・・・」

「内緒な。いいぜ、黙ってる。・・・ここだけの話、俺も野郎共に黙ってることがあってな。」

既に指輪製造中なのは永久封印事項だ。というか死んだ七年のうち再生の数年間ずっと指輪のデザインのせいで思考が止まっていたの
は言えない。

『まあ初対面でここまでボロクソに言うのも何だが、アイツ選んだ理由が分からん。理由は？』

するとアリスが再び赤くなりながら口を開いた。

「・・・あの、その・・・初めてだったんです。男性とここまで親しくなったのは。幸夜は何故か私の本音ばかり出させて・・・おかしい、ですか・・・？」

『全然。』

こんな真面目な話真顔しかないやろ。

『・・・あいつの人格でか・・・いいと思うぜ。ただしあの野郎、ちよつと甘えたがりだな。・・・あんまそんな風に見えんだろうが、ちよつと頭撫でてやるとパニック必至だ。「何ありもしねえこと流してやがる。」・・・お、言ったな？アリス、試してみてください「おい！悪かった！やめろアリス！お前も笑うな!!」行け。』

「あつ・・・クソツ・・・無理だ・・・」

頭を撫でられた幸夜は目を細めてアリスに抱きついた。

「・・・あー、気持ち良い・・・アリスく」

今の幸夜はまるで子供。アリスも爆発間近で震えている。

幻夜ズの欠点。それぞれの弱点が極端過ぎる。幽夜は暴走、幻夜はアタック、幸夜は甘え。

「アリスく・・・えへへえ・・・」

徐々に幸夜が子供の

サイズに変わり始めた。・・・何だ、やっぱり子供じゃないか。

「アリス・・・大好きい・・・」

アリス爆発。

「・・・ってワッツ!?今のなんだ!」

ん?記憶なしか?

『夢だ。悪い夢だよ。少年。』

「ああそう・・・つかしいな。まあいいや。アリス連れて帰るわ。・・・今更隠せねえしな。」

そう言うのと気を失ったアリスをお姫様抱っこの状態で抱き上げ、幸夜が歩いて帰った。四回目の爆発待ったなし。

「・・・あんな性格あんのか。」

『左様。そもそも人格形成つてのがおかしいからね。多少のバグと
いうか、エラーは出るだろ。』

「・・・エラー、ね・・・」

「何でこっち見るの?幽香になんかした?」

「・・・別に。」

『おいやめろ。・・・で?幽夜は本当じゃないのか?』

「何が？そこと向こうの馬鹿みたいな事はねえけど？」

『あつそう。．．．にしてもアリスか、ちよつと予想外だな．．．慧音かと思つてたが．．．』

すると幻夜が首を傾げて言った。

「慧音なら別の人がいるよ。元生徒の書道の先生だったかな．．．紡君つていう子で、マスターの死んでた間の異変から人里守つて倒れたり、妖怪怖がらなかつたり、優しいんだけどちよつと変わった子だよ。喋らないしね。お互いにいい感じだけど、まだまだこれからかなー」

ふーむ、侵二もなんか言つてたような．．．いや、気のせいかな。会うこともねえわな。会うのは侵二と幸夜ぐらいだろ。

『マジか。．．．まあいいか。そろそろおいとまするぜい。じゃあな。』

俺は今度は普通に幽香の家のドアを開けて出た。雪だった。．．．んなあほな。

『．．．はい？』

俺が久々に呆れていると、壊夢から通信が届いた。

「主！こつちで虹かかつとるぜよ!!」

『んなあほな。(二回目)地底だろうが。』

「よく分からんがかかつとるもんはかかつとるんぜよ。また何か

あつたら言うぜよ。「主上、クソ意味の分からない事が起きました。人里に雷が落ちまくってます。」おお、侵二、お前んどこもぜよか。「壊夢もですか!？」おう、なんか虹かかっとするぜよ。」

『お前ら人の脳内で会話すんな。こつちも幻夜のところで雪降ってらい。』

更に通信が届いた。

「……えつと、これで良いんですよね？お久しぶりです。伊織です。」

珍しいな。……さて何事やら。

『ん？伊織？どうした？旦那が倒れたとかか？「いえ、旦那が暴走しました。」……はい？』

やべえ全然意味が分からん。

『……どう壊れたの？』

伊織が通信内のため息をついた。……どいつもこいつも脳内で好き勝手しよってからに。

「……物干し竿、とブツブツ呟きながら鞆担いでます。『理解した。』」

それで鞆に見覚えがあつたのか。……まああんな長い刀持ってる奴なんて限られるわな。

『了解。多分風魔の前世云々だと思う。』

「そう、ですか……前世!？」

『ノリツツコミ上手いな。・・・ま、詳しくは後で話す。』

「分かりました。お待ちしております。『ほいよ。』」

『・・・さて、風魔ぶっ飛ばすか。』

とりあえず壊れたんなら殴れば直るだろ。

次回へ続く

第一百十二話 残心

side 龍一

『・・・さて、オイコラ風魔ア!!何処じやいコラア!!』

俺は通信後すぐに妖怪の山に来たのだが・・・

曇天の二文字。 天气がボロクソに悪い。

『おい風魔ア!!出てこいや野郎!!』

「ちよ、ちよつと龍一さん、騒ぐと困るんですよ・・・」

山の麓で伊織は待機していてくれたようで、困惑する若い天狗衆を全てスルー出来た。

聞くと若い衆は天狗ではない風魔がボスなのが納得いかないらしい。

『ああ悪い悪い。 しかしいねえなあ・・・折角刀の鍔と持ち手探してきてやったのよ・・・』

伊織が神妙な顔をした。

「・・・あの、風魔の前世とは・・・?」

『あそつか、説明してなかったよな。・・・アイツは多分

『佐々木小次郎だと思う。』

「佐々木・・・小次郎・・・?」

『ああ、佐々木小次郎つてのは簡単に言えば外の世界の剣士でな。生まれた年が分からないのと、死んだ年は大体わかるものの、何歳で没したかは分からない剣士で、向こうではなかなか有名な男だ。愛刀がああ身の丈レベルに長い【備前長船長光】、通称物干し竿。巖流島というところで宮本武蔵に破れた。……って感じ。諸説あり。何せ死んだときが70の爺だったの18の青年だったの相当謎だからな。』
そう会話しているのに風魔が出てこないまま頂上まで辿り着いた。

『なーんでいつも余計な時は辻斬りしてくんのに今回はしないのかね。』

仕方がないので俺は拳銃を空砲で撃った。伊織が突然の銃声にのけぞった。

「わっ!？」

『ああ、ゴメンゴメン。……出てこい通り魔あ!!』

「誰が通り魔だ!!」

叫び声と共に、樹上から風魔の斬撃が飛んできた。

『お前じゃい!!』

それを俺は持参した木刀で弾き、風魔の脳天に叩き込む。

『カッフエーオーレ、プリーズ。』

「ガッ……!？」

いつもなら木刀が粉々になるはずが、今回は風魔が倒れ伏した。

『……およ？流石に西行妖の枝の木刀は違うか？』

風魔はしゃがんだまま、呻き声を上げた。

「どんな武器だ……ッ。」

ふむ、前世の記憶が再生しそうで蹲ってしまったのか。いやまあ西行妖の木刀が硬すぎるのか、それとも木刀に彫った【羅刹】の文字のせいか。

『まあええわ。いきなりだが簡単な事から聞いていくぞ。お前、死んだことあるか？』

風魔は頷いた。

『次、宮で始まる人間。最初に誰が出た？』

「……宮本武蔵。」

俺は気付かないうちに笑っていたのか、口の端が吊り上がっていた。

『お前もう分かってきただろ。次。この刀の残骸の名前。正解したらやる。』

風魔は苦笑いを浮かべた。

「備前長船長光、物干し竿だが？……なぜ忘れていたのやら。」

風魔は立ち上がり、俺の持っていた物干し竿の残骸を受け取った。

『正解。よくわかってるじゃねえか。元、佐々木小次郎。』

風魔はニヤリと笑い、鞘を上空に投げた。

「・・・簡単に完結してしまっただが・・・世話を焼かせた。伊織もすまん。不甲斐ない旦那ですまん。」

そう頭を下げた風魔に、伊織はそつと腰に手を添えた。

「いいえ・・・風魔はいつもいつも私の事ばかり・・・私が争い事が嫌いだからと言い、付き合った頃は剣すら握りませんでしたよね。私は・・・駄目な妻で「違う」・・・風魔？」

風魔は伊織を抱き締め、優しく言った。

「・・・お前がいなければ、ここに【風魔】はいなかった。【人斬り】しかいなかっただろう。私はそれしか能がない。だが・・・お前は俺で良いと、俺を選んでくれた。それが俺の幸せであり、【人斬り】の死んだ時だ。」

「・・・こう言うとキザかもしれないが、俺はお前の為なら屍の山の一つや二つぐらい造作もなく作り上げる。」

抱きしめられて棒立ちになっていた伊織が抱き締め返した。

「ふふっ。・・・争いは嫌ですよ。」

「・・・ハハハ、参ったな。」

暫く抱き合っていた後、伊織から離れた。

「・・・んんつ、風魔、私はあなたの前世は何であれだ、大好き・・・です。そして今回はいつものお礼を兼ねて、しばらくの間休んで頂きます。その間は龍一さんの部下として、のんびりとしていて下さい。」

風魔は俺を見て苦笑した。

「成程、散々俺達に言わせておいて二人で仕込んでいた通り、私にこの天候を解決させる気だったか。」

『その通り。さあ行つて来い。この異変の事情はちと面倒だな。「相変わらず全読みか。この賢者の旦那が。」・・・まだ結婚してませーん！「まだ。なんだな。」当たり前だろ。・・・でまあ天界行つて来い。そこに異変・・・の前座をやってる奴がいるからお前に任せる。何しよすが知らん。』

風魔は苦笑して何処からか煙管を取り出し、吸い始めた。

『・・・お前煙草吸つてたか?』

風魔は首を横に降り、煙とともに雲を出した。

「いいや、これは空気中の水蒸気を雲に変えるだけのもの、これで空気の流れを読むだけだ。・・・で、私にその異変解決のメリツトがないのだが?『天界に俺の金属置いてきた。それと疾風刀の破片落とした。』・・・ふむ、そう来たか。仕方ない。乗ろう。だが、勝手にするぞ。」

『べつべつ自由だ。』

「了解した。ところで主上、宮本武蔵はどうなった？」

『隠居した。最後の方はひっそりと暮らしてたみたいだな。』

「そうか。．．あそこで死ねた私は、案外幸せだったのかもしれないな。」

風魔が天を仰ぎ、ため息をついた。

『．．．さあ、どうかね。死にたがりも生きてりやいい事あると思うがね。死ぬことは一回きりだしな。早死にするだけ無駄だろ。「生き返ったお前が言うな。」．．．あれは命張らにやならんだろ。それともなんだ、お前はそのタイミングも見抜けんのか。』

「ほぞけ、さつさと式を開け。安心させてやれ。」

『．．．悪いな。まだ駄目だ。俺の最後の悲願が残ってる。あれだけは絶対に成し遂げねえと俺は式を挙げない。』

風魔は察したのか、かぶりをふった後、微笑んだ。

「無粋な事を聞いたな。．．了解した。その時私はどうすればいい？」

『．．．正直、俺の悲願は一つ読み違えば戻れない。いわば俺の数億年を賭ける博打でもある。だから無理について来いとは言えん。観客でも構わない。だが．．．ついてくるなら来い。命令ではない。』

「了解。まあ勝手に決めさせてもらう。」

風魔は頷くと、瞬く間に消え去った。

『……お前はこう言ったら絶対に参加しちまうだろうが。』

俺は笑いながら、四凶一の忠臣野郎を見送った。

……さて、どう転ぶやら。

「主、こつちの虹はどうすりやええんぜよか？」

「おいマスター、アリスと手つなぎで帰ってたらこの辺雪なんだが。」

「マスター、幻夜んとこ雹降ってるぞ。」

「主上、雷が増えました。」

「ねえマスター、雹降ってる。」

『いつぺんに喋るな貴様ら。寝てろ。後幸夜、惚気は今度聞く「は、はあ!?!んなもんじゃねえよ!!」子供かお前は。』

「……で、通り魔はどうしたんですか？」

雷がドカドカ落ちるのが聞こえているのだが、侵二のどうでもよきような質問が飛んでくる。

『天界に行った。「マジで?お土産頼んでねえんだけど。」おつかいじゃねえんだよ。「俺材木がいいぜよ。」「俺糸。」「俺水。」「私筆と紙で。」「僕花。」欲深いのかそうじゃないのかはつきりしろ。』

まあとりあえず、と俺は言った。

『……しばらく我慢してろ。お前ら休暇な。俺家籠るからな。』

「へーい。」「応。」「なにすつかな。」「だってよ、どっか行くか。」「了解しました。」

『だからいっぺんに言うな。』

取り敢えず、俺たちはする事がなくなったので、それぞれが勝手に始めた。

次回へ続く

第一百十三話 操作人形？

幻想郷、太陽の畑付近、

「……うん、これで完成。」

幻夜は一人ぶつぶつと呟くと、目の前の氷人形に手を触れた。

「よろしく。僕。」

そうして俺……幸夜は産まれた。

「……と、いうわけで今日から新しい先生になりました。幻夜です。よろしく。」

俺は生まれた直後、何故かすぐに寺子屋の教師にさせられた。後々聞くと幻夜（本体）のせいだったらしい。

俺の出生の記憶は当時、一切なかった。ただ単に俺は幻夜であり、こう生きてきた。といった事しかなかった。全部幻夜にロックをかけられてたらしい。

まあ別に俺は子供が嫌ではなかったし、はじめこそ子供達は俺のガラの悪そうな顔で逃げていたが、数か月で慣れてくれた。

「先生ー、この書類どこですかー?」

「ああ、ありがとう幻夜君。今日は休んでもらっていいぞ。」

「へーい。お疲れ様です。上里、後頼んだ。」

寺子屋には俺と慧音先生以外にもう一人、上里という同期がいた。上里は当時15歳、とある事故のせいで親を亡くし、慧音先生に育て貰いながら教師の手伝いをしていた。上里の担当は書道。俺は理系と呼ばれるものの担当だった。

「分かりました。お疲れ様です。」

「おう。じゃあな。」

俺は当時・・・もう八年ぐらい前だが・・・この生活に別段違和感もなく、人里でも優しいお兄さんとしてそこそこ慕われるようになっていた。

その頃からアリスとは面識があつたが・・・今更隠す必要もないか・・・別に好きだとかはなかった。向こうも時々人里で人形劇をする程度でしか来なかつたので、俺は客として行く事が多かった。ま、普通の身体能力が高い人間だったしな。

「おーし、お前ら、今日は終わり。人里の外に出てみる、俺が襲うからなー」

「はーい!!」

そんな日常がずっと続いていた。

だがある日、俺は人里の外の監視に出た時、ある物を拾った。

「・・・人形？」

俺は人形を拾った。古くなつて捨てられたわけでもなく、誤つて落としたような状態の人形だった。

俺は見覚えがあつたので、人形を揺らした。

「おーい、起きろー」

人形を揺らして声をかけるなんぞ今考えると中々の変態だったが、人形は目を覚ました。

人形は主人が違うことに驚き飛び上がったが、俺が初対面ではないと分かつたのか、大人しく俺の手の上に収まつた。

「よーしよし。．．．すぐに持ち主に渡すからなー」

俺はアリスの人形、上海をアリスに返すため、魔法の森まで歩いた。後日聞くとこの日に侵二が妖怪を指一本で刺殺した日らしい。

俺は飛行能力はなかつたので森まで歩いた。道案内は上海がしてくれた。何故か懐かれた。寺子屋に飾つた余りの赤い菊を慰めとして渡しただけなのだが。

アリスの家は魔法の森の奥にあつた。

俺はドアをノックした。すぐに真つ青な顔をしたアリスが出た。

「上海!?!．．．ああ、幻夜さんか．．．」

アリスはそのままへたり込んでしまった。

「おいおいおいおい、しっかりしろ。それに連れて来たから．．．」

俺のポケットに何故か隠れている上海をつまみ出すと、アリスに見せた……押し倒された。

「上海!!」

嬉しくて上海に飛びついたのだろうが、不意打ちを喰らった俺は上に乗られた。

「……おい、降りてくれ」

「ひゃいつ!?!……ごめんなさい!」

アリスは事の重大さに気づいたのか俺から飛び離れた。上海は何が嬉しいのかふよふよと俺達の間を飛び回っている。

「……まあいいか。じゃあな。次は落とすなよ。また人形劇楽しみにしてるからな。……あん?」

俺が帰ろうとすると、上海が俺の髪の毛を引っ張った。中々の力で。

「ちよつと、上海?」

上海は俺が帰るのが嫌なのか首を横に降っている。なぜこう俺はちっこいのに懐かれたのか未だに分からない。どうでもいいが髪が痛かった。

「やめろ小娘。俺は帰らねえと……やめろ髪の毛わしゃわしやするな。」

それでも上海は離そうとしない。アリスがため息をついた。

「……いつもなら言う事を聞くのに……ごめんなさい幻夜さん。少し……家が上がってくれるかしら？」

「分かった、分かったから抜こうとするな上海!!」

上海が俺の眉毛を引っ張り始めたので大人しく上げてもらうことにした。眉毛は痛い。

「……異性の家とか先生の家しか知らねえぞ。」

俺は困惑しながらもアリスの言うように家に上がり、椅子に座らされた。上海は俺の膝の上に座った。もう懐かれたとかじゃねえな。

「幻夜さん、紅茶嫌いかしら？」

「嫌いじゃねえよ。お構いなく。」

上海が俺の髪の毛を引っ張った。何だよ、遠慮すんなってか。

「……はい、どうぞ。」

「どうも。」

俺は紅茶を啜りながら、アリスの部屋を見渡す。人形だらけで、それでも全員が綺麗に並べられていた。俺の膝にいる上海以外。お前も大人しくしろ。

「……人形ばかりでごめんなさいね。」

「いや、いいよ。……全部綺麗で生きてるみたいだしな。よっぽど

作者が心を込めたんだろうな。・・・いいなあ、こういうの。」

上海が俺をつついたのでアリスを見ると、アリスは真っ赤だった。

「あ、ゴメン、変なこと言った？」

「・・・う、ううん、・・・人形のことと褒められたのなんて凄い前だから・・・」

そうか？と俺は上海の頭をわしわしと撫でる。

「これ見て綺麗じゃないと思う奴はいないと思うがなあ・・・」

上海は嬉しそうに目を細めている。

「・・・ありがとう。」

その後はアリスに人形の作り方、人形についてを教えてくれた。

結局帰り道に上海に後ろ髪を文字通り引かれたが、アリスが引き剥がした。

その日をきっかけにしたのかどうだったか忘れたが、俺は幻夜に無理を言っつて氷の術の扱い方をインプットして貰った。

ただ、糸に应用すると言った時に、幻夜に言われたことが今でも残っている。

「そんなこと考えたの？相当な馬鹿だねー・・・まあちよつと予想

外。」

それ以来、暇があれば俺は糸操作の練習を始めた。．．．実際に使いこなせるようになったのは幽夜の事件の後だ。それまでは辛うじて五本までしか扱えなかった。

ともかく、何故か俺は力をつけ始めた。今は思っていないが、アリスのように人形を作りたいと思ったのか人里のためにもつと働きたいと思ったのか、この時から幽夜に対して自動的に防衛本能が機能していたのか。今では別の理由があるものの、永久に分からない。

だが、そんな俺に強烈な衝撃を与えた事件が起きた。

龍神の兄が現れた。

俺が龍一を見た時、ゾツとした。自分のやりたいことだけに人生一つを使うような、どうでもいいことに全てを賭けそうな．．．正直全部その通りだったのは驚いた。愛する人のために七年以上封印されていたとかふざけてるだろ。

何というか龍一は．．．自分を人形に見立てているようだった。体が欠けても作り直す。死んでも作り直すだけ。

俺がより一層人形に惹かれたのは、龍一のせいでもあるのかもしれない。俺はマスターの事が面白かった。今でも面白いが．．．

俺は人里では比較的龍一と関わる事が多かった。幻夜は当時幽夜の件を悟られたくないせいか俺を取り込むことが多かった。あん時は何されたか知らなかったが。

だがまあ．．．そこまで深く関わるわけでもなく、向こうは俺を人

格としてしか見てなかったし、普通に俺は幻夜で通った。他の奴らも俺と幻夜を間違えることが多かった。先生と上里とアリスは間違えることはなかったな。後髪の毛引つ張る人形。そこは間違えろ。

「……会うたびに髪の毛引つ張るな上海！抜けるだろうが！」

まあ、今アリスと付き合ってるのは半分以上上海のおかげなんだが。それは感謝。だが髪の毛はダメだ。

アリスと会ってから大体八年、ずっと家に行ったり人里で買い物に付き合い、魔法の森電機製作所材料集め云々を手伝ったりなどをしていたが、アリスは俺を見ると顔を赤くし、俺も熱くなる症状が出た。

「……なー、上里お、俺アリス見ると熱くなるんだが、お前原因分かるかー？」

俺は身近な人間の男の上里に相談した。上里は筆を取り落とした。

「……先生に熱くなるとかじゃないんですか？」

「あ？慧音先生？何でだよ。」

上里は頭を抱えると、俺に向き直った。

「幻夜さん、それ、多分幻夜さんがアリスさんの事好きなんですよ。」

「……マジで言ってるの？」

上里は微笑みながら勝手に何か頷いていた。

「いや、説明してくれよ。」

「ああ、ごめんなさい。……アリスさんとはずっと一緒に居ても嫌じゃないと思いますか?」

「……アリスがいいなら俺は別にいい。悪い気もしないし落ち着く。」

「うーん、間違いないですね。私にも分かりますが、きつと恋ですよ。」

「……恋か。幻夜と幽香の記憶みたいな事が俺にもか……。ん? 上里、お前私もって……」

上里はしまったという表情をして、慌てて

「私は別にいいでしょう!?!とりあえず幻夜さんのそれは恋ですよ。どうするかは幻夜さん次第ですよ。」

俺はどうすればいいのかほとんど分からなかったが、ほぼ強制的に進められた。

幽夜復活のせいだ。

次回に続く

第百十四話 操作人形？

幽夜が復活した時、もう滅茶苦茶だった。

「ヒヤッハー!! やーっとなれたぜ幻夜ア!!」

世紀末を彷彿とさせる奇声と共に幻夜の口から血とともに流れ出てきた上に、形がなかった。

まるでカマキリに寄生していたハリガネムシのようだった。

俺はその瞬間幻夜に別人にされた。幻夜的人格でもクローンでもない人間に。それと共に膨大な幻夜の記憶が流れ込んで来た。俺を作った動機も。俺を見ているうちに戦わせるのを嫌になり始めた事も。

幻夜は俺に逃げて龍一に伝えろ。とでも言いたかったのだろうか、俺は後々の幽夜を糸で絡めて切断した。

「ゴホッ!... 幻夜?」

「うぜえんだよ本体! 人格から離反させてはい終わりか! なら、どうしようが俺の勝手だろうが!!」

俺は氷で幻夜と幽香を外に押し出すと、幽夜に向いた。足が相当震えた。幽夜を見て死んだと思った。

だが何故か... 幻夜と幽香の事を考えると笑えた。

「幻夜はやらせねえぞ化け物。... 数秒だけでも足止めしてやる。」

来いよ!!」

幽夜は幻夜の姿になると、俺に向いた。

「・・・うぜえ、うぜえぞてめえ!!」

結果は言わずもがな死んだ。秒殺。右腕にぶち抜かれて糸ごと砕け散った。一旦この記憶だけリセットされ、幻夜に再度召喚された。ここで完全に俺は人間になった。

「チツ！待ってろよ!!」

リセットされていた俺は龍一に報告した。途中幽夜に追い回されたが、今度は軽傷で済んだ。

そして色々あつて・・・全員で幽夜に勝った。

記憶が直ぐに戻った俺は弱さに失望し、アシストに回ろうと思った。

戦闘は幻夜と幽夜に全部回す。そう考えた。

そして幽香と幻夜にかけられた冤罪の時も俺はアシストだけをこなした。

そこまでは良かった。

俺はその後始末の魂の回収の手伝いに回っていた時、ある魂を見つけた。

・・・なんと言ったか・・・ウォルター、だったか。その人は俺の

中に入った。というか無理矢理入られた。その人の記憶を全部見せられた。ウォルターさんは爺になってもライバルと言える男と勝負し、若返るといいうインチキのせいで負けた。そして死んだ。楽しかったらしい。

俺はその人に糸の操り方を捻じ込まれた。

そのおかげで俺は糸操作に制限がなくなった。

龍一達には話していただけたように見えていたようだが、俺にとっては最大の転機かつ強烈な記憶だ。

俺はウォルターさんから片方だけの眼鏡を貰った。いつか着けるのだろうか？

そこからアリスに会うまで、数か月を要した。アリスが全然人里に來なかつたこともあるし、俺もマスター達にばれるのが嫌でマスター達がどこかに行くまであまり会おうとしなかつた。

実際に会えたのはマスター達が外に行く！とかで消え去つた時だつた。幻夜には寺子屋の遠足と称してアリスの家に行つた。遠足は上里のために降りた。・・・まさか先生が好きだつたとはな。

俺はアリスの家の前に來た。ノックしようか迷っていると、雨が降り始めた。すぐさまノックした。アリスが出た。

「・・・あ、幻夜・・・久しぶり。」

「・・・ああ、久しぶり・・・だな。」

何をどう話したらいいか分からずに二人揃つて微妙な空気になつてしていると、案の定、

「・・・やめろ上海！久しぶりで嬉しいのか怒ってるのか知らんがな？まつ毛を抜こうとするな！ランクアップしてんじやねえよ！」

上海に毛を抜かれそうになった。俺が上海をつまみ上げてデコピンをしていると、アリスは笑った。

「・・・あはは、全然変わってないわね。・・・上がった？」

俺もつられて笑い、上海を肩に乗せて上がった。

俺はいつも通り椅子に座ると、アリスの方を眺めた。

アリスは眺めている俺が不思議なのか、こてんと首を傾げている。

・・・やべえ、こんなに可愛かったか？

「・・・？何か私の顔についてる？」

「いや、ついて・・・ねえよ。」

俺はアリスに好きだと言うつもりだったのだが何も言えず、ただの世間話しか出来なかった。正直ここで嫌われても文句は言えなかった。そのまま日は暮れた。

「・・・もう、こんな時間か。ごめんなアリス。急に押しかけて。」

「ううん、気にしないで。・・・楽しかったわ。ありがとう。」

相変わらず後ろ髪を引く上海を剥がして、夕日が薄く見える雨の中、家から出ようとした時だった。

「待って！」

俺はアリスに後ろ袖を引っ張られた。困惑したものの、アリスに向き直った。

「……あの、その……ごめんなさい。」

アリスは視線を右往左往させた後、涙を流し、こう言った。

「……また、ね？」

「……ツツツ！」

笑うつもりだったようだが、笑えずアリスは泣き始めた。俺は気が付くとアリスを抱きしめていた。アリスもしばらくは掴むものものない両手を泳がせていた。

「……あ、え？幻夜……？」

小さい涙声を出しながらアリスが困惑していた。そこに俺は

「……アリス……俺さあ……」

アリスにそつと口付けをした。

「……お前の事、好きだぜ。」

アリスが、大声で泣いた。

「……え？ちよ……ごめん!?嫌だったよな!?!」

慌てる俺をアリスが掴んだ。

「ううん、・・・幻夜、私も、」

大好き。そうアリスは笑って言った。

「・・・え？マジで？」

アリスは頷いた。

「うん、・・・七年ぐらい前から・・・好きだったよ？」

俺はそう言われ、顔が赤くなった。

「マジ・・・かよ・・・俺もだ・・・」

うん、とアリスは笑い、俺に抱きついた。

「そうか・・・良かった・・・」

俺はアリスを一度剥がし、ポケットに入れていた小さな箱を開いた。

「じゃあこれ。・・・俺と付き合ってくれるか？」

俺はアリスに水色の鉱石だけで作ったネックレスを渡した。

アリスはしばらくポカンとしていたが、俺のネックレスを着けた。

「・・・私こそ、宜しく願います。・・・似合ってる？」

雨が晴れた。夕日がネックレスに当たり、青とオレンジに輝いていた。

「・・・ああ、ああ、似合ってるよ・・・こんなに似合うもんかよ・・・痛っ！」

髪の毛が痛んだので肩を見ると、不機嫌そうに上海が自分を指差していた。

「あら、上海、あなたも欲しいの？」

アリスが面白そうに言う。上海は頷いた。

「・・・言うと思った。ほれ。」

俺は上海に人形サイズの水色と金色の糸で作ったカチューシャを渡した。

「糸の練習で出来た最高傑作。やる。」

上海は嬉しかったのか俺の頬にキスをした。

「あーんらー！」

上海はしてやったと言うように俺の頭の上に乗った。アリスは悔しいのか上海を睨んでいた。人形だろ・・・

「ハハハ、まあよろしく。アリス？」

俺がそう言うと、パッとアリスの顔が夕陽に照らされて輝いた。

「うん、よろしく、幻夜！」

・・・とかいう事があった。今思い返すと相当恥ずかしい。絶対にマスター達には言えねえ。

俺は結果としてアリスと付き合い、もう数か月は過ぎた。最高の生活だ。が、俺は人間だ。残念ながら幻夜のあらゆる術を持っていないが、スペックは低く、七人衆ではすぐに死ぬだろう。まあ術に関して一番精巧だという自負はある。それに戦う理由も負けていない。

きっと俺は他の野郎と違って、彼女より先に死んでしまうだろう。だから俺は自分の身体にあるものを埋め込んだ。

アリスの作る人形のように、俺特製の人形用コアを心臓に埋めた。

だから俺は死んだ場合、人形として再燃する。アリスが望まずとも俺は人形として在り続ける。心臓から放出された糸で再度動く。

ある時、幽夜に言われた事がある。

操作人形マリオネット使い。糸を操る俺は、いずれ糸で操られる。いかにも俺に似合った名前だ。

将来は分からない。老いることも分からない。だがウォルターさんは老いることも人間だと言った。

俺は、俺だけは七人衆の中で人間であり続ける。化け物を止めるのは人間。ウォルターさんも言った。

俺はアリスと、上海と、生みの親の幻夜にも、受け入れてくれた慧音先生と上里にも、トリガーになった幽夜も龍一にも、全部に感謝している。

だから止める時は俺がやる。

人としてもまだ不完全な俺に出来ることはこれだ。

馬鹿野郎と言われても止まらない。

「・・・なあ、アリス。」

「何?」

「お前は俺が死んでも守るからな。」

「・・・何?いきなりそんなこと言って。」

「・・・なんでもねえよ。」

「ふふっ、変な人・・・」

俺は動く人形。自分で自分を動かす人形師。

だが・・・今は、マスター達と一緒に暴れてやろうと思う。

次回へ続く

凍結話　これにて閉幕・・・？

・・・俺は何もない荒野に寝そべっていた。

「主上？何してるんです？」

「いや、特に何もしてないが。・・・あれだ。暇だなーと思ってるだけだ。」

「いや、まあ、・・・確かに地球滅びても私達生きてるのは謎ですけどね。」

「だよなー」

色々あつて数百億年後、壊夢が生物の死滅した地球を割った。

飽きたので自決するつもりだったが・・・誰も死ななかつた。・・・一人ぐらい死ぬと思つてたんだがな・・・

「ねー、なんか面白い事ないの？暇なんですけどー？」

「黙れ幻夜。・・・とはいえ確かに暇だよなー」

色々とやった。土星の輪の中を高速で飛び回るゲーム、太陽に突っ込んで貫通するゲーム、適当な小惑星での雪合戦擬き。

・・・全部、飽きた。

「・・・流石に、伊織もおらんのは暇だな・・・」

途中から現れた風魔はそう言いながら、近くの小惑星を破壊した。

「うーむ、確かに娯楽もクソもねえぜよな・・・」

壊夢はそう言いながらスペースデブリを握り潰した。

「流石に俺も飽きたんだが？・・・幸夜、お前もだよな？」

「そうだな幽夜。流石にずっとこうしてるのは気が狂うな・・・」

そう言いながら二人は太陽を一瞬凍らせた。・・・突っ込む気も起
きない。

「ホント、どうするか・・・あ、世界作り変えるか？」

その場全員がこつちを向いた。

「出来んの？」

「いや、それ以前に良いのか？・・・約束があつたはずだろう？」

風魔が俺を心配しているのか重い顔で聞いてくる。

「確かに言われた。・・・この幻想郷を最後まで守ってくれてやつ
だろ？」

だから飛んできた隕石を壊した。地殻変動を無理やり抑えた。氷
河期を燃やした。

「・・・そうだ」

守りすぎたせいで、もう幻想郷には誰もいなくなったが、まだ形だ

けきれいに残っている。

「……けど、俺が約束を守ったことがあるか？」

「ありますね「あるな」「滅茶苦茶あるぜよ」「ほとんど守ってるよね？」「破ったの見たことねえか？」「そもそも約束のせいでマスター死に戻りしたんだろ？」ほら」

「……お前らなあ……」

顔を顰めなくなるが、それに反発して顔の筋肉は緩む。

「……このクソ野郎共が」

誇らしげに笑う幸夜、面倒そうだが笑っている幽夜、ニヤニヤと笑う幻夜、煙管を啜えながら笑う風魔、快活な笑顔を見せる壊夢、そして優しく笑う侵二……

どいつもこいつも笑いやがって……

「……お前ら、俺から言ったが……本当に壊す気か？」

誰も返事をしない。……だが、目を見ればわかる。

「うどん食いたいだな？……やめろ殺意駄々漏れにすんな悪かったから！」

「蕎麦に決まってるだろお!？」

「そこかよ！」

再び周りの全員が笑う。

「・・・マジでやるのか。・・・ま、正直やってみたかったけどな！」

俺はいつも通り武器を構え、全員の顔を見る。

「行くぞ貴様ら！」

「「「「「応!!」」」」」

「奥義！壊夢ソード！」

幽夜と風魔が叫びながら、壊夢を振り回す。

「空間？クソ食らえですね。頂きます」

侵二が嘲笑いながら、空間を食いちぎる。

「穴空いたな!?!俺が開くぞ！」

幸夜が大量の糸で空間の穴を謎の力で広げる。

「飛び込めー」

そこに幻夜が飛び込み、空間の穴をさらに拡大させて帰って来る。

「今だ！主上！」

「マスター！」

「長澤！」

「藤木！」

「主！」

俺は新月と拳銃、スナイパーライフルをエネルギーの塊に戻し、穴にぶつける。

「……信じてますよ！主上！！」

……お前ら、

「長澤と藤木って叫んだ奴、後で屋上なあ！！」

……最高だよ。

「『『『死に晒せやオラアア！！』』』』」

空間が、

この世界が、

壊れた。

「……Fooooooooooooo!!!!!!出れたぞオラア!!」

「……まさか、本当に出れるとはな……やはり面白い!」

「いやー、楽しかったぜよ!」

「……行けましたね!主上!!」

「ああ!なら次は決まってるよな!」

「ここにいる全員が頷く。……今度は外さない。」

「「「「世界の作り直しじゃクソツタレエエエエ!!!」」」」

「……これから何回もやるんだろうな、作り直しと破壊。」

「……ああ、楽しみだ。」

「幻想創星録、打ち切り」

END